

# 千原台ニュータウンXXV

いちはら くさかり  
— 市原市草刈遺跡（L区） —







草刈遺跡I区（南東から）



草刈遺跡I区（西から）



L050 遺物出土狀況



L108 遺物出土狀況



L109 遺物出土狀況



銅鏡



5 (L108)



6 (L301)



128 (L441)



玉 類



石製品と玉類

## 序 文

財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第646集として、独立行政法人都市再生機構千葉地域支社の千原台地区土地区画整理事業に伴って実施した市原市草刈遺跡（L区）の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、弥生時代後期から奈良・平安時代にかけての集落跡や、方形周溝墓、古墳など多数の遺構・遺物が検出され、この地域における原始・古代の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また郷土研究の資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を始めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理までご苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成22年12月

財団法人千葉県教育振興財団

理事長 赤羽良明



## 凡　例

- 1 本書は、独立行政法人都市再生機構千葉地域支社による千原台地区におけるニュータウン建設計画に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録したのは、千葉県市原市草刈（現ちはら台西1丁目）ほかに所在する草刈遺跡のうち、L区の資料である。ただし、旧石器時代の資料については、すでに報告書刊行済みであり（平成17年3月刊行 第512集）、本書で扱うのは縄文時代以降の資料となる。遺跡コードは、219-068である。
- 3 発掘調査から報告書刊行に至る業務は、独立行政法人都市再生機構千葉地域支社の委託を受け、財団法人千葉県教育振興財團が実施した。
- 4 発掘調査および整理作業の経緯と組織・担当者は第1章第1節に記した。
- 5 本書の執筆は、第2章第6節の動物遺体の同定・分析と執筆を上 奈穂美氏に依頼し、第1章、第2章第5節を上席研究員 酒井 宏が、それ以外の執筆・編集を上席研究員 小林清隆が、編集を上席研究員 山口典子が行った（職名は当時）。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、独立行政法人都市再生機構千葉地域支社、市原市教育委員会の御指導、御協力を得た。
- 7 第7図に国土地理院1/25,000地形図「蘇我」（昭和59年発行）（N-54-19-15-2）、第6図には地理調査所1/50,000地形図「千葉」（明治36年測量・昭和27年発行）を使用した。
- 8 本書で使用した図面の方針は座標化を原則とする。座標値は日本測地系である。
- 9 遺構に関しては、遺構の特徴・出土遺物の状況等を勘案し可能な限り詳細図を図示したが、図示できなかった遺構については、附章「遺構分布図および遺物実測図」の1/300遺構分布図ならびに第9表～第11表の遺構一覧表に概略を記載した。また、遺物に関しては附章に一括して遺物実測図を図示した。
- 10 本文中の挿図の縮尺は、原則として竪穴住居を1/100とし、その他の遺構についてはその都度挿図中にスケールを明示した。また、遺構詳細図中の土器実測図は1/8を基本とし、その他の遺物は任意の縮尺とした。また、附章に示した土器実測図は1/4を基本とし、そのほかの土製品等はその都度縮尺を明記した。
- 11 挿図に使用したスクリーントーンおよび記号・番号の用例は次ページに示したとおりである。
- 12 本書に掲載した遺構等の番号は、原則的には調査時に使用したものをそのまま踏襲した。
- 13 L区の調査段階では独自のグリッド表記が行われていたが、本書では草刈遺跡全体を網羅したグリッド表記に統一・変更した。新旧グリッド表記は次のようになる。

旧	新	旧	新	旧	新	旧	新	旧	新
5H	6I	9H	10I	8I	9J	7J	8K	9K	10L
6H	7I	5I	6J	9I	10J	8J	9K	10K	11L
7H	8I	6I	7J	10I	11J	9J	10K		
8H	9I	7I	8J	6J	7K	10J	11K		

14 本文および挿図中で使用した遺構番号は、下記に例示したように表記した。グリッド表示については第1図に示した。

(例) L 001 → L区の001号遺構

8J - 55 → 8J - 大グリッド, 55 - 小グリッド

T 84-7-1 → 84 確認トレンチ7グリッドの1 (グリッドは旧番号)

15 揭載遺物の属性・計測値は付表（第12表～第37表）とし、巻末に添付したCD-ROMに納めた。



## 本文目次

第1章 はじめに .....	1
第1節 調査の概要 .....	1
1 発掘調査の経緯 .....	1
2 調査の方法 .....	1
3 整理方針と報告の概要 .....	2
第2節 遺跡の位置と環境 .....	5
1 遺跡の位置と周辺の地形 .....	5
2 草刈遺跡と周辺の遺跡 .....	9
第2章 検出遺構と出土遺物 .....	13
第1節 概要 .....	13
第2節 繩文時代 .....	14
1 炉穴 .....	14
2 陥穴 .....	14
3 遺構外出土遺物 .....	16
第3節 弓生時代 .....	19
1 壊穴住居 .....	19
2 方形周溝墓・溝状遺構 .....	66
第4節 古墳時代 .....	74
1 古墳時代前期の壊穴住居 .....	74
2 古墳時代中期の壊穴住居 .....	110
3 古墳時代後期の壊穴住居 .....	124
4 古墳・土坑・その他の遺構 .....	135
第5節 奈良・平安時代以降 .....	149
1 壊穴住居 .....	149
2 土坑・溝状遺構 .....	165
第6節 草刈遺跡L区出土の動物遺体 .....	177
1 資料と調査・整理方法 .....	177
2 貝類（貝サンプル） .....	177
3 その他の動物遺体 .....	179
第3章 まとめ .....	185
附 章 遺構分布図および遺物実測図 .....	205
報告書抄録 .....	卷末

## 挿 図 目 次

第 1 図	草刈遺跡グリッド配置図および確認 トレンチ分割呼称	3	第 34 図	方形周溝墓と埋葬施設の位置	68
第 2 図	草刈遺跡西部地区トレンチ設定状況	4	第 35 図	L 408・424A・424B 方形周溝墓	441
第 3 図	草刈遺跡西部地区全体図	6	第 36 図	埋葬施設	69
第 4 図	草刈遺跡 L 区全体図 (1)	7	第 37 図	L 441 埋葬施設	70
第 5 図	草刈遺跡 L 区全体図 (2)	8	第 38 図	L 130 溝状遺構と出土遺物	71
第 6 図	草刈遺跡の位置	9	第 39 図	L 区古墳時代前期の遺構分布図	73
第 7 図	草刈遺跡と周辺の主な遺跡	10	第 40 図	L 011・013 住居	75
第 8 図	L 区縄文時代の遺構分布図	12	第 41 図	L 014・026 住居	77
第 9 図	L 区炉穴・陥穴	15	第 42 図	L 037・046・047 住居	79
第 10 図	L 区弥生時代の遺構分布図	18	第 43 図	L 052・070 住居	82
第 11 図	L 001・005・006 住居	21	第 44 図	L 109・111・117・134 住居	85
第 12 図	L 028・034 住居	22	第 45 図	L 132 住居	86
第 13 図	L 035・036 住居	25	第 46 図	L 143・152 住居	89
第 14 図	L 041・058・061・073 住居	27	第 47 図	L 167・173 住居	91
第 15 図	L 084・089・101 住居	29	第 48 図	L 187 住居	92
第 16 図	L 102・104A 住居	31	第 49 図	L 208 住居	93
第 17 図	L 115 住居	33	第 50 図	L 217・221・223 住居	95
第 18 図	L 123 住居	35	第 51 図	L 224・242 住居	97
第 19 図	L 137・145 住居	37	第 52 図	L 262・264 住居	101
第 20 図	L 153・160 住居	39	第 53 図	L 266 住居	102
第 21 図	L 161・189・193 住居	41	第 54 図	L 301・304 住居	104
第 22 図	L 195・196 住居	43	第 55 図	L 312・352・378 住居	107
第 23 図	L 197・198・199 住居	45	第 56 図	L 382 住居	108
第 24 図	L 202・205・209・219 住居	47	第 57 図	L 区古墳時代中期の遺構分布図	109
第 25 図	L 233 住居	50	第 58 図	L 010 住居	111
第 26 図	L 256・257・259 住居	51	第 59 図	L 051・062 住居	113
第 27 図	L 260・268 住居	53	第 60 図	L 071 住居	115
第 28 図	L 275・280・284・295・298 住居	55	第 61 図	L 069・076 住居	117
第 29 図	L 299・307・313・314 住居	59	第 62 図	L 106・108・164 住居	119
第 30 図	L 316・321 住居	61	第 63 図	L 315・339 住居	121
第 31 図	L 342・343 住居	63	第 64 図	L 区古墳時代後期の遺構分布図	123
第 32 図	L 357 住居	65	第 65 図	L 056・060 住居	125
第 33 図	L 389・419 住居	67	第 66 図	L 082 住居	126

第 67 図	L 156 住居	128	第 103 図	貝類計測値分布	182
第 68 図	L 272 住居	129	第 104 図	弥生時代の竪穴住居分布図	186
第 69 図	L 277・332 住居	132	第 105 図	弥生時代後期の土器 (1)	188
第 70 図	L 340・403 住居	134	第 106 図	弥生時代後期の土器 (2)	189
第 71 図	L 050 古墳	136	第 107 図	古墳時代前期の竪穴住居分布図	192
第 72 図	L 050 古墳遺物出土状況	137	第 108 図	古墳時代前期の土器 (1)	194
第 73 図	L 050 古墳第 1 埋葬施設	138	第 109 図	古墳時代前期の土器 (2)	195
第 74 図	L 210 第 2 埋葬施設遺物出土状況	138	第 110 図	古墳時代中期の竪穴住居分布図	196
第 75 図	L 100・240 古墳・225 埋葬施設	140	第 111 図	古墳時代中期の土器 (1)	198
第 76 図	L 225 埋葬施設	141	第 112 図	古墳時代中期の土器 (2)・古墳	
第 77 図	L 150A 古墳の位置	142		時代後期の土器	199
第 78 図	L 150A 古墳	143	第 113 図	古墳時代後期の竪穴住居分布図	201
第 79 図	L 213 土坑・245A 土坑墓	145	第 114 図	平安時代の土器	203
第 80 図	L 421 土坑群	145	第 115 図	L 区遺構分布分割図	215
第 81 図	L 201 土器集中出土地点	147	第 116 図	遺構分布図 (1)	216
第 82 図	L 区奈良時代以降の遺構分布図	148	第 117 図	遺構分布図 (2)	217
第 83 図	L 033・044 住居	150	第 118 図	遺構分布図 (3)	218
第 84 図	L 065・068・079・088 住居	152	第 119 図	遺構分布図 (4)	219
第 85 図	L 154・182・183 住居	156	第 120 図	遺構分布図 (5)	220
第 86 図	L 185・192・253・279・293・294 住居	159	第 121 図	遺構分布図 (6)	221
第 87 図	L 283・344・422 住居	161	第 122 図	遺構分布図 (7)	222
第 88 図	L 373 土坑墓・434 土坑	166	第 123 図	遺構分布図 (8)	223
第 89 図	L 040 溝状遺構	167	第 124 図	遺構分布図 (9)	224
第 90 図	L 040 溝状遺構位置図	168	第 125 図	遺構分布図 (10)	225
第 91 図	L 040 溝状遺構分割図 (1)	168	第 126 図	遺構分布図 (11)	226
第 92 図	L 040 溝状遺構分割図 (2)	169	第 127 図	遺構分布図 (12)	227
第 93 図	L 040 溝状遺構分割図 (3)	170	第 128 図	遺構分布図 (13)	228
第 94 図	L 300 溝状遺構	171	第 129 図	遺構出土土器 (1)	229
第 95 図	L 300 溝状遺構分割図 (1)	172	第 130 図	遺構出土土器 (2)	230
第 96 図	L 300 溝状遺構分割図 (2)	173	第 131 図	遺構出土土器 (3)	231
第 97 図	L 300 溝状遺構分割図 (3)	174	第 132 図	遺構出土土器 (4)	232
第 98 図	L 391 土坑群	175	第 133 図	遺構出土土器 (5)	233
第 99 図	貝層出土遺構分布	176	第 134 図	遺構出土土器 (6)	234
第 100 図	L 098・123 住居貝層分布	178	第 135 図	遺構出土土器 (7)	235
第 101 図	L 198 住居貝層サンプル採取位置	179	第 136 図	遺構出土土器 (8)	236
第 102 図	貝種組成	181	第 137 図	遺構出土土器 (9)	237
			第 138 図	遺構出土土器 (10)	238

第139図	遺構出土土器(11) .....	239	第176図	遺構出土土器(48) .....	276
第140図	遺構出土土器(12) .....	240	第177図	遺構出土土器(49) .....	277
第141図	遺構出土土器(13) .....	241	第178図	遺構出土土器(50) .....	278
第142図	遺構出土土器(14) .....	242	第179図	遺構出土土器(51) .....	279
第143図	遺構出土土器(15) .....	243	第180図	遺構出土土器(52) .....	280
第144図	遺構出土土器(16) .....	244	第181図	遺構出土土器(53) .....	281
第145図	遺構出土土器(17) .....	245	第182図	遺構出土土器(54) .....	282
第146図	遺構出土土器(18) .....	246	第183図	遺構出土土器(55) .....	283
第147図	遺構出土土器(19) .....	247	第184図	遺構出土土器(56) .....	284
第148図	遺構出土土器(20) .....	248	第185図	遺構出土土器(57) .....	285
第149図	遺構出土土器(21) .....	249	第186図	遺構出土土器(58) .....	286
第150図	遺構出土土器(22) .....	250	第187図	遺構出土土器(59) .....	287
第151図	遺構出土土器(23) .....	251	第188図	遺構出土土器(60) .....	288
第152図	遺構出土土器(24) .....	252	第189図	遺構出土土器(61) .....	289
第153図	遺構出土土器(25) .....	253	第190図	遺構出土土器(62) .....	290
第154図	遺構出土土器(26) .....	254	第191図	遺構出土土器(63) .....	291
第155図	遺構出土土器(27) .....	255	第192図	遺構出土土器(64) .....	292
第156図	遺構出土土器(28) .....	256	第193図	遺構出土土器(65) .....	293
第157図	遺構出土土器(29) .....	257	第194図	遺構出土土器(66) .....	294
第158図	遺構出土土器(30) .....	258	第195図	遺構出土土器(67) .....	295
第159図	遺構出土土器(31) .....	259	第196図	遺構出土土器(68) .....	296
第160図	遺構出土土器(32) .....	260	第197図	遺構出土土器(69) .....	297
第161図	遺構出土土器(33) .....	261	第198図	遺構出土土器(70) .....	298
第162図	遺構出土土器(34) .....	262	第199図	遺構出土土器(71)・遺構外出土 土器(1) .....	299
第163図	遺構出土土器(35) .....	263	第200図	遺構外出土土器(2) .....	300
第164図	遺構出土土器(36) .....	264	第201図	遺構外出土繩文土器(1) .....	301
第165図	遺構出土土器(37) .....	265	第202図	遺構外出土繩文土器(2) .....	302
第166図	遺構出土土器(38) .....	266	第203図	土製品(1) .....	303
第167図	遺構出土土器(39) .....	267	第204図	土製品(2) .....	304
第168図	遺構出土土器(40) .....	268	第205図	土製品(3) .....	305
第169図	遺構出土土器(41) .....	269	第206図	土製品(4) .....	306
第170図	遺構出土土器(42) .....	270	第207図	土製品(5) .....	307
第171図	遺構出土土器(43) .....	271	第208図	土製品(6) .....	308
第172図	遺構出土土器(44) .....	272	第209図	土製品(7) .....	309
第173図	遺構出土土器(45) .....	273	第210図	土製品(8)・ガラス玉 .....	310
第174図	遺構出土土器(46) .....	274	第211図	土製品(9) .....	311
第175図	遺構出土土器(47) .....	275			

第 212 図	石器・石製品（1）	312	第 222 図	石器・石製品（11）	322
第 213 図	石器・石製品（2）	313	第 223 図	石器・石製品（12）	323
第 214 図	石器・石製品（3）	314	第 224 図	金属製品（1）	324
第 215 図	石器・石製品（4）	315	第 225 図	金属製品（2）	325
第 216 図	石器・石製品（5）	316	第 226 図	金属製品（3）	326
第 217 図	石器・石製品（6）	317	第 227 図	金属製品（4）	327
第 218 図	石器・石製品（7）	318	第 228 図	金属製品（5）	328
第 219 図	石器・石製品（8）	319	第 229 図	金属製品（6）	329
第 220 図	石器・石製品（9）	320	第 230 図	金属製品（7）	330
第 221 図	石器・石製品（10）	321			

## 表 目 次

第 1 表	貝サンプル一覧	180	第 18 表	土製支脚計測表
第 2 表	貝類種名一覧	180	第 19 表	ガラス玉計測表
第 3 表	貝類集計結果	181	第 20 表	石器・砥石計測表
第 4 表	貝類計測値	182	第 21 表	その他の石製品計測表
第 5 表	脊椎動物種名一覧	183	第 22 表	石製勾玉計測表
第 6 表	脊椎動物集計結果	183	第 23 表	石製管玉・臼玉計測表
第 7 表	ウマ上下顎歯計測値	184	第 24 表	その他の石製玉類計測表
第 8 表	遺構・遺物の挿図・写真図版掲載 一覧	207	第 25 表	石製模造品計測表
第 9 表	竪穴住居一覧	331	第 26 表	銅鏡計測表
第 10 表	土坑・土坑墓等一覧	341	第 27 表	その他の銅製品計測表
第 11 表	陥穴一覧	342	第 28 表	鉄釘計測表
	付表 添付CD(Excel形式)		第 29 表	鉄鎌計測表
			第 30 表	その他の鉄製品計測表
第 12 表	出土土器觀察表		第 31 表	鉄製刀子計測表
第 13 表	土製勾玉計測表		第 32 表	鉄製工具類計測表
第 14 表	その他の土製玉類計測表		第 33 表	鉄鏃計測表
第 15 表	その他の土製品計測表		第 34 表	鉄斧計測表
第 16 表	土玉計測表		第 35 表	鉄製U字形鋤先計測表
第 17 表	管状土錐計測表		第 36 表	鉄製小刀計測表
			第 37 表	鉄鍔計測表

## 図版目次

卷頭図版 1 上段 草刈遺跡 L区（南東から）	図版 21 L 283・284・288・290・291・293～296
下段 草刈遺跡 L区（西から）	図版 22 L 297・299・301・304・305・307・313・ 356・357
卷頭図版 2 上段 L 050 遺物出土状況	図版 23 L 311・312・316・320～322・332・337
中段 L 108 遺物出土状況	～339・419
下段 L 109 遺物出土状況	図版 24 L 339～344
卷頭図版 3 銅鏡	図版 25 L 349・352～354・375～379・439
卷頭図版 4 銅鏡と鉄鉗	図版 26 L 380～386・389・391・392
卷頭図版 5 玉類	図版 27 L 400・406・416・422・429・432・435・ 436
卷頭図版 6 石製品と玉類	図版 28 出土土器 L 001・007・008・010・011
図版 1 草刈遺跡完掘状況（空中写真合成）	図版 29 出土土器 L 011・013・019・022～024・ 027
図版 2 草刈遺跡 L区全景	図版 30 出土土器 L 028・029A・032・033
図版 3 L 003・004・008・009～014・018・019	図版 31 出土土器 L 034～037
図版 4 L 021・022・024～029A・029B	図版 32 出土土器 L 037・038・041・042・044～ 046
図版 5 L 031～038・043・082	図版 33 出土土器 L 047・050
図版 6 L 039～046	図版 34 出土土器 L 050・051
図版 7 L 046・047・050～056・058	図版 35 出土土器 L 051・052・054・055～057・ 059～061・065
図版 8 L 061・063～066・068～071	図版 36 出土土器 L 065・068～070
図版 9 L 072～075・078～080	図版 37 出土土器 L 070～073
図版 10 L 083～086・089・092～094・097・098	図版 38 出土土器 L 074・076・080～082
図版 11 L 098・101・103～105・108・109・133・ 204	図版 39 出土土器 L 084・086・088・092・098・ 101・102
図版 12 L 110・112・114・116～119・121・123	図版 40 出土土器 L 102・104B・105・106・108・ 109
図版 13 L 131・132・134・137・138・142・145～ 148・151	図版 41 出土土器 L 109・110・112・114・115
図版 14 L 154・160・161・163・165・166・170	図版 42 出土土器 L 115・116・118・121・123
図版 15 L 172・173・177・178・182～185・188・ 189・401・402	図版 43 出土土器 L 123
図版 16 L 191～193・195・196・198・199・251	図版 44 出土土器 L 123
図版 17 L 205・206・208～210・217・219・221・ 235・241	図版 45 出土土器 L 123・124・129・131・132・ 134・136・137
図版 18 L 224・226・234・242・243・253・254	
図版 19 L 255・256・259～265・298	
図版 20 L 266～268・272・273・277・279・280	

図版 46 出土土器	L 137・142～145・147	201・209・233
図版 47 出土土器	L 147・150A・151～154	図版 72 出土土器 L 259・260・265・266・268・
図版 48 出土土器	L 154・156・159・161・163～ 165・168	297・299・316・330
図版 49 出土土器	L 169・170・173・178・179・ 182・185・187・188・193・ 195・198	図版 73 出土土器 L 330・333・336・337・342・ 343
図版 50 出土土器	L 199・201	図版 74 出土土器 L 343・357・389・418・419
図版 51 出土土器	L 205・207・208・210・217	図版 75 出土土器 L 033・044・065・082・109・ 185・336・422
図版 52 出土土器	L 217～219・221・223・226	図版 76 遺構外出土繩文土器（1）
図版 53 出土土器	L 227・232～234・237・242	図版 77 遺構外出土繩文土器（2），土器片鍤
図版 54 出土土器	L 242・253～256・259・260	図版 78 土製品（1）
図版 55 出土土器	L 260・262・264	図版 79 土製品（2）
図版 56 出土土器	L 264・266・267・271	図版 80 土製品（3）
図版 57 出土土器	L 272・273・275～277・279	図版 81 土製支脚（1）
図版 58 出土土器	L 280・283・346・299～301・ 304	図版 82 土製支脚（2）・瓦
図版 59 出土土器	L 304・305・309・311～316	図版 83 石器・石製品（1）
図版 60 出土土器	L 326・329・332・336・338・ 339	図版 84 石器・石製品（2）
図版 61 出土土器	L 339～343	図版 85 石器・石製品（3）
図版 62 出土土器	L 343・344・347・354	図版 86 石器・石製品（4）
図版 63 出土土器	L 354・355・357・361・364・ 366・368・378・379・387・389	図版 87 石器・石製品（5）
図版 64 出土土器	L 389・390・392・397・398・ 400・403・414・416・419・ 421・422	図版 88 石器・石製品（6）
図版 65 出土土器	L 424A・428・435, 7J・8J, T 79・T 81～84	図版 89 石器・石製品（7）
図版 66 出土土器	L 001・003・022～025・028・ 032・034	図版 90 石器・石製品（8），ガラス玉
図版 67 出土土器	L 034～036・041	図版 91 石器・石製品（9）
図版 68 出土土器	L 047・050・052・054・058・ 059・061・063・073・082	図版 92 石器・石製品（10）
図版 69 出土土器	L 084・098・101・102・115	図版 93 石器・石製品（11）
図版 70 出土土器	L 117・123・129・137・153	図版 94 石器・石製品（12）
図版 71 出土土器	L 160・169・184・189・195・	図版 95 石器・石製品（13），金属製品（1）
		図版 96 金属製品（2）
		図版 97 金属製品（3）
		図版 98 金属製品（4）
		図版 99 金属製品（5）
		図版 100 金属製品（6）



# 第1章 はじめに

## 第1節 調査の概要

### 1 発掘調査の経緯

市原市と千葉市にまたがる丘陵上に、独立行政法人都市再生機構による千原台地区土地区画整理事業が計画された。このため、事業地内の埋蔵文化財の取り扱いについて関係諸機関と協議した結果、可能な限り公園、緑地として現状保存に努める一方で、現状保存の困難な部分については、やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなり、財団法人千葉県教育振興財団が委託を受け発掘調査を実施することとなった。

今回報告する草刈遺跡L区は、約30haに及ぶ遺跡の西部中央に位置する。調査は、昭和53年度の確認調査、平成6年度の本調査と、それぞれ年度計画に基づいて行った。草刈遺跡に関する本事業に伴うこれまでの調査成果として、確認調査、A区、B区、東部地区縄文時代、東部地区旧石器時代、西部地区旧石器時代、C区・保存区（N区）、D・E区、G区・古墳群（P区）、K区、J区、H区について報告書が刊行されている。なお、発掘調査の実施内容・担当者は次のとおりである。職名は当時のものである。

昭和53年度

組織 調査部長 西野 元 班長 栗本佳弘

担当者 調査研究員 及川淳一・小久賀隆史

内容 確認調査 100,000m<sup>2</sup>

平成6年度

組織 調査研究部長 西山太郎 所長 田坂 浩

担当者 主任技師 倉内郁子・山田貴久 技師 百瀬幸徳・立和名明美

内容 上層本調査 25,000m<sup>2</sup> 下層確認調査 1,000m<sup>2</sup>/25,000m<sup>2</sup>

### 2 調査の方法（第1～3図）

発掘区の設定にあたっては、国家座標を基準として40m×40mの大グリッドを設けた。遺跡全体を対象とした確認調査では、この大グリッドを基準として、2m幅のトレンチを南北に10m間隔で設定した。草刈遺跡西部地区におけるトレンチの設定状況は、第2図に示したとおりである。

トレンチ内から出土した遺物の取り上げは、各トレンチを大グリッドをもとにさらに10mに4等分して行った（第1図下段）。

遺跡全体を対象として行った確認調査の進捗にしたがい、調査範囲全体にわたって遺構が濃密に分布していることが明らかとなつたため、C区から東側では、トレンチによる確認調査を省略した。なお、確認調査においては、草刈遺跡全域に対して219-003という遺跡コード番号を用いている。

L区の上層本調査は、平成6年度に実施した。調査はバックホウ等の重機を用いて表土を除去後、検出した遺構のプランの確認、新旧関係の把握、遺構の精査を行い、遺構調査の進捗に応じて、図面作成、写真撮影等の記録作成作業を行った。

草刈遺跡では検出遺構が多数に上り、各遺構の切り合い関係も複雑になることが予想されたことから、遺構番号は、各調査区ごとに001からはじまる3桁の通し番号で表記することとし、必要に応じて枝番号を付けることとした。なお、報告にあたってL区では、遺構番号001はL001と表示した。

このほか、遺構図面の作成や遺構に帰属しない遺物の取り上げにあたっては、40m大グリッドを4m×4mのグリッドに100分割した小グリッドを基本単位として行っている。当初大グリッドには、調査区ごとにそれぞれ個別のグリッド番号が付けられ、現地調査が行われたが、草刈遺跡西部地区の調査を実施するにあたり、遺跡内を統一的に表示するグリッド名称に変更が行われている。本書では、この新しいグリッド名称に基づいて表示を行った。なお、グリッド表示の新旧対応関係は、凡例に示した。

また、L区本調査区域には219-068という遺跡コードを使用している。したがって、同一区内で、確認調査時における遺跡コードと、本調査時における遺跡コードの両方が使用されることになった。

調査の結果、弥生時代から平安時代にわたる竪穴住居349軒のほか、方形周溝墓、古墳などが検出された。遺物は各時代の土器が大量に出土したほか、方形周溝墓の埋葬施設からは螺旋状鉄錘が出土した。また、古墳時代の竪穴住居から計6面の銅鏡が出土しており注目される。

### 3 整理方針と報告の概要

草刈遺跡は、面積が約30haに及び、検出された遺構数も約7,000基と、県内では他に例を見ない膨大なものであった。このため報告書作成にあたって、調査区を基本単位として作成する方針を立てた。しかし、旧石器時代資料ならびにA・B区から東側の縄文時代資料については、全体的に遺構密度が散在的で、かつ陥穴など小規模な面積では、全体を読み取ることが困難な遺構が多数認められることから、C区・D区・E区・G区・保存区（N区）・古墳群（P区）の6調査地区を一括し、『東部地区旧石器時代』と『東部地区縄文時代』として報告書を刊行した。さらにL区を含む西部地区の旧石器時代の調査成果についても、『西部地区旧石器時代』として報告書を刊行した。このことからL区については、旧石器時代を除く上層遺構の整理作業を実施することとした。

整理作業は、平成11年度から平成15年度に、遺物の水洗・注記、分類・選別、接合・復元を年度計画によって進めた。平成18年度は、重点遺跡整理作業促進事業によって遺物の実測・拓本、トレス、写真撮影、遺物の観察表の作成を行った。平成19年度からは挿図作成、原稿執筆等の本格的な報告書作成作業へと移行した。この中で、重点遺跡整理促進事業によって作成した遺物実測図と遺物観察表の編集も平行して実施した。平成20年度は原稿執筆の続きから作業を始め、報告書刊行の工程を進めた。平成19年度に実施した挿図作成では、これまでと同様に遺跡の内容を勘案した上で、遺構の保存状態、遺物の出土状況を考慮して、平面図を掲載する遺構を選択した。特にL区は、H区・K区の西側でJ区の南側に位置し、遺跡の中央部から見て西方で、台地の南側にあたり、村田川に面する比較的平坦な台地上に拡がる立地環境のため、検出遺構総数が膨大となり、やむを得ず詳細を割愛した遺構も多い。凡例9で述べたように、詳細図を図示できない遺構に関しては、附章、遺構一覧表で概略を記載することとした。

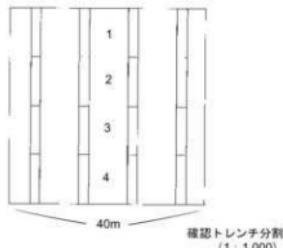
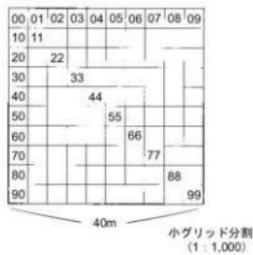
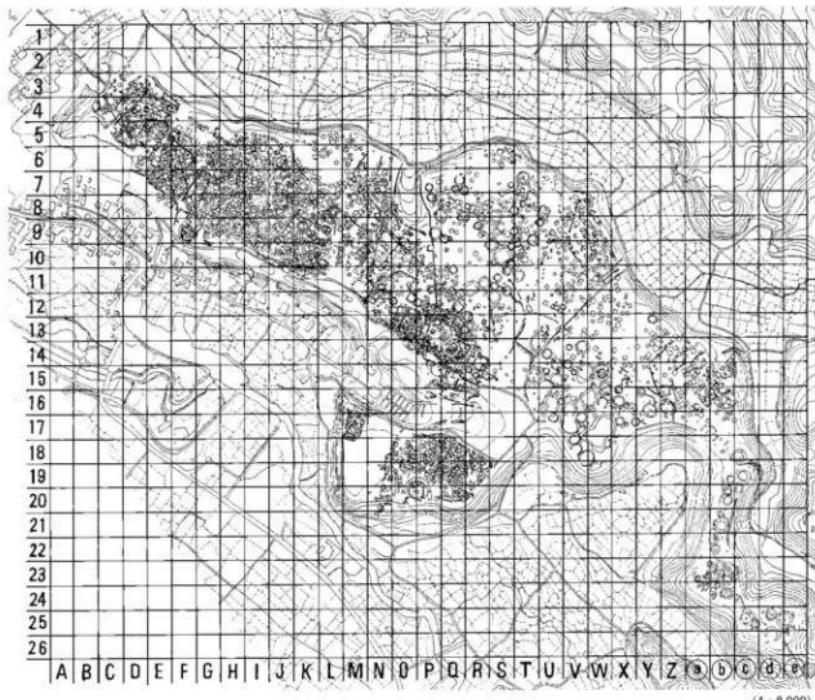
整理作業の実施内容・担当者は次のとおりである。職名は当時のものである。

平成11年度

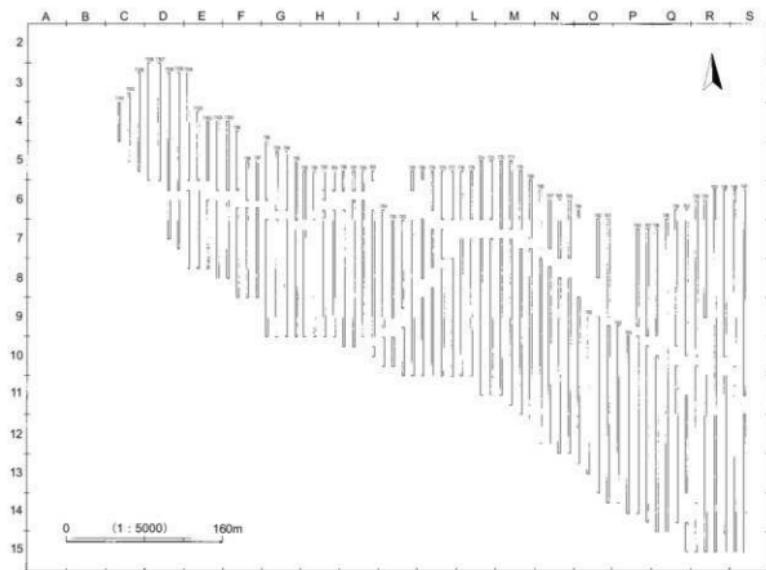
組織 調査部長 沼澤 豊 所長 石田廣美

内容 水洗・注記、記録整理

平成12年度



第1図 草刈遺跡グリッド配置図および確認トレンチ分割呼称



第2図 草刈遺跡西部地区トレーンチ設定状況

組織 調査部長 沼澤 豊 所長 三浦和信

担当者 千葉調査室長 山口典子 上席研究員 島立 桂

内容 水洗・注記、分類・選別の一部

平成13年度

組織 調査部長 佐久間 豊 所長 三浦和信

担当者 上席研究員 島立 桂・大谷弘幸

内容 分類・選別、復元の一部

平成14年度

組織 調査部長 斎木 勝 所長 谷 句

担当者 上席研究員 島立 桂・大谷弘幸・猪股昭喜 研究員 黒沢 崇

内容 分類・選別、復元の一部

平成15年度

組織 調査部長 斎木 勝 所長 谷 句

担当者 上席研究員 島立 桂・大谷弘幸・星 勇人 研究員 黒沢 崇

内容 分類・選別、復元の一部

平成18年度 (重点遺跡整理促進事業)

組織 調査部長 矢戸三男 整理課長 郷田良一

担当者 上席研究員 小林信一・四柳 隆

整理技術員 平井真紀子

内容 実測・拓本、トレース、写真撮影、遺物観察表の作成

平成19年度

組織 調査部長 矢戸三男 所長 折原 繁

担当者 上席研究員 小林清隆

内容 摂図・図版作成、原稿執筆の一部

平成20年度

組織 調査部長 大原正義 所長 折原 繁

担当者 上席研究員 小林清隆・酒井 宏

内容 摂図・図版作成、原稿執筆・編集の一部

平成21年度

組織 調査研究部長 及川淳一 所長 折原 繁

担当者 上席研究員 山口典子・小高春雄・宇山文治

内容 原稿執筆の一部・編集

平成22年度

組織 調査研究部長 及川淳一 所長 白井久美子

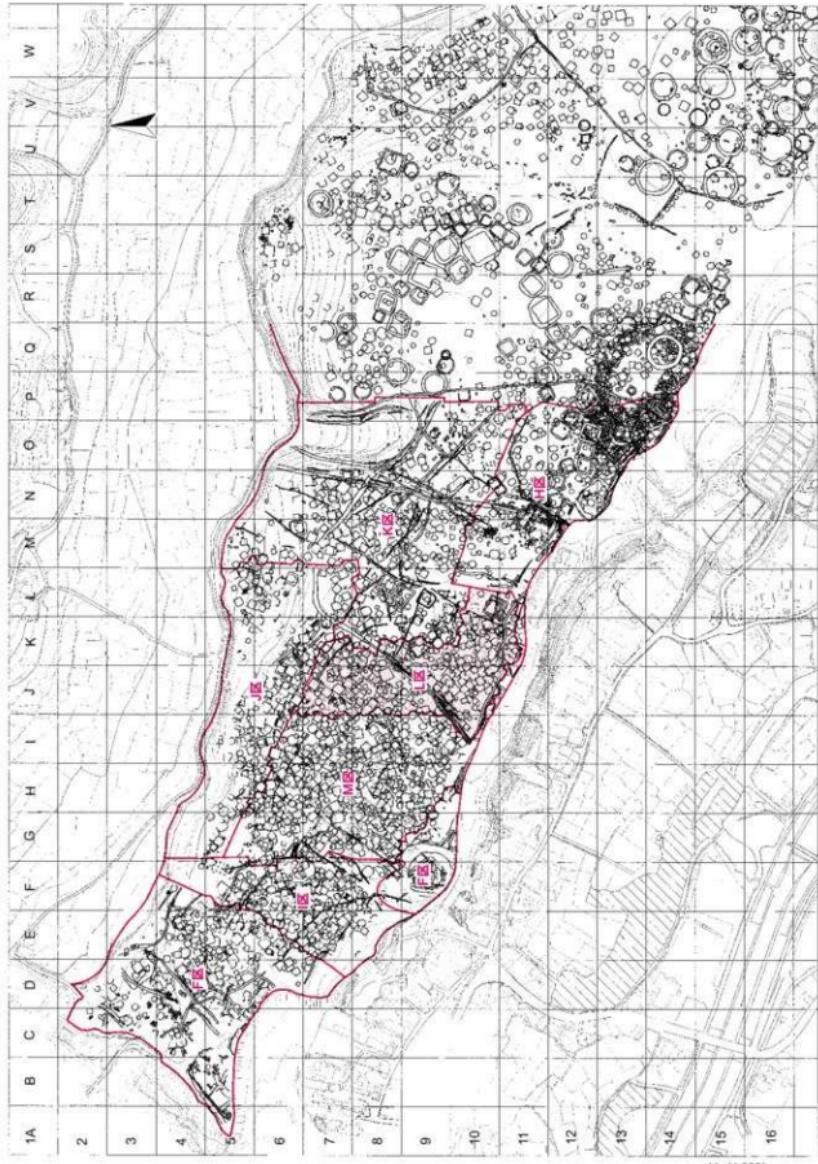
内容 刊行

## 第2節 遺跡の位置と環境

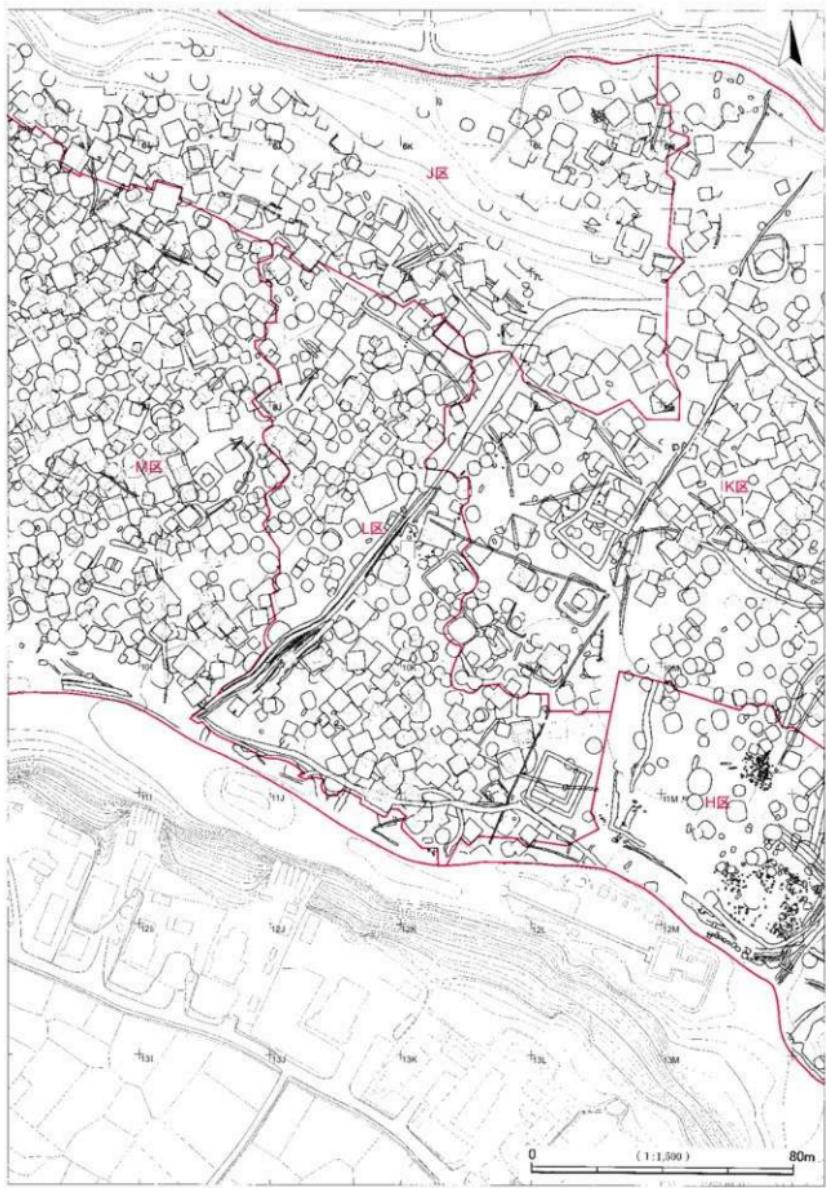
### 1 遺跡の位置と周辺の地形（第4～6図、巻頭図版1、図版1・2）

草刈遺跡は、ちはら台ニュータウン造成地域の西端、市原市草刈字天神台1,100-1ほか（現ちはら台西1丁目22番ほか）に所在し、現在の京成電鉄ちはら台駅を中心とした台地上に位置する。遺跡は南側を村田川に、北側を「茂呂谷津」と称される深い開析谷に挟まれた幅150m～400m、長さ1,500mの東西に長い台地上に展開する。標高は27m～40mを測り、東から西に向かって緩やかに傾斜している。沖積低地との比高差は15m～20mである。L区はH区・K区の西側、J区の南側に位置し、草刈遺跡の西方で台地の南側部分を占めている。

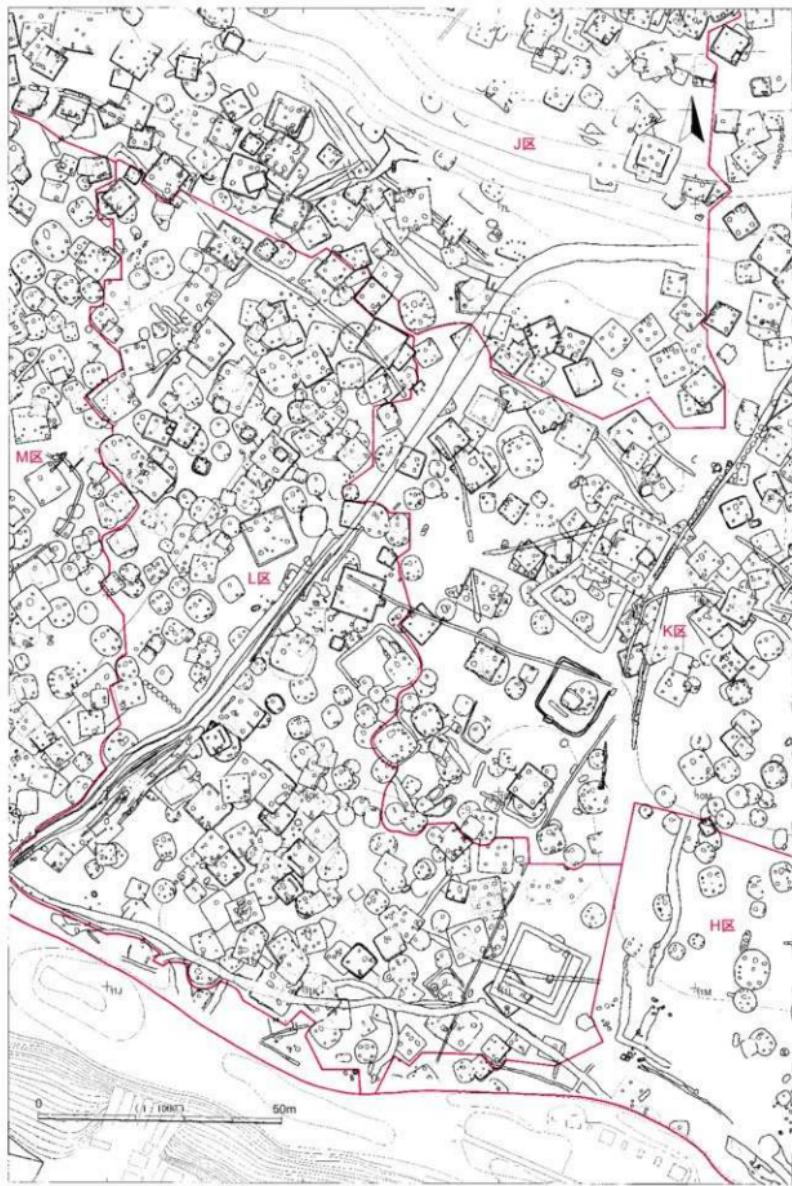
「茂呂谷津」は、かつて上総国と下総国との国境をなしており、現在でも千葉市と市原市との行政境として継承されている。この「茂呂谷津」では数か所にわたってボーリング調査が実施され、厚く堆積した泥炭層とその直上からイネプラントオバールが検出され、谷津部湿地化の過程と比較的早い段階での水田化が指摘される。また、遺跡の南側と西側に、村田川によって形成された広大な沖積平野を一望に見渡すことができ、西には東京湾を挟んで富士山も望むことができる。この村田川による沖積平野の周辺には後述のように多くの遺跡が点在し、重要な生産基盤を形成している。



第3図 草刈遺跡西部地区全体図



第4図 草刈遺跡L区全体図(1)



第5図 草刈遺跡L区全体図 (2)



第6図 草刈遺跡の位置

## 2 草刈遺跡と周辺の遺跡（第7図）

草刈遺跡からは総数7,000基を数える遺構が検出された。このうち竪穴住居は約4,000軒、古墳は180基に及ぶ。旧石器時代から中・近世にわたる大複合遺跡であり、主な遺構としては縄文時代中期の貝塚と環状集落、弥生時代中期・後期の環濠集落、古墳時代の集落群と古墳群、奈良・平安時代の集落と村落内寺院と考えられる掘立柱建物跡などがある。次に、草刈遺跡を中心とした村田川中流域における弥生時代から奈良・平安時代にかけての遺跡を取り上げ、それらについて概観することとした。

弥生時代以降、村田川中流域に本格的に遺跡が出現するようになるのは、弥生時代中期になってからである。中期の宮ノ台式期には、草刈遺跡・大厩遺跡・大厩浅間様古墳下層遺跡・潤井戸西山遺跡、下流域の菊間遺跡・菊間手永遺跡・菊間深道遺跡などの環濠を伴う拠点的集落が出現する。これらの集落はいずれも村田川の沖積平野を望む位置に形成され、市原条里制遺跡で検出された同期の水田跡が示すように開拓谷の出口付近を中心に水田開発が行われたものと考えられる。村田川左岸のやや奥まった台地に立地する中潤ヶ広遺跡では、宮ノ台式期を中心とする竪穴住居が49軒検出され、ほかに方形周溝墓11基が2か所の墓域に展開している。ただ、この遺跡では環濠の存在は確認されていない。草刈遺跡の宮ノ台式期の遺構としては、台地西端部のF区において、竪穴住居と環濠が確認されている。この時期の墓域については明確ではなく、本遺跡とは異なる地域に存在する可能性が考えられる。

弥生時代後期になると新たに草刈六之台遺跡や川焼台遺跡、鶴牧遺跡などに集落が出現し、小規模であるが谷奥部への集落の進出・拡散傾向が認められる。このような傾向は草刈遺跡の中においても認められる。中期には台地西側先端部分に限定されていた竪穴住居の分布が、時代が新しくなるにしたがい、遺跡の東側へと拡大する状況が看取される。また、後期の竪穴住居の軒数は中期に比較して爆発的に増大する。



1. 草刈遺跡 2. 草刈1号墳 3. 草刈六之台遺跡 4. 中永谷遺跡 5. 川焼台遺跡 6. 草刈33号墳  
 7. 川焼瓦窯跡 8. 鶴牧遺跡 9. 鶴牧古墳群 10. ナキノ台遺跡 11. ばあ山遺跡 12. 野馬堀遺跡 13. 押沼遺跡群  
 14. 姬名崎古墳群 15. 富岡古墳群 16. 御塚台遺跡 17. ムコアラク遺跡  
 18. 六通神社南遺跡 19. 六通金山遺跡 20. 太田法師遺跡 21. 大勝野北遺跡 22. バクチ穴遺跡  
 23. 大殿浅間様古墳 24. 大殿遺跡 25. 潤井戸西山遺跡 26. 潤井戸1号墳 27. 潤井戸潤ヶ台遺跡群  
 28. 下鈴野遺跡 29. 潤井戸小谷1号墳 30. 潤井戸遺跡群 31. 下野遺跡群 32. 鹿ノ原遺跡

第7図 草刈遺跡と周辺の主な遺跡

この状況については、C・D・E・K区の報告の中で簡単にふれたとおりである。しかし、草刈遺跡ではこの時代の墓域形成は顕著ではなく、後期段階で集落の一角に方形周溝墓が営まれたり、土坑墓がやや集中して分布する状況が認められるにすぎない。

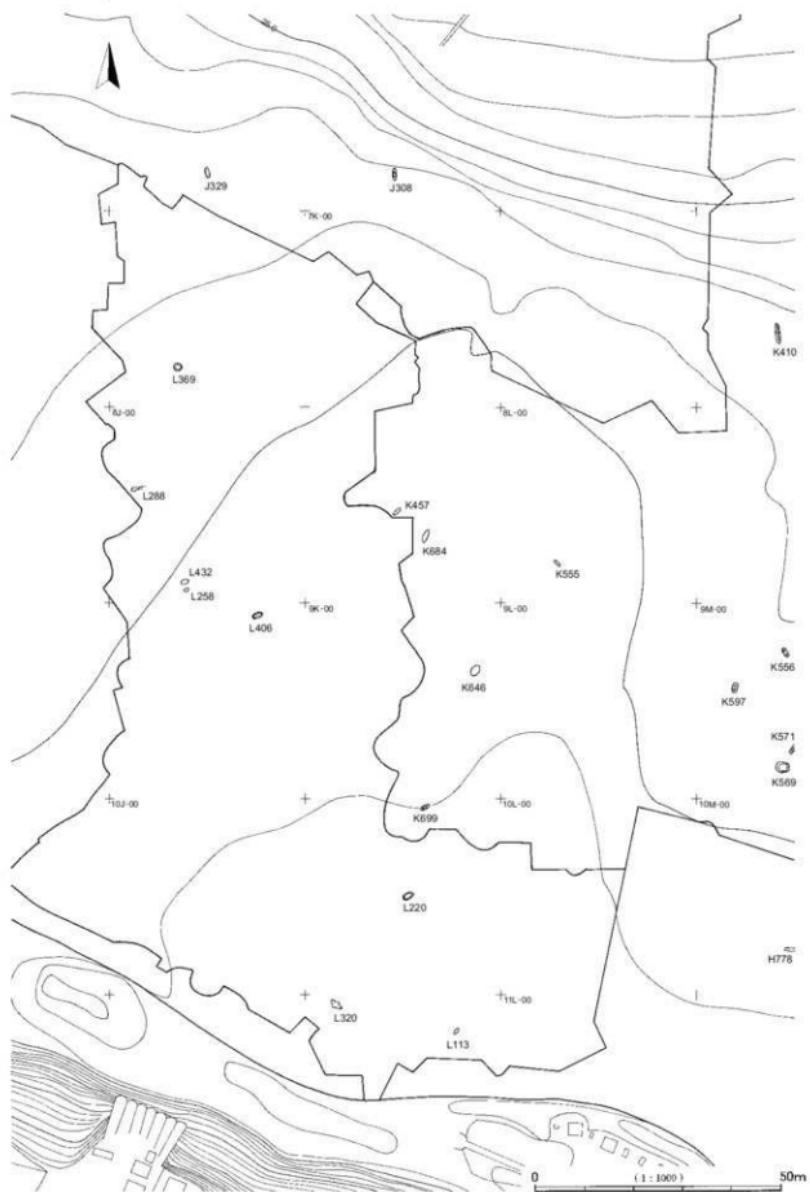
次の古墳時代前期には、集落の展開範囲は弥生時代後期と大きな違いは見られないものの、竪穴住居軒数は飛躍的に増加する。周辺では、前期後半から中期にかけて、草刈1号墳や大厩浅間様古墳・大厩二子塚古墳・新皇塚古墳・高野前古墳といった首長クラスの墳墓が造営されるようになる。

古墳時代中期の大規模な集落形成は顕著ではなく、古墳時代後期に再び集落域の拡大が認められ、千原台地区でも中水谷遺跡・ナキノ台遺跡などより谷奥部の地域でも集落が営まれるようになり、隣接する東南部地区においても、高沢遺跡や有吉遺跡、有吉北貝塚等この時期の遺跡数の増加傾向が指摘できる。

奈良・平安時代になると草刈遺跡の状況は大きく変化する。それまで営まれていた集落の多くが姿を消すか規模を縮小するようになり、竪穴住居軒数は減少する。特に、奈良時代の竪穴住居軒数は少なく、9世紀段階に集落の存在が明瞭になる。また、この頃千原台地区における生産基盤の変化も認められるようになり、川焼瓦窯跡における国分寺所用瓦の生産、押沼遺跡群における鉄生産のように農業以外の生産業が活発に行われるようになる。

## 関連文献

- 小久賀隆史 1980『千原台ニュータウンⅠ』(野馬城遺跡・ばあ山遺跡・他) (財)千葉県文化財センター  
小久賀隆史ほか 1983『千原台ニュータウンⅡ』草刈遺跡A区(第1次調査) (財)千葉県文化財センター  
高田 博ほか 1986『千原台ニュータウンⅢ』草刈遺跡(B区) (財)千葉県文化財センター  
小林清隆ほか 1990『市原市草刈貝塚』(財)千葉県文化財センター  
白井久美子ほか 1991『千原台ニュータウンIV』中水谷遺跡 (財)千葉県文化財センター  
小林信一 1993『千原台ニュータウンV』押沼第I・II遺跡K地点 (財)千葉県文化財センター  
白井久美子ほか 1994『千原台ニュータウンVI』草刈八之台遺跡 (財)千葉県文化財センター  
花島理典 田井知二 西野雅人 1995『市原市草刈遺跡出土のト骨について』『研究連絡誌』第43号 (財)千葉県文化財センター  
田井知二 1997『千原台ニュータウン7-草刈1号墳』 (財)千葉県文化財センター  
伊藤智樹ほか 2003『千原台ニュータウンⅧ』市原市草刈遺跡(東部地区・彌文時代) (財)千葉県文化財センター  
黒沢 崇 2003『千原台ニュータウンIX』市原市押沼第1・2・2遺跡(上層) (財)千葉県文化財センター  
島立 祐 2003『千原台ニュータウンX』市原市草刈遺跡(東部地区・旧石器時代) (財)千葉県文化財センター  
大谷弘幸ほか 2004『千原台ニュータウンXI』市原市草刈遺跡(C区・保存区) (財)千葉県文化財センター  
黒沢 崇ほか 2004『千原台ニュータウンXII』市原市押沼大六天遺跡(上層) (財)千葉県文化財センター  
田島 新 2005『千原台ニュータウンXIII』市原市草刈遺跡(西部地区・旧石器時代) (財)千葉県文化財センター  
市原市文化財センター 2005『第20回遺跡発表会要旨』(財)市原市文化財センター  
小林清隆 大谷弘幸 2006『千原台ニュータウンXIV』市原市草刈遺跡(D区・E区) (財)千葉県教育振興財團  
田島 新 2006『千原台ニュータウンXV』市原市押沼大六天遺跡(下層) (財)千葉県教育振興財團  
鶴岡 健 大内千鶴ほか 2006『鶴岡地区埋蔵文化財調査報告書』市原市中綱ヶ広遺跡(上層) (財)千葉県教育振興財團  
大村 直ほか 2006『市原市南岩崎遺跡』市原市教育委員会  
白井久美子ほか 2007『千原台ニュータウンXVI』市原市草刈遺跡G区・古墳群(P区) (財)千葉県教育振興財團  
小林清隆 麻生正信ほか 2007『千原台ニュータウンXVII』市原市草刈遺跡(K区) (財)千葉県教育振興財團  
小林清隆 2007『千原台ニュータウンXIX』市原市草刈遺跡(J区) (財)千葉県教育振興財團  
峰屋孝之 小林清隆ほか 2009『千原台ニュータウンXXI』市原市川焼台遺跡(上層) (財)千葉県教育振興財團  
峰屋孝之 小林清隆ほか 2010『千原台ニュータウンXXIII』市原市草刈遺跡(H区) (財)千葉県教育振興財團



第8図 L区縄文時代の遺構分布図

## 第2章 検出遺構と出土遺物

### 第1節 概要

L区における成果については、第1章第1節で述べたとおり、旧石器時代の石器集中地点をはじめ、縄文時代から近世にわたる遺構と遺物が検出されている。旧石器時代の成果は、すでに報告書が刊行されており、石器集中地点8か所と単独出土地点4か所の成果が掲載されている。ここでは、本書に登載する縄文時代以降の成果についての概略を提示しておく。

本調査区の中で、縄文時代以降の検出遺構で最も多い遺構の種類は竪穴住居である。これを時代別に見ると、弥生時代162軒、古墳時代153軒、平安時代34軒、時代不明7軒という内訳になり、総計356軒を数える。時代不明として扱った竪穴住居は、遺構の保存状態が不良であったり、時期決定が可能となる土器の出土が皆無であったため、根拠をもって時期区分を行うことが不可能であった遺構である。竪穴住居については、草刈遺跡内における、ほかの調査区同様に、各時代にわたって構築され、結果として著しく重複し密集した状況を呈する。また、検出遺構は竪穴住居以外にも多く存在する。次に、各時代毎に成果の概略を述べていきたい。

縄文時代の遺構は炉穴1基と陥穴7基である。遺構からは時期決定が可能な遺物は出土していない。この時代の遺物には、後世の遺構覆土中から出土した土器片や土製品、石器類が存在する。しかし、全体に出土量は少なく、集中する傾向も認められない。土器片は、早期の燃系文系土器から中期にわたっている。

弥生時代の遺構は、竪穴住居、土坑、溝状遺構等が存在し、竪穴住居は全て後期に比定される。すでに紹介しているように、草刈遺跡における弥生時代の集落は、台地の最も西側にあたるF区における環濠を伴う宮ノ台式期の集落を嚆矢とする。この中期後葉に営まれた集落が、時代の経過とともに東側に拡大されていく状況が看取されているが、L区においては、その状況が明瞭に捉えられている。ここは西側から東に向かって集落の拡大する中間地域となり、調査区全域にわたり非常に密集した状況で竪穴住居が構築されている。ほかには墓坑と考えられる土坑と、村田川を望む南側の台地縁辺部で、断面形態がV字状になる短い溝が1条検出されている。遺物は後期の土器が主体になる。また、少量であるが宮ノ台式の破片が出土している。このほかには、装身具類や石器類等も出土している。

古墳時代の遺構には竪穴住居、方墳、円墳、様々な土坑等が存在する。竪穴住居の総数は153軒である。時期別では前期が112軒を数え、最も遺構密度が高い。弥生時代後期から連続と継続する集落形成が認められる時期である。中期に入ると、竪穴住居は全部で26軒と少なく、急激な集落の衰退傾向が認められる。後期に比定した竪穴住居は15軒である。中期に現れた減少傾向が一層顕著に見られ、その後葉には竪穴住居の存在が消えてしまう。出土遺物では土器類が多量に出土している。また、金属製品も多数検出され、その中でも銅鏡が6面出土した点は注目される。さらに玉類や模造品類も数多く出土している。

古墳時代では、竪穴住居のほかに古墳5基を検出した。いずれも盛土は失われ周溝のみを検出した。このうち方墳1基は周溝内出土土器から前期の造営であることが明らかになった。すでに報告したA・B・D区を中心に営まれた一連の方墳群とはかなり離れており、単独で存在する1基と位置づけられる。また円墳については埋葬施設の存在が明らかになり、箱式石棺1基を検出した。

奈良時代以降の遺構は、竪穴住居と土坑、溝状遺構等が存在する。竪穴住居は34軒検出され、全て平安時代に比定される。草刈遺跡の中央部では平安時代の遺構が希薄であるが、西側では比較的短期間の集落が営まれる。その集落の中では東側の一角にあたる地域となる。ただ、この地区での掘立柱建物の存在は確認できない。遺物では土器類が多く出土している。

以上のように、L区では周辺の状況と同様に、古墳時代後期で集落の痕跡が途絶え、平安時代に入って再び竪穴住居が構築される状況が看取される。

上記以外にも、時期不明の溝状遺構（道路状遺構）や土坑も多く存在する。それらの大部分は中・近世以降に構築されたと推測される。

## 第2節 縄文時代（第8図）

縄文時代の遺構としては、炉穴1基、陥穴7基を検出した。

炉穴は調査区南側の台地縁辺部から平坦部に入った位置に検出され、周辺に同時期の遺構は検出されず単独で存在する。陥穴は調査区全域に疎らな状況で検出されている。遺物はほとんど伴わないため、時期の比定が困難であるが、いずれも早期の可能性が高い。

### 1 炉 穴

#### L 320（第9図、図版23）（IIK-01グリッド）

台地の南端部から平坦部に入った地域に単独で検出された。平面形は不整形で、北西—南東方向に2.5m前後の規模をもち、幅1.6mである。検出面からの深さは中央部で49cmである。燃焼部は3か所に存在する。北西側に存在する燃焼部が最も焼土範囲が大きく、対向側の南東端部の燃焼部の焼土も明確に確認された。もう1か所は中央部から北東側に張り出すような位置から検出され、立ち上がりの壁が焼土化していたことから燃焼部であると判断した。

時期を明らかにする遺物は出土していない。

### 2 陥 穴（第9図）

陥穴は7基検出し、第9図に5基を図示した。第8図に示したとおり、台地の平坦部に散在して検出されている。L258とL432が近接するが、ほかは離れて不規則な分布状況を示している。近接する2基についても同時に存在していたか否かは不明で、ほかについても個々の時期は明らかにはならない。

個々の陥穴の規模等は第11表に示したとおりである。また、土層についても特徴的な覆土については、特色が看取されるので、図中に挙げた凡例のとおり、スクリーントーンによって図示した。

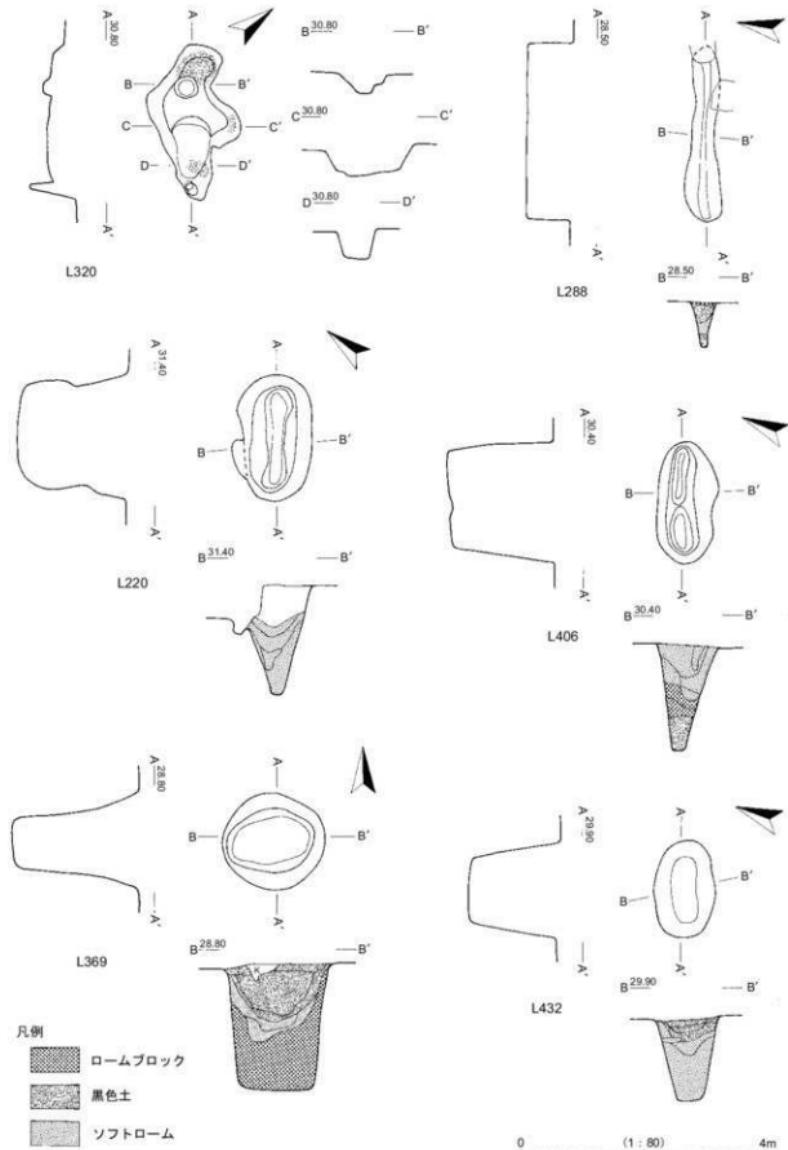
形態的な特徴からは次の3類に分類できるだろう。

L288は、溝のように細長い形態で、底の幅が狭くなり、長軸方向がオーバーハング気味になる。

L406は、楕円形に近い平面形態で、底にピットをもつ。ピットは逆茂木を埋設していた状況が想定できるものでなく、浅く窪んだ状況を呈している。

L220, 369, 432は楕円形に近い平面形で、底が平坦である。

以上のように分類される。



第9図 L区炉穴・陷穴

### 3 遺構外出土遺物

上述したように縄文時代の遺構は炉穴と陥穴で、竪穴住居は全く検出されなかった。本調査区においては、縄文時代をとおして竪穴住居が構築された痕跡は全く確認できない。そのような状況から、後世の遺構覆土から出土している土器、土製品、石器も量的には少ない。ただ、土器は早期から中期にかけて認められる。

#### (1) 縄文土器

##### 第1群 早期の土器（第201図1～20）

第201図1は撚糸文系土器である。1の口唇部は僅かに肥厚し縄文が施文され、胴部にも縄文が施されている。口唇部直下は横方向のナデが行われ、そのナデによって口唇部が明瞭となっている。井草式になる。撚糸文系土器については、口縁部資料としてはこの1点のみが確認できた。

2・3は沈線文系土器である。2は口縁部から下方向に向かう5条の沈線が認められ、口縁部と平行する沈線を区切っている。沈線の幅は狭く、沈線間の施文間隔は狭い。口唇部は角頭状を呈し、器壁は薄く内面は横方向のナデで調整されている。3は2と同一個体と見られる胴部破片である。三戸式と考えられる。

4～20は条痕文系土器である。4は口縁部が開く波状口縁の深鉢になるであろう。胎土に纖維は少なく、石英の細粒が含まれる。内外面とも横方向の擦痕状の調整痕が認められる。

5～9は区画内に沈線が充填され、内面には条痕が施されている。胎土に纖維を含むが、目立つほどではない。色調は5～8は黒褐色を示す部分が多く、同一個体と考えられる。9は沈線の幅が広く深く施され、上述の土器とは別個体と見られる。野島式土器になるであろう。

10～20は条痕のみが施される土器である。10は口縁部から胴部への接点で屈曲する部分になる。口縁部と胴部共に横方向の条痕が認められる。屈曲部の端部に刻みは施されていない。11は波状を呈する深鉢口縁部の破片で、表裏に条痕が認められる。12～16は平口縁で口唇部の上端に刻みを施している。17・18は焼成前に穿った小孔が存在する。以上の土器には胎土中に纖維が多く認められ、断面の色調は黒色となっている。

##### 第2群 前期の土器（第201図21～第202図39）

第201図21～第202図39は前期後葉の諸磯式である。21・22は口唇部直下に爪形文の施文が行われ、21には縦方向の沈線が認められる。また、斜方向の沈線が認められるので、肋骨文に近い構成を探っていたと考えられる。口唇部には刻みが施されている。

23は平縁の深鉢で、爪形文と斜めに刻みが付けられた隆起線が交互に施文されている。24は23と同様に爪形文と隆起線が交互に施されているが、波頂部が丸くなる波状口縁を呈する。

25・26は口縁部と胴部の境になる部位と見られる。口縁部には肋骨文風の沈線が見られ、その下位に横方向位に爪形文が施文されている。

27～29・34～36は幅の広い爪形文が施されている。27は平縁の口縁部破片で、2段に爪形文が認められ、その間に斜め方向の沈線状のやや長めの刻みが付けられている。

30～33・37は口縁部と平行する沈線文が施文されている。37は胴部の破片になり、地文に縄文が施されている。

第202図38は全面に縄文が施された胴部の破片である。39は小さな刻みが付いた浮線文が貼り付けられ

ている。浮線文は破片の上部では曲線的に貼り付けられ、下位では、上と下に横方向に施された浮線文があり、その中に縱方向の浮線文を等間隔に配置している。

### 第3群 中期の土器（第202図40～62）

第202図40～50は阿玉台式である。40は口縁部と平行する隆帶に沿って1列単位の角押文が施され、隆帶と口縁部の間にも1列の波状を描く角押文が施されている。41～45は棒状の区画が作られ、棒に沿つて複列の角押文を施している。40の胎土には雲母が目立っていないが、ほかは長石・石英粒と雲母の混和が多く認められる。

46・48～50は幅広の爪形状の押引文や角押文が施される。

47は厚さのある隆起線が付けられ、その上に繩文が施され、さらに隆起線の上下に沈線文が伴う。胎土に長石粒や雲母が多く含まれている。

51～57・59～62は加曾利E式である。51は内外面とも装飾が施されず、ミガキによって調整されている。口縁部は外反気味で、内面には明瞭な稜が張り出す。胎土に砂粒が含まれるが雲母は認められない。浅鉢と考えられる。

52は全体に寸胴を呈し波状口縁となる深鉢と見られる。全体に繩文が施され、口縁部に横方向に沈線文を施し、そこから縱方向の沈線文を施している。

53～57は深鉢の口縁部である。53は隆起線が渦巻きを描き、54～56も流線とそれに付随する沈線文が区画する。57は口唇部直下に円形の刺突を上下交互に施し、口縁部は繩文の上に緩やかな波状の沈線文を施している。連弧文系土器の口縁かもしれない。

58はキャリバー形の口縁部に斜め方向の沈線文が等間隔で施され、沈線文間が隆起線のように見える。曾利系の土器と考えられる。

59～62は加曾利E式後半の深鉢胴部破片である。59～61は沈線間が丁寧に磨り消されている。

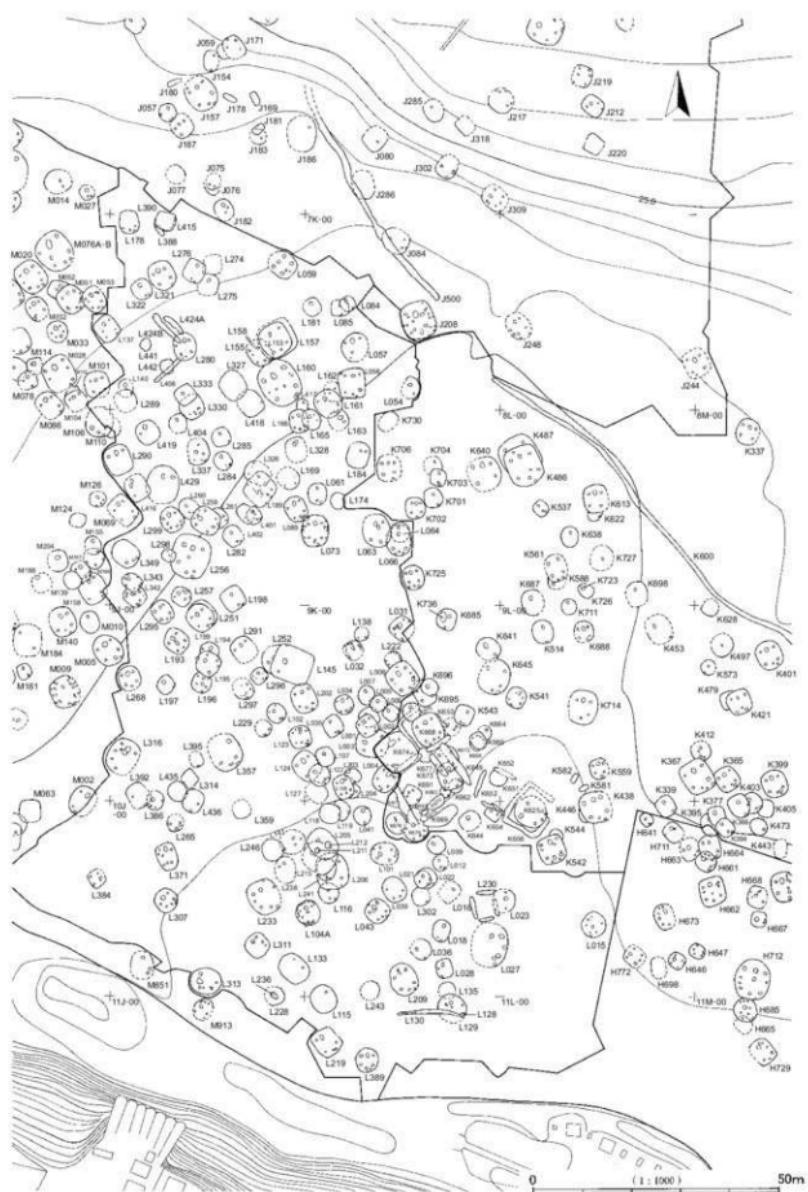
### （2）土製品（第211図、図版77）

繩文時代の土製品は土器片錠が存在する。第211図161～167に提示した7点が出土品の全てになる。後世の遺構から出土しており、数量も僅かである。加曾利E式の胴部破片に調整が加えられ、土器片錠に転用が行われている。

### （3）石 器（第212・213図、図版83）

繩文時代の石器は、全て繩文時代の遺構外から出土している。この時代に比定できるのは、第212図1～6の石鏃、7・8の石鏃未製品、9の搔器、10～15剥片類・楔形石器の剥片石器と、16～22に図示した石斧類である。石斧類は16～21が打製石斧で、22が磨製石斧である。図示した剥片石器類の石材はチャートが10点と多く、次いで黒曜石が5点、流紋岩ほかが2点となっている。それぞれ時期差があると考えられるが、個々について明らかにはならない。

第214図32～第217図78は砾を素材にする石器である。器種では、磨石、敲石、石皿状石器等が認められる。これらの石器は、繩文時代以降にも使用されていた可能性が高く、個々について時期を断定することは難しい。したがって、繩文時代の石器が含まれるかもしれないが、遺構出土の砾石器の大部分は、出土した遺構に帰属する扱いをしている。



第10図 L区弥生時代の遺構分布図

### 第3節 弥生時代（第10図）

弥生時代に属すると考えられる竪穴住居は162軒存在し、その全てが後後に比定される。ここでは、その中の55軒について平面図を掲載した。その抽出率は、全体の34%である。そのほかの遺構では方形周溝墓、土坑、溝状遺構が検出されていて、いずれも後後に比定される。

#### 1 竪穴住居

##### L 001 (第11図) (9K-53・63グリッド)

弥生時代後期の竪穴住居であるL002とL003が重複し、これら3軒の中では最も新しい段階になる。主軸方向を北西方向に向け、胴張隅丸方形の平面形を呈する。長軸長は4.3m、短軸長は4.0mで、壁高は19cm～56cm残存し、遺存状態は比較的良好である。柱穴は4か所に存在し、いずれも70cm以上の深さがある。また、掘り方の途中からその平面形が四角形を呈しているので、角柱が使用されていた可能性が高い。入口と推定される方向に梯子穴と考えられるビットは存在しない。貯蔵穴は南東側の壁下で東隅寄りに設けられている。貯蔵穴の規模は直径26cm、深さ14cmである。炉は中心から北西に寄り、P1とP4の中間に存在する。火床部の位置が南側から北側に移動した痕跡を認める。

床面は中央部が壁際よりも僅かに下がる。平坦であるが、硬化面の範囲は限定できない。

覆土に焼土や炭化粒が多く含まれ、住居北側の床面で焼土の堆積を検出した。焼失住居の可能性が高い。

遺物はP2と貯蔵穴の周辺から、まとまって出土している。6・7は鉢で、床面から出土している。

遺物（第129・222図、図版28・66・93） 土器7点と石製品1点を図示した。第129図1～3は壺の口縁部である。2は折り返し口縁部をもち、頸部の下位に結節文が認められる。3は大きく開き複合口縁を作っている。4・5は壺で口縁部を失う。4の頸部怪と胴部怪の開きは小さく、5は胴部中位の張りが目立つ。6は鉢で全体に内彎して体部の中位に張りをもつ。7の鉢は体部が開きながら外傾し、口縁部で小さく内彎しながら上方に立ち上がる。両者とも口縁部に羽状繩文が施されている。

##### L 005 (第11図) (9K-43・53グリッド)

弥生時代後期の竪穴住居が複雑に重複する9Kの中央付近に位置する。古墳時代前期の方墳と考えられるL050に壊され、弥生時代後期の竪穴住居L002・007を壊している。遺存状態は比較的良好、平面形は円形に近い形態を呈する。主軸方向は北西を向き、長軸長3.4m、短軸長3.3mの規模をもつ。壁高は26cm～32cm残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は存在しない。柱穴と入口の梯子穴は存在せず、貯蔵穴は南東側の壁の下で、やや東に寄った位置に存在する。規模は長径28cm、短径26cm、深さ14cmである。炉は中心から、やや北西に寄った位置に設置され梢円形を呈する。床面から5cm掘り下げて火床が設定され、約5cmの厚さでロームが焼土化している。

床面は入口方向に比定される南東側から住居の中央部、炉の周辺とほぼ全域が踏み固められた状況を呈している。

覆土は大きくは4層に分けられる。1層：ローム粒を多く含む褐色土。2層：ローム粒をやや多く含む暗褐色土。3層：小ロームブロックを含む暗褐色土。4層：ローム粒を多く含む暗褐色土。

遺物は少なく、床面からは実測可能な遺物が出土していない。1は壺の体部で、覆土の上層から出土しており、本住居に伴う可能性は低いと見られる。遺構の遺存状態に比較し、遺物が僅かである点が特徴といえるだろう。

**遺物（第129図）** 土器1点を図示した。1は壺の体部で、口頭部を欠いている。外面は底部付近を除いて赤彩が施され、肩部に結節文が認められる。また、焼成後に穿たれた径6mmの小孔が1か所存在する。

#### L 006 (第11図) (9K-54グリッド)

弥生時代後期の竪穴住居であるL005の南東側に接して位置し、その住居に北西側の一部を壊されている。平面形は円形に近く、長軸長と短軸長は共に3.1mの規模である。壁の遺存状態は良く、壁高は残っているところで16cm～21cmある。壁溝は存在せず、やや傾斜して立ち上がる。柱穴と入口の梯子穴は存在しない。貯蔵穴は東側の壁下に設けられ、規模は長径40cm、短径26cm、深さ27cmである。炉は中心から北西に寄った位置に設けられ、円形を呈している。

床面は壁際を除く広範囲に硬化面が認められ、全体に平坦に構築されている。

覆土は大きく2層に分かれ。床面の上には焼土粒や炭化粒を含む褐色土が堆積し、その上にローム粒を多く含む褐色土が堆積する。

遺物は少なく、図示した遺物も床面から浮いた位置から出土した壺の底部である。

**遺物（第129図）** 土器1点を図示した。第129図1は壺の底部と考えられる。

#### L 028 (第12図、図版4) (10K-86・87グリッド)

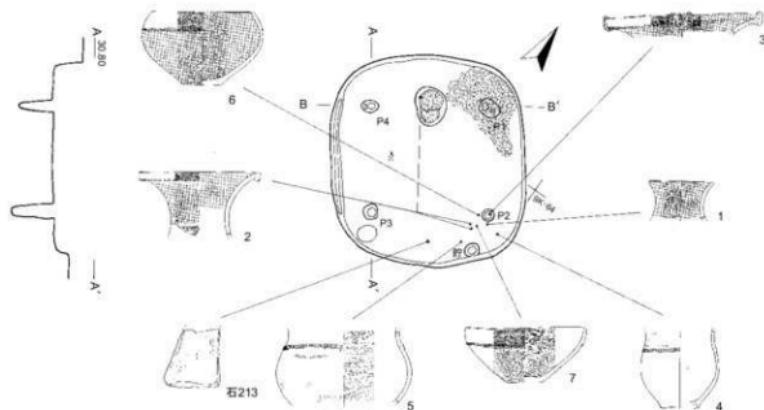
調査区の南東側に位置し、方墳の周溝であるL120に一部を壊されている。ほかの竪穴住居との重複は認められない。主軸方向は、北からやや西側に振れ、平面形は胴張隅丸長方形で、規模は長軸長3.8m、短軸長3.3mである。壁高は38cm～51cmで、壁溝は存在しない。柱穴と入口に伴う梯子穴の存在は認められず、住居の西側から深さ43cmのビットが検出された。このビットの性格は不明である。貯蔵穴は南壁の西側に設けられている。平面形は円形で、規模は長径48cm、短径42cm、深さ21cmである。炉は中心部からやや北に寄った位置に設置されている。梢円形を呈し、火床部の南側に壺の胴部破片が埋設されている。火床面は床面から8cm掘り込んで設定され、5cmの厚さでロームが焼土化している。

住居の南側に後世の擾乱が存在するが、床面は平坦で、中心部には硬化面が観察される。

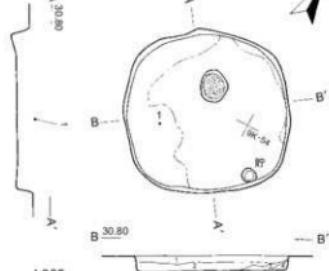
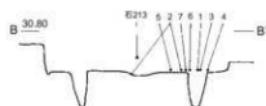
覆土は6層に分けることが可能である。1層：目立った土砂を含まない暗褐色土。厚く堆積する。2層：ローム粒を含む褐色土。3層：炭化粒を含む褐色土。4層：ロームブロックを主体にする褐色土。5層：炭化粒と焼土粒を含む暗褐色土。6層：ローム粒を主体にする褐色土。

遺物は1の壺、6・7の壺が床面から出土し、2の壺底部と5の壺が貯蔵穴から出土している。人工遺物以外では、中央部の床面から焼土が出土し、焼失住居の可能性が高いことを示している。また、南側の床面からやや浮いた位置からは小規模な貝ブロックが検出された。

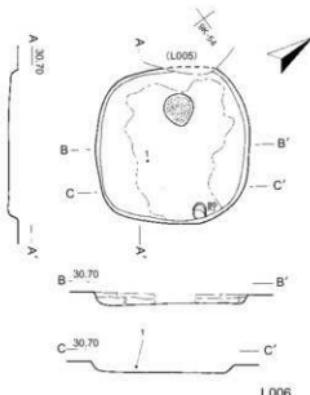
**遺物（第133・225図、図版30・66・97）** 土器7点と鉄製品1点を図示した。第133図1は炉の周辺から破片の状態で出土した壺である。口縁部を欠損する。頭部の下位に沈線が巡り、その上に羽状繩文が施されている。また、肩部にはUの字状の沈線区画の中に繩文が施文される。2は壺の底部と考えられる。3は鉢で、外面に粘土紐の接合痕を残している。覆土の上層からの出土である。4～7は壺である。4・5は胴部から緩やかに口縁部に移行し、口唇部に押捺を施している。5は貯蔵穴からの出土である。6は大きく張った胴部と外反する口頭部との境が明晰となる。7は口縁部を欠く。頭部と胴部の境に段を設け、その上に押捺が施される。床面からの出土である。



L001



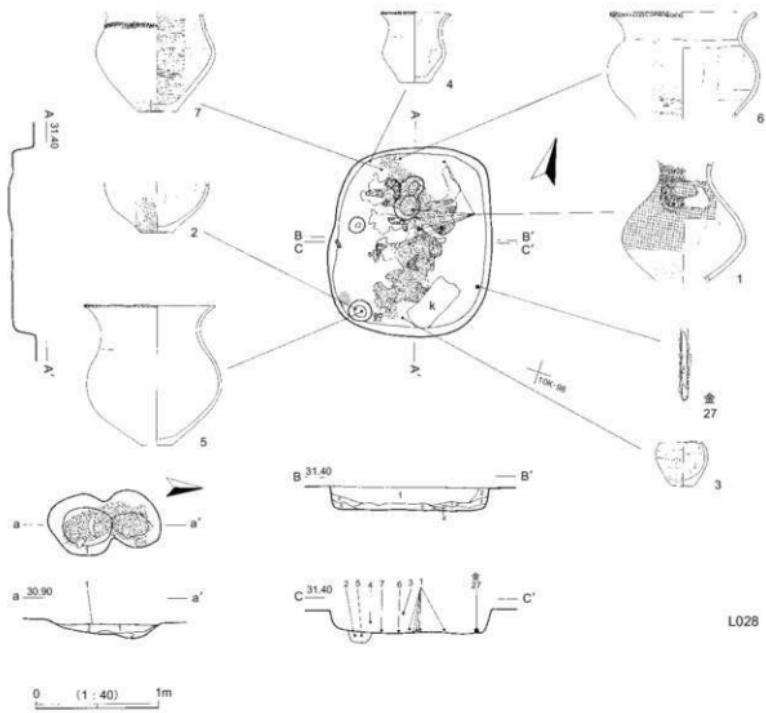
L005



L006

0 (1 : 100) 5m

第11図 L001・005・006住居



第12図 L 028・034住居

#### L 034 (第12図、図版5) (9K-51・52グリッド)

弥生時代後期の遺構密度が高い地区で検出されたが、ほかの遺構とは重複せず、単独で位置する。南東側にはL001が、そして南側にはL035が存在する。主軸方向は北からやや西に傾く。平面形態は円形に近く、長軸長4.0m、短軸長3.7mの規模をもつ。壁高は21cm～36cm残存し、壁下に壁溝は存在せず、僅かに傾斜して立ち上がる。柱穴は4か所に配置される。入口に伴う梯子の基部を埋めていた梯子穴は、南壁から20cm入った位置に存在する。貯蔵穴は梯子穴の東側で、壁の直下に設けられ、長径50cm、短径42cm、深さ25cmの規模をもつ。

炉は中心から北に寄った位置で、P1とP4の中間に設置されている。床面から8cm掘り込んで火床面が形成され、被熱によって焼土化して硬化した層が5cmの厚さに認められる。

床面は全体に硬く踏み込まれた状態が観察され、壁際を除いて硬化面の拡がりが観察される。

遺物量は少ない。1は壺の口縁部の破片で覆土から出土している。4・5は甕で、この2点も覆土からの出土である。2は壺の体部で、住居の北西の床面から出土している。3は甕で、床面から横倒しの状態で出土している。石製品は砥石が1点で、覆土中からの出土である。

遺物（第134・222図、図版31・66・67・93）土器5点と砥石1点を図示した。第134図1は円形浮文の貼り付けられた壺の口縁部で、折り返し口縁をなす。2は口頭部を欠いた壺である。遺存部分には装飾が認められない。3～5は口縁部が大きく開く甕である。3・4は口唇部に押捺が施され、頸部には輪積痕跡を残している。頸部と胴部の境には段がつく形になるが、そこに押捺は施されていない。5は口縁部が折り返し口縁で、口唇部に押捺が施され、頸部に輪積痕跡をとどめない。胴部との境には連続して押捺が加えられている。第222図218は砥石で、表裏に使用痕が認められる。

#### L 035 (第13図、図版5) (9K-51・61グリッド)

弥生時代後期の遺構密度が高い地区に存在するが、ほかの遺構とは重複せず、単独で検出されている。北側にはL034が近接し、東側にL001が所在する。平面形態は胴張隅丸方形で、主軸方向は北からやや西に振れる。規模は長軸長4.4m、短軸長4.0mで、壁高は42cm～48cm残存する。壁溝は存在せず、壁は僅かに傾斜して立ち上がる。柱穴は存在しない。入口に伴う梯子の基部を埋めていた梯子穴は、南壁から65cm入った位置に存在する。楕円形の平面形態で、掘り方の断面から、梯子が傾斜して埋設されていたことが明瞭である。貯蔵穴は梯子穴の東側で、壁から僅かに離れて設けられている。長径46cm、短径44cm、深さ11cmの規模である。

炉は中心から北西に寄った位置に設けられている。床面から僅かに掘り込んで火床面を形成し、被熱によって焼土化して硬化した層が5cmの厚さに認められる。

床面は平坦であるが、硬化面の形成については顕著ではなく、その範囲を括ることができない。

覆土は6層に分けることが可能である。1層：ロームブロックを多く含み、土器片を多数包含する暗褐色土。2層：ロームブロックを多く含む褐色土。3層：焼土・灰を少量含む暗褐色土。4層：ローム粒・ロームブロックと灰を多く含む暗褐色土。5層：焼土・炭化粒を含む暗褐色土。6層：漆黒の細粒を含む暗褐色土。

床面のほぼ全域から焼土が検出されている。焼失住居の可能性が高い。

床面から比較的の遺存状態の良い土器が出土している。1は壺で、住居の中央部に破片が散在して出土している。炉の北側からは3・5・6の甕が床面に伏せられた状態で検出された。この3点はいずれも底部

を欠いている。2・4の甕と7の鉢は貯蔵穴の北側から、床面についた状態で出土している。また、人工遺物以外では粘土の塊が床面から検出されている。

遺物（第134・135・225図、図版31・67・97） 土器7点と金属製品1点を図示した。第134図1の壺は胴部の中位が大きく膨らみ、頸部から緩やかに立ち上がって口縁部が開く。外面に文様は施されず、赤彩も行われていない。2の甕は口径が胴部最大径よりも大きく、頸部と胴部の境に段を設け、そこに指頭による押捺を施している。第135図4もほぼ同様で、口唇部にも指頭による押捺が認められる。3の甕は頸部に僅かに輪積痕を残し、口唇部と頸部と胴部の境に、棒状工具によると考えられる押捺が施されている。6の甕の頸部下位には結節文が施されて、段状の境は存在しない。7は体部が直線的に外傾して開く鉢である。折り返し口縁の口縁部には網目状捺糸文が施されている。

#### L 0 3 6 (第13図、図版5) (10K-75・76グリッド)

調査区の南東部に位置し、弥生時代後期の竪穴住居L018・028が近接し、古墳時代前期の竪穴住居L037に北西側を壊されている。平面形は円形に近いと推測され、規模は長軸長4.2m強、短軸長4.0mになる。壁高は最大で29cm残存し、壁溝は存在しない。柱穴と入口の梯子基部埋設用の梯子穴は存在しない。貯蔵穴は住居の南側の壁下に設置され、長径46cm、短径34cm、深さ18cmである。炉は中心からやや西に寄った位置に設置されている。床面から8cm掘り込まれ、被熱による赤化は4cmの厚さに認められる。また、火床部の南東側には、甕の胴部破片が埋設されていた。

床面は壁際を除いて硬化面が拡がり、平坦な状態を示している。

遺物の数量は少ないが、復元率の高い土器3点が床面から出土している。1は壺で、炉と貯蔵穴の中間付近の床面で破片の状態で出土し、2の甕と3の鉢は炉に近接した位置で、同じく床面に貼り付く状態で出土している。

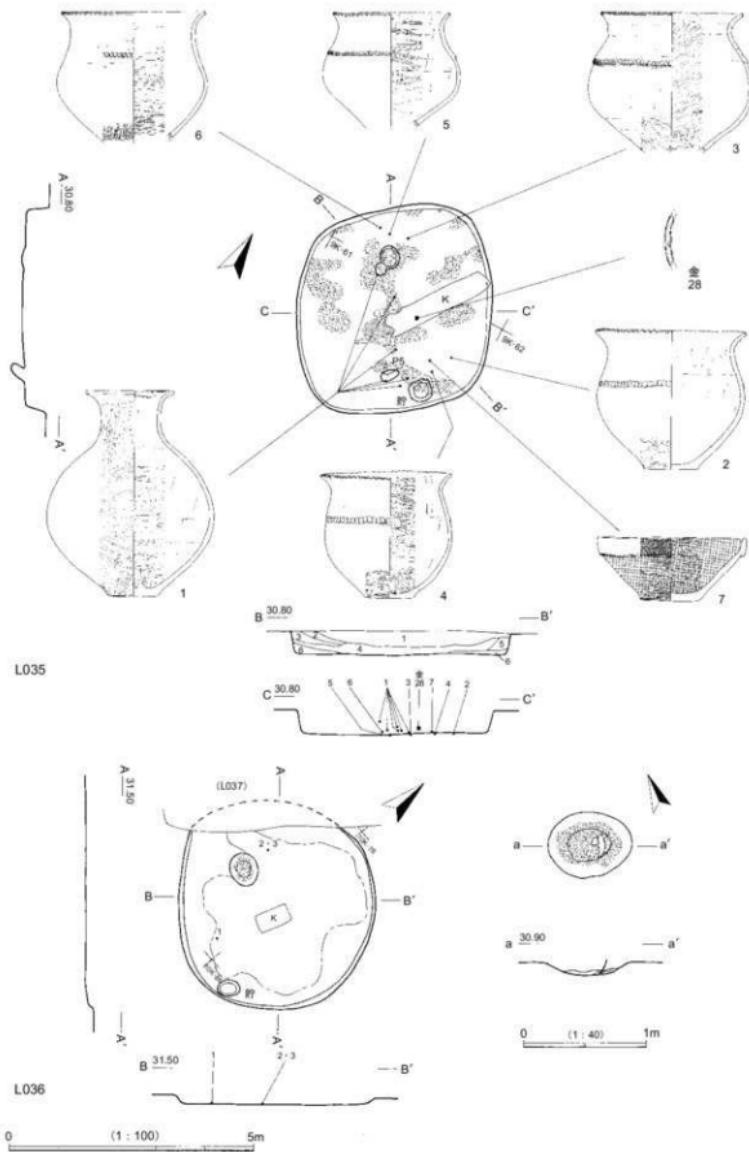
遺物（第135図、図版31・67） 土器3点を図示した。第135図1の壺は、胴部の中位が大きく膨らみ、肩部から頸部そして口縁部と緩やかに立ち上がって開く。口縁部は折り返し口縁で、頸部の中位よりも下位と肩部下位それぞれに、上下2本の沈線による区画が行われ、その中に羽状繩文が施文される。胴部の中位には沈線によって鋸歯文が描かれ、繩文が施文される。2の甕は胴部が疊状に膨らみ頸部に輪積装飾を施す。また、頸部と胴部の境の段には円形刺突文が巡る。口縁部を欠いている。3は体部が僅かに内湾しながら立ち上がり、口縁部は素縁をなす。内外面にヘラミガキが行われ、赤彩が施される。

#### L 0 4 1 (第14図、図版6) (10K-02・03グリッド)

南東側を古墳時代前期の竪穴住居であるL045に壊されるが、本住居の掘り込みが深かったため、大きな破壊は免れていた。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸長3.8m、短軸長3.5mで、壁高は27cm～47cm残存する。壁溝は存在せず、壁はやや傾斜して立ち上がる。柱穴と梯子穴は存在しない。北東側の壁下に深さ17cmのピットが検出されたが、性格は不明である。貯蔵穴ではないと判断したい。貯蔵穴は南側の壁の下に存在するピットが該当する。長径52cm、短径46cm、深さ36cmの規模である。炉は中心からやや北に寄った位置に設置されている。床面から10cm掘り込んで火床面が形成され、被熱による赤化が5cmの厚さに認められる。

床面は壁際を除いて踏みしめられた状態が観察され、特に住居の東側で顕著になっている。

覆土は3層に分けられた。1層：ローム粒を多く含む褐色土。2層：ローム粒を含む褐色土。3層：焼土・灰を多く含む暗褐色土。本住居の床面中央部からは、多量の焼土と炭化材が検出されている。焼失住



第13図 L 035・036住居

居と考えられ、覆土の1層と2層は人為的に埋め戻した土である可能性が高い。

遺物は少なく、床面から出土した土器で実測可能となった個体は皆無である。1の壺は覆土の下層から出土した破片と、上層から出土した破片が接合している。2は覆土下層の破片が接合している壺である。

3・4は覆土の上層から出土しており、本住居に伴う可能性は低いと考えられる。

遺物（第136図、図版32・67） 土器5点を図示した。第136図1の壺は、肩部から頸部への移行部は明瞭な屈曲をもっている。その頸部の屈曲部と胴部上半下部に、結節文区画によって区画された羽状縞文帯が認められる。2の壺は胴部が大きく張り、頸部から口縁部にかけて緩やかに外反する。口唇部及び頸部と胴部の境の段に押捺が施される。3・4は古墳時代前期に比定可能と考えられる。5は壺のミニチュアになるであろう。

#### L 058 (第14図、図版7) <8K-82・92グリッド>

調査区の北東部に位置し、弥生時代後期の竪穴住居であるL162と重複する。このほかの遺構とは新旧関係がなく、遺存状態は比較的良好である。平面形は胴張圓丸形を呈し、主軸方向は北から僅かに西に振れる。長軸長6.0m、短軸長5.6mで、壁高は8cm～30cm残存する。壁溝は存在せず、壁はやや傾斜して立ち上がる。柱穴は4か所に配置される。入口に伴う梯子の基部を埋設した梯子穴は、南壁から75cm内側に入った位置に存在する。また、貯蔵穴は南壁の東側寄りの下に設置されており、長径46cm、短径26cm、深さ7cmの規模をもつ。P4と北西壁の間に検出されたピットの性格は不明である。炉は中心から北に寄った位置でP1とP4の中間に設置されている。平面形は円形で、床面から僅かに掘り込んで火床面が形成されている。

床面は平坦に構築され、4か所の柱穴を結んだ線の内側では硬化面の拡がりが明瞭に捉えられる。

覆土は大きく2層に分層される。1層：小ロームブロックを多く含む暗褐色土。2層：ローム粒を多く含み、焼土粒を少量含む暗褐色土。

遺物は破片が僅かに出土したにとどまる。

遺物（第142・222図、図版68・93） 拓影図2点と石製品1点を図示した。第142図1の壺は頸部に結節文が施され、2の鉢は口縁部が沈線で区画され、羽状縞文が施されている。

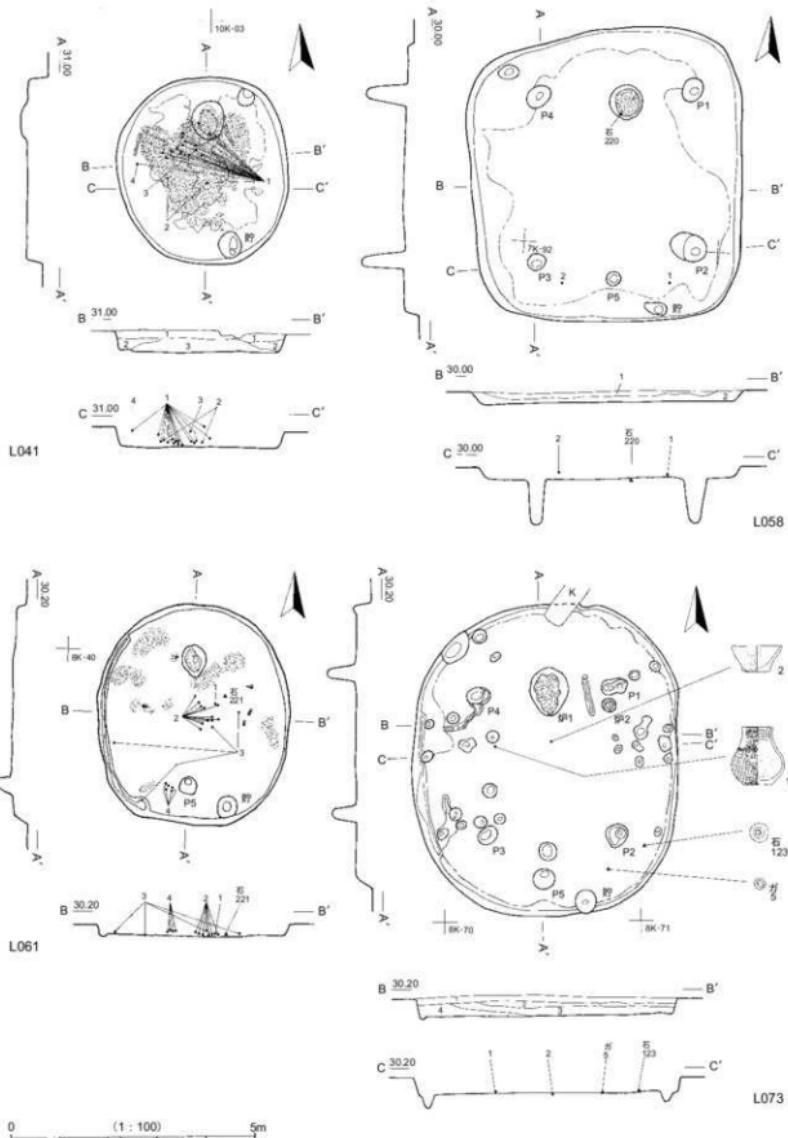
#### L 061 (第14図、図版8) <8K-30・40グリッド>

周辺に弥生時代後期の竪穴住居であるL089・174が存在するが、後世の遺構も含め重複関係が認められず、単独で検出されている。平面形は楕円形を呈し、主軸方向は北から僅かに西に傾く。長軸長の規模は4.5m、短軸長は3.9mである。壁高は19cm～30cm残存する。壁溝は西壁の下の一部にのみ存在し、壁はやや傾斜して立ち上がっている。柱穴は存在しない。梯子穴は南壁から中央側に60cm入った位置に設けられている。また、南東側の壁下に接して貯蔵穴が位置する。長径42cm、短径40cm、深さ30cmの規模である。炉は中心から北に寄った位置に設置されている。床面から10cm掘り込んで火床面が形成され、5cmの厚さでロームが赤化して硬化している。

床面は中央部が壁際よりも僅かに低くなる状況が認められる。また、硬化面の拡がりについては明瞭な範囲を括ることができない。

床面の上に焼土がブロック状に検出され、その上にローム粒を多く含む暗褐色土が堆積し、さらにその上層には、ローム粒・ロームブロックを多く含む暗褐色土が堆積する。

遺物は少なく、全域に散在して出土している。図示した土器は全て床面に密着した状態で出土している



第14図 L041・058・061・073住居

が、遺存状態が良かった個体は1の壺のみである。また、焼土ブロックと炭化材が検出されており、焼失住居である可能性が高い。

**遺物**（第142・222図、図版35・68・93） 土器4点と石製品1点を図示した。第142図1の壺は胴部が大きく張り、頸部から口縁部にかけて緩やかに外反して開く。口縁部は折り返し口縁をなし、口唇部に押捺を施している。また、頸部と胴部の境の段にも押捺が施される。2の壺は口頭部を欠損する。頸部と胴部の境には円形の刺突文が施されている。3は高環の脚部と考えられる。脚部の下端部は折り返され、結節文が施文されている。4は無文の脚部である。第222図221は床面から出土した軽石である。

#### L 0 7 3 （第14図、図版9）（8K-50・60グリッド）

古墳時代前期の竪穴住居であるL072が入れ子状に重複しているが、ほかの遺構とは重複しないため、遺存状態は比較的良好である。平面形は整った楕円形で、主軸方向はほぼ北を向く。長軸長6.3m、短軸長5.4mで、壁高は最大で37cm残存する。壁溝は西壁の壁下に部分的に存在し、壁は僅かに傾斜して立ち上がる。柱穴は4か所に配置され、梯子穴は南壁から50cm中心側に入った位置に存在する。その梯子穴と考えられるピットの直ぐ北側にも小ピットの存在が認められる。ほかにP1とP2を結んだ線から東側と、P3とP4を結んだ線から西側に、小ピットが不規則に検出されている。これらの性格は明らかでない。貯蔵穴は南壁のやや東寄りに設置され、長径48cm、短径40cm、深さ31cmの規模をもつ。炉は中心から北に寄った位置で、P1とP4の中間に設置されている。床面から8cm掘り込んで火床面が形成され、約10cmの厚さに被熱による赤化が認められる。

床面は平坦で、壁際を除いてほぼ全域に硬化面をなしている。

覆土は4層に分けて提示している。1層はL072の覆土である。本住居の覆土は2層～4層である。2層：ロームブロックを主体にする暗褐色土。3層：ローム粒を多く含む暗褐色土。4層：ロームブロックとローム粒を少量含む暗褐色土。

遺物量は少ない。図示した土器では2点が床面から出土し、ほかに玉類2点が床面から出土している。

**遺物**（第145・210・219図、巻頭図版6、図版37・68・90） 土器3点、ガラス玉1点、丸玉1点を図示した。第145図1の壺は口頸部に網目状撚糸文が施文され、胴部との境界に段を設けて押捺を施している。2は無文の鉢で、体部は直線的に外傾して立ち上がる。3は高環の脚部と考えられる。第210図5は貯蔵穴の北側から出土したガラス玉である。第219図123は埋れ木を素材にした丸玉である。

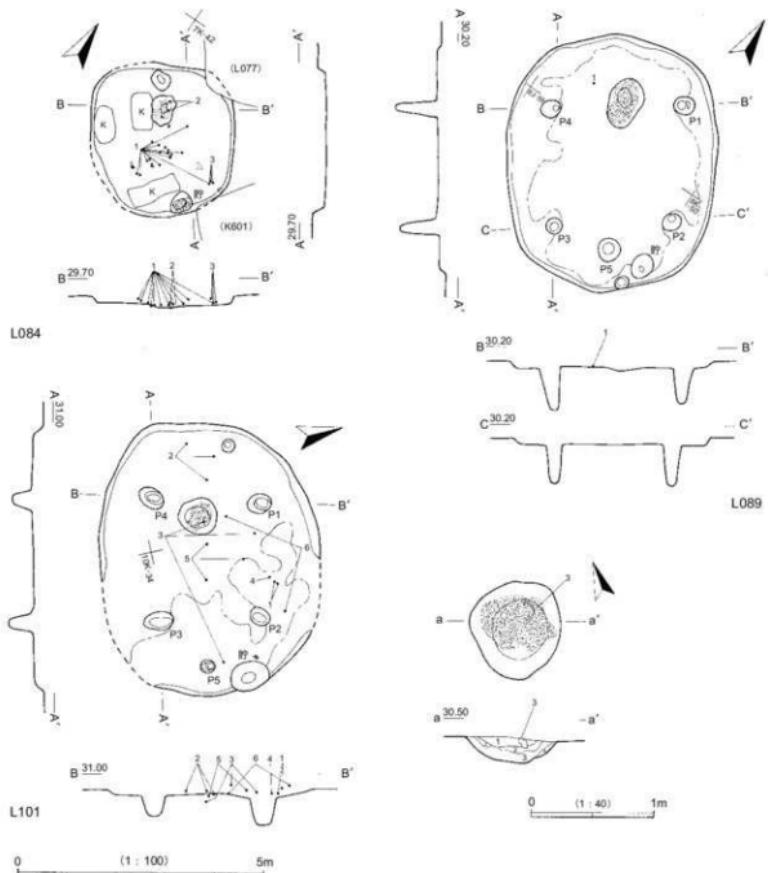
#### L 0 8 4 （第15図、図版10）（7K-41・42グリッド）

調査区の北東部に位置し、北側を古墳時代前期の竪穴住居であるL077に壊され、西側で弥生時代後期の竪穴住居であるL085と重複する。平面形は不整な円形と見られ、主軸方向は北から西に傾く。長軸長は3.1m、短軸長は3.0m前後である。壁高は最大で30cm残存する。壁溝は存在せず、壁は傾斜して立ち上がっている。柱穴は存在しない。また、梯子穴はそれが設けられていたと考えられる位置に搅乱が入るため、存在の有無が不明な状況である。貯蔵穴は南東側の壁の直下に位置する。長径43cm、短径37cmで深さ10cmである。炉は中心から北西に寄った位置に設けられる。床面から8cm掘り込んで火床面が形成されている。炉の北側からピットが検出されたが、性格は明らかでない。

床面は3か所に後世の搅乱が入る。硬化面の形成は顕著ではない。

覆土にはローム粒・ロームブロックと焼土粒や炭化粒が含まれる。

遺物は少ない。1の壺は炉の南側から破片の状態で出土し、2の壺の口縁部は炉の中から出土している。



第15図 L084・089・101住居

また、貯蔵穴付近から出土している3は甕である。

遺物（第147図、図版39・69）土器4点を図示した。第147図1の壺は胴部に球状の張りをもち、頸部から緩やかに外反して、そのまま開いて折り返し口縁をなす。口縁部には繩文が施され、下端部に押捺が行われている。頸部の下位から肩部にかけて結節文区画の中に羽状繩文が施文される。同じように、胴部上半下位にも同様の施文が行われている。さらに羽状繩文帯の中央には円形の赤彩が横方向に並ぶ。2の壺の頸部下位にも結節文の施文が認められる。この壺の口縁部は炉の中から出土しており、器台として転用されていた可能性がある。3の甕は口唇部に押捺が加えられ、頸部と胴部の境にも棒状工具による押捺

が施されている。4は実用品ではないと考えられる。

#### L 0 8 9 (第15図、図版10) <8J-59, 8K-50グリッド>

単独で検出され、ほかの遺構との重複はない。南東側にL073が近接し、北東側にL061が存在する。平面形は楕円形で、主軸方向は北から西に傾く。規模は長軸長5.2m、短軸長4.3mで、壁高は最大でも13cmで、重複関係がないことを考慮すると掘り込みが浅いといえる。壁溝は存在しない。柱穴は4か所に配置され、梯子穴は南東側の壁から60cm内側に入った位置に存在する。貯蔵穴は梯子穴の東側に設置され、規模は長径は47cm、短径45cm、深さ30cmである。ほかに梯子穴の南側に壁に接してピットが存在するが、性格は不明である。炉は中心から北西に寄った位置でP1とP4の中間にある。火床部は床面から5cm~10cm掘り込んで形成されている。

床面は平坦で、硬化面は4か所の柱穴の内側を主体に、梯子穴の南側と炉の北側にまで確認できる。

遺物は僅かに出土している。1は床面から出土した土器で唯一提示可能となった鉢で、炉の西側から出土した。

遺物(第147図) 土器1点を図示した。第147図1は破片で出土した鉢で、遺存状態は不良である。口縁部に羽状縦文が施されている。中央部に円形の朱文が施されている。

#### L 1 0 1 (第15図、図版11) <10K-23・24グリッド>

K区との境に接する位置に検出されている。古墳時代前期の竪穴住居であるL103に南側を壊されているが、このほかに重複する遺構は存在しない。平面形はやや不整な楕円形で、北から大きく西に振れています。長軸長5.1m、短軸長4.5mで、壁高は最大で19cm残存する。壁溝は存在せず、壁は傾斜して立ち上がりっている。柱穴は4か所に配置され、掘り方の平面形は楕円形を呈する。梯子穴は東側に存在する。貯蔵穴は東側の壁下に接して設けられ、長径80cm、短径58cm、深さ22cmの規模をもつ。炉は中心から西に寄った位置に設置されている。火床部は床面から8cm掘り込んで形成され、深さ5cm前後まで赤化して硬化した状態が見られる。また、火床部の東側に甕の破片を埋設している。炉の北西側で壁に近いに位置に小ピットが穿たれているが、その性格は明らかでない。

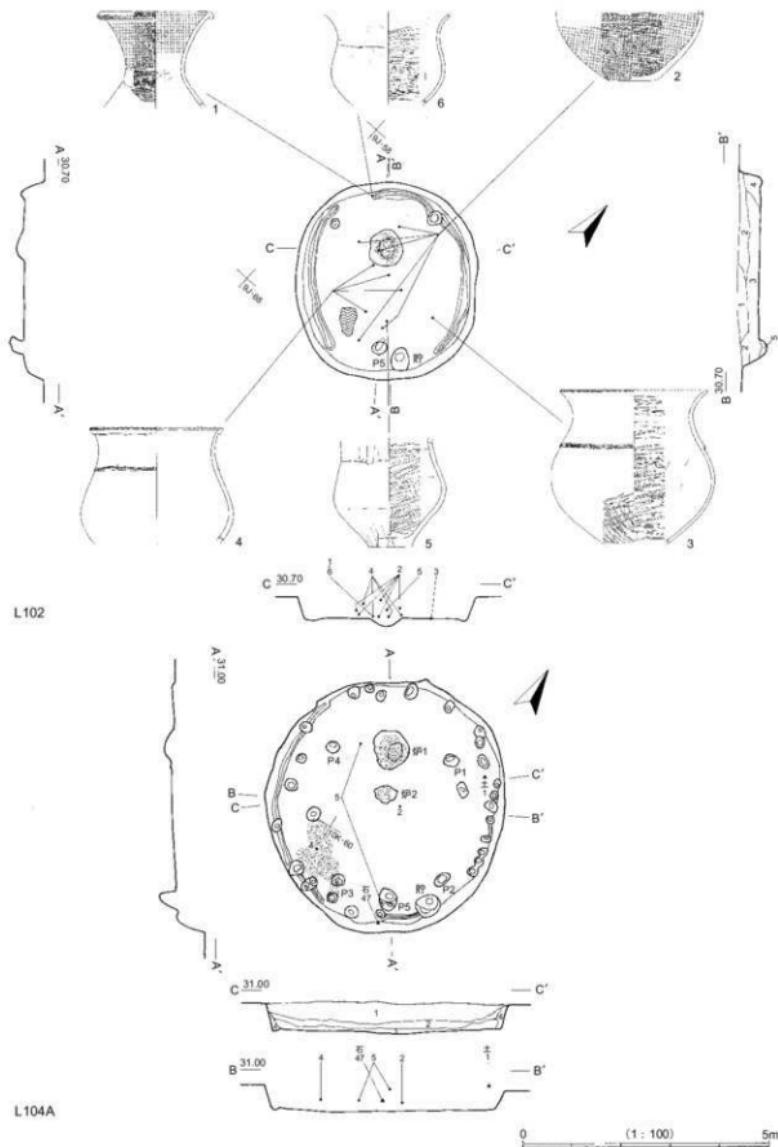
床面は東側を除いて硬化面が認められる。

遺物は少ない。実測土器は北側から散在して出土し、集中する状況は認められない。また、遺存状態が良好に保たれている個体は存在しない。

遺物(第148図、図版39・69) 土器6点を図示した。第148図1は壺の頸部中位部分である。上下を沈線で画し、その中に縦文と網目状撚糸文を施している。2は輪積装飾を7段施している甕である。3の甕はハケメによって外面胴部が調整されている。4・5は鉢である。両者とも口縁部は沈線によって画され、4の口縁部には網目状撚糸文が施され、5には羽状縦文の施文を行っている。6は高環である。口縁部上端は折り返し口縁をなしその下端に押捺が加えられ、口縁部下端には沈線が巡る。幅広の口縁部には羽状縦文が施されている。

#### L 1 0 2 (第16図) <9J-58・68グリッド>

ほかの遺構とは重複がなく、単独で位置する。ただ、周辺には弥生時代後期の竪穴住居であるL123・202・229等が存在する。平面形は整った楕円形で、主軸方向は北西方向に傾く。長軸長4.0m、短軸長3.7mで、壁高は28cm~47cm残存する。壁溝は北西壁の壁下と南側の壁下を除く部分に存在する。壁溝は壁の立ち上がりからやや間隔をおいて設けられ、全体に浅い。また、壁は僅かに傾斜して立ち上がる。柱穴は



第16図 L102・104A住居

存在しないと見られる。住居の北側隅の壁溝中と、それと対向方向の西側隅からやや内側に入った位置に、それぞれ小ビットが検出された。しかし、深さかいずれも10cm程度と浅く、南側には同様のビットが存在しないため、その2か所は柱穴とはならないと判断した。梯子穴は南東壁から50cm中心側に入った位置に存在する。断面図に示したように、梯子の基部が外傾して埋設されていた状況が明らかである。貯蔵穴は梯子穴の東側で壁に接するように設置され、長径49cm、短径35cm、深さ24cmの規模をもつ。炉は中心から北西に寄った位置に設置されている。床面から7cm掘り込んで火床面が形成され、約5cmの厚さに被熱による赤化が認められる。

床面は平坦に構築されているが、硬化面の範囲については不明瞭である。

覆土は大きく4層に分けられる。1層：ローム粒を多く含む暗褐色土。2層：ローム粒を少量含む暗褐色土。3層：黒色土を多く含み、炭化粒が混じる暗褐色土。4層：黒色土を多く含み、ローム粒を少量含む暗褐色土。5層：貯蔵穴の堆積土。ローム粒を多く含む暗褐色土。

遺物量は少ない。住居の北西際で1の壺口縁部と6の甕が床面から出土している。3の甕は遺存状態が比較的良好、炉の東側の床面から出土した。また、入口の梯子穴の西側から貝ブロックが検出されている。

遺物（第148・149図、図版39・40・69） 土器6点を図示した。第148図1の壺は頭部に沈線の区画が設けられ、その中に羽状繩文が施されている。2は口縁部を欠いており、器種が明確でない。胴部に網目状撚糸文帯が認められる。第149図3は大きく張った胴部をもつ甕で、頭部との境の段には工具による押捺が施される。また、口唇部にも押捺が加えられているが、これは指頭によるものと見られる。4の甕の頭部と胴部の境には円形の刺突が巡る。5の甕の底部には焼成後に穿たれた孔が存在する。6の口縁部は大きく開くものと推測される。

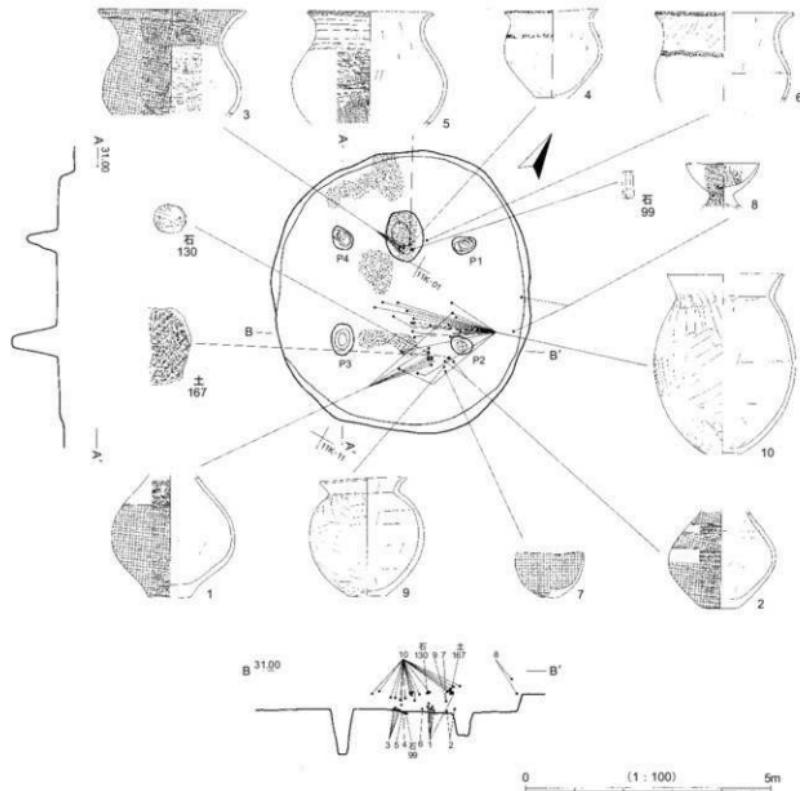
#### L104A（第16図、図版11）（10K-50・60グリッド）

弥生時代後期から古墳時代中期にかけて、竪穴住居の構築が繰り返して行われた地区に検出された。東側を古墳時代前期の竪穴住居L214に壊され、北側ではL047が重複している。平面形は楕円形で、主軸方向は北から僅かに西に振れる。長軸長5.1m、短軸長4.9mで、壁高は2cm～58cm残存する。壁溝は西壁の壁下に認められ、全体に壁下に沿って小ビットが存在する。壁は僅かに傾斜して立ち上がる。柱穴は4か所に配置され、梯子穴は南壁から60cm中心側に入った位置に存在する。貯蔵穴は南東壁の下に接して設置され、長径50cm、短径48cm、深さ27cmの規模をもつ。炉は2か所に認められる。まず規模の大きい炉は、中心から北西に寄った位置でP1とP4の中間に設置されている。床面から5cm掘り込んで火床面が形成され、約8cmの厚さに被熱による赤化が認められる。もう1基は、上述の炉の南側で住居のほぼ中心に位置している。床面から3cm程度掘り込んで火床面が形成される。

床面は全体に壁際から中央に向かって僅かに低くなる傾向が認められる。

覆土は4層に分けて図示している。1層：ローム粒を多く含み炭化粒が少量認められる暗褐色土。2層：炭化粒と焼土粒を多く含む暗褐色土。3層：ローム粒・ロームブロックを多く含む暗褐色土。4層：ロームブロックを含む褐色土。

遺物量は少ない。本竪穴住居の帰属時期は弥生時代後期と考えられるが、図示した土器では1～4が古墳時代前期に比定可能である。また、いずれも覆土の1層から出土しており、本住居に直接伴う遺物ではないと見られる。覆土の形成途中で投棄されたか、入れ子状態で古墳時代前期の竪穴住居L104Bが存在していた可能性が考えられる。



第17図 L115住居

遺物（第149・203・215図、図版78・86） 土器5点、土製品1点、石器1点を図示した。第149図1・2は小型の壺である。1の口縁部は僅かに内彎気味に立ち上がる。3は鉢で4は高環の脚部である。5の甌は頭部に輪状装飾が施され、弥生時代後期と考えられる。覆土中からの出土である。

#### L115 (第17図) (11K-00・01グリッド)

調査区の南側に位置し、古墳時代前期の竪穴住居であるL237と古墳時代中期の竪穴住居L227に壊されている。平面形は梢円形で、主軸方向は北から西に傾く。長軸長5.7m、短軸長5.3mで、壁高は最大で36cm残存する。壁溝は存在せず、壁はほぼ垂直に立ち上がる。柱穴は4か所に配置され、P3を除くほかの3か所からは柱痕跡が確認されている。梯子穴と貯蔵穴は存在しない。炉は中心から北西に寄った位置で、P1とP4の中間に設置されている。床面から6cm掘り込んで火床面が形成され、約7cmの厚さに被熱による赤化が認められる。

床面は平坦であるが、硬化面の範囲を明瞭にすることはできない。

遺物量は比較的多い。1～6までの土器は本住居に伴う、7～10の土器は古墳時代中期の竪穴住居L227に伴うと判断される。図示した土器では6点が床面から出土している。本住居に伴う土器は全て床面から出土しており、1・2の壺がP2付近から出土し、3の壺と4・5の甕、石製品99の管玉が炉の中から出土している。このように遺存状態の良い土器が、大きく2か所に分かれて出土した状況が捉えられた。このほかに土製品167は縄文時代の土錐なので混入と考えられ、有孔円板である石製品130はL227に伴うと見られる。また、炉の南側及びP2とP3の中間付近の床面から焼土ブロックが検出されている。

遺物（第151・152・203・211・218・219図、巻頭図版5・6、図版41・42・69・77・78・89・90） 土器10点、土製品2点、石製品2点を図示した。第151図1の壺は肩部に羽状縄文が施され、その下位は沈線で区画されている。2の壺は結節文が肩部と胴部に認められる。3は広口壺である。外面全体と内面の口頭部に赤彩が施される。第151図4～第152図6は甕である。5は頸部に輪幅装飾が施され、頸部と胴部の境に刺突や押捺は施されていない。7～10はL227に伴う土器と考えられる。10の甕は胴部が卵球状にやや長くなっている。第218図99の管玉は炉から出土しており、本住居に伴うと考えられる。

### L 1 2 3 (第18・100図、図版12) (9J-69, 9K-60グリッド)

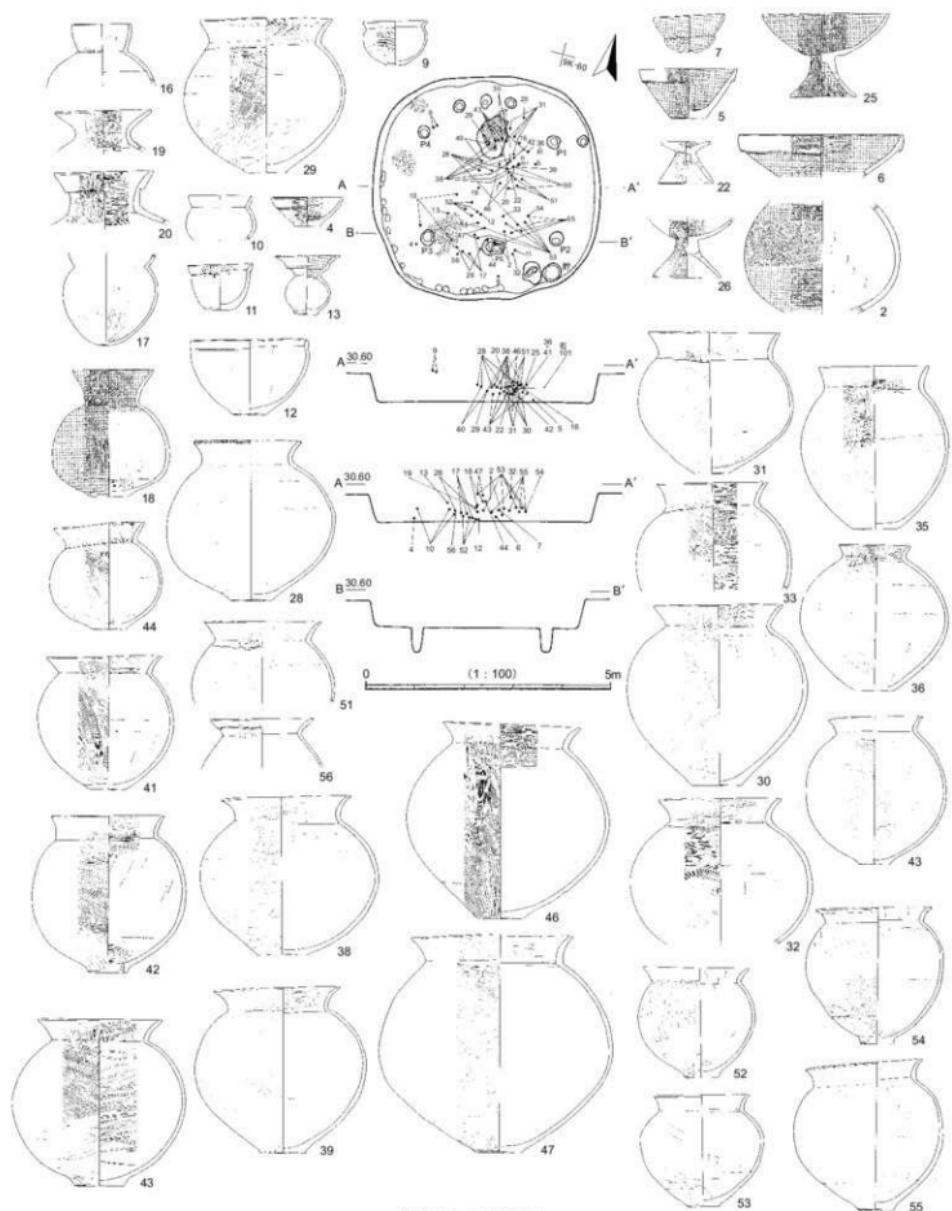
弥生時代後期の竪穴住居が近接して分布する地区に位置する。弥生時代の遺構とは重複をもたないが、平面形が捉えきれない古墳時代前期のL121が重複する。平面形は胴張隅丸方形で、主軸方向は北からやや西に振れる。長軸長は4.7m、短軸長4.5mで、壁高は54cm～59cm残存する。壁溝は存在せず、南壁から南西壁の壁下に小ピットが伴う、壁はほぼ垂直に立ち上がる。柱穴は4か所検出し、各柱穴の土層断面で柱痕跡が確認された。したがって、住居の廃絶時には柱の基部は柱穴に埋設されていたと考えられる。梯子穴は南壁から90cm住居内に入った位置に検出され、掘り方の平面形は長方形を示す。南東壁下に接するよう掘られている円形のピットが貯蔵穴になる。長径40cm、短径34cm、深さ10cmである。貯蔵穴の西側に隣接して深さ36cmのピットが存在するが、この性格は明らかではない。炉は中心からやや北西に寄った位置で、P1とP4の中間に設置されている。床面から8cm掘り込んで火床面が形成され、約10cmの厚さに被熱による赤化が認められる。炉の北側に3基の小ピットが弧状に配置された状況で検出されたが、性格については明らかでない。

床面は全域に平坦な状態で、硬化面の範囲は特定されない。

遺物は多量に出土した。ただ、床面から出土した遺物は僅かであり、大部分が覆土中に一括廃棄された状態で出土している。床面から出土した土器は、4・5の鉢等である。覆土中の土器は古墳時代前期に比定され、ある程度覆土の堆積が進行し、窪地状態を呈していた時点で、周辺から投棄されたと推定される。また、壺や鉢のほか甕が多いのが特徴である。このように弥生時代後期の竪穴住居の覆土中に、古墳時代前期の遺物が多量に廃棄される例は、他の調査区でも見られる現象である。

遺物（第153～158・218図、巻頭図版5、図版42～45・70・89） 土器58点等を図示した。第153図1壺の口縁部から第154図6の鉢までが本住居に伴う可能性が高い。12の鉢は床面から出土しているが、古墳時代前期の器種と考えられる。1の壺は口縁部に網目状撚糸文が施されている。2の壺は胴部中位に文様帯が存在する。4の鉢の口縁部は無文で、5と6には羽状縄文が施されている。

第154図7～第158図55までは古墳時代前期の遺物になるであろう。器種では壺、壠、鉢、器台、高壙、甕が存在する。



第18図 L123住居

### L 137 (第19図、図版13) (9J-59, 7J-50グリッド)

調査区の北西側でM区との境に位置している。北側を古墳時代前期の竪穴住居であるL323が壊し、南側を平安時代の竪穴住居L074が壊している。ただ、その2軒とも掘り込みが浅かったため、本住居の遺存状態は比較的良好である。主軸方向は北から西に傾き、平面形態は胴張隅丸長方形を呈する。規模は長軸長5.1m、短軸長4.6mで、壁高は29cm~44cm残存する。壁溝は存在せず、壁は僅かに傾斜して立ち上がる。柱穴は4か所に配置され、掘り方の平面形はP1が楕円形で、ほかは円形を呈する。梯子穴は南東壁の中央部から50cm住居内に入った位置に存在する。貯蔵穴は東の隅寄りで南東壁下に接して設けられている。平面形は円形で、長径40cm、短径36cmで深さは8cm弱と浅い。ほかにP3とP4の中間と梯子穴の南側から小ピットが検出された。炉は中心から北西に寄った位置でP1とP4の中間に設置されている。床面から5cm掘り込まれて火床面が形成され、火床の下は10cmの厚さにまで被熱による赤化が及んでいる。

床面は入口側から4か所の柱穴で囲まれた内側に硬化面が捉えられる。また、P3とP4を結んだ線の南西側では壁近くまで硬化面が観察される。

遺物量は少なく、集中する状況も認められない。また、1の壺の口縁部のように、床面に密着した状態で出土した以外に、3の甕や6の鉢のように床面と覆土中の破片が接合した例も存在し、それらの中から復元率の高い個体を図示した。

遺物（第159・160図、図版45・46・70） 土器11点を図示した。第159図1の壺口縁部は折り返し口縁をなし、繩文を施している。2の壺胴部には沈線の区画による鋸歯文が描かれ、そこに繩文が施される。3は甕の小型品である。折り返し口縁の上端には指頭による押捺が行われる。第160図4の甕は頸部に明瞭な輪積装飾が施され、口径が胴部最大径よりも大きくなる。5~9は鉢である。5・7は折り返し口縁の外側に網目状撚糸文が施文されている。6の口縁部にも網目状撚糸文の施文が行われるが、体部との境には沈線が引かれる。また、9の鉢の口縁部と体部の境は、ほかの4点と比較すると明瞭ではない。10は台付鉢、11は高杯の脚部で、11の端部は折り返されている。

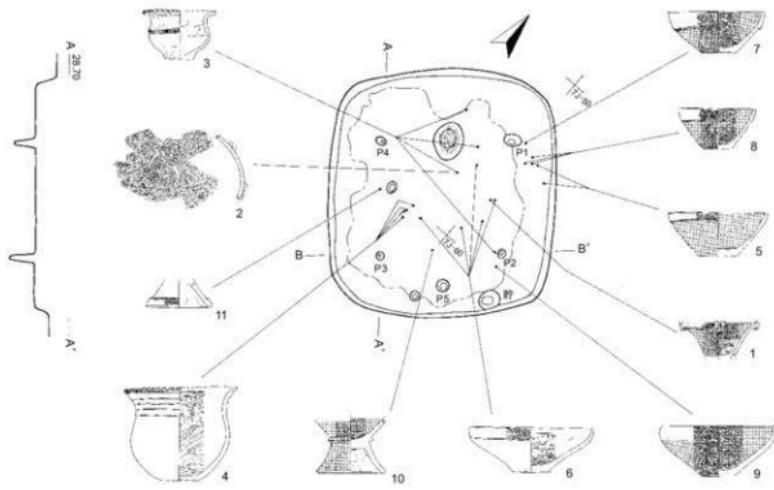
### L 145 (第19図、図版13) (9J-29・39グリッド)

西側で弥生時代後期の竪穴住居L252と重複し、北側を古墳時代中期の竪穴住居L146が壊している。また、本住居と重複する古墳時代前期の遺物を多量に出土するL201を確認している。ここは竪穴住居と断定しがたく、土器集中出土地点として別に記述した（第81図）。

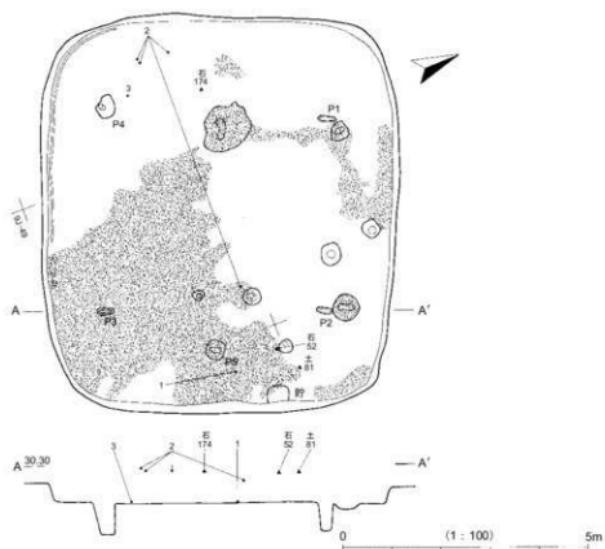
L145の平面形は胴張隅丸長方形を呈し、主軸方向は北から大きく西に振れている。規模は長軸長8.1m、短軸長7.2mで、壁高は26cm~70cm残存する。壁溝は南西壁の下に存在し、ほかの部分では存在しない。柱穴は対角線上の4か所に存在する。柱穴の掘り方はP4以外は長楕円形を呈し、柱痕跡が検出されている。削板状の柱材が使用されたと推測される。梯子穴は東壁から110cm中央側に入った位置に検出されている。柱穴と同じように、掘り方の平面形は長方形である。貯蔵穴は東壁の下で、中央からやや東隅に寄った位置に設けられている。炉は中心から西に寄った位置でP1とP4の中間部に設置されている。

出土した遺物は少ない。図示した土器で床面から出土しているのは、1の甕と3の鉢の2点にすぎない。また、焼土がほぼ全域から検出されており、焼失住居の可能性が高い。

遺物（第160・161・205・215・219図、巻頭図版6、図版46・79・86・90） 土器3点、石器・石製品2点、土製品1点を図示した。第160図1の甕と第161図3の鉢が本跡に伴う。1の底部には焼成後に穿たれた孔が存在する。第161図2の高杯は本住居には伴わない。第205図81は土玉である。また、第219図174は



L137



L145

第19図 L137・145住居

鐵形の石製品である。この2点も本住居には伴わない遺物である。なお、L146（重複する古墳時代中期の竪穴住居）から出土した銅の腕輪（金10）は本跡の遺物であろう。

### L 153 (第20図) (7J-58・68グリッド)

竪穴住居9軒が複雑に重複する位置で検出された。重複する竪穴住居は弥生時代後期、古墳時代前期・後期、平安時代に比定される。

平面形は胴張隅丸長方形を呈し、主軸方向は北西の方向を向く。長軸長は6.7m、短軸長は6.2mで、壁はやや傾斜して立ち上がる。壁高は11cm～37cm残存し、壁溝は存在しない。柱穴は4か所に配置され、掘り方の平面形は、いずれも梢円形を呈している。削板状の柱材が使用されていたと推測される。梯子穴は南東側の壁から90cm中央側に入った位置に存在する。掘り方の平面形は長方形である。貯蔵穴は梯子穴の東側で壁の下場に接するように設けられている。長径50cm、短径38cm、深さ27cmである。炉は中心から北西に寄った位置でP1とP4の中間に存在する。梢円形を呈し、床面から5cm掘り込んで火床面が形成され、火床の下8cmの厚さにまで被熱による赤化が及んでいる。

床面の硬化面範囲は不明瞭である。

遺物は少ない。図示した土器で床面から出土している個体は、3の甕と7の鉢である。2の壺と6の高环は床面から出土した破片と覆土中の破片が接合している。5の甕は床面から浮いた位置で出土しており、本住居には伴ないと見られる。また、全域から焼土ブロックと炭化材が検出されており、焼失住居である可能性が高い。

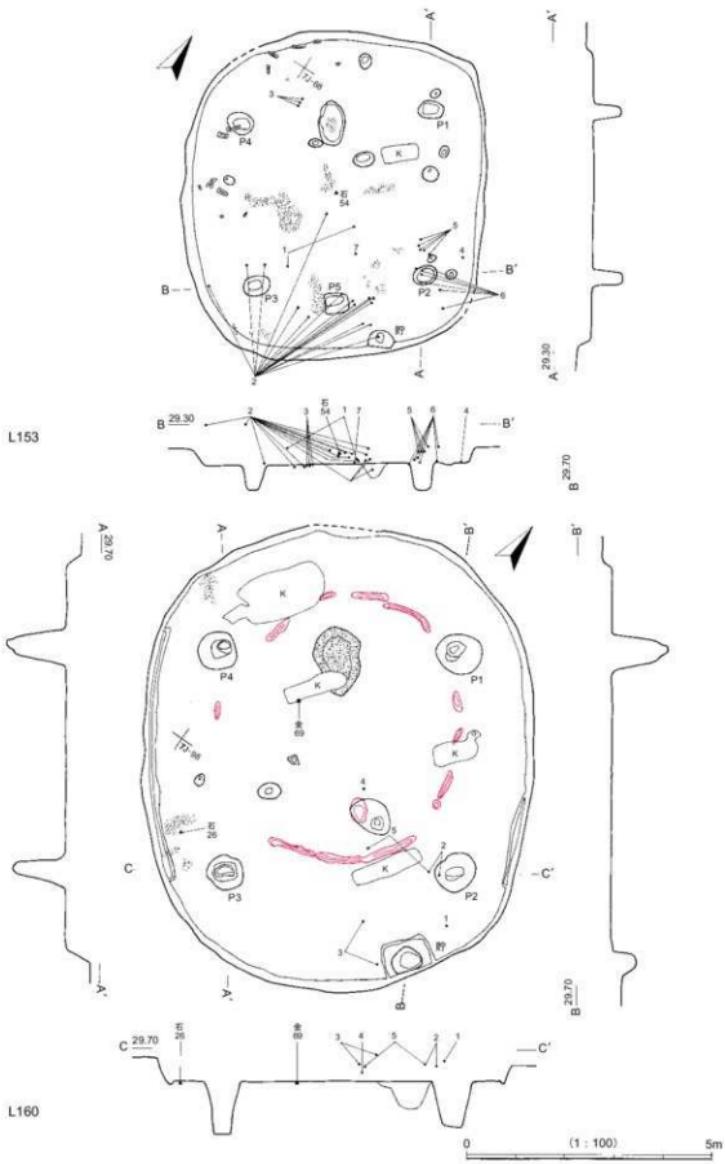
遺物 (第161・162・215図、図版47・70・86) 土器7点ほかを図示した。第161図1の壺口縁部には羽状繩文が施されている。2の壺は、胴部の中間よりも下位に最大径をおき、頸部と肩部に模様帯が存在する。肩部下位には、鋸歯状の区画が沈線で行われ、その中に網目状燃糸文を施している。第162図3の甕は、口唇部が工具による押捺で、頸部と胴部の境には僅かな段を設けている。4の甕は口唇部に指頭によると見られる押捺が施され、頸部から胴部にはそのまま移行する。6の高环は内外面に赤彩が施され、それ以上の装飾は加えられていない。7の鉢は底部付近に輪積痕跡が残る。内面はミガキで仕上げられ、外面はナデによって調整され、装飾は施されない。

### L 160 (第20図、図版14) (7J-88・98グリッド)

上述したL153の南側に位置し、北東側に古墳時代後期の竪穴住居であるL086が検出されている。平面形は梢円形で、主軸方向は北西に傾く。長軸長は9.8m、短軸長は8.0mでL区の弥生時代竪穴住居の中では大型の部類である。壁高は最大で58cm残存し、北東側の壁下と南西側の壁下のそれぞれ一部分に壁溝が存在する。また、全体に壁はやや傾斜して立ち上がっている。柱穴は4か所に存在する。掘り方の平面形は梢円形を示し、削板状の柱材が使用されていたと推測される。柱穴の深さはいずれも100cm以上である。梯子穴は存在しない。床面を剥がして精査を行ったが、確認されなかった。貯蔵穴は南東側の壁の下に接して設けられている。この貯蔵穴は2段に掘り込まれている特徴をもつ。まず、長方形の掘り込みがあり、その中央部に梢円形の掘り込みを設けている。炉は中心からやや西に寄った位置に設置されている。床面から6cm掘り込んで火床面となり、そこから約12cmの厚さにまで被熱による赤化が及んでいる。

床面は平坦に構築されているが、硬化面の範囲は不明瞭である。

遺物量は少ない。図示した土器はいずれも床面から浮いた位置で出土し、遺存状態の良い個体は出土していない。また、石器26は石斧の欠損品であるが、床面から出土している。



第20図 L 153・160住居

本住居は床面を剥ぎ床下の状況を調査した。その結果、第20図セビア色で示した壁溝を検出した。この壁溝によって推定される竪穴住居の平面形は梢円形で、その主軸方向はL160と同一の方向である。L160よりも古い段階であることが確実であるほかに、この床下から検出された竪穴住居が拡張され、L160になつたということも可能性として高い。

遺物（第163・213・227図、図版71・84・98） 土器5点、石器1点、金属製品1点を図示した。土器はいずれも覆土中からの出土である。第163図1の壺の肩部には、沈線で鋸歯状の区画が行われている。3の壺は口径よりも胴部最大径が大きく、頭部には装飾的な輪積が存在しない。5の鉢は僅かに内彎して立ち上がり、文様は加えられない。第213図2は磨製石斧の刃部破片である。金属製品は撲乱部から出土しており、本住居に伴う可能性は低い。

#### L161（第21図、図版14）〈7K-91、8K-01グリッド〉

弥生時代後期の竪穴住居が近接して分布する調査区の北東部に位置する。L162とL163を壊し、南側の一部で古墳時代中期の竪穴住居L164が重複する。また、後世の撲乱を受け、遺存状態は不良となっている。平面形は梢円形を呈し、規模は長軸長5.6m、短軸長5.2mである。主軸方向は北西に傾く。壁高は最大で33cm残存し、傾斜して立ち上がる。壁溝は東側の壁に途切れ途切れの状態で存在する。柱穴は4か所に配置される。いずれの柱穴も掘り方の平面形は梢円形を示し、割板状か角状の柱材が用いられていたと見られる。梯子穴は南東壁から60cm中央側に入った位置に存在し、掘り方は梢円形を呈している。貯藏穴は梯子穴の東側で壁下に接して設けられている。規模は長径54cm、短径34cmである。炉は中心からやや北西に寄った位置に設置されている。床面から6cm掘り込んで火床面が形成される。炉の南側には壺の胴部破片を立て、その基部を埋設している。

床面は壁際を除いて硬化面の拡がりが観察される。

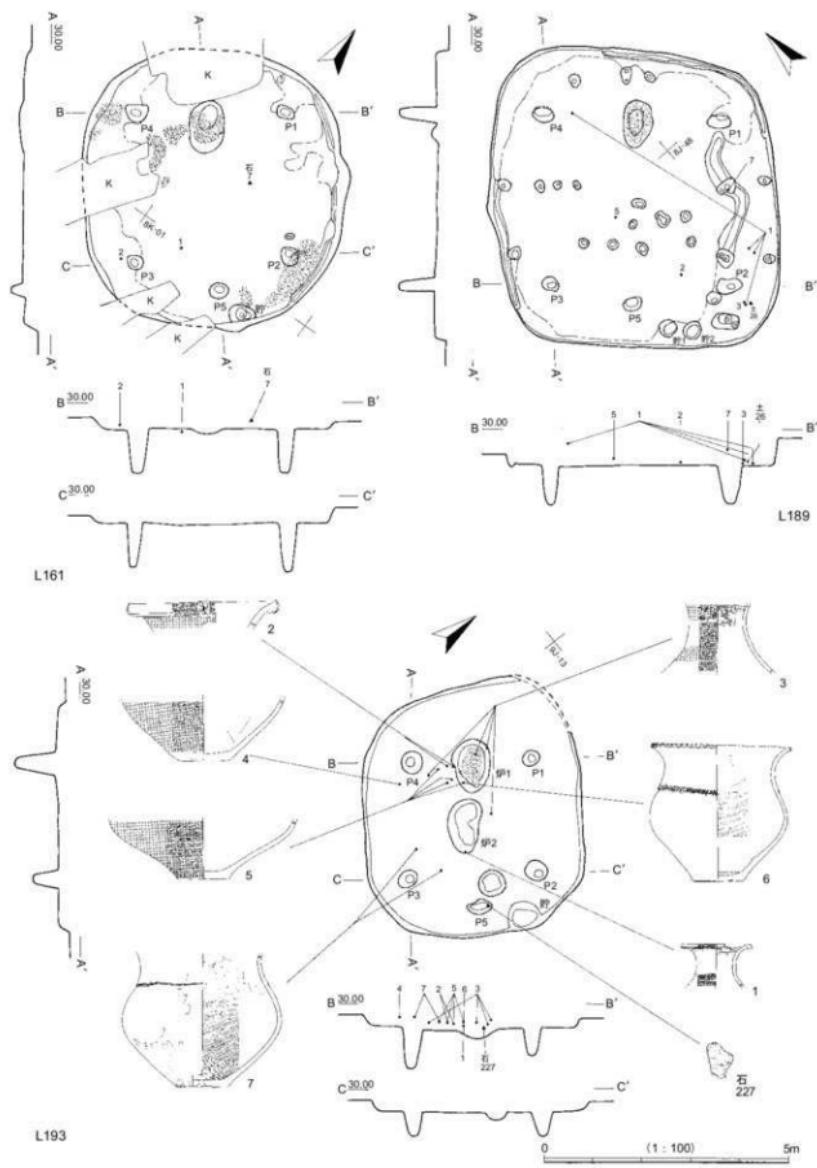
遺物は床面と覆土中から出土している。床面から出土した遺物は散在して破片の状態で出土しており、復元率が低い。図示可能な土器は2点であるが、2については後世の土器であると考えられる。また、床面から焼土ブロックが検出されており、焼失住居の可能性が高い。

遺物（第163・212図、図版48・83） 土器2点、石器1点を図示した。第163図1の鉢は僅かに内彎して立ち、口唇部は角頭状になる。内外面がヘラナデで仕上げられ、装飾は施されていない。2は土師器である。また、石器は剥片石器で、縄文時代の遺物と見られる。

#### L189（第21図、図版15）〈8J-37・47グリッド〉

時期の異なる竪穴住居が4軒重複する。北東側を古墳時代前期に属するL187に切られ、南西側をL188が壊している。また、本住居は先行すると考えられる弥生時代後期の竪穴住居L326を壊している。ただ、掘り込みが深かつたため、大きな破壊は免れている。

平面形は胴張隅丸方形で、主軸方向は北東に傾く。規模は長軸長6.0m、短軸長5.9mで、壁高は12cm～52cm残存する。壁溝は部分的に認められ、壁はほぼ垂直に立ち上がる。柱穴は4か所に配置され、各柱穴の掘り方の平面形状は梢円形を呈している。柱穴の形状からは、割板状の柱材が使用されていたと想像される。P1とP2の間に浅い溝が存在し、中に浅いピットがある。溝は蛇行しており、用途や目的は明らかでない。梯子穴は南西壁の縁から75cm中心部に入った位置に存在する。梯子穴の南側で壁に接するようになんで2か所のピットが貯藏穴と考えられる。2か所ともほぼ同規模であるが、使用が同時であったか否かは明らかにならない。長径36cm、短径36cm、深さは41cmと37cmである。このほかに住居の南西側を



第21図 L161・189・193住居

中心に小ビットが検出されたが、機能は明らかにならない。炉は中心からやや北東に寄ってP1とP4の中間に位置に存在する。床面から4cm掘り込まれ、火床は5cmの厚さにまで被熱による赤化が及んでいる。

床面は広範囲に硬化面の拡がりが認められる。ただ、P1とP2を結んだ線から南東壁の間には硬化面の存在は確認されていない。

床面から出土した遺物は少ない。図示した土器で床面から出土しているのは、1・2の甕と3の台付鉢の脚部のみである。

遺物（第166・203図、図版71・78） 土器7点と土製品1点を図示した。第166図1の甕は口唇部に指頭による押捺が行われ、頸部に輪積装飾を施している。全体にヘラナデによって調整されている。2の甕は頸部と胸部の段に上下交互の押捺を加えている。4の鉢は折り返し口縁で、内外面全体に赤彩が施されるがほかの装飾は施されていない。5は口縁部に羽状繩文が施され、その下端には結節文が巡る。第203図26の土製品は球状を呈し、土玉のように孔が貫通している。その球面に円形の刺突文を施している。

### L193（第21図、図版16）(9J-13・23グリッド)

調査区の南西側に位置し、東側を平安時代の竪穴住居L191によって壊される。ただ、その住居の掘り込みが浅かったために、大きな破壊は免れている。平面形は胴張隅丸長方形を呈し、主軸の方向は北西に傾く。規模は長軸長5.2m、短軸長4.5mで、壁高は13cm～24cm残存する。壁溝は存在せず、壁は僅かに傾斜して立ち上がる。柱穴は4か所に存在する。各柱穴の掘り方の平面形は円形である。入口に伴う梯子穴は、南東壁から50cm入った位置に存在し、梢円形の平面形態を示す。貯蔵穴は東側の壁下に接して設置されている。長径66cm、短径56cm、深さ22cmの規模である。炉は中心から北西に寄った位置でP1とP4の中間に設けられている。床面から5cm掘り込んで火床面を形成し、被熱によって焼土化して硬化した層が5cmの厚さに認められる。この炉の南東側に僅かに床面を掘り下げ、火床状に焼けた部分が検出されている。もう1基の炉と思われるが、前述の炉と比較すると掘り込みが浅く、使用頻度が低いと見られる。

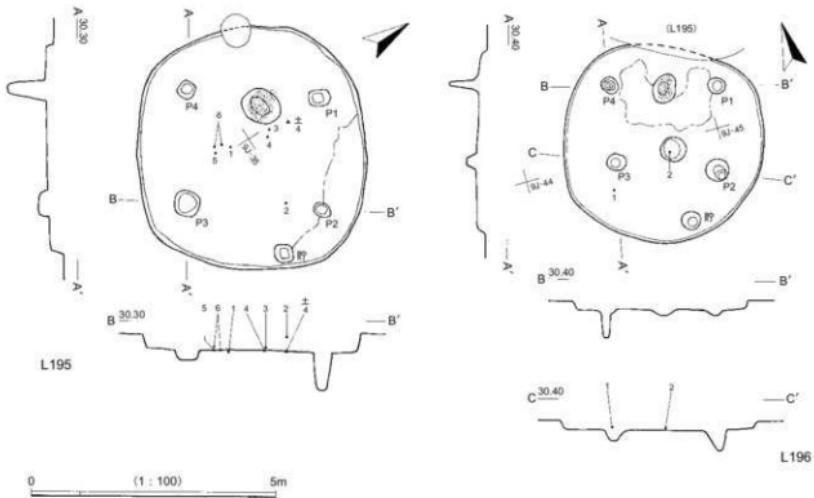
床面の硬化面形成については顕著ではなく、その範囲を括ることができない。

遺物は少なく、遺存状態の良い土器も僅かである。

遺物（第166・167・221・222図、図版49・92・93） 土器7点と石製品2点を図示した。第166図1の甕は頸部に沈線が巡り、その下位に羽状繩文帯が認められる。3の甕頸部も羽状繩文帯が認められるが、沈線によって画されてはいない。第167図6の甕は口唇部に押捺が施され、頸部は無文となる。7は頸部は無文で、胸部との境の段に刺突が施され、底部には焼成後に穿たれた孔が存在する。

### L195（第22図、図版16）(9J-25・35グリッド)

前記L193の南東側に位置し、4軒の竪穴住居と重複関係にある。本住居の北側では、弥生時代後期の竪穴住居L194を壊し、南側においてはL196が僅かに重複している。西側は平安時代の竪穴住居L192が本住居を壊す。平面形は円形に近く、主軸は北西に傾く。規模は長軸長、短軸長とともに4.9mになる。壁高は最大で38cm残存し、壁溝は存在せず、ほぼ垂直に立ち上がる。柱穴は4か所に配置され、入口の梯子穴は存在しない。柱穴4か所のうち、P3を除く3か所の深さは、いずれも80cm前後を測るが、P3の1か所のみ15.9cmという深さになっている。1か所のみが極端に浅くなる要因は全く不明である。貯蔵穴は南東壁のやや東側に設置され、平面形は隅丸方形を呈し、長径38cm、短径38cm、深さ21cmである。炉は中央からやや北西に寄った位置に設置されている。床面から7cm掘り込まれ、被熱による赤化は5cmの厚さに認められる。



第22図 L195・196住居

床面は東側の一部分を除いて硬化面が拡がり、平坦な状態を示している。

遺物の全体量は少なく、復元率の高い土器は6の鉢1点にすぎない。

遺物（第167・203図、図版49・71・78） 土器6点、土製品1点を図示した。第167図1の壺は、頸部がやや長めで、遺存する部位全体に網目状撚糸文が施されている。2の壺の肩部は沈線による区画の中に網目状撚糸文が施される。3は広口壺である。頸部に沈線が巡り、羽状繩文が施される。4の甕には輪積装飾が認められない。5の底部には焼成後に穿たれた孔が存在する。6の鉢は体部が直線的に外傾して立ち上がる。折り返し口縁の外面に羽状繩文が施されている。

#### L196（第22図、図版16）（9J-34・44グリッド）

上述のL195の南側に位置している。調査時の所見では、本住居がL195によって壊されている。平面形は円形を呈し、規模は長軸長4.1m、短軸長4.0mで、壁高は最大で21cm残存する。壁溝は存在せず、壁はやや傾斜して立ち上がる。柱穴は4か所に配置されている。各柱穴の深さは不揃いで、P1が11.1cmと最も浅く、P4が58.9cmと深い。梯子穴は存在しない。貯蔵穴は南側の壁からやや入った位置に設けられている。長径38cm、短径36cm、深さ17cmの規模である。炉は中心からやや北に寄った位置でP1とP4の中間に設置されている。梢円形を呈し、床面から5cm掘り込んで火床面が形成され、被熱による赤化が5cmの厚さに認められる。

床面は炉の南側に硬化面が確認できるが、その範囲は狭い。

遺物は少なく、床面から出土した土器で実測可能となった個体は2点である。いずれも脚部のみで、遺存状態の良い土器は出土していない。

遺物（第167図） 土器2点を図示した。第167図1は高環の脚部である。2は台付甕の脚部になろうか。

### L197 (第23図) (9J-32・42グリッド)

L196の西側に位置し、単独で検出され、ほかの遺構との重複関係をもたない。平面形は胴張開丸方形を呈し、主軸方向は北西に振れる。長軸長3.5m、短軸長3.5mで、壁高は10cm～24cm残存する。壁溝は存在せず、壁はやや傾斜して立ち上がる。柱穴と梯子穴は存在しない。貯蔵穴は南東壁の東隅寄りの下に設置されており、長径24cm、短径18cm、深さ13cmで規模は小さい部類である。炉は中心から北西に寄った位置に設置されている。平面形は円形で、床面から5cm掘り込んで火床面が形成されている。

床面は平坦に構築され、炉の南東側で硬化面の拡がりが捉えられる。

遺物は破片が僅かに出土したにとどまる。

遺物 (第167図) 土器2点を図示した。第167図1は広口壺である。頸部は赤彩が施され、肩部には沈線の区画内に縄文が施されている。2は高環の脚部である。

### L198 (第23・101図、図版16) (8J-96, 9J-06グリッド)

単独で検出され、ほかの遺構との重複は認められない。平面形は圓丸方形で、主軸方向は北西に向く。長軸長4.7m、短軸長4.5mで、壁高は25cm～41cm残存し、壁溝は存在しない。また、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。柱穴は存在しない。梯子穴は南東側の壁端部から45cm内に入った位置に存在する。掘り方の平面形は方形で、断面は外傾する状態を示している。貯蔵穴は梯子穴の東側で東隅に寄った位置に設けられている。長径42cm、短径36cm、深さ21cmである。炉は中心からやや北西に寄った位置に設置され、床面から7cm掘り込んで火床面となり、そこから約7cmの厚さにまで被熱による赤化が及んでいる。

床面は平坦に構築されているが、硬化面の範囲は不明瞭である。

遺物量は少ない。本住居における遺物出土状況での特徴は、床面出土と覆土出土の遺物に分かれる点である。床面出土の遺物は、1の壺胴部と2の広口壺で数が少ない。覆土中の遺物は土師器で、住居の中央部に投棄された状況で、破片も含めるとやや多く出土している。また、これら土師器の出土レベルからは、厚さ3cm～6cmの貝ブロックが検出されている。

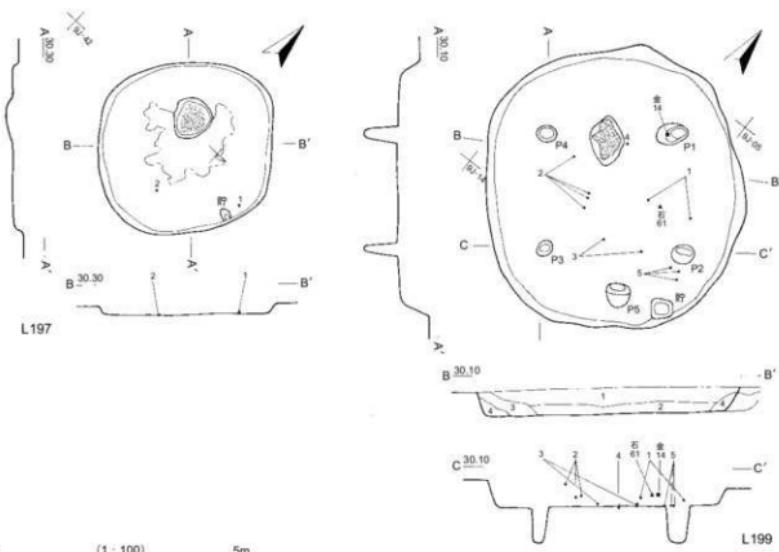
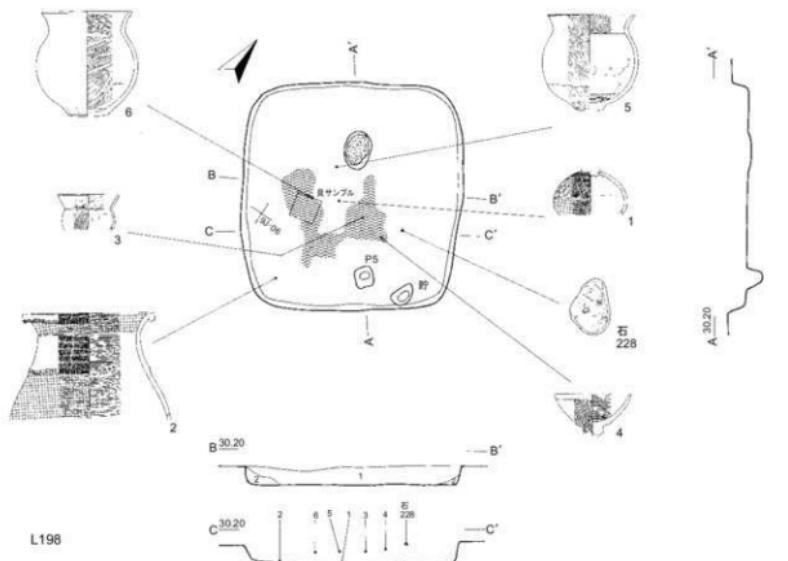
床面から出土している土器の検討から、本住居の時期を弥生時代後期と判断した。

遺物 (第167・222図、図版49・93) 土器6点、石製品1点を図示した。第167図1の壺は胴部が球状に大きく膨らみ、口縁部と平行する沈線で区画が行われ、その中に羽状縄文を施し、さらに鋸歯状や格子状の沈線を加えている。2の広口壺は折り返し口縁の外面に羽状縄文を施し、さらに頸部にも幅広い羽状縄文帯を設けている。口縁部の内面と口唇部直、胴部には赤彩が施されている。3～6は覆土の上層から出土した土師器で、4の高環や5の甌から古墳時代前期と判断される。

### L199 (第23図、図版16) (9J-04・14グリッド)

弥生時代後期の竪穴住居であるL251を壊して構築されている。この先行するL251とは主軸の方向や平面形が近似し、僅かに本住居がその西側にずれている配置状況を見せる。したがって、本住居はL251の建替え後である可能性も考えられる。

平面形は胴張開丸長方形を呈し、主軸方向は北西に傾く。長軸長の規模は5.6m、短軸長は5.3mである。壁高は22cm～59cm残存する。壁溝は存在せず、壁はやや傾斜して立ち上がっている。柱穴は4か所に配置されている。各柱穴の掘り方平面形は梢円形を呈し、割板状の柱材の使用が推測される。梯子穴は南東壁から中央側に40cm入った位置に設けられていて、掘り方から、外傾して埋設されていた状況が復元できる。また、貯蔵穴は東側の壁下に接して位置し、平面形は長方形を呈する。長径43cm、短径40cm、深さ15cmの



第23図 L197・198・199住居

規模である。炉は中心から北西に寄った位置でP1とP4の中間に設置されている。床面から5cm掘り込んで火床面が形成され、5cmの厚さでロームが赤化して硬化している。

床面は平坦に構築された状況が認められる。また、硬化面の拡がりについては明瞭な範囲を括ることができない。

遺物は南東側を主体に出土している。

遺物（第168・216・224図、図版50・87・97） 土器5点、石器1点、金属製品1点を図示した。第168図1は壺の底部で、底面に初と見られる圧痕が認められる。2の壺の頸部は装飾をもたず、胴部との境に押捺が施される。3の壺底部には焼成後の穿孔が存在する。4の高壺は遺存状態が良好で、口縁部は幅広く、羽状繩文が施され、脚部は短く「ハ」の字状に開いている。5の鉢口縁部には網目状然系文が施されている。第216図61は磨石と考えられる礫石器で、床面からやらや浮いた位置から出土している。

#### L 202 (第24図) (9J-49, 9K-40グリッド)

先述したL145の南側に位置し、古墳時代前期のL201が北側で重複している。そのほかの遺構とは重複しないため、遺存状態は比較的良好である。平面形は胴張隅丸長方形で、主軸方向は北からやや西に傾く。長軸長5.8m、短軸長5.0mで、壁高は最大で53cm残存する。壁溝は存在せず、壁はほぼ垂直に立ち上がる。柱穴は4か所に配置され、梯子穴は南壁から80cm中心側に入った位置に存在する。貯蔵穴は南東壁の壁下に接して設置され、長径42cm、短径38cm、深さ31cmの規模をもつ。炉は中心から北に寄った位置で、P1とP4の中間に設置されている。平面形は不整円形で床面から4cm掘り込んで火床面が形成され、約5cmの厚さに被熱による赤化が認められる。

床面は平坦で、P3とP4を結んだ線から西側の壁際の間を除いて、ほぼ全域に硬化面の拡がりが捉えられている。

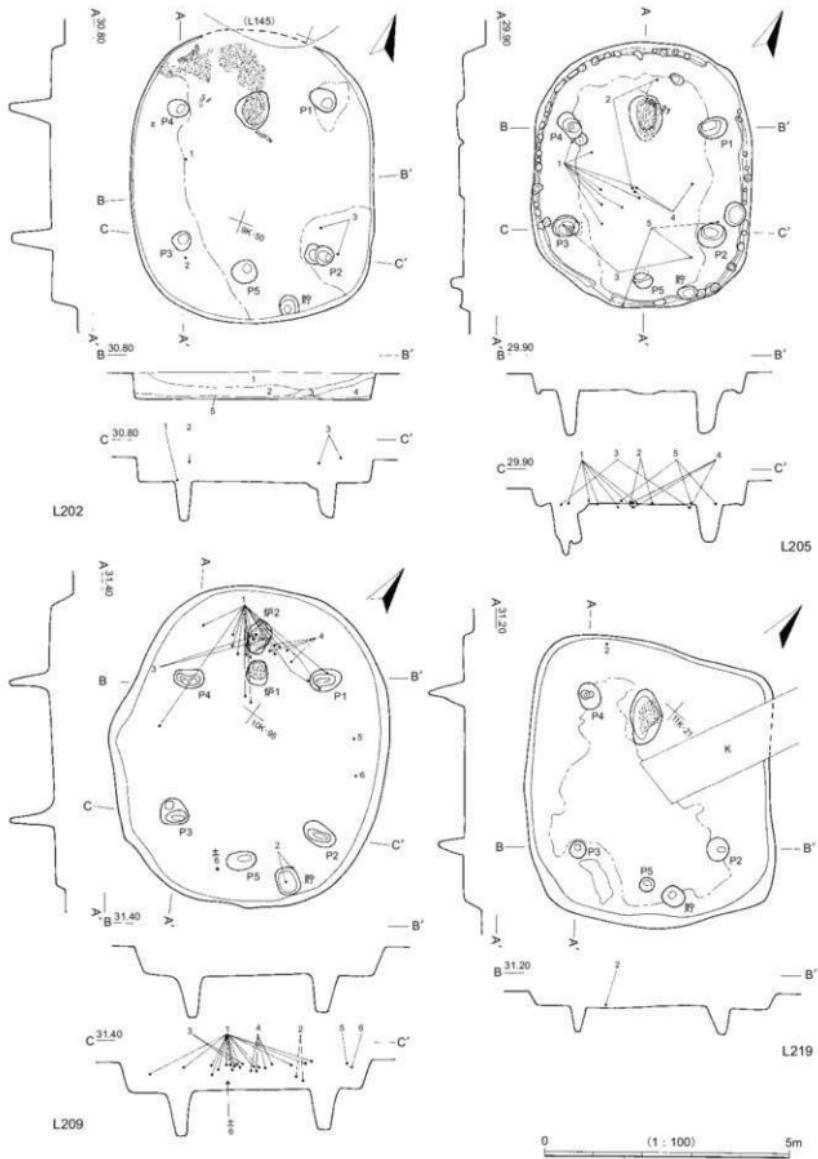
覆土は5層に分けられる。1層：全体に細粒の暗褐色土。2層：ローム粒を斑に含む暗褐色土。3層：ロームブロックを含む黄褐色土。4層：粘性のある暗褐色土。5層：ローム粒・焼土を含む暗褐色土。

遺物は少なく、遺存状態の高い土器は出土していない。1は床面から出土した壺であるが、口縁部のみの遺存である。また、炉の北西側から焼土ブロックと炭化材が出土している。

遺物（第169図） 土器3点を図示した。第169図1の壺は口唇部が短く内側に折れ、外面に羽状繩文が施されている。2の壺は沈線で鋸歯状の区画が行われている。3の壺の口縁部は折り返し口縁で、口唇部には押捺が施されている。

#### L 205 (第24図、図版17) (10K-20・21グリッド)

弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居が繰り返し構築された地区に位置し、古墳時代前期の竪穴住居L111が重なっている。また、住居の中央部を土坑L212が壊している。ただ、本住居の掘り込みがしっかりととしていたために、大きな破壊は被っていない。平面形は楕円形で、主軸方向は北からやや西に傾く。長軸長は5.4m、短軸長は4.5mである。壁高は12cm～47cm残存する。壁溝は一部で途切れるように見えるが、ほぼ全体に巡り、壁溝中に小ピットが不規則に存在する。壁はやや傾斜して立ち上がる。柱穴は4か所に配置されて、楕円形の掘り方平面を示す。梯子穴は南壁から40cm入った位置に設けられ、断面から外傾して設置されていた状況がうかがわれる。貯蔵穴は梯子穴の東側で壁に接して位置する。長径42cm、短径28cm、深さ14cmである。炉は中心から北西に寄った位置でP1とP4の中間に設けられる。一部をL212が壊している。平面形は楕円形を呈し、床面から8cm掘り込んで火床面が形成されている。炉の北側から楕



第24図 L202・205・209・219住居

円形の小ピットが検出されたが、性格は明らかでない。

床面は入口から柱穴で囲んだ内側、炉の北側にかけて良く踏み固められた状態を示す。また、全体に平坦に構築されている。

遺物は少ない。図示した遺物については、全て床面から出土しているが、全体に散在して出土しており、集中の傾向は認められない。

遺物（第169・170図、図版51） 土器5点を図示した。第169図1の壺は頸部に羽状繩文帯が存在するが、沈線による区画は行われていない。3の鉢は全体に内彫し、口縁部に羽状繩文を施している。4の壺は口唇部に押捺を加え、頸部と胴部との境に弱い段を設けている。第170図5の壺の頸部と胴部の境には押捺が巡る。この2点の壺には輪積装飾が施されず、器面はヘラナデによって仕上げられている。

#### L 209 (第24図、図版17) (10K-94・95グリッド)

南側でL106と、北側ではL029Aと重複する。両者ともに古墳時代中期の竪穴住居である。平面形は梢円形で、主軸方向は北西に傾く。西側の壁の一部が不整に張り出しているのは、調査時における検出ミスによる可能性が大きい。本来は整った梢円形であったと思われる。規模は長軸長6.5m、短軸長5.7mで、壁高は14cm～59cm残存する。壁溝は存在せず、やや傾斜して立ち上がる。柱穴は4か所に配置され、掘り方の平面形はいずれも梢円形を呈する。割板状の柱材の使用が想定される。梯子穴は南東側の壁から75cm内側に入った位置に存在する。柱穴と同様に掘り方の平面形は梢円形である。貯蔵穴は梯子穴の東側で、壁とは僅かな間隔を開けて設置されている。平面形は方形で、規模は長径は56cm、短径46cm、深さ6cmである。炉は中心から北西に寄った位置に設けられている。特徴としては、主軸方向に2基の炉が並んで存在する点である。その2基の中で、P1とP4の中間に存在する梢円形の1基は、床面からの掘り込みが明瞭で、炉としての機能を果たしていた様相が明らかである。これに対し、北西側に存在する炉には明確な掘り込みが認められない。床面が焼けている程度である。この2基の火廻は、それぞれが異なる機能的役割を担っていたと考えられる。主に煮炊用に用いられていたのは、掘り込みが明瞭な炉の方であろう。

床面は平坦に構築されている。ただ、硬化面の形成範囲については、はっきりとは線引きができない。

遺物は覆土中から多く出土し、床面から出土している点数は僅かである。1は比較的大きな壺で、北西側の覆土中に破片の状態で散在して出土した。2の壺口縁部を除くほかの土器についても、覆土上層の同レベルから出土している。

遺物（第170・171・203図、図版71・78） 土器6点と土製品1点を図示した。第170図1の壺は頸部下部と肩部に沈線区画の羽状繩文帯が存在する。胴部が大きく張り、最大径は44cmになる。第171図2の壺口縁部の折り返し口縁の外端部には刺突が施されている。3の壺口縁部には全体に羽状繩文が認められる。4の壺は肩部の沈線区画内に網目状撚糸文が施文されている。

#### L 219 (第24図、図版17) (11K-20・21グリッド)

調査区の南西部の端でH区との境界付近に位置する。L150A古墳の墳丘下に存在し、北側で古墳時代前期の竪穴住居L319が重複している。平面形は胴張隅丸長方形で、主軸方向は北西に傾く。北東側の壁が歪んでいるのは、本来そのような掘り方であったことも考えられるが、擾乱を受けているため、調査時に立ち上がりが的確に捉えられなかった結果とも見られる。規模は長軸長5.8m、短軸長5.0mで、壁高は最大で34cm残存する。壁溝は存在せず、壁はやや傾斜して立ち上がる。柱穴は本来4か所に配置されていたと考えられるが、P1の存在が擾乱のため確認できていない、梯子穴は南東壁の縁から70cm中心部に入った

位置に存在する。梯子穴の東側に接するように存在するビットか貯蔵穴と考えられる。長径46cm、短径42cm、深さ27cmである。炉は中心からやや北西に寄った位置に存在する。床面から4cm掘り込まれ、火床は4cmの厚さに被熱による赤化が認められる。

床面は入口から柱穴で囲まれた範囲に硬化面の拡がりが認められる。

床面から出土した遺物は少ない。図示した中では2の鉢が床面から出土し、比較的高い遺存状態を保っている。

遺物（第172図、図版52） 土器3点を図示した。第172図1・2は鉢である。どちらも装飾は施されず、1は内面から外面口縁部にかけて2は内面に赤彩が行われている。3は壺の胴部破片である。沈線による鋸歯状区画内に繩文が施されている。

### L 233 (第25図) (10J-47・57グリッド)

長期に亘る住居が繰り返し構築された地区に位置する。重複する遺構は3軒存在し、いずれも古墳時代の竪穴住居である。北東側と南西側には前期のL232とL301が、東側にはL047が重複する。平面形は胸張隅丸長方形を呈し、主軸の方向は北西に傾く。規模は長軸長7.2m、短軸長6.3mで、壁高は最大で35cm残存する。壁溝は存在せず、壁はほぼ垂直に立ち上がる。柱穴は4か所に存在する。各柱穴の掘り方の平面形は円形か梢円形である。それぞれから柱痕跡が捉えられたので、この住居の廃絶時に柱の基部が柱穴に埋設されていたことが明らかである。入口に伴う梯子穴は、南東壁の端から90cm入った位置に存在し、その断面は梯子の外傾した状況を示す。貯蔵穴は梯子穴の東側で、壁から僅かに離れた位置に設置されている。梢円形を呈し、長径46cm、短径49cm、深さ27cmの規模である。炉は中心から北西に寄った位置でP1とP4の中間に設けられている。床面から8cm掘り込んで火床面を形成し、被熱によって焼土化して硬化した層が9cmの厚さに認められる。

床面は壁際を除いて硬化面の形成が確認され、全体にわたって踏み固められた状態を呈している。

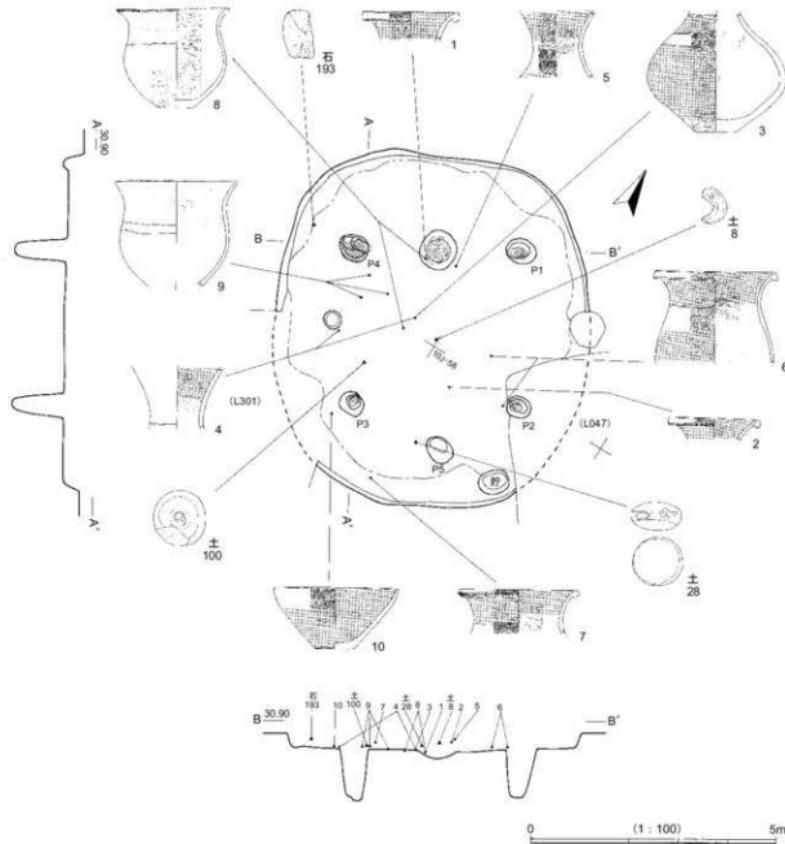
遺物は比較的多く出土している。特に集中する傾向は認められず、全域から出土し、床面レベルの個体を主体に図示可能になった。

遺物（第173・203・206・221図、図版53・71・78・80・92） 土器10点、土製品3点、石製品1点を図示した。第173図1・2の壺口縁部は折り返し口縁で、1には繩文が、2には網目状撚糸文が施文されている。3の壺は頸部下位と肩部に沈線区画をもち、その中に羽状繩文が施される。4の壺の頸部にも沈線区画が認められる。5の壺頸部下位には結節文区画の羽状繩文帯がある。6・7は広口壺である。肩部に沈線区画があり、6には網目状撚糸文が、7には羽状繩文が施文されている。8の壺は口径が胴部最大径よりも大きく開き、頸部と胴部の境に段を設ける。9の壺は頸部の下位に輪積痕を残している。10の鉢は直線的に開きながら立ち上がり、口縁部に羽状繩文を施す。

第203図8は勾玉形である。完形品で、頭部の端部が角張り、腹部断面は丸く、尾部は尖り気味になっている。28は、平面は円形に作られ、中央部の断面形態は梢円形を呈する。上部に貫通孔をもっているが、紐がとおされていたか否かは断定できない。類例に乏しいが、鈴形土製品に含めておきたい。第206図100は筋錘車と考えられる。

### L 256 (第26図、図版19) (8J-74・84グリッド)

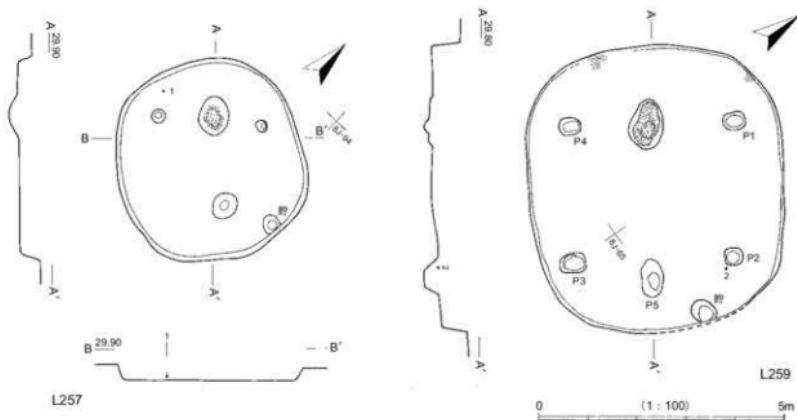
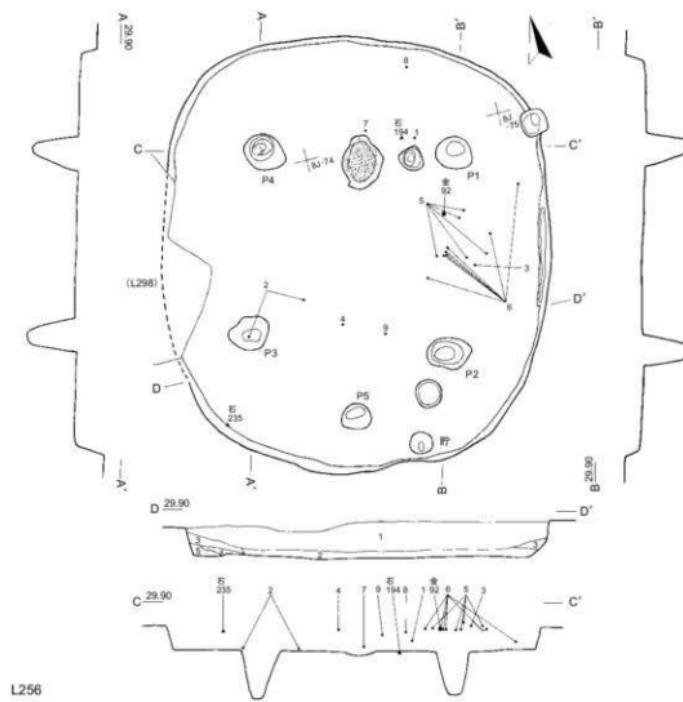
弥生時代後期から平安時代にわたる6軒の竪穴住居が複雑に重複する。この6軒の中で、最も古く構築されているが、掘り込みが深かったために全壊的な破壊は免れている。



第25図 L 233住居

平面形は胴張隅丸長方形で、主軸は北東に傾く。規模は長軸長8.9m、短軸長7.8mになり、本調査区内での大型の部類になる。壁高は最大で63cm残存し、壁溝は東壁の一部にのみ存在しており、やや傾斜して立ち上がる。柱穴は4か所に配置され、いずれも90cm以上の深さがある。入口の梯子穴は、南壁の端部から90cm内側に入った位置に存在する。掘り方の平面形は楕円形で、断面形状は外傾して基部が埋設されていた状況を示している。貯蔵穴は南隅付近に設置され、平面形は円形を呈し、長径46cm、短径44cm、深さ36cmである。炉は中央からやや北東に寄った位置に設置されている。床面から5cm掘り込まれ火床面が形成されている。

床面は平坦な状態を示しているが、硬化面の範囲は明瞭ではない。



第26図 L256・257・259住居

遺物は少なく、床面からは2の鉢と石製品194の砥石が出土しているにすぎない。

遺物（第175・176・213・221・223・228図、図版54・83・92・94・99）土器9点、石製品4点、金属製品1点を図示した。第175図1は折り返し口縁の壺の口縁部である。口縁部の外端部に刻みが施されている。2の鉢は口縁部に羽状繩文が施され、内外面は赤彩が施される。床面からの出土である。3～第176図8は重複する住居の遺物を、本住居の遺構番号で取り上げたと考えられる。それぞれの帰属は、3・5・6がL254、4がL433、7・8がL253の遺物になると考えられる。

#### L 257 (第26図) (8J-93・94グリッド)

先述したL256の南側に位置し、ほかに竪穴住居との重複が認められない。平面形は楕円形で、主軸方向は北西に振れる。長軸長4.1m、短軸長3.9mで、壁高は22cm～40cm残存する。壁溝は存在せず、南壁はやや傾斜して立ち上がる。柱穴と梯子穴は存在しない。炉の近くに2か所、南東側に1か所ビットが存在するが、いずれも柱穴とは考えられず、性格は不明である。貯蔵穴は東側の壁下に接して設けられ、長径38cm、短径36cm、深さ16cmである。炉は中心から北西に寄った位置に設置されている。床面から7cm掘り込んで火床面が形成され、約4cmの厚さに被熱による赤化が認められる。

床面は全域に平坦な状態で、硬化面の範囲は特定されない。

遺物（第176図）土器片1点を図示した。第176図1の壺脇部上半には結節文で区画された中に羽状繩文が施され、その中間帯に鋸歯状沈線文が施される。

#### L 259 (第26図、図版19) (8J-54・55グリッド)

北西にL260、東にL261が重複する。平面形は胴張隅丸長方形で、主軸は北西に振れる。長軸長5.8m×短軸長5.2m、壁高は34cm～62cmである。柱穴4か所と梯子穴が検出された。貯蔵穴は東壁下、炉は北西寄りに位置する。床面は平坦で、硬化面は検出されなかった。

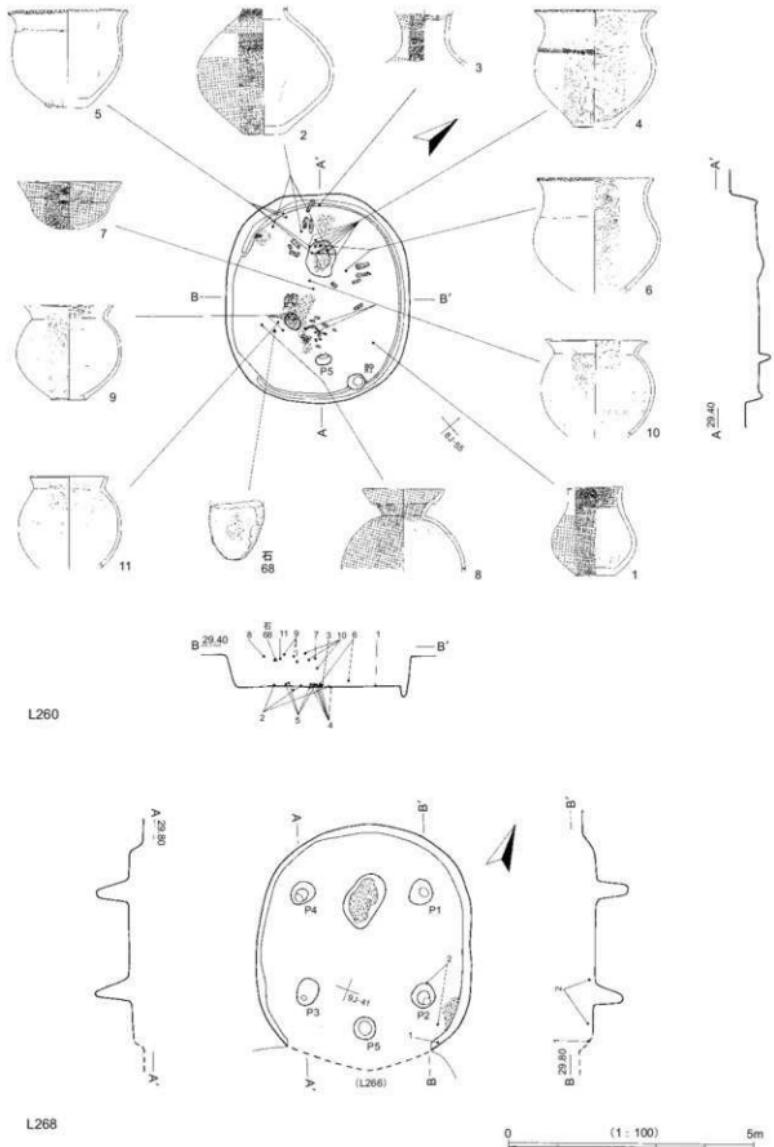
遺物（第176・205図、図版54・72・79）土器2点と土製品1点を図示した。2は床面より出土した壺で、底部に焼成後の穿孔を施す。

#### L 260 (第27図、図版19) (8J-53・54グリッド)

弥生時代後期の竪穴住居が近接して分布する地区に位置する。南東側でL259と重複し、西側にはL299が接する。遺構の遺存状態は比較的良好である。平面形は楕円形で、主軸方向は北西を向く。長軸長は4.2m、短軸長3.8mで、壁高は22cm～77cm残存する。壁溝は南西壁下の一部に存在が確認できないほかは、幅10cm内外で巡り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。柱穴は存在しない。梯子穴は南壁から75cm住居に入った位置に検出され、掘り方の平面形は楕円形を示す。貯蔵穴は東側の壁下に接するように設けられ、長径36cm、短径32cm、深さ11cmの規模をもつ。炉は中心から北西に寄った位置に設置されている。床面から3cm掘り込んで火床面が形成されている。ほかに1か所小ビットが検出された。位置的に定型的なビットにはならず、性格については明らかでない。床面は全域に平坦な状態で、硬化面の範囲は特定されない。

遺物は床面出土と、覆土上層出土がきれいに分かれている。床面出土の土器は弥生土器で、覆土上層から出土したのは古墳時代前期の土器になる。床面から出土している4～6は甕で、いずれも炉の周辺から出土している。人工遺物のほかに、焼土ブロックや炭化材が出土しており、焼失住居の可能性が高いといえる。

遺物（第176・177・217図、図版54・55・72・88）土器12点、石器2点を図示した。第176図1の壺の口縁部は素縁で口唇部が丸くなる。口縁部と肩部との境に弱い段を設け、口縁部には羽状繩文を施し、そ



第27図 L260・268住居

の施文帶の下端は結節文で区画される。2・3の壺は頸部に羽状繩文帶があり、結節文によって画される。4～6の壺は、口唇部に押捺が施され、頸部に輪積装飾を行うことなく、胴部との境に段を設けている。第177図7～11は覆土の上層から出土した土器で、古墳時代前期に比定される土器である。

#### L 268 (第27図、図版20) (9J-30・31グリッド)

M区との境に位置し、南側を古墳時代前期の竪穴住居であるL266が壊している。主軸方向は北から僅かに西に傾き、平面形は梢円形を呈する。規模は長軸長5.0m強、短軸長4.4mで、壁高は最大で32cm残存する。壁溝は存在せず、壁は僅かに傾斜して立ち上がる。柱穴は4か所に配置され、掘り方の平面形は円形を呈する。梯子穴は南東壁の中央部から65cm前後住居内に入った位置に存在する。貯蔵穴は設けられていない。炉は中心から北西に寄った位置でP1とP4の中間に設置されている。床面から5cm掘り込まれて火床面が形成されている。

床面は平坦であるが、硬化面の範囲を明瞭に捉えることができない。

遺物量は少なく、破片が僅かに出土している。また、南東側の壁下付近から焼土が検出されている。ほかに顯著な焼土堆積が存在しないので、焼失住居と断定する状況ではない。

遺物 (第178図、図版72) 土器2点を図示した。第178図1は折り返し口縁の壺で、内外面に赤彩が認められる。2は壺の肩部。結節文に画された羽状繩文帶が巡る。

#### L 275 (第28図) (7J-34・35グリッド)

調査区の北側に位置し、北西側でL276、北側でL274と弥生時代後期の竪穴住居と重複し、南側を古墳時代後期の竪穴住居L277が壊している。平面形は胴張隅丸方形を呈し、主軸方向をほぼ北に向いている。規模は長軸長4.3m、短軸長4.2mで、壁高は最大で38cm残存する。壁溝は存在せず、僅かに傾斜して立ち上がる。柱穴は存在しない。梯子穴はL277との重複部分に存在していた可能性もあるが、検出されていない。貯蔵穴も存在しない。炉は中心から北に寄った位置に設置されている。床面から7cm掘り込んで火床面が形成され、約9cmの厚さに被熱による赤化が認められる。

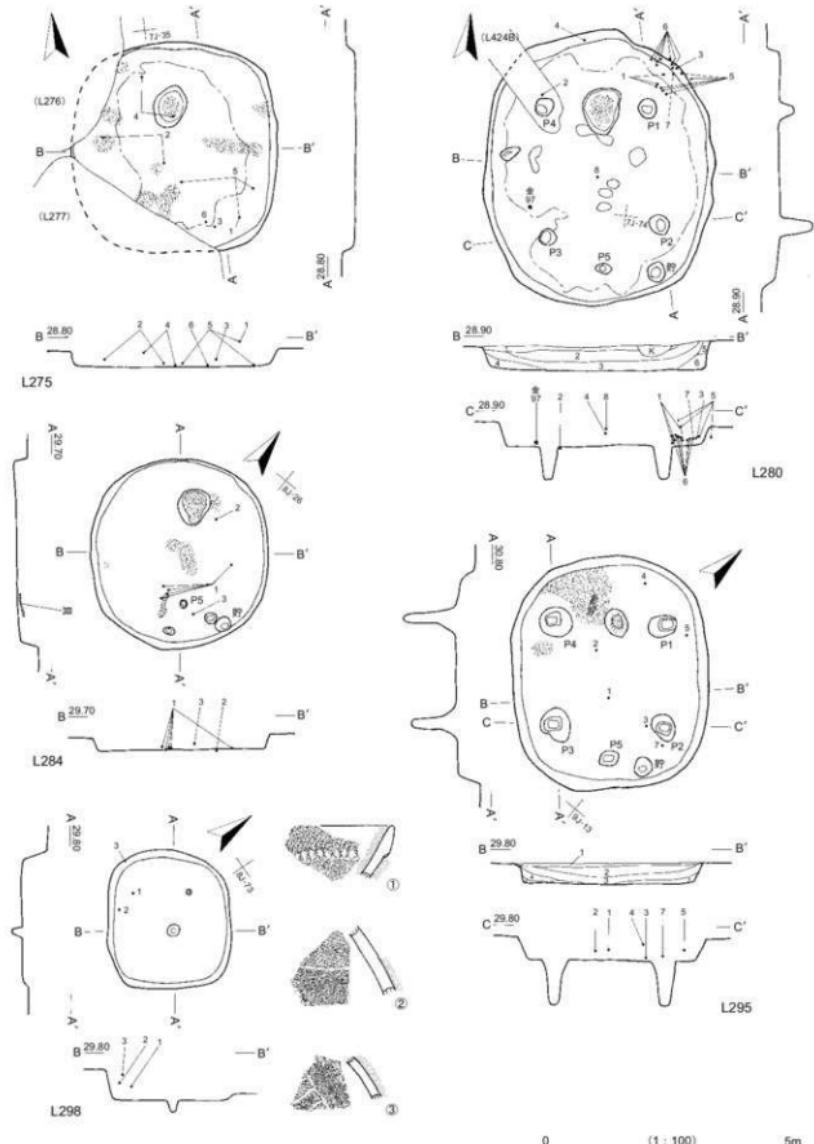
床面は壁際を除いて硬化面の拡がりが認められる。

遺物は散在して出土している。また、遺存状態の良い土器類は出土していない。1の壺が覆土の上層から出土し、ほかは床面や床面と覆土中の破片が接合している。人工遺物以外に焼土ブロックが床面から出土しており、焼失住居である可能性を示している。

遺物 (第179・180図、図版57) 土器6点を図示した。第179図1は壺の頸部で、沈線区画による繩文帶が頸部下位と肩部上位に存在する。第180図2は無頸壺にならう。折り返し口縁の下端部にはヘラ状工具による押捺が施されている。3の高杯は口縁部を欠いているが体部は内外面とも赤彩が施されている。4の高杯脚部の下端部には網目状撚糸文が施文されている。5は体部がヘラミガキで仕上げられた素口縁の鉢で、6の口縁部には網目状撚糸文が施文されている。

#### L 280 (第28図、図版20) (7J-63・64グリッド)

時代の異なる竪穴住居3軒が重複し、その中では最も古い段階の構築になる。また、弥生時代の方形周溝墓と考えられるL424Bによって北西側の一部が壊されている。平面形は梢円形を呈し、主軸方向は北から僅かに西に振れている。長軸長5.5m、短軸長4.8mで、壁はやや傾斜して立ち上がり、壁高は最大で51cm残存する。壁溝は存在しない。柱穴は4か所に配置されている。梯子穴は南側の壁から65cm中に入った位置に存在する。掘り方の平面形は梢円形である。貯蔵穴は梯子穴の東側で、南東側の壁の下場に接する



第28図 L.275・280・284・295・298住居

ように設けられている。長径40cm、短径35cm、深さ25cmである。炉は中心から北に寄った位置でP1とP4の中間に存在する。平面形はやや不整な楕円形を呈し、床面から5cm掘り込んで火床面が形成され、火床の下15cmの厚さにまで被熱による赤化が及んでいる。

床面は壁際を除いて広い範囲に硬化面が形成されている。

本住居に伴うと考えられる遺物は少ない。2の壺が床面から出土しているが、L424Bとの重複部分であり、確実性がやや弱い。1の壺は床面と覆土中の破片が接合している。ほかの土器類は1・2とは時代が異なり、覆土の形成過程の途中で入ったものと考えられる。また、3・5・6・7の出土地点が竪穴住居L366と重複する部分に当たることから、L366の遺物とも考えたが、その遺構には帰属しないと判断した。

遺物（第180・228図、図版58・99） 土器8点ほかを図示した。第180図1の壺の頸部には沈線区画の繩文帯が存在する。2は比較的遺存状態の良い壺で、頸部には輪積装飾をもたない。口唇部には押捺が加えられ、頸部と胴部との境には布を巻いた施文具による押捺が施されている。3～8は土師器である。本住居に直接伴う遺物ではないと判断される。

#### L 284（第28図、図版21）〈8J-25・26グリッド〉

ほかの遺構とは重複がなく単独で位置している。北側に弥生時代後期のL285・337が存在する。平面形は楕円形で、主軸方向は北西に傾く。長軸長は3.9m、短軸長は3.6mで、壁高は23cm～44cm残存する。壁溝は存在せず、壁はやや傾斜して立ち上がっている。柱穴は存在しない。梯子穴は南東側の壁から80cm内側に入った位置に存在する。貯蔵穴は南東側の壁の下に接して設けられている。この壁の下場に接して位置する貯蔵穴の西側にも小ビットが存在する。このビットも貯蔵穴の可能性があるが、南側にも同じような小ビットが存在することから、貯蔵穴とは異なるビットと考えられる。ただ、この対になるビットの機能は不明である。入口に伴う施設とも見られるが断定はできない。炉は中心から北西に寄った位置に設置されている。床面から5cm掘り込んで火床面となり、そこから約5cmの厚さにまで被熱による赤化が及んでいる。

床面は平坦に構築され、ほぼ床面の全面に硬化面の形成が認められる。

遺物は破片では出土しているものの、図示可能な遺存状態を保つ個体は少ない。また、接合する破片も少ない。土器以外では住居のほぼ中央から焼土ブロックが検出されている。また、梯子穴付近から小規模な貝ブロックが出土している。

遺物（第181図） 土器3点を図示した。第181図1の壺は口縁部を欠き、全体の半分弱の遺存状態である。頸部に輪積装飾は施されず、胴部との境に押捺が加えられている。2の鉢は外面がヘラミガキで仕上げられ、赤彩が施されている。

#### L 295（第28図、図版21）〈9J-02・03グリッド〉

弥生時代後期の竪穴住居が近接して分布するが、後の時代の遺構も含め、重複する遺構が認められず、単独で検出されている。したがって遺存状態は比較的良好である。主軸方向は北西を向き、平面形は胴張隅丸長方形を呈し、規模は長軸長4.7m、短軸長4.0mである。壁高は35cm～52cm残存する。壁溝は存在せず、壁は傾斜して立ち上がる。柱穴は4か所に配置される。いずれの柱穴も掘り方から、角柱が用いられていたと見られる。梯子穴は南東壁から50cm内側に入った位置に存在し、掘り方は隅丸長方形を呈している。貯蔵穴は南東壁際に設けられている。規模は長径40cm、短径36cm、深さ34cmである。炉は中心から北西に寄った位置でP1とP4の中間に設置されている。床面から5cm掘り込んで火床面が形成され、そこか

らさらに5cmの厚さにまで被熱による赤化が及んでいる。

床面は平坦に構築されているが、硬化面の範囲については明瞭ではない。

遺物の出土量は少ない。柱穴で囲まれた中央部の床面から破片の状態で僅かに出土しており、遺存状態の良い個体は出土していない。また、炉の北西側からは、焼土ブロックや炭化材が出土している。ほかには顕著な焼土の検出は見あたらず、焼失住居との断定は控えたい。

遺物（第182図） 土器7点を図示した。第182図1は折り返し口縁の壺である。口縁部に繩文が施されていた痕跡が残る。現状はかなり磨滅した状態である。2は無頸壺の口縁部になるだろう。5・6の鉢の口縁部は沈線による区画内に羽状繩文が施されている。

#### L 2 9 8 （第28図、図版19）〈8J-72・73グリッド〉

弥生時代後期の竪穴住居の中では大型の部類に入るL256の西側に位置し、一部古墳時代前期の竪穴住居L433と重複する。平面形は隅丸方形で、主軸方向は北西に傾く。規模は長軸長2.8m、短軸長2.5mで、壁高は10cm～57cm残存する。壁溝は存在せず、壁はやや傾斜して立ち上がる。柱穴と梯子穴は存在しない。住居のほぼ中央に深さ20cmのピットが存在し、その北西方に深さ5cmのピットが検出されている。貯蔵穴の設置は認められない。炉と考えられる火廻は存在しない。床面は平坦で全体に硬化面の折りがりが認められる。このように柱穴や炉の形跡がないことから、竪穴住居とする根拠は弱いが、平面形態や主軸の方向、床面の状態から竪穴住居と考えた。ただ、実際に住居としての機能を果たしていたかという点では決定的でない。

遺物は少ない。特に床面付近から出土している遺物は僅かで、土器片は小破片のみである。図示した土器は、1・2が古墳時代前期に属し、3は平安時代と考えられる。これらは覆土の上層から出土しており、この住居の使用時や廃絶時を示すものではない。第28図に挙げた拓本の小破片が、本住居の時期である可能性が高いと考える。

遺物（第28・182図） 土器3点を図示した。いずれも本住居の廃絶後に混入した土器である。遺構実測図の右側に掲載した拓本が廃絶時に近い遺物と思われる。第28図参考①は折り返し口縁で、下端部に刺突が施される。②は壺の肩部で沈線による区画内に網目状撚糸文が施文されている。③には沈線区画内に繩文が認められる。

#### L 2 9 9 （第29図、図版22）〈8J-52・53グリッド〉

弥生時代後期の竪穴住居が近接して分布する。北側にはL429、南側にはL256が存在し、東側にはL260が接するような状況で位置する。平面形は梢円形を呈し、主軸の方向は北西に傾く。規模は長軸長5.1m、短軸長4.7mで、壁高は10cm～51cm残存する。壁溝は北東側の壁下に存在し、このほかには認められず、壁は僅かに傾斜して立ち上がる。柱穴は4か所に存在する。各柱穴の掘り方の平面形は長梢円形で、削板状の柱材が使用されていた可能性が高い。各柱穴の深さはいずれも70cm以上である。このほかに北東壁に接するよう2か所のピットが検出され、対向方向になる南北壁際にも2か所のピットが検出されている。深さは20cm前後である。対の関係と見られるこのピットの機能については不明である。入口に伴う梯子穴は、南東壁から55cm入った位置に存在し、掘り方の平面形は梢円形を示す。貯蔵穴は東側の壁際に設置されている。円形の平面形を呈し直徑36cm、深さ24cmの規模をもつ。炉は中心から北西に寄った位置でP1とP4の中間に設けられている。床面から4cm掘り込んで火床面を形成し、被熱によって焼土化して硬化した層が5cmの厚さに認められる。

床面の硬化面形成範囲は明瞭に示すことができない。

遺物は少ない。図示した土器は床面から出土しているが、遺存状態が良好である個体は認められない。また、集中する様子も認められず、散在した状況で出土している。

遺物（第182・221図、図版58・72・92） 土器4点と石製品1点を図示した。第182図1の壺は胴部に対して比較的太い頸部をもち、胴部との接合部には段があり、そこに押捺が施されている。2・3の壺は折り返し口縁部に縄文の施文が認められ、3の頸部には沈線区画が巡る。4の壺には沈線による鋸歯状の区画がある。第221図197は砥石になる。

#### L 307 (第29図、図版22) (10J-52・53グリッド)

調査区の南西部に位置し、ほかの竪穴住居との重複が認められず単独で検出された。本住居の北側には、弥生時代後期の竪穴住居L371が存在する。平面形は円形に近く、主軸方向は北西に傾く。規模は長軸長4.7m、短軸長4.6mで、壁高は15cm～21cm残存する。壁溝は存在せず、壁は傾斜して立ち上がる。柱穴は4か所に配置されている。各柱穴の深さは浅く、配置状況も不揃いである。調査時には主柱穴と判断しているが、柱穴ではない可能性もたれる。梯子穴は南東側で壁から75cm内に入った位置に存在する。

貯蔵穴は東壁の壁下に接して設置され、規模は長径43cm、短径35cm、深さ27cmである。炉は中心からやや北西側に設置されている。床面から7cm掘り込まれ、被熱による赤化は6cmの厚さに認められる。

床面は平坦な状態を示し、中央部に硬化面の拡がりが認められる。硬化面は炉の北西側から壁の間、P3と南壁との間では存在が確認されていない。

遺物は破片が僅かに出土している。覆土中から出土している1は古墳時代前期の土師器で、本住居に後世に混入したと見られる。参考に示した①～④の破片が、本住居の廃絶時に近い時期を示していると考えられる。床面から出土した石器の70は礫器で、磨石の部類である。

遺物（第29・184・217図、図版88） 土器1点、石器1点を図示した。第184図1は古墳時代前期の壺になるであろう。第217図70は全体に使用痕を認める磨石である。出土位置から判断すると、弥生時代後期の礫石器と考えられる。

#### L 313 (第29図、図版22) (10J-94・95グリッド)

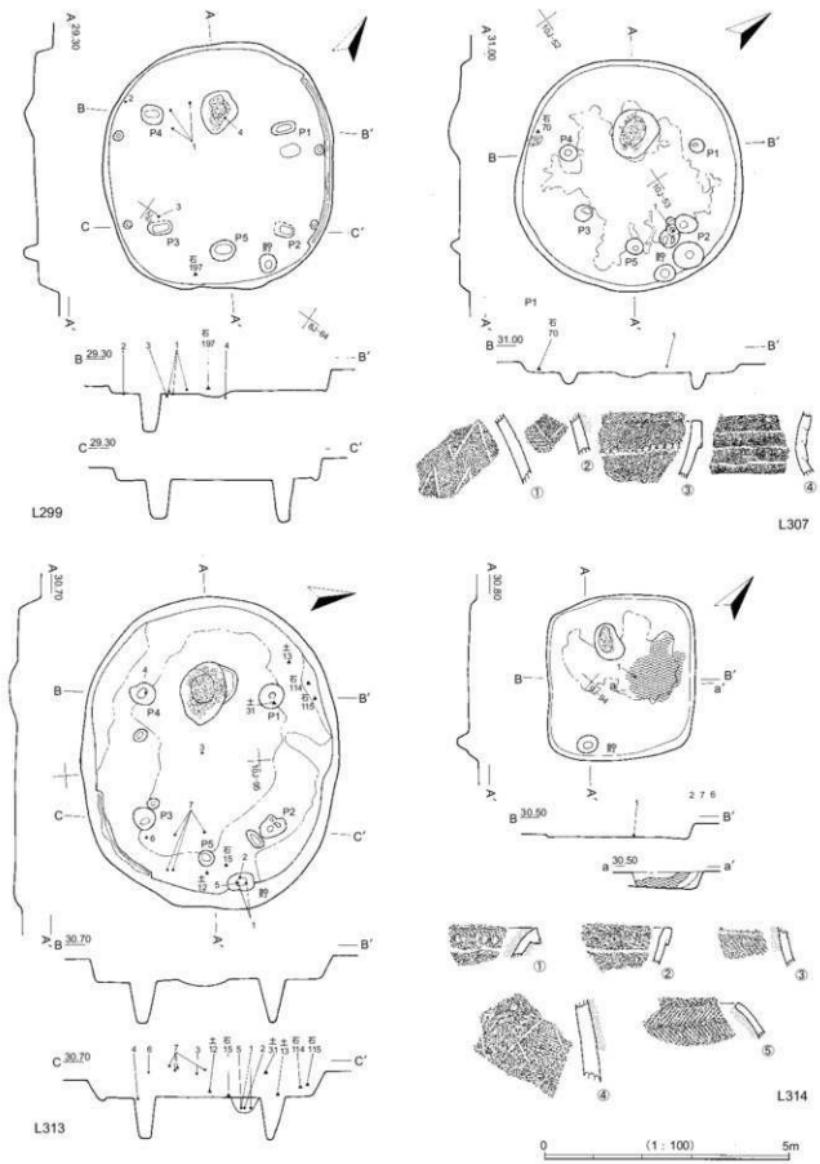
調査区の南でM区との境界付近に位置している。北側を溝状遺構であるL040が重複し、その溝状遺構よりも古い段階に、古墳時代中期の竪穴住居であるL305によって一部が壊されている。主軸方向をほぼ西に向け、平面形は橢円形を呈し、規模は長軸長6.4m、短軸長5.3mで、壁高は12cm～54cm残存する。壁溝は南東側の壁下にのみ存在が認められる。壁は傾斜して立ち上がる。柱穴は4か所に配置されている。

梯子穴は東壁から80cm中に入った位置に存在する。貯蔵穴は東側の壁下に接した位置に設けられている。長径51cm、短径36cm、深さ38cmの規模である。炉は中心から西に寄った位置でP1とP4の中間に設置されている。床面から7cm掘り込んで火床面が形成され、被熱による赤化が8cmの厚さに認められる。

床面は、柱穴を結んだ線の内側から炉の西側にかけて硬化面の拡がりが認められるほか、北側の壁付近と南側の壁近くにも部分的に存在が確認されている。

床面から出土している遺物は少なく、本住居に伴うと考えられる土器は貯蔵穴から出土している。貯蔵穴から出土しているのは、1の壺口縁部、2の鉢、5の鉢の3点である。土製品12は床面からやや浮いた位置で出土した土製勾玉である。また、石製品114・115は管玉である。

遺物（第184・185・203・204・212・218図、卷頭図版5、図版59・78・83・89） 土器7点、土製品3点、



第29図 L299・307・313・314住居

石器・石製品3点を図示した。第184図1は壺の口縁部である。折り返し口縁に網目状撚糸文が施されている。2は装飾をもたない鉢か無頭壺と考えられる。3と第185図7の壺は覆土上層から出土していることもあり、本住居の廃絶後に混入した土器と考えられる。5の鉢は貯蔵穴から出土し、底部を欠損している。第203図12の土製勾玉はCの字状に整形され、頭部がやや角頭気味になっている。第204図31は円錐形の先端に丸みをもたせた形態を呈し、その上部に貫通する孔を穿っている。

#### L 3 1 4 (第29図) (9J-83・84グリッド)

調査区の南西部で、竪穴住居が複雑に重複する地区に位置する。重複する構造は3軒存在し、南東側に本住居に先行する竪穴住居L437が、そして南西側には古墳時代中期の竪穴住居L354が存在する。平面形は胴張隅丸長方形を呈し、主軸の方向は北西に傾く。規模は長軸長3.4m、短軸長3.0mで、壁高は5cm～31cm残存する。壁溝は存在せず、壁はほぼ垂直に立ち上がる。柱穴と梯子穴は存在しない。貯蔵穴は南隅に近い位置に設置されている。楕円形を呈し、長径44cm、短径34cm、深さ24cmの規模である。炉は中心から北西に寄った位置に設けられている。床面から4cm掘り込んで火床面を形成し、被熱によって焼土化して硬化した層が5cmの厚さに認められる。

床面は炉の周囲に硬化面の形成が認められる。

遺物は少ない。床面からは高台が付いた手捏土器が出土したにすぎない。人工遺物以外には貝ブロックが検出された。住居の廃絶後、壁際に覆土の堆積が開始された後、住居の東側に貝の投棄が行われた状況を呈している。

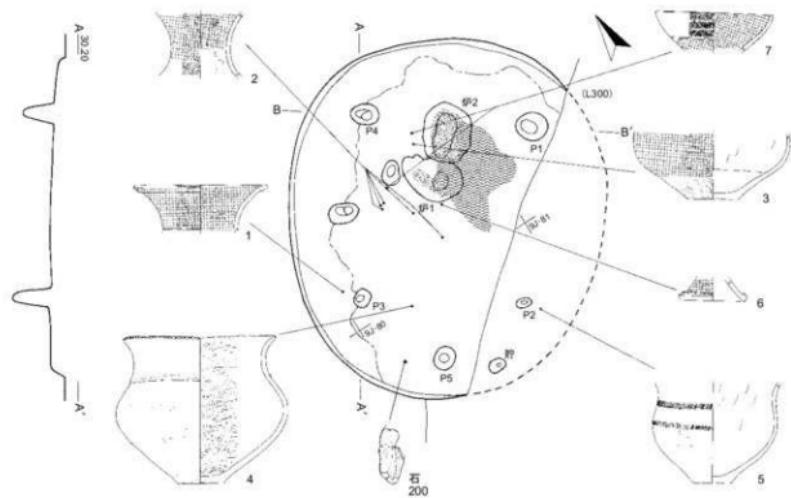
遺物 (第29・185図、図版59) 土器1点を図示した。第185図1は床面から出土した手捏土器で、底部縁辺に高台状の高まりが認められる。ほかに参考資料として第29図①～⑤の破片資料を提示した。①～④は壺の破片で、⑤は無頭壺の口縁部になる。

#### L 3 1 6 (第30図、図版23) (9J-70・71グリッド)

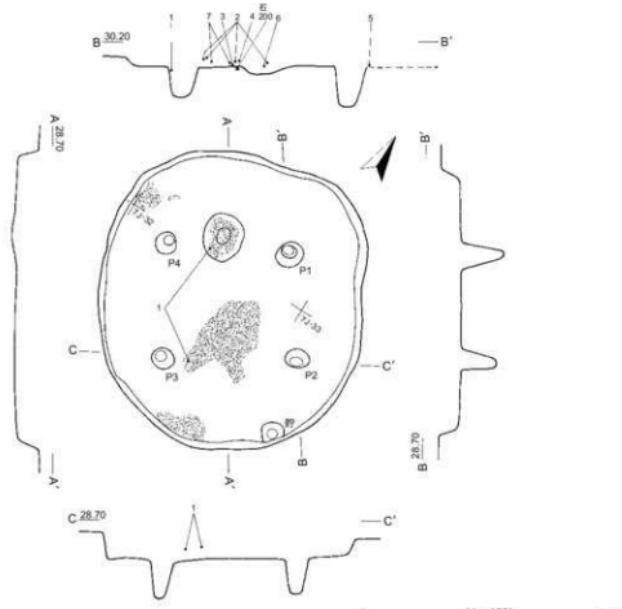
調査区の南西部に位置し、古墳時代以降の溝状遺構L300に南東側を壊されるが、竪穴住居との重複は認められない。平面形は楕円形を呈し、主軸の方向は北東に傾く。弥生時代後期の竪穴住居は主軸方向を北西に傾ける例が多く、主軸方向が北東のものは少数である。本住居の周囲には、L436・M002のように主軸方向を北東に振る住居が比較的近接して分布する。規模は長軸長7.4m、短軸長6.4m強で、壁高は最大で27cm残存する。壁溝は存在せず、壁はやや傾斜して立ち上がる。柱穴は4か所に存在する。各柱穴の掘り方の平面形は、P1・P2・P4が楕円形である。梯子穴は、南西壁の端から60cm入った位置に存在する。以上とは別にP3とP4の中間に楕円形を呈するビットが存在する。このビットの性格は不明である。貯蔵穴は南側の壁から僅かに離れた位置と想定される場所に設置されている。円形を呈し、深さ44cm前後と推測される。炉は中心から北東に寄った位置に設けられている。炉には作り替えの状況が認められる。当初は住居中心寄りに設けられ、その後にP1とP4の中間に移動したと考えられる。新しい炉は、床面から10cm掘り込んで火床面を形成し、被熱によって焼土化して硬化した層が8cmの厚さに認められる。

床面は西側の壁際を除いて硬化面の形成が確認され、全体にわたって広く踏み固められた状態を呈している。

遺物は比較的多く出土している。しかし、遺存状態の良い個体は少なく、4の壺が全容をとどめる遺存状態であるほかは、一部の遺存を示すにすぎない。人工遺物以外では、炉を覆うような状態で貝ブロックが検出されている。



L316



第30図 L316・321住居

遺物（第185・221図、図版59・72・92）土器7点、石製品1点を図示した。第185図1は緩やかに外反する壺の口縁部である。頸部に沈線が周回している。2の壺は頸部の下位に網目状撚糸文の施文が認められる。3は壺の胴部下位で、大きく張りをもつ状態を示している。4の壺は頸部に輪轍装飾を付けず、胴部との境に弱い段を設けている。5の壺には頸部と胴部の境の段と、胴部最大径の位置に押捺が巡る。第221図200は砥石である。

### L 3 2 1 (第30図、図版23) (7J-22・32グリッド)

調査区の北西部に位置する。竪穴住居との重複は認められない。南西側にL322が近接し、東側にL276という、いずれも弥生時代後期の竪穴住居が近接して存在する。平面形は楕円形と見られるが、北側の壁が張り出して、やや歪んだ状態を呈している。主軸は北西に傾き、長軸長6.1m、短軸長5.4m、壁高は35cm～53cm残存する。壁溝は存在せず、壁はほぼ垂直に立ち上がる。柱穴は4か所に配置され、入口の梯子穴は存在しない。貯蔵穴は南東側の壁下に接して設置され、平面形は楕円形を呈し、長径42cm、短径35cm、深さ33cmの規模をもつ。炉は中央からやや北西に寄った位置で、P1とP4の中間に設置されている。床面から9cm掘り込まれ火床面が形成されている。

床面は平坦な状態を示しているが、硬化面の範囲は明瞭ではない。

遺構の遺存状態が比較的良好に保たれていた割には遺物は少ない。床面からやや浮いた位置から出土した1の壺口縁部が図示可能であったにすぎない。また人工遺物以外では、床面から焼土ブロックが検出されている。焼失住居である可能性がある。

遺物（第185図）土器1点を図示した。第185図1は折り返し口縁の壺の口縁部である。口縁部の外面端部に刻みが施されている

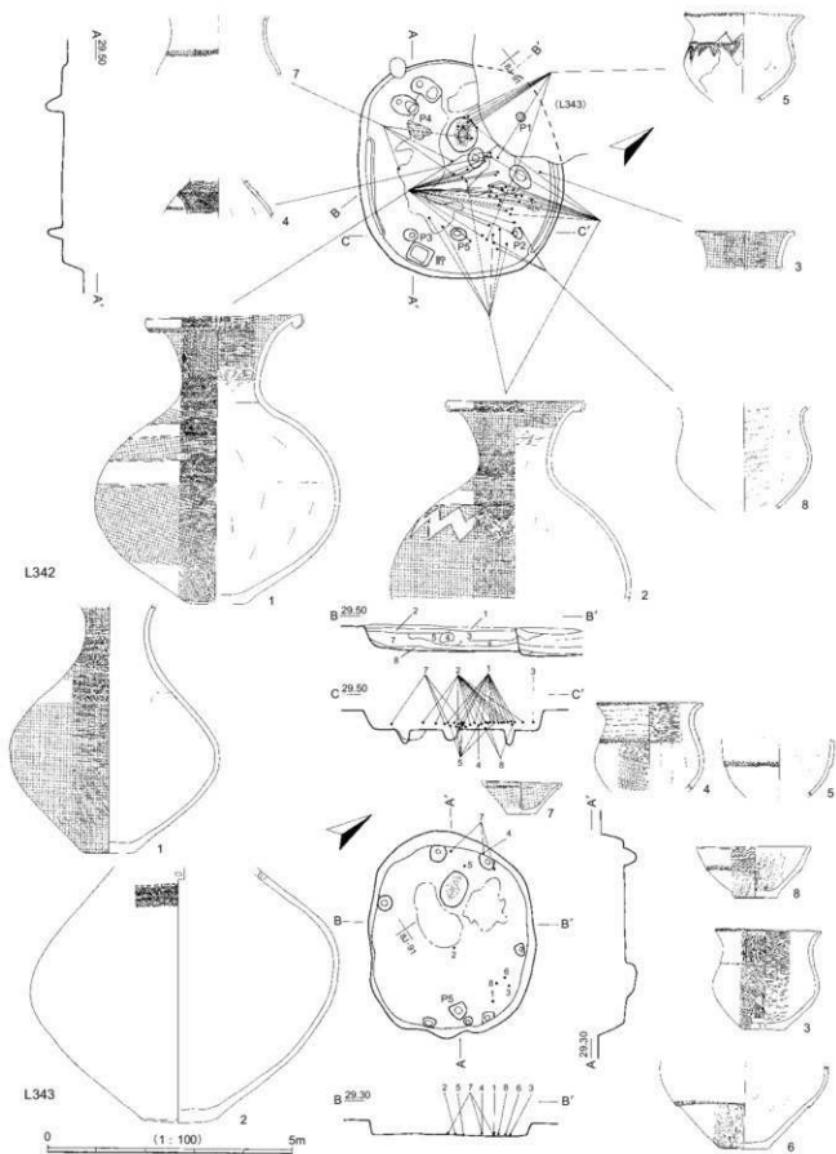
### L 3 4 2 (第31図、図版24) (8J-90・91グリッド)

3軒の竪穴住居が重複して検出されている。本住居はその中では最も古い段階の構築になる。まず本住居の廃絶後に弥生時代後期の竪穴住居L343が北側の壁を壊し、平安時代の竪穴住居L344が西側の壁を壊している。平面形は楕円形で、主軸方向は北西に振れる。長軸長4.4m、短軸長4.2mで、壁高は最大で43cm残存する。壁溝は主軸方向と平行する北東側と南西側の壁下に伴い、壁はやや傾斜して立ち上がる。柱穴は4か所に配置され、梯子穴は南東側の壁から75cm内に入った位置に存在する。また、P1とP2の中間に深さ約20cmのピットが存在し、P4に隣接して不明ピットが検出されている。貯蔵穴は南側の壁下に接して設けられ、平面形は長方形を呈する。長径46cm、短径36cm、深さ21cmである。炉は中心からやや北西に寄った位置に設置されている。床面から僅かに掘り込んで火床面が形成されているが、被熱による赤化が深くまで認められる。

床面は柱穴に囲まれた内側を主体に硬化面の扱がりが認められる。

遺物は土器主体に比較的多く出土している。ただ、床面に密着した状態で出土しているのは5・7・8の壺で、1・2の壺はやや浮いた位置から出土している。

遺物（第190・191・217図、図版61・73・88）土器8点、石器1点を図示した。第190図1の壺は全体の役7割が復元できた。器形は、胴部が球状に張って、肩部から緩やかに頸部に続き、口縁部は開き折り返し口縁となる。折り返し部分は口縁に対して直下し、下端部に押捺が加えられている。また、頸部の下位から肩部の上位にかけては、回転結節文区画の羽状繩文帯が施され、肩部下位と胴部中位には沈線区画の中に羽状繩文が施文されている。2の壺は頸部下位と肩部に沈線区画の中に羽状繩文を施し、胴部上位



第31図 L342・343住居

に連続する鋸歯状区画を沈線によって行い、その中に縄文を施文している。施文順位としては縄文を鋸歯状に施し、沈線区画を行い、沈線の外をヘラミガキしているように見える。4の壺の肩部には弱い段が肩部の上下に作られ、その両段の間に山形沈線区画を行い縄文を施している。5の壺は頸部と胴部に沈線による文様をもつ。頸部と胴部の境に付く段から上位の頸部には、沈線による三角形区画が付けられ、境から下位の胴部には、境目を底辺とする三重沈線の三角形が連続して施されている。第191図6の壺の胴部上位にも鋸歯状の沈線文が施されている。6・7の壺の頸部には輪積装飾などは行われていない。

### L 3 4 3 (第31図、図版24) (8J-81・91グリッド)

上述したL342の北側を壊して構築されている。平面形は全体にやや歪んでいるが、胴張開丸長方形と見られ、主軸方向は北西に傾く。長軸長の規模は4.2m、短軸長は3.4mである。壁高は21cm～54cm残存する。壁溝は存在せず、壁はやや傾斜して立ち上がっている。先行するL342とは主軸の方向や平面形が近似している。本住居はL342の位置を変えての建替えである可能性も考えられる。柱穴は存在しない。梯子穴は南東壁から中央側に30cm入った位置に設けられている。貯蔵穴は梯子穴を中心にして左右の壁下に存在するピットが該当する可能性をもつが、同規模なピットが炉の北西側の壁下にも存在することから、貯蔵穴という断定はできない。むしろ入口側と炉側のピットが対になって、何らかの機能を有していた可能性が高い。炉は中心から北西に寄った位置に設置されている。床面から10cm掘り込んで火床面が形成され、8cmの厚さでロームが赤化して硬化している。

床面の硬化面形成は炉の周辺で認められる。

遺物は土器を主体に比較的多く出土している。土器は大きく3か所に分かれて出土している。炉の北側からは4・5の壺と7の鉢が、中央からは2の壺、東側の隅からは1の壺のほか、壺・鉢が出土している。図示した土器はいずれも床面から出土している。

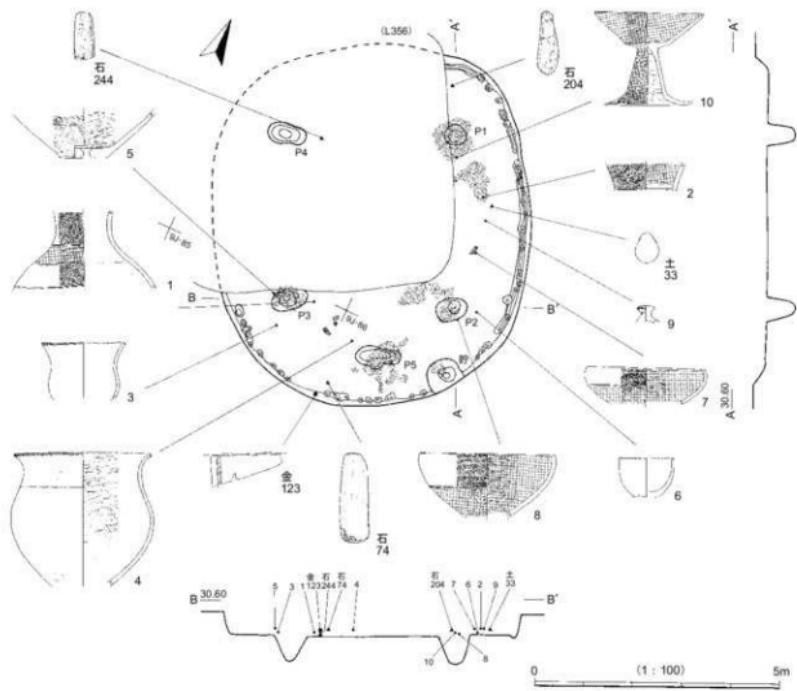
遺物 (第191・192図、図版61・62・73・74) 土器8点を図示した。第191図1・2は胴部の中位が張り肩部から頸部に緩やかに移行する壺である。口縁部については遺存せず不明である。頸部の下位と肩部に回転結節文区画の縄文帯が存在する。2の肩部には焼成後の穿孔が存在する。第192図3の壺は外面全体にヘラミガキが施され、頸部と胴部との境に弱い段が巡る。また、底部の中央に焼成後両側から穿られた孔が存在する。4の壺は頸部に輪積装飾が行われている。7・8の鉢はほぼ完形品に近い遺存状態である。7の体部はやや外反気味に開き、口縁部は折り返し口縁である。

### L 3 5 7 (第32図、図版22) (9J-76・85グリッド)

調査区の南西地域に位置し、4軒の竪穴住居が重複して検出されている。本住居以外は古墳時代に構築されており、北側に位置するL098と西側で大きく重なるL356・L304が前期に比定されると考えられる。したがって遺存状態は不良である。平面形は楕円形で、主軸方向は北からやや西に傾く。長軸長7.3m強、短軸長6.5m強と推定され、壁高は最大で40cm残存する。壁溝は東側の壁下に存在が認められ、小ピットが伴っている。この小ピットは遺存する壁下にはほぼ全域に認められるので、浅い壁溝が全体に存在していた可能性が高い。柱穴は4か所に配置され、掘り方の平面形は楕円形を呈する。梯子穴は南壁から80cm中側に入った位置に存在し、掘り方の平面形は長楕円形を呈する。貯蔵穴は南東壁の壁下に接して設置され、長径70cm、短径58cm、深さ49cmの規模をもつ。炉はL356によって壊され詳細は不明である。

遺存する床面は平坦であるが、硬化面の形成は認められない。

遺物は比較的多く出土している。床面付近から出土した土器を図示したが、10の高環はL356に伴う可



第32図 L357住居

能性が高い。人工遺物のほかに焼土ブロックが検出されている。焼失住居の可能性がある。

遺物（第193・194・204・217・221・223・229図、図版63・74・78・88・92・94・99） 土器10点、土製品1点、石器・石製品3点、金属製品1点を図示した。第193図1・2の壺は頸部に繩文が施されている。1は沈線区画が頸部下端と肩部に巡る。3の甕は口径が胴部最大径を上回り、輪積装飾をもたない。4の甕は頸部の幅が狭く、胴部は上位に最大径をおく。6の鉢は口唇部に押捺が施されている。第194図9は実用的な器種とは考えられず、ミニチュアの部類になるとと思われる。10の高壺は本住居に伴う土器ではない。第204図土製品33は鉛形を呈し、上部に貫通する小孔が存在する。

### L 389 (第33図、図版26) (11K-32・33グリッド)

調査区の南端部に検出され、ほかの堅穴住居との重複は認められない。ただ、古墳であるL150Aの盛土の下に位置するため、長期間にわたって埴丘下にあったと推測される。平面形は梢円形で、主軸方向をほぼ北に向いている。長軸長は4.9m、短軸長は4.6mである。壁高は43cm～66cm残存し、壁溝は存在しない。壁はやや傾斜して立ち上がる。柱穴は4か所に配置される。梯子穴は南壁から45cm入った位置に設けられ、掘り方の平面形は長方形を呈する。貯藏穴は梯子穴の東側で壁に接して位置する。長径40cm、短径38cm、

深さ39cmである。炉は中心から北に寄った位置でP1とP4の中間に設けられている。床面から8cmにまで被熱によるロームの赤化が及んでいる。また、壺の肩部の破片を炉の南側に立てていた。この土器は2の壺である。

床面は平坦に構築されているが、硬化面範囲の明瞭な括りは行えない。

遺物は炉の周辺に実測可能な土器が集中して分布する。特に壺が目立ち、6の壺が炉の北側から、柱穴P1と炉の間からは7・9の壺が出土している。人工遺物のほかには住居の南に粘土を多く含む土の堆積が認められた。

遺物（第195・196・223図、図版63・64・74・94）土器9点、石製品1点を図示した。第195図1の壺は肩部と胴部上半に回転結節文が巡る。2は炉から出土した壺の肩部から胴部にかけての破片である。沈線区画の山形文が描かれ、3の壺にも沈線による鋸歯状区画が認められる。また、3には網目状撚糸文の施文が認められる。第196図5の壺と考えられる底部には、焼成後に両側から行われた穿孔がある。7～9の壺は頭部に輪積装飾が施されていない。6の壺頭部と胴部との境には刺突が巡るが、境の位置が7の壺などと比較すると口縁部に近い。

#### L 4 1 9 (第33図、図版23) (8J-II・12グリッド)

古墳時代中期の竪穴住居であるL339が南東側に重複して存在するが、本住居の床面までの破壊は行われていない。平面形は円形に近く、主軸方向は北西に傾く。規模は主軸方向に4.7m、主軸と直交する方向に4.6mで、壁高は最大で50cm残存する。壁溝は存在せず、やや傾斜して立ち上がる。柱穴と梯子穴は存在しない。貯蔵穴は南東側の壁下に接して設置されている。平面形は円形で、規模は長径は29cm、短径28cm、深さ16cmである。炉は中心から北西に寄って壁に近い位置に設けられている。床面から7cm掘り込まれ、被熱による赤化は9cmの厚さに認められる。炉の南側には、第198図1に提示した壺の上半部破片を立てるように埋設してあった。

床面は平坦に構築されている。ただ、硬化面の形成範囲については、はつきりとは線引きができない。

遺物は少ない。上述した炉内の破片のほかは、2の壺と3の鉢が床面から出土している。

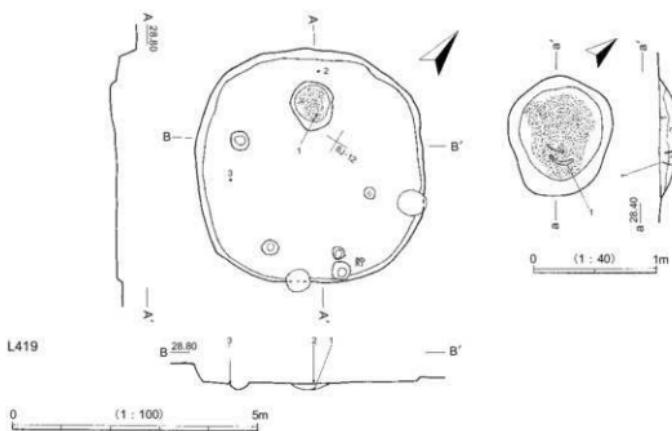
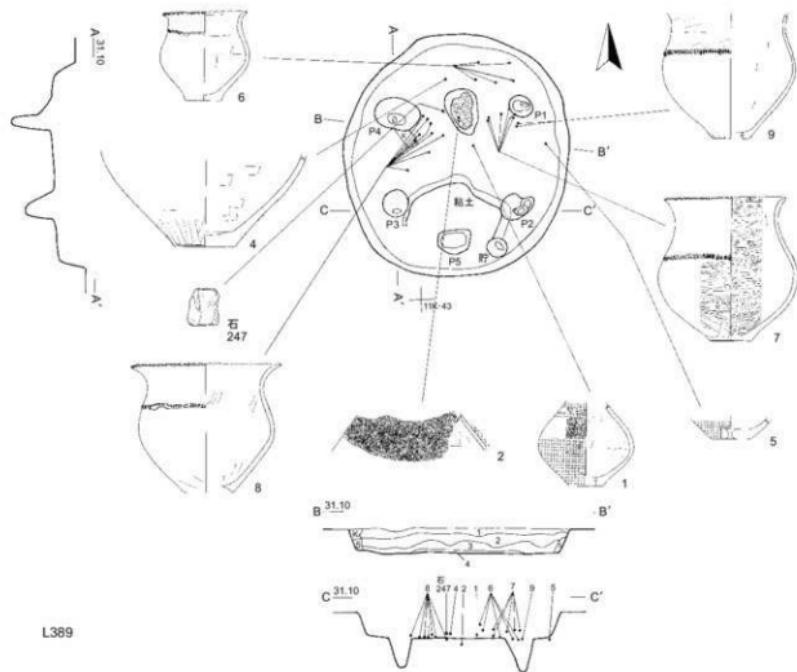
遺物（第198図、図版64・74）土器3点を図示した。第198図1は炉に埋設していた壺の破片を復元している。胴部の上位に沈線の区画が巡り、その中に羽状繩文が施される。2の壺は口縁部が折り返し口縁で、口唇部が小さく押捺されている。3の鉢は口縁部が僅かに内彎するような形で、沈線による区画が行われ、羽状繩文が施されている。

## 2 方形周溝墓・溝状遺構

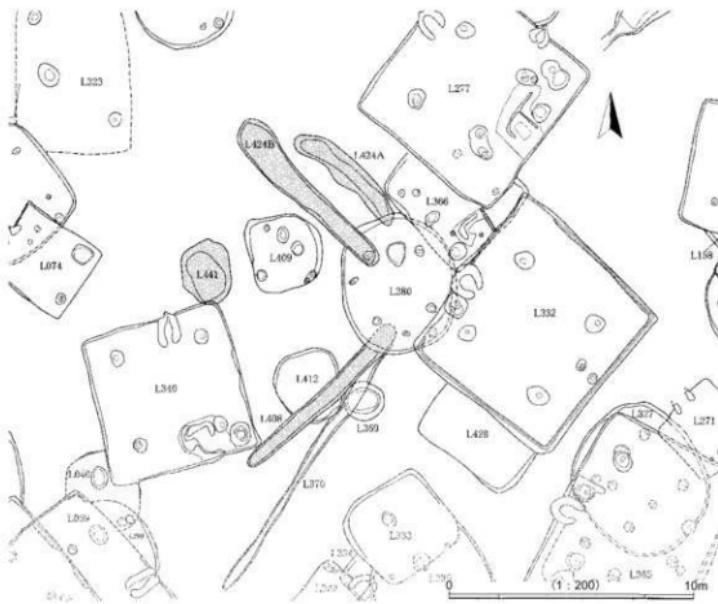
弥生時代の方形周溝墓は2基確認されている。そのうち1基からは埋葬施設が検出されているが、調査の段階では個別にL408・424A・424B・441という遺構番号が付けられている。溝状遺構については、調査区南側で検出したL130が、この時期と判断した。検出した長さは短いが、断面形は「V」字形を呈している。土坑は、時期決定が可能となる遺物が伴わないので、遺構の新旧関係から判断して弥生時代に帰属するという土坑が存在する。詳細が明らかにならないので、これらは一覧表に位置や規模について提示するにとどめたい。

#### L 4 0 8・4 2 4 A・4 2 4 B・4 4 1 (第34・35・36図) (7Jグリッド)

調査区の北側で検出された溝状遺構3条と埋葬施設1基である。調査時点では、それぞれを別々の遺構



第33図 L389・419住居



第34図 方形周溝墓と埋葬施設の位置

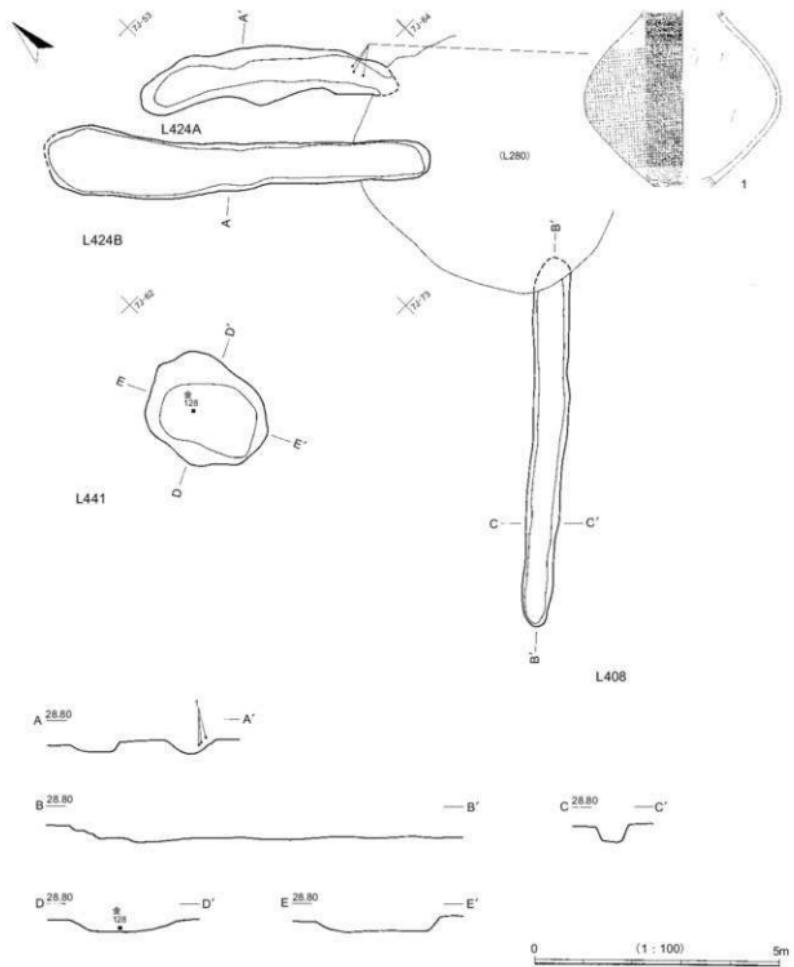
になると判断し、個別に遺構番号を付して調査を進めた。整理段階の初期においても、個別の遺構と見ていた。しかし、整理作業の進捗にしたがい、L424Bとその北東側に平行するL424Aとの配置状況は、すでに報告済みであるK区の方形周溝墓、その中の数基の配置状況と近似することに気がついた。そのような視点に基づいて、L441の北東側に存在するL424A・Bと、南東側に存在するL408との配置を見ると、方形周溝墓の溝である可能性が高くなってきた。この判断は妥当と考えるが、存在していたと推定される北西側と南西側の溝が検出されていないので、多少検討すべき点を残すが、報告書作成段階で方形周溝墓の扱いをすることとした。次に周溝と埋葬施設について説明を加えていく。

北東側の溝であるL424Aは、長さ約5.1m、中央部の幅1.2mで、検出面からの深さは30cm前後になる。溝は直線的ではなくL424B側にやや湾曲する。溝の南東部側の底面からやや浮いた位置で、弥生土器の壺が1点出土している。

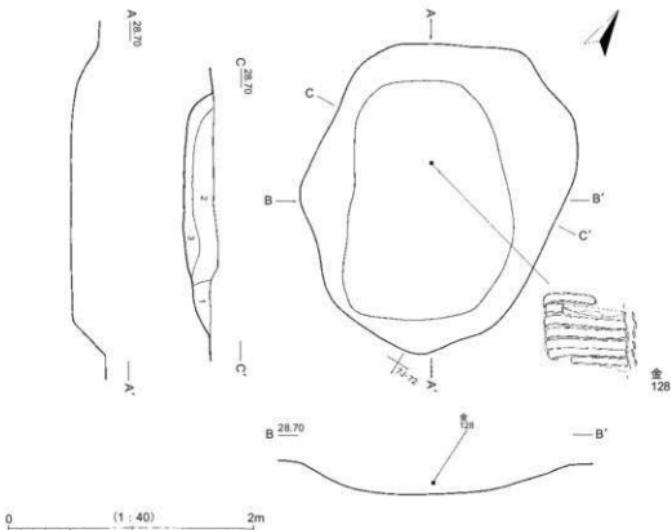
L424Bは直線的に掘られ、長さ7.8m、幅は0.8m～1.45mで北西側で幅広となる。検出面からの深さは5cm～20cmである。

L408は、長さ7.5m前後と推定され、L424Bと同規模と考えられる。溝の幅は0.6m～0.7mで、検出面からの深さは30cm～37cmで、南西端部は階段状に立ち上がっている。

以上の溝の内側と考えられる位置に、埋葬施設と考えられるL441が存在する。平面形は不整な楕円形を呈し、長軸長265cm、短軸長213cm、深さ31cmの規模をもつ。土層断面からは木棺の痕跡を窺うことはで



第35図 L408・424A・424B方形周溝墓・441埋葬施設



第36図 L441埋葬施設

きないが、木棺が埋設されていた可能性は高い。出土遺物で注目されるのは、螺旋状鉄釧である。これは埋葬施設の中心部からやや北側に寄った位置で、底面から僅かに浮いて出土している。被葬者が着装していたと推測される。ほかに土器片が出土している。

遺物（第198・229図、巻頭図版4、図版65・95） 土器1点と金属製品1点を図示した。第198図1はL424Aから出土した壺である。口頸部と底部を欠損する。胴部の中位が大きく張り、肩部の上位に回転結節文で上下を区画した羽状繩文帯が存在する。底部付近と施文部を除いて赤彩が施されている。

第229図128はL441から出土した螺旋状鉄釧である。幅約6mmで断面形が扁平な蒲鉾形か凸レンズ形を呈する板状品が7重の螺旋になり、内径は45.5mm～48.5mmになる。表面に織物の付着がある。

#### L130（第37・38図）（IIK-04～08グリッド）

調査区の南側で検出された断面形が「V」の字状を呈する溝状遺構である。第37図に位置を示したとおり、台地の南縁辺の現状での崖線に平行するように東西に約13mが検出されている。西側の端部は、後世の溝状遺構であるL040の底面に僅かに検出され、東側については同じL040によって切られ、全体の状況が不明になっている。したがって、西側及び東側はさらに統一していたことも十分に推測される状況である。また、弥生時代後期の竪穴住居であるL129とも重複関係にあるが、その新旧については明らかでない。

検出した13mの区間では、溝の幅は60cm～90cmで、東側から西側に向かって狭くなる。検出面からの深さは18cm～56cmで、底面の幅は10cm～20cmと狭まっている。このように上場が開き、底面が狭くなるので、断面形態は「V」の字形を示す。

次に第38図中段のA-A'の土層断面についてふれておきたい。1層：全体にやや暗く、ローム粒を微



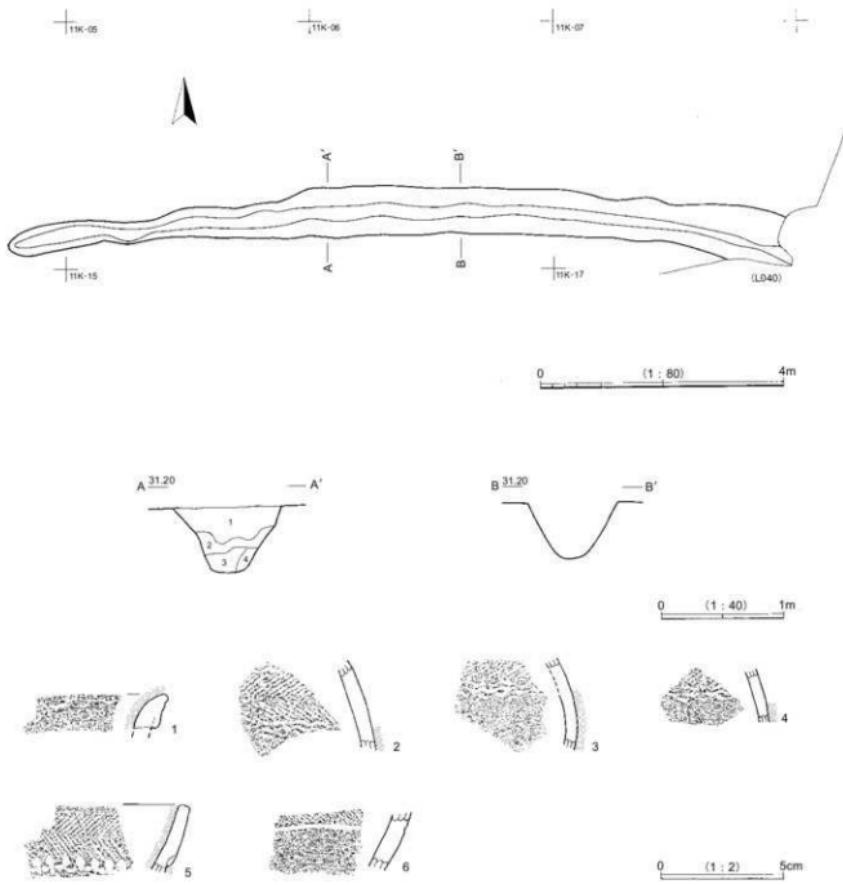
第37図 L130満状遺構の位置

量に含む暗褐色土。2層：ロームブロックを多く含む褐色土。3層：ローム粒を微量に含む暗褐色土。4層：ロームブロックを多く含む暗褐色土。

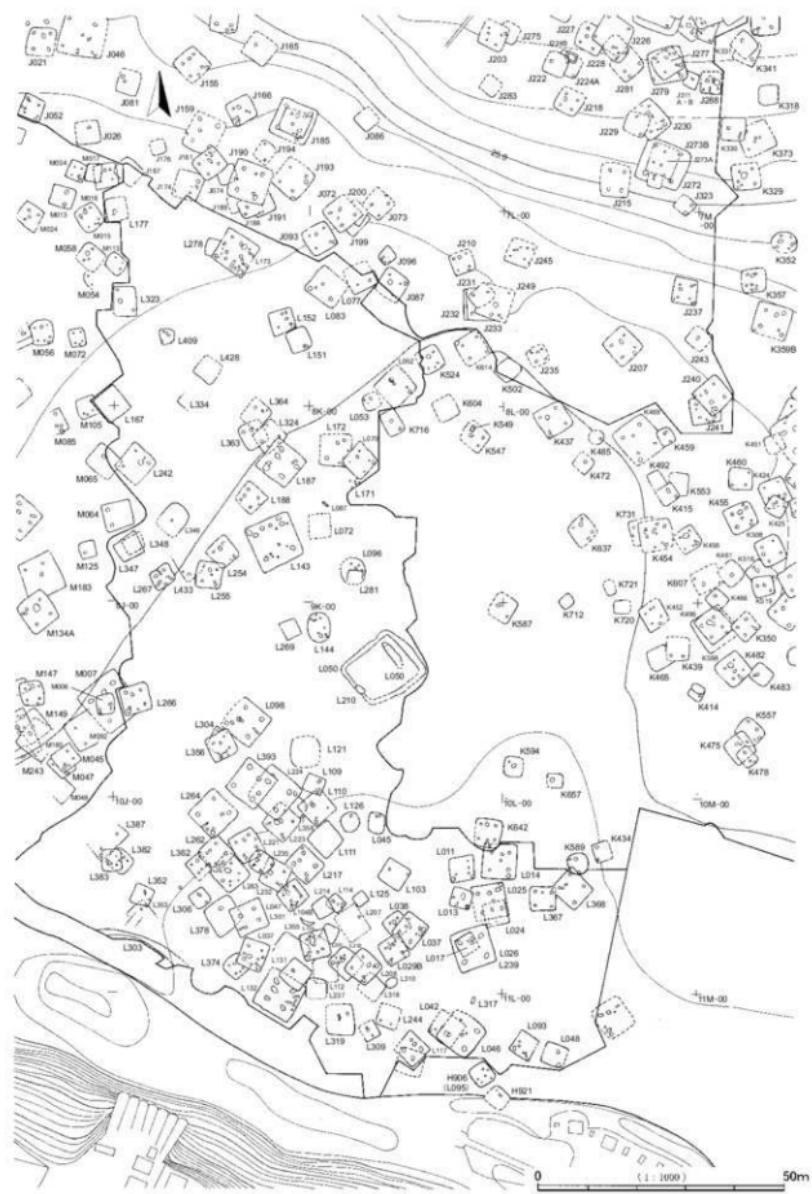
出土している遺物は少ない。弥生土器の破片が覆土中から出土しているが、復元可能となる個体は存在しない。弥生土器は後期に比定される。

**遺物（第38図下段）** 土器片6点を図示した。第38図1は折り返し口縁で内面に赤彩が施される。壺の口縁部である。2～4は壺の肩部の破片になる。回転結節文と羽状繩文が認められる。5は鉢の口縁部になろう。また、6も鉢の体部上位の破片と見られる。沈線による区画が存在する。

このほかに参考資料として1点、ほかの遺構から出土した土器について紹介しておきたい。この土器は溝の東端部に重複するL128という土坑から出土した壺の破片である。出土状況から判断すると、溝の覆土中の可能性が高いからである。第159図1の壺胴部がそれで、胴部の中位からやや上の位置に文様が施されている。胴部から底部にかけて全体に赤彩が施されている。



第38図 L130溝状遺構と出土遺物



第39図 L区古墳時代前期の遺構分布図

## 第4節 古墳時代

### 1 古墳時代前期の竪穴住居

古墳時代前期に位置づけた竪穴住居は112軒である。第39図に示したように、平坦部が広く展開し、弥生時代後期の竪穴住居と重なるように分布する。また、10J区や10K区では、前期の竪穴住居間で時間的前後関係をもち、著しい重複が認められる。この中から個々の平面図を取り上げた竪穴住居は34軒で、抽出率は30%である。

#### L011 (第40図、図版3) (10K-37・38グリッド)

調査区の東側に位置し、K区から僅かに西側に入りて位置している。弥生時代後期の竪穴住居であるL012とL016を壊している。古墳時代中期の竪穴住居であるL010よりも先行する竪穴住居である。平面形は方形を呈し、方向はほぼ北を向くと考えられる。ただ、炉の位置が不明であり、入口の梯子穴が東側から検出されているので、炉の位置によっては主軸方向が西を向いていた可能性も否定できない。推定した主軸方向の規模は5.3mで、その直交方向では5.1mである。壁高は最大で23cm残存し、壁溝は存在しない。柱穴は対角線上に4か所配置される。各柱穴で柱痕跡が確認され、廃棄時に柱の基部が埋設状態であったことが推測される。入口の梯子穴は上述したように東側の壁の中央部から80cm入った位置に存在する。貯蔵穴は南東隅と南西隅の2か所から検出された。この2か所のピットがいわゆる貯蔵穴の機能を有していたとしても、その時間的前後関係の有無や機能差は明らかでない。炉はL010によって壊された北側に設けられていたと考えられるが、存在の痕跡が見当たらず、正確な設置位置は明らかにならない。

床面は中央部に硬化面の形成が認められる。

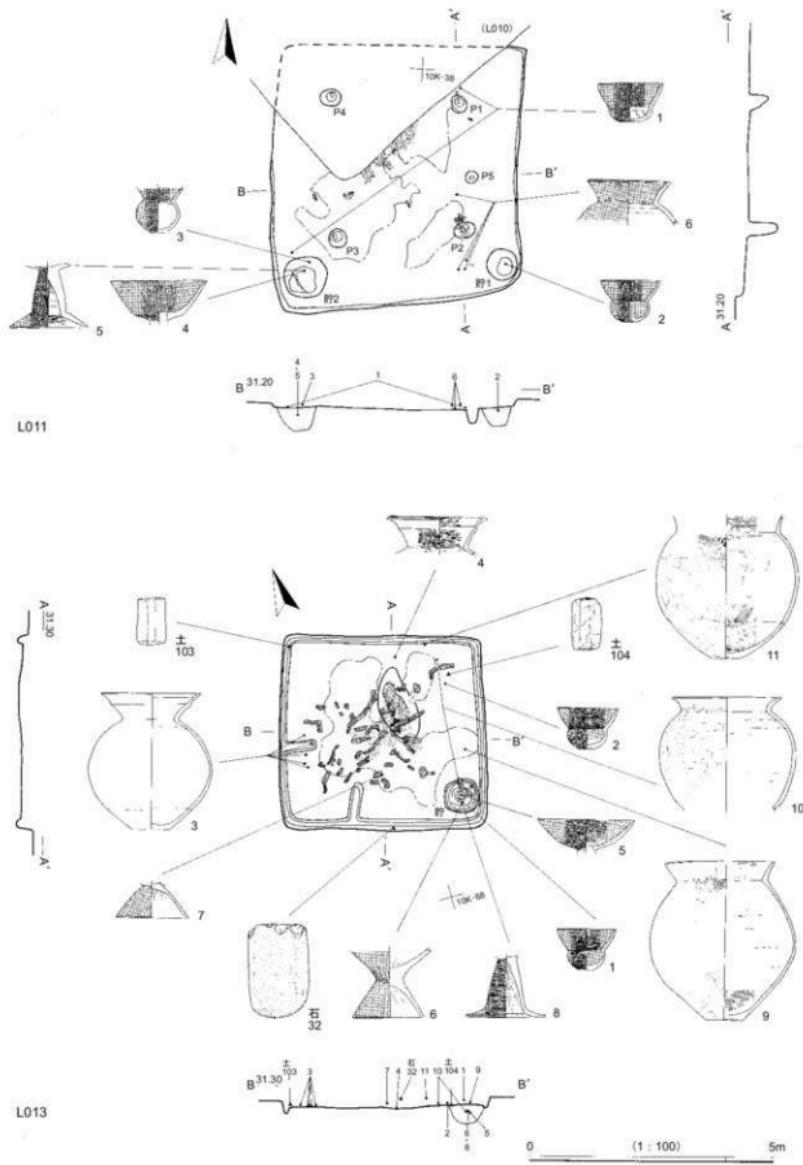
遺物は少ないが、1・2・3の坩が別々の位置から出土し、4・5の高壺が貯蔵穴2の覆土上層から検出されている。図示した土器はすべて床面レベルからの出土である。ほかに炭化材や焼土が散在して出土している。焼失住居の可能性がある。

遺物 (第131図、図版28・29) 土器6点を図示した。第131図1~3は坩である。それぞれ形態に違いが見られる。1は体部が小さく体部高が低く、それに対して口縁部高は高く、口径が体部径を大きく上回る。2は体部高と口縁部高の差は小さいが口径は体部最大径を上回っている。3は口縁部を欠損する。体部は球状に膨らみ、この3点の中では最も丸味がある。4の高壺部は直線的に外傾して開く。5の高壺脚部は脚部高がやや高く、中膨らみの形状を呈する。また、脚裾部が小さく内彎しながら開いている。6は壺と考えられる。口縁部は「く」の字状に外傾し、口唇部が角頭状を呈している。外面から口縁部内面は赤彩が施される。

#### L013 (第40図、図版3) (10K-57・58グリッド)

古墳時代前期の竪穴住居であるL025と弥生時代後期の竪穴住居L016を壊している。平面形は方形を呈し、主軸方向は北から僅かに東側に振れる。主軸方向の規模が3.9m、その直交方向で4.2mで、床面の遺存状態は比較的良好である。壁高は1cm~20cmである。壁溝は全周し、南壁と西壁の下の壁溝から内側に伸びる間仕切り溝が、それぞれ1条存在する。柱穴と入口の梯子穴は存在しない。貯蔵穴は南隅に設けられ、深さは42cmになる。炉は中心からやや北東に寄った位置に存在する。床面から10cm掘り込まれ、火床面は焼けて赤化している状況を呈している。

床面は壁際を除き硬化面の形成が認められる。



第40図 L011・013住居

遺物は1・2の壺、3・4の壺、9～11の甕が特に集中せず、床面か床面に近いレベルで出土している。9・11の甕は土圧で押しつぶされた状態で、それぞれが破片の状態で出土している。貯蔵穴から出土している遺物は、底面からではなく、覆土中での検出である。磨石状の礫石器である石器32は覆土中から、管状土錐である土製品103・104は床面から出土している。ほかには炭化材と焼土が中央部を主体に多量に検出された。焼失住居の可能性が高い。

遺物（第131・206・214図、図版29・80・84）　土器11点と土製品2点、石器1点を図示した。第131図1・2の壺はほぼ同形態である。体部高が低く、口縁部高が高く、口縁部は内彎して立ち上がり、口径が体部径を大きく上回る。3の壺は口縁部が有段を呈している。4についても有段口縁になると考えられるが、3と大きく異なる点は、内面に凹線状の凹み部が認められる点と、口唇部の形態である。5の高環脚部はやや内彎気味に開く。8の高環脚部は円錐形の脚柱部から外方に折れて裾部が広がる。外面は横方向のヘラミガキで仕上げられている。9・11の甕は胴部に長胴化の様相が認められる。外面調整にハケメの使用が認められるが、ヘラナデによる調整によって仕上げられている。第206図103・104は管状土錐である。第214図32の石器は繩文時代の礫石器に共通した特徴を有する。

#### L 0 1 4 （第41図、図版3）（10K-39, 10L-30グリッド）

古墳時代前期の竪穴住居であるK642と北西部で重複する。平面形は隅丸方形を呈し、主軸は北から僅かに東に振れている。規模は主軸方向に7.2m、その直交方向に7.0mで、壁高は最大で12cm残存するにすぎない。遺存状態は良好ではないが、遺構全体が明らかに捉えられている。壁はやや傾斜して立ち上がる状況が認められ、壁溝が東壁から南東隅を除いて巡る。柱穴は対角線上の4か所に配置され、それぞれから柱痕跡を検出した。したがって、住居の廃絶時には柱の基部が埋設状態にあったことが明らかである。入口に伴う梯子穴は検出されていない。炉は柱穴P1とP4の中間付近に設けられているほかに、その南側の住居中心部にも1か所検出された。検出状況からは同時に機能していたのか、あるいは時間差が存在するのか明らかにならない。貯蔵穴は南東隅寄りでP2の南側に設けられている。南壁下から延びる間仕切り状の溝と、北側に東西に延びる溝がL字状に貯蔵穴を囲む。貯蔵穴の平面形は円形を呈し、長径81cm、短径80cm、深さ43cmの規模をもつ。

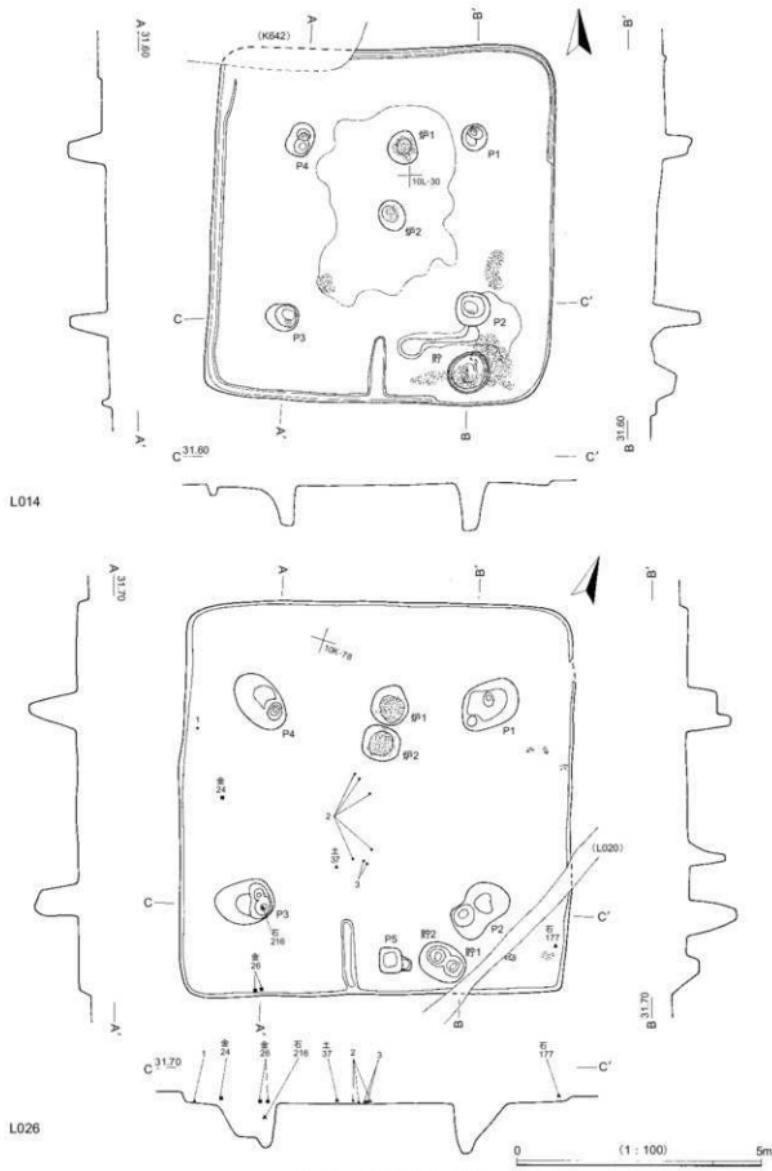
床面は全体に平坦な状況が認められる。硬化面の拡がりを中央部に認めるが明瞭な範囲は捉えきれない。

遺物は少ない。実測して図示できる土器は存在しない。破片資料から古墳時代前期に比定した。ほかにも鉄製釘1点を図示したにとどまる。人工遺物以外では、床面の数か所から焼土を検出した。さらに貯蔵穴の中からは炭化材が出土した。焼失住居の可能性が高い。

#### 遺物（第225図、図版97）　第225図19の鉄釘1点のみを図示できた。頭部と先端部を欠損する。

#### L 0 2 6 （第41図、図版4）（10K-78・88グリッド）

竪穴住居が3軒重複している。古墳時代前期のL017が入れ子状に重複し、弥生時代後期の竪穴住居L027を壊している。L017の掘り込みが浅かったために、床面の破壊は免れている。主軸方向は北からやや西側に振れ、平面形は隅丸方形である。規模は主軸方向に8.1m、その直交方向に8.1mで、壁高は6cm～29cm残存する。壁はやや傾斜して立ち上がる様相が見られ、壁溝は存在しない。ただ、南壁下から延びる間仕切り溝が1条検出されている。柱穴は対角線上の4か所に配置される。柱の掘り方を掘った結果、柱の建替えが認められ、拡張された住居と判断するに至った。梯子穴は南側の壁の中央部から内側に入った位置に存在し、方形の掘り方を呈している。炉はP1とP4の中間に設けられている。図の炉1である。そ



第41図 L014・026住居

の南側に隣接して炉2が存在する。調査時における土層観察では、炉1と炉2は時間的前後関係があり、炉2の後に炉1が設けられた状況を示している。炉2は拡張前の住居L239に伴う炉という可能性も考えられる。貯蔵穴も2か所検出された。

床面は全体に平坦な状況が認められるが、硬化面の拡がりは明瞭でない。

遺物は少ない。土器類は床面から出土しているものの、遺存状態が良好に保たれている個体は認められない。2と3は炉器台であるが、炉から離れた位置から出土している。また、軽石製品が柱穴P3から検出され、金属製品2点や土玉が出土している。

遺物（第132・204・206・220・222・225図、図版79・80・91・93・97） 土器3点、土製品2点、金属製品3点、石製品2点を図示した。第132図1は高環の脚部と考えられ、全体に緩やかに開き外面に赤彩が施されている。2・3は炉器台である。2は破片で出土し、接合の結果、全体の形が明らかになった。第204図37は土玉である。柱穴の中から出土した第222図216には擦痕が見られ、砥石のように用いられていたと推測される。第225図24・25の金属製品は、それぞれ一部のみの遺存で、種類は特定できない。

#### L 0 3 7 (第42図、図版5) <10K-65・75グリッド>

L026の西側に位置し、5軒の竪穴住居が重複する。弥生時代の竪穴住居で、すでに取り上げて説明した南東側に位置するL036を本住居が壊している。南側には古墳時代前期の範囲で捉えられるL029Bが本住居の一部を壊し構築されている。北西側にはL038が存在し、本住居よりも先行すると考えられる。

主軸を北西方に取り、平面形は方形を呈する。主軸方向に5.5m、その直交方向に5.9mの規模をもち、壁高は最大で25cm残存する。壁溝は認められない。柱穴は対角線上の4か所に配置されており、掘り方の途中から平面形は方形を呈している。角柱が用いられていた可能性がある。梯子穴は南東壁の中央付近から中に入った位置に存在する。貯蔵穴は東隅に設けられている。その南西側にもピットが掘られている。貯蔵穴と同様な機能を有していたかもしれないが、性格不明のピットにしておきたい。炉は中心から見て北西の位置に設置されている。床面から10cm掘り込んで火床面が形成され、良く焼けた状況を示している。

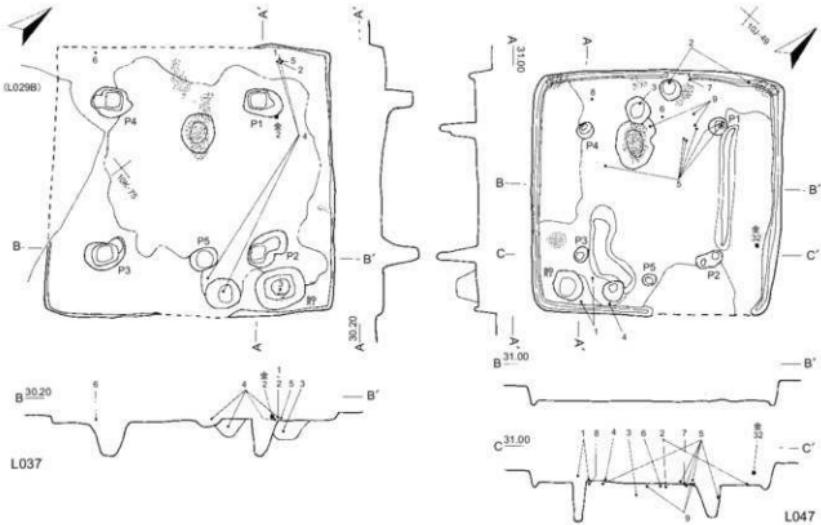
床面は壁近くを除いて、特に4か所の柱穴を結んだ線の内側に硬化面の存在が確認できる。また、東隅の貯蔵穴付近も踏み固められた状況を呈している。

遺物は土器と鏡が出土している。北隅からは1・2の鉢と4の壺が出土している。また、高環の環部も出土した。貯蔵穴からは3の壺が出土している。この壺は貯蔵穴が埋まりかけた途中から出土しており、貯蔵穴に蓋状の覆いが存在していた可能性を示している。柱穴P1に近接して出土したのは銅鏡である。

遺物（第136・224図、巻頭図版3、図版31・32・96） 土器6点と銅鏡1点を図示した。第136図1の鉢は丸底で、口縁部が内彎しながら立ち上がっていく。内面では口縁部と体部の境が明瞭である。2の鉢は小さな底部を作り、口縁部はやや外反して開く。3の壺は球状に張りをもつ胴部から「く」の字状に折れて口縁部が聞く。外面はハケメが残るが、ナデによって仕上げられている。4の壺も球状の胴部で、中位が大きく膨らんでいる。外面はヘラミガキが行われている。5は高環の環部である。全体に緩やかに内彎して開く。外面の下部に稜は認められない。6は壺である。小型の部類で、外面にハケメがつく。第224図2は銅鏡である。面径が20.4mmの小型の素文鏡で、鏡背に赤色顔料の付着が認められる。

#### L 0 4 6 (第42図、図版6・7) <10K-27・28グリッド>

調査区の南側に位置し、古墳時代前期の竪穴住居であるL042と後世の溝状遺構であるL040に壊されている。平面形は隅丸方形を呈し、主軸方向は北西に傾いている。規模は主軸方向に7.7m前後を測り、直



第42図 L037・046・047住居

交方向は7.8mになる。壁は傾斜しながら立ち上がり、壁高は最大で28cm残存する。壁溝は存在しない。全体に遺構の遺存状態は不良である。柱穴は対角線上に4か所配置される。入口の梯子穴と貯蔵穴は存在しない。炉はP1とP4の中間付近に1か所と、住居の中央部に小規模な火床を2か所に設ける炉が設置されている。その両方も床面から僅かに掘り込んで火床面が形成されている。

床面はやや平坦をかいており、また、踏み固められた硬化面の存在も不明瞭である。

遺物の出土量は僅かである。南隅周辺からやまとまって出土している。柱穴P3に近接して3の壺が出土し、5・6の甕と土製支脚3点が近接して出土した。支脚や甕は炉で使用される機会が多いと考えられるが、炉から離れた位置から出土した点が注目される。柱穴P1からは壺が出土している。掘り方内から検出されたので、柱を抜き去った後に入ったと推測される。東隅に近い壁際からは石製勾玉が出土した。

遺物（第138・207・212・218図、巻頭図版5、図版32・81・83・89） 土器6点、土製品3点、石器・石製品2点を図示した。第138図1の壺は丸底で、胴部の下位に張りをもたせ、口縁部は若干内彎するようく開く。2の壺は平底をもち口縁部は直線的に外傾して開く。ハケメの痕跡が残る。3の壺は口唇部を欠損している。柱穴内から出土した4の壺は張りが弱く、口縁部が上方に立ち上がり、甕の様にも見える。5の甕の胴部は球状に大きく膨らみ、口縁部は緩やかなカーブを描きながら外反する。6の甕の胴部も大きく膨らむ。第207図の土製品132～134は鳥帽子形の支脚である。第218図8は勾玉である。全体に整ったCの字形に整形され、腹部の断面は梢円形を呈する。

#### L 0 4 7 (第42図、図版7) (10J-49・59グリッド)

弥生時代の竪穴住居L104AとL233を壊している。さらに古墳時代前期の竪穴住居L232の一部も掘り込んでいる可能性が高い。平面形は隅丸方形を呈し、主軸方向は北西を向く。主軸方向に5.1m、その直交方向で5.0mの規模となる。壁高は最大で47cm残存する。壁溝は一部で途切れた状態が見られるが、全周していた可能性が高い。柱穴は対角線上に4か所配置される。柱穴P1とP2の間に30cmの幅で、細長く設けられた土手状の盛り上がりが存在する。住居の空間設定に機能していた施設と考えられるが、具体的な使用状況は不明である。入口の梯子穴は、南東壁の中央部から60cm入った位置に存在する。貯蔵穴は南隅に位置し、深さは39cmである。この貯蔵穴と柱穴P3の周辺にもL字状に配置された土手状の施設が存在する。ほかに炉の北西側、北西壁の中央付近、貯蔵穴に隣接する位置の3か所からピットが検出された。炉の北西側から検出されたピットは炉を壊しているので、伴う可能性が低いが、ほかの2か所のピットはその点は明らかでない。炉は中心から見て北西に位置し、P4に寄って設けられている。

床面は平坦な状況が認められるが、硬化面の範囲は不明瞭である。

遺物は床面から多く出土している。実測可能な土器は、炉の北側と貯蔵穴の周辺の2地点に分かれ、1・4の壺が貯蔵穴に近い床面から出土した。炉に近い位置からは6の壺が出土し、8の甕は柱穴P4に近い位置で出土している。北西壁の下に隣接して2の壺と7の高环脚部が出土している。また、鉄製ヤリガンナが北東側の壁下から出土した。ほかに小規模な焼土の堆積が検出されている。

遺物（第138・218・225図、巻頭図版5、図版33・68・89・97） 土器9点、石製品1点、金属製品1点を図示した。第138図1～4は壺である。形態的特徴は様々であるが、3点は床面付近から出土している。1は体部高が低く、口縁部が内彎気味に高く立ち上がる。2は体部高と口縁部高がほぼ同じで、口径も胴部径を大きさは上回らない。3・4は口縁部を欠損するが、4の体部高は低いと見られる。5の壺は胴部の下位に最大径を置き、外面は横方向のヘラミガキが行われている。6の壺は球状形の胴部から口縁部が

「く」の字状に外傾する。外面はハケメを施した上にヘラミガキを施している。7の高坏は脚柱部が中膨らみを呈し、裾部は僅かに外反する。8・9の甕は胴部の上半部に最大径がある。外面はヘラナデによつて仕上げられている。第225図32は鉄製ヤリガンナである。

#### L 0 5 2 (第43図、図版7) (7K-84・94グリッド)

調査区の北東部でK区との境界近くに位置している。古墳時代中期の竪穴住居L051と南西側で大きく重複し、北隅を古墳時代後期の竪穴住居L056によって壊されている。平面形は隅丸方形を呈し、主軸方向は北西に振れている。規模は主軸方向に6.6m、その直交方向に6.6m前後で、壁高は最大で24cm残存する。壁はやや傾斜して立ち上がり、壁を検出した部分についてはその下に壁溝が検出されている。この状況から推測すると全体に壁溝が巡っていた可能性が高い。柱穴は対角線上に4か所配置したと考えられる状況であるが、柱穴P1については検出することができなかった。また、入口の梯子穴も存在していない。貯蔵穴は柱穴P2近くに設置され、長径64cm、短径62cm、深さ44cmの規模をもつ。炉は3か所存在する。中心的な炉は、存在が想定される柱穴P1と、位置の明らかなP4の中間に設置されている。この炉の平面形は橢円形を呈し、床面から5cm程度掘り込んで火床をなし、10cmの厚さまで被熱による赤化が及んでいる。

床面は中央部から柱穴の周間にかけて硬化面の拡がりが認められる。

遺物の出土量は少ない。図示可能な遺物は土器3点である。1の鉢と2の器台は柱穴P2に隣接して出土し、3の甕は炉に近い位置から出土している。また、焼土の堆積が大きくなれば4地点に検出され、焼失住居の可能性を示している。

遺物 (第141・214図、図版35・68・85) 土器3点、石器1点を図示した。第141図1は鉢で、平底の底部から体部は全体に内彎しながら立ち上がる。外面はハケメを施しその上にナデを加えている。2の器台は器受部と脚部がそれぞれ直線的に開く。3の甕は口縁部は「く」の字状に外傾し、口唇部に工具による押捺が加えられている。押捺は口唇部外端部に行われているが、全体に小波状を呈している。

#### L 0 7 0 (第43図、図版8) (8K-22・32グリッド)

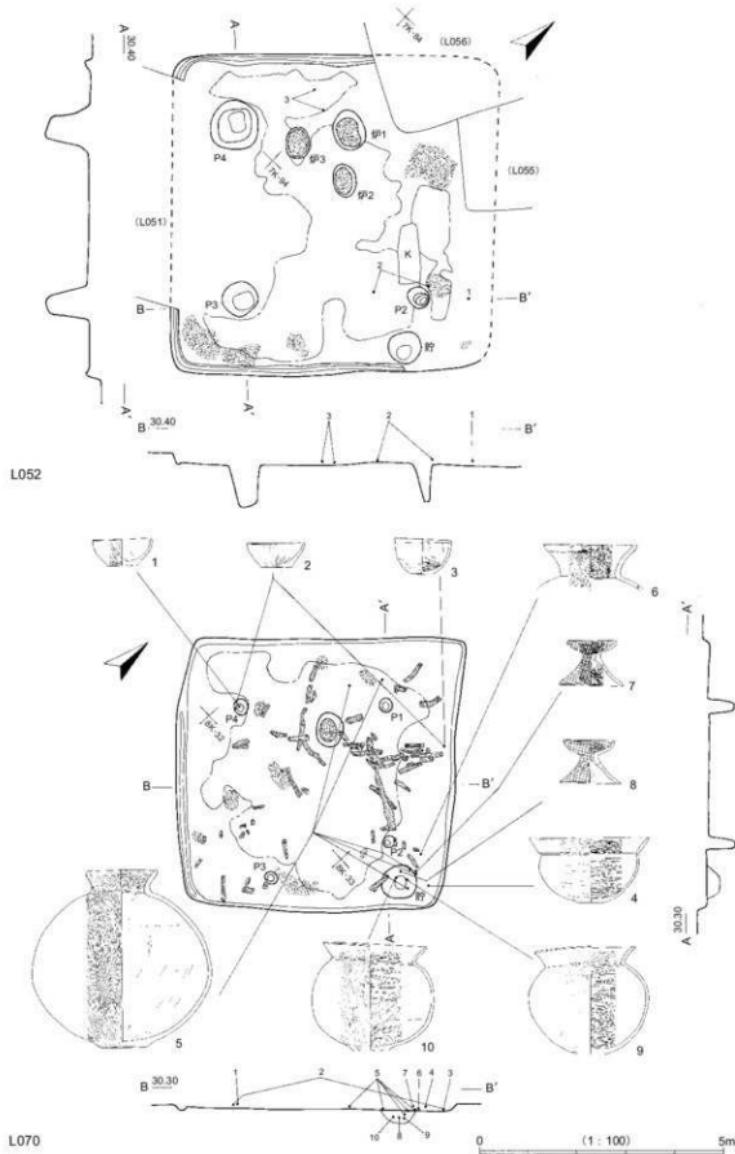
4軒の竪穴住居が重複し前後関係をもって検出されている。本住居に先行するのは、弥生時代後期の竪穴住居であるL184の1軒である。全体として遺存状態は良く保たれている。主軸を北西方向に向け、平面形は隅丸方形である。主軸方向に5.7m、その直交方向に5.6mの規模で、壁高は最大で13cm残存するにすぎない。壁溝は南西側の壁の下にのみ存在する。柱穴は4か所に存在する。ただ、対角線上に位置するには3か所で、P3の配置は定位とは離れて存在する。柱穴と断定するにも躊躇するが、ほかに該当するピットは認められない。梯子穴は存在しない。貯蔵穴は東隅に設置されており平面形は円形を呈し深さは32cmである。炉は中心から北西に寄った位置に設置されている。

床面は中央部の比較的広範囲に硬化面の形成が認められる。

遺物は貯蔵穴とその周辺からまとめて出土した。7の器台は貯蔵穴の周囲から、8の器台と9・10の甕は貯蔵穴の底面からやや浮いて出土している。この3点は貯蔵穴の周辺に置かれていて、貯蔵穴内に転落した可能性がある。また、貯蔵穴近くの床面から出土した6の甕は、器台に転用された可能性がある。

人工遺物のほかには炭化材と焼土が床面から出土している。焼失住居と考えられる。

遺物 (第144・212図、図版36・37・83) 土器10点、石器1点を図示した。第144図1～4は鉢である。1～3は体部がやや内彎して立ち上がる小型の鉢で、4は口縁部が外傾して開く。5の甕は胴部が球状に張り、外面はヘラミガキで調整される。口縁部の端部が欠けているが、破断面に調整を加え使用していた



第43図 L 052・070住居

と見られる。7・8の器台は完形に近く脚部の形態が近似する。9・10の甕は貯蔵穴内から出土した。胴部中位に膨らみをもち、口縁部は「く」の字状に外傾する。外面はハケメによる調整である。

#### L 109 (第44図、巻頭図版2、図版11) (9J-99, 9K-90グリッド)

竪穴住居の重複が著しい地域に検出され、本住居に先行する4軒の竪穴住居の、それぞれ一部を壊す形で構築されている。先行する遺構の黒色覆土中の壁の検出が難しかったため、結果として遺存状態が不良と見える状況となった。平面形は方形を呈し、主軸は北から僅かに東に振れている。規模は主軸方向に3.5m前後とその直交方向に3.9mで、壁高は最大で40cm残存する。壁はやや傾斜して立ち上がり、壁溝は存在しない。南東側の壁下がやや幅広に凹状となるが、これは掘りすぎによる可能性が高い。柱穴と入口の梯子穴は存在しない。貯蔵穴は南の隅近くに設置されている。炉は住居の中心から北東に寄った位置で東隅にも近い位置に設けられている。掘り込みも明瞭でなく、火床の発達の程度も低い。

床面は中央部に硬化面の形成が認められる。東側に比較し、西側では硬化面の範囲は明瞭ではない。

遺物は貯蔵穴の周囲と貯蔵穴の中からまとめて出土している。実測して提示した土器はすべてここから出土している。貯蔵穴の底面付近からは1の壠、2の鉢、7の甕が出土し、覆土上層から3の壺が出土している。4の器台、5の高杯、6の甕が貯蔵穴周辺の床面からの出土である。また、人工遺物のほかに炭化材や小規模な焼土ブロックが検出されおり、焼失住居の可能性が高い。

遺物 (第150・151図、図版40・41・75) 土器7点を図示した。第150図1の壠は完形で出土している。体部が小さく口縁部は僅かに内彎してやや高く立ち上がる。2の鉢は体部と口縁部との境が明瞭で、口縁部は外反して開いている。

4の器台の脚据部はやや外方に広がる。5の高杯の脚部は長めで、柱実となり据部が「ハ」の字状に開く。第151図6の甕の外面調整はハケメの上にヘラナデを施して仕上げている。それに対し、7の甕はハケメによる外面調整のみを行っている。全体の土器様相から本住居は、古墳時代前期の後葉に位置づけられると考えられる。

#### L 111 (第44図) (10K-20・21グリッド)

弥生時代後期の竪穴住居の覆土中に構築され、一部について壁の立ち上がりが捉えられていない。このような状況が、草刈遺跡西部全域で展開された遺構検出の典型である。主軸は北西を向き、平面形は方形を呈する。主軸方向の規模は5.8m、その直交方向に5.5mで、壁高は最大で11cm残存する。壁溝は存在しない。また、柱穴と梯子穴、貯蔵穴も存在しない。炉は中心からやや北西に寄った位置に設置される。

床面は中央部を主体に硬化面が拡がっている。

遺物の出土は僅かである。2の器台脚部は推定プランの外側から出土しているが、本住居に伴う可能性が高いので、ここで図示することとした。

遺物 (第151図) 土器2点を図示した。第151図1は鉢である。体部外面は横方向のヘラナデで調整され赤彩が施されている。2は器台脚部である。透孔が3か所に穿たれている。この2点の遺物は共に床面から出土した。ただ、1の鉢は古墳時代中期末葉から古墳時代後期にも類似器種が存在するので注意する必要がある。

#### L 117 (第44図、図版12) (11K-25・35グリッド)

調査区の南地区に位置し、古墳の周溝であるL150に切られている。ほかの竪穴住居との重複は認められないものの、遺構の遺存状態は良いとはいえない。主軸方向は北東を向き、平面形は方形を呈し、規模

は主軸方向に5.7m、その直交方向に5.2mで、壁高は最大でも18cm残存するにすぎない。壁溝は存在しない。柱穴は4か所に配置されている。柱穴の掘り方から推測すると、断面四角形の角柱が使用されていた可能性がある。また、廃棄時に柱を抜き取った可能性ももたれる。入口の梯子穴と貯蔵穴は存在しない。炉は中心から北東に寄った位置に設置されている。

床面は柱穴の内側と炉の北東側に硬化面の存在が確認されている。

遺物は床面からやや浮いた位置で出土しているが、土器の遺存状態は不良である。石器が1点出土しているが、これは石鏃で、本住居に直接関わる遺物ではない。

遺物（第152・212図、図版70・83） 土器2点と石器1点を図示した。第152図1は壺の頭部である。円形の刺突を巡らせ、その下位に櫛描文が周回し、口縁部にかけて赤彩が施される。2は壺の口縁部で、外面と内面にハケメによる調整が認められる。石1は繩文時代の石鏃で、第212図1に掲載した。

#### L132（第45図、図版13）（11J-07・08グリッド）

調査区の南端部地区に位置し、4軒の竪穴住居と2基の土坑、それと1条の溝状遺構が新旧関係をもつ。この中では溝状遺構であるL040が最も新しくなるが、これによって大きく壊されている状況にはない。土坑であるL375には壊されているが、古墳時代前期に比定した竪穴住居L131との時間的前後関係は不明瞭である。平面形は隅丸方形を呈し、主軸方向は北西を向く。規模は主軸方向に8.6m、その直交方向にも同様な規模があったと推定され、壁高は最大で52cm残存する。壁は傾斜しながら立ち上がり、壁溝が部分的に存在する。住居の中心から北西寄りに炉を設け、柱穴は対角線上に4か所に配置される。各柱穴の掘り方から3回の建替えの状況が考えられる。入口の梯子穴は南東側の壁中央部から60cm内側に入った位置に存在する。掘り方は長梢円形を呈し、板状の梯子の基部が埋設されていたことが想像される。南東側から3か所のピットが検出されたが、貯蔵穴と確定できる施設は存在しない。炉には火床部が2か所に認められ、住居の中央部の火床が先行して設けられたと考えられる。その後に北西側の火床部が使用されたと推測される。

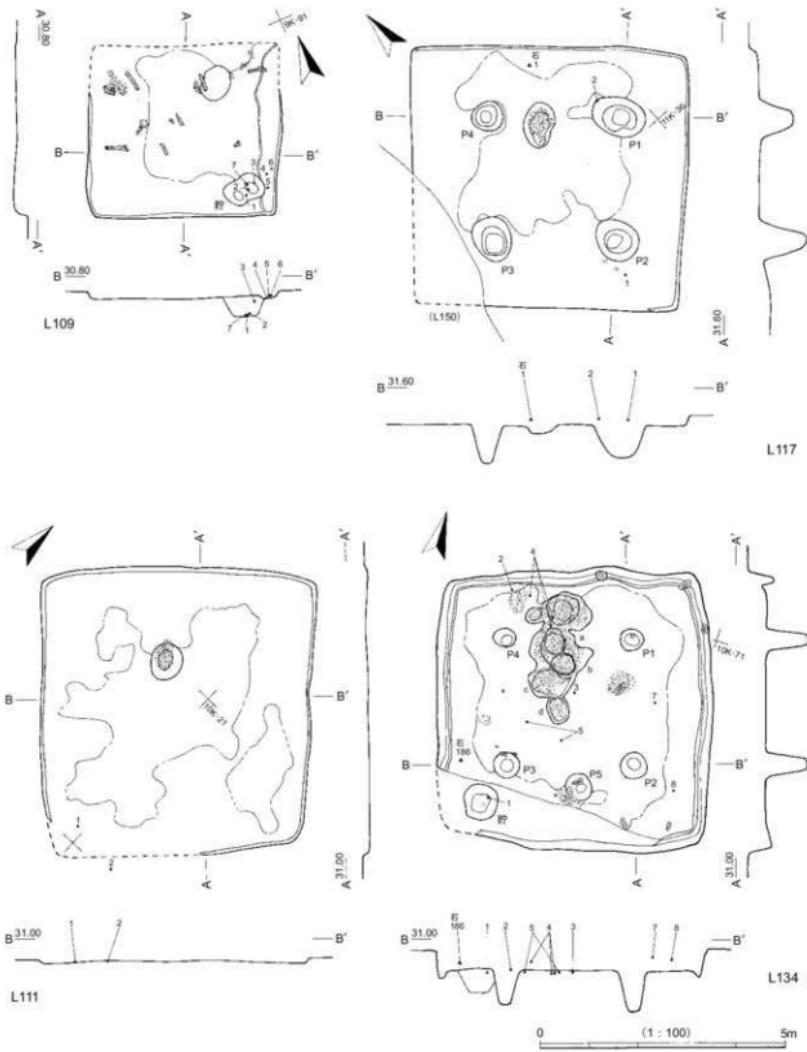
床面は中央部に硬化面の形成が認められる。

遺物は僅かに出土し、実測可能となった遺物は2点で、1の壺が床面から出土している。もう1点砥石が南西壁付近の床面から出土している。また、焼土ブロックや炭化材が僅かに出土しており、焼失住居の可能性がもたれる。

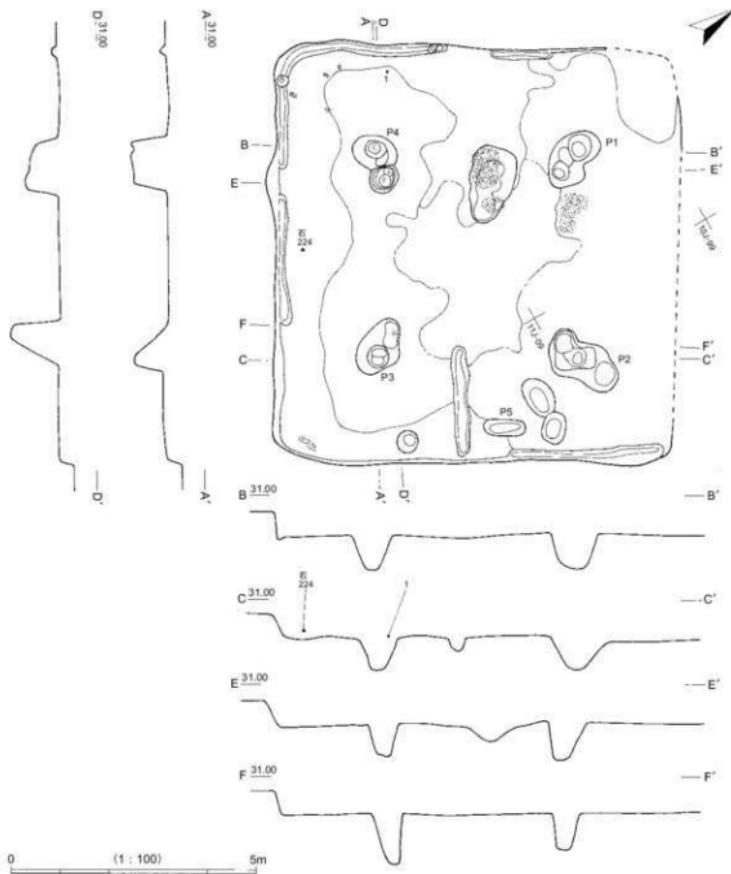
遺物（第159・211・222図、図版45・77・93） 土器2点、土製品1点、石製品1点を図示した。第159図1は壺である。体部上半部に張りをもち、口縁部が短く外傾する。口唇部は尖り気味となり、内面側に稜線が見られる。外面は縱方向にヘラミガキが施され、内面を含め全体に赤彩が施される。全体に器壁が薄い。2は覆土中から出土した壺である。外面は横方向のヘラナデで調整され、赤彩が施されている。土製品は土器片鱗で混入と考えられる。第222図24は軽石製砥石の欠損品である。

#### L134（第44図、図版13）（10K-70・80グリッド）

4軒の竪穴住居の重複があり、その中では最も後出の遺構になると考えられるが、先行する竪穴住居の覆土中の壁が捉えられない部分もある。平面形は方形を呈し、主軸を北から僅かに西に傾けている。規模は主軸方向に5.7m、その直交方向に5.7mで、壁はやや傾斜して立ち上がり、壁高は最大で49cm残存する。壁溝は一部分が途切れた状態で検出されているが、本来は壁下全体に巡っていた可能性が高い。柱穴は対角線上に4か所に配置される。入口の梯子穴は南側に位置し、壁の縁から100cm内側に入った場所に設置さ



第44図 L109・111・117・134住居



第45図 L132住居

れている。貯蔵穴は南西側に設置され、深さは46cmである。炉は中心からやや北西側に設けられている。火床部が4か所に認められ、新旧関係が認められる。仮に4か所の火床を北からa・b・c・dと仮称すると、bはaに先行する火床部であり、cはbよりも新しい可能性がある。dはaと同時期に存在していたとも見られる。

床面は壁際を除く広範囲に硬化面の拡がりが看取される。

遺物は散在して出土している。大型の器種や遺存状態の良い土器は出土していない。1は堆で貯蔵穴の覆土上層から出土している。2と3は器台で、やや距離を置いて、それぞれ床面から出土している。7の

ミニチュアと8の手捏土器は覆土中から出土している。石器類では砥石が1点出土している。人工遺物以外では、炭化材と焼土が出土している。柱穴PIには炭化した柱材の残存が認められた。焼失住居と考えられるが、火を受けた時点では、柱が柱穴に立った状態であったと推測される。

遺物（第159・220・227図、図版45・91・98）土器8点、石製品1点、金属製品1点を図示した。第159図1は壇である。体部が小さく口縁部はやや内側しながら長く立ち上がる。2の器台はほぼ完形である。器受部は直線的に外傾して開き、脚部も裾が広がらない。3もほぼ同様な形態と考えられる。4は高環の脚部である。脚柱部は中空中で中膨を呈し、裾部は反りながら開く。5は鉢と見られるが、器種比定が難しい器形である。外面はヘラミガキが施されている。6・7はミニチュア、8は手捏土器である。第220図186は砥石の欠損品である。使用面が4面で、各面とも使用頻度が高かったと見られる。

#### L 1 4 3 (第46図) (8J-68・78グリッド)

弥生時代後期の竪穴住居であるL282の一部を壊し、平安時代の竪穴住居L142が本住居の覆土中に構築されている。平面形は隅丸方形を呈し、主軸方向は北から西に傾く。住居の中心からやや北西側に炉を設け、規模は主軸方向に9.7m、その直交方向に9.4mで、壁高は7cm～33cm残存する。壁溝はほぼ全体に存在し、壁は傾斜して立ち上がる。床面面積は78m<sup>2</sup>になり、古墳時代前期の竪穴住居の中では大型の部類に入る。柱穴は対角線上に4か所配置され、各柱穴の掘り方断面は段状を示す。入口の梯子穴は南側の壁際から160cm内側に入った位置に存在する。貯蔵穴は西隅に検出された2か所のピットが該当すると考えられ、さらに柱穴PIの北西側に位置するピットも貯蔵穴である可能性が高い。ほかに性格不明のピットが9か所に検出されている。炉はPIとP4を結んだ線上の中央内側に1か所存在する。ほかに住居の中央部近くとP3近くに小規模な火床の形成が認められる。

床面は柱穴で囲まれた内側から南東側の入口側にかけて硬化面の形成が認められる。また、柱穴PIの北側に検出された貯蔵穴と考えられるピット（貯3）の上にも硬化面が認められたので、住居の廃絶時に近い時点では、このピットが貯蔵穴の機能も有していたとしても、すでに使用は停止されていたと考えられる。さらに東側が西側に比べより壁近くまで、硬化面の拡がる状況が看取される。

遺物は北隅にややまとまって出土したほかは、散在して出土している。2の壺、6・7の鉢は互いに近接した状況で床面から出土している。そこからやや離れて、1の壺、5の鉢が床面からやや浮いた位置から出土している。9は壺であるが、この壺は平安時代のL142に伴う遺物である。取り上げの関係からここに図示しておきたい。全体に土器の遺存状態は不良である。金属製品の9は銅製の指輪と考えられる。金属製品の65は金具で、68は刀子である。人工遺物のほかには、焼土ブロックが検出されている。規模が小さく、炭化材も顕著ではないので、焼失住居の可能性は低い。

遺物（第160・224・227図、図版46・97・98）土器9点、金属製品5点を図示した。第160図1は有段口縁の壺である。頭部から急激に外傾して開く。内外面はヘラミガキされ赤彩が施されている。2の壺は口頭部を欠損する。底部近くに焼成後に穿たれた小孔が存在する。3の壺は安定した平底をもち、胴部の張りが弱く、口縁部は「く」の字状に外傾する。4の鉢は体部高、口縁部高がほぼ等しく、底部は丸底様になる。5・6の鉢は口縁部が短く立ち上がる。7の鉢は全体に内側ながら立ち上がる。8の器台の受部は端部が上方につまみあげられた形になっている。9の壺は平安時代の住居に伴う。体部下端にヘラケズリが施されている。第224図の金属製品9は、ほぼ完形を保って出土した指輪と考えられる環状の銅製板状製品である。第227図の金属製品68は刀子でやや小型である。

## L 152 (第46図) (7J-58・59グリッド)

弥生時代から平安時代にかけて5軒の竪穴住居が順次構築され、西側を平安時代の竪穴住居L088に壊されている。また、弥生時代住居の覆土中の壁が明瞭に捉えられなかつたため、遺構の検出状況は不良である。主軸方向は北西に振れ、平面形は隅丸方形の可能性が高い。規模は主軸方向とその直交方向とも4.5m前後と推定される。壁高は最大で38cm残存する。ローム層の壁の下には壁溝が検出されている。その状況から推測すると、全体に巡っていた可能性がある。柱穴は対角線上の4か所に配置されている。入口の梯子穴は、南東側の壁方向に存在するピットの中の1つが（南東側のピットについては、分割図（2）に示したとおりである）、可能性として高いものの断定はできない。貯蔵穴は東隅に検出された隅丸長方形の土坑が該当すると見られる。炉は中心からやや北東方向に寄った位置に設置されている。火床部が2か所に認められるが、時間的前後関係は明らかでない。

床面は柱穴P2や貯蔵穴の周辺に硬化面の抜がりが存在する。

遺物は貯蔵穴の周辺からやまとまって出土している。貯蔵穴周辺の土器は2・3の壠、4・5の高壠である。7と8は手捏土器でやや離れた状況で出土している。北西の壁際から出土している土製品は土玉である。

遺物（第161・205図、図版47・79）土器8点と土製品1点を図示した。第161図1の鉢は口縁部が波状気味になり、内面にはハケメが認められる。2・3は壠である。体部の張りは弱く、口縁部は直線的に外傾して開く。4は高壠の脚部である。5の高壠は外面全体と壠部内面にヘラミガキが施され、赤彩が行わっている。6・7・8は手捏土器である。本住居の土器様相は前期の末葉に位置づけられると考えられる。

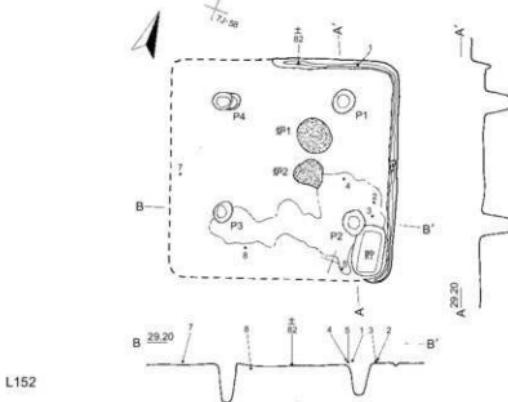
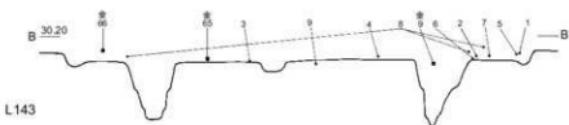
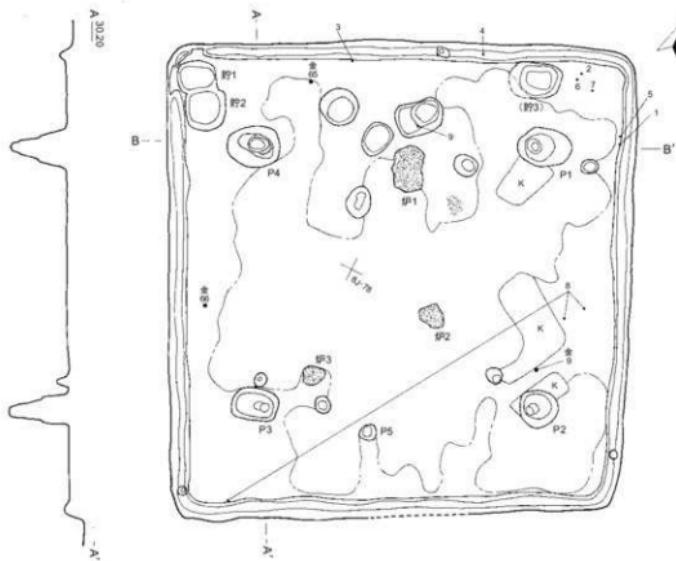
## L 167 (第47図) (71-99, 81-09グリッド)

弥生時代後期から古墳時代後期にかけて次々に竪穴住居が構築された地点に位置する。本住居の後に構築された古墳時代中期のL069による大きな破壊は免れている。主軸方向を北西側に傾け、平面形は長方形を呈する。規模は主軸方向に6.0m、その直交方向に5.4mで、壁高は8cm～53cm残存する。壁溝が部分的に検出されている。検出状況のみから推測すると、全体に巡っていた可能性が高い。また、壁は僅かに傾斜して立ち上がる。柱穴の配置は対角線上に4か所であるが、全体に中心側に寄った位置に穿たれている。貯蔵穴についても東隅に検出されているが、P2に寄った位置に存在するため、東隅からはやや間隔を開けているような配置となっている。梯子穴は存在しない。炉はP1とP4の中間に設けられている。この炉が本住居の炉であることは間違いないが、その西側に隣接してもう1か所炉が検出されている。この炉は楕円形の平面形を示すが、その長軸の方向は住居の傾きよりもさらに西側に傾斜している。全体として、規模に比較して各施設が中心寄りに配置されている特徴が見られるので、この炉の設置場所には違和感を覚える。検出時に気付かなかった、もう1軒の竪穴住居の存在も想定される。

床面は中央部が低く、壁寄りでやや高くなる状況が認められる。硬化面の形成については明瞭には捉えられていない。

遺物は僅かに出土している。北隅近くからは1の壺が出土し、高壠の脚部である2が南隅床面から出土している。また、北西壁側の内側から、壁と平行するような状態で焼土が検出された。

遺物（第164・220図、図版91）土器2点、石製品1点を図示した。第164図1の壺は体部の上半に張りをもち、口縁部は直線的に外傾する。2の高壠の脚部には4か所の円孔が穿たれている。



第46図 L143・152住居

### L 173 (第47図、図版15) (7J-25・26グリッド)

弥生時代後期の竪穴住居L274と古墳時代前期の竪穴住居L278を壊し、中・近世の溝状遺構L090が重複している。平面形は方形を呈し、主軸方向は北東を向く。規模は主軸方向に7.6m、その直交方向に7.4mで、壁高は最大で49cmである。壁溝は全体に巡り、壁はやや傾斜して立ち上がる。柱穴は対角線上に4か所配置される。各柱穴には柱痕跡が確認されており、廃絶時点には柱の基部が埋設されていたと見られる。入口の梯子穴はP2とP3を結んだ線上の、P3寄りに検出されたピットか該当する可能性が高いが、断定はできない。ちなみにそのピットの深さは10.8cmである。ほかにP1とP2を結ぶ線上にもピットが検出され、別に4か所にピットが存在する。また、南東壁側から内側に延びる間仕切り溝が2条と、南西壁から内側に向かう間仕切り溝1条が検出されている。貯蔵穴は南隅と西隅の2か所に設置され、両方とも平面形態は隅丸方形の平面形を呈している。炉は4か所に認められる。主に使用されていたと考えられるのは、中心から北東方向に寄り、柱穴P1に隣接した位置に設置された炉である。その南東側にも1か所炉2が存在し、炉3は中心からやや南東に寄る位置に検出されている。そのさらに東側に小規模な炉4が存在する。以上のような貯蔵穴と炉の配置の在り方から考えると、この住居は建替えが行われ、それに伴い主軸方向が南東から北東へと90°変化したと推定することも可能である。

床面は中央部に硬化面の抜がりが存在する。

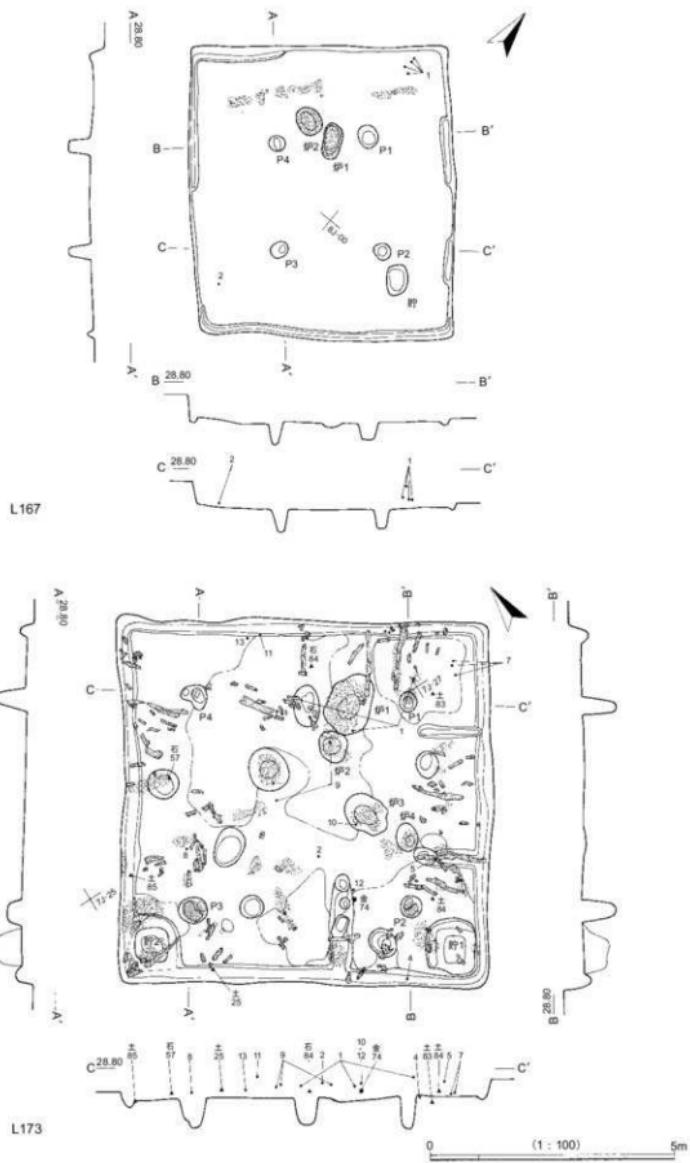
遺物は床面からやや浮いた位置、覆土の下層を主体に出土し、床面に密着するような状態で出土したものは少ない。床面から出土している遺物は、貯蔵穴1近くの壁溝内から出土した4の壺、土製品83・85の土玉が挙げられるにとどまる。人工遺物以外では炭化材と焼土が全域から検出されている。先に述べたように、柱痕跡も確認されており、焼失住居と考えられる。

遺物（第164・165・203・205・216・218・227図、巻頭図版5、図版49・78・79・87・89・98） 土器13点、土製品5点、石器・石製品2点、金属製品3点を図示した。第164図1は球状の張りをもつ壺である。口縁部は折り返し口縁の可能性があるが、欠損して全容は不明である。外面の頸部や口縁部の内面にハケメが施されている。2の壺の口唇部には押捺が認められる。3の壺は横線の巡る口縁部破片である。4の壺は胴部の上位に最大径があり、口縁部は直線的に外傾して開く。第165図7・8は高壺の脚部で、10～13は手捏土器である。第205図83～85は土玉である。第216図57は礫石器の部類で、混入の可能性も否定できない。第218図84は勾玉である。

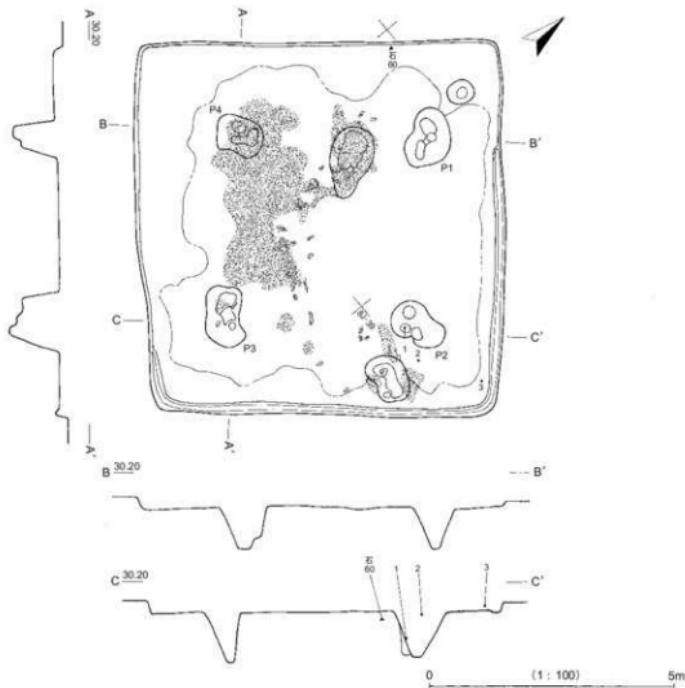
### L 187 (第48図) (8J-28・38グリッド)

竪穴住居が順次構築され、7軒の切り合い関係が認められる。本住居は、弥生時代後期の竪穴住居4軒を壊して構築され、平安時代の竪穴住居L182が覆土中に構築されている。L182の掘り込みが深かつたため、中央部の床面が壊された状況で検出されている。平面形は方形を呈し、主軸を北西に傾けている。規模は主軸方向に7.6m、その直交方向に7.6mとほぼ等しく、壁溝が東側の壁の下に検出されている。柱穴は対角線上の4か所に配置され、深さは約90cmで均一である。また、柱穴の土層観察の所見からは、柱材の抜取りが行われた状況が窺われる。入口に伴う梯子穴と断定可能なピットは存在しない。ただ、柱穴P2に隣接するピットが梯子穴であった可能性は残る。貯蔵穴は存在しない。炉は中心から北西に寄った位置に設けられ、床面から5cm掘り込んで火床面が形成され、被熱による赤化が8cmに達している。

床面は壁際を除く広範囲に硬化面が確認された。この硬化面の上からは焼土が検出されており、床面にまで熱による影響が及んだと見られ、表面がひび割れ状態を呈してかなり硬くなっていた。



第47図 L167・173住居



第48図 L 187住居

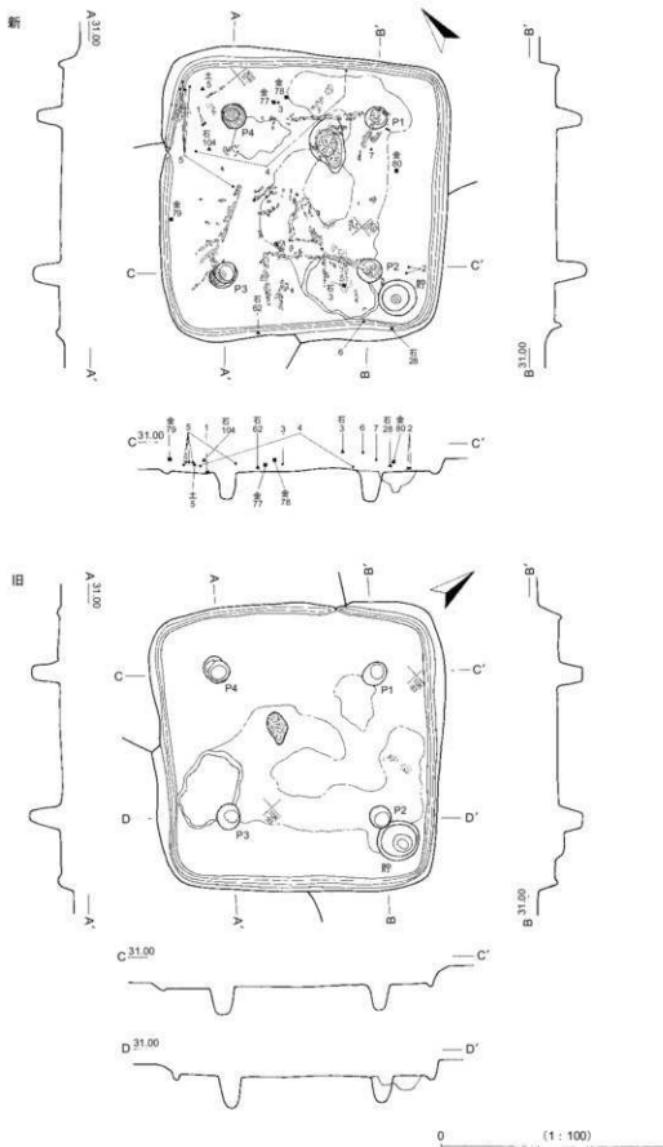
焼土の堆積と同様な範囲から炭化材も出土している。柱材の抜き取りが行われていた状況が想定されるので、不必要的部材の焼却が行われたとの推測も可能である。

遺物は僅かに出土したのみである。柱穴P2の中からは1の壺が出土している。また、P2に近接して2の高環脚部が出土している。壁際から出土している石器60は礫石器の類である。

遺物（第165・216図、図版49・87） 遺物は少なく、土器3点と石器1点を図示した。第165図1の壺は小さな平底をもち、体部の上部に張りを設け、口縁部は僅かに内彎気味に高く立ち上がる。2の高環脚部には3か所の円孔が穿たれている。第216図60は礫石器である。

#### L 208（第49図、図版17）(10K-82・83グリッド)

堅穴住居が4軒重複し、その中では最も後出になる。本住居は建替えが行われた痕跡が認められ、建替え後の主軸方向は北東を向き、平面形は隅丸方形を呈する（第49図上段）。規模は主軸方向に5.7m、その直交方向が長く5.9mで、壁高は最大で40cm残存する。壁溝は全周し、壁は傾斜して立ち上がる。柱穴は対角線上に4か所配置される。また、各柱穴を半截し土層断面を観察したところ、柱痕跡を確認することができた。したがって、廃絶時に柱の基部は柱穴に埋設された状態であったと考えられる。入口の梯子穴



は存在しない。貯蔵穴は南隅に設けられており、平面形は円形を呈する。炉は中心から北東に寄った位置で柱穴P1に近い場所に設置されている。梢円形を呈し床面から僅かに掘り込んで火床が形成されている。

床面は中央部に硬化面の形成が認められる。また、柱穴P2と貯蔵穴の北西側に、床面レベルよりもやや高い部分が存在する。その性格は明らかでないが、ベッド状遺構の類か入口に伴う施設の可能性がある。

遺物は床面から僅かに浮いたレベルから出土している。1の壙・2の壺は床面から出土している。3の壺と5の甕は床面から浮いた位置からの出土である。石器・石製品も出土しているが、これらは覆土中からの出土である。石器3は石鏃、石器28は磨製石斧で、本住居に伴う遺物ではない。石器62は礫石器で出土レベルは床面のやや上である。石製品104は管玉で覆土中の出土である。人工遺物のほかに焼土と炭化材が多量に出土している。炭化材の一部は住居の梁と見られる。

前述したように、この住居は建替えが行われたと考えられる。第49図下段に推定される建替え前の施設配置を提示した。明確な平面形と面積は不明で、柱穴の掘り方も明らかではない。柱穴は対角線上に4か所配置されていたと考えられ、炉の位置から主軸方向は北西方向と推測される。貯蔵穴は東隅に設置され平面形は円形を呈する。建替え前の遺物は明らかでない。

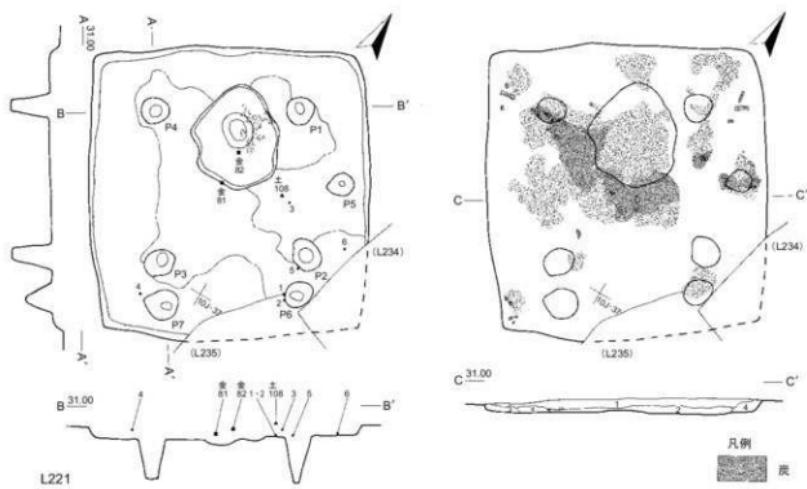
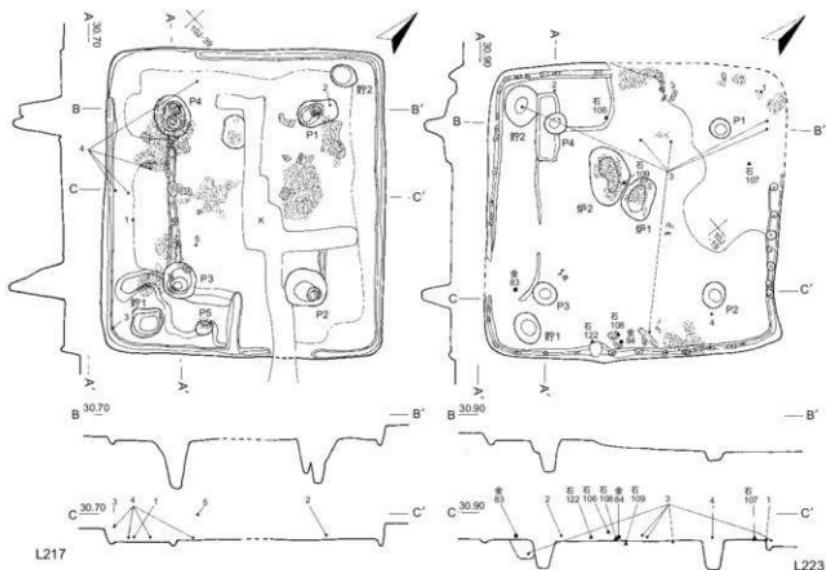
遺物（第170・203・212・213・216・218・227図、巻頭図版5、図版51・78・83・84・87・89・98・99）  
建替え後の住居内から出土した遺物に限定される。土器7点、土製品1点、石器・石製品4点、金属製品4点を図示した。第170図1は口縁部が長く立ち上がる壙である。2の壺は胴部が球状に張って口縁部は「く」の字状に外傾する。3も胴部が球状を呈する壺である。4・5は外面調整にハケメが用いられる甕であるが、4に比して5の胴部はやや長胴傾向を示す。6・7は手捏土器であろう。第203図5は土製勾玉である。第218図104は両側から穿孔が行われた管玉で、一部を欠損する。第227図77～80は鉄製品である。79は鎌で比較的の遺存状態が良いが、ほかの3点については部分的である。

#### L 2 1 7 (第50図、図版17) (10J-39, 10K-30グリッド)

弥生時代後期の竪穴住居が著しく重複する地点に検出された。南側のみローム層を掘り込んでいるが、ほかは遺構の覆土を掘り込んでいる。平面形は隅丸長方形で、主軸方向を北西に向いている。規模は主軸方向に6.3m、その直交方向に5.7mで、壁高は最大で34cm残存する。壁溝は一部分検出されていないが、全体に巡っていた可能性が高い。柱穴は対角線上に4か所配置される。各柱穴で柱痕跡が確認され、住居の廃絶時に柱の基部が埋設された状態であったことが窺われる。柱穴P3とP4の間は間仕切り溝状の細い溝が存在し、P2からも間仕切り溝がP1方向に認められる。梯子穴は南東側の壁の中心部から入った位置ではなく、柱穴P3に近い位置から検出されている。この梯子穴からも基部の埋設痕跡が検出され、梯子が残っていたことも考えられる。貯蔵穴と考えられる施設は2か所から検出された。貯蔵穴1は南隅に寄った位置に設置されている。平面形は隅丸方形を呈する。貯蔵穴2は北隅に存在する円形のピットである。形態が貯蔵穴1と異なり、また、貯蔵穴1は間仕切り溝状の溝によって区画されているが、貯蔵穴2の周囲には区画施設が存在しない。ただ深さは両者とも41cmで同じである。炉は中心から北西に寄って、柱穴P1とP4の中間近くに設置されている。

床面は壁際を除いて硬化面が広がる。

遺物は少ない。図示した遺物の中では2点を除き床面に近い位置から出土した。1の壙と2の鉢はほぼ床面上からの出土である。3の器台は覆土から出土している。4の甕は床面で破片の状態で散在して出土した。5は手捏土器で、覆土からの出土である。ほかには焼土ブロックや炭化材が検出され、焼失住居で



第50図 L217・221・223住居

0 (1 : 100) 5m

あった可能性を高めている。

遺物（第171・205図、図版51・52・79） 土器5点、土製品1点を図示した。第171図1の壺は体部が扁平気味で口縁部がやや長く立ち上がる。全体にヘラミガキが施され、赤彩されている。2は鉢と考えられる。胴部の上半部に張りをもち、口縁部は外傾して開く。内外面ヘラミガキ、赤彩で仕上げられている。3の器台は受部の口縁部が短く上方に折れ、脚部は受部から僅かに柱状となり裾部は開いて安定する。4の壺は胴部上半に最大径を置き、口縁部は「く」の字状に外傾する。5の手捏土器は鉢状を呈し、体部は直線的に立ち上がる。この土器は本住居に伴わない可能性がある。

#### L 2 2 1 (第50図、図版17) (10J-26・27グリッド)

遺構の南東側で重複関係にある竪穴住居が存在する。古墳時代前期の竪穴住居であるL235の覆土を掘り込んで構築し、古墳時代中期と考えられるL234に壊されている。主軸方向は北西に振れ、平面形は隅丸方形を呈する。主軸方向の規模は6.0m前後と推定され、その直交方向は5.7mである。壁高は最大で23cmである。壁溝は存在せず、壁はやや傾斜して立ち上がる。柱穴は対角線上に4か所配置される。ほかに主柱穴であるP2に近接してP6が、そしてP3に近接してP7が検出されている。この2か所のピットは柱穴と断定したピットよりも浅く、柱穴とは異なると考えられるが、用途は不明である。入口の梯子穴は北東側で、その中央部から30cm内に入った位置に存在する。この時期の竪穴住居の入口方向としては少数の部類である。貯蔵穴は存在しない。炉は中心部から北西方向に寄った位置に設けられ、2段掘り込みを呈する。まず長径200cm、短径180cmの楕円形の範囲が1段掘り下げられ、その中央部がさらに掘り込まれ通常の炉が設置されている。炉の中では稀な例である。

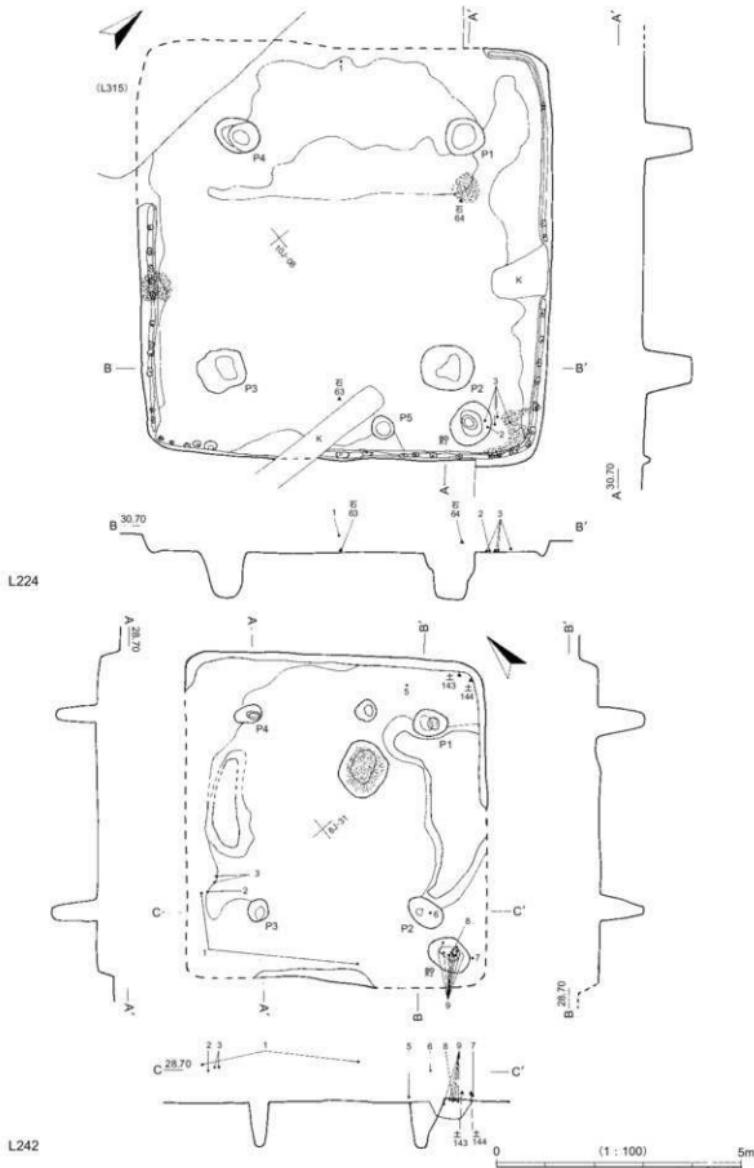
床面は柱穴を結んだ線の内側に硬化面が観察される。ただ、硬化面もやや軟弱な様相を示し、壁寄りでは軟弱な床面となっている。

遺物は散発的な出土で、特に集中する傾向は捉えられない。P6付近から1の壺、2の壺が出土し、5の壺が柱穴P2の縁から出土しており、この3点がやや近接した位置関係で出土しているといえる。金属製品81・82は炉の位置から出土しているが、やや床面から浮いた位置である。また、焼土や炭化材、粉状の炭が広範囲に検出され、焼失住居の可能性が高いことを示している。

遺物（第172・206・227図、図版52・80・99） 土器6点、土製品1点、金属製品2点を図示した。第172図1の壺は底径2.7cmの平底で、体部高が口縁部高より低くなると推測される。2の壺はほぼ完形で出土している。胴部のやや上半部に最大径を置き、口縁部は「く」の字状に外傾する。外面調整はヘラナデである。3の高環壺部は、底部から直線的に外傾して立ち上がる。4の高環脚部は、柱状部の下位から急激に折れて裾部に移行する。5・6の壺は、胴部が球状に張って口縁部は「く」の字状に外反する。外面はハケメによって調整されている。

#### L 2 2 3 (第50図) (10J-18・19グリッド)

古墳時代前期の竪穴住居L224とL358等4軒と重複する。主軸方向は北西に向き、平面形は隅丸方形を呈する。規模は主軸方向に6.1m、その直交方向に6.0mである。壁高は最大で21cm残存し、壁溝は全体に巡っていた可能性が高い。また、壁溝の底から小ピットが検出されているが、ピット間の規則的な配置は認められない。柱穴は対角線上の4か所に配置されている。入口の梯子穴は検出されていない。貯蔵穴と考えられる施設は2か所から検出されている。1か所は南側であり、もう1か所は西側である。両方とも平面形は円形を呈しているが、深さについては西側の貯蔵穴が37cmあり、南側のそれは僅か8cmにすぎない。



第51図 L224・242住居

い。南隅については、貯蔵穴とは別の施設であった可能性も多い。炉は中央部に近い位置に2か所の設置が確認された。1か所はほぼ中心部で、もう1か所はその西隣である。

床面は中央部に硬化面の形成が認められる。本住居の床面で特徴的なのはベッド状遺構の存在である。ベッド状遺構は、西側の壁に平行するように西隅で折れて鉤の手状の配置で設定されている。

遺物は少ない。1の壺と4の壺ミニチュアは床面から出土しているが、2の高杯は床面からやや浮いた位置から出土している。3は底部を欠く壺で、広範囲に散らばって出土した破片が接合している。石製品106～109は管玉である。人工遺物以外では、炭化材や焼土が床面から出土している。特に壁寄りに多く出土する傾向が認められる。焼失住居の可能性が高い。

遺物（第172・218・219・227図、巻頭図版5・6、図版52・89・90・99） 土器4点、石製品5点、金属製品2点を図示した。第172図1の壺は径の小さな平底から球状の胴部に立ち上がる。口縁部は急激に折れて外傾するようであるが、口唇部にかけては欠損する。2は高杯の脚部である。杯部は欠損する。脚部の柱部は中膨らみの形状を示す。3の壺は球状形の胴部から「く」の字状に外傾して口縁部が開く。胴部外面はヘラナデで仕上げられている。4は壺のミニチュアと考えられる。完形を保って出土した。胴部は球状を呈し、口縁部は折り返し口縁となっている。第218図106～109は管玉である。長さはそれぞれ異なるが、いずれも緑色凝灰岩製で両側から穿孔が行われている。第227図84は鉄鎌、83は鉄鎌の可能性がある。

#### L 224 (第51図、図版18) (8J-98, 10J-08グリッド)

古墳時代前期から中期にわたる竪穴住居が次々に構築された地点に位置している。本遺構に先行すると考えられる竪穴住居はL223とL358で、後出がL315とL393と判断される。したがって、部分的に遺存状態が不良となって検出されている。平面形は隅丸方形を呈し、主軸方向は北西を向くと考えられる。主軸方向の規模は8.5m、その直交方向は8.4mである。壁高は最大で31cmで、壁溝は途切れ途切れの状態で検出されている。検出状況から推測すると全体に巡っていた可能性が高い。また、壁溝の底面から小ピットが検出されている。壁の遺存状態の良い部分では、やや傾斜して立ち上がっている状況が捉えられている。柱穴は対角線上に4か所配置されている。柱穴の土層観察では、柱痕跡は確認できず、廃棄時に柱の抜き取りが行われた可能性を高くしている。入口は南東壁の中央部からやや北東に寄った位置であったことが、梯子穴P5の位置から推測される。貯蔵穴は東隅に近く、柱穴P2にも近接する位置に存在する。炉の所在位置は明らかでない。後出のL393の構築によって壊された可能性がもたれるが、検出時点においては火床部の痕跡も認められなかった。床面はほぼ全面に硬化面が確認された。

遺物は破片の状態で出土しており、出土量は少ない。貯蔵穴の周囲から2・3の壺が出土しているものの、遺存状態は極めて低い。石器63・64は本住居に伴っていたか否かは判断できない。ほかには焼土ブロックの出土があり、焼失住居である可能性を高めている。

遺物（第172・206・216・218図、巻頭図版5、図版80・87・89） 土器3点、土製品1点、石器・石製品3点を図示した。第172図1は鉢で、内外面ともナデによって調整される。2の壺は口縁部が内凹気味に大きく開く。3は壺の口縁部で、縦方向のヘラミガキが施される。第216図63・64の石器は敲石として使用されていたと推測される。

#### L 242 (第51図、図版18) (8J-21・31グリッド)

弥生時代後期から平安時代にわたる竪穴住居が重複する地点に検出された。先行する竪穴住居の覆土中

に掘り込まれた壁の、その立ち上がりが捉えきれていない部分もあり、検出状況は必ずしも良好な状態ではない。主軸方向は北東に向き、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は主軸方向に6.7m、その直交方向に6.1mである。壁高は最大で46cm残存し、壁溝は存在せず、壁の検出部分では僅かに傾斜して立ち上がる。柱穴は対角線上の4か所に配置されている。入口の梯子穴は検出されていない。炉の北側に小ピットが存在するが、これは梯子穴には該当しないであろう。貯蔵穴は南隅寄りの位置に設置され、平面形は梢円形を呈し、深さは41cmになる。炉は中心からやや北東に寄った位置に設けられている。床面から僅かに掘り込んで火床面が形成されている。火床は被熱によって赤化し、その厚さは10cm前後になる。

床面は比較的平坦に構築されているが、南東側とその対向側である北西側で、中央部よりも高く床面を設定している。この高まりの範囲は不整形で、しかも床面との差が5cm～10cmと均一ではないが、いわゆるベッド状造構の範囲に含まれられる施設と判断して良いだろう。

遺物は大きくは3か所から集中して出土している。貯蔵穴の上面、床面と同レベルからは7・8・9の甕が出土している。このような出土状態から考えると、廃棄時に近い時点で、すでに貯蔵穴が埋まっていた状況も推測される。もう1か所は東隅に遺物のまとまりが認められる。ここからは鳥帽子形の土製支脚2点と、5の甕が出土している。別の出土地点は西隅付近になるが、ここは覆土中に土器が出土した地点で、1の杯は明らかに混入品である。

遺物（第174・175・209・223図、図版53・54・81・94） 土器9点、土製品2点、石製品1点を図示した。第174図1の杯は丸底で赤彩が施され、古墳時代中期末から後期初頭に位置づけられる。2の壺は本住居に伴う可能性もあるが、覆土中からの出土である。6の甕も同じように覆土から出土している。復元の結果ほぼ完形になった個体であるが、胴部に焼成後に開けた梢円形の穴が存在する。破断面の調整は行われていない。7と第175図8・9は遺存状態が良い甕である。胴部が球状形を呈し、中位に最大径を置き、口縁部は「く」の字状に折れて外反する。外面調整はハケメ主体に行われている。第209図143・144は鳥帽子形の土製支脚である。高さはほぼ同じである。143には円形の凹部が2か所に確認できるが、144は使用中に生じたと考えられる欠損によって確認できない。

#### L 262 (第52図、図版19) (10J-25・35グリッド)

古墳時代前期の竪穴住居L263とL362と重複する。平面形は隅丸方形を呈し、主軸方向は北西を向く。主軸方向の規模は5.9m、その直交方向で5.8mである。壁高は17cm～47cm残存し、壁溝は存在せず、やや傾斜して立ち上がっている。柱穴は対角線上に4か所配置されている。入口の梯子穴は南東壁の中央部からやや内に入った位置に検出されている。ほかに2か所小ピットが検出されているが、性格は明らかでない。貯蔵穴は南隅に近く、柱穴P3にも近接する位置に存在する。炉は中心から北西に寄り、柱穴P1とP4の線上に位置するが、その中央ではなくP4に寄った位置に設置されている。

床面は入口部から4か所の柱穴を結んだ線の内側、中央部全域に硬化面が確認され、壁際では硬化面の存在は認められない。

遺物は破片の状態で出土しており、出土量は少ない。1・2はほぼ完形の壺で、互いに離れた位置から出土している。3は高杯の口縁部で、破片が接合している。ほかに焼土が全域から検出されており、焼失住居である可能性が高い。

遺物（第177図、図版55） 土器3点を図示した。第177図1は壺である。体部高が口縁部高よりも低く、口縁部は内彎しながら大きく開く。2も同様に口縁部高が体部高よりも高くなるのは一目瞭然である。口

縁部は内摺して開く。3は高壙の壙部と考えられ、壙部の途中に稜が巡り、有段となる。内外面とも口縁部に対して縱方向となるヘラミガキが施されている。

#### L 264 (第52図、図版19) (10J-05・15グリッド)

時期の異なる竪穴住居5軒が重複する。先行する弥生時代後期の竪穴住居L436に掘り込まれた部分は、壁の立ち上がりが捉えられず、古墳時代前期の竪穴住居L262と古墳時代中期の竪穴住居L315によって部分的な破壊を受けている。平面形は隅丸方形を呈し、主軸方向を北東に傾けている。規模は主軸方向に7.6m、その直交方向に7.5mである。壁高は最大で25cm残存し、壁溝は壁下に一周していたと考えられる。柱穴は対角線上に4か所配置されている。柱穴の掘り方平面から、角柱が埋設されていた可能性がもたれる。入口の梯子穴は柱穴P2の方向に存在する。貯蔵穴は南隅に設置され、平面形は円形を呈し、深さは42cmある。柱穴P2とP3の間に小ピットが穿たれており、南西壁下から小ピットに向かう間仕切り溝が検出されている。また、小ピットとP2の間に僅かな段差を設け、南隅の一角が仕切られた状態を呈している。その空間に入口と貯蔵穴が近接して設置される形になっている。炉は入口の対向方向に設けられており、柱穴P1に近接した位置に存在する。

床面は柱穴を結ぶ線の内側全域に硬化面の拡がりが確認されている。

遺物は大きくはP1の周囲、南隅、北隅の3か所から出土している傾向が認められる。P1の覆土からは7の炉器台が出土している。柱穴を抜き取った後に入ったと考えられる状態である。5の甕は床面レベルからの出土で、4の甕も床面出土である。南隅では貯蔵穴内から2の壙が出土し、P2の覆土中から3の壙が出土している。この出土状況もP1と同様と考えられる。北隅付近の床面からは土錘が1点出土している。土錘は南隅からも2点出土している。石製品171は滑石製の白玉である。覆土から出土しており、本住居に伴わない可能性もある。

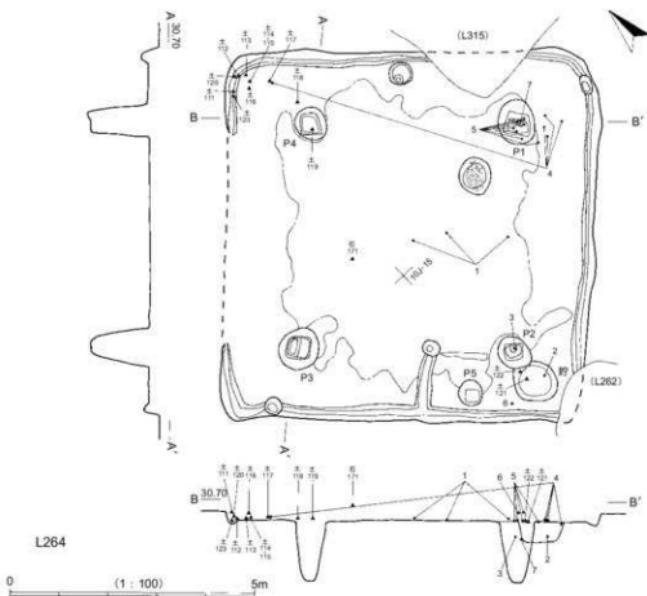
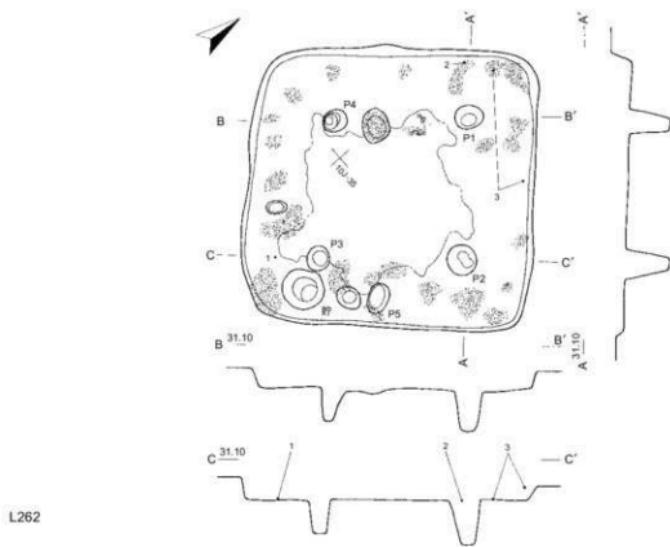
遺物 (第177・206・219図、巻頭図版6、図版55・56・80・90) 土器7点、土製品13点、石製品1点を図示した。第177図1の鉢は口縁部に弱い段がついて体部との境は明瞭である。2の壙はほぼ完形を保っている。口縁部高は比較的低く、直線的に外傾する。3の壙は体部高と口縁部高がほぼ等しく、口縁部は僅かに内摺するように立ち上がっている。4の甕は胴部中位に張りをもち、口縁部は「く」の字状に外反する。外面は全体にハケメ調整が行われている。5の甕は外面口縁部にハケメが認められ、ほかはヘラナデによって仕上げられている。6の手捏土器は外面に輪積痕跡を残している。7はいわゆる炉器台で、脚部は直線的に開くが、開き方は大きくならない。第206図111～123は管状の土錘である。形態や大きさに大きな差は認められない。第219図171は滑石製の白玉で、中位に稜が巡っている。

#### L 266 (第53図、図版20) (9J-41・51グリッド)

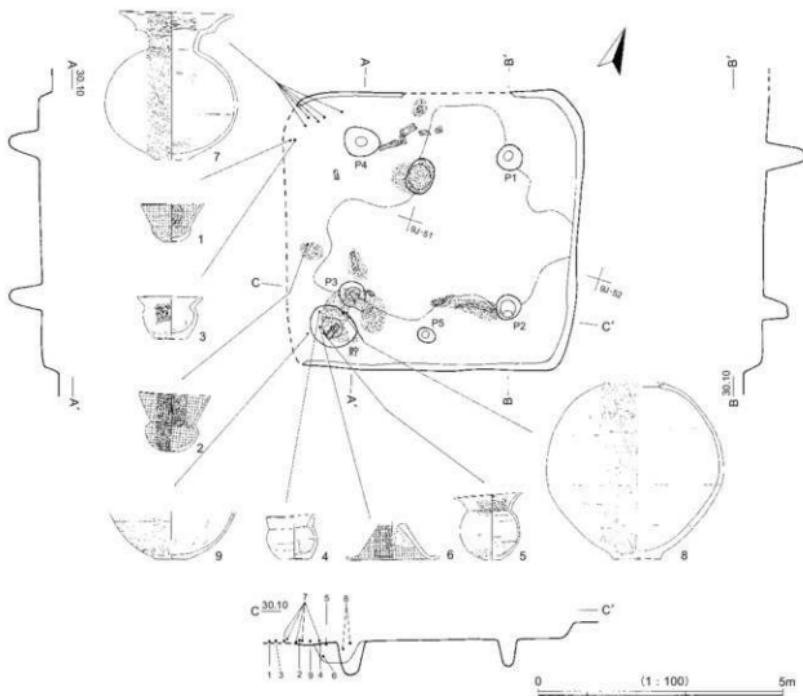
調査区西側のM区との境界に位置している。弥生時代後期のL268を壊し、M区で検出されたM007も本住居より先行すると考えられる。平面形は隅丸方形を呈し、主軸方向を北西に傾けている。規模は主軸方向に5.9m前後、その直交方向に5.7mで、壁高は最大で43cm残存する。壁溝は存在せず、壁は傾斜して立ち上がる。柱穴は対角線上に4か所配置され、入口の梯子穴は南東壁の中心部から55cm入った位置に存在する。貯蔵穴は南隅に設置され、深さは44cmある。炉は中心からやや北西に寄った位置に設置されている。床面から7cm掘り込んで火床面を形成し、2cm～5cmの厚さで被熱による赤化が認められる。

床面は柱穴で囲まれた内側を主体に、北西方向と南東方向に硬化面の拡がりが確認できる。

遺物は柱穴P3とP4を結ぶ線の延長から西側で出土する傾向が認められる。北西隅付近からは1の壙と



第52図 L 262・264住居



第53図 L 266住居

7の有段口縁の壺が床面から出土している。貯蔵穴周辺や貯蔵穴からもややまとまった状態で出土している。6の高環脚部は貯蔵穴の底面近くから出土し、5・8・9の壺も床面から出土した。ほかの図示した土器類も床面レベルでの出土である。土器以外では炭化材や焼土が床面で検出された。炭化材の中には大型の部材が確認される。焼失住居の可能性が高い。

遺物（第177・178図、図版56・72） 土器10点を図示した。第177図1・2の壺は体部高が低く、口縁部が長く直線的に外傾して開いている。3・4は壺か鉢に含められようが、器種を決めるに躊躇する。外面調整はハケメやヘラナデが行われるが、接合痕跡が部分的に残存している。5の壺は口縁部が大きく外反する。6の高環脚部は据部の端部がめぐれ上がるよう見える。7は球状の胴部をもつ有段口縁の壺である。胴部中位は大きく膨らみ、頭部は急激に折れて立ち上がり、有段口縁となる口縁部は大きく外反して開く。外面は丁寧なヘラミガキによって仕上げられている。8は口縁部を欠く壺である。胴部はやや卵球状を呈し、外面はハケメを施してからナデを加えている。

#### L 301 (第54図、図版22) (10J-66・67グリッド)

弥生時代後期の竪穴住居であるL233と古墳時代前期の竪穴住居L378と重複し、3軒の中では最も後に

構築されている。主軸方向は北西に振れ、主軸方向に5.9m、その直交方向に6.7mの規模をもつ。壁高は最大で36cm残存し、壁溝は存在せず、壁は傾斜して立ち上がる。柱穴は4か所に配置される。各柱穴の観察では、柱痕跡が確認され、廃絶時点で柱の基部がまだ柱穴に埋設された状態であったと考えられる。入口の梯子穴と貯蔵穴は存在しない。

炉についてはやや詳細にふれる必要がある。本住居の概要については、すでに当財団の平成6年度の年報で公表されているが、炉には2種類が存在すると見られる。第54図の中に「炉」と示した場所に存在するのは、通常の竪穴住居に設置されている炉の機能をもっていた施設と考えられる。その東に存在する炉Aは、その北側に羽口を差し込んだと推測される溝状の施設が検出され、さらにその北側からは轆を設置したと想像される楕円形凹み部が存在する。この周辺から鍛造剝片が出土しており、鍛冶炉であったことが考えられる。さらに鍛冶炉Aの南側である住居の中央部は、長径3m、短径2mの不整形の範囲が周辺よりも1段下がって床面が形成され、そこにBの鍛冶炉が接している。さらにこの下位の床面からもCとDの鍛冶炉と考えられる施設が検出されている。鍛冶炉C・Dの存在する下位床面は硬化しており、この範囲内から鍛造剝片が密集して出土している。おそらく鍛冶の作業用として床面が掘り下げられたのであろう。このような状況から、本住居は鍛冶工房であったと推定される。

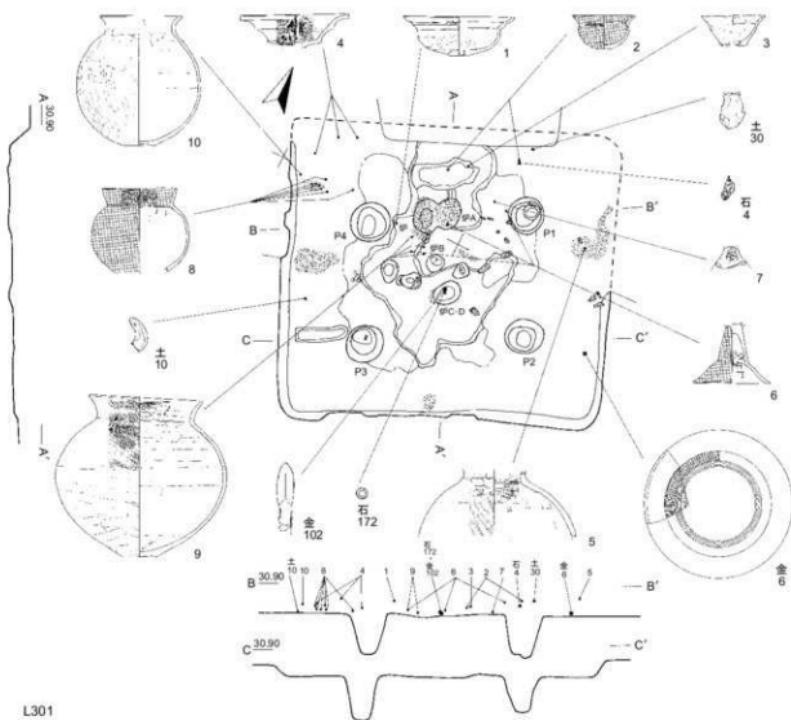
遺物は鍛造剝片のほかに土器類や土製品、金属製品も出土している。しかし、遺存率の高い個体は少ない。その中で9の甕は遺存が良く、全体の8割程度が接合している。金属製品では6の銅鏡が床面から出土しているが、これは割れた状態での出土である。石器4は石鎚である。覆土中からの出土であり、縄文時代の遺物が混入したと考えられる。また、人工遺物以外では焼土が床面から出土している。大きさは3か所から検出されており、いずれも壁に近い縁辺部付近からの出土である。

遺物（第182・183・203・212・219・224・228図、巻頭図版4・6、図版58・78・83・90・96・99）土器10点、土製品2点、金属製品2点、石器・石製品2点を図示した。第182図1の鉢は口縁部が2段に作られ、内面に明瞭な稜が生じている。2・3も鉢になろう。2は全体に赤彩が施されている。4は器台の部類に入ると考えられる。受部は有段で、端部は折り返し気味になる。内面には丁寧なヘラミガキが施されている。6は高壺の脚部である。脚柱部と裾部との境は明瞭で、裾部は壺を伏せたような形状を呈する。7は器台の脚部の一部と見られるが、部分的であり、全容は明らかにならない。9の甕は胴部の中位が球状に大きく膨らみ、口縁部は「く」の字状に外反する。外面の上半部はハケメで調整され、中位以下からやや下位にかけてヘラナデが施され、下位から底部付近はヘラケズリが行われている。第224図金属製品6は銅鏡である。重圓文鏡の破片で、外区に櫛齒文帯、内区に珠文と細線文の一部が見られる。破断面への調整は認められない。

なお、当センターの年報における本遺構の年代観については「古墳時代の中ごろ」としているが、遺物の再検討から前期の範疇であるとした。

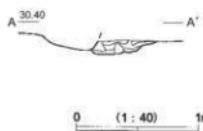
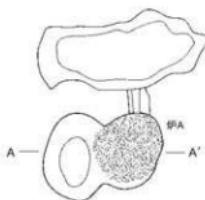
#### L 304（第54図、図版22）(9J-65・75グリッド)

弥生時代後期の竪穴住居L357と、古墳時代前期の竪穴住居L356の覆土を掘り込んで構築している。壁の大部分が覆土の黒色土になるため、立ち上がりが明瞭でない部分が多い。主軸方向は北西で、平面形は方形を呈すると見られ、主軸方向に4.9m前後、その直交方向に4.7mの規模をもつ。壁高は最大で22cm残存し、壁溝は全体に巡ると推測され、壁溝の所々に小ピットが存在する。柱穴は対角線上の4か所に配置され、PIには平面的に柱痕跡が認められた。また、ほかの3か所の柱穴も土層断面には柱の痕跡が確認さ

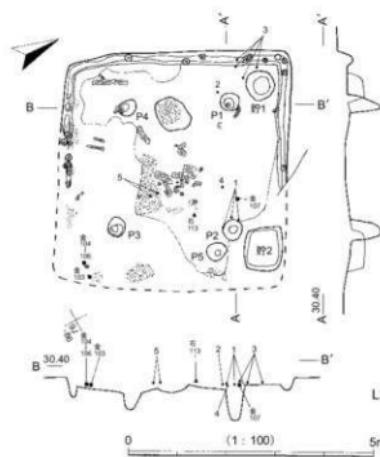


L301

L301 鑄冶炉



0 (1 : 40) 1m



第54図 L301・304住居

れた。したがって、住居の廃絶時には柱の基部は埋設状態にあったことが明らかである。入口の梯子穴は柱穴P2に近接して検出されたピットが該当する。貯蔵穴は2か所に設けられている。1か所は東の隅に当たる位置から検出された方形の土坑である。もう1か所は北隅に設けられた円形の土坑である。深さはどうちらも40cm前後で大きな差は認められない。炉は中心から北西に寄り、P1とP4を結ぶ線上に設置されている。

床面は住居の北側半分で硬化面の拡がりが認められたが、東側や南側でははっきりした硬化面の範囲が捉えられていない。

遺物は土器、金属製品、石製品が出土している。土器は1～4が高環で、5が甕である。1は環部が伏せられた状態で出土し、やや離れた位置から出土した正位の状態の脚部と接合している。4の環部も伏せられた状態で出土し、その近くから正位の状態の脚部が出土しているが、こちらは接合関係にならなかつた。金属製品は5点の内4点が南隅付近からまとめて出土している。石製品113は管玉である。人工遺物のほかに炭化材と焼土が床面から検出され、特に炭化材は目立って出土している。焼失住居と考えられ、焼失時に柱の基部は柱穴に残存していたことが明らかになっている。

遺物（第183・218・228図、巻頭図版5、図版58・59・89・99） 土器5点、石製品1点、金属製品5点を図示した。第183図の1～4は高環である。環部の下位に稜を有し、体部は僅かに内彎して大きく開いている。1・2の脚柱部は小さく開き、据部は折れるように開く。5の甕は口縁部が「く」の字状に短く立ち上がり、胴部中位に膨らみをもつ。外面調整にハケメが認められる。高環から考えると中期段階とも考えられるが、環部に内彎傾向が残存する点や、甕の特徴から前期に含めることにした。ただ、その中でも新しい様相になろう。第218図113は管玉で、両側から穿孔が施されている。第228図103～107の金属製品はいずれも欠損品である。103は刀子である。104は鉄剣と考えられる。

### L312 (第55図、図版23) (10J-86・87グリッド)

調査区の南側の地区に位置し、弥生時代後期の竪穴住居2軒のそれぞれ一部を壊している。ただ、北側では先行するL311覆土中の壁が捉えられず、床面も掘りすぎた傾向がある。主軸方向は西北西で、平面形は方形を呈し、主軸方向に5.5m、その直交方向に5.3m前後の規模をもつ。壁高は最大で28cm残存し、壁溝は存在しない。柱穴は対角線上の4か所に配置されている。柱穴のほかに、深さがそれよりも浅くなるピットが4か所に検出されている。その中で入口の梯子穴に該当するのが、東側から検出されたピットと判断した。もう3か所のピットの性格は不明である。貯蔵穴は南隅付近に設けられており、深さは58cmある。貯蔵穴とは別の施設と考えられる落ち込みが、南西側の壁中央に接する状況で検出されている。平面形は半梢円形で、深さは10cm前後である。住居に伴う施設と考えられるが、類例が乏しく、その性格は不明である。炉は中心からやや西に寄った位置に設置され、平面形は不整形を呈している。床面から5cm掘り込んで火床面を形成している。

床面は部分的に硬化面が存在するにとどまる。

遺物は少ない。1は壙であるが、床面からやや浮いた位置から出土している。5は高環の脚部になるが、これも覆土中からの出土である。4の器台は貯蔵穴の覆土下位から出土しており、ほかに3の壺、6の甕が床面から出土している。これら3点は本住居に伴う可能性が高い。石製品87は勾玉である。

遺物（第184・218・223・228図、巻頭図版5、図版59・89・94・99） 土器7点、石器・石製品2点、金属製品1点を図示した。第184図の1・2の壙は口縁部が体部高よりも高く立ち上がり、口径は体部の

最大径より大きく開く。3の壺胴部は球状の張りをもち、外面はハケメで調整された上にヘラミガキを加えている。4は器台と考えられる。受部は楕円形を呈し、脚部も内彫気味に下降する。5は高杯の脚部である。6の甕は外面をヘラケズリで調整している。7は底部の破片である。焼成前に穿たれた小孔が3か所存在する。孔の数はそれ以上だと推定され、多孔式窯の破片である可能性が高い。第218図87は滑石製の勾玉である。頭部から尾部にかけて、断面形が橢円形になるよう仕上げられている。

### L 3 5 2 (第55図、図版25) (10J-41・51グリッド)

調査区の南西部地区に位置している。古墳時代前期の竪穴住居であるL353と重複し、これを切っていると見られる。主軸方向を北東に向け、隅丸方形の平面形を呈する。主軸方向の規模は4.1m、その直交方向に4.0mで、壁高は最大で20cm残存する。壁溝は存在しない。柱穴と入口の梯子穴は検出されず、存在しないと判断される。貯蔵穴は南隅に設けられ、平面形は円形を呈し、深さは39cmある。ほかに南東壁側の中央付近から長さ50cmの間仕切り溝状の落ち込みが存在する。炉は中心からやや北東方向に寄った位置に2か所検出された。中央に寄った位置に設置された炉が先に存在し、それよりもやや北東に位置する炉が後から設置されたと見られる。後出の炉は、床面から5cm程度掘り下げて火床面を形成し、5cmの厚さまで被熱による赤化が及んでいる。

床面は中央部で硬化面が存在する

遺物は少ない。図示可能な土器は1の器台のみである。石製品は管玉である。ほかに東隅から焼土が出士しているが少量である。

遺物 (第193・218・221図、巻頭図版5、図版89・92) 土器1点と石製品3点を図示した。第193図1は器台である。器受部は直線的に開いて口唇部は丸く納められる。第218図118・119は管玉である。長さと径の違いは明瞭であるが、いずれも両側から穿孔が行われている。

### L 3 7 8 (第55図、図版25) (10J-55・65グリッド)

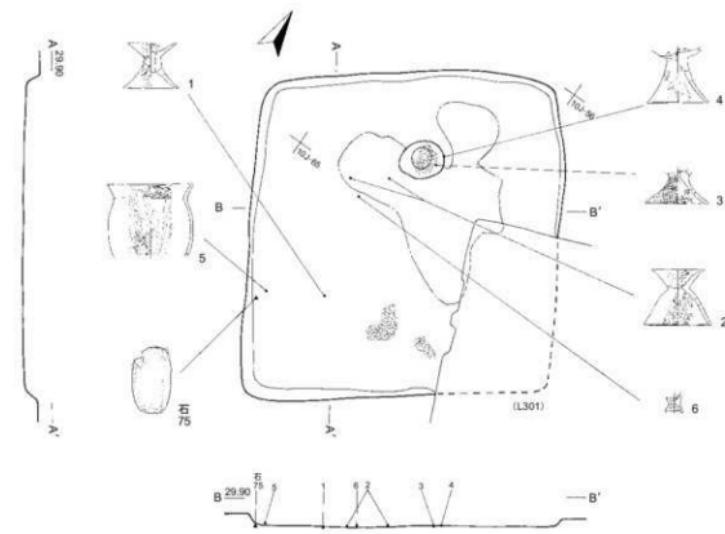
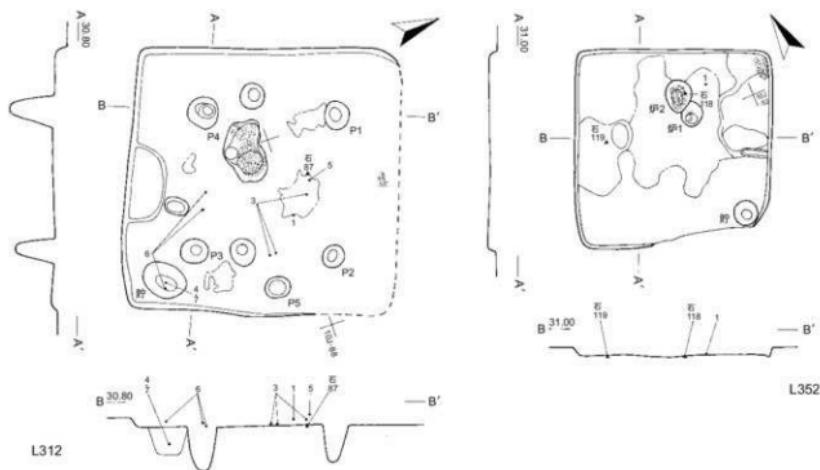
先に記載したL301と重複し、東側をそれに壊されている。平面形は隅丸方形を呈し、主軸方向は北西に振れ、主軸方向に6.6m、短軸方向に6.4mの規模をもつ。壁高は最大で34cm残存し、壁溝は存在せず、やや傾斜して壁が立ち上がる。柱穴と入口の梯子穴は存在せず、貯蔵穴も設けられていない。炉は中心から北西に寄った位置に設置され、円形の平面形を示す。床面から5cm掘り込んで火床面が形成されており、そこから8cmの厚さで被熱による赤化が及んでいる。

床面は炉の周囲に硬化面の形成が観察される。

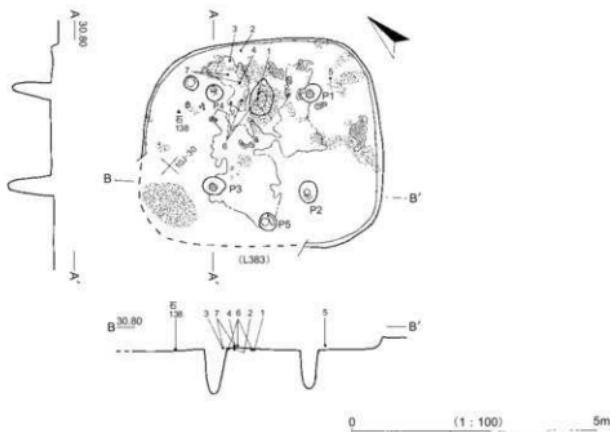
遺物の出土点数は僅かで、集中する状況も認められない。ただ、床面から器台が2点出土した点が目となる。また、焼土ブロックが検出されている。

遺物 (第194・217図、図版63・88) 土器6点と石器1点を図示した。第194図1の器台は完形に近い遺存状態である。器受部は直線的に外傾して開き、脚柱部がやや長くなる。外面はミガキによる調整を行っている。2の器台の器受部はやや反るような状態で開き、脚部は内彫する鉢を伏せた形態を示す。外面調整はハケメである。3の器台は脚部の透孔が6か所に存在する。4は高杯の脚部である。5の甕は胴部がやや長胴傾向を呈し、口縁部は頭部から緩やかに外傾する。外面調整はハケメである。第217図75は敲石様の礎石器である。床面から出土している。本住居に伴う可能性が高いものの、先行する時代の石器が混入したとも考えられる。

### L 3 8 2 (第56図、図版26) (10J-20・30グリッド)



第55図 L312・352・378住居



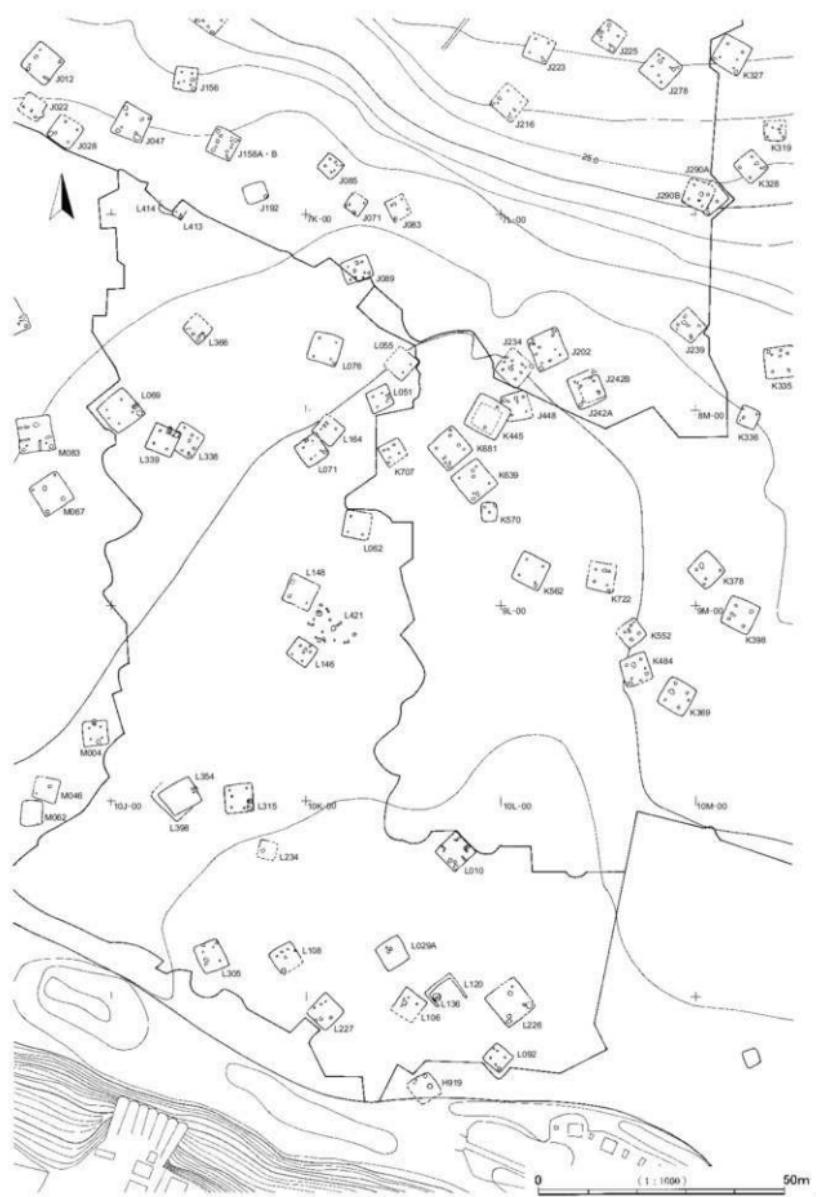
第56図 L382住居

調査区の南西端地区に位置し、古墳時代前期の竪穴住居であるL383に切られている。主軸方向を北東に向かって、平面形は胴張隅丸方形を呈する。主軸方向の規模は4.3m、その直交方向に4.9mで、壁高は最大で20cm残存する。壁溝は存在せず、壁はやや傾斜して立ち上がる。柱穴は対角線上の4か所に配置されて、入口の梯子穴は南西壁方向に存在する。各柱穴では柱痕跡が確認され、廃絶時には柱の基部が埋設状態であったと考えられる。貯蔵穴は存在しない。ほかに柱穴P4に近接した位置から小ピットが検出されたが、性格については明らかにならない。平面形は梢円形を呈し、深さは50cmある。炉は中心からやや北東方向に寄った位置で、P1とP4の中間に設けられている。

床面は梯子穴と柱穴を結ぶ線の内側で、硬化面の存在を確認している。

遺物は床面から比較的多く出土している。図示した遺物は、壺・甕で、すべて床面からの出土である。1の壺は炉の上から出土し、炉の北側を主体に2・3・4の壺、6・7の甕が出土している。5も甕であるが、柱穴P1に近接した位置から出土している。石製品138は有孔円板である。このほかに焼土・炭、炭化材が全域から出土しており、焼失住居の状況を示している。各柱穴に柱痕跡が残っていたので、焼失時に柱は抜き取られていなかつたと見ることができる。

遺物（第195・219図、巻頭図版6、図版90） 土器7点、石製品1点を図示した。第195図1～4は壺である。1は炉の上面から出土し、器面が熱を受けたことが原因と見られる磨滅が顕著である。この点が特徴として挙げられる。2の壺は口縁部を欠損するが体部の遺存状態は良い。外面は全体にヘラナデ仕上げられている。3の外面調整はヘラミガキで、4はハケメの上に縱方向にヘラミガキを施している。5の甕は口縁部が緩やかに外反して口唇部はやや角頭状になる。6の甕の口縁部は、頸部から緩やかに立ち上がる。7の甕口縁部は「く」の字状に外傾する。第219図138は滑石製の有孔円板で2孔が穿たれている。これは混入品の可能性がもたれる。



第57図 L区古墳時代中期の遺構分布図

## 2 古墳時代中期の竪穴住居（第57図）

古墳時代中期に比定した竪穴住居は26軒である。土器に認められる特徴は次のようになる。まず高杯では、柱状の脚柱部をもつものから中膨らみのものに変化する様相が認められる。丸底の壺口縁部の立ち上がりが僅かに内彎する形態から、直線的に立ち上がる部類が多い。壺は球状の胴部をもつものと、やや卵球状の胴部をなす器形が見られ、その外面調整にはハケメよりもナデが多用される。

後期との区別は須恵器模倣の土師器杯が出現する直前までとした。

中期の竪穴住居の分布は、前期における分布域と大きな変化は見られない。しかし検出軒数は激減し、全域に散在するような分布が窺われる（第57図）。このような状況から、中期の期間内における切り合は少ない。本文中に平面図を示した竪穴住居は11軒で、抽出率は42%である。

## L 010（第58図、図版3）〈10K-27・28グリッド〉

調査区の東側に位置しK区から僅かに西側に位置している。弥生時代後期の2軒の竪穴住居を壊し、古墳時代前期の竪穴住居L011も壊して構築される。平面形は方形を呈している。炉は住居の中心部から南西に寄った位置に設けられ、入口は南東壁側と推定される。炉の方向を主軸方向とすれば、その方向の規模は6.0m、その直交方向で5.8mである。壁高は最大で26cmで、壁溝は部分的に切れるが検出された部分が多い。柱穴は対角線上に4か所配置される。各柱穴からは柱痕跡が検出され、廃絶時に柱の基部が埋設された状態であったと見られる。入口の梯子穴は存在しない。ただ、南東側で柱穴P4に隣接した位置から、馬蹄形を呈する土手状の盛り上がり部分が検出されており、その開口側が入口であった可能性が高い。炉は中心から南西に寄り、P1とP4を結ぶ線上のややP4寄りに設置されている。貯蔵穴は南側に設けられている。したがって、P4、入口、貯蔵穴、炉が互いに近接した配置状況を呈する。ほかに間仕切り溝を6条検出している。

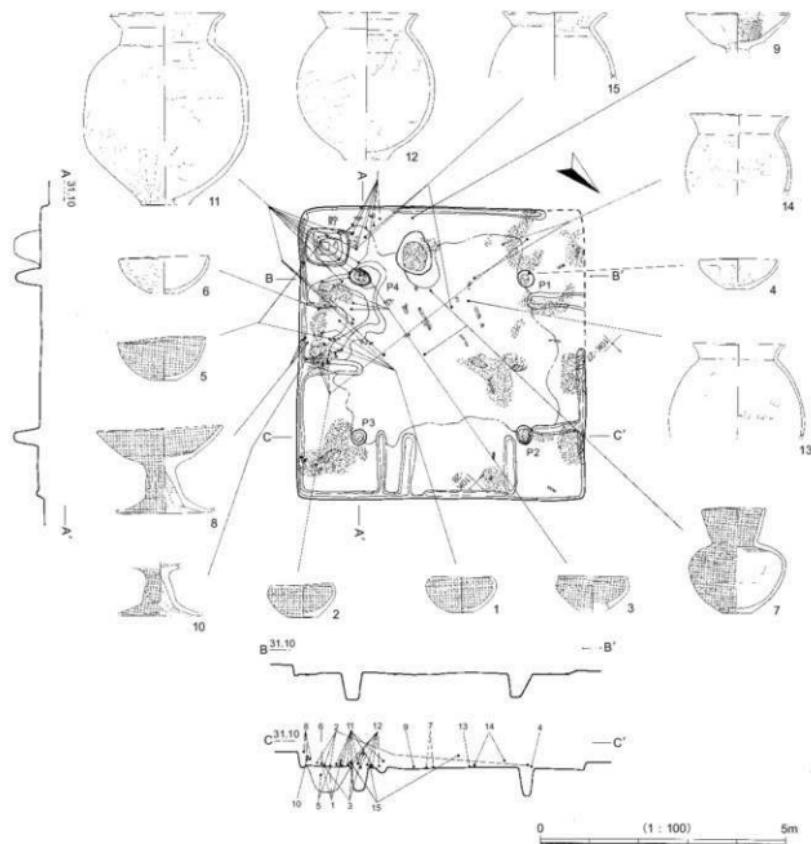
床面は柱穴を結んだ線の内側全体と貯蔵穴周辺に、硬化面の拡がりが明瞭に捉えられる。

遺物は入口側と想定される南東部と貯蔵穴の周辺から多く出土している。図示した遺物はほとんどが床面からの出土である。貯蔵穴内部から出土したのは5の杯の破片である。ほかに焼土と炭化材が床面全域から出土しており、また、各柱穴で柱痕跡が検出されたことからも、焼失住居である可能性が高い。

遺物（第130・131・222図、図版28・93） 土器15点と石製品1点を図示した。第130図1～6は杯である。いずれも平底である点が特徴である。1・2は体部高が高く全体に内彎しており、3は口唇部を上方に立ち上がらせている。4・6は体部高に比して口径も大きくなる傾向が認められる。5の口縁部は短く外反する。1～3・5は内外面に赤彩が施される。7の壺は胴部の最大径が上半部にあり、口縁部はやや傾斜して立ち上がり、口径は胴部最大径よりも明らかに小さくなる。8の高杯は底部が底部から直線的に開き、脚部は僅かに中膨らみの形状を示すが、脚部高は低く、裾部は広がって安定感がある。9の高杯杯部の口唇部はやや上方に立ち上がるよう見える。10の高杯脚部は、8と近似した形態を示す。11の壺は胴部下位に膨らみをもたせ中位の膨らみは大きくならない。頭部は上方に立ち上がり、口縁部は折り返し状を呈する。12の壺は口縁部が「く」の字状に外傾する。外面はヘラケゼリの後にヘラナデを施し仕上げられている。第131図13～15の壺も口縁部は「く」の字状に外傾する。

## L 051（第59図、図版7）〈7K-93・94グリッド〉

古墳時代前期の竪穴住居L052とL053の覆土を掘り込んでいる。本住居が最も後出になるが、壁の立ち



第58図 L010住居

上がりが捉え切れていない部分もある。カマドを北東側の壁に設けている住居で、方形の平面形を呈している。規模は主軸方向に4.8m、その直交方向で4.5mとなる。壁高は6cm～26cm残存する。壁溝は存在せず、壁はやや傾斜して立ち上がる。柱穴は対角線上に4か所配置される。入口の梯子穴は存在しない。貯蔵穴は東隅に設置されている。この貯蔵穴の位置とL052の柱穴P3の位置が重なったため、貯蔵穴の底面を明らかにできないまま、柱穴の底まで掘ってしまった。そのため、貯蔵穴の深さが不明となっている。カマドは北東側の壁の中央からやや東側に寄せて設置され、柱穴P1と貯蔵穴に近接している。カマドは袖部の基部が残存する。壁への煙道の掘り込みは認められない。なお、火床部の上から第141図2の高壇が出土している。

床面は全体に平坦な状況が認められ、硬化面が中央部を主体に形成されている。

遺物は散在して出土している。1の壺と4・5の甕がカマド近くから出土し、カマド内からは2の高壺が出土している。6の甕は床面から僅かに浮いた位置から破片の状態で出土した。石器39は敲石状の礫石器である。ほかに焼土のブロック状堆積が検出されている。ただ、炭化材の出土は顕著でない。

遺物（第141・214図、図版34・35・85） 土器7点と石器1点を図示した。第141図1は丸底で体部高い壺である。口縁部と体部の境に稜が巡っているが、須恵器壺の模倣ではないと考えられる。2・3の高壺は壺部は丸底壺で、脚部は脚部高が低くおさえられ、「ハ」の字状に開く。4の甕は長胴を呈し、外表面はヘラケズリが行われている。5の甕胴部は球状の可能性が高い。6は卵球状の膨らみをもつ甕である。第214図39の礫石器は礫の端部に使用痕が認められる。敲石のような使用が考えられる。

#### L 0 6 2 (第59図) (8K-52・62グリッド)

K区から続く溝状造構に壊され、造構の遺存状態はやや不良である。主軸方向は北から北東方向に振れ、平面形は方形を呈する。主軸方向の規模は5.5mで、その直交方向が5.4m前後である。壁高は4cm程度残存するにすぎない。壁溝は部分的に途切れた状態で検出されているが、遺存状態から考えると全周していた可能性が高い。柱穴は対角線上に4か所配置される。入口の梯子穴は存在しない。ただ、溝状造構によって破壊された部分に存在していた可能性は否定できない。貯蔵穴は南隅に設置され、深さは37cmである。炉は中心から北東に寄った位置で、柱穴P1とP4を結んだ線上のややP1寄りに設けられている。

床面は、中央部に硬化面が残存するような状況で検出されている。

遺物の出土量は僅かである。北東隅から1の壺と2の高壺が出土したが、遺存状態は不良である。貯蔵穴周辺からは砥石が出土した。また、焼土が床面で検出されている。

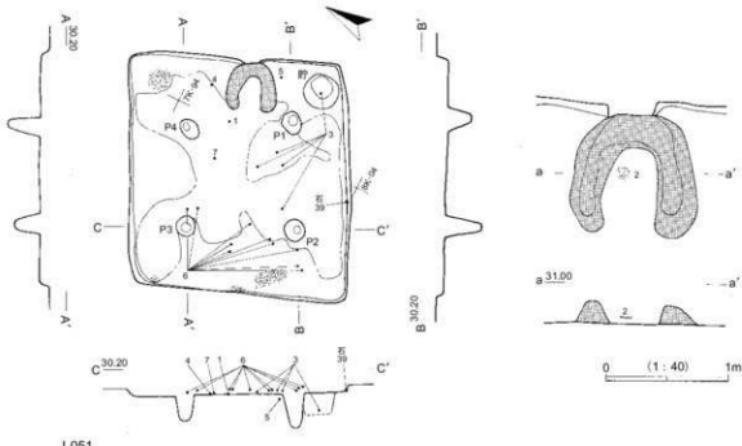
遺物（第142・220図、図版91） 土器2点と石製品1点を図示した。第142図1の壺は口縁部を欠損する。径の小さな底部で、胴部は球状の膨らみをもつ。2の高壺壺部は壺部の下位に明瞭な稜線を設ける。体部は僅かに外に反りながら開いている。第220図180は砥石の欠損品である。

#### L 0 6 9 (第61図、図版8) (7J-90, 8J-00グリッド)

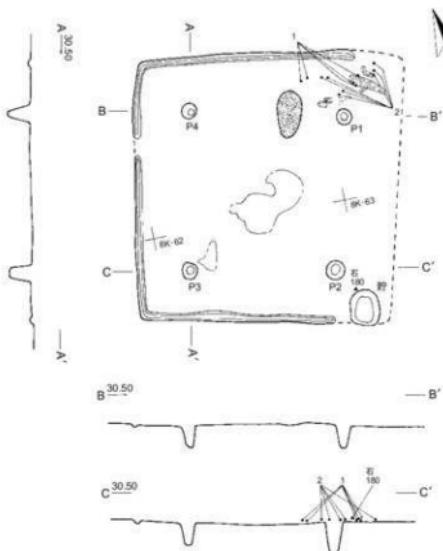
弥生時代以降6軒の竪穴住居が繰り返し構築された地点に位置し、その中で最も後から掘り込まれた造構になる。カマドが設置される段階の竪穴住居で、カマドは北東側の壁の東寄りに設けられている。平面形は方形で、主軸方向に7.3m、その直交方向に7.2mの規模をもつ。壁高は最大で36cmで、壁溝は存在しない。柱穴は対角線上に4か所配置される。入口の梯子穴は、カマドの対向方向になる南西壁側中央部から70cm入った位置に検出されている。貯蔵穴は東隅に設けられ、深さは66cmである。貯蔵穴の西側には弧状の土手状施設が存在し、この施設とカマドによって貯蔵穴が画された状態を呈する。カマドは東隅の貯蔵穴に寄っているため、柱穴P1にも近接した状況になる。

床面は全体に平坦な状況が認められ、硬化面は東側の一部に確認されたにとどまる。

遺物の出土量は少ない。1・2・3は土師器壺でいずれも床面から出土している。4・5の甕は覆土中から出土した破片が接合し、6の甕も同様な状況を示す。カマドの火床部の上に、土製支脚が置かれた状態で出土し、さらにその上からも土器片が出土している。なお、カマド内から出土した土製支脚と土器について、遺存状態が低いことから図示していない。また、先述した4～6の土器と同様な状態で出土している土製品135は頭部の欠損した支脚である。土器以外では、石製品145・154～167の滑石製白玉がまとまって床面から出土している。梯子穴付近から検出された石器25は磨製石斧で、本住居には混入した可



L051



L062

0 (1 : 100) 5m

第59図 L051・062住居

能性がもたれる。人工遺物のほかに床面全域から焼土と炭化材が検出されており、焼失住居の可能性が高い。

遺物（第143・144・208・213・219・220・226図、巻頭図版6、図版36・84・90・91・97） 土器7点、土製品1点、石器・石製品25点、金属製品1点を図示した。第143図1・2は丸底で体部高が高い土師器壺である。口縁部はやや内凹する形態を示し、口縁部と体部の境が生じていない。3は平底の壺で体部から口縁部にかけて内凹気味になる。第144図4の甕は胴部の上位に張りがあり、頭部は直立するように立ち上がり、口唇部が小さく外傾する。5の甕は胴部が球状に膨らみ、口縁部は「く」の字状に外反する。6は単孔式の瓶と考えられる。第219図145～167は滑石製の白玉である。上下面に研磨が施されていない部類が目立つ。また、中位に稜線が巡り算盤玉状を呈する類が存在する。第213図25は磨製石斧で、弥生時代の遺物である可能性が高い。

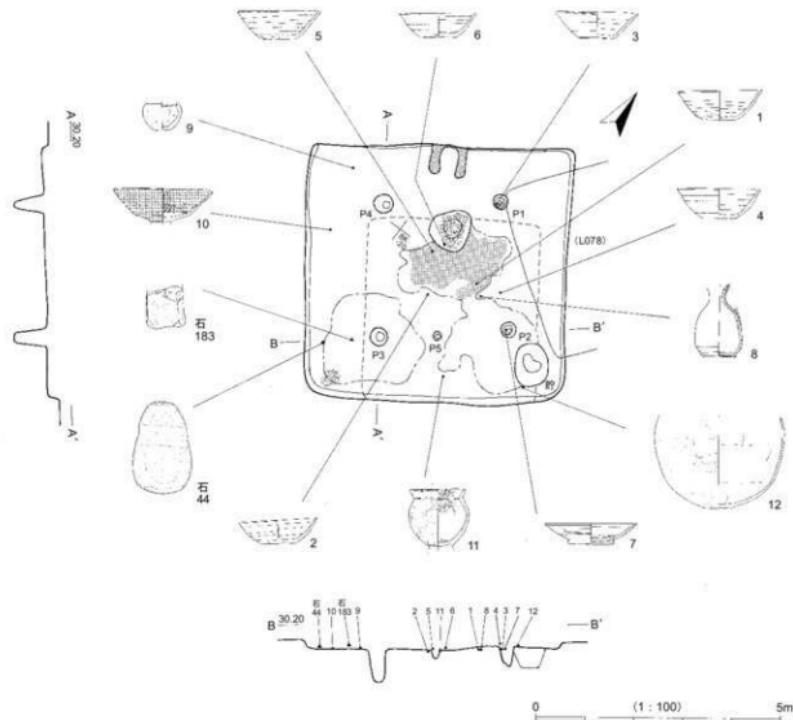
#### L 071 (第60図、図版8) (8K-10・20グリッド)

弥生時代後期から平安時代にかけて構築された5軒の竪穴住居が、本住居と複雑な重複関係を有している。また、後述するように時期の比定が難しい住居となっている。平面形は隅丸方形を呈し、カマドを北西壁のほぼ中央に設置する竪穴住居である。主軸方向とその直交方向とも5.3mの規模で、壁高は5cm～24cm残存する。壁溝は存在せず、壁は傾斜して立ち上がる。柱穴は対角線上の4か所に配置され、カマドの対向側に入口の梯子穴が存在する。貯蔵穴は東側に設けられ、カマドからは離れている。カマドは北西壁のほぼ中央に設置され、袖部のみが残存する。また、このカマドの前面に火床部が形成され炉とも考えられる火處が検出されている。さらにこの火床の周囲には山砂が検出され、火床の南側に硬化した床面が確認された。この火床については、後で検討を加えておきたい。

床面は柱穴の周囲とカマドの前面に硬化面が存在する。また、もう1つの火床部の南側にも硬化面が存在するが、入口方向にかけては検出されていない。

遺物は住居全体に散らばるような状態で、比較的多く出土している。また、床面から出土している土器が多く存在する。個々の提示土器については挿図のとおりであるが、遺物の帰属時期が明らかに大きく2時期に分かれている。1～8については平安時代に比定され、9～12は古墳時代中期に帰属すると考えられる。本住居の北東側には平安時代の竪穴住居であるL078が重複する。しかし、1～8の土器で範囲から推定して、L078に含まれる可能性があるのは3の壺1点のみで、ほかは住居の推定範囲に含まれない。調査時点での所見では、本住居に入れ子状態で重複する竪穴住居の存在は確認できていない。形態や貯蔵穴の位置から判断すれば、本来9～12の土器こそが本住居に伴う可能性が高い。そこで考えなくてはいけないのが、カマドの前面に検出された火床部の性格である。この火床の形態は隅丸三角とでもいう形で、周囲から山砂が検出されている。ここでこの火床が本住居に伴う炉の火床ではなく、カマドの火床であつたと推測するならば、壁の北側に設置されたカマドの残骸という見方も可能となる。たまたま本住居と床面レベルが一致し、しかも入れ子になって重複していたために、存在していた1軒の姿が捉えられなかつた可能性がある。そのように考えなくては説明がつきにくい状況である。したがって、遺構番号が付けられなかつた竪穴住居が存在し、その遺物が1～8との判断をして、本住居を古墳時代中期に含めることとした。ただ、調査時の所見ではないため、平安時代の遺物が単に廃棄されただけとの可能性は残る。

遺物（第144・145・215・220・226図、図版37・86・91・97） 土器12点、石器・石製品2点、金属製品2点を図示した。第144図1～第145図6は土師器の壺である。3は底部回転糸切りの後、底部と体部下端



第60図 L071住居

は無調整で終わっている。第145図7は灰釉高台付皿である。口唇部が外反し、高台も「ハ」の字状に短く開く。8は灰釉小瓶で把手は欠損している。第145図9は小型の壺と考えられる。10は高坏坏部である。12は壺の胴部で、外面はヘラケズリの後にナデを施している。また、ハケメの痕跡も認められる。

#### L 0 7 6 (第61図) (7K-60・61グリッド)

古墳時代後期の竪穴住居であるL086が重複する前に遺存状態は比較的良好で、方形の平面形を呈し、主軸方向を北西に向かう。その方向に6.2m、直交方向に6.1mの規模をもつ。壁高は最大で17cmを残す。壁溝は北東隅にL字状に検出されている。ほかの部分では存在していない。柱穴は対角線上に4か所配置され、入口の梯子穴は存在しない。貯蔵穴は南隅に存在し、深さは33cmである。炉は中心から西に寄った位置で柱穴P1とP4の中間部に存在していた可能性が高いが、調査時点では明確に炉と断定できる施設は検出されなかった。

床面は中央部を主体に広く硬化面の形成が認められる。

遺物は床面か床面に近い位置から出土している。1・2の壺は住居の中央部から出土し、9の壺も中央

部付近の床面から出土している。柱穴P1の周辺からは、6・8の高杯、10の甕が出土し、それに近接して5の壺、7の高杯脚部も検出されている。人工遺物以外では、P1の上から小規模な貝ブロックが検出され、貯蔵穴の上には焼土が認められた。

遺物（第145・146図、図版38）土器10点を図示した。第145図1の壺は体部高と口縁部高がほぼ等しく、口縁部は直線的に外傾して開く。2の壺は口縁部を欠損する。小さな平底で体部上半に最大径を置いている。3・4は壺の部類と考えられる。外面はヘラナデで仕上げられ、4は丁寧な調整が施されている。6の高杯部は口縁部が僅かに外に反るように開く。7・8の高杯脚部は、中膨らみの柱部から裾部は反るよう広がる。9の甕は胴部中位が大きく膨らみ、口縁部は「く」の字状に外反する。胴部外面はヘラケズリの後にヘラナデを行い仕上げている。第146図10の甕は胴部が球状に大きく張り、口縁部は「く」の字状に急激に折れて外反している。

#### L106（第62図）（IIK-04・05グリッド）

調査区の南側に位置し、L040溝状構造に南側を壊されている。北側は弥生時代後期の竪穴住居であるL209の覆土に掘り込んでいるが、黒色土中の壁を捉え切れていない。したがって遺存状態はやや不良である。平面形は方形を呈していたと見られ、主軸方向に5.3m、その直交方向も同様な規模をもつと推定される。壁高は最大で11cmで、壁溝は存在しない。柱穴は対角線上に4か所配置される。入口の梯子穴の存在は確認できない。ただ、L040によって壊された南東壁側に設けられていた可能性は残る。貯蔵穴は南隅に設けられ、平面形は円形を呈し、規模は長径66cm、短径65cm、深さ35cmである。また、北西壁中央から80cm入った位置にもピットが存在するが、性格は不明である。炉は中心から北西方向でP1とP4の中間に設置されている。床面から僅かに掘り込んで火床面となるが、火床の赤化は顕著ではない。

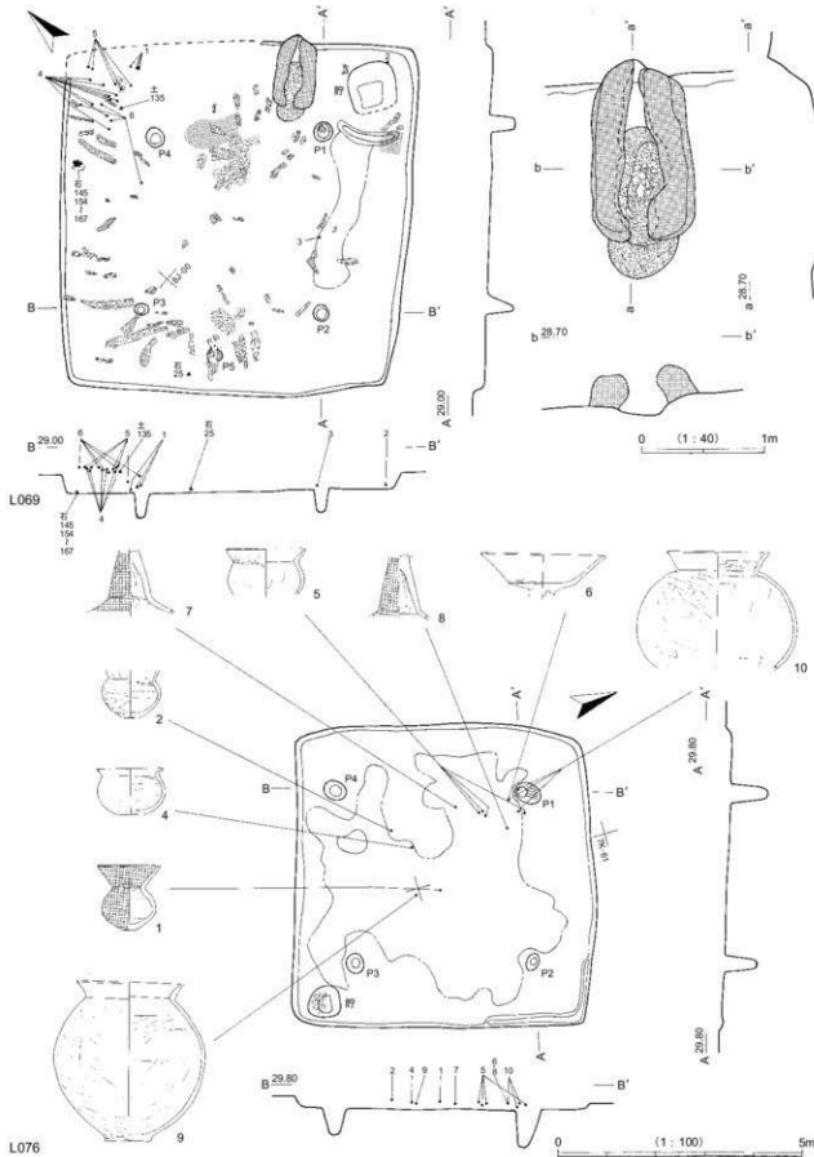
床面は硬化面の形成が捉えられない。

遺物は住居の西側から出土する傾向が捉えられる。1～3は高杯で、3の脚部が床面から出土している。西隅近くから出土した4の甕は置かれた状態で検出されている。5・6の甕も置かれた状態で出土している。土製品21は炉の縁に設置されていたと見られるが、やや離れた位置から出土した破片が接合している。覆土からは石製品98の管玉、石製品124の小玉が出土している。土製品40は土玉である。

遺物（第149・150・203・204・218・219図、巻頭図版5・6、図版40・78・79・89・90）土器6点、土製品2点、石製品2点を図示した。第149図1～3は土師器の高杯である。杯部の1・2は下位に稜が巡り、口縁部は僅かに反りながら開く。3の高杯脚部は中膨らみが顕著でなく、急激に折れて裾部を広げている。4の甕は胴部中位に最大径があり、口縁部は「く」の字状に外反する。第150図5の甕も同様な形態で、6の甕胴部最大径はやや上位の位置になる。甕の外側調整はいずれもヘラケズリの後ナデで仕上げている。第203図21は炉の縁に置かれた土製品と考えられる。第204図40は土玉である。第218図98の管玉は途中で折れている。第219図124は埋れ木製小玉になるであろう。

#### L108（第62図、巻頭図版2、図版11）（I0J-88・89グリッド）

弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居3軒L133・131・355が先行して構築され、その覆土を掘り込んでいて、4軒の重複の中では最も後出になる。部分的に覆土中の壁が捉え切れていないが、床面範囲は検出されている。平面形は方形を呈し、主軸方向は北西を向く。規模は主軸方向に5.2m前後になると推定され、その直交方向に5.3mで、壁高は最大で69cmである。壁溝の有無は南東側が不明で、北西壁下では一部が切れている。検出状況から推測すると、大部分に巡っていた可能性が高い。また、壁溝の中に



第61図 L 069・076住居

小ビットが2か所存在する。柱穴は対角線上の4か所に検出されている。入口の梯子穴は存在しない。貯蔵穴は南隅で柱穴P3にも接した位置に設置されている。平面形態は方形で、深さは52cmである。その貯蔵穴が隣接する柱穴P3からは不整形の短い土手状施設が、柱穴P2方向に向かう状態で検出されている。炉は2か所に発見されている。1か所は柱穴P1とP4の中間で、もう1か所は住居のほぼ中心に設置されている。2か所とも床からの掘り込みは5cm前後である。床面は硬化面の形成が顕著には認められない状態を示す。

遺物は比較的多く出土している。図示した1~4の壺、5の壺、6・7の高壺、8~10の甕は全て床面から出土している。出土している位置は中央部に少なく、貯蔵穴と土手状施設の周辺や、住居の西側が主体になる。西隅の壁下からは銅鏡(金5)が1面出土している。当該期の遺物とすれば極めて希な例であり、重複するL355に伴う可能性がある。石器18もほぼ床面からの出土であるが、この石器は打製石斧であり、縄文時代の遺物と見られる。何らかの経緯を経て混入したと考えられる。人工遺物以外に焼土と炭化材が出土しており、焼失住居の可能性を示している。

遺物（第150・212・224図、巻頭図版4、図版40・83・96） 土器10点、金属製品1点、石器1点を図示した。第150図1~4は土師器の壺である。いずれも径の小さな平底をもち、体部から口縁部にかけて内彎するように立ち上がる。1~3は体部高が高く、4の体部高は低くおさえられ口唇部が短く上方に立ち上がる。5は口縁部を欠損する壺で胴部高が低く、下部が大きく膨らむ形態になると推定される。6の高壺は壺部の口縁部が内彎気味となり、脚部は中膨らみで中実の柱部から裾部は大きく広がる。7は高壺の壺部のみである。体部は僅かに内彎しているが、口唇部は幾分外に開くように見える。8の甕は胴部が卵球状を呈し、口縁部は「く」の字状に外傾している。9・10の甕もやや長胴傾向を示している。銅鏡（第224図5）は重圓文鏡で無傷で出土している。外区に鋸歯文が配されているが、割り付けが乱れており、雑な施文といえる。石器（第212図18）は縄文時代中期の打製石斧の欠損品であろう。

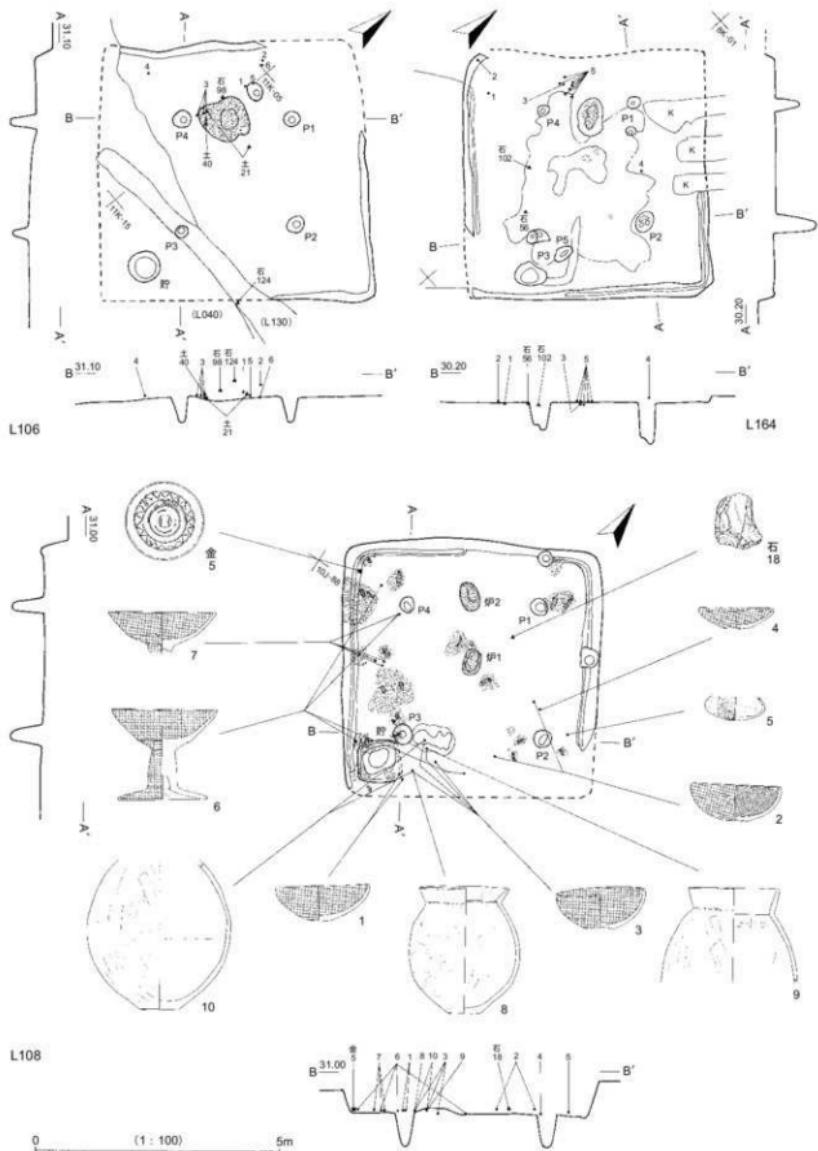
#### L 1 6 4 (第62図) (8K-10・11グリッド)

弥生時代後期の竪穴住居3軒、古墳時代前期の竪穴住居1軒が構築された場所で、それらの覆土を掘り込んで構築している。さらにその後に平安時代の竪穴住居L078が重複する。また、最近の擾乱も受けているため、遺存状態はやや不良であるし、壁が捉え切れていない部分もある。平面形は隅丸方形を呈し、主軸方向は北西を向く。主軸方向の規模は5.0m前後で、その直交方向に4.9mを測る。壁高は最大で30cm残存する。壁溝が存在する部分が多く、全体に巡っていた可能性が高いが、壁が明らかでない部分もあり、詳細は不明である。柱穴は対角線上に4か所配置される。入口の梯子穴は、南東壁側で柱穴P3に近い位置から検出されている。貯蔵穴は梯子穴とP3に近接した場所から検出されたビットが該当するかもしれない。ただ、このような位置に設置される例が見当たらないので、断定的ではない。炉は中心から北西に寄り、柱穴P1とP4の中間に設置されている。

床面は、4か所の柱穴に囲まれた内側に硬化面の形成が認められる。

遺物は床面から散在して出土している。1は壺、2は壺で西隅付近からの出土である。3の高壺脚部と5の甕は近接して出土している。石器56は磨石である。石製品102は管玉である。

遺物（第163・216・218図、巻頭図版5、図版48・87・89） 土器5点、石器・石製品2点を図示した。第163図1の土師器壺は小さな平底から体部は内彎気味に立ち上がる。2の壺は胴部高がやや高く、口縁部は上方に立ち上がる。3の高壺脚部は体部が直線的に開く。4の高壺脚部は僅かに中膨らみを呈する。



第62図 L106・108・164住居

5の甕は胴部中位が大きく膨らみ口縁部は比較的緩やかに外反する。第216図56は磨石である。床面から出土しているが本住居に混入した可能性もある。第218図102は管玉で、両側から穿孔が行われている。

### L 3 1 5 (第63図) (9J-96, 10J-06グリッド)

弥生時代後期の竪穴住居L359と古墳時代前期の竪穴住居L264・L393の覆土を掘り込んでいる。カマドを東壁に設け、平面形態は方形を呈し、主軸方向に5.8m、その直交方向に5.7mの規模をもつ。壁高は最大で41cm残存し、壁溝は存在せず、壁はやや傾斜して立ち上がる。柱穴は4か所に配置されている。入口の梯子穴は南壁側に存在し、それに隣接して貯蔵穴が設置されている。したがって、南東の隅に貯蔵穴、その北側に近接するカマド、それと入口が集中的に配置された状況が看取される。カマドは東壁の中央部から南に寄った位置に設置されている。検出面では煙道部の壁への掘り込みは認められず、天井部は遺存せず袖部のみが検出された。

床面は入口付近からカマド前面と中央部に踏み固められた硬化面が残存する。

遺物は1の壺と116の石製品以外は床面から出土している。2・3・4は土師器の壺で、いずれも破片の状態でやや距離をもって出土した破片が接合している。7の甕胴部は、カマド内から出土した破片と右側の袖部に接するように出土した破片が接合している。8は土師器の壺で、床面に近い位置から出土しているが、底部に高台をもつ壺で、平安時代の所産であることは明らかである。何らかの経緯によって混入したと考えられる。

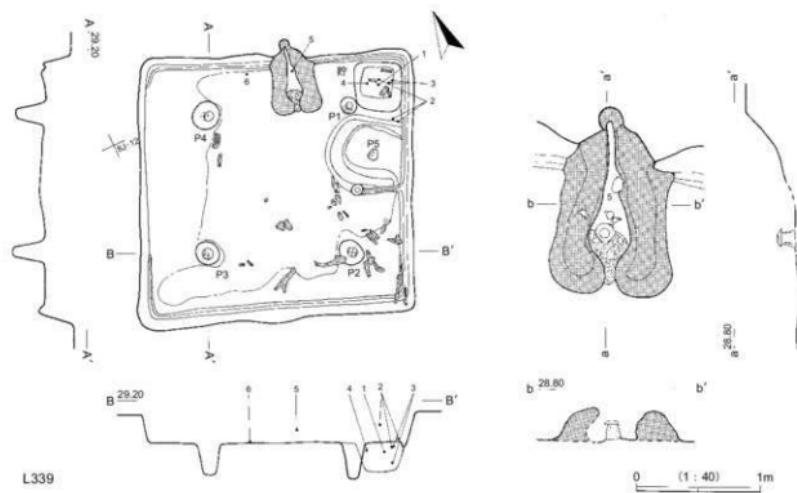
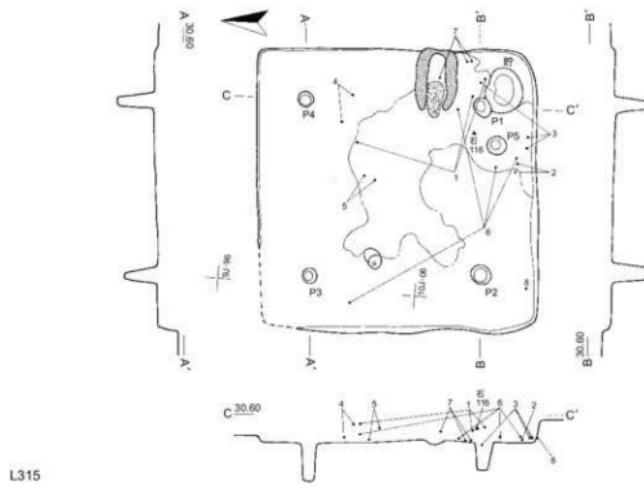
遺物 (第185・218・219図、巻頭図版5・6、図版59・89・90) 土器8点と石製品2点を図示した。第185図1は、体部の上部で内彎し、口縁部が外傾して開く壺で、本住居には直接伴わないと考えられる。2~4は壺である。2は平底をもつが、ほかの2点は丸底を呈する。5の壺は、口縁部高が胴部高より低く、口縁部は直線的に外傾して開く。6の甕は球状の胴部と考えられる。口縁部は緩やかに外反する。7は胴部の下位に最大径がくるものの、全体としてやや長胴傾向になる状況が窺われる甕である。第218図116は緑色凝灰岩製の管玉で、両側から穿孔が行われている。

### L 3 3 9 (第63図、図版23・24) (8J-12・13グリッド)

弥生時代後期の竪穴住居L404とL419、古墳時代中期の竪穴住居L338を壊している。カマドを北東壁に設けた方形の竪穴住居で、規模は主軸方向に5.6m、その直交方向に5.5mである。壁高は19cm~61cm残存し、壁溝は北西側の壁下をのぞいて検出されている。北西側の壁はL419の覆土になるため、調査時に壁溝が捉えにくかったと推測され、そのような状況から考えて全体に巡っていた可能性が高い。柱穴は対角線上に4か所配置される。また、P1とP2の間に小ピットが存在し、その小ピットから南東壁に向かつて間仕切り溝が存在する。入口の梯子穴は南棟壁の中央部からやや東隅に寄った内側に存在し、その周囲は馬蹄形を呈する土手状の盛り上がりが囲んでいる。貯蔵穴は東隅に設置され、平面形は方形を呈する。規模は長径100cm、短径98cm、深さ64cmになる。カマドは北東壁に設置されているが中央部ではなく、東隅側に寄っている。したがって、カマド、貯蔵穴、入口は、東隅近辺に集中して設けられた形となる。カマドは煙道部を壁に僅かに掘り込み、袖部が残存し天井は崩落している。カマド内からは土製支脚が正立の状態で出土し(遺存状態不良で実測不可能)、その上に土器の底部が伏せられた状態で出土している。

床面は入口方向から貯蔵穴の周辺、カマドの前面から柱穴で囲まれた中央部全域に硬化面の拡がりが確認された。

遺物はカマド内とその周辺、貯蔵穴から主に出土している。1~4は土師器の壺で、いずれも貯蔵穴か

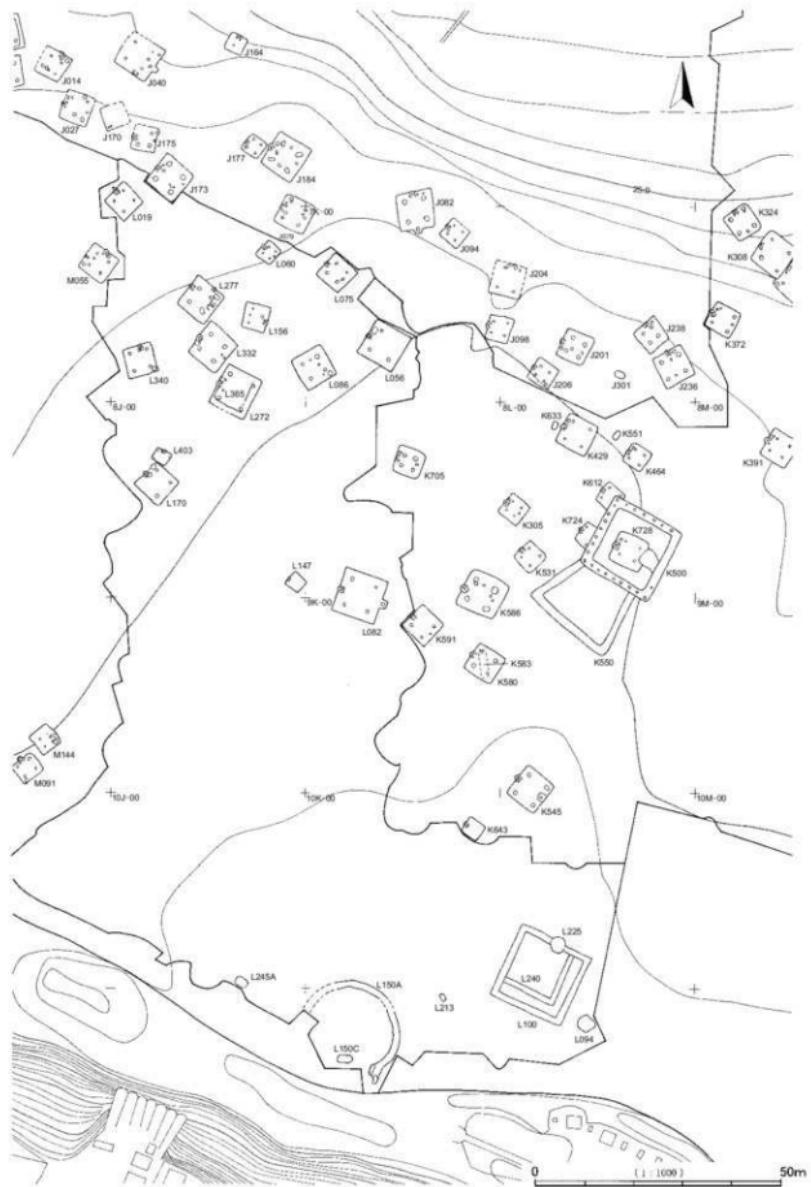


0 (1 : 100) 5m

第63図 L315・339住居

ら出土しているが、底面からの出土でなく、覆土の上層に集中している。廃棄時に貯蔵穴が埋まっていたか、蓋状の覆いの存在が想定される。カマド内からは先述した土製支脚、土器底部のほかに5の土師器环が火床面の上位から出土している。6の甌は、カマドの左側に置かれたような状態で出土した。土器類以外には床面から炭化材が出土している。柱穴の検出面で、炭化した黒色土が柱穴内に検出されている。おそらく柱材が炭化したものであろう。

遺物（第188・213図、図版60・61・84） 土器8点、石器1点を図示した。第188図1～5は土師器の环で、器高が高く体部は内彎氣味に立ち上がる。3の底部がやや趣を異にするが、ほかの4点は丸底である。4の口縁部が短く外傾する以外は内彎氣味で、体部と口縁部は一体である。内外面に赤彩が施され、3の内面には1条のヘラ状工具による線刻が存在する。6の甌は寸胴の单孔式である。口縁部は外反せずに折り返して納められていて、全体に砲弾形に孔を開けた形を呈している。7・8は手捏土器である。第213図30の石器は混入の可能性が高い。



第64図 L区古墳時代後期の遺構分布図

### 3 古墳時代後期の竪穴住居（第64図）

古墳時代後期に比定した竪穴住居の総数は15軒で、平面図を掲載する住居が9軒である。抽出率は60%である。竪穴住居の分布は、調査区の北側に多く、中央部から南側には少ない傾向が認められる。J区におけるこの時期の分布状況を合わせて考えると、草刈遺跡の北側を東に入る茂呂谷津と竪穴住居の立地に密接な関係が窺われる。

#### L 0 5 6 （第65図、図版7）(7K-73・74グリッド)

調査区の北東端部で、調査区J区と接して位置する。4軒の竪穴住居と1条の溝状遺構が重複する。時代が明確でない溝状遺構L090が本住居を切っているが、ほかの3軒は本住居に先行している。北西壁の中央にカマドを設置し、平面形は方形を呈する。規模は8.0m×8.0mで、壁高は最大で33cm残存する。壁溝は一周していたと考えられる。柱穴は対角線上に4か所配置されている。ただ、P2の位置に搅乱があり、発掘時点では存在が確認できない状況となっていた。梯子穴は存在しない。カマドは北西壁のほぼ中央に設置され、袖部のみが残存する。貯蔵穴はカマドの右側に設けられており、平面形は長方形を呈している。規模は長径132cm、短径96cm、深さ84cmである。この規模は、本調査区で検出した古墳時代後期の竪穴住居の貯蔵穴の中では最も大きい値である。

床面は柱穴で囲まれた中央から入口側と推定される南東壁側、カマドの前面にかけて硬化面が発達する。遺物は破片の状態では住居の全域から数多く出土している。遺存状態の高い土器は僅かである。図示はしていないが、カマドの右側から土製支脚が2点、横に置かれた状態で出土している。また、その支脚に接して壺の大型破片が出土している。また、貯蔵穴の中から山砂が検出されている。

遺物（第141・142・220・225図、図版35・91・97） 土器6点、石製品1点、金属製品1点を図示した。第141図1は須恵器の壺蓋である。天井部は丸味があり、遺存部の中心に近い側に回転ヘラケズリが行われている状況を残す。2は土師器の壺で、口縁部は上に立ち上がりっている。3の壺は丸底で、体部と口縁部が張り出す稜によって明瞭である。4は体部が直線的に開く鉢である。第142図5の壺は先行する竪穴住居に伴っていた可能性が高い。6は手捏土器である。

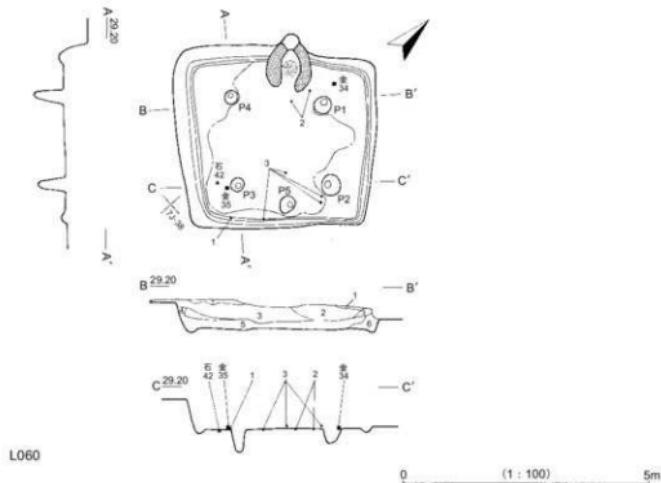
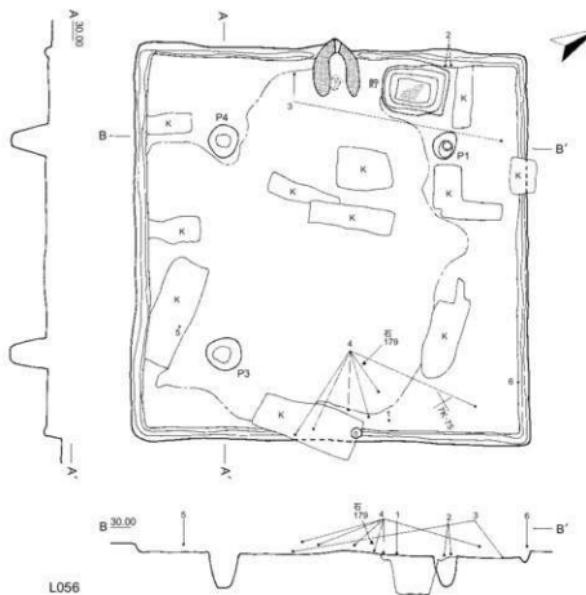
#### L 0 6 0 （第65図）(7J-27・28グリッド)

弥生時代後期の竪穴住居であるL059と重複している。カマドを北西壁に設置した方形の平面形で、規模は主軸方向が3.7mで、その直交方向が4.0mである。壁高は最大で61cm残存する。壁溝は全周する。柱穴は対角線上の4か所に配置されている。カマドと対角方向になる南東壁から僅かに入った位置に、入口の梯子穴を検出した。貯蔵穴は設置されていない。カマドは袖部が残存する。火袋部の中央部から土師器の破片がまとめて出土しているが、接合しても実測可能な個体にはなっていない。

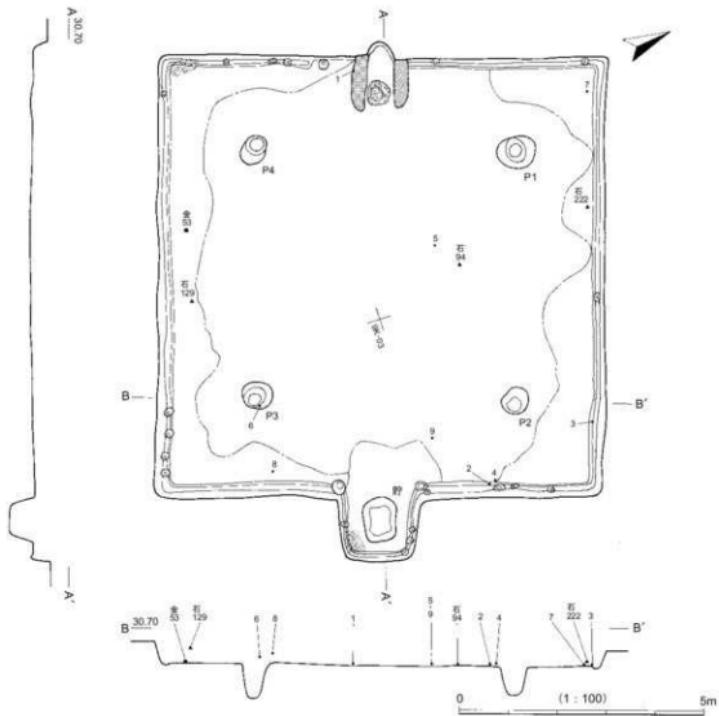
床面は柱穴で囲まれた住居の中央から入口方向にかけて硬化面が存在する。

遺物は少なく、遺存状態の良い土器は出土していない。また、焼土の検出もなかった。

遺物（第142・214・225図、図版35・85・97） 土器5点、石製品1点、金属製品2点を図示した。いずれも床面に密着した状態で出土した遺物である。第142図1の壺は丸底で、外側の底部と口縁部の境は明瞭でない。2は高壺の壺部である。脚部との接合部が大きい。3は長胴傾向の強い壺である。4・5は手捏土器の部類で、日常品ではない。P3付近から出土した第225図35は刀子の刃部と考えられる。また、その近くから出土している第214図42は、やや厚いが上下面が平坦になっている板状を呈し、砥石的な使



第65図 L 056・060住居



第66図 L 082住居

用が行われていたと推定される。

#### L 082 (第66図、図版5) (8K-92, 9K-02グリッド)

調査区の中央東側でK区との境界付近に位置し、4軒の竪穴住居と重複する。本住居よりも新しい構築は、平安時代の竪穴住居L 081である。カマドは北西壁のはば中央に設置し、その対向方向である南東壁の中央に張り出し部を設けている。方形の平面形を呈し、規模は主軸方向に9.2m、その直交方向に9.1mである。壁高は38cm～48cm残存し、壁溝はほぼ全体に巡っている。柱穴は対角線上の4か所にある。入口の梯子穴は存在していない。カマドは袖部のみが残存し、天井部は残存していない。貯蔵穴はカマドの対向方向である南東側の張り出し部に設けられ、規模は長径83cm、短径60cm、深さ52cmである。

床面は壁際を除いて硬化面の掘がりが認められる。

遺物は中央部に少なく、壁に寄った位置から出土している。また、完全な形をなす土器は1点も存在しない。石製品は管玉が1点床面から出土しており、覆土から有孔円板が検出されている。壁際からは軽石の砥石も出土している。人工遺物のほかには、張り出し部、北西壁際に僅かな焼土の存在が認められる。

遺物（第146・208・218・219・222・226図、巻頭図版5・6、図版38・68・75・81・89・90・93・98）  
土器9点、土製品1点、石製品3点、金属製品1点を図示した。第146図1は須恵器の壺蓋で、カマドの左側から出土している。天井部の半分以上に回転ヘラケズリが施される。2は丸底を呈する土師器壺である。外面底部に溝状の痕跡が7条存在し、二次的な利用が行われたことを示している。3・4は口縁部が内に折れる壺である。5の高壺脚部は床面に近い位置から出土しているものの、時期的にはかの土器よりも古くなると考えられる。6の高壺は脚柱部が長くのびる。8は須恵器の台付壺と見られる。

第218図94は住居の中央部床面から出土した管玉である。穿孔は両側から行われている。第219図I29は覆土中から出土した滑石製の有孔円板で、2孔が穿たれている。第222図222は軽石製の砥石である。

#### L 1 5 6 （第67図）(7J-57・67グリッド)

カマドを東壁に設けているが、東壁側に平安時代の竪穴住居であるL088とL154が構築され、遺存状態は悪い。カマドは東壁の中央からやや南側に設置され、方形の平面形を呈している。規模は、長軸長5.3m、短軸長5.2m内外で、壁高は最大で29cm残存する。壁溝は存在しないと見られる。柱穴は対角線上の4か所に存在する。入口の梯子穴は、カマドの対向方向で、壁際から130cm内側の位置に存在する。貯蔵穴はカマドの右側で南コーナーとの間に設けられ、深さは60cmである。カマドは袖部のみ残存し、火床部は焼けた状態を残している。

床面はカマドの前面に硬化面の存在が認められる。

遺物の出土量は少ない。ただ、実測可能となった砲弾型の底部をもつ手捏土器などが14点存在し、出土遺物の中で目立っている。この手捏土器は覆土中から出土しており、竪穴住居の廃棄の過程で入った可能性が高い。カマド内からは、土製支脚1点と甕が破片の状態で出土している。支脚の基部は火床面からやや浮いた位置に置かれ、甕破片の出土位置が支脚の基部よりも低くなっている。

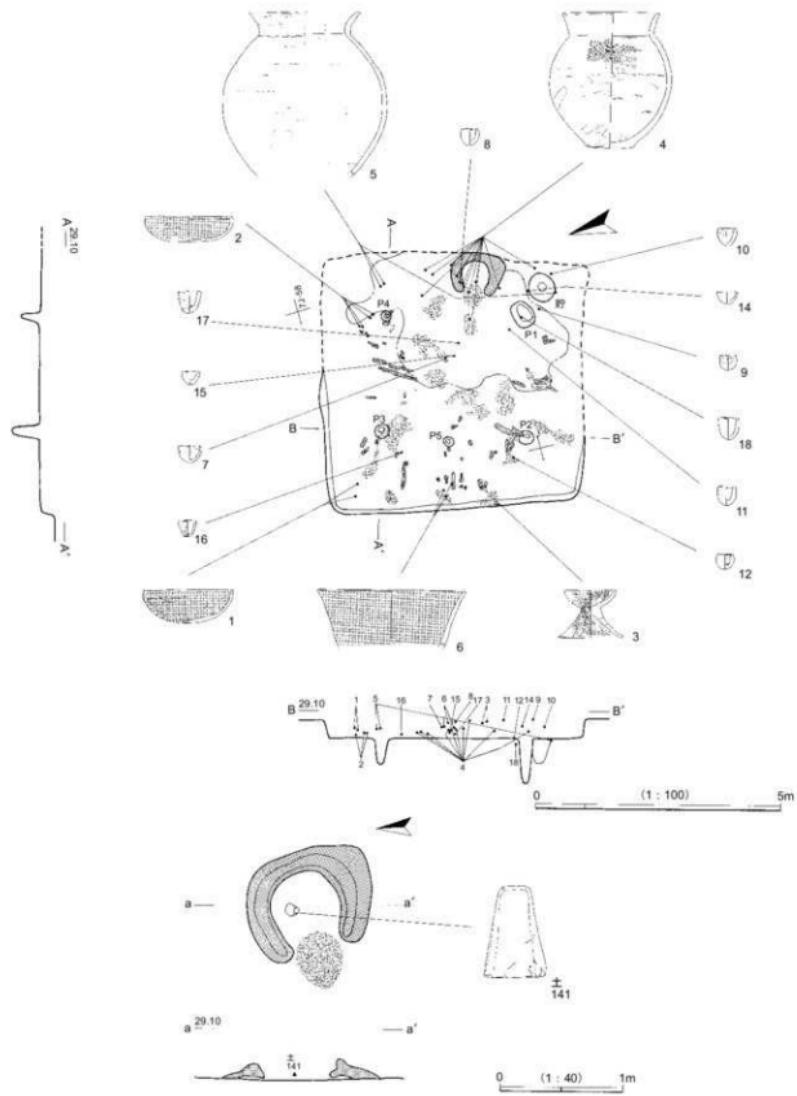
人工遺物以外に炭化材や焼土が比較的多く検出されている。焼失住居と見られる。

遺物（第162・163・208図、図版48・81） 土器20点と土製品1点を図示した。第162図1・2は丸底の土師器壺で、内外面が赤彩で仕上げられている。3の器台は覆土中からの出土で、本住居に伴う可能性は低い。4の甕はカマド内とカマド周辺から出土した破片が接合している。口縁部は「く」の字状に外傾し、胴部は中位に張りをもつ。頭部から胴部上位にかけてハケメの様な調整痕が認められ、胴部中位から底部はヘラケズリが行われている。第163図5は胴部中位が大きく膨らむ甕である。6は鉢と考えられる。7～20は小型の手捏土器である。18が柱穴P1から出土したほかは覆土中から検出されている。口唇部は尖り気味になるものが多いが、丸頭状になるものも存在する。底部は砲弾状か丸底に作られる。同時期に作られた可能性が高い。

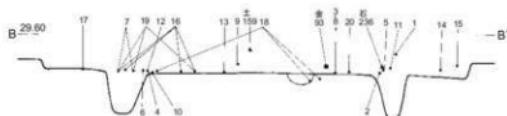
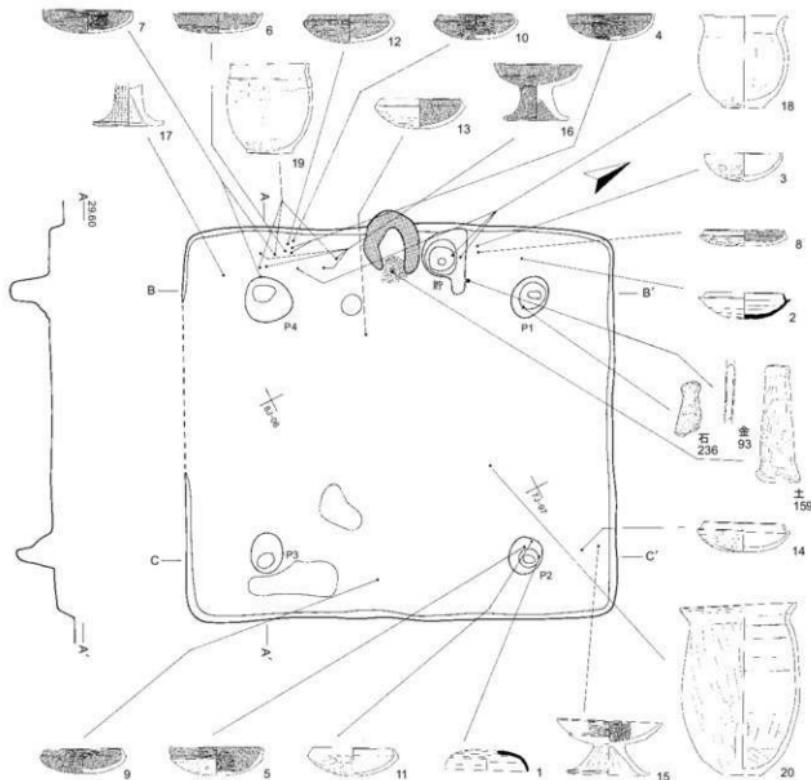
第208図141はカマド内から出土した土製支脚である。断面形が隅丸方形になる部分があり、角柱状に作られ、頭部も平坦になっている。

#### L 2 7 2 （第68図、図版20）(7J-86・96グリッド)

L156の南側に位置し、弥生時代後期から平安時代の竪穴住居が、複雑に重複している地区に検出された。平安時代の竪穴住居L271が北側で重複し、南側ではL273が壁から床を壊している。しかし、大きな破壊は免れており、北西壁にカマドを設置し、方形の平面形を呈する竪穴住居であることは確定される。規模は主軸方向で8.2m、その直交方向で8.9mである。壁高は最大で53cm残存する。壁溝は存在しない。柱穴の深さはP2を除くと70cm以上である。P2のみが40.7cmと浅いのは、いかなる理由によるもので



第67図 L156住居



第68図 L272住居

あろうか。入口の梯子穴は存在しない。カマドは北西壁のほぼ中央に設置されている。袖部のみが残存する。貯蔵穴はカマドの右側に設けられ、深さは32cmである。

床面は平坦に構築されているが、硬化面の拡がりについては、その範囲を明瞭に括ることができない。遺物は土器類を主体に比較的多く出土している。実測図を示した20個体の土器類は、ほとんどが床面から出土しており、住居の廃絶時に残っていたものと考えられる。土器は大きさは3か所にまとめて出土した。1つのまとまりはカマドの左側である。ここからは环、高环、小型の甕が出土している。カマドの右側で貯蔵穴付近からも須恵器の环、土師器の环が出土している。もう1か所はP2の周囲である。ここからは須恵器の环蓋、土師器の环、高环が出土している。また、カマドの火床部からは土製支脚が検出された。

遺物（第179・210・219・223・228図、巻頭図版6、図版57・82・90・94・99） 土器20点、土製品1点、石製品2点、金属製品1点を示した。第179図1は須恵器环蓋で、遺存状態は全体の4分の1程度にすぎない。外面天井部は回転ヘラケズリが広く行われ、ヘラ先による線刻が認められる。2は須恵器环ではほぼ完形である。体部外面の半分に回転ヘラケズリが行われている。3～14は土師器环である。遺存状態の良い個体が多い。4～10・12は黒色処理が施されている。丸底を基本にするが、6や8の底部は扁平気味である。11～14の丸底の环は、13の内面を除いて表面処理が明瞭でない。黒色処理の可能性も残る。15～17は高环である。15の环部は、体部の下位に稜が付くが、内面には稜が付かない。18～20は甕である。20の胴部は長脛傾向を示し、張りが明瞭ではない。

第223図236は輕石製品である。一端に括れを作り、紐をかけて使用したと見られる。砥石として用いられていたと考えられる。

#### L 277 (第69図、図版20) (7J-44・54グリッド)

北側にL275が、そして南側にL366が重複し、いずれの竪穴住居も壊している。カマドを北東壁と北西壁の2か所に設置する住居である。平面形は方形を呈し、規模は7.3m×7.2mで、壁高は34cm～56cm残存する。壁溝は存在しない。カマドが2か所に設置された稀な例であるため、主軸方向をここでは暫定的に北西としておきたい。対角線上の4か所に主柱穴が配置され、P2とP3の掘り方の状況から建替えがあつたと推測される。入口の梯子穴は、主軸方向の北西カマド（カマド2）の対向方向である南東側に検出したピットが該当すると考えられる。この梯子穴を半分埋むように鉤の手状に土手状施設が存在する。貯蔵穴は東の隅に設置され、平面形は「8」の字状に検出された。おそらく円形の貯蔵穴の掘り直しの結果と見られる。その貯蔵穴に近接して北東壁に設置されたカマドが存在する（カマド1）。したがって、カマド1と貯蔵穴、それに入口が東隅に集中して配置された間取りとなる。カマド1は煙道部を壁に掘り込み袖部が残存する。カマド2も煙道部を壁に掘り込んでいる状況が窺われ、天井部は認められず、左右の袖部が残っている。両方のカマドとも袖部が残存することから、住居の廃絶前では両方も使用可能な状態であったと考えられる。建替えに伴いカマドの設置位置を換えた場合、それ以前のカマドを壊す例が多いと思われる。本住居のように2か所に使用可能と推測されるカマドが設置された例は稀と考えられる。

床面は平坦な状況が認められるが、硬化面の形成は認められない。

遺物は少なく、遺存状態の良好な土器は出土していない。1～3は須恵器である。3の高环が床面から出土している。カマド2の左側から出土しているのは土師器の高环である。7～9も高环になり、時期差もほとんど認められないが、9の脚部のみが床面から出土し、ほかの2点は覆土中に出土している。図示

していないが、カマド2の火床面からやや上で、土師器の破片が重ねられた状態で出土している。人工遺物以外では、カマド1の前面や中央部で焼土が検出されている。

遺物（第180・203・206・219図、巻頭図版6、図版57・78・80・90） 土器11点、土製品2点、石製品1点を図示した。第180図1は須恵器の壺蓋である。天井部はやや平たく、口縁部との境には明瞭な稜が巡る。天井部の回転ヘラケズリは全体の3分の2前後に及ぶ。2は須恵器の壺身の破片である。遺存状態が不良で不明な部分が多い。1の壺蓋より時代的に新しくなるのは確実である。3の須恵器高壺脚部の透孔は3か所と見られる。4は丸底の土師器壺で体部高が高い。5の土師器壺は丸底を呈するものの、口縁部高と体部高に顕著な開きは認められない。6～9は土師器高壺である。6の壺部は口縁部と体部の境が明瞭でなく、7は口縁部がやや外反気味に立ち上がり、体部との境を明瞭にしている。10の壺は全体に器壁が薄く調整されている。

### L 3 3 2 (第69図、図版23) (7J-65・75グリッド)

上述のL 277の南側に位置し、L 280・L 366・L 428を壊している。主軸方向を北西に向け、平面形は方形を呈する。規模は主軸方向に7.3m、その直交方向で7.8mである。壁溝は北西壁から北東壁の一部を除き、ほかは途切れずに巡っている。壁高は最大で35cm残存する。柱穴は対角線上の4か所にある。入口はカマドの対向方向である南東壁になる。入口の梯子穴は図に示したP5が該当し、壁に近接して別の小ピットが検出されている。これも梯子を固定する部材の基部が埋設されていたビットと推測される。貯蔵穴はカマドの左側に近接して設けられている。カマドは北西壁の中央部から僅かに南に寄せて設置されている。煙道部は壁に掘り込み、袖部も壁の掘り込み部から作りつけられている。天井部は全く遺存せず袖部のみが検出されている。燃焼部内からは遺物は出土していない。貯蔵穴はカマドの左側の袖部に接するような位置に設けられ、平面形は方形を呈し、深さは58cmになる。

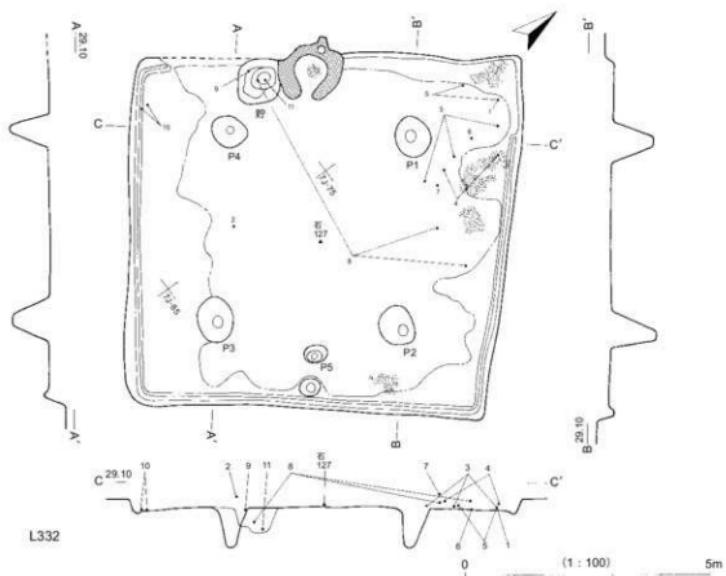
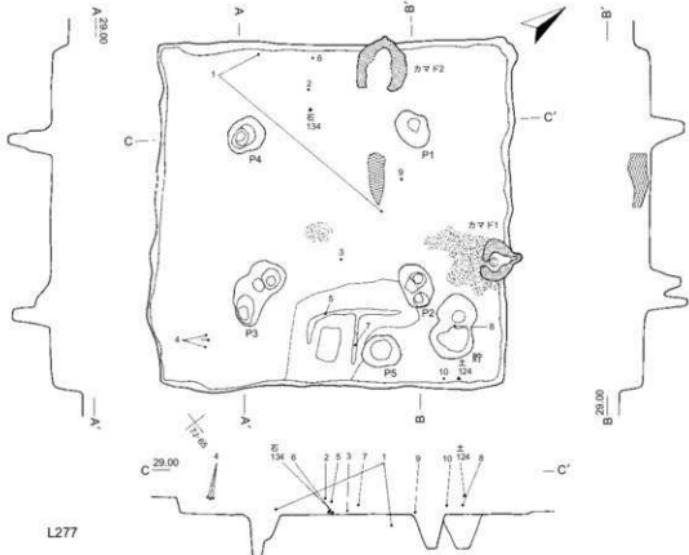
床面は平坦で、壁際を除いて硬面の形成が観察される。

遺物は北の隅にやまとまっているが散在して出土しているといえよう。1～6は土師器の壺で、2・4・7以外は床面から出土している。7は赤彩が施された壺で1～6の壺よりも先行する形態である。貯蔵穴の中から出土している8・11は鉢である。住居のほぼ中央部からは勾玉形の石製模造品が出土した。

遺物（第186・219図、巻頭図版6、図版60・90） 土器11点と石製品1点を図示した。第186図1～7は土師器壺である。1～6の壺は内外面に丁寧なヘラミガキが施される共通の特徴が認められる。また1～5は、外面では体部と口縁部の境が明瞭となるが、内面は全体に丸味をもっている。6は口縁部が内傾し、須恵器壺の模倣である。7は丸底内脇の壺と見られ、内外面に赤彩が施されている。8は壺を深くした形態を呈する鉢である。内外面ともヘラミガキによって仕上げられている。9も鉢である。10は須恵器壺の口縁部破片である。11は外面に輪積痕跡が残る鉢である。ナデが施されているが調整は簡易で、底面に木葉痕を残している。第219図127は扁平な勾玉形の石製品である。全体に丁寧に調整が施され、腹部の断面形態は長楕円形を呈する。

### L 3 4 0 (第70図、図版24) (7J-71・81グリッド)

弥生時代後期の竪穴住居L 140を切っている。カマドを北壁に設置し、平面形は方形を呈する。規模は主軸方向に6.1m、その直交方向に6.1mで、壁高は最大で48cm残存する。壁溝は存在しない。柱穴は対角線上の4か所に配置されている。入口の位置はカマドの対向方向である南側と推測される。梯子穴は検出されていないが、柱穴P2に接して鉤の手状の土手状施設が設けられているので、ここに入口があったと



第69図 L277・332住居

考えられる。貯蔵穴は南東の隅に設置され、平面形は円形を呈する。規模は長径93cm、短径82cm、深さ70cmである。カマドは北壁の中央部からやや東側に寄った位置に設けられている。煙道部が壁に30cmほど掘り込まれており、現状では袖部のみ残存する。

床面は入口からカマドの前面にかけて硬化面が存在し、住居の西側と壁際では、硬化面の形成が顕著でない。また、壁際から中央部に向かって僅かに低くなる状況が認められる。

遺物はカマドの周囲と入口近辺から比較的多く出土している。カマド内からは土製支脚が立った状態で出土し（遺存状態不良で図示不可能）、その上に2の高環壺部が伏せた状態で置かれ、さらにその上に5の鉢を伏せて重ねてあった。この支脚の頭部に伏せられた壺部と鉢は、単に支脚の高さ調整のためではないと想像される。カマドの右側からは8の甕が土圧で押しつぶされた状態で出土している。カマドと対向する方向に設けられた貯蔵穴からは、9の甕が破片の状態で出土している。出土したのは底面ではなく、やや浮いた位置からである。入口付近からは3の高環壺部が床面から出土し、1の高壺、6の鉢、10・11の甕が床面からやや上で出土している。また、炭化材や焼土が出土しており、焼失住居の可能性が高いことを示している。

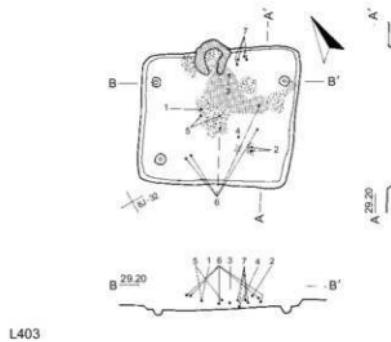
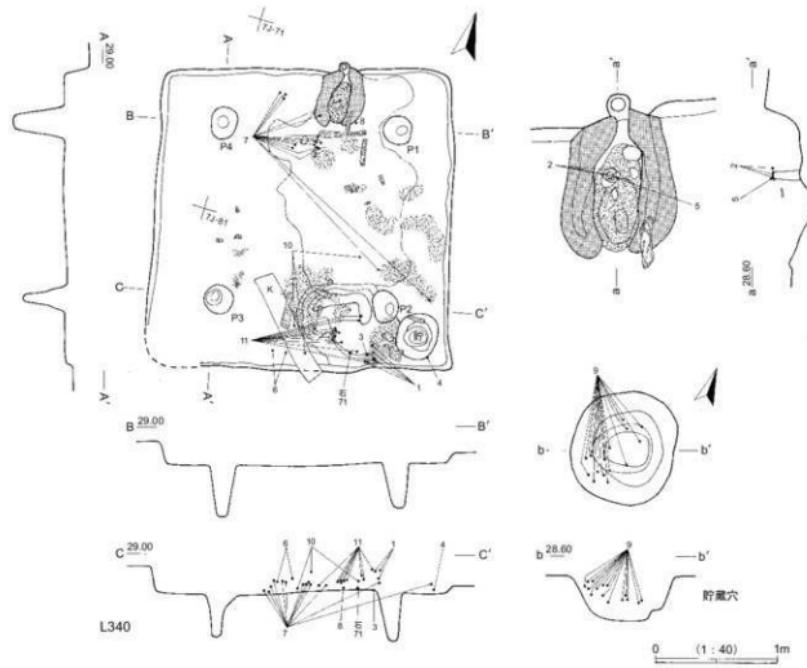
遺物（第188・189・212・217図、図版61・83・95） 土器11点と石器2点を図示した。第188図1の土師器高壺は壺部が深く作られ、脚部高は低く裾部は短く外に開いている。2・3の高環壺部は体部が全体に内彎して立ち上がり、内外面全体に赤彩が見られる。5の鉢は平底から体部は内彎して立ち上がる。7の甕は長胴を呈し、口縁部は緩やかに外反する。8の甕は胴部の上半部に最大径を置き、頭部は短く立ち上がり、口縁部は外反する。第189図9・11の甕は胴部が球状に膨らみ、口縁部は緩やかに外反する。10の甕は口径が胴部最大径を上回っている。第217図71は台石として用いられていたと考えられる。第212図6は繩文時代の石鐵で混入したものである。

#### L 4 0 3 (第70図) (8J-22・32グリッド)

弥生時代後期の竪穴住居であるL429の覆土を掘り込んで構築されている。カマドを北東壁のほぼ中央に設けた隅丸方形の平面形で、規模は主軸方向に2.8m、その直交方向で3.1mで、この時期の竪穴住居規模としては小型の部類である。壁の遺存状態はやや不良で、壁高は最大で17cm残存するにすぎない。壁溝は存在しない。柱穴は存在せず、カマドの対向側に入口が存在していたと考えられるが、梯子穴についても検出されていない。小ビットが3か所から検出されているが、規模や配置状況から柱穴になるとは考えられない。貯蔵穴は設けられていない。カマドは北東壁のほぼ中央に設置されている。袖部のみが残存する。床面は平坦であるが硬化面の形成は認められない。

遺物は住居の中央部を主体に出土している。床面から出土している遺物は、4と7の甕で、ほかは覆土の下層からの出土が目立っている。床面から焼土が出土しており、焼失住居の可能性がある。

遺物（第197図、図版64） 土器7点を図示した。第197図1・2・3は土師器壺で、それぞれ異なる特徴をもっている。1は丸底で体部高が低く作られ、2の底部から体部は扁平になり、3は丸底で口縁部と体部の境に明瞭な稜が巡る。4の甕は胴部径と口径に大きな開きは認められない。5の甕は胴部上半に張りをもち、口縁部は緩やかに外反する。6は須恵器大甕の底部付近の破片である。7の土師器甕は長胴を呈し、緩やかに外反して開く口縁部の径と胴部径に顕著な差は認められない。



第70図 L340・403住居

#### 4 古墳・土坑・その他の遺構

ここでは、古墳時代に帰属する竪穴住居以外の遺構について記述を進めたい。古墳は5基検出され、方墳3基と円形周溝1基を図示した。土坑については2基を取り上げ図示しておきたい。ただ、明確に時期を決定できる遺物が出土していない土坑の中にも、本時期に含められる可能性がある遺構が存在する。

その他の遺構として、土器を主体にした遺物集中出土地点1か所と、土坑群1地点を図示する。

#### L050・L210（第71・72・73・74図、巻頭図版2、図版7・17）（9Kグリッド）

調査区の南側で検出された方墳である。調査前には存在は明らかでなく、表土除去後の遺構検出によつて、方形に巡る周溝の存在が確認されて古墳の存在が判明した。盛土は全く残存せず、ローム層を掘削した周溝部が検出された。周溝は弥生時代後期の竪穴住居の覆土を掘削している部分もあり、そこでは周溝の立ち上がりが捉えられていない。したがって、周溝が途切れた状態であったのか、全体に巡っていたのかは確定的でない。

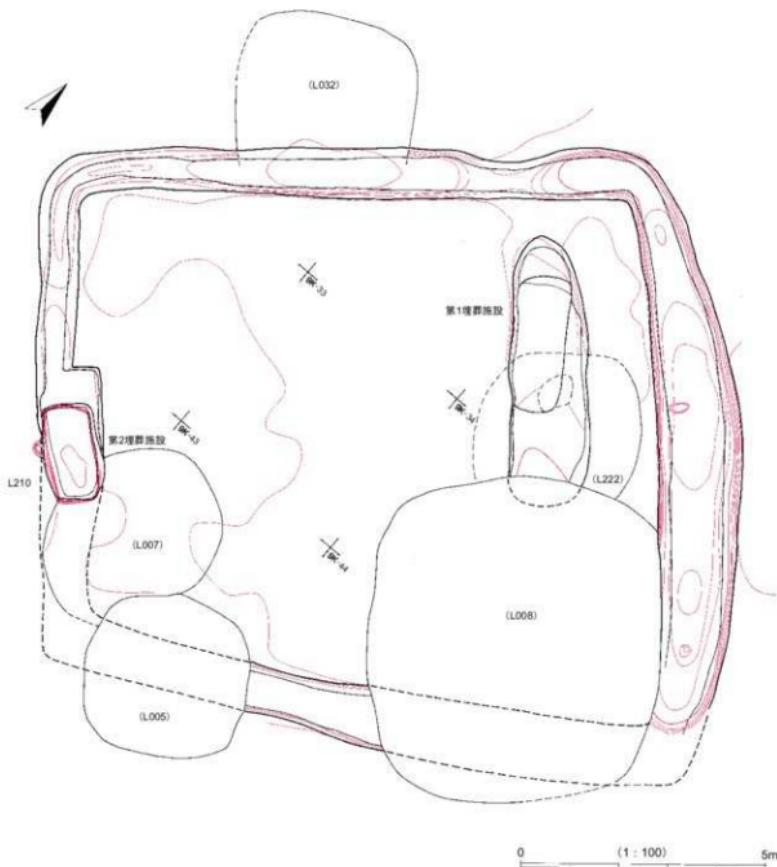
周溝内側での規模は、長軸長11.8m、短軸長9.9mである。周溝の内側は直線的な方形になり、外側は外方に張る傾向が認められ、特に北東側の周溝は顕著である。北東側の周溝中央部の幅は180cm、検出面からの深さは75cmを測る。南西側の周溝の幅は80cm前後で、検出面からの深さは15cmである。長軸長と短軸長の規模にやや開きが存在するため、全体として周溝は長方形の形状に巡る。

埋葬施設は2か所に存在する。1か所は北東側の溝と平行して埴丘側に検出されている。この埋葬施設は、溝状の掘り方の中にさらに長方形の掘り方を設け、木棺を納めたと推測される。この埋葬施設を第1埋葬施設としておきたい。ただ、溝状の掘り込みの規模とその中の掘り方の規模は明らかではない。もう1か所の埋葬施設は、南西側の周溝内に設けられた長方形の土坑である（L210）。この土坑の検出面での規模は、長軸長195cm、短軸長115cm、深さ55cmである。掘り方の下場の規模は、長軸長183cm、短軸長85cmである。なお、土層断面の所見等からは木棺の埋設は明らかでない。これを第2埋葬施設としておく。

ところで、草刈遺跡で検出された約60基の前期に比定される方墳で、周溝内に埋葬施設が設けられる例は多数認められる。しかし、L050と同じような位置に埋葬施設が設けられていた例は存在しない。埴丘が全く残らず、旧表土の存在も確認できない状況で推測するのは危険であるが、第1埋葬施設は周溝の中に設置されていた可能性もある。それはこの古墳の造営が2時期に行われたと仮定した場合である。第1埋葬施設は、当初造られた方墳の北東側周溝内に設けられていた可能性がある。その場合周溝の闊が切れていた可能性が高い。いずれにせよ、第1埋葬施設については不明な点が残る。

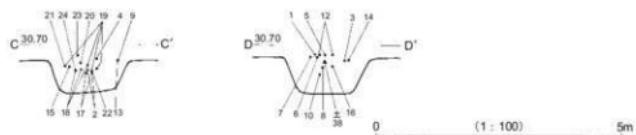
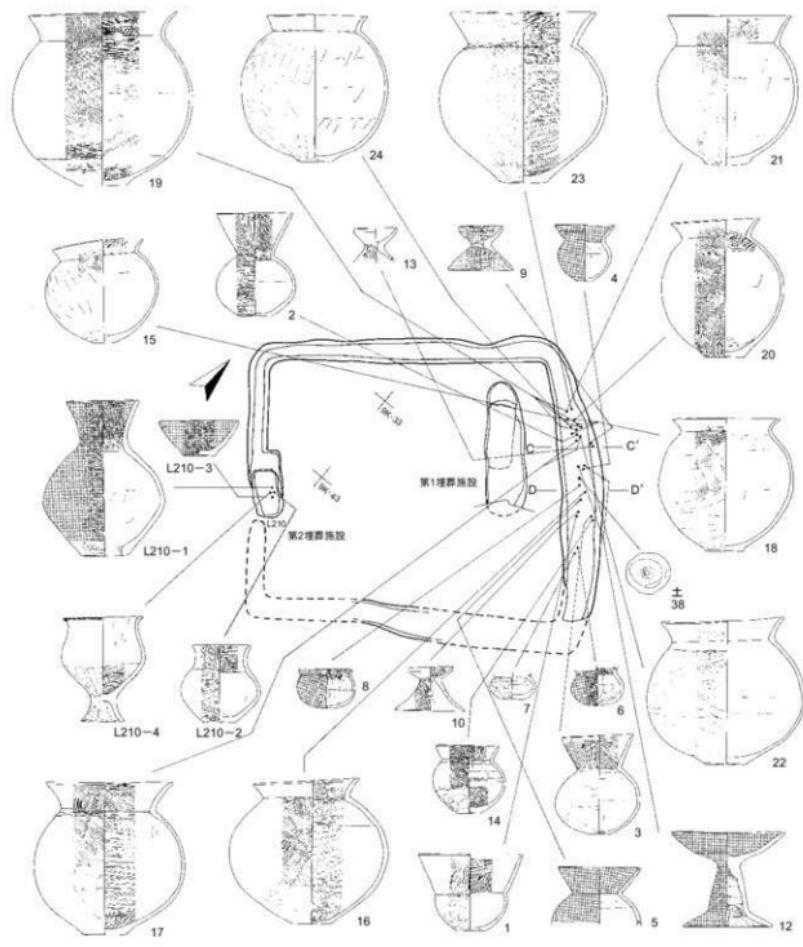
遺物は周溝内から多くの土器が出土している。特に、北東側の周溝からは甕、壺、高环などが集中して出土した。図版7に示したように、遺物は覆土中から出土しており、周溝がある程度埋まった時期に投げ込まれた状況を呈している。この北東周溝内の土器はこの古墳に伴うという状況ではない。また、第2埋葬施設の覆土上層から壺、甕、台付甕、鉢が各1点ずつ出土している。出土した位置は、平面的には埋葬施設の中央部北東寄りで、底面からは40cm前後である。

遺物（第139・140・171・204・210・214・219図、巻頭図版6、図版33・34・51・68・79・85・90）周溝内から出土した遺物は、土器28点、土製品1点、石器・石製品2点、ガラス玉3点を図示した。第139図1～7は壺である。1は体部高に比べ口縁部高が高く、口径が最大径になる。2・3は胴部が球状に張つて口縁部はやや長く立ち上がるが、胴部高が口縁部高より高い。4の口縁部は途中に段を設けて開く。8

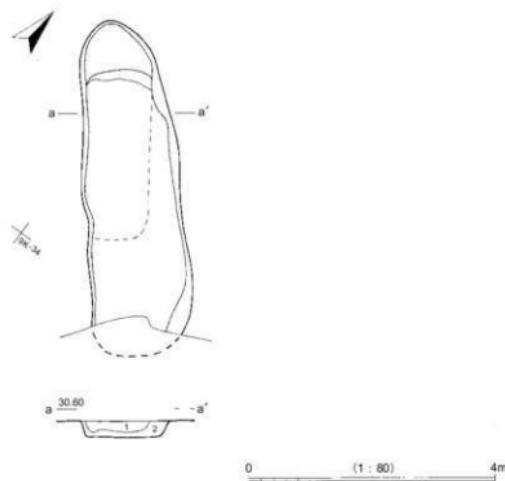


第71図 L050古墳

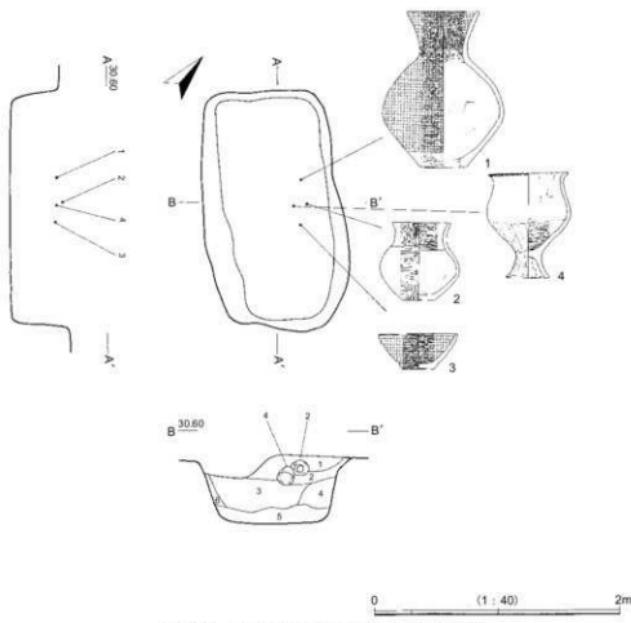
は丸底の中心部がやや窪む鉢である。9・10・13は器台である。9・13の器受部は全体に内灣氣味に立ち上がる。脚部は9が内側に弱く湾曲し、10は「ハ」の字状に外方に開く。11・12は高壺である。11の壺部高は脚部高よりも高く、全体に半球状を呈する。12の壺部は浅く、途中に弱い稜を設けて外方に開き、脚柱部は途中でやや膨らんで、根部は折れるように開く。14～第140図24は甌である。周溝から出土した土器類で最も多く出土した器種である。いずれも胴部に球状の張りがあり、口径は胴部最大径を上回らない。外面はハケメによって調整されるが、24はヘラナデによって仕上げられている。ほかに第210図2～4のガラス玉3点や、第219図144の白玉、第204図38の土玉が出土している。第214図37の磨石は遺構には直接



第72図 L050古墳遺物出土状況



第73図 L050古墳第1埋葬施設



第74図 L210第2埋葬施設遺物出土状況

伴わない遺物である。

第2埋葬施設（L210）の覆土から出土した遺物は第171図に図示した。1は装飾のない壺である。胴部中位に張りがあり、頸部から口縁部にかけて緩やかに立ち上がる。外面はヘラミガキによって調整されている。2は甕と見られる。胴部と口縁部の境に弱い稜が巡り、頸部は緩やかに立ち上がる。3は鉢で装飾は施されていない。4は台付甕である。口唇部は外側に小さく反って、端部に押捺が加えられている。

以上の遺物が本方墳から出土している。周溝内から出土した遺物群にも若干の時期差が認められ、第2埋葬施設覆土から出土した遺物は、周溝内の遺物よりも全体に古くなる様相を示している。

#### L100・225・240（第75・76図）（10L, 11Lグリッド）

調査区の南側に位置する方墳である。調査前には墳丘は全く認められず、表土除去によって初めて方墳の存在が明らかになった。

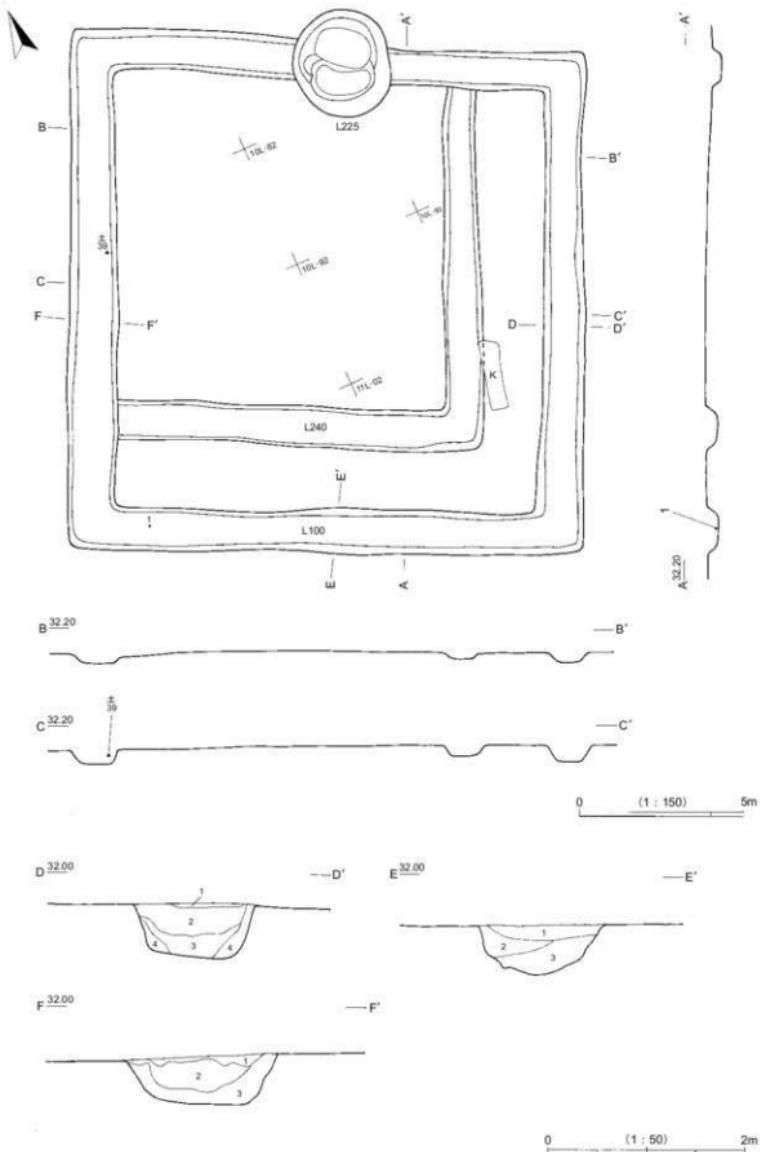
本方墳の規模は周溝の外側での測定値は、北東—南西で15.7m、北西—南東で15.9mとなる。ところが、この周溝の内側からL240と番号を付した溝が検出され、2時期に営まれた方墳であることが判明した。当初L240は後世の溝状遺構と捉えられていたが、当初に営まれた方墳の周溝と考えるのが妥当な状況である。

この最初に造られた方墳の規模は、周溝外縁での値が北東—南西12.5m、北西—南東12.7mである。また、周溝の幅は92cm～132cm、深さは10cm～30cm前後、断面形は逆台形を示す。埋葬施設については検出されていない。また、遺物については、図示可能な土器は出土していない。

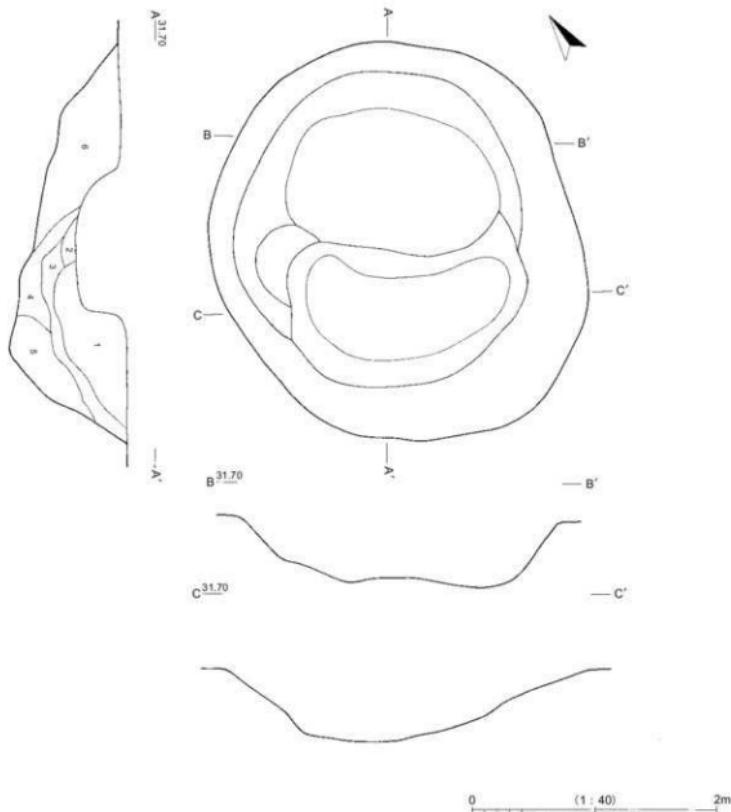
2時期目の周溝幅は100cm～150cmで、深さは50cm～60cm前後になり、断面形は逆台形を呈する。底面は平坦になるが、一部分では中央部が低くなる状況が認められる。覆土は基本的に3層に分けられる。第75図の下に提示した図面にしたがい説明しておきたい。1層：ローム粒を含む暗褐色土。2層：ローム粒を多く含む暗褐色土。3層：ローム粒と小ロームブロックを多く含む褐色土。なお、D-D'の4層はローム粒とロームブロックを多く含みしまるいある褐色土である。遺物は僅かで、土師器の环破片1点と土玉1点が図示可能になったにすぎない。环の破片は溝の底面付近から出土し、土玉は覆土の中からの出土である。いずれも本遺構に伴うというものではない。

埋葬施設として考えられる施設は、北東側周溝のほぼ中央に検出されたL225（第76図）である。この遺構は、長軸長330cm、短軸長305cmの円形を呈する土坑として検出され調査が進められた。その結果、底面は北東側が南西側よりも浅く、途中に段が付く構造であることが明らかになった。南西側の楕円形を呈する部分が地下室、そして北東側の1段高くなる部分が竪坑部の底面である可能性が高く、地下室式構造の埋葬施設と考えるに至った。地下室の掘り込みが浅いことから、いわゆる有天井土坑に竪坑部を設けた埋葬施設であった可能性が高い。この埋葬施設からは人骨や副葬品の類は出土していない。

遺物（第148・204・211・212・227図、図版77・79・83・98） 土器1点、土玉1点、石器1点。金属製品1点と土器片錘2点を図示した。第148図1の环は破片から図を作成している。底部は扁平気味な丸底を呈し、体部と口縁部の境に弱い稜が巡り、口縁部は僅かに開きながら立ち上がる。表面はヘラミガキが行われ、黒色処理が施されている。第204図39は土玉である。覆土中からの単独出土であり、流れ込みによって周溝内に入ったと考えられる。同様に第211図162・165土器片錘も混入品である。



第75図 L100・240古墳・225埋葬施設

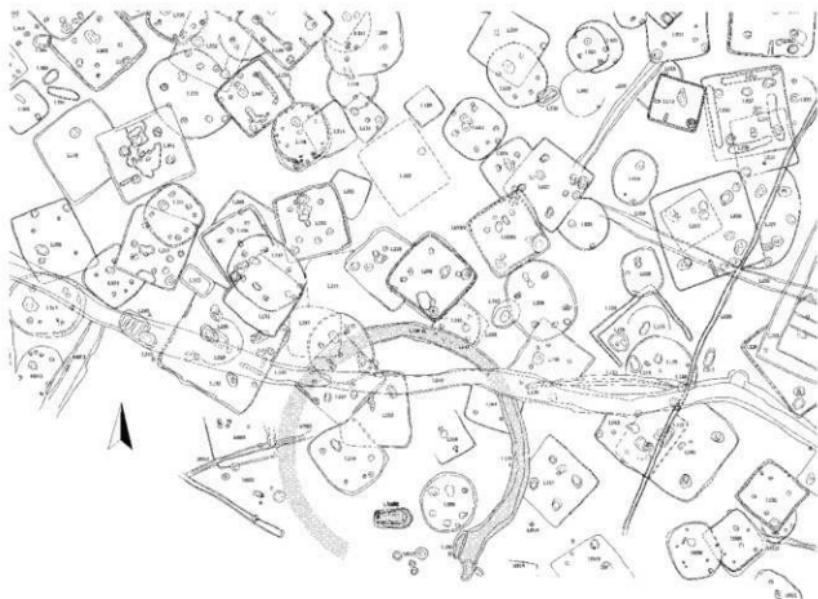


第76図 L 225埋葬施設

#### L 150 A (第77・78図) (10K, IIKグリッド)

調査区の南側に位置している。調査前の状況では古墳の存在を窺わせる痕跡は認められず、表土除去後、周溝と埋葬施設が検出されたことにより、古墳の存在が明らかになった。盛土は全く残存していない。また、周溝も全体の2分の1弱が検出されたにとどまり、西側から南側にかけての溝は検出されていない。検出した部分から推定すると、周溝の内側規模で17.5m~18.0mであったと考えられる。

北側から東側に検出された周溝の幅は125cm~200cmとやや一定せず、検出面からの深さも26cm~50cm前後になる。周溝底面に小ピットが検出されているが、古墳中央部から見て北東から東の範囲に集中する傾向が認められる。また、周溝が南東部で切れる位置に長楕円形の土坑が存在する。この土坑は、古墳に伴う可能性が低く、埋葬施設にはならないと考えられる。



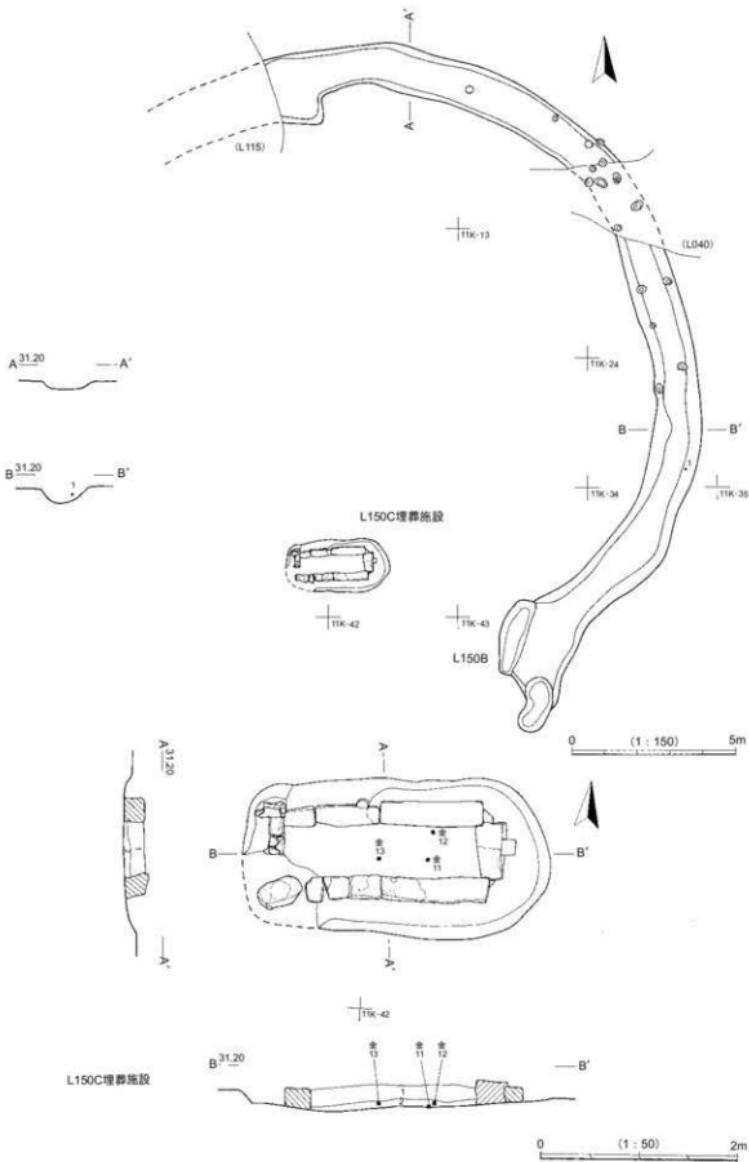
第77図 L150A古墳の位置

埋葬施設L150Cは、古墳中央部の南側で周溝から2.5m墳丘側に入った位置に存在する箱式石棺1基が該当する。掘り方は、ローム層を楕円形に掘削して底面を平坦にしている。石棺の主軸方向はE-Wである。掘り方の規模は、長軸長で315cm前後、短軸長で160cmである。

石棺は3枚の側壁と小口石からなり、床には石材は存在しない。また、天井石は石棺内からも検出されず、その時期は明らかにならないが、完全に取り外されたと考えられる。石棺の平面規模は、中軸での長さが195cm、幅が53cmである。なお、西側の 小口石の周囲に擾乱が認められ、掘り方も含め本来の形状をとどめていない部分が存在する。

遺物は周溝内から出土した土師器の甕が1点図示可能である。また、埋葬施設からは耳環2点と銅鏡1点が出土している。石棺内の遺物は、底面上からの検出で、3点がほぼ同レベルで出土している。石棺の東側から11と12の耳環が左右に分かれるような状態で出土し、銅鏡は石棺のほぼ中央で南側の側壁に寄つた位置から出土している。遺物の出土状況からは、被葬者の頭位が東側であった可能性が高い。また、銅鏡は被葬者の左腕に装着されていたと推測される。

遺物（第161・224図、図版47・97） 土器1点と金属製品3点を図示した。第161図1は周溝内から出土した土師器の甕で、胴部が大きく膨らみハケメによる調整が施されている。古墳時代前期の甕で、本古墳に直接伴っていたとは考えられない。第224図11・12は耳環である。表面の腐食がやや進行している。13は銅鏡で、3分の1程度が残るが、全体に細身で遺存状態は不良である。



第78図 L150A古墳

### L 213 (第79図) (11K-06・07グリッド)

調査区の南側で弥生後期の竪穴住居L129を壊している。長軸長150cm、短軸長70cmの不整梢円形を呈する土坑である。検出面からの深さは21cmで底面は丸くなる。遺物は少量の土器である。土坑の南側から出土した遺物が図示可能となった。この遺物は高環の脚部である。

遺物 (第171図) 土器1点を図示した。第171図1は高環の脚部である。環部は不明で、裾部が「ハ」の字状に開き端部が僅かに広がる。环部および外面に赤彩が施されている。形態の特徴から後期初頭の土器と見られることから、本土坑を後期に位置づけた。

### L 245A (第79図) (10J-96・97グリッド)

調査区の南側に位置し、後世の溝状遺構L040に壊されている。また、円墳L150Aの西側に位置している。有天井土坑墓と考えられるが、天井部は残存していない。検出面での平面形は隅丸長方形を呈し、長軸長253cm、短軸長185cmを測る。長軸の方向はN-57°-Wである。北東側が緩やかな傾斜で底面に下るので、南北側に天井部が存在していたと考えられる。底面の規模は、長軸長212cm、短軸長120cmである。また底面には短軸方向と平行する4条の溝が存在する。覆土中から土製勾玉1点と白玉1点が出土しているが、時期比定可能な土器は出土していない。

底面付近から高環の环部が出土したが、図示していない。ほかに実測可能な遺物の出土はない。

遺物 (第203・219図、巻頭図版6、図版78・90) 土製品1点と石製品1点を図示した。第203図9は土製勾玉である。「C」の字形に整形され、頭部と腹部の断面は円形を呈する。第219図170は滑石製の白玉で、側面にやや張りが認められる。

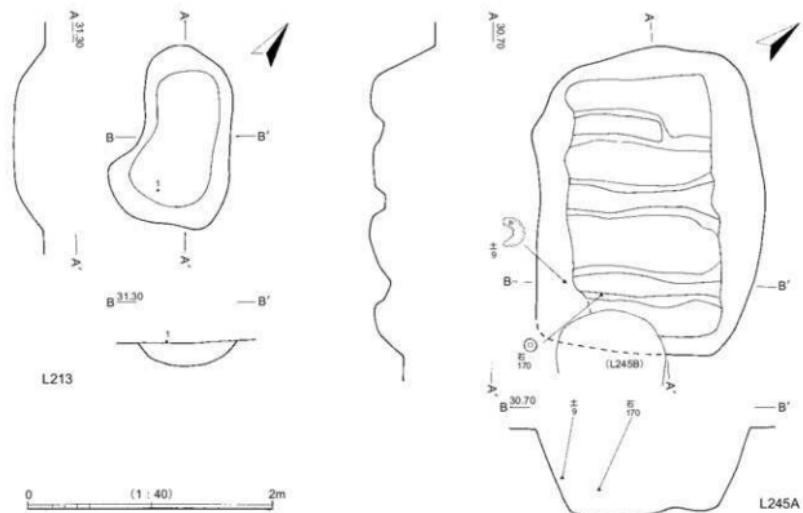
### L 421 (第80図) (8K-90、9K-00グリッド)

L201の北東側で検出された土坑群である。この周辺には平面形が捉えきれていない遺構が存在する。本土坑群に隣接するL144は竪穴住居と考えられるが、形態や規模は明らかになっていない。また、L096も同様に実態は不明な点が多い。さらにL186も柱穴と考えられるピットが4か所から検出されているが、性格は明らかではない。このように周辺からは性格が明確でないピットが不規則な状況で検出されている。

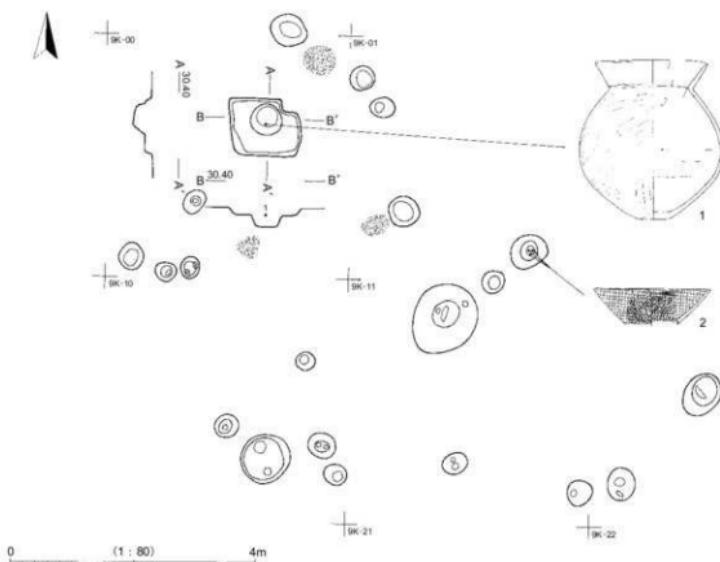
調査時点では第198図1の甕が出土し、その遺物を取り上げる際に、竪穴住居の存在を考慮して、周辺のピットを含め、同一の遺構として取り扱った。ピットの配置から柱穴の存在も想定したが、明らかに柱穴になるという組み合わせは確定できない。ピットの深さは検出面から25cm~40cmで、33cm前後が多く存在する。それらの幾つかの土層断面を観察しても、柱痕跡は確認できていない。ほぼ完形の甕が出土したピットは、2段掘り込みを呈し、不整形の掘り込みが検出面から8cmの深さで掘られ、そこから円形のピットが掘り込まれている。ほかに高環の环部が出土したピットが存在するが、図示可能な土器が出土したのはこの2か所のみである。

土坑群の検出面で3か所に焼土ブロックが検出された。特に硬化した床面上の面からの出土ではないが、土坑群との関連も否定はできない。

遺物 (第198図、図版64) 土器2点を図示した。第198図1は甕である。胴部中位に張りをもち、口縁部は急激に「く」の字状に外傾する。口縁部は直線的に外傾して、口唇部はやや角頭状を呈する。胴部外面はヘラケズリの後にナデによって仕上げられている。2は高環の环部である。外面はミガキが施され、赤彩が行われている。



第79図 L213土坑・245A土坑墓



第80図 L421土坑群

## L 201 (第81図) (9J-49, 9K-30グリッド)

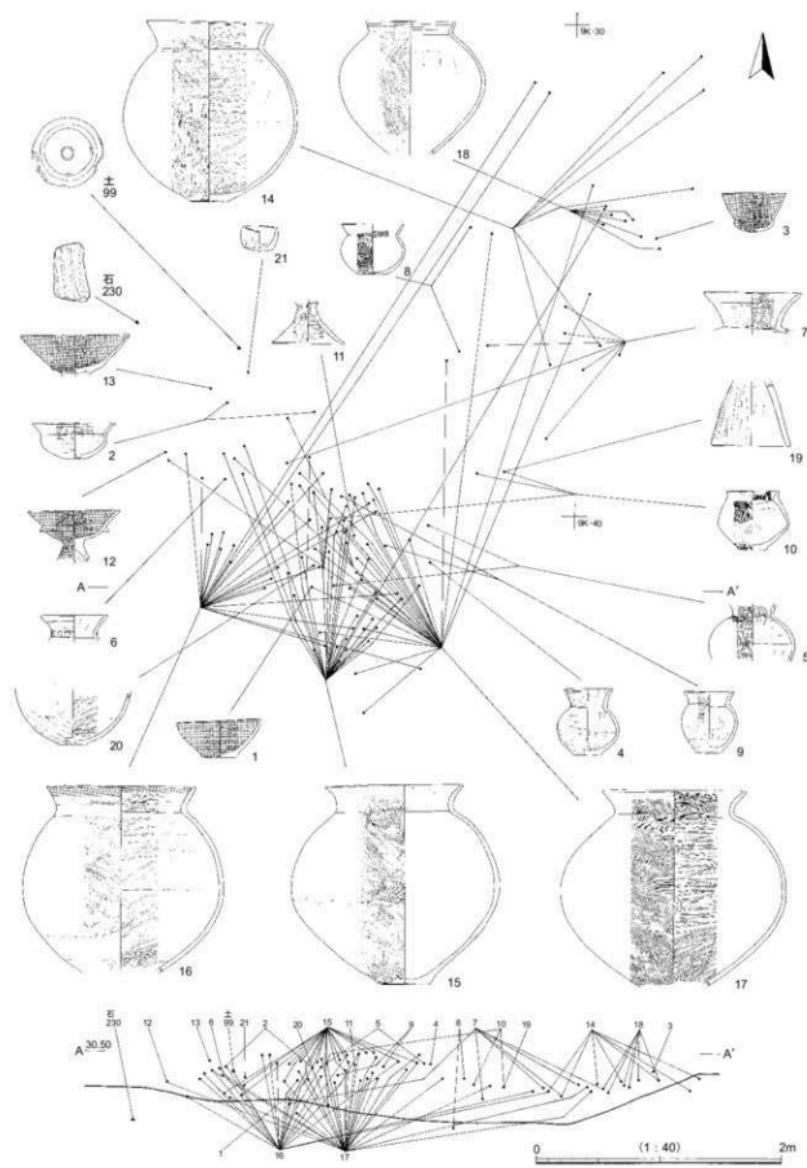
弥生時代後期の竪穴住居であるL145と重なるように検出された土器集中出土地点である。当初竪穴住居が存在すると考えられたので、プランの検出が可能と見られていたが、明確なプランの確認には至らなかった。また、床面と考えられるレベルからも、床面と判断できる面は検出されず、柱穴や炉等の施設も検出されなかった。ただ、土器を主体に多くの遺物が長径6m、短径4mの範囲から集中的に出土した。そのような状況から、この遺構は竪穴住居ではないと判断した。

遺物は壺、鉢、高坏、器台、甕等が存在する。大型の甕は破片の状態で出土し、小型の器種も遺存状態が良好に保たれている個体は少ない。また、甕は集中範囲の南側から多く出土し、周辺に小型土器が多い傾向が窺われる。図示した以外の破片については、中央部よりも周辺部から多く出土している。人工遺物のほかに焼土や炭化材の出土は認められない。

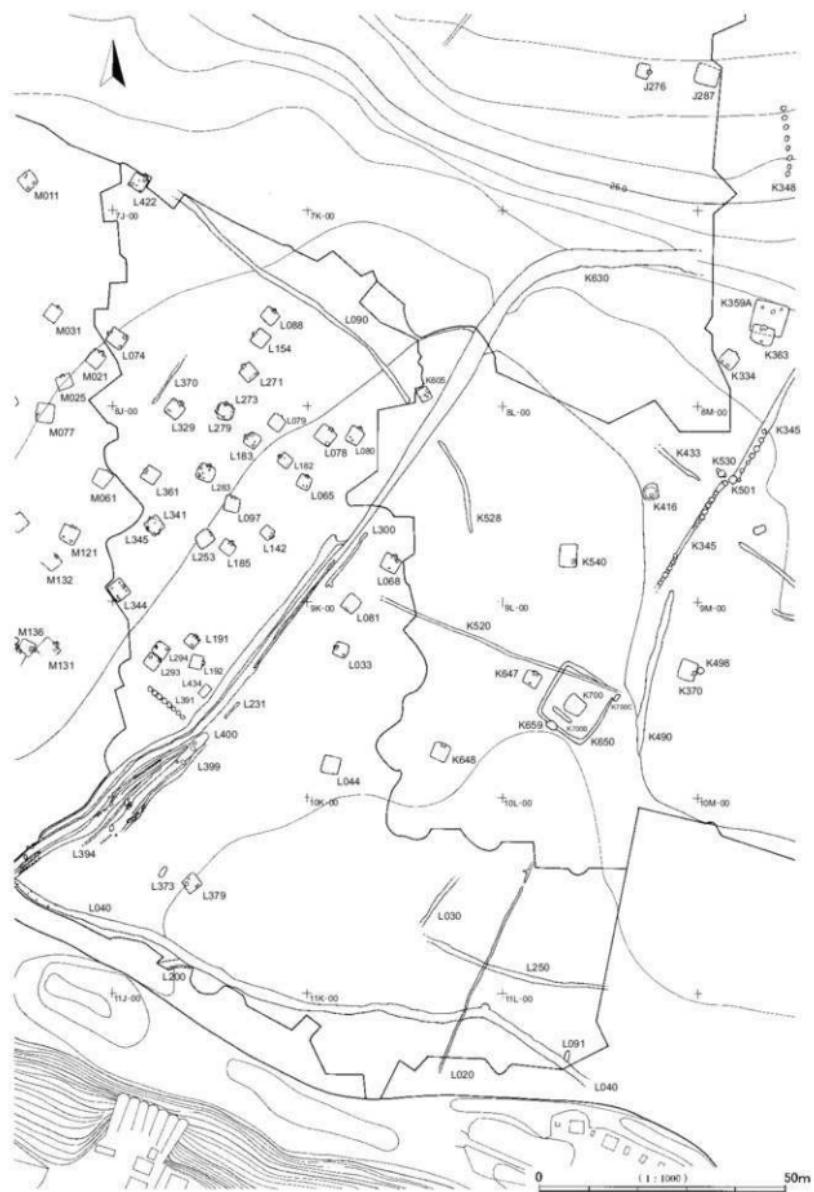
出土遺物から古墳時代前期後葉に比定可能である。

遺物 (第168・169・206・222図、図版50・71・80・93) 土器21点、土製品1点、石製品1点を図示した。第168図1は装飾のない鉢である。安定した平底から体部はやや内彎気味に立ち上がる。2は中央部が窪む小さな底部をもち、口縁部が外反して開く鉢である。3は体部高が低く、口縁部高が高く立ち上がる堆である。4～7は口縁部が「く」の字状に外傾して開く壺で、胴部は球状の膨らみがあると見られる。5の肩部上端には櫛齒状施文具による波状沈線が巡る。8～10は甕である。小型の部類で、外面の調整にはハケメが行われている。10の外面は無頬で、内面は「く」の字状に屈曲して短く外傾する。11は器台の脚部である。器受部は不明で、脚柱部から裾部は緩やかに広がる。12・13は高坏である。12の坏部の中位には突帯が巡り、そこから口縁部は僅かに外反気味に開く。13は坏部の下端に稜が認められ直線的に外傾している。14～第169図18は甕である。胴部の中位が大きく張り、球状の膨らみをもつ。口縁部は頸部から屈曲外反して立ち上がる。いずれも口径は胴部最大径よりも小さい。また、外面の調整はハケメによる。19は炉器台の脚部と考えられる。20の甕は底部に直径1cmの孔が穿たれている。この孔は焼成前に穿たれたと見られる。

第206図99は筋鍾車と考えられる土製品である。側面観は逆台形を呈するが、断面形は凹レンズのような形状となる。第222図230は砥石である。



第81図 L 201土器集中出土地点



第82図 L区奈良時代以降の遺構分布図

## 第5節 奈良・平安時代以降（第82図）

### 1 竪穴住居

奈良・平安時代に帰属する竪穴住居は34軒検出された。その全てが平安時代の9世紀～10世紀に比定される。第82図に示したように、古墳時代以前の各時代の竪穴住居の分布と比較するとその密度は格段に低く、重複関係にある住居は少なくなっている。その中の18軒について平面図を掲載し詳述した。その抽出率は約53%である。

#### L 0 3 3 (第83図、図版5) (9K-21・22グリッド)

調査区の中央東側に位置する。北東隅でL032と重複しているが、こちらの竪穴住居が新しく、遺存状態は比較的良好である。住居の平面形態は方形を呈し、主軸方向を北から70°西に向いている。規模は主軸方向に2.8m、その直交方向に2.7mで、壁高は最大で30cmである。北西壁のほぼ中央部にカマドを設けている。柱穴および入口の梯子穴は確認されなかった。壁溝は壁下全体に存在し全周している。カマドは袖部のみ残存している。煙道部が壁に23cmほど掘り込まれている。

カマドの土層は以下のとおりである。1層：橙色の山砂を多く含む赤褐色焼土層。2層：黄白色の山砂を多く含む暗褐色土層。3層：焼土粒を多く含み、しまりの弱い暗褐色土層。

貯蔵穴と考えられる土坑が南隅壁際に設置され、平面形はほぼ円形である。この時期の貯蔵穴は類例としては少なく、古墳時代後期の貯蔵穴と同じような目的や機能があったか否かは検討が必要である。

床面は全般的にはほぼ平坦であるが、北から南に比高差15cmほど傾斜している。硬化面は南北の壁際を除き、カマド前面から住居中央部全体に広がっている。

貯蔵穴西側部分に少量の焼土層が、また北東壁際の床上5cmの高さから住居中心方向に向かい床面に達するまで斜めに堆積した、長径約100cm、短径約80cm、厚さ5cm～14cmの焼土層が検出された。覆土にも焼土や炭化物が含まれており、焼失住居の可能性が高い。

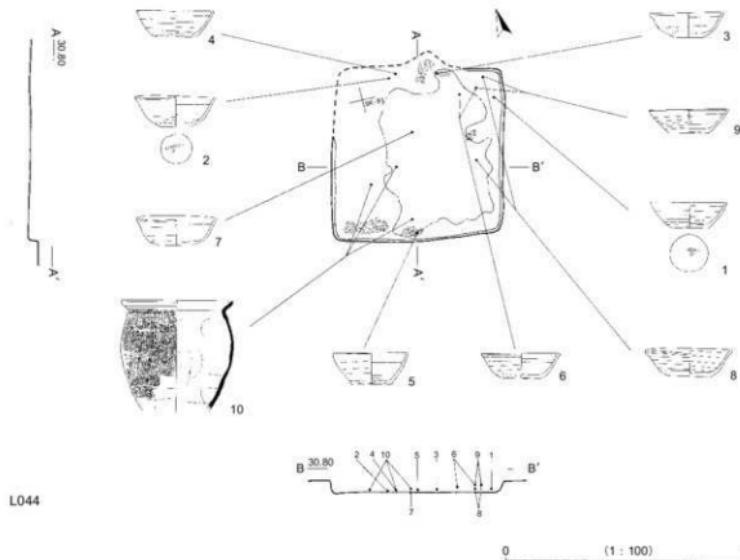
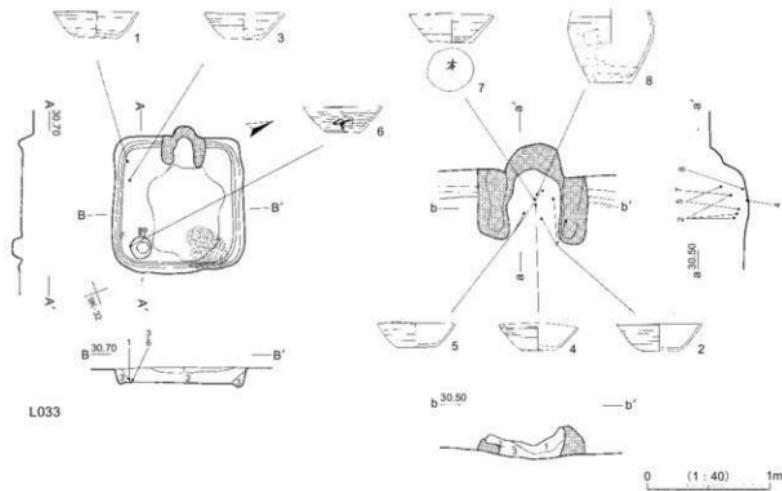
堆積土層はレンズ状で、自然堆積と考えられる。1層：ソフトローム粒を多く含むやや明るい暗褐色土層。2層：ローム粒を多く含むやや暗くしまりのある暗褐色土層。3層：ソフトロームやハードロームブロックを含む暗褐色土層。

遺物は、カマド内、住居南側に比較的まとまりが見られた。図示した遺物は全て床面かカマド内から出土したものである。

遺物（第133図、図版30・75） 遺物はあまり多くはない。図示した遺物は全て土師器であり、第133図1～7が壺、8が甕である。1・3は西隅の床面から、6は貯蔵穴側の床面から、残りの2・4・5・7・8はカマド内火床面からの出土である。1は底面が回転糸切りで底面周辺部と立ち上がり部に手持ちヘラケズリが施され、外面にススが付着している。2・3・4・5・7は回転糸切り無調整である。6は底面が回転糸切りで底面周辺と立ち上がり部に回転ヘラケズリが施され、体部外面に「吉」の墨書がなされている。7にも底面に「左」の墨書がある。8は外面の胴部中位から下位にかけヘラケズリが、内面の底部から胴部下位にかけロクロによるナデが螺旋状に施されている。

#### L 0 4 4 (第83図、図版6) (9K-80・81グリッド)

調査区の中央南東側に位置する。北側でL107と西側でL124と南西側でL122と重複しているがこの住居が最も新しい。L107との重複部分は壁の存在が検出されなかった。住居の平面形態は方形を呈し、主



第83図 L033・044住居

軸方向を北からやや東に向いている。規模は主軸方向に3.5m、その直交方向に3.5mで、壁高は最大で20cmである。北側壁のほぼ中央部から山砂と焼土のブロックが検出された。カマドの痕跡と思われるが、本来のカマド構造は確認できなかった。柱穴、入口の梯子穴、壁溝、貯蔵穴の存在は確認されなかった。床面の硬化面は貼り床構造で住居中心部分から南東側と東側壁際まで広がっている。

南側壁際床上に帶状に長さ95cm、幅35cmと長さ50cm、幅20cm、厚さ6cm～7cmの2か所、住居東側の床上に長径30cm、短径18cm、厚さ3cmの焼土層が検出された。焼失住居と断定する根拠に乏しいが、住居廃絶時に火を受けた可能性が高い。

遺物は多くはない、実測可能な土器は床面と床面からやや浮いた位置から、硬化面の周辺部を中心にして、住居内に散らばるような形で出土した。

遺物（第137図、図版32・75） 遺物はあまり多くはないが、1つ1つが完形に近い状態で出土したものが多い。図示した遺物は第137図1～9が土師器の壺であり、10は須恵器の甕である。6・9以外全て床面からの出土で、1・6・8・9は住居東側から、2～4はカマド周辺から、7・10は住居中央部、5は南側壁際よりの出土である。1～3と7は底面と立ち上がり部が手持ちヘラケズリ、残りの外面と内面はナデが施されている。1と2の外面底部にはヘラ書きがある。4は底部が回転ヘラ切りで底部外周と立ち上がり部に手持ちヘラケズリが、外面の残りと内面はヨコナデが施されている。5と9は無調整の回転系切り底に内外面ともヨコナデが施され、5は外外面にススが付着し、内面に輪積痕が残っている。6は底部が回転系切りで底部外周と立ち上がり部が手持ちヘラケズリ、残りの外面と内面にナデが施されている。8の底部は回転系切りで底部外周と立ち上がり部が回転ヘラケズリ、残りの外面と内面にヨコナデが施され、外外面にススが付着している。また底部内面には焼成時に重ねる際つけたと思われる粘土カスが付着している。10は口縁部の内外面ともヨコナデ、外面の胴部にタタキの後に胴部下位にヘラケズリが、内面の胴部はヘラナデが施され、内面には丸い當て具痕が多く見られる。

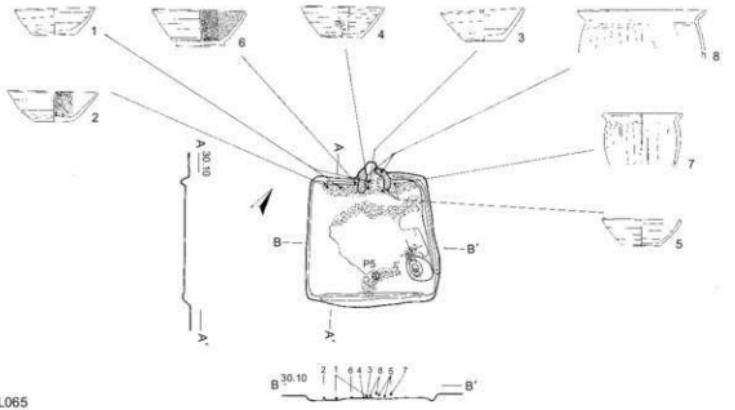
#### L 0 6 5 (第84図、図版8) (8J-39, 8K-40グリッド)

調査区のほぼ中央に位置する。北西側でL169と重複しているがこちらの竪穴住居の方が新しい。平面形態は方形を呈し、主軸方向を北から25°東に向いている。規模は主軸方向に2.6m、その直交方向に2.6mで、壁高は4cm～12cm残存する。壁溝は北東壁下のカマド両側、南東壁下、南西壁下に存在する。南東側コーナー部は搅乱のため確認できなかった。北東壁のほぼ中央部にカマドを設けている。入口の梯子穴はカマド対面の南側壁寄りから検出された。柱穴、貯蔵穴は確認されなかった。カマドは東側袖部分の砂が残存するのみで、西側袖部分は破壊されていて残っていない。煙道部が壁に38cmほど掘り込まれている。床面は全般的にはほぼ平坦で、住居中央部を中心にして硬化面の広がりが見られる。

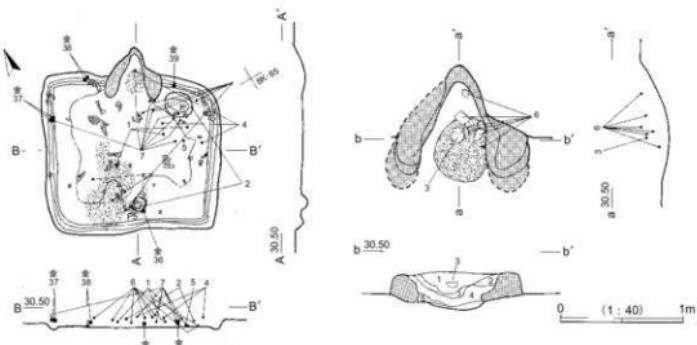
北東側壁にそって長さ200cm、幅20cm～40cm、厚さ11cm～80cm、その内側に平行して長さ190cm、幅20cm～40cm、厚さ11cm～46cm、住居南側に長さ90cm、幅20cm～50cm、厚さ10cm～65cm、住居東側に長径30cm、短径25cm、厚さ4cmの焼土層が検出された。覆土内にも焼土粒が混入していることもあわせて考えると、焼失住居である可能性が高い。

遺物は、カマドを中心として北東側の壁際に多くまとまって出土した。実測可能な土器は床面か床面よりも少し浮いた状態で検出されたものが多い。

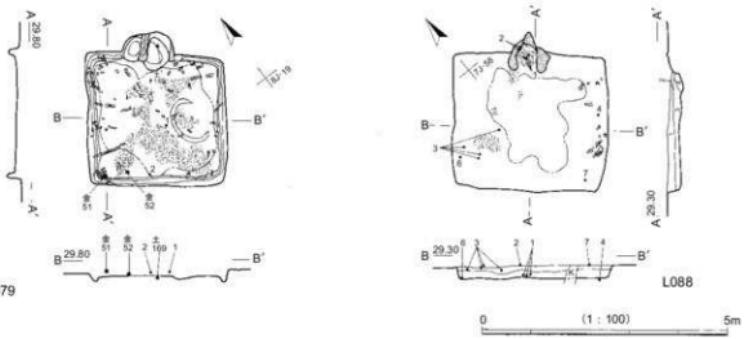
遺物（第143図、図版35・36・75） 遺物はあまり多くはない、出土位置の確実な遺物は総数で40点程度である。図示した8点は全て土師器であり、カマド内かカマドの両脇から出土したものである。第143図



L065



L068



L079

L088

第84図 L065・068・079・088住居

1～6が壺、7・8が甕である。1は回転糸切りのうち部分的にヘラケズリを、立ち上がり部に手持ちヘラケズリ、残りの外面と内面にヨコナデを施している。外面にススが付着している。2は底面が回転糸切りのうち多方向の手持ちヘラケズリを、立ち上がり部に手持ちヘラケズリ、外面の残りにヨコナデ、内面は丁寧なミガキで仕上げている。3は全面が磨滅しているが、底面が回転糸切りで立ち上がり部は無調整、内外面ともヨコナデを施している。全体にススが付着している。4は回転糸切りのうち部分的に手持ちヘラケズリ、立ち上がり部に手持ちヘラケズリを、残りの外面と内面にヨコナデを施している。また体部外面に「有」のヘラ書きがある。5は無調整の回転糸切り底に外面をヨコナデで仕上げている。6は底部に高台貼付のうち回転ヘラケズリ、外周部にナデ、体部下位に回転ヘラケズリが施されている。外面はヨコナデ、内面はさらにミガキを行い黒色処理がなされている。7・8は口縁部内外面にヨコナデ、体部内面にヘラナデ、外面はヘラケズリが施されている。8の胴部外面はススの付着が顕著である。

#### L 0 6 8 (第84図、図版8) (8K-74・84グリッド)

調査区の中央東側に位置する。ほかの竪穴住居とは重複関係をもたず単独で検出された。遺存状態は比較的良好である。住居の平面形態は方形を呈し、主軸方向を北から30°東に向いている。規模は主軸方向に3.6m、その直交方向に3.3mで、壁高は3cm～13cm残存する。北東壁のほぼ中央部にカマドを設けている。柱穴は確認されなかった。入口の梯子穴はカマドの対面南西壁寄りに検出された。壁溝は壁下全体に存在する。カマドは袖部のみ残存し、天井部の痕跡は認められない。煙道部が壁に60cmほど掘り込まれている。

カマドの土層は以下のとおりである。1層：焼土、山砂を少し含む暗褐色土層。2層：焼土ブロックを含む暗褐色土層。3層：焼土ブロック・炭を多く含む暗褐色土層。4層：山砂、炭化粒を多く含む暗褐色土層。5層：炭化物が少量混じる褐色土層。

貯蔵穴はカマドと北東コーナーの間に設置され、平面形は長径58cm、短径52cmの梢円形である。床面は全般的にほぼ平坦で、硬化面はカマド前面から壁際を除く住居中央部全体に広がっている。

入口梯子穴周辺に160cm×130cmの多量の焼土ブロックが、また住居全域のやや浮いた層から多くの炭化材が検出された。覆土全体にも焼土、炭化粒の混入が多く、焼失住居の様相を呈している。

遺物は、カマド内、カマド南側、入口焼土ブロック付近に比較的まとまりが見られた。カマド内および住居内の遺物の多くは、床面から同じ程度の距離をもって、やや浮いた状態で出土しており、住居焼失後に土をかけて投棄されたものと思われる。

遺物（第143・225図、図版36・97） 土器7点、金属製品4点を図示した。土器は第143図1～5が土師器壺、6の甕が須恵器で7は土師器瓶である。1は床面と覆土内からの出土である。底部は回転ヘラ切り後に手持ちヘラケズリを行い、立ち上がり部も手持ちヘラケズリ、残りの内外面はナデが施される。2は底部が回転ヘラケズリ、底部外周と立ち上がり部は手持ちヘラケズリ、外面残りはナデが施され、内面はヘラミガキ後黒色処理がされている。3～5は底面、底面外周、立ち上がり部に回転ヘラケズリ、残りの内外面はナデが施されている。また5は床面から出土し、内面底部に線刻がなされている。6はカマド・床面・覆土からの出土で、外面の頸部は縦方向、胴部は横方向の平行タタキのうちナデが、内面は頸部がヘラナデ、胴部はナデが施されている。7は口縁部をヨコナデのうち外面にヘラケズリが内面にヘラナデが施されている。把手は貼付である。金属製品は第225図36が鉄斧、37は鏟、38・39は刀子である。

#### L 0 7 9 (第84図、図版9) (8J-08・18グリッド)

調査区の中央やや北側に位置する。南西部でL324と重複しているがこちらの竪穴住居の方が新しい。

遺存状態は普通である。住居の平面形態は方形を呈し、主軸方向を北から36°東に向いている。規模は主軸方向に2.8m、その直交方向に2.8mで、壁高は6cm～13cm残存する。柱穴および入口の梯子穴、貯蔵穴は存在しない。壁溝は壁下全体に存在する。カマドは崩されていて明確な遺存状態ではなかったが、北東壁のほぼ中央部に設けられた壁の掘りこみの西側に崩されたカマドの砂がまとまって検出されたり、カマドを作るにあたってロームを深く掘り込み、土を入れて成形した後袖を構築したような形跡が見られたのでカマドと判断した。

床面は全般的にはば平坦であるが、住居の南東側に半円形のなめらかな落ち込みが検出された。硬化面は南西のコーナー部を除き、ほぼ住居内全体に広がっている。

住居内のほぼ全域に炭化物が散在し、焼土層も住居中心部から北東、南東、南西のコーナー部に広がるように残されていることを考えると、焼失住居であった可能性が非常に高い。

遺物は少ないが、住居内に櫛の破片や鋤先、カマド内から瓦などが出土した。

遺物（第146・211・226図、図版82・98） 土器2点、金属製品2点、瓦1点を図示した。第146図1は土師器の壺である。回転糸切り底で内外面ともナデが施され、スヌが付着している。2は灰釉の壺で外面および頸部内面に灰釉が施されている。どちらも床面からの出土である。金属製品は第226図51が鉄製のU字型鋤先である。52は鉄製品であるが用途は不明である。第211図169の瓦はカマド内からの出土である。表面が布目、裏面は繩目が施されている。

#### L 088 (第84図) (7J-57・58グリッド)

調査区の北側ほぼ中央に位置する。南東側約7割程度をL152と、南側コーナーの一部をL153と、西側約6割ほどをL156と重複しているがこの竪穴住居が最も新しい。住居の平面形態は方形を呈し、主軸方向を北から40°東に向いている。規模は推定で主軸方向に2.8m、その直交方向に3.1mである。壁溝、柱穴、梯子穴、貯蔵穴は存在しない。カマドは北東壁のほぼ中央に設けられている。カマドは袖部のみ残存している。煙道部が壁に40cmほど掘り込まれている。床面は全般的にはば平坦で、硬化面は壁際を除き中央部全体に広がっている。

住居の北西側で長径60cm、短径35cm、厚さ11cm～17cmの焼土ブロックを中心、直径約20cm前後の焼土層を数か所、また南東壁側で炭化物を検出した。覆土内にも焼土粒、炭化物粒が混入していたこともあると、直ちに焼失住居と断定できないまでも、住居廃絶時に大きな火を受けた可能性が高い。

住居内堆積土層は以下のとおりである。1層：φ1mm～3mmのローム粒を多く含み、焼土粒が少し混じる暗褐色土層。2層：1にカマドの砂が流れ込んだ暗褐色土層。3層：φ1mm～5mmのローム粒を多く含み、焼土粒・炭化物粒が少し混じるしまりのある暗褐色土層。4層：φ1mmほどのローム粒を多く含み、しまりのある暗褐色土層。

遺物は少なく、出土位置の確かな遺物は30点余りである。カマド内、住居北西側の焼土周辺と南東側の炭化物周辺の3か所に比較的まとまりが見られた。

遺物（第147図、図版39） 土器7点を図示した。第147図7が須恵器で、残りは土師器である。1・2は壺でカマド内から出土した。どちらも回転糸切り底で、内外面ともナデが施されている。3は壺で、内外面とも口縁部から頸部までヨコナデ、胴部外表面はヘラケズリで胴部上位に縦方向の平行タタキの痕跡が僅かに見られる。頸部内面に輪積痕が残る。頸部から胴部中位までナデが施されている。4～6は手程の小型土器である。4は内外面ともハケののちナデ、底面はナデが施されている。5・6は全面にナデが施

されている。5には接合痕が残されている。7の环は内外面ともにナデが施され、内面に自然釉が付着している。底部が欠損しているため、高环の环部の可能性もある。

#### L 154 (第85図、図版14) (7J-67・68グリッド)

調査区の北側ほぼ中央に位置する。東側でL153、L158と、南側でL155と、北側でL156と重複しているが、この竪穴住居が最も新しい。平面形態は方形を呈し、主軸方向を北から55°西に向いている。規模は主軸方向に3.0m、その直交方向に3.3mで、壁高は16cm~29cm残存する。壁溝、柱穴、梯子穴、貯蔵穴は検出されなかった。カマドは北西壁のほぼ中央に設けられている。L156の覆土内に構築されていたために、火床部や掘り込み等は明確に検出されなかつたか袖部の基部と思われる固くしまった床は残存していた。カマド内から袖部に使用したと思われる砂質粘土のブロックが相当量検出されたが、その多くは故意に破壊されたかのように、元位置から移動していた。北東側の袖と煙道はほとんど残存していなかった。床面は全般的にはほぼ平坦であるが、硬化面部分を中心にして若干盛り上がっている。硬化面は住居中心部とカマド前面、西側コーナーの壁際まで広がっている。

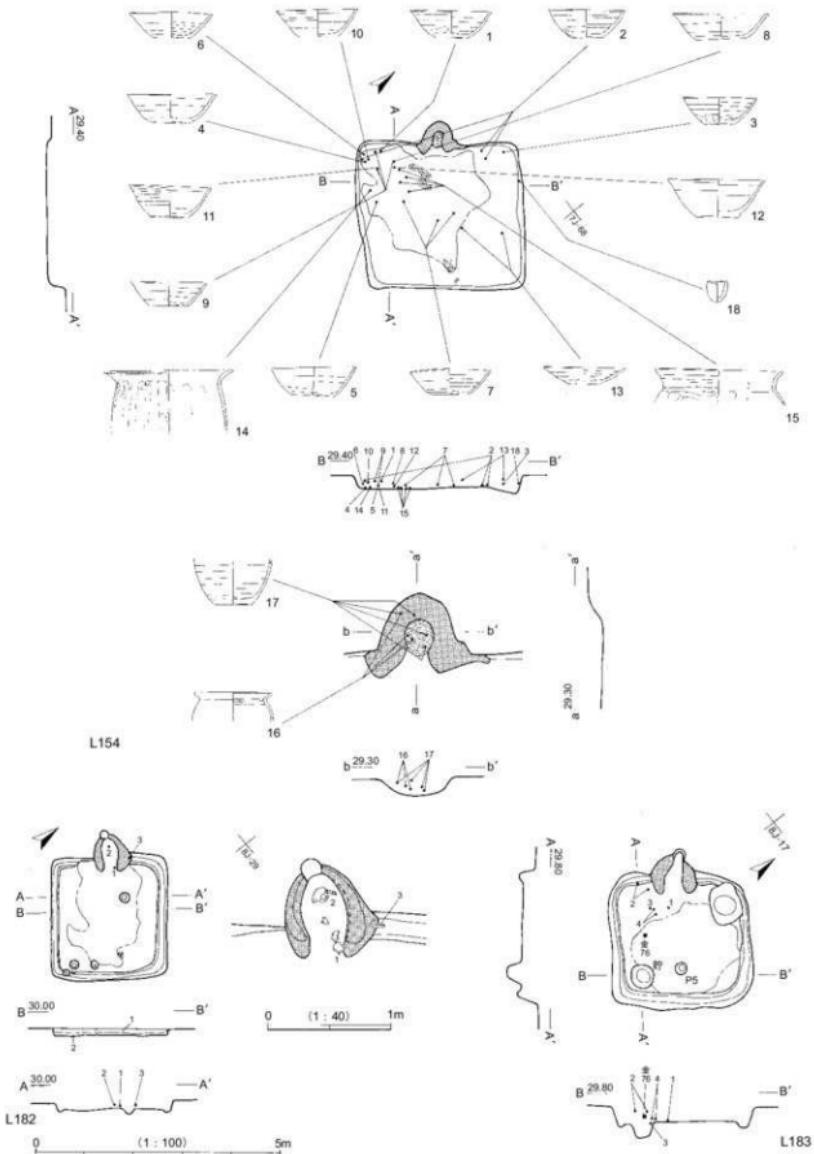
カマド前面に鉤の手状に長さ70cm、幅40cm、厚さ14cmほどの焼土ブロックが、カマドの対面の壁際からも焼土ブロックが2か所検出された。また覆土の状況を見ても、床直上に堆積した黒褐色土層中に焼土粒や炭化物粒が多量に含まれており、この住居が焼失住居であった可能性が高い。

遺物はかなり多く、全体的に分布しているが、特にカマド内や西側・北側・東側の各コーナー部に比較的まとまりが見られた。

遺物 (第162図、図版47・48) 土器18点を図示した。全て土師器で、第162図1~12が环、13がIII、14~17が甕、18が手程の小型土器である。2・4・5・7・11・12・14・15は床面、16・17はカマド内から出土した。1・3・4は底部を回転糸切りのうち手持ちヘラケズリ、立ち上がり部も手持ちヘラケズリが施されている。2・13は底面および立ち上がり部が手持ちヘラケズリである。5・8は底面および立ち上がり部が回転ヘラケズリであり、5と8のどちらの外面にもススが付着している。6・7・9は回転糸切り底のうち底部および立ち上がり部は回転ヘラケズリである。10・11・12は無調整の回転糸切り底である。环の残りの内外面は全てナデで仕上げられている。14・15は口縁部の内外面ともにヨコナデ、外面の残りはヘラケズリ、内面はヘラナデが施されている。15は武藏型で内外面にススが付着している。16は内外面ともにロクロによるナデで仕上げられている。17は底部外面は無調整で底部外周にヘラケズリ痕が残る。立ち上がり部は手持ちヘラケズリ、残りの内外面はナデが施されている。また外面底部にはヘラ書きが残り、外面にススが付着している。18は内外面ともにナデで仕上げられている。

#### L 182 (第85図、図版15) (8J-28・29グリッド)

調査区の中央や北側に位置する。L187の内側に入った形で重複しているがこちらの竪穴住居の方が新しい。平面形態は方形を呈し、主軸方向を北から52°西に向いている。規模は主軸方向に2.5m、その直交方向に2.4mで、壁高は最大で21cmある。柱穴、貯蔵穴および入口の梯子穴は存在しないが、住居中央部や北側と南側コーナー部に直径15cm~20cmの小ビットが4か所検出された。深さは住居中央部北側のビットが11cm、南側コーナー部のビットが20cm~29cmあり、柱穴が柱穴に準じた性格で、屋根の構造材を支える補助の働きをもっていたものではないかと考えられる。カマドの対面側のビットはあるいは入口の梯子穴のものかもしれないが、詳しい性格については不明である。壁溝はカマド部分以外の壁下全体に存在し全周する。カマドは北西壁のほぼ中央に設けられている。カマドはかなり崩れた状態を呈し、南西



第85図 L154・182・183住居

側袖部のみが残存し、北東側の袖はかなりつぶされていた。カマド上部の覆土内に灰白砂層が広範囲に5cm～8cmの厚さで広がっており、意図してカマドをつぶし、その砂を広げたようにも見え、カマド自体の破壊もだいぶ進んでいた。

住居の堆積土層は以下のとおりである。1層：ローム粒を少し含み、しまりのある暗褐色土層。2層：ローム粒を多く含み焼土粒が少し混じるややしまりのある暗褐色土層。

床面は全般的にはば平坦である。硬化面は貼り床となっており、壁際を除いてカマド前面から住居中央部全体に広がっている。

カマドの対面の南東壁際から直径15cm、厚さ8cmの大きさで少量の焼土ブロックが検出された。覆土内にも焼土粒の混入が少量認められた。焼失住居と断定するには焼土の量が僅かであるが、住居廃絶時に火を受けた可能性が考えられる。

遺物は少なく、カマド内とその周辺にやまとまって土器が出土した。図示した遺物は全てカマド内およびカマド周辺から出土したものである。

遺物（第165図、図版49） 土器3点を図示した。全て土師器で、第165図1・2は壊、3は壺である。1・2は底面が回転糸切り底で外面はヨコナデで仕上げられている。1の内面にはススが付着している。3は口縁部の外面にはヨコナデ、胴部外面にヘラケズリ、内面にはヘラナデが施されている。

#### L 183 (第85図、図版15) (8J-16・17グリッド)

調査区の中央やや北側に位置する。L363の内側に入った形で重複しているが、こちらの竪穴住居の方が新しい。平面形態は隅丸方形を呈し、主軸方向を北から51°西に向いている。規模は主軸方向に2.8m、その直交方向に2.7mで、壁高は22cm～33cm残存する。柱穴は確認されなかった。南東壁寄りにあるピットを入口の梯子穴と判断した。壁溝は壁下全体に存在し、カマド部分を除き全周している。北西壁のはば中央部にカマドを設けており、煙道部が壁に60cmほど掘り込まれている。この住居のカマドには袖部の痕跡も残っておらず、掘り方が検出できたのみであった。カマドの構築材である砂や粘土もその覆土中にあまり見られず、覆土上部に砂を多く含んだ層が8cm～16cmの厚さで広く堆積していたのみであった。このことから、住居の廃絶時に意図してカマドの構築物をきれいに除去し、埋め戻していた状況が考えられる。

貯蔵穴は南側コーナー部壁際に設置され、平面形はほぼ円形で直径46cm、深さ31cmの大きさである。床面は全般的にはば平坦である。硬化面は非常に固くしまっており、南東および北東壁際までと、住居の中心部分に広がっている。

遺物は少なく、出土位置が確かな遺物は総数で30点弱である。カマド南側から西側コーナー部にかけて比較的まとまりが見られた。

遺物（第165・227図、図版98） 土器4点、金属製品1点を図示した。第165図1・2が土師器の壊、3が須恵器の長頸壺、4が土師器の壺である。1・3・4は床面からの出土である。1の底面および立ち上がり部外面は手持ちヘラケズリ、残りの外面および内面はヨコナデが施されている。2は回転糸切り底に内外面ともにヨコナデが施されている。3の底部外周に高台貼付ののちナデが、底部および体部外面は回転ヘラケズリが、内面にはヨコナデが施されている。4は内外面ともにロクロによるヨコナデである。金属製品は第227図76の鉄製品であるが用途は不明である。

#### L 185 (第86図、図版15) (8J-75・76グリッド)

調査区のほぼ中央部に位置する。住居の南西部分のおよそ90%がL254と重複しており、L254を埋めて

この住居が造営されている。遺存状態は普通といえる。平面形態は方形を呈し、主軸方向を北から36°東に向いている。規模は主軸方向に2.5m、その直交方向に2.9m、壁高は5cm～15cm残存する。壁溝、柱穴、貯蔵穴、入口の梯子穴は検出されなかった。北東壁のほぼ中央部にカマドを設けているが、袖部のみが残存していた。煙道部が壁に45cmほど掘り込まれている。床面はほぼ平坦で、硬化面は南北の壁際を除き、カマド前面から住居中央部全体に広がっている。

遺物は大変少なく、出土位置の確かな遺物は20点弱である。

遺物（第165・216図、図版49・75・87） 遺物は大変少なかった、土器3点、石器1点を図示した。土器は全て床面から出土した土師器の壺である。第165図1は回転糸切り底で底面および立ち上がり部は手持ちヘラケズリ、残りの内外面はヨコナデが施されている。2も回転糸切り底で内外面にはヨコナデが施されている。3も回転糸切り底で体部外面はヨコナデの後に回転ヘラケズリ、内面はヨコナデで仕上げられている。体部外面に大きく「大」の線刻がある。第216図59の石器は混入の可能性がある。

#### L 192 (第86図、図版16) (9J-24・34グリッド)

調査区の中央やや南側に位置する。東側でL195と重複しているがこちらの竪穴住居の方が新しく、遺存状態は良好とはいえない。平面形態は方形を呈し、主軸方向を南から75°東に向いている。規模は主軸方向に2.5m、その直交方向に2.7mである。北東側コーナー部の壁が失われているが、壁高は最大で13cmである。壁溝、柱穴、貯蔵穴、入口の梯子穴は確認されなかった。カマドは東側壁のほぼ中央部に設けられ、煙道部が壁に40cmほど掘り込まれている。床面は全般的にほぼ平坦であるが、住居中心部から周辺に向かって比高5cmほどの緩やかな傾斜で降下している。硬化面は壁際を除き、カマド前面から住居中央部分に広がっている。

住居の南側に床面から1cm～5cm程の高さに炭化物が多く検出された。覆土中には焼土や炭化物がほとんど混入していないことを考えると焼失住居だった可能性は低いが、住居廃絶時に何らかの火を受けたことは間違いないと思われる。

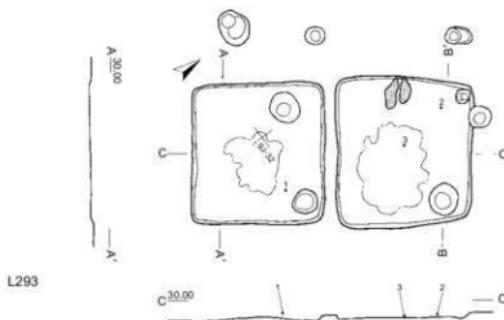
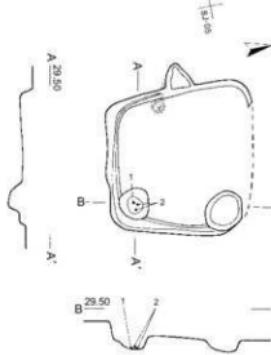
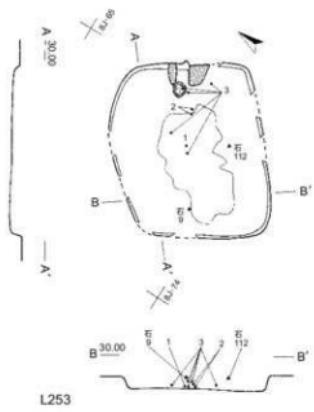
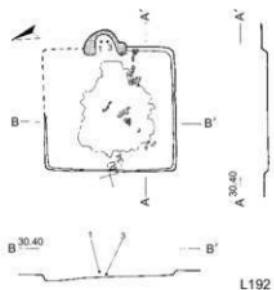
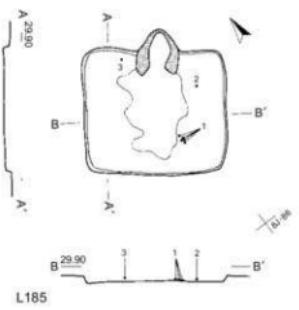
遺物の出土量は大変少なく、出土位置が明確なものは30点弱である。カマド内、住居東側に比較的まとまりが見られた。

遺物（第166図） 土器3点を図示した。全て土師器である。第166図1の壺は底部が欠損しているが、内外面ともヨコナデが施されている。内面にススが付着している。2の甕は口縁部の内外面ともにヨコナデが、体部外面は平行タタキ、内面はナデが施されている。胴部内面に当て具痕が残されている。3の甕は外面がヘラケズリのちナデが、内面はヘラナデが施されている。

#### L 253 (第86図、図版18) (8J-64・74グリッド)

調査区の中央やや北側に位置する。北側コーナー部でL259と、住居の南側の約80%をL256と重複しているがこの竪穴住居が最も新しい。平面形態は長方形を呈し、主軸方向を北から53°東に向いている。規模は主軸方向に3.6m、その直交方向に2.9mで、壁高は最大で31cmである。壁溝、柱穴、貯蔵穴、入口の梯子穴は検出できなかった。カマドは北東壁のほぼ中央に設けられている。明確な袖部は残存していなかった。煙道部が壁に10cmほど掘り込まれている。床面は全般的にほぼ平坦であるが、中心部から外周部に向かって緩やかに傾斜し、比高差1cm～3cmほど下がってきている。硬化面は壁際を除き、住居の中央部に広がっている。

遺物は、住居全体に広く散らばっていたが、カマド内、カマド前、住居中央部に比較的小さなまとまり



0 (1 : 100) 5m

第86図 L185・192・253・279・293・294住居

が見られた。

遺物（第175・212・218図、巻頭図版5、図版54・83・89） 土器3点と石器・石製品2点を図示した。第175図1・2は土師器で床面から、3は須恵器で床面とカマドから出土した。1の高台付壺は底部に回転系切りの痕跡が残る。高台部分と体部外面にはナデが、内面全面にはミガキが施されている。外面の口縁上部から内面にかけて黒色処理がなされている。2の壺は口縁部の内外面にヨコナデを、体部外面はヘラケズリ、内面はヘラナデを施している。また内面にはナデによる器面の凹凸が顕著である。3の壺は体部外面にタタキ、胴部内面にナデのうち口縁部内外面にヨコナデを施している。外面にはタタキに使用した工具が斜格子目状の圧痕となって、内面には一部當て具痕が残っている。石器・石製品は第212図9の搔器と第218図112の凝灰岩製の管玉である。管玉は両面より穿孔されている。この2点については、本住居に直接伴う可能性が低く、何らかの要因で混入したと考えられる。

#### L 279 (第86図、図版20) (8J-05・06グリッド)

調査区の中央や北西側に位置する。北東側でL272、L365と重複しているがこちらの竪穴住居の方が新しい。また、ほとんど重なるようにL273と重複しており、L273の方が新しかったため、かなりの部分が壊され遺存状態は不良である。平面形態は方形を呈し、主軸方向を北から79°西に向いている。規模は主軸方向に3.1m、その直交方向に3.0mである。北側壁が失われているが、残されている壁高は最大で28cmである。壁溝は西側壁下の一部とコーナー部分を含み南・東壁下まで続く。柱穴、貯蔵穴、入口の梯子穴は検出されなかった。西壁のほぼ中央部にカマドを設けているが、カマド本体はL273の造営にあたって壊され、撤去されてしまったらしく明確な遺構として検出されなかったので、掘り方のみしか確認できなかつた。煙道部が壁に50cmほど掘り込まれている。床面は全般的にはほぼ平坦であるが、北西から南東に比高差10cmほど傾斜している。明確な硬化面は見いだせなかつた。

住居内覆土の遺物の大部分はL273に関係していたため、本住居の遺物は少なく、カマド内と北東側、南東側ピットから出土した10点程度のみである。

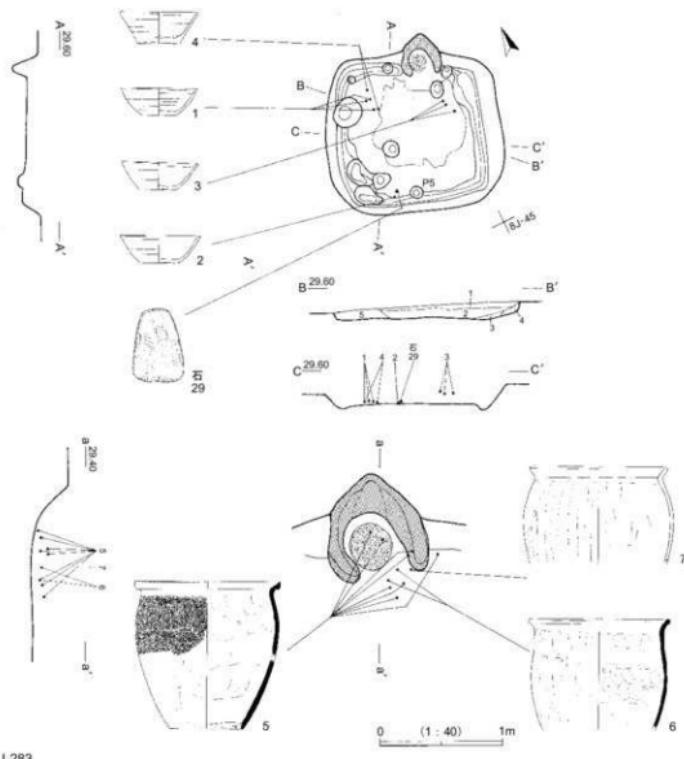
遺物（第180図、図版57） 土器2点を図示した。2点とも土師器の壺である。どちらも無調整の回転系切り底に、外外面にはナデが施されている。

#### L 283 (第87図、図版21) (8J-34・35グリッド)

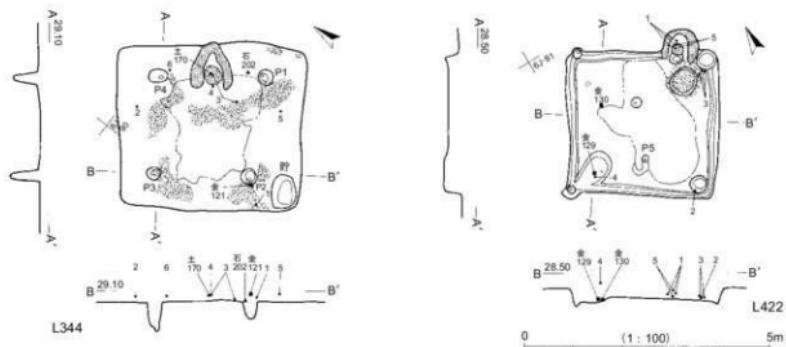
調査区の中央や北西側に位置する。ほかの遺構や竪穴住居とは重複関係をもたず単独で検出された。遺存状態は比較的良好である。平面形態は隅丸方形を呈し、主軸方向を北から23°東に向いている。規模は主軸方向に3.2m、その直交方向に3.7mである。壁面は緩やかに傾斜し、壁高は11cm～38cm残存する。壁溝は全周する。主柱穴および貯蔵穴は存在しない。北東壁のやや東側にカマドが設けられている。カマドは袖部のみ残存している。煙道部が壁に30cmほど掘り込まれている。入口の梯子穴はカマドの対面。南側壁の中央部分から検出された。床面は全般的にはほぼ平坦である。床の硬化面はカマドの前面から住居の中央部分にかけて広がっている。

住居内覆土は人為的な埋め戻しの可能性が高く、堆積土層は以下のとおりである。1層：細かいローム粒を多く含む暗褐色土層。2層：細かいローム粒を多く含み、焼土粒が少し混じる暗褐色土層。3層：壁のロームが流入したローム粒を多く含む暗褐色土層。4層：ソフトロームが多く壁部分に相当する褐色土層。5層：φ1mm～5mmのローム粒を非常に多く含む暗褐色土層。

遺物は、カマド内、カマド前面、入口梯子穴西側、北西コーナー部、南東コーナー部に比較的小さなま



L283



第87図 L283・344・422住居

とまりが見られたが、原則的には住居内に散在している状況であった。

遺物（第181・213・228図、図版58・84・99）土器7点、金属製品4点、石器1点を図示した。第181図1は土師器の壺で底部は回転糸切りの後手持ちヘラケズリが施されている。2～4も土師器の壺で回転糸切り底に内外面はヨコナデで仕上げられている。5は須恵器の壺（5孔の壺と思われる）で胴部外面の上半に縱方向の平行タタキのうち口縁部にヨコナデが、下半にはヘラケズリが施されている。内面は口縁部ヨコナデのうち頸部ヘラナデが、頸部から底部にナデが施されている。胴部内面に当て具痕が残る。底部の孔の周囲にはヘラケズリがなされている。6は須恵器の壺で口縁部から頸部まで外面にヨコナデが、頸部から胴部下位の外面にヘラケズリが、内面にはヘラナデが施されている。胴部内面に当て具痕が残っている。7は土師器の壺で口縁部の内外面にヨコナデが、胴部外面に縱方向のヘラケズリが、内面はヘラナデが施されている。頸部内面に粘土接合痕が残され、外面にスヌが付着している。5～7の3点ともカマド内およびカマド側からの出土である。第213図29は石斧である。これは床面からの出土であるが、本住居に直接伴う可能性は低い。混入品と考えられる。

#### L 293 (第86図、図版21) (9J-31・32グリッド)

調査区の中央やや西側に位置する。北側コーナー部でL431と重複している。覆土がほとんど残っておらず、遺存状態は良くない。住居の平面形態は方形を呈し、規模は2.9m×2.7mで、壁高は最大で5cmである。壁溝、柱穴、貯蔵穴、入口の梯子穴は検出されなかった。炉およびカマドは存在しない。床面は全般的にはほぼ平坦であるが、北から南に比高差5cmほど傾斜している。硬化面は住居のほぼ中央部に存在する。住居の東側コーナー部からピットが検出された。位置、形態とともに貯蔵穴としても違和感はないが、深さが17cm程度で実用に耐えうるかどうかかも疑問なのであえて貯蔵穴との判断は避けた。性格、用途については不明である。

遺物は少ない。覆土が薄く遺存状態も悪かったため、出土位置の明確な遺物は10点余である。

遺物（第181図）土器1点を図示した。土師器の壺である。体部外面と口縁部内面にヨコナデが施されている。口縁部から体部の内面に黒色が付着している。磨滅のため底部の状況は不明である。

#### L 294 (第86図、図版21) (9J-22グリッド)

調査区の中央やや西側に位置する。西側コーナー部でL431と重複している。覆土がほとんど残っておらず、遺存状態は良くない。平面形態は方形を呈し、主軸方向を北から53°西に向いている。規模は主軸方向に3.0m、その直交方向に2.8mで、壁高は最大で8cmで、壁溝、柱穴、貯蔵穴、入口の梯子穴は確認されなかった。北西壁のほぼ中央部にカマドを設けている。カマドは袖部のみが残存していた。床面は全般的にはほぼ平坦である。硬化面は壁際を除き、住居中央部分に広がっている。住居の東側コーナー部からピットが検出された。位置、形態とともに貯蔵穴としても違和感はないが、深さが17cm～21cmであることと底の部分が平坦でない点を考え貯蔵穴との判断は避けた。このピットの性格、用途については不明である。

遺物は少なく、覆土も薄かつたため遺存状態が悪く、出土位置の明確な遺物は10点弱である。

南西側にカマドの有無の違いのみではほぼ同型同規模の住居L293があり、両者の間は24cm～28cmを隔て、隣り合う壁面がほぼ平行になっている。北西壁と南東壁もほぼ一直線上に並んでおり、年代もどちらも9世紀中葉に比定されている。両者の間隔が狭いことからも同時に2棟が存在していたとは考えにくい。今までの例ならどちらか前後関係をもって造営されたと考えるのが普通であろう。ただ片方にカマドがない点も考え、カマドのある方を居住空間、もう一方を倉庫などのユーティリティ空間とし、間仕切りなどを

設けた長方形の住居1棟として使用された可能性も考えられる。その場合住居北西～北側のピット数基は底の柱のような何らかの機能をもたせるため掘られたものであろう。

遺物（第181図） 土器3点を図示した。第181図1・2は土師器の壺、3は土師器の甕である。1の底面は回転糸切りの立ち上がり部とともに手持ちヘラケズリが、残りの内外面はヨコナデが施されている。2の底面は回転ヘラケズリが、体部外面はヨコナデが施され、内面は黒色処理がされている。3の口縁部から頸部の内外面はヨコナデが、頸部から胴部の外面はヘラケズリが、内面はヘラナデが施されている。

#### L 3 4 4 (第87図、図版24) (81-99, 8J-90グリッド)

調査区の中央や西側に位置する。西側コーナー部でM158と、東側コーナー部でL342と重複しているがこの竪穴住居が最も新しい。平面形態は方形を呈し、主軸方向を北から56° 東に向いている。規模は推定で主軸方向に3.5m前後、その直交方向に3.8m前後である。柱穴は対角線上に4か所検出された。各柱穴の掘り方の平面形はP1・P2が円形、P3・P4は長径が住居の中軸線と直交する形の楕円形を呈している。入口の梯子穴は存在しない。カマドは北東壁のほぼ中央に設けられている。袖部のみ残存している。貯蔵穴は南隅壁際に設置され、平面形は楕円形である。硬化面はカマド前部と柱穴を結ぶ線の内側の住居中央部全体に広がっている。

焼土ブロックがカマドの前面からP1にかけて220cm×55cm、厚さ12cm、貯蔵穴の北側に直径約30cm、厚さ8cm、P2の南西側に80cm×60cm、厚さ12cm、P3の南側に110cm×45cm、厚さ10cm、P4の南側からP3にかけて100cm×40cm、厚さ12cm、そして東側コーナー部のいずれも床面と床面からやや浮いた位置から検出された。覆土の中へ下層からも焼土粒が確認されている。焼失住居と断定するには炭化物がほとんど見られないが、住居廃絶時に火を受けた可能性は高い。

遺物は少なく出土位置が明確なものは30点ほどである。カマド内に数点が集中しているほかは住居内に点在している状況であった。

遺物（第192・211・221・229図、図版62・92・100） 土器を6点、土製品1点、石製品1点、金属製品1点を図示した。第192図1～4は土師器の壺、5は土師器の甕、6は灰釉の高台付皿である。5以外の壺は、床面かカマド内から出土した。1は回転糸切り底に、立ち上がり部に手持ちヘラケズリが、残りの内外面にヨコナデが施されている。2は底面および立ち上がり部に手持ちヘラケズリが、残りの内外面にヨコナデが施されている。3は底部および立ち上がり部に回転ヘラケズリが、残りの内外面にヨコナデが施されている。4は回転糸切り底に、内外面にヨコナデが施されている。5は回転糸切り底に底部外周に回転ヘラケズリが、付け高台部と体部外面にはヨコナデが施されている。口唇部から内面にかけて灰釉が施釉されているが、のちに窓に転用されており、擦り面が見られる。朱墨が遺存している。6は口縁部内外面にヨコナデが、体部外面にヘラケズリが、内面にナデが施されている。頸部の内外面に輪積痕が残されている。土製品は第211図170の平瓦、石製品は第221図202の砥石、金属製品は第229図の121の鎌である。鎌の全長は170.0mm、幅29.2mm、基部長は45mmで、横方向の木目が走る木質痕が残されている。平瓦は表面が布目痕、裏面は繩目タキで繩目文が残されている。

#### L 4 2 2 (第87図、図版27) (6J-80・81グリッド)

調査区の北側ほぼ中央に位置する。他の竪穴住居とは重複関係をもたず単独で検出された。平面形態は隅丸方形を呈し、主軸方向を北から34° 東に向いている。規模は主軸方向に2.9m、その直交方向に3.1m

である。遺存状態は普通で、壁高は10cm～25cm残存する。壁溝は壁下全体に存在し、全周する。入口の梯子穴は南西壁寄り中央から検出された。主柱穴は存在しないが、住居の四隅コーナー部と住居中央部北側にピットが検出された。東隅のピットは直径38cm～43cm、深さ12cm、南隅のピットは直径32cm～37cm、深さ14cm、西隅のピットは直径15cm～18cm、深さ30cm、北隅のピットは直径15cm～23cm、深さ58cm、住居中央部北側のピットは直径20cm～25cm、深さ23cmである。柱穴や貯蔵穴とするには直径と深さの組み合せに疑問が残る。性格、用途については不明としておく。北東壁の東端寄りにカマドが設けられている。カマドは袖部が残存しており、天井部分は崩れて火床面の上面から住居内部にかけて流され、埋没していた。煙道部は壁に45cmほど掘り込まれている。床面は全般的にはほぼ平坦であるが、硬化面部から周辺部に向かい比高差5cmほど傾斜している。硬化面は北東壁の中央部と南隅コーナー部を結んだ線を中心とし、住居中央部全体に広がっている。

カマド前面にカマドの砂と焼土が崩れて広がった形跡が見られた。住居廃絶時にこの住居のカマドは住居の室内側に崩落したと推測できる。その床面から長径60cm、短径50cm、深さ3cm～5cm程の浅い皿状のくぼみが検出された。このくぼみとほぼ同様のもの（こちらの方がやや深く5cm～10cm）がカマドと対角の西側コーナーにも存在しており、焼土が少量残されていた。また西側コーナーの最奥部にピットがあり、半円状に突出している部分がある点も考え合わせると、当初カマドは西側コーナー部にあったものを、のちに東側コーナーに移動した可能性も考えられる。

遺物はあまり多くなく、出土位置の明確なものは総数で50点弱である。カマド内とカマド前面、南北の各コーナー部に比較的まとまりが見られた。

遺物（第198・229図、図版64・75・100） 土器5点、金属製品2点を図示した。第198図1・2は須恵器の壺、3・4は土師器の壺、5は須恵器の甕である。1・2は回転ヘラ切りのうち手持ちヘラケズリを施し、残りの内外面はナデで仕上げている。3は底部および立ち上がり部に回転ヘラケズリが、残りの内外面にナデが施されている。底部内面に線刻が残されている。4は無調整の回転糸切り底に内外面ともナデが施され、底部内面に線刻がなされている。5は口縁部から頸部の内外面にヨコナデが、頸部から胴部中位の外側は縦方向の平行タタキが、胴部下位はヘラケズリが施されており、あたり痕を削っている。内面はヘラナデが施され、部分的に無文の當て具痕や粘土の接合痕が残っている。1・5がカマド内、2・3が床面出土である。金属製品は第229図129・130であるが、どちらも性格、用途は不明である。

## 2 土坑・土坑墓・溝状遺構

奈良時代以降に明らかに帰属するという遺構は僅かである。それは、時期決定を可能とする遺物を伴う遺構が限界されてしまうことによる。ただ、遺物が伴わず、性格も明確にすることが不可能な遺構についても、遺構の切り合い関係や覆土の状態から、奈良時代以降の所産と考えて妥当な土坑や溝状遺構も存在する。遺構としては、土坑、土坑墓、溝状遺構、柵列状の土坑群等が存在する。

### L 373 (第88図) (10J-32・42グリッド)

調査区の南側において単独で検出された土坑墓である。ほかの遺構との重複関係は存在しない。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸長228cm、短軸長95cm、深さ28cmである。底面は平坦で壁は傾斜して立ち上がる。長軸の方向はN-30°-Eで、北から東に振れている。覆土は3層に分けられ、ソフトローム粒を下層になるにしたがい多く含む。覆土の堆積状況は自然堆積の様相を呈し、特に木棺等の存在は認められない。

遺物は青磁碗の破片と金属製品が出土している。いずれも底面か底面に近い位置からの出土である。

遺物 (第194・229図、図版100) 青磁破片1点と金属製品2点を図示した。第194図1は青磁碗である。口縁部は緩やかに外反し、底部付近では丸味を帯びる。第229図124は器種不明の鉄製品である。先端部を欠損するが、先が尖る様にも見える。基部は逆「U」字形になって左右に開いているが、その端部の詳細は明らかでない。125は鎌で、刃部はやや曲刃を呈している。

### L 434 (第88図) (9J-44・54グリッド)

弥生時代後期の竪穴住居L196の覆土を掘り込んでいる土坑である。平面形は長方形を呈し、長軸長268cm、短軸長164cm、深さ58cmの規模を有する。底面は平坦で壁はやや傾斜しながら立ち上がる。長軸の方向は北東を向き、N-37°-Eを示す。覆土はロームブロックやローム粒が主体で、黒色土が含まれる。堆積状況は自然堆積と見られるが、覆土の最上層は水平な堆積をする。平面や断面の観察からは木棺などの痕跡は窺われない。

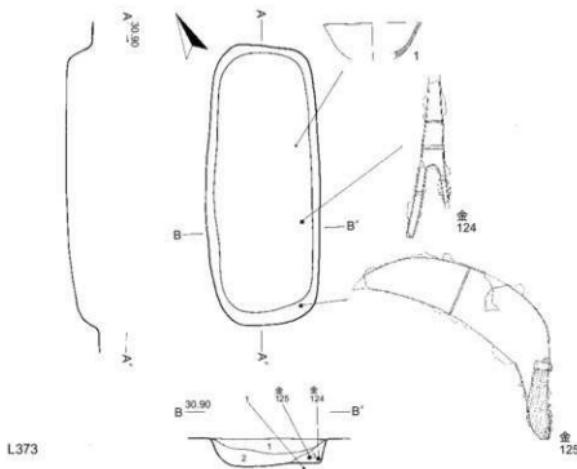
遺物は遺構の検出面から出土し、覆土中や底面からは図示可能となる遺物は検出されていない。出土した遺物は土器で、土師器の壺と破片の状態で出土した壺である。

遺物 (第199図) 土器2点を図示した。第199図1は底部の切り離しが回転糸切りで行われ、その後の調整が施されていない壺である。体部下端についても無調整のままである。2の土師器壺は口径が胴部最大径を上回り、張りのある胴部上位から底部に向かってぼまっている。胴部の調整はヘラケズリで、上部が縱方向に行われ、下位から底部にかけては横方向に施されている。

### L 040 (第89~93図、図版6) (10I, 10J, 11J, 11K, 11Lグリッド)

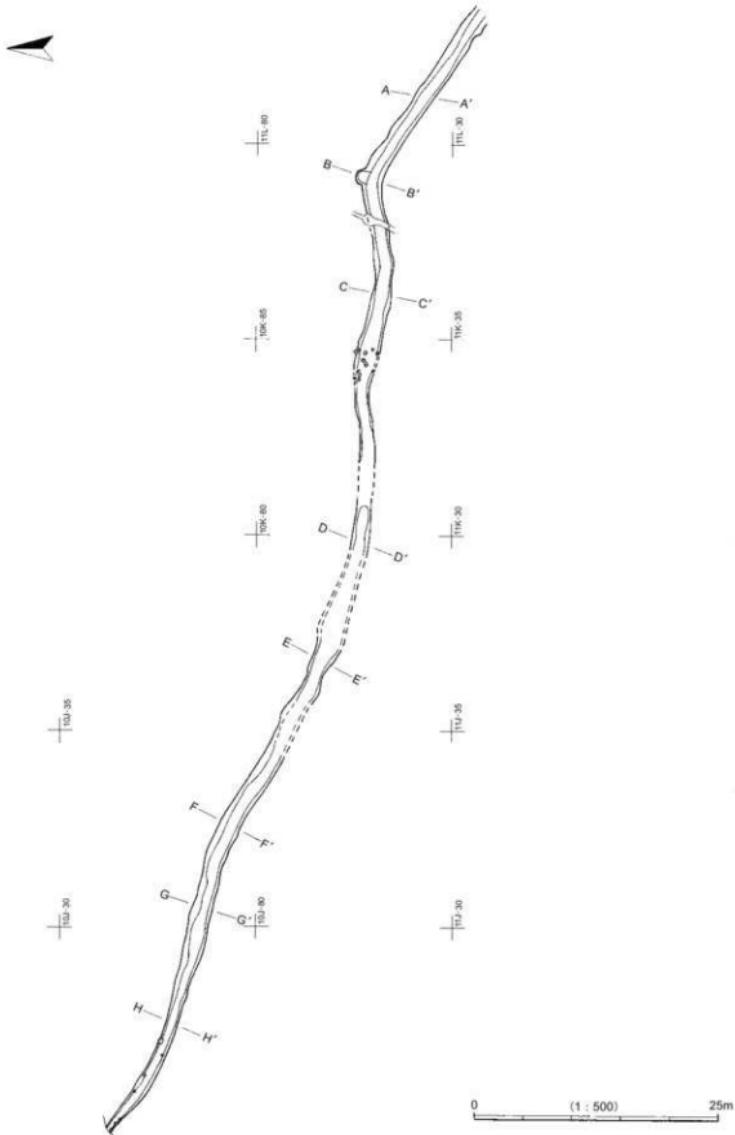
調査区の南側で東西に延びる溝状遺構である。第82図の位置に示したように現崖線に平行するように東西に延び、全長約140mの部分が検出されている。東端部はH区に確認され、西側はL300につながる状況で終わる。検出面での幅は1.1m~2.1mで、深さは0.3m~0.6mである。底面は比較的平坦で、所々に小ビットが存在する。そのビットは、底面の平坦部には認められず、立ち上がりの下場に位置している。底面に硬化面の存在は確認されていないが、覆土の最下層はロームブロックを含む暗褐色土でしまりがある。このような状況から、この遺構は道として利用されていた可能性が高い。

遺物は土器片が多く出土している。土器の時代は弥生時代から古墳時代までが多く、遺構の時期決定が



0 (1 : 40) 2m

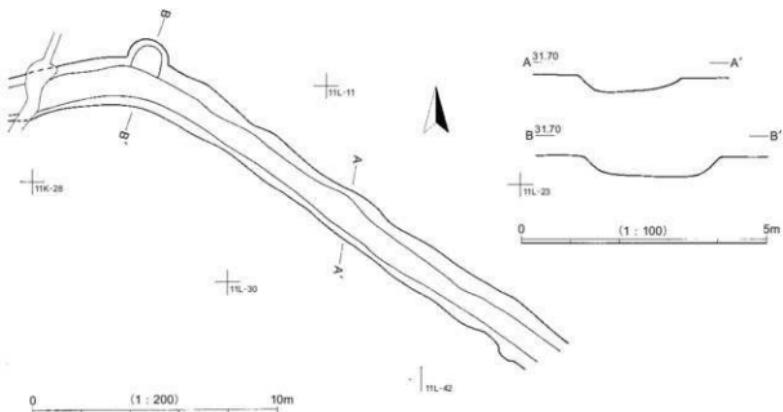
第88図 L373土坑墓・434土坑



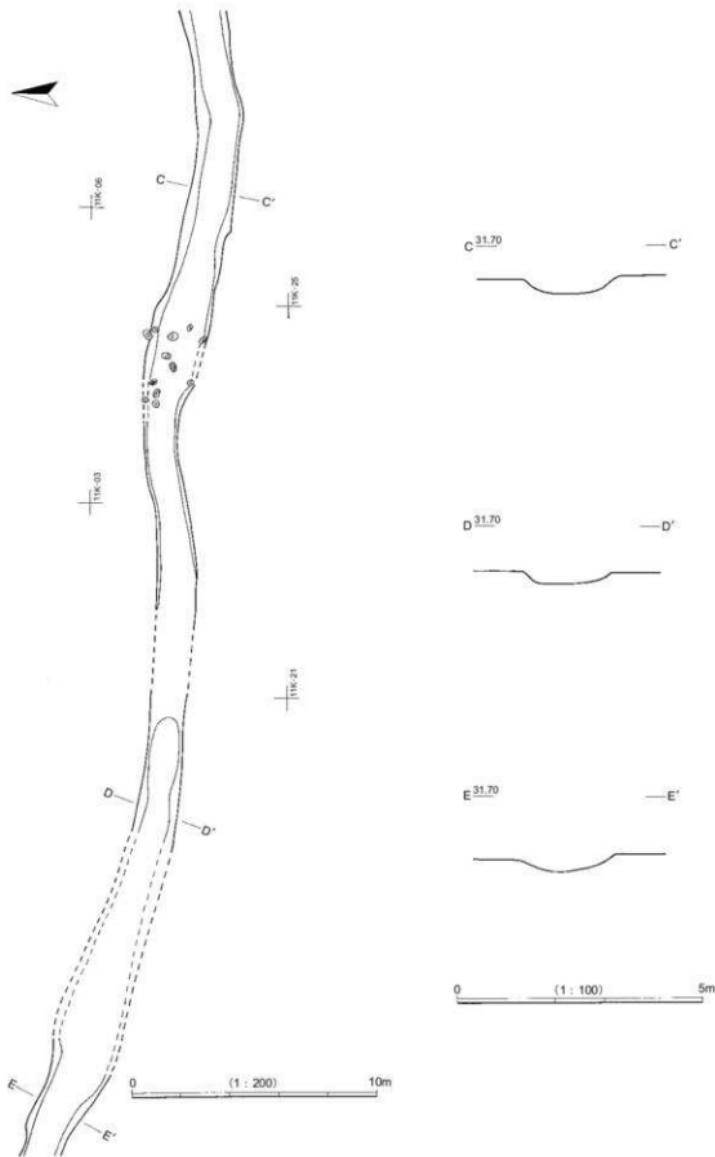
第89図 L.040満状造構



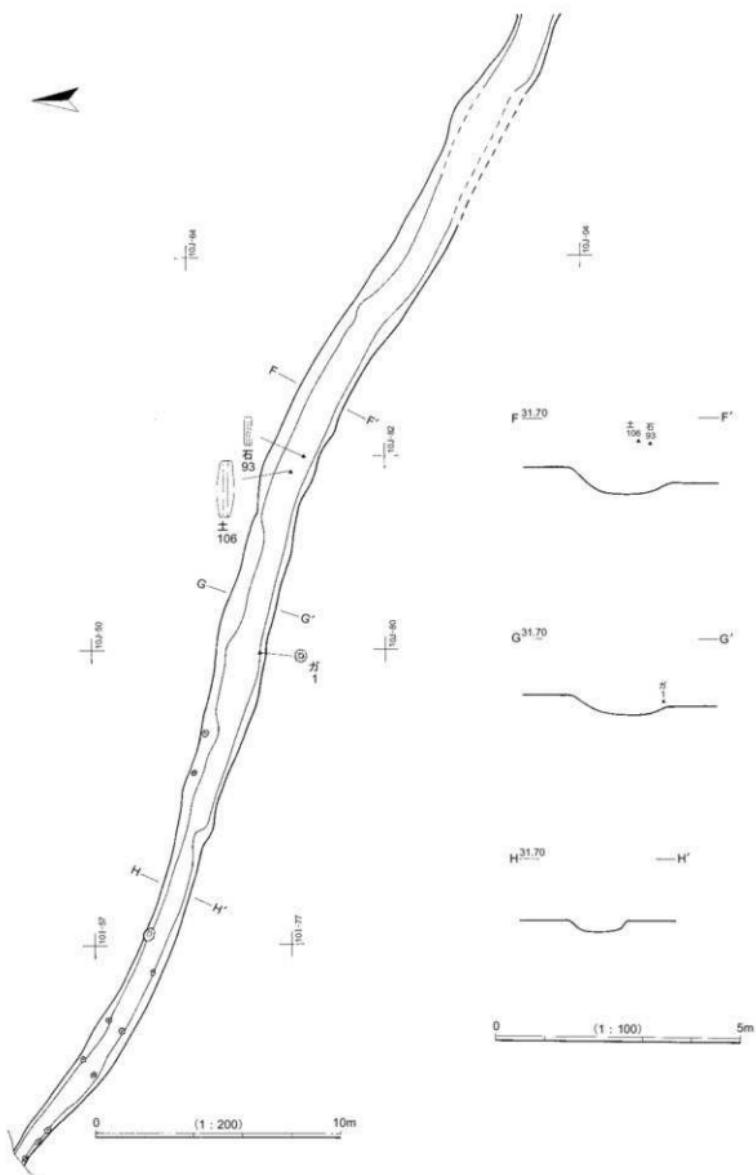
第90図 L040満状造構位置図



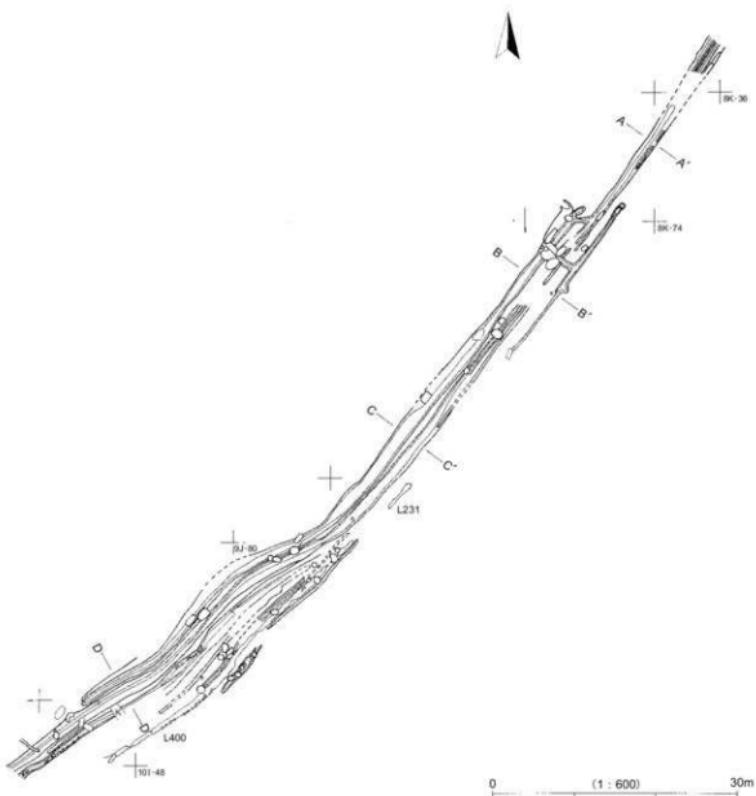
第91図 L040満状造構分割図（1）



第92図 L040満状造構分割図（2）



第93図 L040満状造構分割図（3）



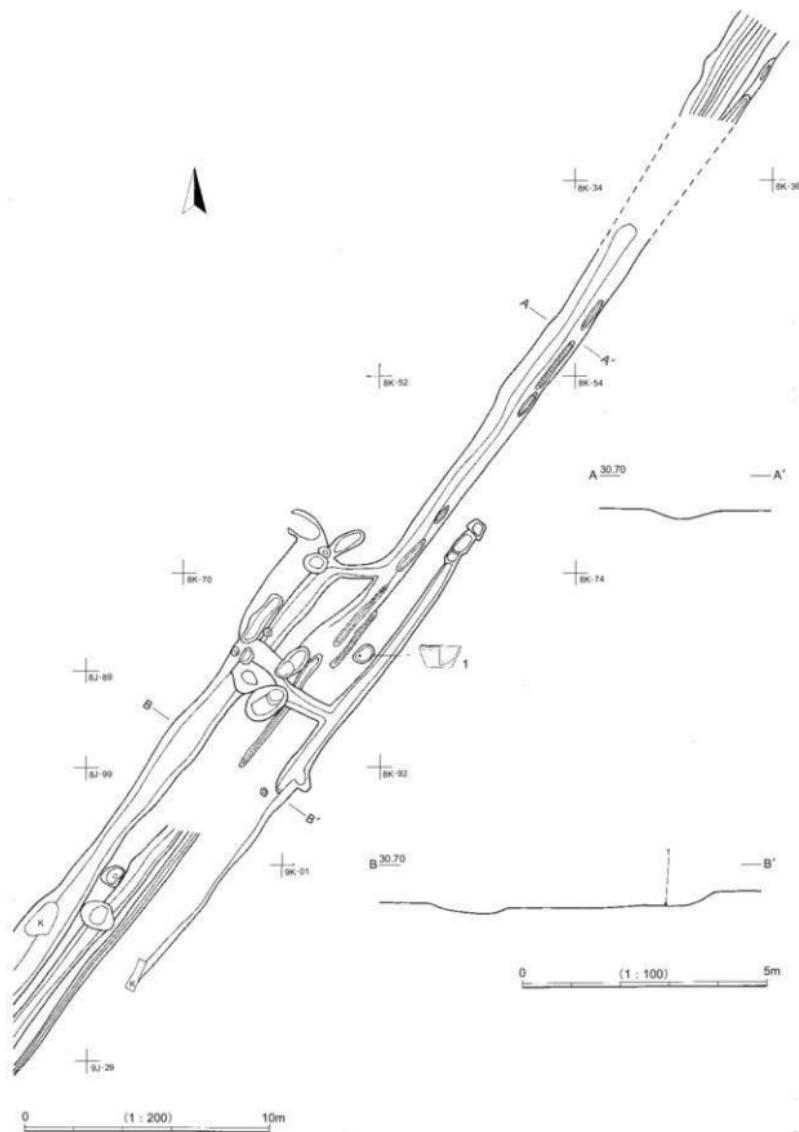
第94図 L300溝状遺構

可能となる状況では出土していない。第136図1のS字状口縁の甕の破片、第206図106の管状土錐、第218図93の管玉を図示したが、直接時代を示す遺物ではないであろう。

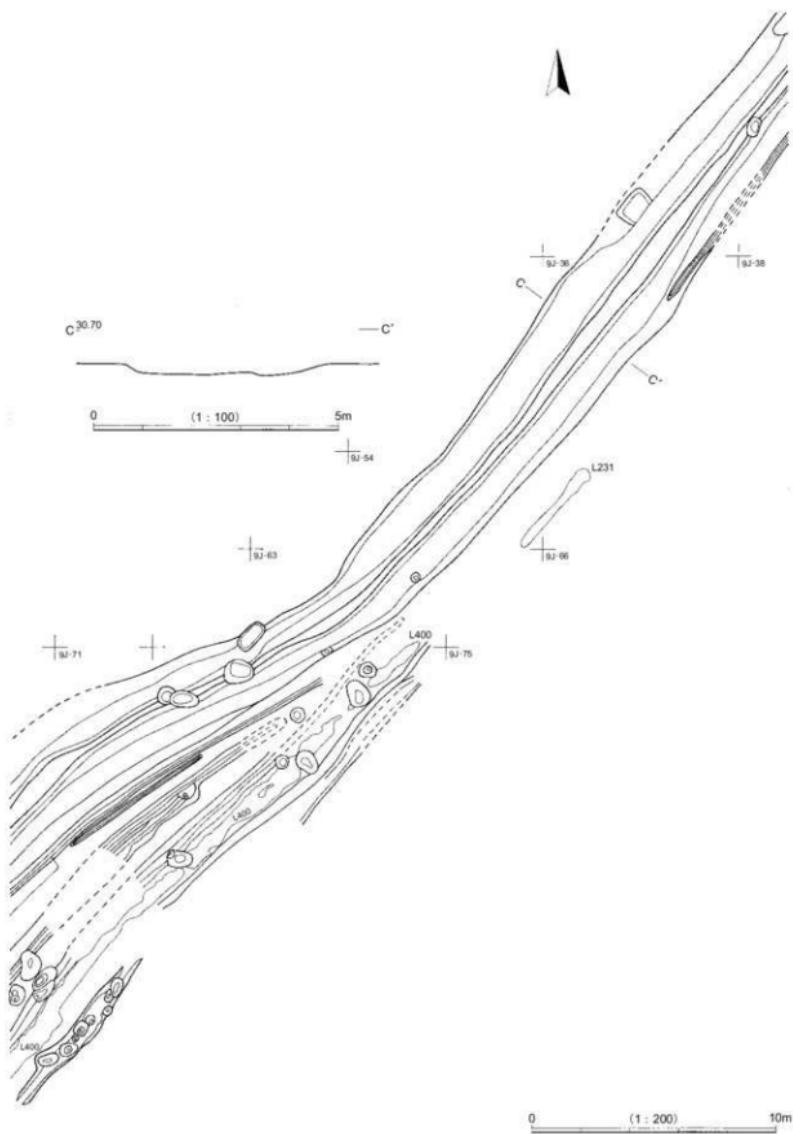
遺物（第136・206・210・212・214・218・225図、巻頭図版5・6、図版80・83・85・89・90・97） 土器1点、土製品1点、ガラス玉1点、石器・石製品3点、金属製品2点を図示した。上述したように図示した遺物は遺構に混入したと考えられる。第136図1はS字状口縁を呈する甕の破片である。鮮明なハケ痕が肩部に認められる。第206図106は管状土錐である。全体に細身で中央部に僅かな膨らみをもつている。第218図93は緑色凝灰岩製の管玉である。両側からの穿孔が行われている。

#### L 3 0 0 (第94~97図) (91, 101, 8J, 9J, 8Kグリッド)

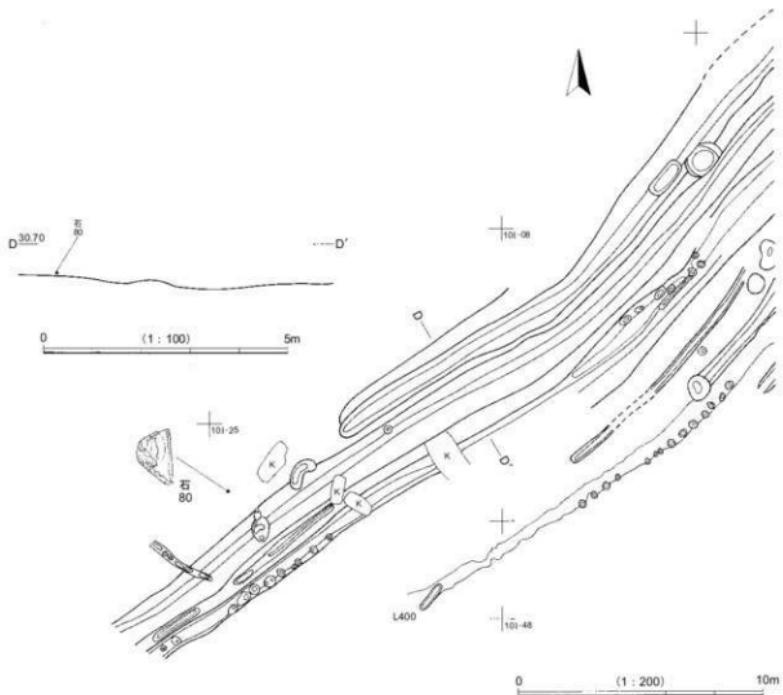
調査区の中央部を北東から南西に延びる溝状遺構である。北東側は調査区K区のK630となり、さらに



第95図 L300満状造構分割図（1）



第96図 L300溝状造構分割図（2）



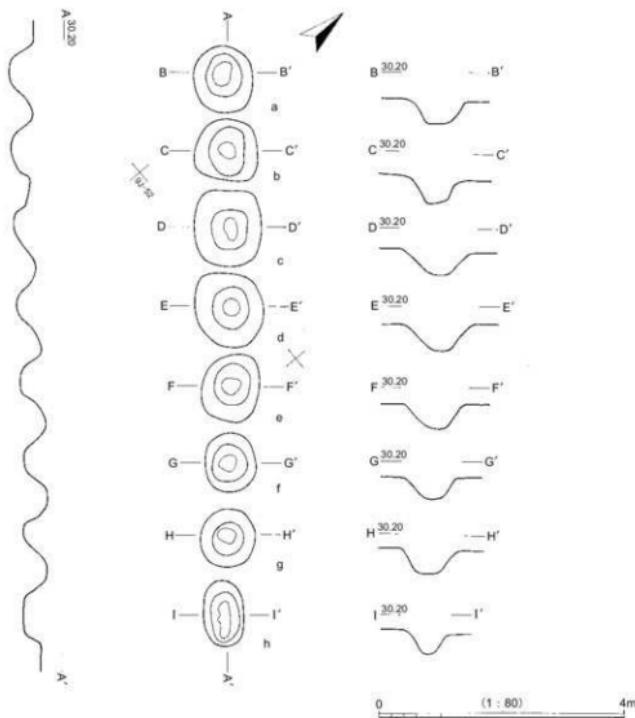
第97図 L300溝状遺構分割図（3）

北東に延びていく。南西側は先述したL400と合流する。本遺構は2条～5条の平行する溝として検出され、何度もかの掘り直しが行われた状況が推測される。幅は1.1m～6.2mで、数条の溝が平行する地点で幅が広くなる。溝の底面は平坦になる部分が長い。道としての機能を果たしていたと考えられる。遺物は土器片や石器等が出土しているが、溝の時期を示す資料とは考えられない。いずれも混入した遺物である。ただ、第210図160に図示した土製品が遺構の時期に近いかもしれない。

遺物（第182・210・212・218・219・221図、巻頭図版6、図版58・83・88・90・92） 土器1点、土製品1点、石器・石製品6点を図示した。第182図1は手捏土器である。鉢形に整形され、口縁部に輪積痕跡が残る。第210図160は常滑の壺破片を再利用している。破断面が研磨された状態を呈することから、砥石的な利用が行われたと推測される。石器については縄文時代の遺物である可能性が高い。

#### L 3 9 1 (第98図、図版26) (9J-42・53グリッド)

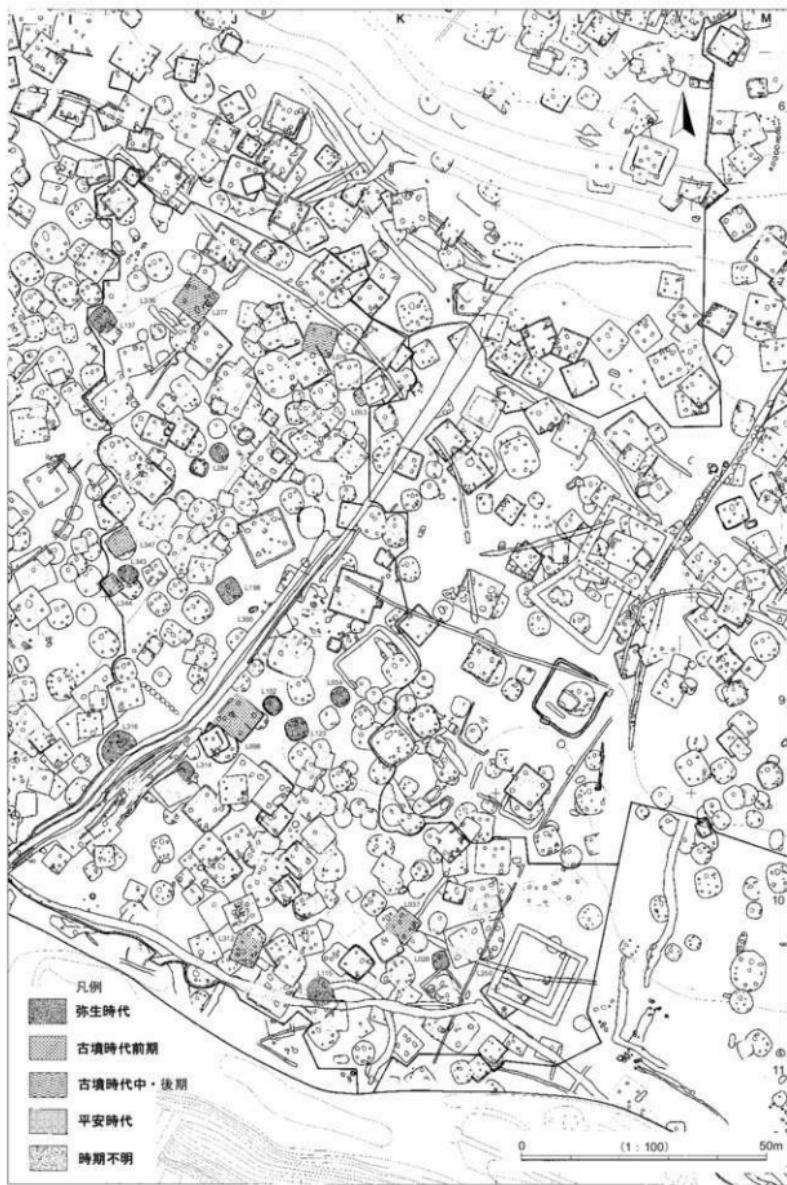
調査区の南側で、先述のL300から直角に折れるような状況で8基の土坑が検出された。これを一連の土坑群と捉え、8基に対して1つの遺構番号を付した。土坑は北西～南東の方向で9.8mの間に一直線に並んだ状況で位置し、それぞれは楕円形や円形の平面形を呈している。8基の中で最も規模が大きな土坑



第98図 L391土坑群

は、北西端部に位置するa土坑から南東に3番目に位置するc土坑になる。長径125cm、短径110cm、検出面からの深さは45cmである。規模の小さな土坑はg土坑であり、円形を呈し直径95cm、深さ40cmになる。いずれも底面はやや丸味を帯び、断面形態はU字状である。また、時期決定の根拠となる遺物は出土していない。

直線的な配列で底面の間隔が120cm前後と比較的均一であることから、この土坑群が一連であることは明らかである。目的としては柵などの埋設用として掘られた可能性もあるし、境界設定を目的として設けられた施設とも推測される。明確な性格は不明であるが、道として機能していたと考えられるL300から、直角に折れるような検出状況を偶然と見るよりも、大きく関連していたと推測する方が自然ではないだろうか。



第99図 貝層出土遺構分布

## 第6節 草刈遺跡L区出土の動物遺体

### 1 資料と調査・整理方法

#### (1) 資料（第99～101図）

本区では22遺構および4グリッドで貝類を含めた動物遺体を確認した（第99図）。貝層は、弥生時代の竪穴住居7軒と古墳時代の竪穴住居3軒の覆土中で検出されており、弥生時代4軒と古墳時代2軒でサンプル採取が実施されている。貝層の検出状況やサンプルの採取位置については第2章第3節・第4節に、掲載されなかった遺構分については、第100・101図に採取位置の微細図を示した。また、7遺構および5グリッド・15か所では、1点ないし数点の貝類遺体が、9遺構および2グリッドでは、大量の貝類に混在してごく少量の微小貝類・魚類・哺乳類遺体が見つかっている。本節で扱う動物遺体は、人工遺物と同様、発掘調査時に3次元の出土位置や層位が記録された「任意採集資料」と、貝層サンプルから水洗分離された「貝層サンプル資料」からなる。貝類遺体については貝層サンプル、動物遺体については前述の分を、それぞれ報告の対象とした。

#### (2) 調査・整理方法

貝層サンプルおよび任意採集資料の概要を第1表にまとめた。本区で採られたサンプルの採取方法は以下の2つに分類される。

**柱状サンプル** 50cm×50cmの規模で、1カット当り厚さ5cmで貝層や間層が採取されている。竪穴住居L198の貝層では3カット分が採取されている。

**全量サンプル** 比較的小規模な遺構内貝層で、貝層ごと一括して全量採取されている。竪穴住居L098・102・123・277・314の貝層で採られている。

任意採集資料については、乾燥後、整理作業時に刷毛や筆を用いて汚れ落としを実施し、種同定を行った。一方、貝層サンプル資料は9.52mm、4mm、2mm、1mmメッシュの試験フルイによる水洗分離を行い、乾燥後に選別、集計作業を実施した。

### 2 貝類（貝サンプル）

#### (1) 資料

貝類は、9.52mmと4mmメッシュのフルイにより検出した貝層サンプル資料を対象とした。同定作業を進めるにあたって、当財団所蔵の現生標本および遺跡出土の比較標本を用いた。集計後、イボキサゴの殻高、ハマグリ・シオフキガイの殻幅に対して計測を実施した。

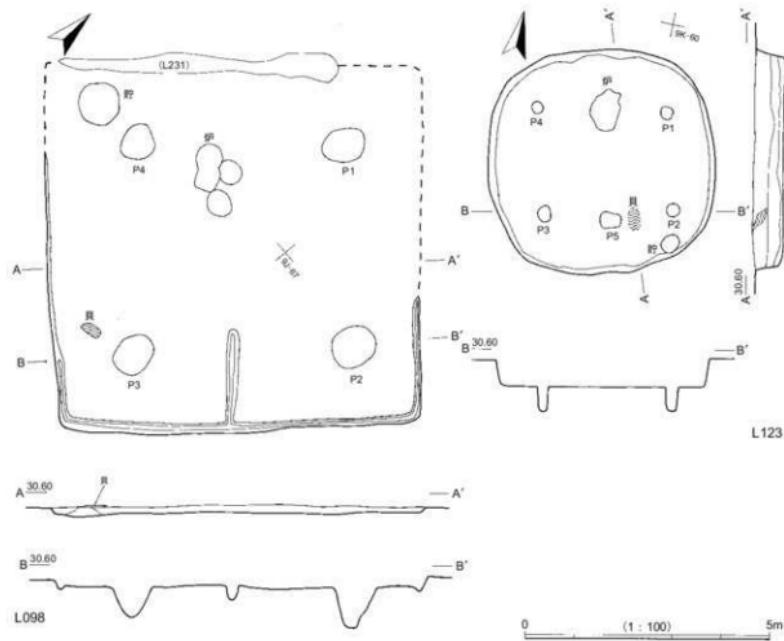
#### (2) 同定結果

第2表に示される様に、14科16種が種同定に至った。各サンプルの集計結果を第3表・第102図に示した。竪穴住居L102ではイボキサゴ、L198・314ではハマグリがそれぞれ多数を占めている。L277ではややイボキサゴがハマグリを上回るもの、個体数比ではこの2種の差はそれほど顕著に認められない。時期別にみて、弥生時代でのハマグリの占める率が高い点が注目される。

#### (3) 計測値

上記3種の計測値分布を第4表・第103図に示した。良好なサンプル数を得られた遺構は、イボキサゴが竪穴住居L102とL277、ハマグリがL277とL314であった。シオフキガイについてはサンプル数が不足していたため、平均値を示すのみに止めた。

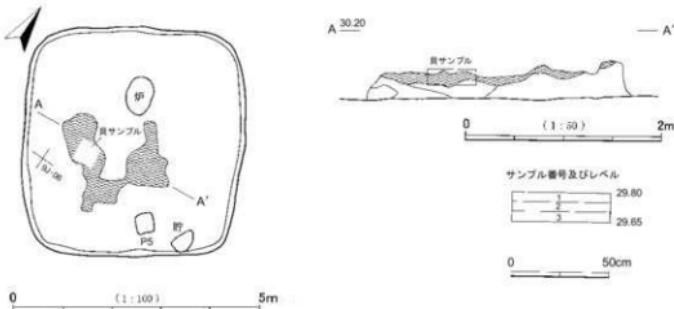
イボキサゴの殻高は、弥生時代の竪穴住居L102の方が古墳時代の竪穴住居L277よりも平均値が若干大



第100図 L098・123住貝層分布

きい。最大値には殆ど差が認められないが、L102では15.1mm～16.0mmの他に18.1mm～19.0mmにもモードが見られるようである。一方、L277では14.1mm～15.0mmにモードが見られ、L102と比べ最小値も若干小さい。また、この2軒の住居に共通して認められたのは、L102では15.0mm以下、L277では14.0mm以下の個体が殆ど出現しない点である。捕獲対象がある程度の大きさ以上の個体に限定されていたためと考えられる。

ハマグリの殻幅は、弥生時代の竪穴住居L314と古墳時代の竪穴住居L277では、平均値にそれほど差が認められない。L314の同一貝層内の2区と4区では数値分布の範囲は変わらないものの、分布パターンが若干異なる。2区では35.1mm～40.0mmと50.1mm～55.0mmにモードが見られるのに対し、4区では40.1mm～45.0mmにモードが見られた。L277では40.0mm～55.0mmの範囲に集中しており、40.0mm以下は殆ど出現していない。古墳時代では、ハマグリについてもイボキサゴと同様に捕獲対象が絞られていた可能性がある。



第101図 L198住居貝層サンプル採取位置

### 3 その他の動物遺体

#### (1) 資料

本節では8遺構および2グリッドから出土した脊椎動物遺体を報告の対象としている。同定は当財團所蔵の現生標本を用いて行った。椎骨、肋骨、指趾以外残存状態が良好であるにもかかわらず同定に至らなかった資料については、分類群に「未同定」と表記した。また、破損が激しく同定に至らなかった資料については、分類群に「種不明脊椎動物」「種不明陸獣（大型・中型・小型）」、部位に「同定不能」と表記した。この「種不明陸獣」について、本節では（大型）にはウマ、ウシ、シカ、イノシシ等、（中型）にはイヌ、キツネ、タヌキ、テン等、（小型）にはリス、ネズミ、モグラ等が該当するものとして分類および集計した。

#### (2) 同定結果

魚類・両生類・哺乳類を併せて6科3種が種同定に至った（第5表）。集計結果を第6表に示した。分類群ごとに出土内容を述べたい。

**魚類** 弥生時代の竪穴住居L198の貝層サンプルから出土しており、タイ科の歯を1点確認した。

**両生類** 古墳時代の竪穴住居L312のP5内部、10K-56・11K-03グリッドから出土している。それぞれ1個体分のカエル類の頭骨や四肢が出土しているが種同定には至っていない。この内グリッド出土分については、現生のものが混在した可能性が高い。

**哺乳類** 弥生時代の竪穴住居L034・198・314と古墳時代の竪穴住居L037・347、溝状遺構L250（時期不明）・L300（中世）で見られた。

モグラ科の下顎骨は溝L300から出土しているが、出土地点が不明であった。

ネズミ科の歯は竪穴住居L198の貝層中で1点見つかっている。

ウマは古墳時代前期の竪穴住居L037の覆土上層からは左大腿骨が1点出土しているが、発掘当時の所見では住居の帰属時期とは離れた後世のものと考えられている。溝L250の覆土中からは左桡骨と左中手骨が1点ずつ出土しており同一個体と考えられる。いずれも骨体の形成が進んでおり成馬であったとみられる。また、古墳時代前期の竪穴住居L347からは1個体分のウマの左右上顎歯列と下顎骨が検出しているが、住居壁際の覆土上層で見つかっており帰属時期は明らかでない。歯槽部などは若干出土しているものの、体幹骨等は確認されていない。上顎歯列と下顎骨は住居の内側から外側に一直線上に並んで出土しており、

第1表 貝サンプル一覧

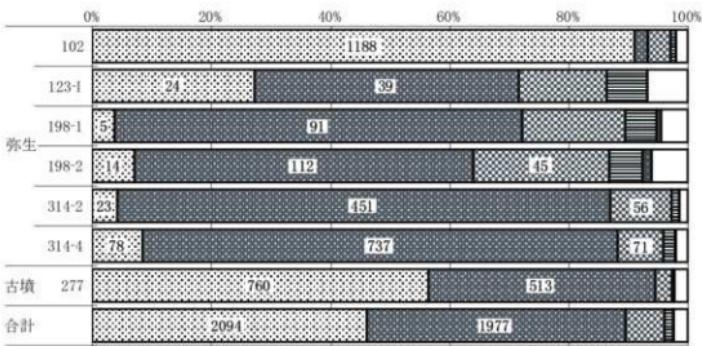
サンプル 番号	出現地 名	時期	グリッド	貝用			貝質サンプル			資料の内容			備考
				表面	幅(㎝)	厚(㎝)	採取法	カット数	体積	重量(g)	貝用サンプル資料	貝類住葉資料	
1028	聖火	海生	海相	10E-07	上層	2.0	15x15	10					貝サンプル採集していない
1031	聖火	海生	海相	10E-02	上層	2.0	20x40	15					貝サンプル採集していない
1037	聖火	古墳	海相	10E-15	上層	不明					●	●	
1053	聖火	古墳	海相	10E-03	露土中	不明					●		
1056	聖火	古墳	中相	10E-05	露土上	上層	20x20	5					貝サンプル採集していない
1098	聖火	古墳	前相	9E-06	露土上	上層	10x20	?	全量	全量	1	377	2600 150 ●
1105	聖火	海生	海相	9E-26	露土中	60x30	20	全量	全量	1	1277	3400 2000 ● ●	
1113	聖火	海生	海相	11E-09	露土	一般		不明			●		1区Ⅱ層 上層として点付
1123-I	聖火	海生	海相	10E-05	露土中	40x7	15	全量?	全量	17	922	6200 1430 ● ●	以降の平均厚度不明 層別分析なし他小群
1127-03	聖火	海生	海相	10E-26	露土中	不明					●	●	上層の中の層
1127-05	聖火	海生	海相	10E-29	露土中	不明					●	●	上層の中の層
1127	聖火	海生	海相	12E-06	露土中	不明					●		
1136	聖火	海生	海相	10E-96	上層	200x100	10	カット引 カット引	カット引	3	3050	12960 1120 ● ● ● ●	貝地帯に種子と共に
1220	謎	謎の層付		10E~10L							●		
1227	聖火	古墳	前相	12E-04	前相	100x30	30	全量?	全量	87	2571	13300 7200 ● ●	層ごとに全量採取されたが 層別分析なし他小群
1228	聖火	海生	海相	02-25	前相	50x10	10				●		同様の層は採取されていない
1300	謎	中相		01-08							●	カタシマ内一張	
1312	聖火	古墳	前相	10E-98							●		
1314	聖火	海生	海相	01E-01	前相	100x100	20	全量	全量	1	18177	113200 44000 ● ● ● ●	4区に分けてして全量採取 主に貝の塊合
1314-E	聖火	海生	海相	01E-01	前相			不明			●		上層の中の層
1316	聖火	海生	海相	02-79	露土	不明					●		
1336	聖火	古墳	前相	12E-02	露土中	不明					●		上層として点付
1343	聖火	海生	海相	02-01	前相	不明					●		貝地帯一張として採集 しません
1344	聖火	平安		02-90		不明					●		
1347	聖火	古墳	前相	02-71	露土	不明					●	●	位置不明
遺傳外 グリッパー				時期不明	9E-20	不明					●		グリッパー類
遺傳外 グリッパー				時期不明	10E-56						●		
遺傳外 グリッパー				時期不明	11E-03						●	グリッパー類	
遺傳外 グリッパー				時期不明	10E-01	不明					●	グリッパー類	

第2表 貝類種名一覧

腹足綱	原始腹足目	ニシキウズガイ科	イボキサゴ	<i>Umbonium (Suchium) moniliferum</i>
	中腹足目	カワニナ科	カワニナ	<i>Semisulcospira libertina</i>
		ウミニナ科		<i>Potamidiidae sp. Indet.</i>
		タマガイ科	ツメタガイ	<i>Glossaulax didyma</i>
新腹足目	アカキガイ科	アカニシ		<i>Rapana venosa</i>
	ムシロガイ科	アラムシロガイ		<i>Reticunassa festiva</i>
	エゾバイ科	バイ		<i>Balyonia japonica</i>
掘足綱	ツノガイ目	ツノガイ科	ツノガイ	<i>Antalis weintraubii</i>
二枚貝綱	フネガイ目	フネガイ科	サルボウガイ	<i>Scapharca subcrenata</i>
	ウグイスガイ目	イタボガキ科	マガキ	<i>Crassostrea gigas</i>
	マルスダレガイ目	バカガイ科	シオフキガイ	<i>Macra tra quadrangularis</i>
		マテガイ科	マテガイ	<i>Solen strictus</i>
		マルスダレガイ科	ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i>
			アサリ	<i>Ruditapes philippinarum</i>
			カガミガイ	<i>Phacosoma japonicum</i>
			オキシジミ	<i>Cyclina sinensis</i>
才才ノガイ目	オオノガイ科	オオノガイ		<i>Mya arenaria oonogai</i>
計	14科	16種		

第3表 貝類集計結果

	弥生							古墳		合計	%
	102	123-1	198	198	198	314	314	98	277		
-	46	1	1	2	3	2	4	1	1		
イボキサゴ	1188	24	5	14	2	23	78	760	2094	46.0%	
ハマグリ	29	39	91	112	4	451	737	1	513	1977	43.5%
シオフキガイ	50	13	23	45		56	71	38	296	6.5%	
アサリ	12	6	7	11		7	18	5	66	1.5%	
マガキ			1	3	1		1		6	0.1%	
その他	26	6	6	12	1	8	19	6	31	109	2.4%
合計	1305	88	133	197	8	545	924	1	1347	4548	100%
ウミニナ科	10	4	2	5		6	10			37	0.8%
アラムシロガイ	1								1	2	0.0%
カワニナ	3							1		4	0.1%
アカニシ								4		3	0.2%
バイ								2		2	0.0%
ツノガイ科										0	0.0%
サルボウガイ						1				1	0.0%
オキシジミ						1				1	0.0%
カガミガイ	10						1		10	21	0.5%
マテガイ	1	1	1	2						5	0.1%
ツメタガイ	1	1		1		1	2		17	23	0.5%
オオノガイ			3	2	1					6	0.1%
	102	123-1	198	198	198	314	314	98	277		
-	46	1	1	2	3	2	4	1	1		
イボキサゴ	91.0%	27.3%	3.8%	7.1%	25.0%	4.2%	8.4%	0.0%	56.4%	46.0%	
ハマグリ	2.2%	44.3%	68.4%	56.9%	50.0%	82.8%	79.8%	100.0%	38.1%	43.5%	
シオフキガイ	3.8%	14.8%	17.3%	22.8%	0.0%	10.3%	7.7%	0.0%	2.8%	6.5%	
アサリ	0.9%	6.8%	5.3%	5.6%	0.0%	1.3%	1.9%	0.0%	0.4%	1.5%	
マガキ	0.0%	0.0%	0.8%	1.5%	12.5%	0.0%	0.1%	0.0%	0.0%	0.1%	
その他	2.0%	6.8%	4.5%	6.1%	12.5%	1.5%	2.1%	0.0%	2.3%	2.4%	
合計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	



■イボキサゴ ■ハマグリ ■シオフキガイ ■アサリ ■マガキ □その他

第102図 貝種組成

第4表 貝類計測値

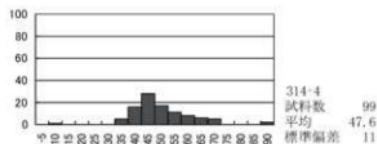
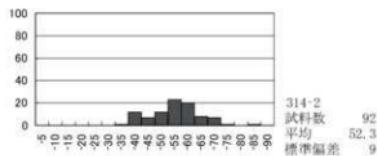
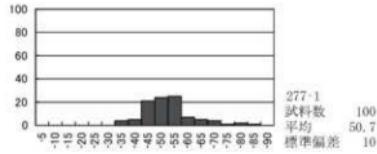
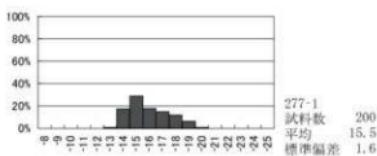
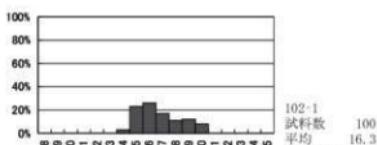
	102-1	277-1		
データ区間	頻度	頻度		
-8.0	0	0		
-9.0	0	0		
-10.0	0	0		
-11.0	0	0		
-12.0	0	0		
-13.0	0	2		
-14.0	3	35		
-15.0	23	58		
-16.0	26	36		
-17.0	17	30		
-18.0	11	24		
-19.0	12	13		
-20.0	8	2		
-21.0	0	0		
-22.0	9	9		
-23.0	0	0		
-24.0	0	0		
-25.0	0	0		
沈の総	0	0		

	102-1	277-1	198-2	314-4	全体
試料数	100	290	2	12	314
平均	16.3	15.5	14.2	16.6	15.8
標準偏差	1.6	1.6	0.3	1.0	1.6
最小	13.2	12.1	14.0	14.7	12.1
最大	19.7	19.6	14.4	18.2	19.7

	277-1	314-2	314-4	
データ区間	頻度	頻度	頻度	
-5.0	0	0	0	
-10.0	0	0	1	
-15.0	0	0	0	
-20.0	0	0	0	
-25.0	0	0	0	
-30.0	0	0	0	
-35.0	4	1	5	
-40.0	5	12	16	
-45.0	21	7	28	
-50.0	24	12	17	
-55.0	25	23	11	
-60.0	7	20	8	
-65.0	5	8	6	
-70.0	4	7	5	
-75.0	1	1	0	
-80.0	2	0	0	
-85.0	1	1	0	
-90.0	0	0	2	
沈の総	1	0	0	

	277-1	314-2	314-4	102-1	123-1	198-1	198-2	336-1	
試料数	100	92	99	3	2	7	7	7	8
平均	56.7	52.3	47.6	40.0	82.7	57.2	65.0	59.5	
標準偏差	19	9	11	2.4	27.4	18.4	13.5	16.7	
最小	33.2	34.4	6.0	37.8	63.3	39.4	43.2	38.9	
最大	92.4	81.3	96.1	42.7	102.0	87.0	80.5	83.4	

	102-1	198-1	198-2	277-1	314-2	314-4	336-1	全体
試料数	21	4	11	19	21	28	3	107
平均	46.0	44.8	49.7	49.5	47.5	46.9	41.1	47.3
標準偏差	2.6	3.3	4.1	3.4	3.8	4.4	3.9	4.0
最小	41.8	40.5	45.2	43.8	42.2	40.0	36.5	38.5
最大	51.2	48.4	96.5	56.2	57.4	54.9	45.6	57.4



第103図 貝類計測値分布

第5表 脊椎動物種名一覧

硬骨魚綱	スズキ目	タイ科	Sparidae sp. indet.
両生綱	無尾目		Anura fam. indet.
哺乳綱	食虫目	モグラ科	Talpidae sp. indet.
	齧歯目	ネズミ科	Muridae sp. indet.
	奇蹄目	ウマ科	<i>Equus caballus</i>
	偶蹄目	イノシシ科	<i>Sus scrofa</i>
	シカ科	ニホンジカ	<i>Cervus nippon</i>
計	6科	3種	

第6表 脊椎動物集計結果

遺構/グリッド	資料採取法	CUT 範囲(mm)	部位	分類群	部位	残存/形状	点数	NISP
L034	任意採集		貝殻一括	イノシシ	上顎遊離歯	右 歯冠部	1	1
				種不明脊椎動物	同定不可能	破片	1	1
L037	任意採集			ウマ	大腿骨	左 中間部～遠位端	1	1
L198	柱状～5cmカット	1	魚類	同定不可能	破片	2		
		2	種不明哺乳類	同定不可能	破片	2		
		4	種不明哺乳類	同定不可能	破片	1		
		9.52	ニホンジカ	頸椎(軸椎)	椎体片	1		
		2	タイ科	遊離歯	-	2	2	
			ネズミ科	遊離歯	歯冠、歯根部	1	1	
		4	種不明哺乳類	同定不可能	破片	8		
		3	種不明哺乳類	同定不可能	破片	3		
		2	種不明哺乳類	同定不可能	破片	4		
		4	種不明哺乳類	同定不可能	破片	1		
		9.52	種不明哺乳類	同定不可能	破片			
L250	任意採集		ウマ	中手骨	左 近位部～遠位端	1	1	
				腕骨	左 近位部～遠位部	1	1	
L300	任意採集		モグラ科	下顎骨	左 ほぼ完存	1	1	
L312	任意採集	PIT 5内	カエル目	対骨	右 腸骨部と対骨臼	1	1	
				指蹠骨	完存	1	1	
L314	全量採取	4	種不明哺乳類	同定不可能	破片	3		
L347	任意採集		ウマ	下顎骨	右 歯槽片、下顎歯	1	1	
					左 歯槽片、下顎歯	1	1	
			上顎	右 上顎歯	1	1		
				左 上顎歯	1	1		
11K-03	任意採集		カエル目	上腕骨	左 近位部～遠位端	1	1	
				大腿骨	右 完存	1	1	
				踵骨+距骨	右 ほぼ完存	1	1	
10K-56	任意採集		カエル目	対骨	左右 完存	1	1	
				指蹠骨	完存	1	1	
				上腕骨	左 完存	1	1	
				大腿骨	右 完存	1	1	
				左 完存	1	1		
			稚骨	ほぼ完存	5	5		
			頭蓋骨	後頭顱、後頭骨底部	1	1		
			尾椎	完存	1	1		
			棘骨+尺骨	左 完存	1	1		
			脛骨	左 完存	1	1		
			踵骨+距骨	右 完存	1	1		
				左 完存	1	1		
任意採集 合計						31	31	
全量採取 合計						3	0	
柱状～5cmカット 合計						25	3	
統計						59	34	

この状態で土ごと採り上げられたが、上顎歯列に関しては整理作業時には既に原位置を保っておらず、記録類からの復元も困難であった。下顎歯列は吻部を住居の外側に向けた状態で出土している。西中川らの年齢推定法（西中川編 1991）に基づき歯の計測を行ったところ（第7表），この個体は5才～6才馬であつたことが推定される。

第7表 ウマ上下顎歯計測値

番号 / 遺物 種別	部位	歯列	咬耗	計測値 (mm)																	
				P2		P3		P4		M1		M2		M3							
L	B	CH	L	B	CH	L	B	CH	L	B	CH	L	B	CH							
L347	75 35	下顎骨 左 (P2340123)	弱	(30.3)	13.5	(36.8)	28.1	14.8	—	26.3	13.6	—	25.2	13.1	16.4	25.0	12.2	59.6	26.1	10.8	52.0
L347	75 36	下顎骨 有 (P2340123)	弱	—	(13.9)	(35.5)	28.3	15.1	51.9	26.4	14.2	66.5	24.6	13.8	59.5	25.4	12.2	61.1	26.6	10.7	(36.9)
L347	75 37	上顎前 左 (P2340123)	弱	(26.5)	—	(41.6)	27.5	24.0	53.3	36.6	24.7	(59.2)	23.5	23.9	56.8	23.9	22.5	55.4	23.2	19.2	(36.4)
L347	75 38	上顎前 右 (P2340123)	弱	(25.8)	—	—	26.9	24.1	53.6	36.0	23.8	62.0	23.7	24.1	56.4	23.9	22.6	56.9	22.8	19.6	52.7

イノシシは、弥生時代の竪穴住居L034の貝層中から、右側上顎遊離歯が1点出土している。

ニホンジカは、竪穴住居L198の貝層サンプルから出土しており、第2頸椎の椎体片を1点確認した。

## 参考文献

- 西中川 猛・松元光春 1991 「V.遺跡出土骨同定のための基礎的研究」『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』pp.164-188 平成2年度文部省科学研究費補助金（一般研究B）研究成果報告書

### 第3章 まとめ

草刈遺跡は、茂呂谷津と村田川に挟まれた幅150m～400m、長さ1,500mの長い台地上に展開し、その面積は30haに及ぶ。今回報告したL区は、その長い台地の中間部から西側の地域に当たり、すでに報告書を刊行したK区（小林ほか2007）の西側、J区（小林2007）の南側に展開する地区になる。調査区内は比較的平坦で、地形的には目立った特徴は認められない。

当L区における成果の提示は、草刈遺跡の限定された地区における状況である。したがって、ここでの遺構群は草刈遺跡における一地域の結果を示しているにすぎない。この点はこれまでに再三述べてきたとおりで、総合的な所見は今後の課題となる。以下では、L区の集落の動向を時代ごとに概観するにとどめておきたい。

#### 1 繩文時代

繩文時代の遺構は、早期に属すると考えられる炉穴が1基と陥穴7基が検出された。これらの遺構からは、時期を限定し得る遺物は出土していない。後世の遺構覆土中などからは、早期・前期・中期の土器が出土している。また、石鎌、石鎌未成品、剥片類、打製石斧、磨製石斧、ほかに磨石等の礫石器が出土しているが、数量は僅かずつである。ほかには土器片に調整を加えた土器片錘が出土しているものの、7点が確認されたにすぎない。このような状況から、当地域での縄文時代の集落形成は、全般に低調であったと判断される。

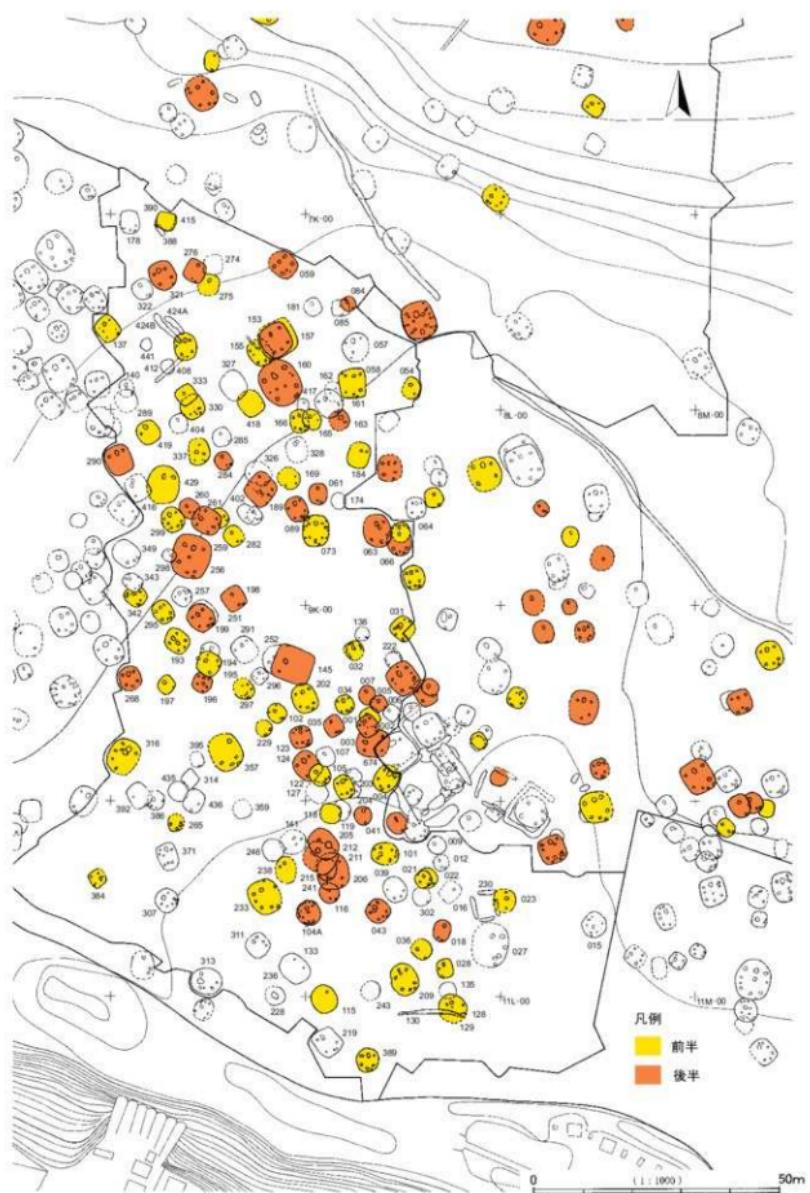
#### 2 弥生時代（第104～106図）

弥生時代の遺構は、竪穴住居162軒、方形周溝墓2基、溝状遺構1条である。ほかに時期細別が不可能な土坑が数基存在する。竪穴住居162軒の営まれた時期は、全て後期の期間内と考えられ、構築、廃棄、構築が次々に行われていたことになる。

草刈遺跡における弥生時代の集落展開については、周辺の遺跡も含め、すでに概略を示してきたところである（白井・神野2007）。本台地上における弥生時代集落の初現は、遺跡の西端部で検出された宮ノ台式期の環濠を伴う集落である。調査区ではF区とした地区で、眼下には村田川の沖積平野が広がり、対岸の台地上には菊間遺跡や大厩遺跡が立地している。西端部に検出された環濠は複数条存在し、西側に掘られた環濠よりも東側に位置する環濠が新しいと推定されている。そして後期になると、集落の範囲は一気に拡がるという状況が捉えられている。中期の段階では遺跡の西端部に限られていた集落範囲は、台地の東側に急速に拡大していく。

後期の竪穴住居分布密度が高くなる調査区は、I区、J区（小林2007）、K区（小林・麻生2007）、L区、M区である。さらに東側に当たるA区（小久賀ほか1983）、B区（高田ほか1986）にも集落の範囲は拡大していくが、C区（大谷・西野2004）、D区（小林・大谷2006）が東側の限界となり、弥生時代からその後の古墳時代前期に推移する。

L区の竪穴住居の検出結果は、後期の集落が遺跡の東側に拡がっていく途中の状況を如実に示しているといえる。検出した162軒の竪穴住居は、第104図に示したように、調査区全域に分布が見られる。重複する竪穴住居も多く、時間差をもって構築された状況が理解される。K区、L区の報告において行ったよう



第104図 弥生時代の竪穴住居分布図

に、ここでも暫定的大村直氏が示した「山田橋編年」(大村 2004a・b)を援用し、遺構の検出状況を概観しておきたい。その前に出土土器による時期区分について、概略を図示しておこう。

#### (1) 後期前半

弥生時代後期前半、大村氏の「山田橋編年」の久ヶ原式期をそれに当て、第105図に示した土器群等が該当すると考えている。ただ、図の掲載について断っておかなければならぬのは、第105図に挙げた遺構とその出土遺物は、L区における久ヶ原式期代表例として、単に遺構番号順の掲載であり、細別による配列は行っていない、という点である（以後第114図まで点線による区切りは同様）。したがって、図の中でも編年的前後関係が存在する。次に、ここで時間設定した土器の特徴について簡単に示しておきたい。

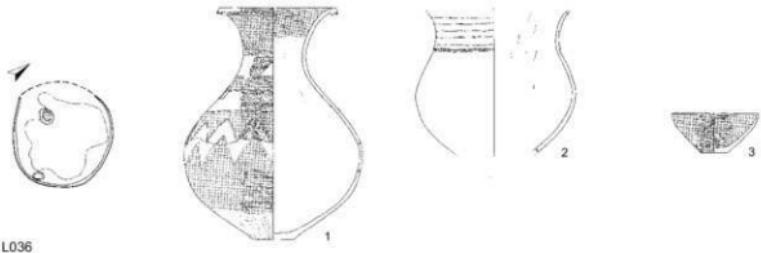
器種としては、壺、甕、鉢が主体であり、高环は少ない。壺は胴部に球状の張りをもち、肩部から頸部にかけて緩やかなカーブを描いて移行し、口縁部は緩やかに開いて折返し口縁になる個体が多い。頸部の最小径になる部位から肩部の間、さらに肩部に沈線区画の帯繩文が認められ、胴部上位に沈線区画の山形文が施されたり、L115-2、L342-1のように沈線区画による繩文帯が施されたりする。外面の装飾部分以外は赤彩が施されている。甕は、平底を呈して胴部の中位から上に張りをもち、胴部と頸部との境に段を設け、頸部から口縁部にかけて緩やかに聞く器形が大部分である。口唇部に押捺が加えられる部類が多く、頸部は輪積装飾が施されたり、単にミガキによって仕上げられる類がある。頸部と胴部の境に設けられた段状の部分には、刻みや押捺が加えられている例が多くを占める。鉢はL036から出土しているように、全体にミガキが施され赤彩が行われている個体と、口縁部に沈線区画の繩文帯が設けられる部類が認められる。以上、後期前半の久ヶ原式に認められる特徴を示したが、宮ノ台式の直後に続く久ヶ原式の古い部分は顕著ではない。

#### (2) 後期後半

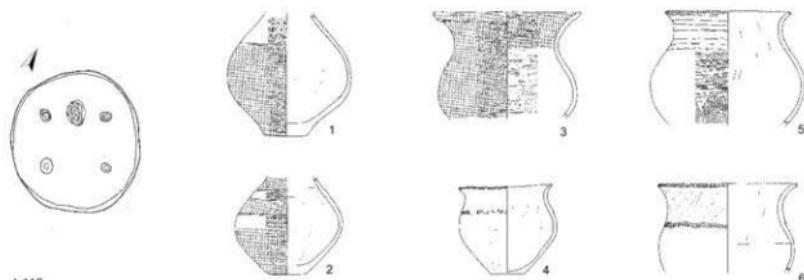
統いて後期後半の様相についてふれておこう。久ヶ原式に続く土器群が大村編年に則すれば山田橋式になり、草刈遺跡における編年も暫定的にそれにしたがっている。

器種は、壺、甕を主体にして、無頸壺、高环、鉢が認められる。壺は胴部中央部に張りをもち、球状形になる傾向がある。肩部から頸部にかけて緩やかで比較的短く立ち上がるL084-1・2のような部類と、肩部から急角度で頸部に移行して、胴部と頸部が明瞭に分かれるL041-1のような壺が見られる。口縁部は折返し口縁や複合口縁、素口縁となる。頸部から肩部に上下に結節を伴う繩文帯が施され、胴部上半にも同様な繩文帯が存在する例を多く認める。また、L153-2のように胴部に沈線区画の山形文を施す例も認められる。少数ではあるが、L260-1のように、口唇部から頸部にかけて幅広く繩文帯をもつ壺も存在する。甕は、平底を呈して胴部の上半部に最大径をもち、頸部から口縁部にかけて緩やかに聞く。口唇部に押捺が施され、頸部と胴部の境に段をつくっているが、段が存在しない例も散見される。全体的な外見では、口径に比して器高が低く押さえられている。鉢は、平底からやや内彎するように立ち上がり、口縁部は折返し口縁を呈するか素口縁となる。前者の場合は口縁部に繩文が施され、後者はミガキで仕上げられている。高环の保有率は低く、保存状態のよい個体が少ない。环部は鉢と同様な形態や装飾が施され、脚部は開きながら下降して開き、环部との接合部に突起が回っている。第106図のL153-6の様相が、後期後半の中でも新しい部類になるとを考えられる。

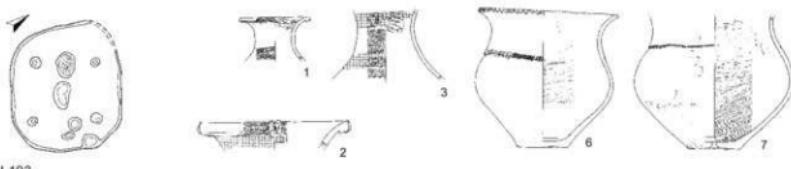
以上のような時間軸を設定した上で、遺構の在り方についてふれていきたい。先述したように、後期前半でも、宮ノ台式期の直後に継続する久ヶ原式期の古い段階の竪穴住居の存在は認められない。久ヶ原式



L036



L115

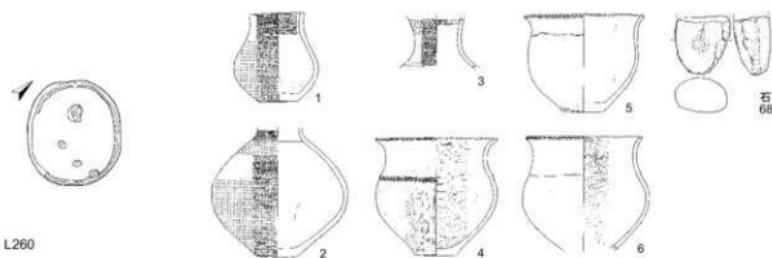
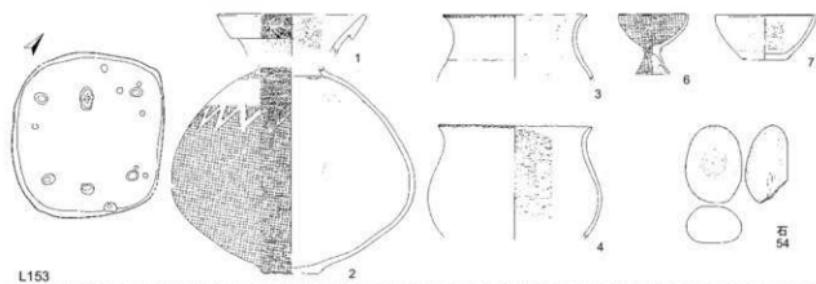
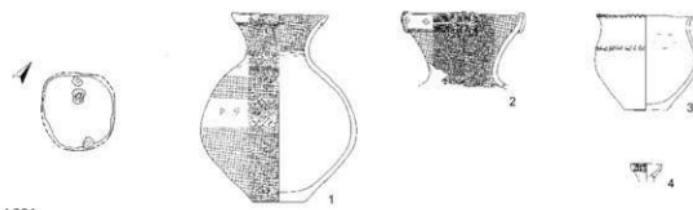
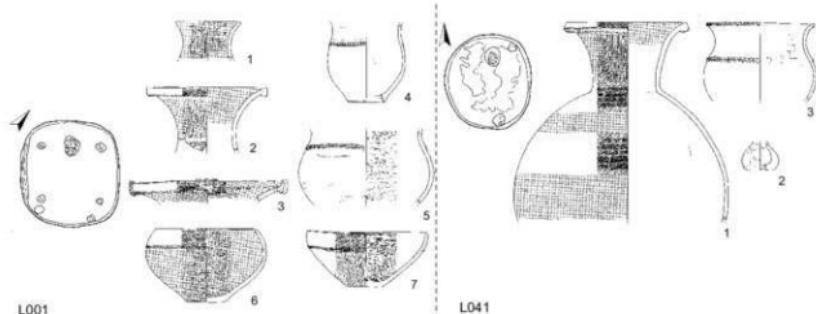


L193



L342

第105図 弥生時代後期の土器（1）



第106図 弥生時代後期の土器（2）

期に入つてしばらくたつて、本L区に竪穴住居が構築されてくると見られる。L区は比較的平坦な地区で、地区全域に広く分布が確認される。この時期に比定可能な竪穴住居は50軒前後となり、山田橋期に比定した40軒前後を上回っている。残る72軒については、時期決定に有効となる遺物が乏しく判断できない竪穴住居となる。L区東側の調査区であるK区においては、時期比定を行ひ得た92軒の中で、久ヶ原式期が19軒に対して山田橋期が73軒という結果であった（小林 麻生 2007）。この状況から、久ヶ原式期における集落規模拡大経過を反映した状況と捉えることができる。集落の規模が、西側から東側の区域へと、時間経過と共に拡がっていく、その中間過程を示す地域といえよう。第104図に挙げた黄色の竪穴住居群がこの時期に構築されているが、当然それぞれに前後関係を有している。久ヶ原式期の具体例を示すと、L 028・034・036・058・073・101・102・115・137・193・195・197・202・209・233・275・280・295・299・316・342・357・389・419等が該当すると考えられる。分布状況は調査区全域に展開し、特定の場所に集中するような傾向は捉えられない。しかし、大グリッド9Kの周囲には竪穴住居の構築が認められず、あたかも竪穴住居で囲まれた広場のような空間が設けられていた状況が見られる。

この時期の竪穴住居の形態には円形、楕円形と胴張隅丸長方形が多く存在し、胴張隅丸方形も認められる。主軸方向を北からやや西に向け、4か所に柱穴を配置する例が大半である。また、施設として貯蔵穴の設置も主流となっている。規模については、面積の推定可能となる竪穴住居の平均では、18.2m<sup>2</sup>という結果が得られている。平均床面面積の前後となる規模が一般的であるが、その半分以下の面積にとどまるL 021・265のような小型の竪穴住居が存在する一方で、L 233・316・429などの2倍以上の面積を有する大型の竪穴住居もある。ただ、小型にせよ大型にせよ少数で遺物の出土状況においても特殊性は見いだせない。

遺物については、各住居とも遺物量、特に土器の量が少ない点を第1に指摘できる。この状況は、後世の造構に破壊されたことによって、本来存在していた遺物が失われたという推測と、廃棄時点で遺物が僅かしか残されていなかつたのである。造構の遺存状況が良好である例においても、遺物点数が少量であることから、後者の推測が有力になるとと考えられる。

土器以外の遺物としては、砥石の出土が目立っている。ただ、石器類や金属製品の出土率が低く、何を対象にした砥石であるのか不明である。あるいは砥石に比定した石器・石製品の用途が、砥石とは別にあつた可能性について検討する余地も十分にある。石製品は少なくL 115から管玉が出土しているにとどまる。土製品では、L 115・209で勾玉形が出土している。また、L 233からは勾玉形のほかにいわゆる鉛形土製品と紡錘車が出土している。金属製品としてはL 004から銅鏡の破片が出土しており注目される。人工遺物のほかには、焼失住居から出土した焼土や炭化材、L 034・102から検出された貝ブロック等が存在する。

次に山田橋期の状況について概観していく。竪穴住居は前段階から引き続き調査区内に広く展開する。ただ、数地点に反復して竪穴住居が構築された状況が看取される。また、久ヶ原式期に存在した9K周辺の広場状空間は維持されているように見える。この段階の竪穴住居を挙げると、L 001・005・035・041・061・084・089・104A・123・145・153・160・189・196・198・199・205・260・268・321等が該当してくれる。竪穴住居の形態は、円形、楕円形、胴張隅丸長方形、胴張隅丸方形が存在し、前段階に比して円形を呈する竪穴住居の占める割合が減少している。主軸方向は大部分が北から西側に向く傾向が強いものの、一部は東側に振れている。貯蔵穴の保有率は高く、南東側の壁下に接して設けられているのが一般的である。入口に伴う梯子の基部を埋設した梯子穴は、主軸線上の炉対面から検出されている竪穴住居が多いが、円

形を呈する小型の竪穴住居には検出されない状況がある。炉は1基が設置されるが、L063・104Aは2か所から検出されている。

この時期に比定し、床面面積の測定がある程度可能であった竪穴住居を対象に、床面面積の平均を求めたところ、 $21.8\text{m}^2$ という結果であった。前段階と比較すると平均値で $3.6\text{m}^2$ 増えているが、あくまでも時期比定が可能であった竪穴住居での対比である。しかし、すでに報告したK区やJ区においても、久ヶ原式期よりも山田橋期段階で竪穴住居の面積が微増する傾向が認められたので、後期後半段階で規模の設定に変化があったと考えてよさそうである。その契機については現時点では明らかでない。

竪穴住居からの出土遺物量は少ない。これは久ヶ原式期から続く傾向として捉えられる。例外的に、L123のように多量の土器を出土する竪穴住居も散見されるが、土器の大部分は覆土中から出土した古墳時代前期の遺物で占められている。このような出土状況は、草刈遺跡内の各調査区でも確認されており、古墳時代前期における廃棄の在り方の1つとなっている。

土器以外の出土遺物では、L160から磨製石斧の欠損品が出土し、L104Aから土製勾玉が検出されている。ただ、磨製石斧については刃部のみの欠損品で、縄文時代に帰属する可能性を残している。また、前段階よりも減少傾向にあるが、砥石を出土している竪穴住居も認められる。L199・290からは青銅製品の破片が出土している。人工遺物のほかには焼失住居から焼土や炭化材が出土している。

後期後半に位置づけられる遺構として方形周溝墓と溝状遺構が存在する。方形周溝墓1基は、調査区の北西側から検出され、単独で造営された状況を呈している。すでに報告したK区における在り方は、数基の方形周溝墓が2群に分かれて墓域を成していたので、それらとは異なった様相を呈している。本文中に示したように、四隅の切れるタイプと見られるが、検出したのは2方向の溝で、構築時に4条の溝が埋んでいたという確証は得られていない。この埋葬施設と考えられる土坑が、方台部の中央部に当たる位置から検出されたL441になり、副葬品と考えられる螺旋状鉄釧が出土している。今後報告を予定しているI区においても鉄釧が出土しており、銅釧とともにこれから検討課題としておきたい。

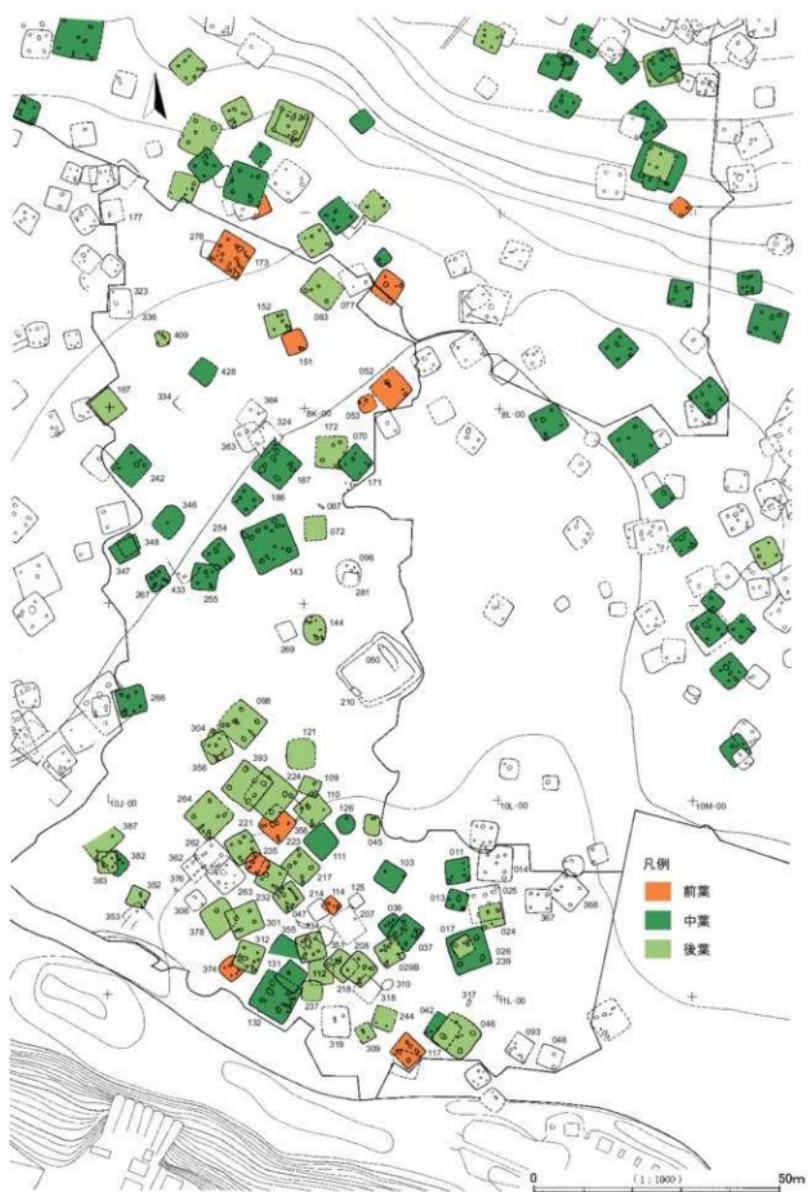
V字溝と考えられる溝状遺構が調査区の南側、村田川を望む台地の南縁辺で検出されている。L130溝状遺構で、これを弥生時代のV字溝と判断した根拠は、溝の断面形態と検出された位置によるところが大きい。これまでに環濠あるいはV字溝として報告してきた溝は、調査時点からそのように判断して調査を実施した遺構であるが、本溝については、整理作業段階で判断を下した。約13mの長さに検出されたにとどまるが、東西に延びていた可能性を残している。時期的にはK区のK600、J区のJ500の2条のV字溝と同時期と考えられる。これまでの推測に基づけば、久ヶ原式期の末期に掘削され、山田橋期の初期に埋まったと考えられる。

### 3 古墳時代（第107～113図）

上述したように弥生時代の集落が、西端から東側に拡大する中で、L区は途中経過の状況を示していた。その流れは古墳時代前期へと継続し、前期の間には集落が遺跡全域に拡がりを見せる。ここでは、古墳時代を大きく前期、中期、後期に区分して記載を進め、本区域内における集落の消長を追っておきたい。

#### （1）前期

前期に関しては、時期区分を草刈編年（加藤・高田・小久賀・田中 2000）に即して見ておきたい。ただし、草刈編年が古墳出土の土器を主体に編まれた関係から、集落出土土器とは一致していない状況もある。この点については、草刈編年の中でも「古墳出土土器の構成や造りは集落等と異なる」と、断わりが記され



第107図 古墳時代前期の堅穴住居分布図

ている。したがって、将来的には集落出土土器と古墳出土土器を再検討した上で、改訂「草刈編年」を提出する必要があるが、ここでは暫定的に既成の区分にしたがうこととする。

古墳時代の出現期である草刈Ⅰ期に比定した竪穴住居は、L173・223のほか、L052・053・114・117・151・235・374等と考えられ、比定可能な竪穴住居軒数は少ない。L区におけるこの時期の竪穴住居に伴う土器は、壺、甕、高坏等になるが、出土点数が少なく実態を示す資料としては乏しく、詳細を提示するに相応しい地区とはいえない状況である。資料的には断定して述べるには難があるが、比定した竪穴住居の分布を見ると、閑散とした状況を呈しているといえよう。草刈Ⅰ期段階の竪穴住居は、弥生時代から継続するように、E区（小林 大谷 2006）ではやや活発な集落形成が認められ、本調査区よりも東側の地域において、竪穴住居の構築軒数が多くなる傾向が認められる。

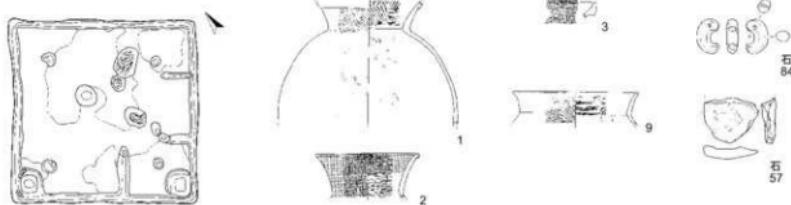
竪穴住居の平面形態は、胴張隅丸長方形、胴張隅丸方形、隅丸方形、方形が存在し4か所に柱穴を配置し、貯蔵穴を設けるほかに、L223にはベッド状遺構が存在する。床面面積の測定が可能であった竪穴住居の平均は、29.2m<sup>2</sup>であった。

古墳時代前期中葉の草刈Ⅱ期には、竪穴住居が調査区のほぼ全域に分布するようになる。この時期の土器組成には、小型壺、壺、器台、高坏、甕等の存在が明らかである。第108図に示したように、小型の壺は小さな底部をもち、体部と口縁部が明瞭で、口縁部は幾分内彎気味に体部高よりも高く開きながら立ち上がっている。壺は有段口縁となる部類が認められる。高坏は坏部がやや内彎するように開き、脚部は裾部をなだらかに括げている。甕は球状の胴部となる部類が多く、口縁部は「く」の字状に外傾する。胴部はハケメ調整が多く、内面口縁部も横方向のハケメが施されている。

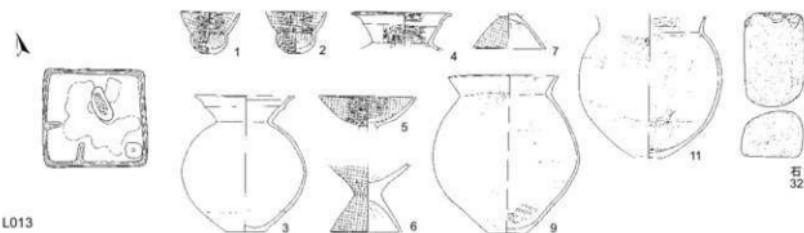
草刈Ⅱ期と考えられる竪穴住居は、L011・013・026・037・038・042・070・103・111・126・131・132・143・159・176・187・188・242・254・255・266・267・346・347・348・355・382・428等が該当すると思われる。ただし上記の竪穴住居間での重複も存在し、同一時期に存在していた竪穴住居はさらに限定されるが、草刈Ⅰ期と比較し高密度に分布することは明らかである。竪穴住居の平面形態は、隅丸長方形、隅丸方形、方形が認められ、隅丸方形、方形の形態が大部分を占めている。主軸方向は北から西に向く傾向が強いが、一部は東側に向いている。柱穴は対角線上の4か所に配置される例が一般的で、柱穴の認められない竪穴住居の存在も少数認められる。床面面積の平均は31.0m<sup>2</sup>で、前段階からやや増加傾向を見せているが、目立った変化ではない。

土器以外の遺物では、L037・103から出土した銅鏡、L143から出土した指輪状青銅製品が注目される。また、人工遺物以外では、焼失住居から焼土や炭化材が検出されている。

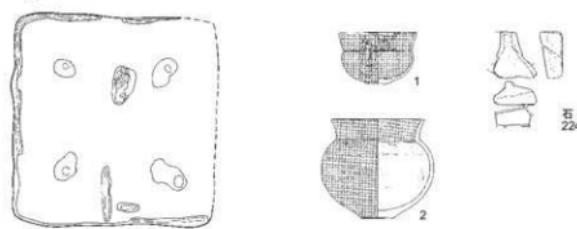
続く草刈Ⅲ期も全域に竪穴住居の分布が認められ、特に、調査区の南側、9J・10J・10Kグリッドに重複した状況が認められ、編年の細分が可能となる様相を呈している。この時期の土器様相については第109図に示したように、器種では小型壺、壺、器台、高坏、鉢、甕、瓶等が認められる。小型壺は、丸底や径の小さな底部をつくり、口縁部はやや内彎して立ち上がり、胴部最大径より大きな口径となる。壺は頸部で「く」の字状に外傾する素口縁や有段口縁が存在する。器台は本時期には明らかに組成の一員に含まれている。器受部の端部が上方に折れる部類と、半球状を呈する例が含まれる。高坏は草刈Ⅱ期とは大きく変わる。坏部は外面下部に棱をつけ、口縁部は直線的に開く傾向が顕著になる。また、脚部は中実柱状脚と中空脚の2形態の存在が明瞭になっている。それに対し、器台や前段階の高坏のように坏部から「ハ」の字状に開く脚形態は影を潜めてくる。甕は球状を呈するかやや卵球状になり、口縁部は「く」の



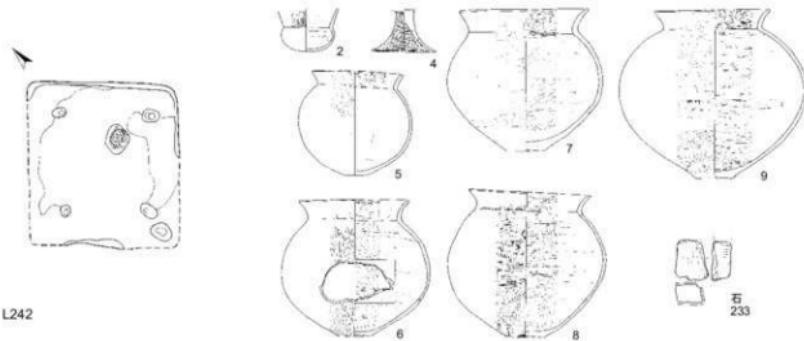
L173



L013

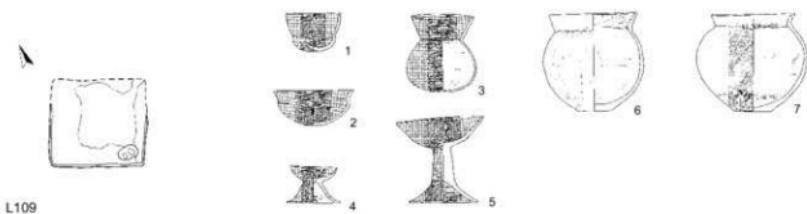


L132

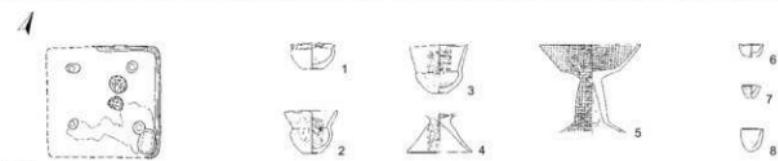


L242

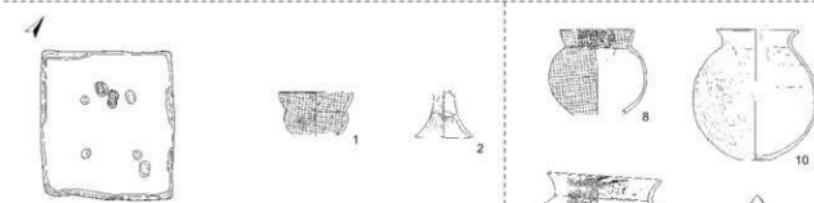
第108図 古墳時代前期の土器（1）



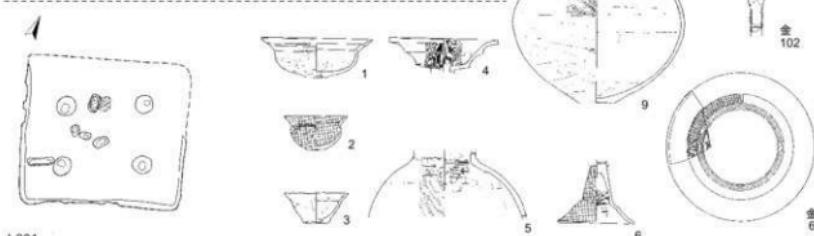
L109



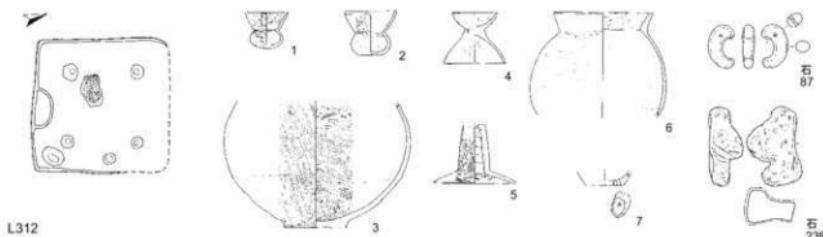
L152



L167

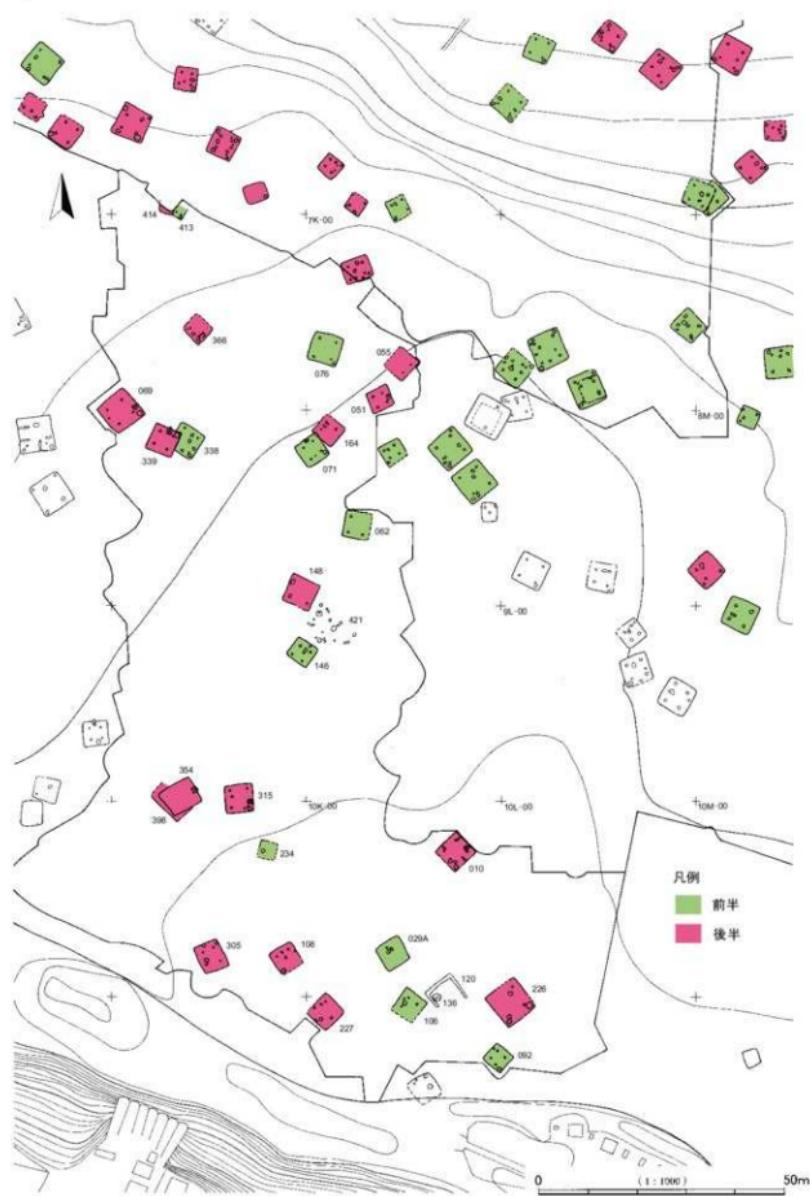


L301



L312

第109図 古墳時代前期の土器（2）



第110図 古墳時代中期の竪穴住居分布図

字状になるか緩やかに外反する。

本段階に比定した竪穴住居はL024・029B・045・046・047・072・083・098・109・110・112・121・134・144・152・167・208・217・218・221・224・232・237・244・264・301・304・309・312・352・356・378・383・387・393・409等である。竪穴住居平面形態は隅丸方形、方形が主体で、長方形、隅丸長方形、楕円形、不整形が僅かずつ存在する。主軸方向も大部分が北から西に振れ、少数が東に向いている。床面面積については、L409の(7.06m<sup>2</sup>)～L224の(63.50m<sup>2</sup>)と、大小様々が存在している。それらを平均すると30.1m<sup>2</sup>で前段階とほぼ同様となる。竪穴住居の中で鍛冶炉を設け小鍛冶を行うという、特殊な性格を有していたL301以外は、機能面でほかと明確な特徴を見いだせる遺構は認められなかった。

土器以外にはL029B・098・301から銅鏡が出土し、L312等からは滑石製勾玉が出土している。ほかに管状土錐も認められる。焼失住居の可能性がある竪穴住居が大部分を占め、焼土や炭化材の出土が目立つており、本段階の特徴となっている。

古墳時代前期に比定される遺構に方墳が存在する。すでに盛土は失われ、埋葬施設と考えられる土坑も遺存状態が不良であった。ただ、周溝内からは草刈Ⅲ期の様相が窺われる土器が多量に出土しており、周溝内のL210埋葬施設の覆土上層出土の草刈Ⅰ期に比定される土器との間に、明らかな時間的な隔たりが認められる。大きく2時期に分離可能である土器群と、方墳の造営時期とをどのように解釈するのか。周溝、埋葬施設、周溝内埋葬施設とそれぞれ個別の再検討を含め、今後の課題としたい。

## (2) 中期

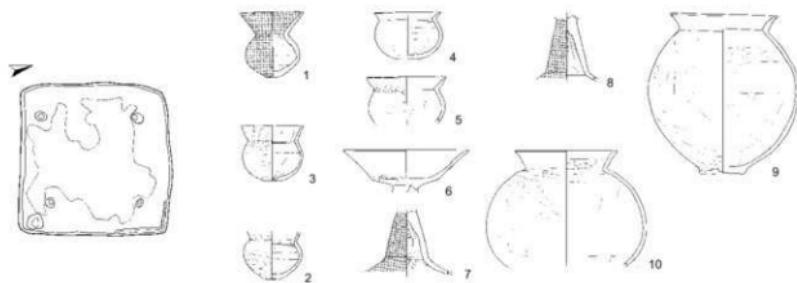
古墳時代中期は、これまでのように便宜的に环の出現するまでを前半として、土器組成に环が加わった以降を後半としておきたい。

前半段階の土器様相は第111図の上段に図示したL076・106等を代表とし、器種は壇、壺、高环、甌が存在する。器台も含まれると考えられるが、顕著な存在ではない。壇は体部が球状を呈し、口縁部は直線的に外傾して開いている。高环は环部の下位に稜を設け、脚部は中膨らみを呈し、下位で急激に折れるようすに据部に移行する。甌は球状の胴部が主体で、口縁部は「く」の字状に折れて開く部類が主体で、緩やかに外反する類も認められる。外面調整はハケメよりもヘラナデによって仕上げられる例が多くを占めている。

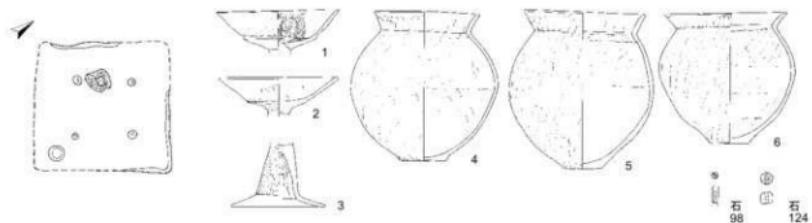
この段階の竪穴住居は、L029A・062・071・076・106・146・234・338・413等が該当する。前期の後葉と比較し衰退傾向が顕著に現れている。第110図に図示したように、竪穴住居の分布状況は閑散としており、この段階の中では重複関係は存在しない。平面形態は方形が主体で、少数が隅丸方形を呈している。主軸方向は大部分が北から西に振れ、東に振れる例も存在する。施設の配置が明らかになった9軒では、7軒に貯蔵穴の存在が確認され、いずれもコーナー部に設けられている。平均床面面積は25m<sup>2</sup>弱で前段階と比較して小型化しており、最大のL076でも34m<sup>2</sup>強にとどまっている。

遺物は土器を主体としている。L106からは石製玉類が出土しているが、目立って多く出土する遺構は存在しない。焼失住居からは焼土や炭化材が出土している。

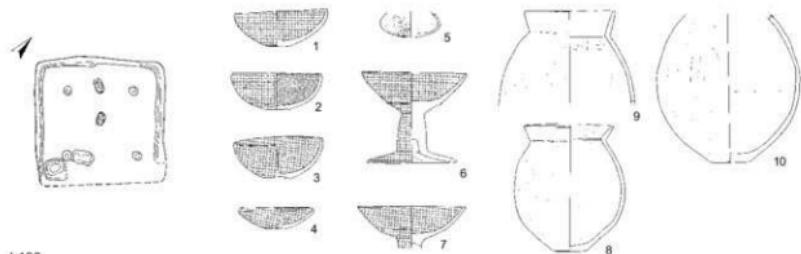
後半段階は土器組成に环が加わる点が大きな指標となる。第111図下段から第112図L339までがこの段階の特徴を示している。例示したように、环、椀、鉢、壺、高环、甌、手捏土器が器種として存在する。また、この中では、L108から出土している土器群が古相を示している。古段階の环は、小さな底部から内彎して立ち上がる体部へ移行し、口縁部も、やや内側を向いている。底面の中央部は凹状となる場



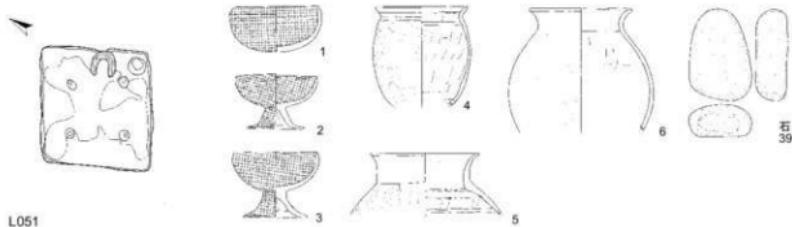
L076



L106

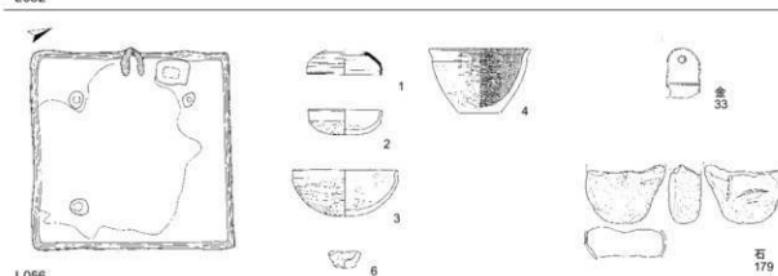
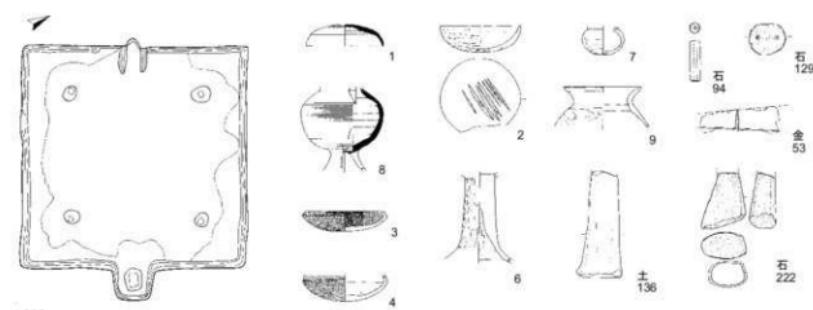
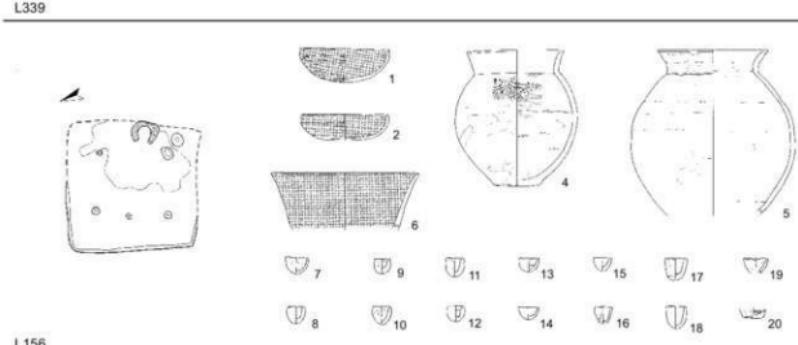
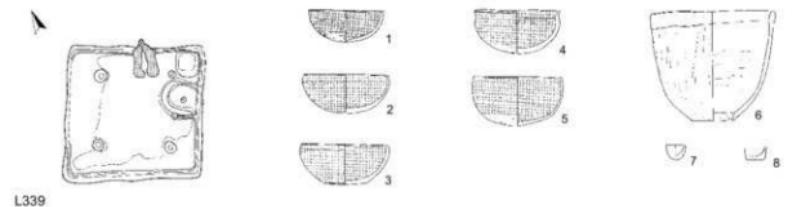


L108



L051

第111図 古墳時代中期の土器（1）



第112図 古墳時代中期の土器（2）・古墳時代後期の土器

合が多く、底径も小さくつくられる特徴がある。壺は小型の壠が僅かに残存する。高杯は杯部が直線的に開く傾向が継続され、脚部は中膨らみのエンタシス状を呈し、柱部が中実脚と中空脚となる個体が存在するようである。甕は長胴化の傾向がますます進んでいる。ただ、口縁部は「く」の字状に折れる形状と緩やかに外反する2者が存在する。さらに新しくなると、杯は丸底になり、体部が内擣して立ち上がり、全体に深いつくりになってくる。また、大部分が内外面の全面に赤彩が施されている。甕は長胴化と外面ヘラケズリ調整が顕著で、甕は単孔式でバケット形が存在する。

中期後半段階、すなわち杯出現以降と考えられる竪穴住居は、L010・051・055・069・108・148・164・226・227・305・315・339・354・366・398・414等である。分布状況は調査区全域に散在し、L354とL398は重複している。この例や上述の土器様相からも、後半段階は細別が可能となる。そして土器様相に加え、この時期におけるカマドの設置も、新しい時代の波として捉えられ、竪穴住居構造においても画期として位置づけられる。カマドが設置される竪穴住居は、L051・069・315・339・354であり、本調査区内ではいずれも中期後半でもさらには新段階である。

杯出現以降の竪穴住居の形態は隅丸方形と方形で、カマドが存在する竪穴住居は方形が主体である。柱穴は4か所に配置され、コーナー部に貯蔵穴を設置する例が多い。床面面積の平均は29.3m<sup>2</sup>で、中期前半期と比較して増加している。

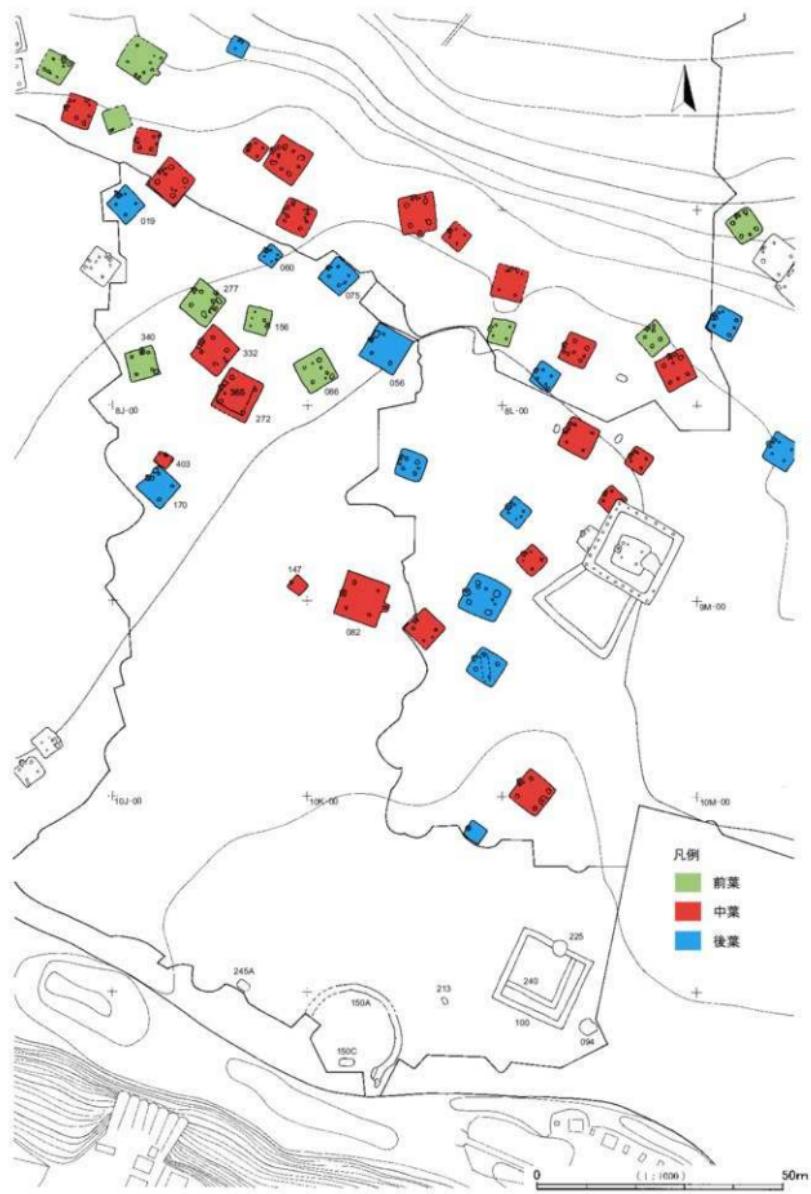
### (3) 後期

古墳時代後期は、須恵器模倣の土師器杯の出現以降を指標とし、竪穴住居は15軒がこの時期に比定される。第113図に示したように、後期をとおして竪穴住居の分布域は、台地の中央部から北側に寄っており、村田川に面するというより茂呂谷津に沿って展開している状況が窺われる。調査区内の15軒については、時期差をもって構築されているので、次にこの視点から概観していこう。

須恵器模倣の土師器杯が組成に加わる段階は、中期資料に例示したL051の後に、時間を経ずして訪れると考えられるが、L区内ではこの時期の良好な資料は見当たらない。後期前葉の資料として、第113図にL156を取り敢えず挙げておきたい。この段階の器種は、杯、高杯、壺、鉢、甕、甕等が存在すると見られる。杯は丸底で体部と口縁部の境に稜があり、口縁部は上方に立ち上がるか、やや内傾し、内外面に赤彩が施される。甕は胴部に卵球状の膨らみをもち、口縁部は頭部から「く」の字状に、折れて外傾するか、緩やかに外反している。甕の好例を図示できないが、単孔式の大型甕となってくる。

この段階はL086・156・277・340で、いずれも調査区の北側に集中するように分布している。柱穴を4か所に配置し、主軸方向はL086と156が東側に振れ、ほかの2軒が北から西に傾いている。貯蔵穴は全てに設けられている。

次の段階はL082に代表される。土師器杯は模倣杯の初期段階と比較して浅くなる傾向が認められると共に、口縁部が鋭く内傾する部類も認められる。大きな特徴は、内外面の黒色処理である。前段階であるL156と本遺構との間には、編年的な断絶が存在すると見られる。したがって、本調査区から竪穴住居の存在が消えてしまった状況も考えられる。その上で一応後期中葉段階として位置づけておきたい。この時期の竪穴住居にはL082・147・272・332・403の5軒が該当すると考えられる。平面形態は方形が主体で、L403以外は主軸方向を北から西に向いている。床面面積はL403の7.4m<sup>2</sup>～L082の73.2m<sup>2</sup>までと、小型や大型など一様でない状況がある。最も大型であったL082は、カマドの対向方向に張出部を設けそこに貯蔵穴を設置している。この段階に特徴的に出現する住居形態である。



第113図 古墳時代後期の竪穴住居分布図

後期後葉は模倣坏の小型化への傾斜が1つの指標になるであろう。この時期の竪穴住居に比定されるのは、L019・056・060・075・170である。それぞれ距離をおいて分布し、存在期間が同時期であった竪穴住居は、さらに限定されてくると考えられる。この時期の5軒は、全て方形の平面形態を呈し、主軸方向を北西に向いている。L056はカマドの右側に貯蔵穴を設けているが、ほかは貯蔵穴が設置されていない。本時期における竪穴住居内施設の画期は、貯蔵穴の衰退・消滅といえる。後期後葉の土器以外の遺物では、L060・170から刀子が出土しているほか、5軒全てから出土した鉄製品の存在に注目しておきたい。

本時期の遺構としては、ほかに2基の古墳が検出されている。円墳のL150Aは調査区の南側に所在し、周溝の一部と埋葬施設が検出されたことによって、古墳の存在が明らかになった。草刈遺跡における古墳の分布は、すでに報告しているように、A・B・C・D・H区に展開する方墳を主体とした前期古墳群と、南東部側の尾根上に分布する後期の円墳群、その中间地域の前方後円墳をはじめとする保存区の古墳群と、時期によって造営地域が分かれている傾向がある（白井・神野2007）。それに対して、本古墳は単独であり、周辺にまったく古墳は存在しない。埋葬施設は箱式石棺で、耳環2点と銅鏡と見られる青銅製品の一部が出土している。周溝を含め須恵器や土師器の出土が無く、明確な時期決定の根拠をもたないが、後期に帰属すると考えられる。もう1基の古墳はL100・240・225の方墳である。埋葬施設は、周溝とからんで検出された土坑状の施設が該当すると見られ、本来は天井部を有する地下室構造であった可能性が高い。終末期の古墳として位置づけられよう。

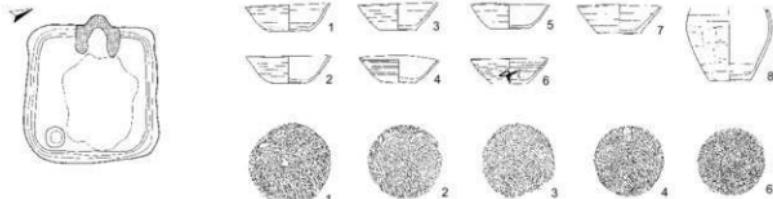
#### 4 平安時代以降（第114図）

古墳時代後期、模倣坏を伴う最後の段階には、調査区内に竪穴住居の姿が見えなくなる。連綿と続いた集落形成は7世紀末に一旦終息するような様相を呈する。その後8世紀代を経過しても集落は途絶えたままで、竪穴住居の構築が再び見られるのは、平安時代に入ってからである。

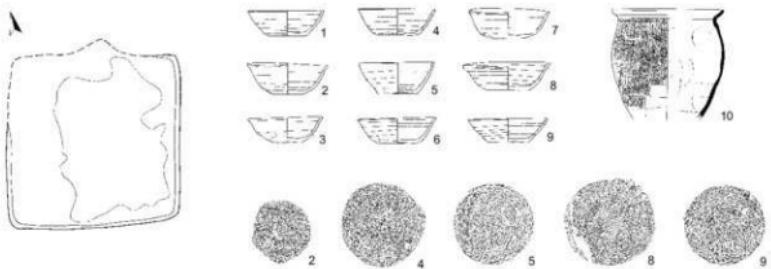
この時期に比定した竪穴住居は、L033・044・065・068・074・078・079・080・081・088・097・142・154・168・182・183・185・191・192・247・253・271・273・279・283・293・294・329・341・344・345・361・379・422の34軒である。第82図に示した分布図のように、調査区の中央部・すなわち台地の中央部に比較的集中して営まれる状況が見られ、西側の調査区であるI区にもその分布域が拡がる状況が明らかになっている。

出土遺物については、第114図に図示した。出土土器の器種は、土師器の坏が主体になり、甕、皿、須恵器壺等が認められる。土師器の坏は、底部回転糸切り痕をそのまま残す個体が多く、一部は底部の中央に回転糸切り痕を残している。体部下端はヘラケズリが施されるものよりも、ヘラケズリを行っていない方が多く認められる。L065-2・6のように内面にヘラミガキを行い、さらに6には黒色処理が施されている土師器坏も認められる。L154-13のような体部下端にヘラケズリを施し、体部が開く土師器皿が僅かに存在する。千葉市高沢遺跡での成果によれば、皿の出現時期は9世紀後半以降と位置づけられており（岡口1987），本地域においても同様と考えられるので、主体となる時期は9世紀後半から10世紀前半と考えられる。

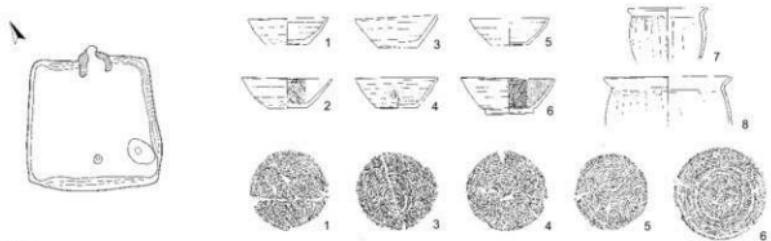
竪穴住居の特徴としては、小型が多い点と、柱穴が存在しない点である。柱穴が存在する竪穴住居は、僅かにL341とL344の2軒にすぎない。ただ、L341については3か所の深さが浅く、また、深さの値が不揃いであることから、柱穴ではない可能性がもたれる。床面面積は、L033が5.0m<sup>2</sup>で、最大のL044にしても11.3m<sup>2</sup>にとどまっている。このほか貯蔵穴と考えられる土坑が住居のコーナー部から検出されてい



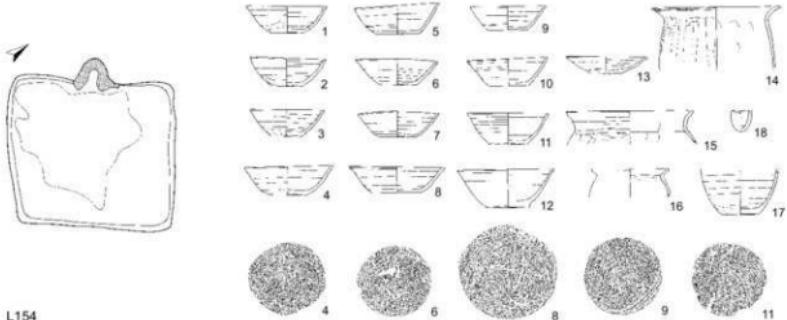
L033



L044



L065



L154

第114図 平安時代の土器

たり、入口の梯子穴が存在する竪穴住居が散見される。しかし、古墳時代後期の後葉に貯蔵穴の設置が途切れる現象が認められるので、この時期の住居内の土坑が、古墳時代の貯蔵穴と同様であったか、あるいは別の用途で設置されたかについては、さらに検討を要するところである。

これまで草刈遺跡西側の調査区、例えばK区のこの段階の竪穴住居は、調査面積30,000m<sup>2</sup>の範囲に13軒、J区においては15,000m<sup>2</sup>の中に4軒であった。単純な数字にすると、K区では2,308m<sup>2</sup>に1軒、J区では3,750m<sup>2</sup>に1軒という分布密度であった。それに比較すると、本調査区では735m<sup>2</sup>に1軒という分布状況を呈している。このように、竪穴住居の分布密度が高くなる傾向が明瞭に捉えられる地区であるが、掘立柱建物が1棟も検出されないという特徴がある。この点についても、草刈遺跡西側の今後の報告において分析を深めていきたい。

竪穴住居以外では土坑墓と考えられるL373、L434土坑やL040・300溝状遺構等が検出された。土坑墓は木棺の痕跡は明らかになつてないが、木棺墓の掘り方であったと考えられる。この2基については平安時代に比定可能である。L040・300は道として機能していた可能性が高いが、いつごろ構築されたのかは明らかになつてない。また存続期間も限定することが不可能であるが、かなり新しい時期まで機能して利用されていたと推測される。

以上簡単にL区における縄文時代以降の成果を概観し、本調査区のまとめとしたい。

#### 引用・参考文献

- 大谷弘幸 西野雅人 2004『千原台ニュータウン XI -市原市草刈遺跡（C区・保存区）-』（財）千葉県文化財センター  
大村 直 2004a「山田橋遺跡群および市原台地周辺地域の後期弥生土器」『市原市山田橋大山台遺跡』（財）市原市文化財センター  
大村 直 2004b「久ヶ原・山田橋式の構成原理—東京湾岸地域後期弥生土器型式の特質と移住・物流—」『史館』第33号 史館同人  
小久賀隆史ほか 1983『千原台ニュータウン II -草刈遺跡 A区・鶴牧古墳群・人形塚-』（財）千葉県文化財センター  
小沢 洋 1999「房総の古墳中期土器とその周辺」『東国土器研究』第5号 東国土器研究会  
加藤修司 高田 博 小久賀隆史 田中 審 2000『研究紀要』21（財）千葉県文化財センター  
小林清隆 大谷弘幸 2006『千原台ニュータウン XIV -市原市草刈遺跡（D区・E区）-』（財）千葉県教育振興財團  
小林清隆 麻生正信 2007『千原台ニュータウン XVII -市原市草刈遺跡（K区）-』（財）千葉県教育振興財團  
小林清隆 2007『千原台ニュータウン XIII -市原市草刈遺跡（J区）-』（財）千葉県教育振興財團  
小林信一 2004『調理法の変化と食器』『千葉県の歴史 資料編 考古4』 千葉県  
白井久美子 神野 信 2007『千原台ニュータウン XVI -市原市草刈遺跡G区・古墳群（P区）-』（財）千葉県教育振興財團  
開口達彦 1987「千葉市高沢遺跡」『房総における歴史時代土器の研究』 房総歴史考古学研究会  
高田 博ほか 1986『千原台ニュータウン III -草刈遺跡（B区）-』（財）千葉県文化財センター  
田島 新 2005『千原台ニュータウン XIII -市原市草刈遺跡（西部地区旧石器時代）-』（財）千葉県文化財センター  
峰屋孝之 白井久美子 2009『千原台ニュータウン XXI -市原市川焼台遺跡（上層）-』（財）千葉県教育振興財團

## 附 章 遺構分布図および遺物実測図

### (1) 遺構実測図

本文中に遺構実測図を掲載し、その詳細について記述した竪穴住居は、全体の約36%にすぎない。また、土坑や溝についても一部を図示したにとどまる。掲載できなかった64%の遺構実測図は、この附章にL区全域の遺構分布図を載せることで、欠如した情報の一部を補いたいと考える。

遺構分布図は、調査時の遺構実測図をもとに株式会社東京航業研究所に委託して作成した。

本章では、L区で検出した全遺構について、1/300の遺構分布図として図示することとした。遺構分布図は、第115図遺構分布分割図に示したように、L区の北西端地区を(1)、その東に(2)・(3)、次に南側に移動するというように、調査区を西から東へ、北から南への順に(1)～(13)に分割して作成している。

遺構分布図では、各遺構の平面形ならびに柱穴や炉、カマド、貯蔵穴などの内部施設を図示したが、煩雑となるため住居床面における硬化範囲線は削除し、遺構間の切り合い関係については、重なり合う部分について新しい遺構を実線で、古い遺構を点線で表記した。また、調査段階において遺構の全プランを確認し得なかつたものにおいても、遺構プランを明らかに想定できるものについては、想定復元線を点線で示した。ただ、遺構の時期決定が遅れたために、新旧関係の表現については、一部に齟齬が生じている。この点についてはご容赦いただきたい。

検出遺構の属性・概要については、本文末の第9表～第11表の一覧表に示した。第9表の竪穴住居の掲載項目の中で、下記の点について補足しておきたい。

- ①床面面積は、壁溝部分を含んでいない。
- ②壁が残存しない場合は、壁高を0cmとした。
- ③壁が残存する場合の壁高は、遺存する床面中央部との比高である。
- ④柱穴の深さは、遺存する床面中央部との比高である。
- ⑤柱穴が4本以上存在する場合は、P6・P7と番号を振り、P5は入り口に伴う梯子穴に限定した。

一覧表に計測値を示した遺構は、竪穴住居のほかに土坑・土坑墓（第10表）、窓穴（第11表）がある。

### (2) 遺物実測図

遺物実測図は、土器、縄文土器拓影図、土製品、ガラス玉、土器片鍤・瓦、石器・石製品、金属製品の順に掲載した。土器は遺構番号順に並べ、土製品、石器・石製品は器種ごとに分類して、その中を遺構番号順に配列した。また、金属製品は遺構番号順に掲載した。

実測図の縮尺は、土器は1/4、土製品、ガラス玉、土器片鍤・瓦、石器・石製品、金属製品は1/2、1/3を基本としたが、必要に応じて他の縮尺を使用し、そのつどスケールを示した。なお、土器のうち遺構の時期に最も近いと考えられる床面直上、カマド内、貯蔵穴、ビット等から出土したものについては、遺物番号の下にその旨明記した。記載がないものは、覆土中から出土したものである。このほか縄文土器の拓影図は、1/3で掲載した。

出土遺物の概要については、添付CD（Excel形式）の出土土器観察表（第12表）および各遺物の種類ご

との計測表（第13表～第37表）に示した。

遺物の出土状況については、土器は掲載番号を、土製品、石器・石製品、ガラス玉、金属製品については掲載番号の前にそれぞれ、土、石、ガ、金と表示し区別した。

### （3）遺構・遺物の挿図・写真図版掲載一覧について

調査の段階で各遺構に付した遺構番号は、通し番号で付したL001からL441である。これらの遺構とそこから出土した遺物を本書でどのように掲載したかを示した表が次ページからの第8表である。この表の掲載項目の中で、下記の点について補足しておきたい。

- ①遺構欄の「個別図」は、第2章に掲載した遺構実測図の挿図番号を提示している。
- ②遺構欄の「分布図」は、第116図（1）～第128図（13）までの遺構分布図である。
- ③土器、土製品、石器・石製品、ガラス玉、金属製品の各欄の実測図は、附章に掲載した第129図～第230図の挿図番号で、図版は、写真図版の図版番号である。

第8表 遺構・遺物の挿図・写真図版掲載一覧

遺構No	種類	時代	時間	位置	遺構		土器		土製品		石器・珪・ガラス製品		金屬製品	
					個別度	分布度	国版	実測図	国版	実測図	国版	実測図	国版	実測図
1001	壁穴住居	弥生	後期	96-53-63	11	(9)		129	28-66		222	93		
1002	壁穴住居	弥生	後期	96-52-53		(9)		129						
1003	壁穴住居	弥生	後期	96-63-73		(9)	3	129	66					
1004	壁穴住居	弥生	後期	96-84-94		(9)	3	129						224 97
1005	壁穴住居	弥生	後期	96-43-53	11	(9)		129						
1006	壁穴住居	弥生	後期	96-54	11	(9)		129						
1007	壁穴住居	弥生	後期	96-42-43		(6) (9)		129	28					
1008	壁穴住居	弥生	後期	96-31-35		(6) (9)	3	129-130	28					
1009	壁穴住居	弥生	後期	108-26-27		(9)	3	130			213	84		
1010	壁穴住居	古墳	中期	108-27-28	58	(9)	3	130-131	28		222	93		
1011	壁穴住居	古墳	前期	108-37-38	40	(9)	3	131	28-29					
1012	壁穴住居	弥生	後期	108-36-37		(9)	3							
1013	壁穴住居	古墳	前期	108-57-58	40	(9)	3	131	29	206	80	214	84	
1014	壁穴住居	古墳	前期	108-39, 108-30	41	(9) (10)	3							225 97
1015	壁穴住居	弥生	後期	108-64-65		(10)		132						
1016	壁穴住居	弥生	後期	108-47-57		(9)				203	78	213	84	
1017	壁穴住居	古墳	前期	108-77-78		(9)								
1018	壁穴住居	弥生	後期	108-66-67		(9)	3	132						
1019	壁穴住居	古墳	後期	63-90, 73-00		(2)	3	132	29	207	81	219	卷 6, 90	225 97
1020	溝状遺構	不明		L10-31-40		(9) (10) (12)		132				220	91	225 97
1021	壁穴住居	弥生	後期	108-36-46		(9)	4	132				222	93	
1022	壁穴住居	弥生	後期	108-36-46		(9)	4	132	29-66		214	84		
1023	壁穴住居	弥生	後期	108-40-50		(9) (10)		132	29-66					
1024	壁穴住居	古墳	前期	108-59-69		(9) (10)	4	132	29-66					
1025	壁穴住居	古墳	前期	108-49-59		(9)	4	132	66			214	84	225 97
1026	壁穴住居	古墳	前期	108-78-88	41	(9)	4	132		204-206	79-80	220-222	91-93	225 97
1027	壁穴住居	弥生	後期	108-79, 108-70		(9) (10)	4	132	29	207	81	218	卷 5, 89	
1028	壁穴住居	弥生	後期	108-86-87	12	(9) (12)	4	133	30-66					225 97
1029A	壁穴住居	古墳	中期	108-74-84		(9)	4	133	30	203	78	214-218	84-88	
1029B	壁穴住居	古墳	前期	108-74-84		(9)	4	133						224 卷 3, 96
1030	溝状遺構	不明		108-47-56		(9)								
1031	壁穴住居	弥生	後期	98-04-14		(6)	5	133				220	91	
1032	壁穴住居	弥生	後期	98-12-22		(6)	5	133	30-66			222	93	
1033	壁穴住居	平安		98-21-22	83	(6)	5	133	30-75					
1034	壁穴住居	弥生	後期	98-51-52	12	(9)	5	134	31-66-67			222	93	
1035	壁穴住居	弥生	後期	98-51-61	13	(9)	5	134-135	31-67					225 97
1036	壁穴住居	弥生	後期	108-75-76	13	(9)	5	135	31-67					
1037	壁穴住居	古墳	前期	108-65-75	42	(9)	5	136	31-32					224 卷 3, 96
1038	壁穴住居	古墳	前期	108-64-74		(9)	5	136	32			213	84	225 97
1039	壁穴住居	弥生	後期	108-44-45		(9)	6	136				214	84	
1040	溝状遺構	近世		101, 101, 111, 98-90-91, 91-92-93		(7) (8) (11) (12) (13)	6	136		206	80	210-212-214-218	卷 5-6, 83-85-89-90	225 97
1041	壁穴住居	弥生	後期	108-02-03	14	(9)	6	136	32-67					
1042	壁穴住居	古墳	前期	111-16-17		(12)	6	137	32					
1043	壁穴住居	弥生	後期	108-53-54		(9)	5-6	137						
1044	壁穴住居	平安		98-90-81	93	(9)	6	137	32-75					
1045	壁穴住居	古墳	前期	108-03-13		(9)	6	137	32					
1046	壁穴住居	古墳	前期	111-27-28	42	(12)	6-7	138	32	207	81	212-218	卷 5, 83-89	
1047	壁穴住居	古墳	前期	103-49-59	42	(8)	7	138	33-68			218	卷 5, 89	225 97
1048	壁穴住居	古墳	前期	111-22-32		(13)						222	93	
1049	矢垂			—										
1050	古墳	古墳	前期	98		71-72-73	(6)	139-140	33-34-68	204	79	210-214-219	卷 6, 85-90	
1051	壁穴住居	古墳	中期	78-92-94	59	(6)	7	141	34-35			214	85	
1052	壁穴住居	古墳	中期	78-84-94	43	(3) (6)	7	141	35-68			214	85	
1053	壁穴住居	古墳	前期	78-92-93		(6)	7	141						224 97
1054	壁穴住居	弥生	後期	78-85-95		(3) (6)	7	141	35-68					
1055	壁穴住居	古墳	中期	78-75-84		(3)	7	141	35					
1056	壁穴住居	古墳	後期	78-73-74	65	(3)	7	141, 142	35			220	91	225 97

遺構No.	種類	時代	時期	位置	遺構			土器		土製品		石器・石・ガラス製品		金屬製品		
					個別図	分布図	図版	実測図	図版	実測図	図版	実測図	図版	実測図	図版	
1057	竪穴住居	弥生	後期	7k-62-72	(2)		142	35			214	85				
1058	竪穴住居	弥生	後期	7k-82-92	14	(2) (6)	7	142	68		225	93				
1059	竪穴住居	弥生	後期	7k-28-29	(2)		142	35-68								
1060	竪穴住居	古墳	後期	7k-27-28	65	(2)	142	35			214	85	225	97		
1061	竪穴住居	弥生	後期	8k-30-40	14	(2) (6)	8	142	35-68		225	93				
1062	竪穴住居	古墳	中期	8k-52-62	59	(6)		142			220	91				
1063	竪穴住居	弥生	後期	8k-53-63	(6)		8	143	68		220	91				
1064	竪穴住居	弥生	後期	8k-54-64	(6)		8	143								
1065	竪穴住居	平安	8k-38-8k-40	84	(2) (6)	8	143	35-68-75								
1066	竪穴住居	弥生	後期	8k-64-65	(6)		8	143			215	86				
1067	矢番			-												
1068	竪穴住居	平安	8k-74-84	84	(6)	8	143	36				225	97			
1069	竪穴住居	古墳	中期	7k-90, 8k-90	61	(4) (5)	8	143-144	36	208	213-219- 220	各 6, 84- 90-91	226	97		
1070	竪穴住居	古墳	前期	8k-22-32	43	(6)	8	144	36-37		212	83				
1071	竪穴住居	古墳	中期	8k-10-20	60	(2) (6)	8	144-145	37		215-220	86-91	226	97		
1072	竪穴住居	古墳	前期	8k-50-60	(2) (6)	9	145	37	203	78			226	97		
1073	竪穴住居	弥生	後期	8k-50-60	14	(2) (6)	9	145	37-48		210-219	各 6, 90				
1074	竪穴住居	平安	7k-68, 7k-68	(1) (2)	9	145	38					226	97-98			
1075	竪穴住居	古墳	後期	7k-31-32	(2)	9	145					226	98			
1076	竪穴住居	古墳	中期	7k-60-61	61	(2)		145-146	38							
1077	竪穴住居	古墳	前期	7k-32-33	(2)		146					226				
1078	竪穴住居	平安	8k-10-11	(6)	9	144-146		211	82			226	98			
1079	竪穴住居	平安	8k-08-18	84	(2)	9	146		211	82		226	98			
1080	竪穴住居	平安	8k-11-12	(6)	9	146	38									
1081	竪穴住居	平安	8k-92, 9k-02	(6)		146	38									
1082	竪穴住居	古墳	後期	8k-92, 9k-02	66	(6)	5	146	38-68-75	208	81	218-219- 222	各 5-6, 89-90-93	226	98	
1083	竪穴住居	古墳	前期	7k-30-40	(2)	10	147				215	86				
1084	竪穴住居	弥生	後期	7k-41-42	15	(2)	10	147	39-69							
1085	竪穴住居	弥生	後期	7k-51-61	(2)		10									
1086	竪穴住居	古墳	中期	7k-70-80	(2)	10	147	39				226	98			
1087	土坑	古墳	前期	8k-40-50	(6)		147									
1088	竪穴住居	平安	7k-57-58	84	(2)		147	39								
1089	竪穴住居	弥生	後期	8k-59, 8k-50	15	(2) (6)	10	147								
1090	溝状遺構	中・近世		6.3, 7.3, 7k	(2) (3) (6)		147									
1091	溝状遺構	中・近世		11k-23-33	(13)											
1092	竪穴住居	古墳	中期	11k-29-39	(12) (13)	10	147-148	39								
1093	竪穴住居	古墳	前期	11k-20-21	(13)	10	148		203	78	220	91				
1094	土坑	古墳	後期	11k-14-24	(13)	10										
1095	竪穴住居	古墳	前期	11k-38-48	(12)				211	77						
1096	竪穴住居	古墳	前期	8k-72-82	(6)											
1097	竪穴住居	平安	8k-46-56	(5)	10	148										
1098	竪穴住居	古墳	前期	9k-66-67	100	(6)	10-11	148	39-69	203-208	78-81	215-218	各 5, 86-88	224- 226	卷 3, 96-	
1099	竪穴住居	不明	後期	10k-40, 10k-49	(6) (9)		148					218	各 5, 89			
1100	古墳	古墳	後期	10k-11, 11	75	(10) (12)	148			204-211	77-79	212	83	227	98	
1101	竪穴住居	弥生	後期	10k-23-24	15	(2)	11	148	39-69							
1102	竪穴住居	弥生	後期	9k-58-68	16	(6)		148-149	39-40- 69							
1103	竪穴住居	古墳	前期	10k-34-44	(6)	11	149						224	卷 3, 96-		
1104	竪穴住居	弥生	後期	10k-50-60	16	(6) (9)	11	149		203	78	215	86			
1105	竪穴住居	古墳	前期	10k-69, 10k-60	(6) (9)	11	149	40								
1106	竪穴住居	弥生	後期	9k-91-92	(6)	11	149	40			212	83				
1107	竪穴住居	古墳	中期	11k-04-05	62	(12)	149-150	40	203-204	78-79	218-219	各 5-6, 89-90				
1108	竪穴住居	古墳	前期	9k-70-71	(6)						215	86				
1109	竪穴住居	古墳	中期	10k-88-89	62	(6)	卷 2, 11	150	40		212	83	224	卷 4, 96		
1110	竪穴住居	古墳	前期	9k-99-98-90	44	(6) (9)	卷 2, 11	150-151	40- 41-75							
1110	竪穴住居	古墳	前期	10k-00-10	(6) (9)	12	151	41	204	79						

遺構No.	種類	時代	時期	位置	遺構			土器		土製品		石器・石・ガラス製品		金屬製品	
					個別図	分布図	図版	実測図	図版	実測図	図版	実測図	図版	実測図	図版
L111	窓穴住居	古墳	前期	10K-20-21	44	(9)	151								
L112	窓穴住居	古墳	前期	10K-91	(9)(12)	12	151	41	204-205	79	210	各 6, 90	227	98	
L113	窓穴	古墳	前期	11K-17-27	(12)										
L114	窓穴住居	古墳	前期	10K-51	(9)	12	151	41			220	91			
L115	窓穴住居	弥生	後期	11K-00-01	17	(12)		151-152	41-42-69	203-211	77-78	218-219	各 5, 6, 89-90		
L116	窓穴住居	弥生	後期	10K-41-51	(9)	12	152	42							
L117	窓穴住居	古墳	前期	11K-23-35	44	(12)	12	152	70			212	83		
L118	窓穴住居	弥生	後期	10K-00-01	(9)	12	152	42			218-222	各 5, 89-93			
L119	窓穴住居	弥生	後期	10K-01-02	(9)	12			205	79					
L120	古墳	中期	10K-96, 11K-06	(12)							215	86	227	98	
L121	窓穴住居	古墳	前期	9K-79, 9K-70	(8)(9)	12	152-153	42			213-215	83-96			
L122	窓穴住居	弥生	後期	9K-80-90	(8)(9)				211	77					
L123	窓穴住居	弥生	後期	9K-69, 9K-60	18-100	(8)(9)	12	153-154*, 155-156*, 157-158	42-43- 44-45-70			218	各 5, 89		
L124	窓穴住居	弥生	後期	9K-89, 9K-80	(8)(9)		159	45	203	78					
L125	窓穴住居	古墳	前期	10K-52-53	(9)						220	91			
L126	窓穴住居	古墳	前期	10K-12-22	(9)		159								
L127	窓穴住居	弥生	後期	9K-90-91	(8)(9)								227	98	
L128	土坑	弥生	後期	11K-07-08	(12)		159								
L129	窓穴住居	弥生	後期	11K-07-08	(12)		159	45-70	205	79			227	98	
L130	調査遺構	弥生	後期	11K-04-08	37-38	(12)	38								
L131	窓穴住居	古墳	前期	10J-89-99	(8)(11)	13	159	45			215-219	各 6, 86-90			
L132	窓穴住居	古墳	前期	11J-07-08	45	(11)	13	159	45	211	77	222	93		
L133	窓穴住居	弥生	後期	10J-89-99	(8)(9)(11)	11	159								
L134	窓穴住居	古墳	前期	10K-70-80	44	(8)(9)	13	159	45		220	91	227	98	
L135	窓穴住居	弥生	後期	10K-97	(9)(12)										
L136	土坑	古墳	中期	10K-96, 11K-06	(12)		159	45							
L137	窓穴住居	弥生	後期	7J-59, 7J-50	19	(1)(2)	13	159-160	45-46-70						
L138	窓穴住居	弥生	後期	9K-12-13	(6)	13									
L139	土坑	不明	10J-19	(8)(9)											
L140	窓穴住居	弥生	後期	7J-80-81	(1)(2)(5)										
L141	窓穴住居	弥生	後期	10J-19-29	(8)(9)										
L142	窓穴住居	平安	8J-67-68	(5)	13	160	46			219	各 6, 90				
L143	窓穴住居	古墳	前期	8K-68-78	46	(5)	160	46					224- 227	97-98	
L144	窓穴住居	古墳	前期	9K-10-11	(5)(6)		160	46							
L145	窓穴住居	弥生	後期	9K-29-30	19	(5)	13	160-161	46	205	79	215-219	各 6, 86-90		
L146	窓穴住居	古墳	中期	9K-29, 9K-20	(5)(6)	13	161		206	89	219-220	各 6, 90, 91	224	97	
L147	窓穴住居	古墳	後期	8J-89-99	(5)(6)	13	161	46-47			220	91			
L148	窓穴住居	古墳	中期	8K-89-99	(5)(6)	13	161		203	78					
L149	土坑	不明	9K-90-91	(6)											
L150	古墳	古墳	後期	10K-11K	77-78	(12)	161	47							
L150b	土坑	不明	11K-33-43	27-28	(12)										
L150c	理葬施設	古墳	後期	10K-31-32	77-78	(12)							224	97	
L151	窓穴住居	古墳	前期	7J-69-79	(2)(3)	13	161	47			210-215	各 6, 86-90			
L152	窓穴住居	古墳	前期	7J-58-59	46	(2)	161	47	205	79					
L153	窓穴住居	弥生	後期	7J-58-68	20	(2)		161-162	47-70			215	86		
L154	窓穴住居	平安	7J-67-68	85	(2)	14	162	47-48							
L155	窓穴住居	弥生	後期	7J-77-78	(2)		162								
L156	窓穴住居	古墳	後期	7J-57-67	67	(2)	162-163	48	208	81					
L157	窓穴住居	弥生	後期	7J-69-78	(2)		163								
L158	窓穴住居	弥生	後期	7J-67	(2)						213	83			
L159	窓穴住居	古墳	前期	7J-36-37	(2)		163	48			216	87			
L160	窓穴住居	弥生	後期	7J-88-98	20	(2)(5)	14	163	71		213	84	227	98	
L161	窓穴住居	弥生	後期	7K-91, 8K-01	21	(6)	14	163	48		212	83			
L162	窓穴住居	弥生	後期	7K-81-82	(2)(6)										
L163	窓穴住居	弥生	後期	8K-01-02	(6)	14	163	48							
L164	窓穴住居	古墳	中期	8K-10-11	62	(6)	163	48			216-218	各 5, 87-89			
L165	窓穴住居	弥生	後期	8J-09, 9K-00	(3)(6)	14	164	48			222	93			
L166	窓穴住居	弥生	後期	8J-09-19	(3)(6)	14									

遺構No.	種類	時代	時期	位置	遺構			土器		土製品		石器・石・ガラス製品		金屬製品	
					個別図	分布図	図版	実測図	図版	実測図	図版	実測図	図版	実測図	図版
L167	竪穴住居	古墳	前期	71-99, 81-09	47	(4) (5)	164			220	91				
L168	竪穴住居	平安		—			164	48							
L169	竪穴住居	佛生	後期	83-39-49	(5) (6)		164	49-71							
L170	竪穴住居	古墳	後期	83-32-42	(5)	14	164	49		212	83	227	98		
L171	竪穴住居	古墳	前期	88-32-42	(6)		164								
L172	竪穴住居	古墳	前期	88-11-21	(6)	15								227	98
L173	竪穴住居	古墳	前期	73-25-26	47	(2)	15	164-185	49	203-205	78-79	216-218	各 5, 87-89	227	98
L174	竪穴住居	佛生	後期	88-41-51	(6)										
L175	土坑群	不明		73-58, 78-59	(2)										
L176	竪穴住居	古墳	前期	81-79	(4) (5)		165								
L177	竪穴住居	古墳	前期	61-99, 73-00	(1) (2)	15				213-220	84-91				
L178	竪穴住居	佛生	後期	73-00-01	(2)	15	165	49							
L179	竪穴住居	不明		83-32-33	(5)		165	49						227	98
L180	土坑	不明		101-59	(7) (8)										
L181	竪穴住居	佛生	後期	78-49-50	(2) (3)					222	93				
L182	竪穴住居	平安		83-28-29	85	(5)	15	165	49						
L183	竪穴住居	平安		83-16-17	85	(5)	15	165						227	98
L184	竪穴住居	佛生	後期	88-22-23	(6)	15	165	71		216	87				
L185	竪穴住居	平安		83-75-76	86	(5)	15	165	49-75	216	87				
L186	土坑群	不明		88-84-94	(6)										
L187	竪穴住居	古墳	前期	83-28-38	48	(5)	165	49		216	87				
L188	竪穴住居	古墳	前期	83-46-56	(5)	15	166	49		221	92				
L189	竪穴住居	佛生	後期	83-37-47	21	(5)	15	166	71	203	78				
L190	竪穴住居	不明		101-59-69	(7) (8)										
L191	竪穴住居	平安		93-14-24	(5)	16	166								
L192	竪穴住居	平安		93-24-34	86	(5) (8)	16	166							
L193	竪穴住居	佛生	後期	93-13-23	21	(5)	16	166-187	49			221-222	92-93		
L194	竪穴住居	佛生	後期	93-24-25	(5)										
L195	竪穴住居	佛生	後期	93-25-35	22	(5) (8)	16	167	49-71	203	78				
L196	竪穴住居	佛生	後期	93-34-44	22	(5) (8)	16	167							
L197	竪穴住居	佛生	後期	93-32-42	23	(5) (8)	16								
L198	竪穴住居	佛生	後期	83-96, 94-06	23-101	(5)	16	167	49			222	93		
L199	竪穴住居	佛生	後期	93-04-14	23	(5)	16	168	50			216	87	224	97
L200	溝状遺構	不明		103-82-84	(9) (11)							222	93		
L201	土器集中	古墳	前期	93-49, 96-30	81	(5) (8)	168-169	50-71	206	80	222	93			
L202	竪穴住居	佛生	後期	93-49, 96-40	24	(8) (9)	169								
L203	竪穴住居	佛生	後期	98-82-92	(9)										
L204	竪穴住居	佛生	後期	98-92	(9)	11									
L205	竪穴住居	佛生	後期	108-20-21	24	(9)	17	169-170	51						
L206	竪穴住居	佛生	後期	108-31-41	(9)	17	170								
L207	竪穴住居	古墳	前期	108-62-63	(9)		170	51		218	各 5, 89				
L208	竪穴住居	古墳	前期	108-82-83	49	(9) (12)	17	170	51	203	78	212-213,	各 5, 83,		
L209	竪穴住居	佛生	後期	108-94-95	24	(9) (12)	17	170-171	71	203	78	216-218,	84-87-89	227	98-99
L210	理柵施設	古墳	前期	98-42	74	(9) (9)	17	171	51						
L211	土坑	佛生	後期	108-20	(8) (9)										
L212	土坑	佛生	後期	108-21	(9)										
L213	土坑	古墳	後期	118-06-07	79	(12)	171								
L214	竪穴住居	古墳	前期	108-50-51	(8) (9)										
L215	竪穴住居	佛生	後期	108-20-30	(9) (9)	171									
L216	竪穴住居	佛生	後期	103-49, 108-40	(9) (9)	171									
L217	竪穴住居	古墳	前期	103-39, 108-30	50	(8) (9)	17	171	51-52	205	79				
L218	竪穴住居	古墳	前期	108-71-81	(9) (12)		171-172	52	203	78	218-222	各 5, 89-93			
L219	竪穴住居	佛生	後期	118-20-21	24	(12)	17	172	52						
L220	竪穴	龜文		108-45-55	9	(9)									
L221	竪穴住居	古墳	前期	103-26-27	50	(9)	17	172	52	206	80			227	99
L222	竪穴住居	佛生	後期	98-24-34	(6)										
L223	竪穴住居	古墳	前期	103-18-19	50	(9)		172	52			218-219	各 5-6,		
L224	竪穴住居	古墳	前期	93-98, 103-08	51	(9)	18	172		206	80	216-218	各 5, 87-89		
L225	理柵施設	古墳	後期	108-72-73	76	(10)									

遺構No.	種類	時代	時期	位置	遺構		土器		土質品		石器・石・ガラス製品		金属製品		
					個別図	分布図	回版	実測図	回版	実測図	回版	実測図	回版	実測図	
1226	竪穴住居	古墳	中期	10L-90, 11L-00	(13)	18	172	52	203-205	78-79	223	94	227	99	
1227	竪穴住居	古墳	中期	11K-00-01	(12)		173	53					227	99	
1228	竪穴住居	弥生	後期	10J-98, 11J-08	(11)										
1229	竪穴住居	弥生	後期	9J-67・68	(8)										
1230	方形圓頂墓	弥生	後期	10K-59, 10L-50	(9)										
1231	溝状遺構	不明		9J-55-56	(8)										
1232	竪穴住居	古墳	前期	10J-39-49	(8)		173	53	206	80	210-216-218	卷 5-6, 87-89-90	227	99	
1233	竪穴住居	弥生	後期	10J-47-57	25	(8)	173	53-71	203-206	78-80	221	92			
1234	竪穴住居	古墳	中期	10J-27-28	(8)	18	174	53	206	81			227	99	
1235	竪穴住居	古墳	前期	10J-37-38	(8)	17	174								
1236	土坑	弥生	後期	10J-98, 11J-08	(11)										
1237	竪穴住居	古墳	前期	10K-90, 11K-01	(11) (12)		174	53							
1238	竪穴住居	弥生	後期	10J-38-48	(8)		174				218	卷 5, 89			
1239	竪穴住居	古墳	前期	10K-78-88	(9)										
1240	古墳	古墳	後期	10L-11L	75	(10) (13)				211	77				
1241	竪穴住居	弥生	後期	10K-30-31	(9)		17								
1242	竪穴住居	古墳	前期	8J-21-31	51	(5)	18	174-175	53-54	209	81	223	94		
1243	竪穴住居	弥生	後期	10K-93, 11K-03	(9) (12)		18								
1244	竪穴住居	古墳	前期	11K-13-14	(12)		175								
1245A	土坑墓	古墳	後期	10J-96-97	79	(8) (11)				203	78	219	卷 6, 90		
1245B	土坑	不明		10J-97, 11J-07	(11)										
1246	竪穴住居	弥生	後期	10J-28-38	(8)								227	99	
1247	竪穴住居	平安	10J-05-06	(8)											
1248	土坑墓	不明		10L-92	(10) (13)										
1249	土坑	不明		10L-83	(10) (13)										
1250	溝状遺構	不明		10K, 10L	(9) (10) (12)										
1251	竪穴住居	弥生	後期	8J-94, 9J-04	(5)	16									
1252	竪穴住居	弥生	後期	9J-28-38	(5)								227	99	
1253	竪穴住居	平安	8J-64-74	86	(5)	18	175	54							
1254	竪穴住居	古墳	前期	8J-75-76	(5)	18	175	54	209-210	81-82			卷 5, 83-89		
1255	竪穴住居	古墳	前期	8J-84-85	(5)	19	175	54	210	82	216	88	227	99	
1256	竪穴住居	弥生	後期	8J-74-84	26	(5)	19	175-176	54				213-221-223	83-92-94	
1257	竪穴住居	弥生	後期	8J-93-94	26	(5)	176						228	99	
1258	竪穴	龜文		8J-93-94	(5)										
1259	竪穴住居	弥生	後期	8J-54-55	26	(5)	19	176	54-72	205	79				
1260	竪穴住居	弥生	後期	8J-53-54	27	(5)	19	176-177	54-55-72			217	88		
1261	竪穴住居	弥生	後期	8J-55-56	(5)	19						221	92		
1262	竪穴住居	古墳	前期	10J-25-35	52	(8)	19	177	55						
1263	竪穴住居	古墳	前期	10J-36-46	(8)	19				205	79	212	83		
1264	竪穴住居	古墳	前期	10J-45-55	52	(8)	19	177	55-56	206	80	219	卷 6, 90		
1265	竪穴住居	弥生	後期	10J-03-13	(8)	19	177								
1266	竪穴住居	古墳	前期	9J-41-51	53	(8)	20	177-178	56-72						
1267	竪穴住居	古墳	前期	8J-82-92	(5)	20	178								
1268	竪穴住居	弥生	後期	9J-30-31	27	(5) (8)	20	178	72						
1269	竪穴住居	古墳	前期	9J-18-19	(5)										
1270	矢番	—													
1271	竪穴住居	平安	7J-86-87	(2) (5)			178-179	56							
1272	竪穴住居	古墳	後期	7J-86-96	68	(5)	20	179	57	210	82	219-223	卷 6, 90-94	228	99
1273	竪穴住居	平安	8J-05-06	(5)	20	179	57				221	92	228	99	
1274	竪穴住居	弥生	後期	7J-24-25	(2)										
1275	竪穴住居	弥生	後期	7J-34-35	28	(2)		179-180	57						
1276	竪穴住居	弥生	後期	7J-23-24	(2)			180	57						
1277	竪穴住居	古墳	後期	7J-44-54	69	(2)	20	180	57	203-206	78-80	219	卷 6, 90		
1278	竪穴住居	古墳	前期	7J-14-15	(2)								228	99	
1279	竪穴住居	平安	8J-05-06	86	(5)	20	180	57							
1280	竪穴住居	弥生	後期	7J-63-64	28	(2)	20	180	58				228	99	
1281	竪穴住居	古墳	前期	8K-82	(5)										
1282	竪穴住居	弥生	後期	8J-56-66	(5)			181							
1283	竪穴住居	平安	8J-34-35	87	(5)	21	181	58			213	84	228	99	
1284	竪穴住居	弥生	後期	8J-25-26	28	(5)	21	181							

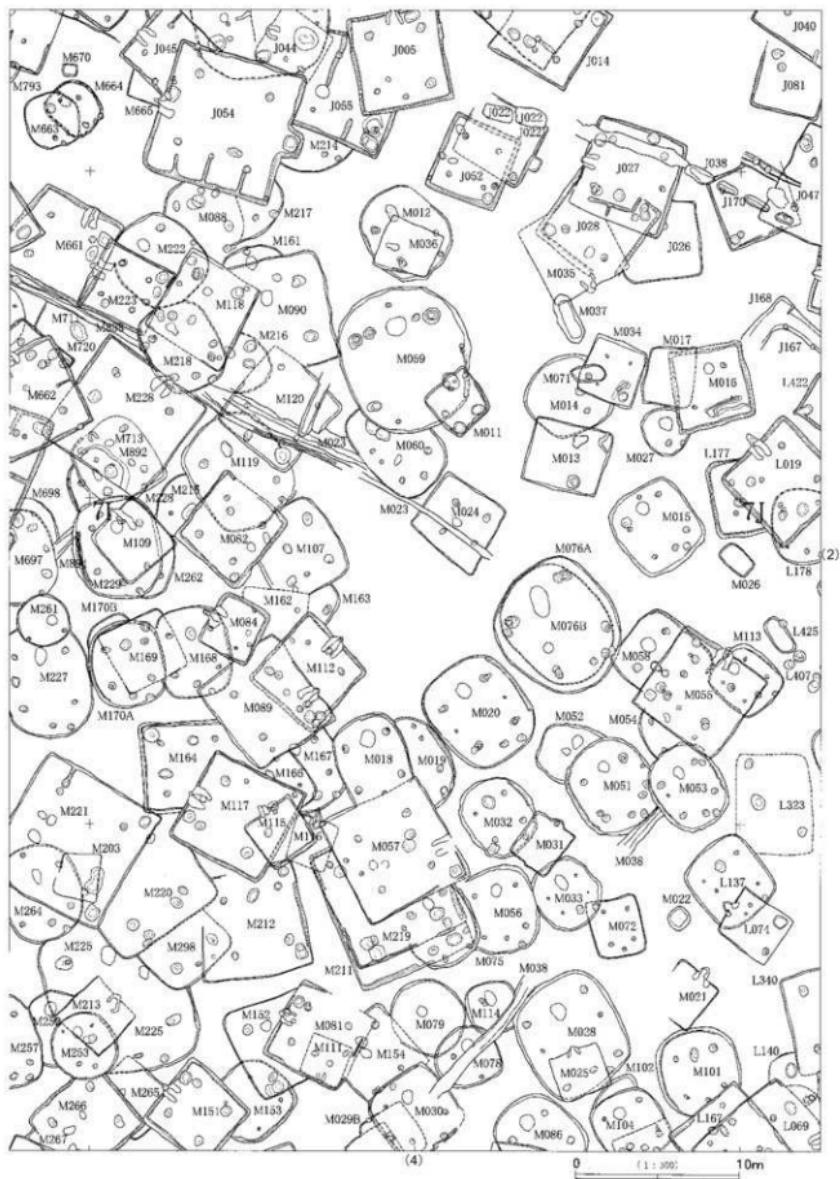
遺構No.	種類	時代	時期	位置	遺構		土器		土製品		石器・石・ガラス製品		金屬製品		
					個別図	分布図	図版	実測図	図版	実測図	図版	実測図	図版	実測図	
L285	竪穴住居	弥生	後期	8J-15-16	(5)										
L286	矢番			—											
L287	矢番			—											
L288	竪穴	縄文		8J-41	9	(5)	21								
L289	竪穴住居	弥生	後期	7J-90-91		(2) (5)									
L290	竪穴住居	弥生	後期	8J-20-30	(4) (5)	21	181	205	79	217	88	224	97		
L291	竪穴住居	弥生	後期	9J-26-27	(5)	21					223	94			
L292	土坑	不明		9J-19		(5) (6)									
L293	竪穴住居	平安	後期	9J-31-32	86	(5) (8)	21	181							
L294	竪穴住居	平安	後期	9J-22	86	(5)	21	181							
L295	竪穴住居	弥生	後期	9J-02-03	28	(5)	21	182							
L296	竪穴住居	弥生	後期	9J-37-38		(5) (8)	21								
L297	竪穴住居	弥生	後期	9J-46-47		(5) (8)	22	182	72						
L298	竪穴住居	弥生	後期	8J-72-73	28	(5)	19	28-182							
L299	竪穴住居	弥生	後期	8J-52-53	29	(5)	22	182	58-72		221	92			
L300	溝状遺構	中世		9J-101, 8J-93, 8K-96-97	94-95-96	(5) (6) (7) (8)	182	58	216		212-218-219-221	各 6, 83-88-90-92			
L301	竪穴住居	古墳	前期	10J-66-67	54	(8)	22	182-183	58	203	78	212-219	各 6, 83-90	224-228	各 6, 96-99
L302	竪穴住居	弥生	後期	10K-45-55		(5)									
L303	古墳	古墳	前期	10J-103		(5) (8) (11)	183		203	78					
L304	竪穴住居	古墳	前期	9J-65-75	54	(8)	22	183	58-59		218	各 5, 89	228	99	
L305	竪穴住居	古墳	中期	10J-74-85		(8)	22	183	59	203	78			228	99
L306	竪穴住居	古墳	前期	10J-44-54		(8)			184						
L307	竪穴住居	弥生	後期	10J-52-53	29	(8)	22	29-184			217	88			
L308	竪穴住居	古墳	前期	11K-13		(12)			184						
L309	竪穴住居	古墳	前期	11K-13-23		(12)			184	59		218	各 5, 89		
L310	土坑	古墳	前期	10K-94		(9) (12)									
L311	竪穴住居	弥生	後期	10J-76-77		(8)	23	184	59						
L312	竪穴住居	古墳	前期	10J-86-87	55	(8)	23	184	59		218-223	各 5, 89-94	228	99	
L313	竪穴住居	弥生	後期	10J-94-95	29	(9) (11)	22	184-185	59	203-204	78	212-218	各 5, 83-89		
L314	竪穴住居	弥生	後期	9J-83-84		(9)			29-185	59					
L315	竪穴住居	古墳	中期	9J-96, 10J-06	63	(8)			185	59		218-219	各 5-6, 89-90		
L316	竪穴住居	弥生	後期	9J-70-71	30	(8)	23	185	59-72		221	92			
L317	土坑	古墳	前期	11K-08		(12)									
L318	竪穴住居	古墳	前期	10K-93		(9) (12)			185						
L319	竪穴住居	古墳	前期	11K-11-12		(12)			185			218	各 5, 89		
L320	竪穴	縄文		11K-01	9	(12)	23								
L321	竪穴住居	弥生	後期	7J-22-32	30	(2)	23	185							
L322	竪穴住居	弥生	後期	7J-31-41		(2)	23					223	94		
L323	竪穴住居	古墳	前期	7J-40-50		(1) (2)									
L324	竪穴住居	古墳	前期	8J-17-18		(5)					218	各 5, 89			
L325	土坑	不明		8J-26		(5)									
L326	竪穴住居	弥生	後期	8J-27-37		(5)			186	60				228	99
L327	竪穴住居	弥生	後期	7J-86-96		(2) (5)			186						
L328	竪穴住居	弥生	後期	8J-19-29		(2) (6)						223	94		
L329	竪穴住居	平安	後期	7J-93, 8J-03		(5)			186	60		219-221	各 6, 90-92	228	99
L330	竪穴住居	弥生	後期	7J-94, 8J-04		(5)			186	72-73		223	94		
L331	矢番	—		—											
L332	竪穴住居	古墳	後期	7J-65-75	69	(2)	23	186	60		219	各 6, 90			
L333	竪穴住居	弥生	後期	7J-93-94		(2) (5)			186	73					
L334	竪穴住居	古墳	前期	7J-93		(5)			186						
L335	矢番	—		—											
L336	竪穴住居	古墳	前期	7J-51-52		(2)			187	60-73-75					
L337	竪穴住居	弥生	後期	8J-14-24		(5)	23	187-188	73			223	94		
L338	竪穴住居	古墳	中期	8J-13-14		(5)	23	188	60	205	79	212	83	228	99
L339	竪穴住居	古墳	中期	8J-12-13	63	(5)	23-24	188	60-61			213	84		
L340	竪穴住居	古墳	後期	7J-71-81	70	(2)	24	188-189	61			212-217	83-95		
L341	竪穴住居	平安	後期	8J-61-62		(5)	24	189	61	206	80	217	88	228-229	99-100
L342	竪穴住居	弥生	後期	8J-90-91	31	(5)	24	190-191	61-73			217	88		
L343	竪穴住居	弥生	後期	8J-81-91	31	(5)	24	191-192	61-62-73-74						

遺構No.	種類	時代	時期	位置	遺構			土器		土製品		石器・石・ガラス製品		金屬製品		
					個別図	分布図	図版	実測図	図版	実測図	図版	実測図	図版	実測図	図版	
L344	窓穴住居	平安	81-99, 8J-90	87	(4) (5)	24	192	62	211	221	92	229	100			
L345	窓穴住居	平安	83-61-62		(5)		192									
L346	窓穴住居	古墳	83-62-63		(5)		182	58								
L347	窓穴住居	古墳	83-60-70		(5)		192-193	62	204	78						
L348	窓穴住居	古墳	83-70-71		(5)											
L349	窓穴住居	弥生	83-70-71		(5)		193									
L350	窓穴住居	弥生	83-62-72		(5)		193			223	94					
L351	窓穴住居	古墳	108-61-71		(5)											
L352	窓穴住居	古墳	103-41-51	55	(5)		193			218-221	85, 89-92					
L353	窓穴住居	古墳	103-51-61		(5)		193			218	85, 89	229	99			
L354	窓穴住居	古墳	93-93-94		(5)		193	62-63		223	94					
L355	窓穴住居	古墳	103-78-79		(5)		193	63								
L356	窓穴住居	古墳	93-65-75		(5)		193									
L357	窓穴住居	弥生	93-76-85	32	(5)		193-194	63-74	204	78	217-221-223	88-92-94	229	99		
L358	窓穴住居	古墳	103-89-19		(5) (9)				205	79						
L359	窓穴住居	弥生	103-06-07		(5)											
L360	矢番															
L361	窓穴住居	平安	83-31-32		(5)		194	63								
L362	窓穴住居	古墳	103-34-44		(5)											
L363	窓穴住居	古墳	83-16-17		(5)											
L364	窓穴住居	古墳	73-97, 83-07		(5)		194	63								
L365	窓穴住居	古墳	73-95-96		(5)											
L366	窓穴住居	古墳	73-54-64		(2)		194	63								
L367	窓穴住居	古墳	108-51-52		(10)											
L368	窓穴住居	古墳	108-43-44		(10)		194	63								
L369	廻穴		73-73-83	9	(2) (5)											
L370	調査遺構		73		(2) (5)											
L371	窓穴住居	弥生	103-22-23		(5)		194									
L372	矢番															
L373	土坑墓	平安	103-32-42	88	(5)		194								229	100
L374	窓穴住居	古墳	103-85-86		(5) (11)		194		203	78						
L375	土坑	不明	103-87-88		(5) (11)		25									
L376	土坑	古墳	103-43		(5)		25			207	80					
L377	土坑	不明	103-43		(5)		25			205	79					
L378	窓穴住居	古墳	103-55-65	55	(5)		25	194	63		217	88				
L379	窓穴住居	平安	103-34-44		(5)		25	195	63							
L380	土坑	不明	103-44-45		(5)		26									
L381	土坑	不明	103-45-55		(5)		26									
L382	窓穴住居	古墳	103-20-30	56	(7) (8)		26	195			219	80				
L383	窓穴住居	古墳	103-39, 103-30		(7) (8)		26	195								
L384	窓穴住居	弥生	103-39-49		(7) (8)		26	195								
L385	土坑	不明	103-34-35		(5)		26									
L386	窓穴住居	弥生	93-92, 103-02		(5)		26									
L387	窓穴住居	古墳	103-19-29		(7) (8)		195	63	211	77	221	92				
L388	土坑	弥生	73-02-12		(2)											
L389	窓穴住居	弥生	118-32-33	33	(12)		26	195-196	63-64-74		223	94				
L390	窓穴住居	弥生	73-02-03		(2)		196	64			223	94				
L391	土坑群	不明	93-42-53	98	(5)		26									
L392	窓穴住居	弥生	93-01, 103-01		(5)		26	196	64		221	92				
L393	窓穴住居	古墳	93-96-97		(5)		196			207	80	223	94			
L394	調査遺構	不明	101, 101, 103		(7) (8)											
L395	窓穴住居	弥生	93-74-84		(5)											
L396	土坑	不明	103-08-09		(5)										229	99
L397	窓穴住居	不明	108-71-72		(5)		196	64								
L398	窓穴住居	古墳	103-02-03		(5)		197	64			219	80				
L399	調査遺構	不明	93, 103		(5)											
L400	窓穴住居	不明	93, 103		(7) (8)		27	197	64		210-221	80, 89-92				
L401	窓穴住居	弥生	83-57		(5)		15									
L402	窓穴住居	弥生	83-56-57		(5)		15	197								
L403	窓穴住居	古墳	83-22-32	70	(5)		197	64								
L404	窓穴住居	弥生	83-03-13		(5)		197									

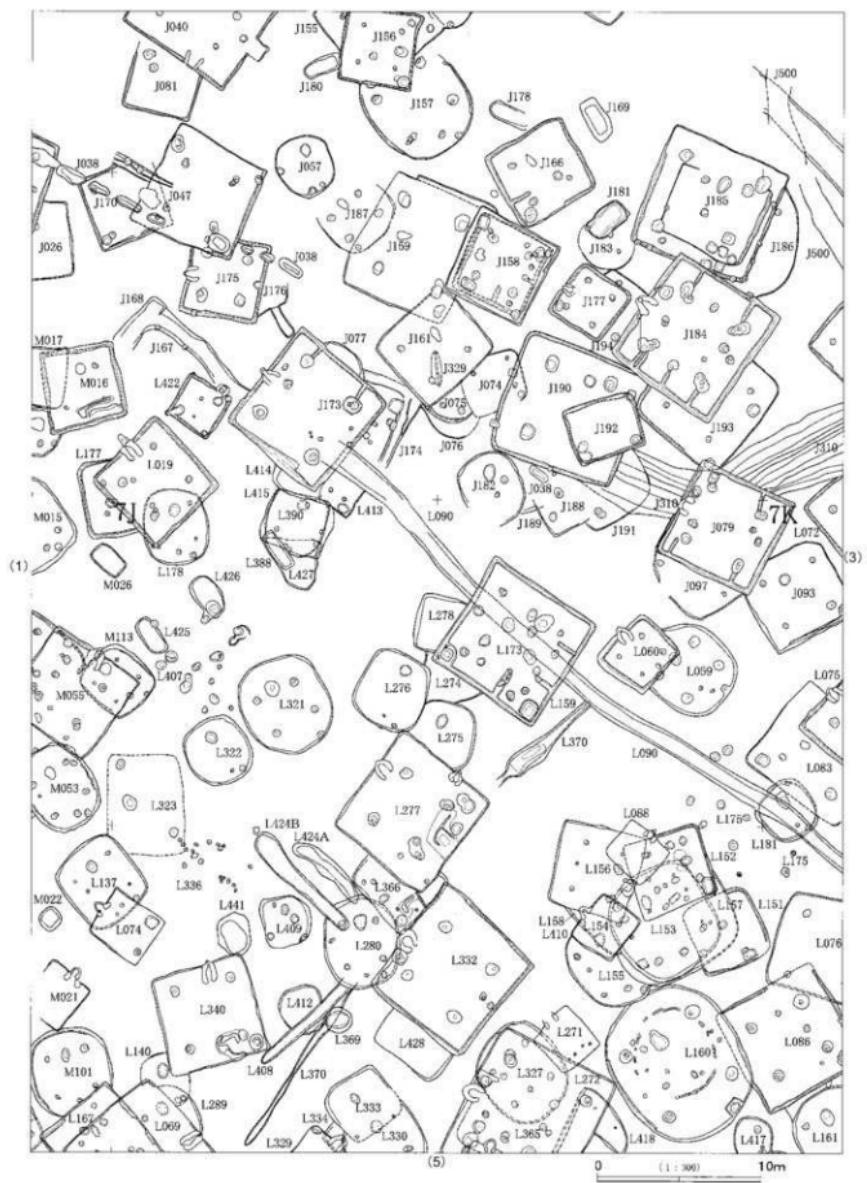
遺構No.	種類	時代	時期	位置	遺構		土器		土製品		石器・石・ガラス製品		金属製品		
					個別図	分布図	図版	実測図	図版	実測図	図版	実測図	図版	実測図	
L405	矢番		—												
L406	竪穴	縄文	早期	9.3-07	9	(5)	27								
L407	土坑群	不明		7.3-21-31		(2)									
L408	円形環狀	弥生	後期	7.3-73-82	34-35	(2) (5)					223	94			
L409	竪穴住居	古墳	前期	7.3-62-63		(2)		197							
L410	竪穴住居	不明		7.3-57-67		(2)									
L411	矢番		—												
L412	竪穴住居	弥生	後期	7.3-72-73		(2)									
L413	竪穴住居	古墳	中期	6.3-93, 73-03		(2)		197							
L414	竪穴住居	古墳	中期	6.3-92-93		(2)		197	64						
L415	竪穴住居	弥生	後期	7.3-02-03		(2)		197							
L416	竪穴住居	弥生	後期	6.3-31-41		(5)	27	197	64						
L417	竪穴住居	弥生	後期	7.3-99, 78-90		(5) (6)									
L418	竪穴住居	弥生	後期	7.3-07, 83-07		(5)		198	74						
L419	竪穴住居	弥生	後期	6.3-11-12	33	(5)	23	198	64-74						
L420	土坑群	不明		9.3-07-08		(5)									
L421	土坑群	古墳	中期	8.8-90, 98-00	80	(6)		198	64						
L422	竪穴住居	平安		6.3-80-81	87	(2)	27	198	64-75			223	100		
L423	竪穴住居	古墳	前期	8.3-21-22		(5)									
L424A	円形環狀	弥生	後期	7.3-52-53	34-35	(2)		198	65						
L424B	円形環狀	弥生	後期	7.3-52-63	34-35	(2)									
L425	土坑	不明		7.3-10-20		(1) (2)									
L426	土坑	不明		7.3-11		(2)									
L427	土坑	不明		7.3-02-12		(2)									
L428	竪穴住居	古墳	前期	7.3-84-85		(2) (5)	199	65							
L429	竪穴住居	弥生	後期	8.3-32-42		(5)	27	199			223	94			
L430	土坑	不明		10.8-30-31		(10)							223	99	
L431	土坑	不明		9.3-21-22		(5)									
L432	竪穴	縄文		8.3-83-93	9	(5)	27								
L433	竪穴住居	古墳	前期	8.3-83-84		(5)		199							
L434	土坑	平安		9.3-44-54	88	(5) (8)		199							
L435	竪穴住居	弥生	後期	9.3-92-93		(6)	27	199	65						
L436	竪穴住居	弥生	後期	9.3-94, 103-04		(6)	27	199							
L437	竪穴住居	不明		9.3-94		(6)		199							
L438	矢番		—												
L439	土坑	不明		10.3-60-61		(6)	25								
L440	竪穴住居	不明		8.3-62		(5)									
L441	理葬施設	弥生	後期	7.3-61-62	34-35-36	(2)							223	巻4, 95	
グリッド							199	65	204-205-207	68-79-80	210-212-217-218-219-221-223	5-6, 83-88-89-90-92-94	224-230	97-100	
トレンチ							200	65	205-206	79-80	213-217-218-221	5, 84-88-89-92	230	100	
表探										204	78	218	5, 89	224	97
不明													230	100	



第115図 L区遺構分布分割図



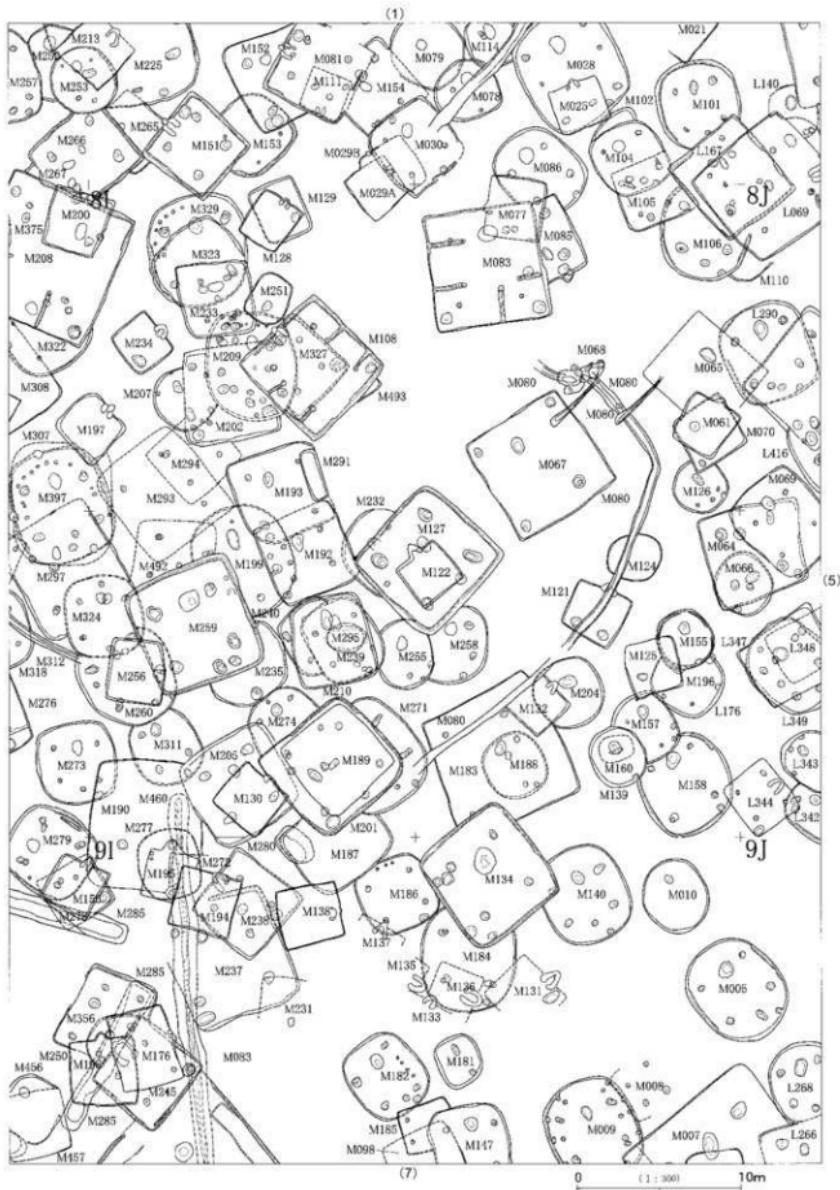
第116図 遺構分布図（1）



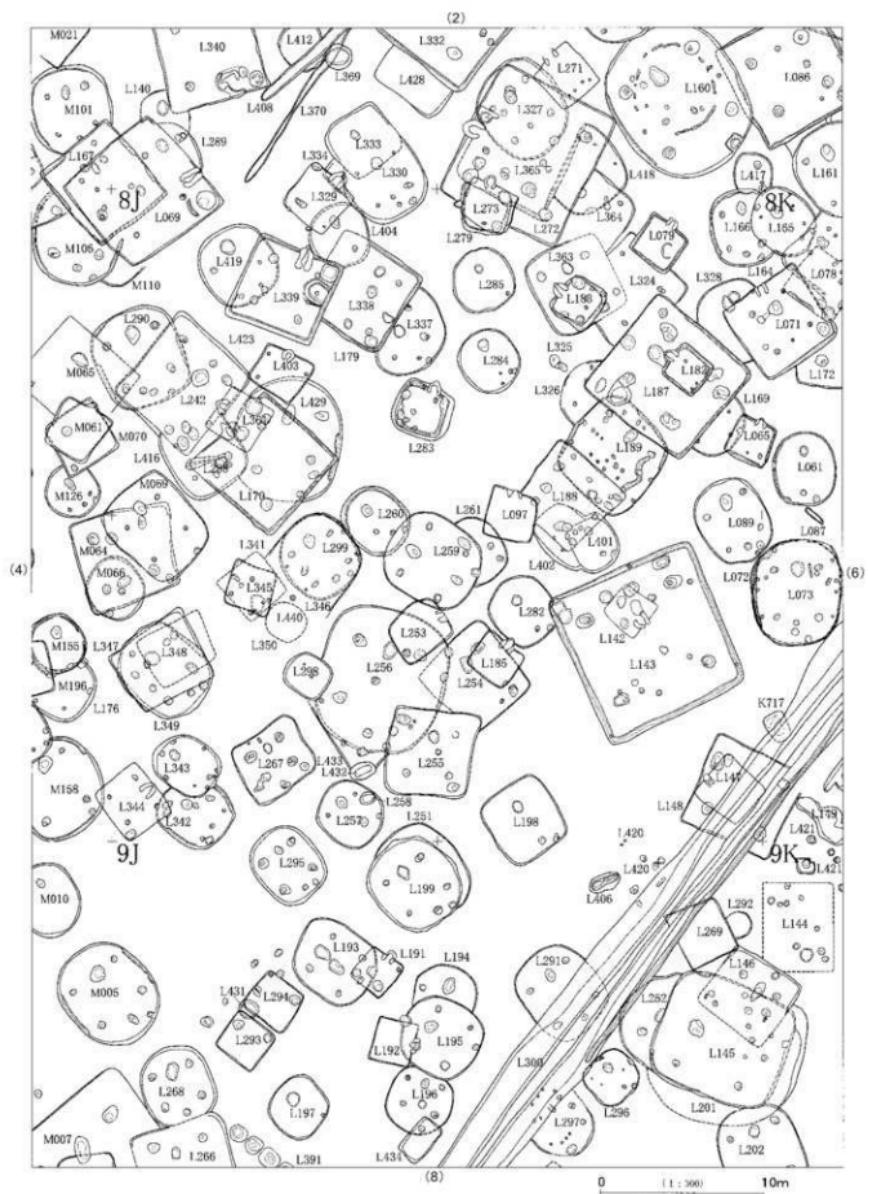
第117図 遺構分布図（2）



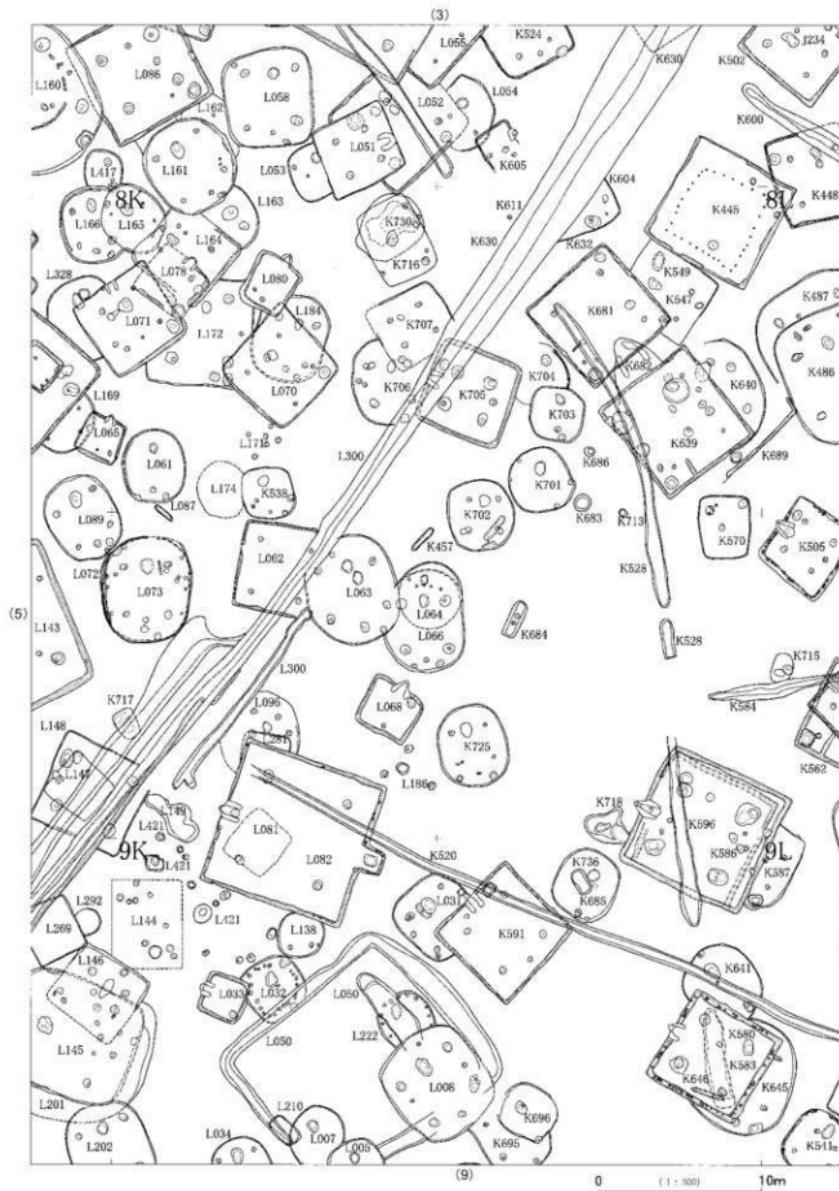
第118図 遺構分布図（3）



第119図 遺構分布図(4)



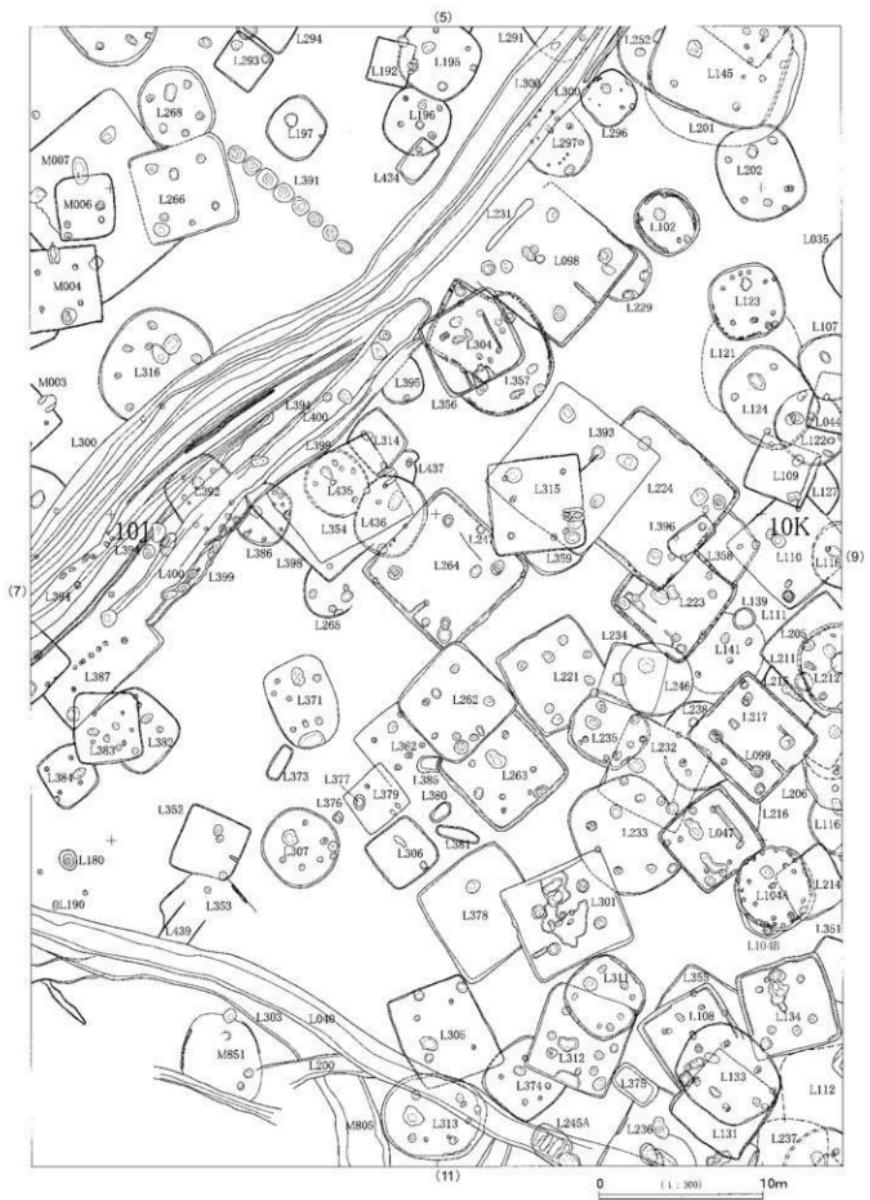
第120図 遺構分布図（5）



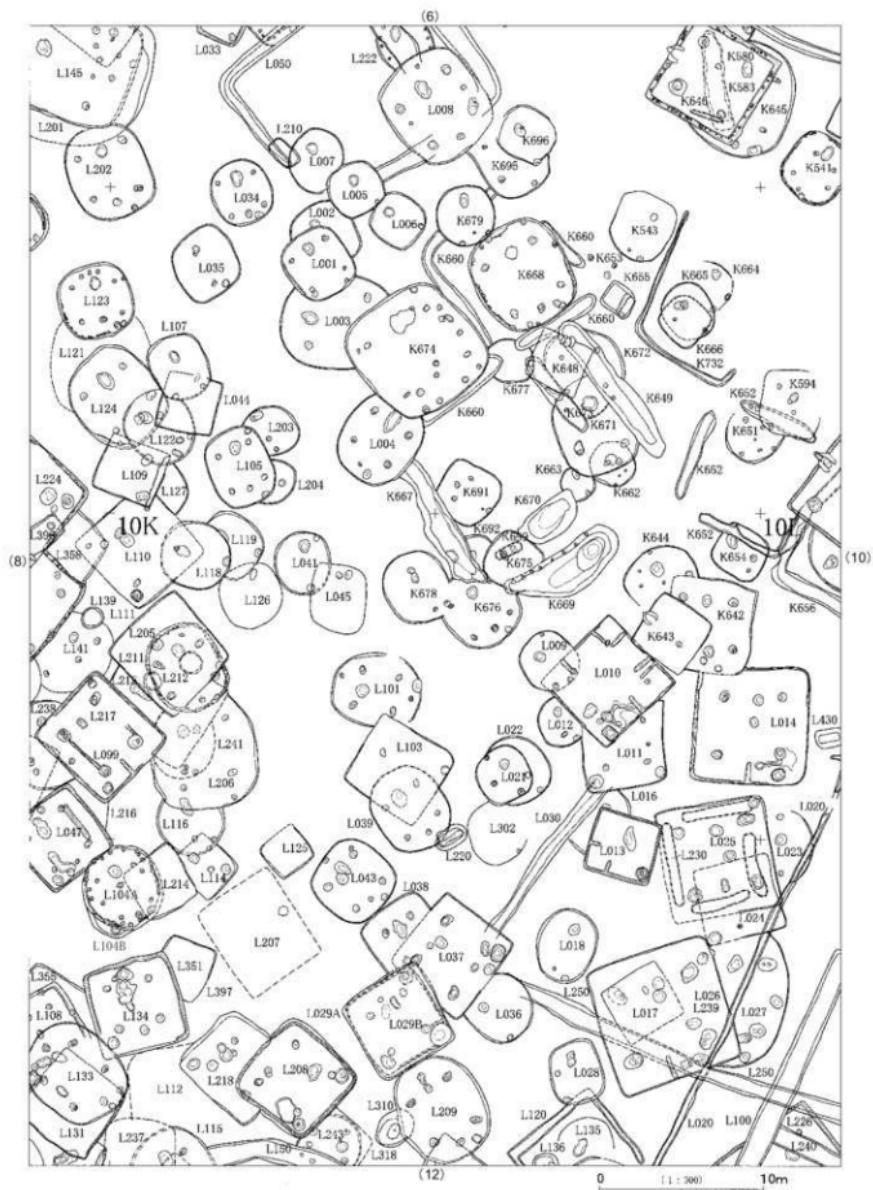
第121図 遺構分布図（6）



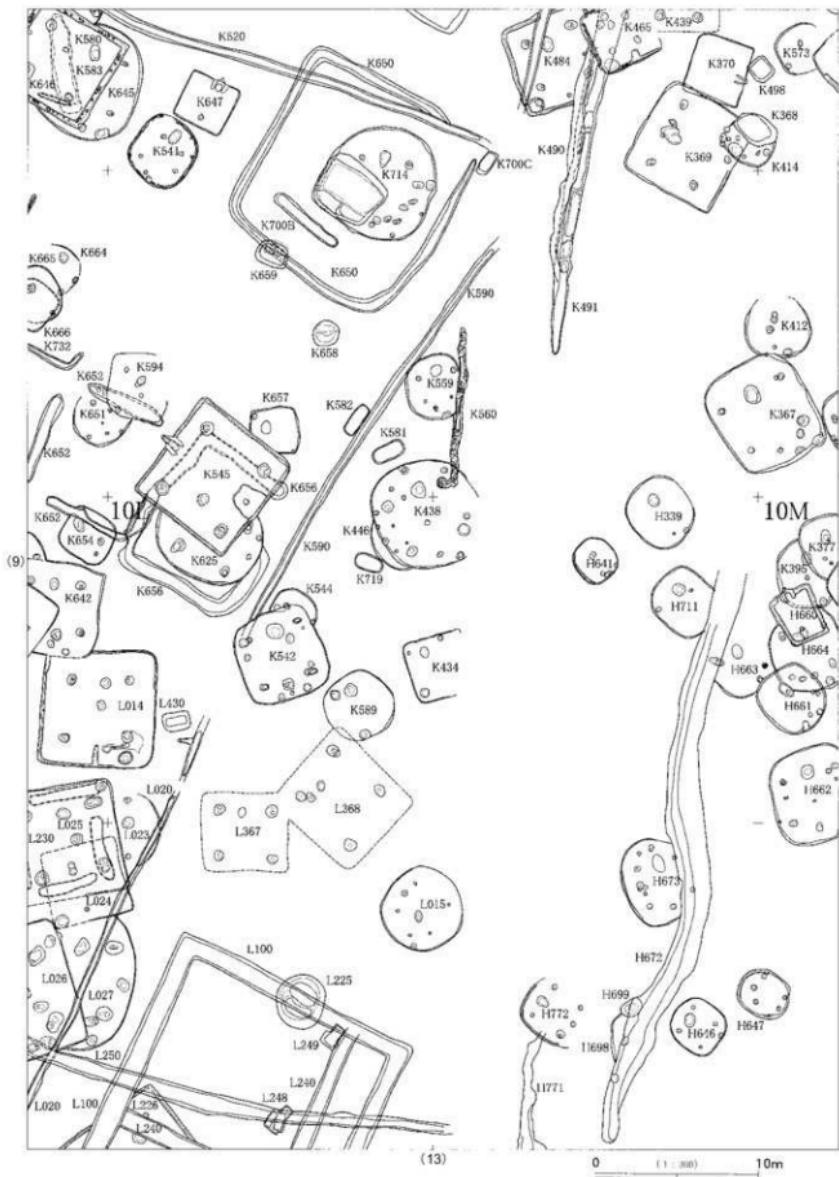
第122図 遺構分布図（7）

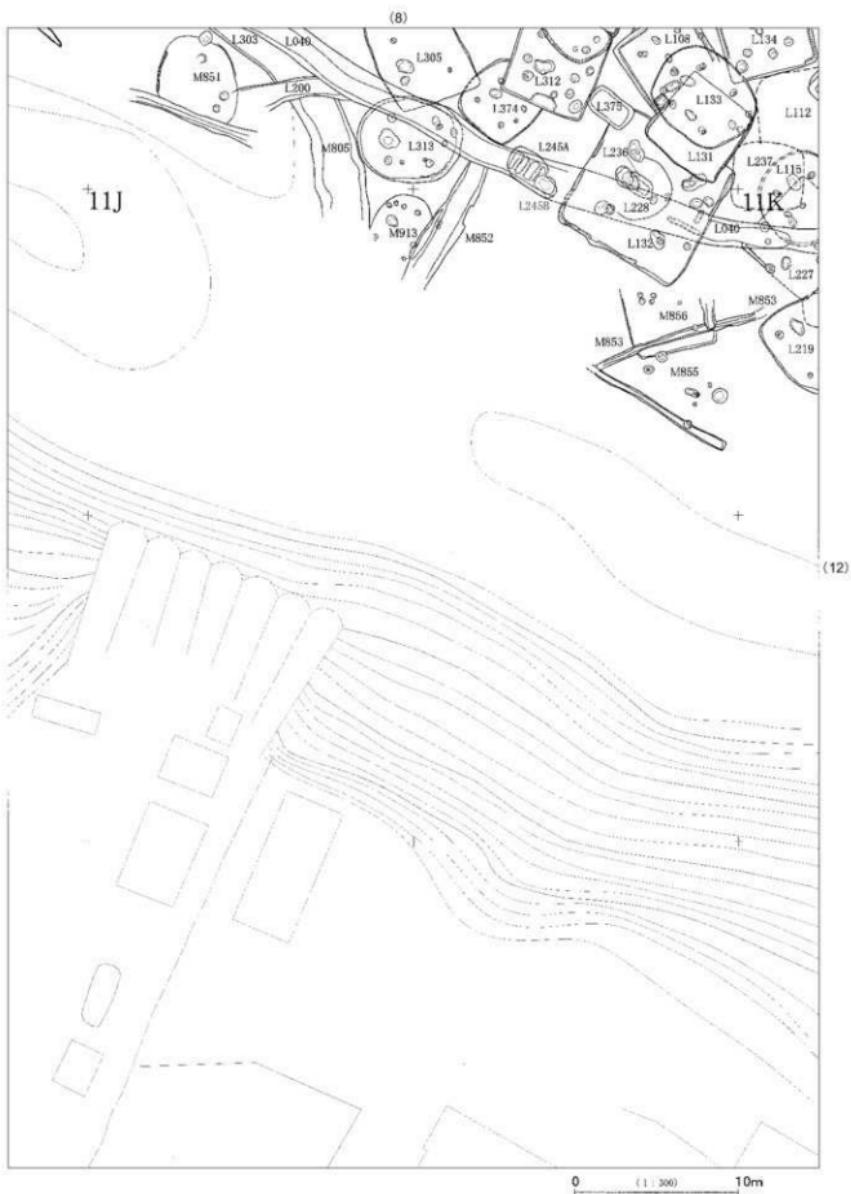


第123図 遺構分布図（8）

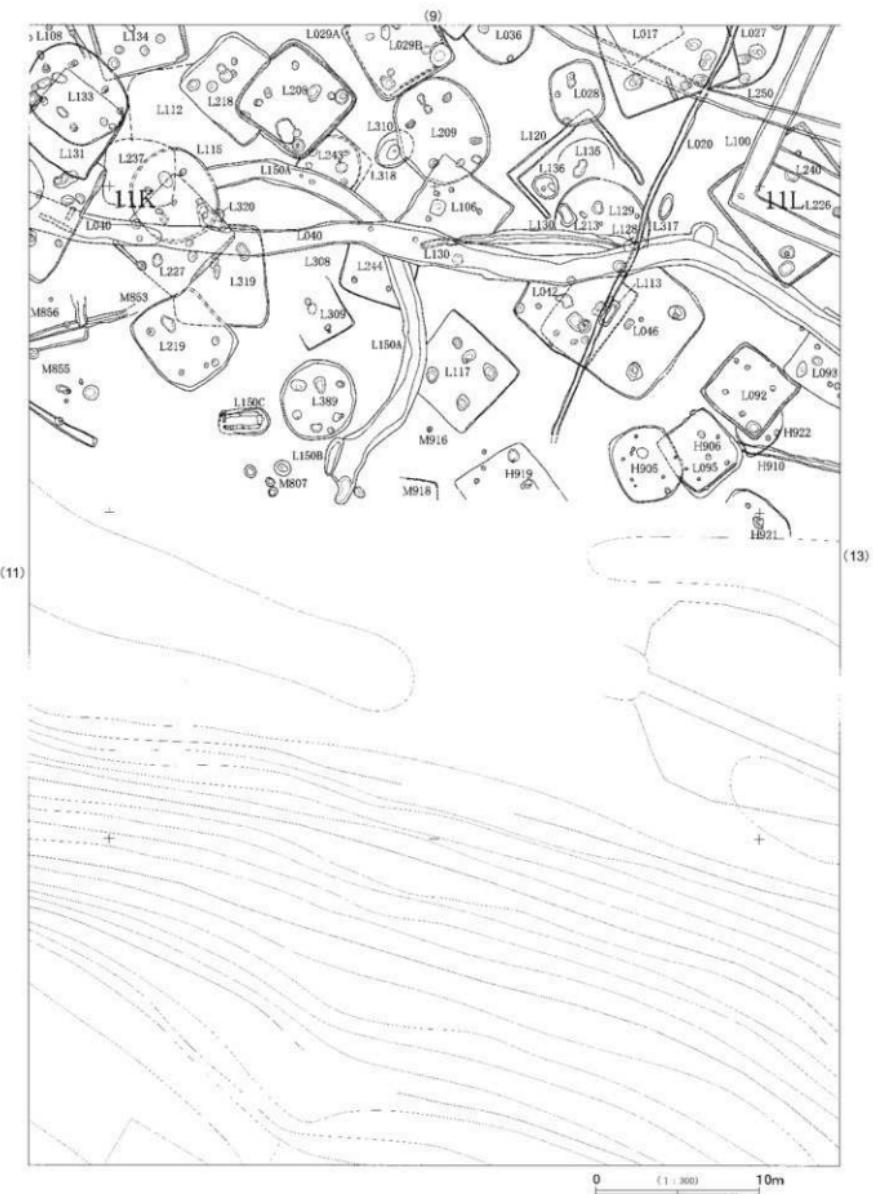


第124図 遺構分布図（9）

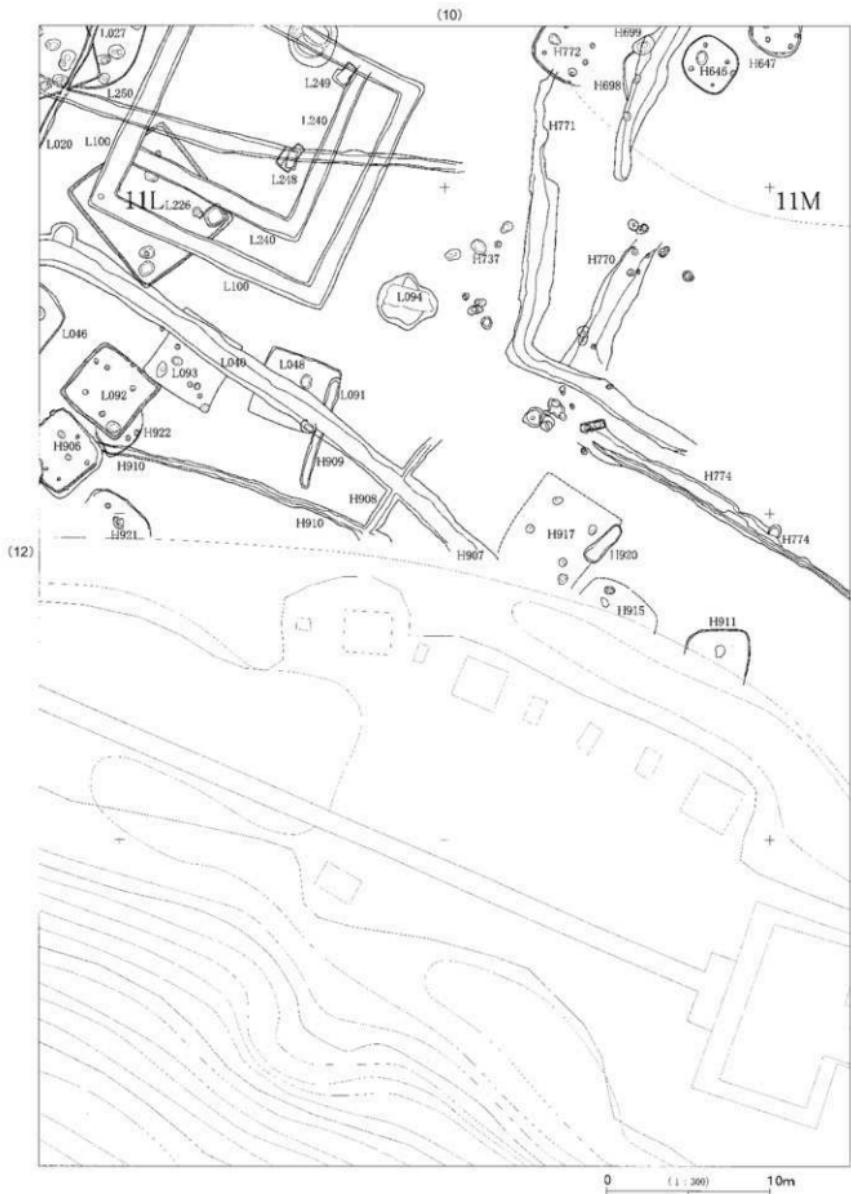




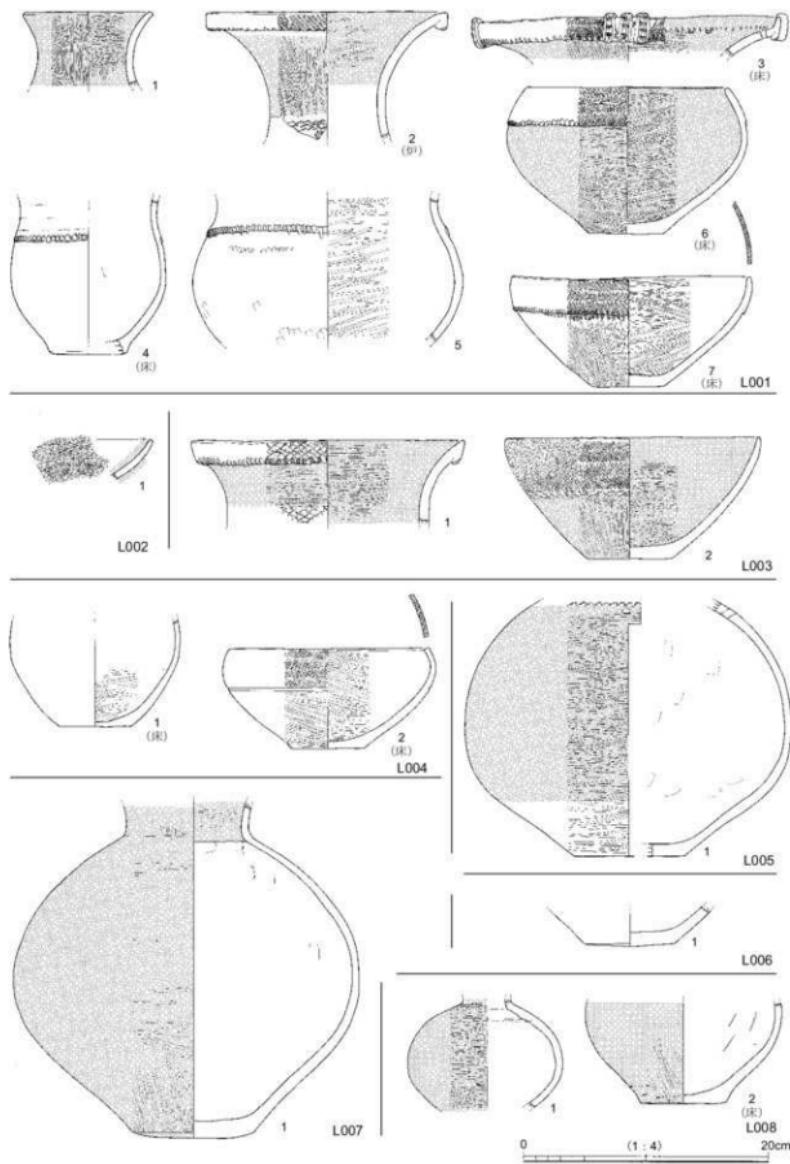
第126図 遺構分布図 (11)



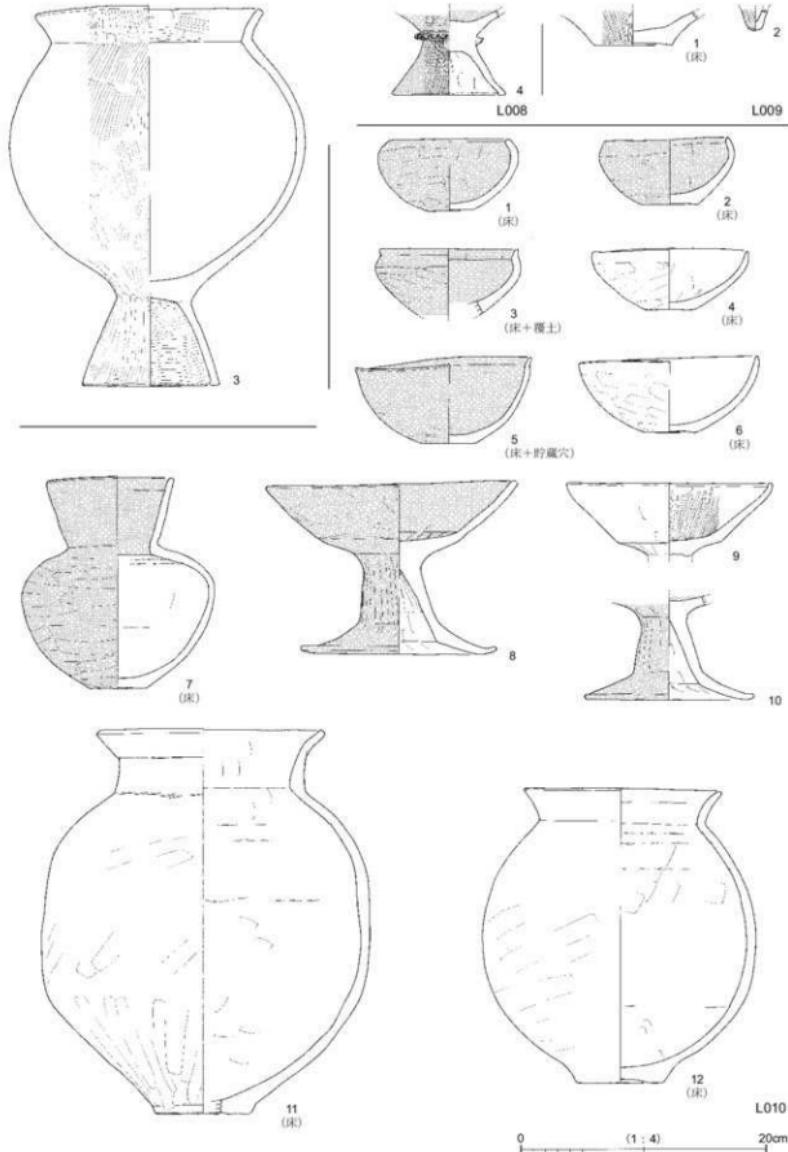
第127図 遺構分布図 (12)



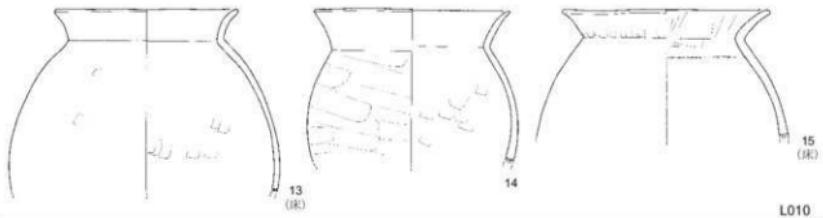
第128図 遺構分布図(13)



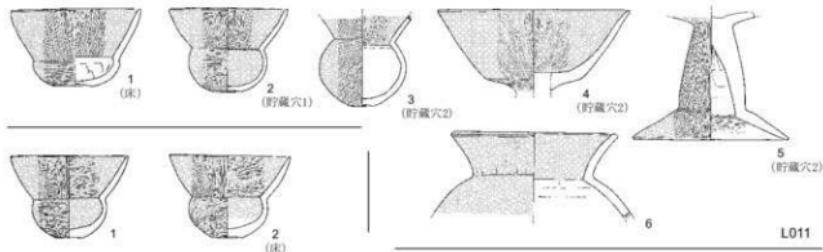
第129図 遺構出土土器（1）



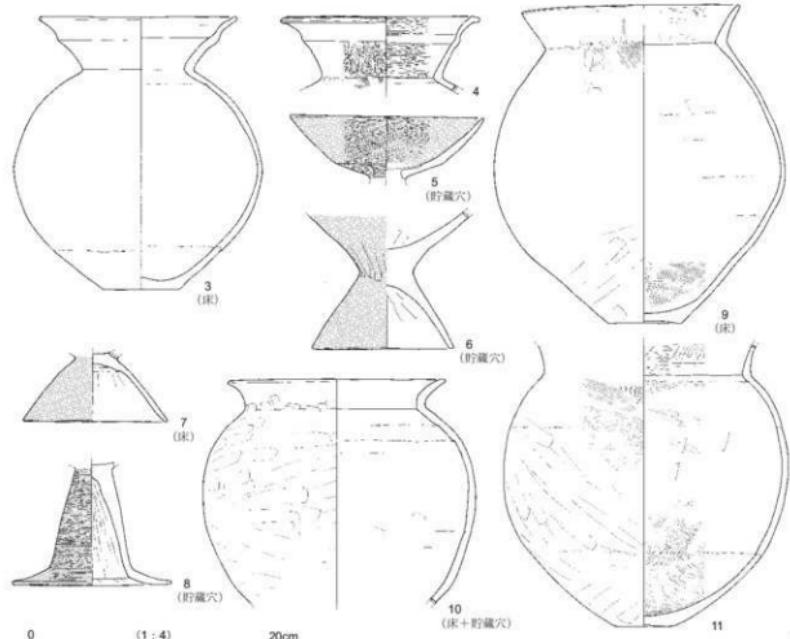
第130図 遺構出土土器（2）



L010

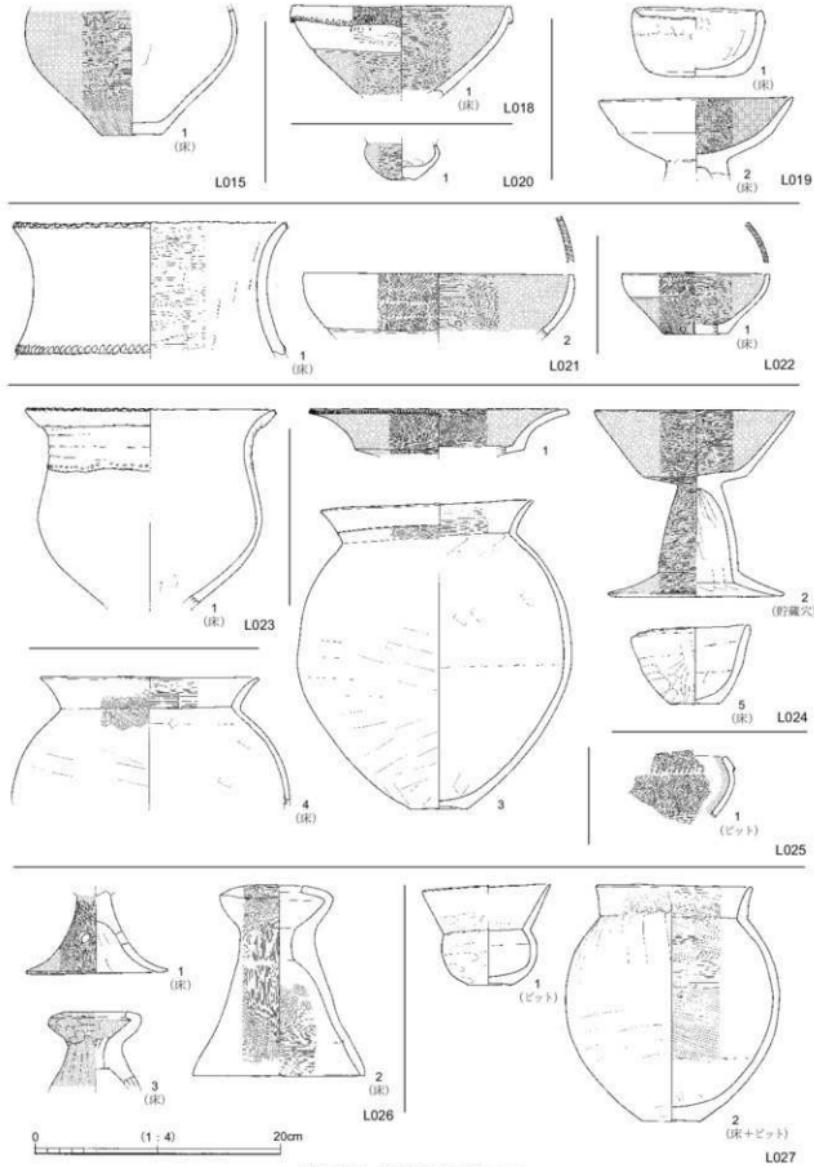


L011

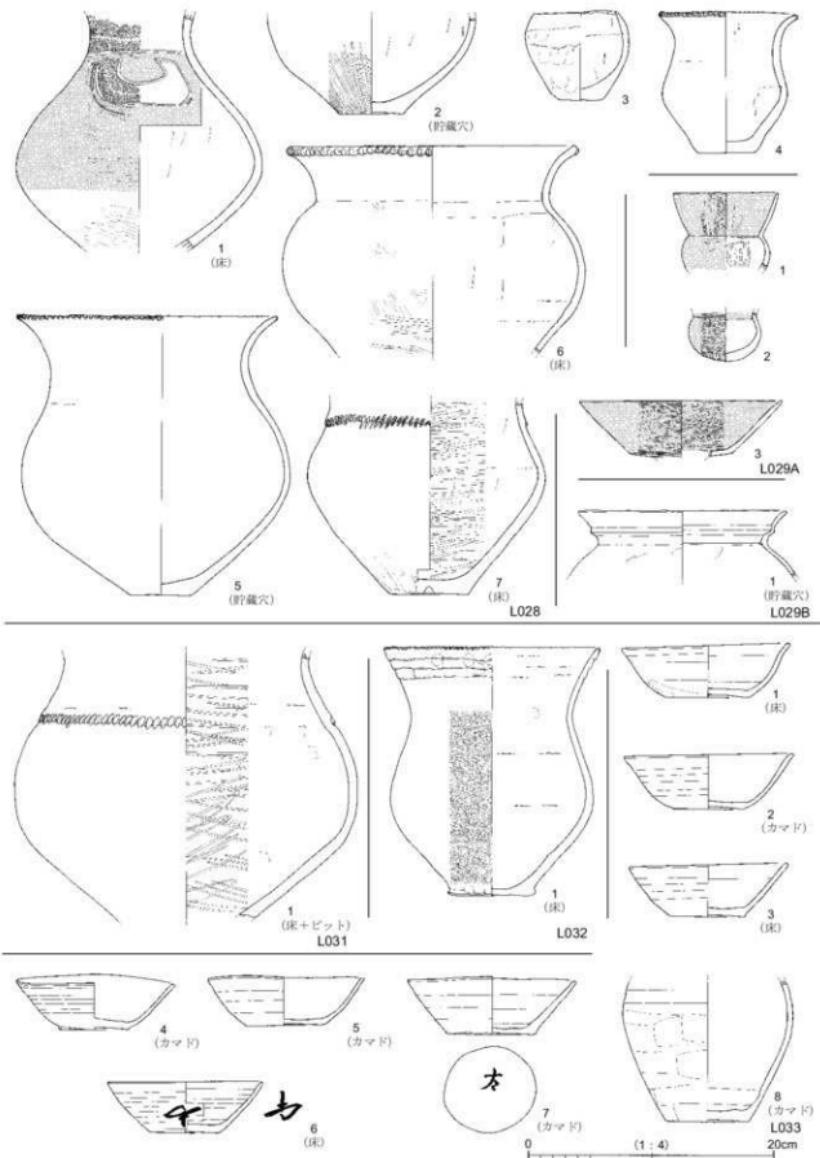


L013

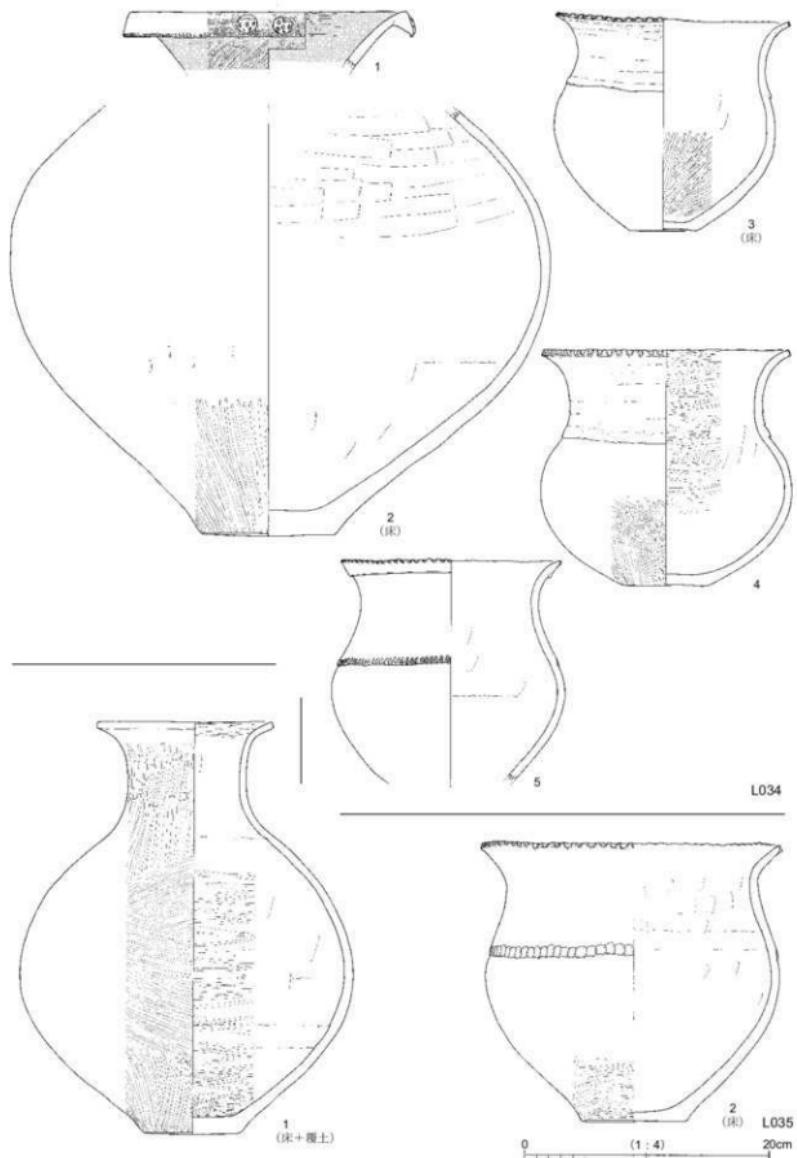
第131図 遺構出土土器（3）



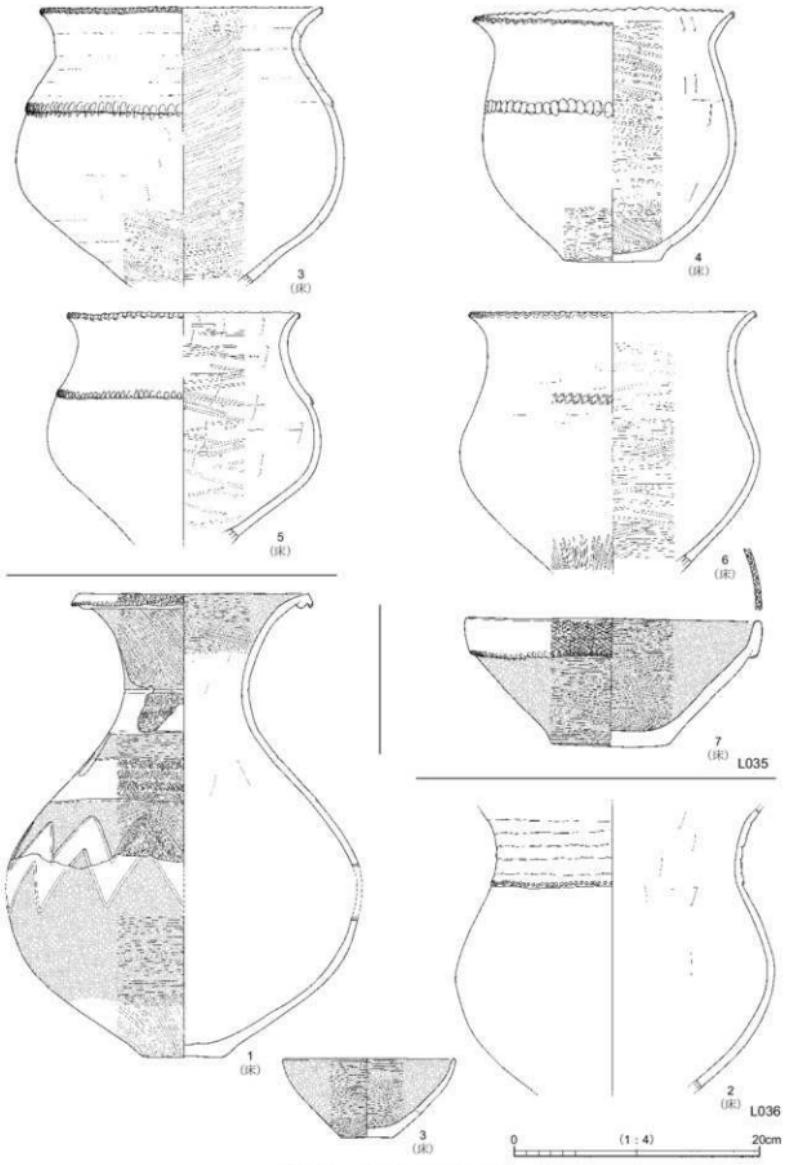
第132図 遺構出土土器 (4)



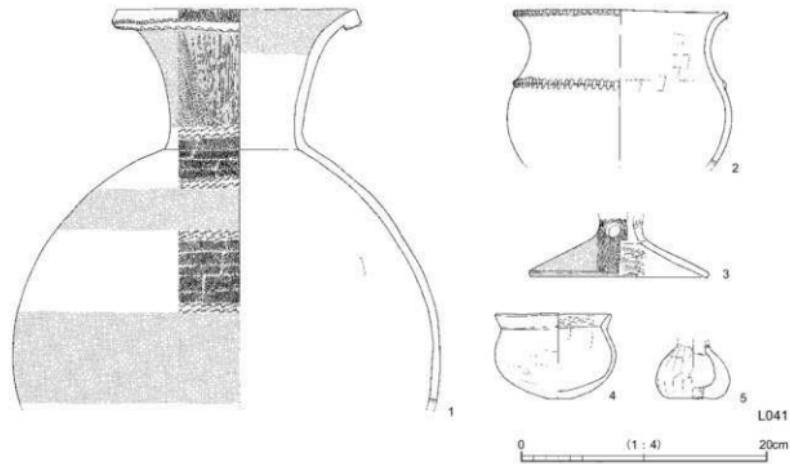
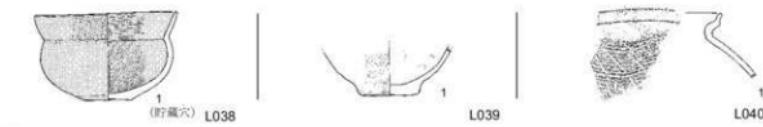
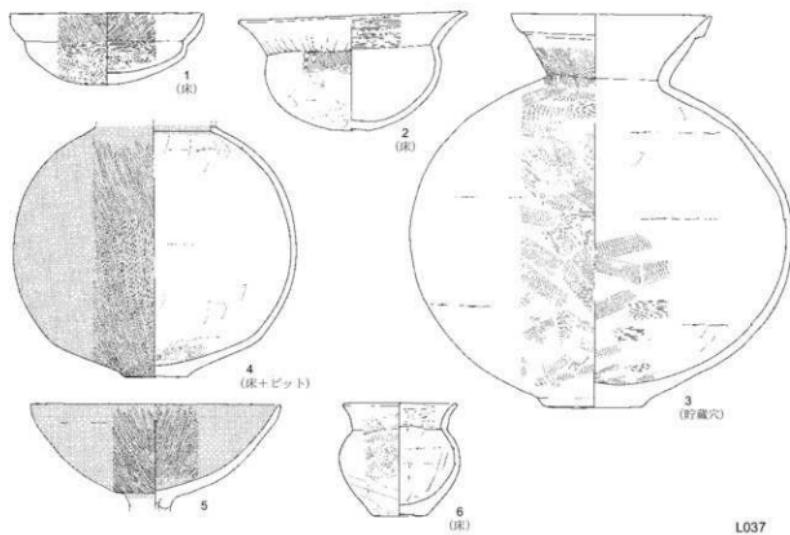
第133図 遺構出土土器 (5)



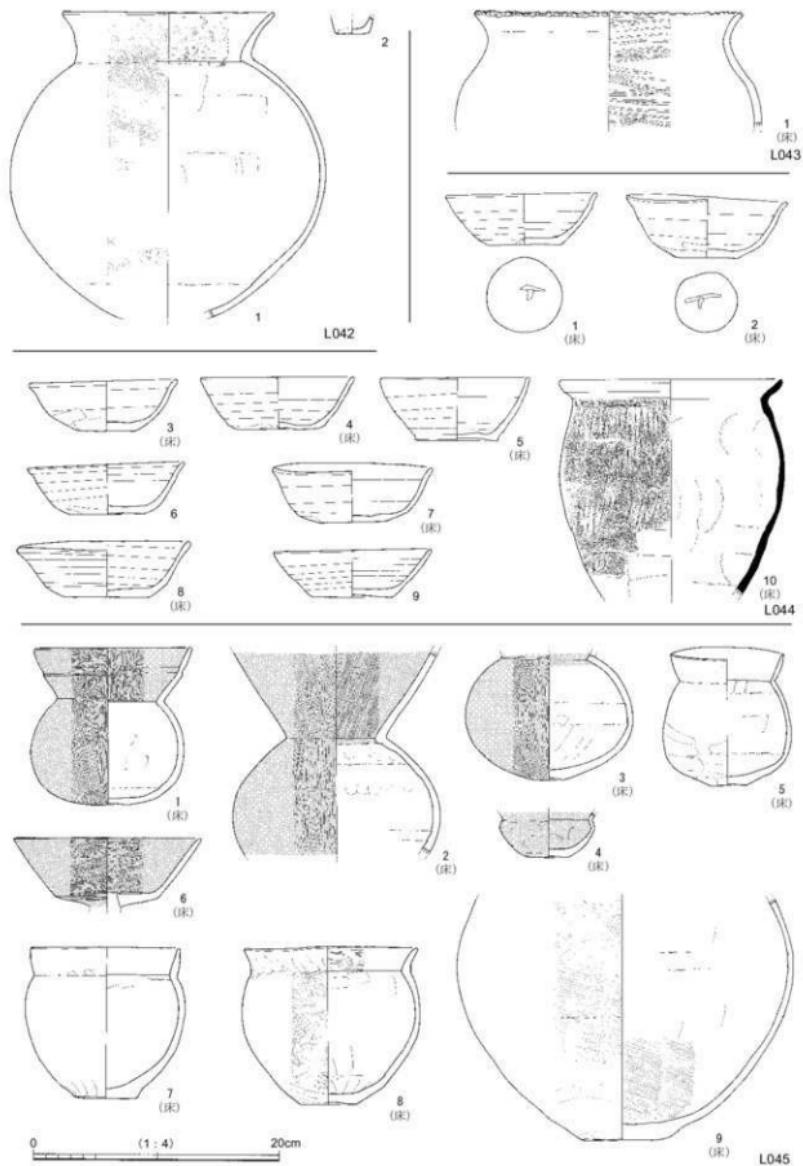
第134図 遺構出土土器（6）



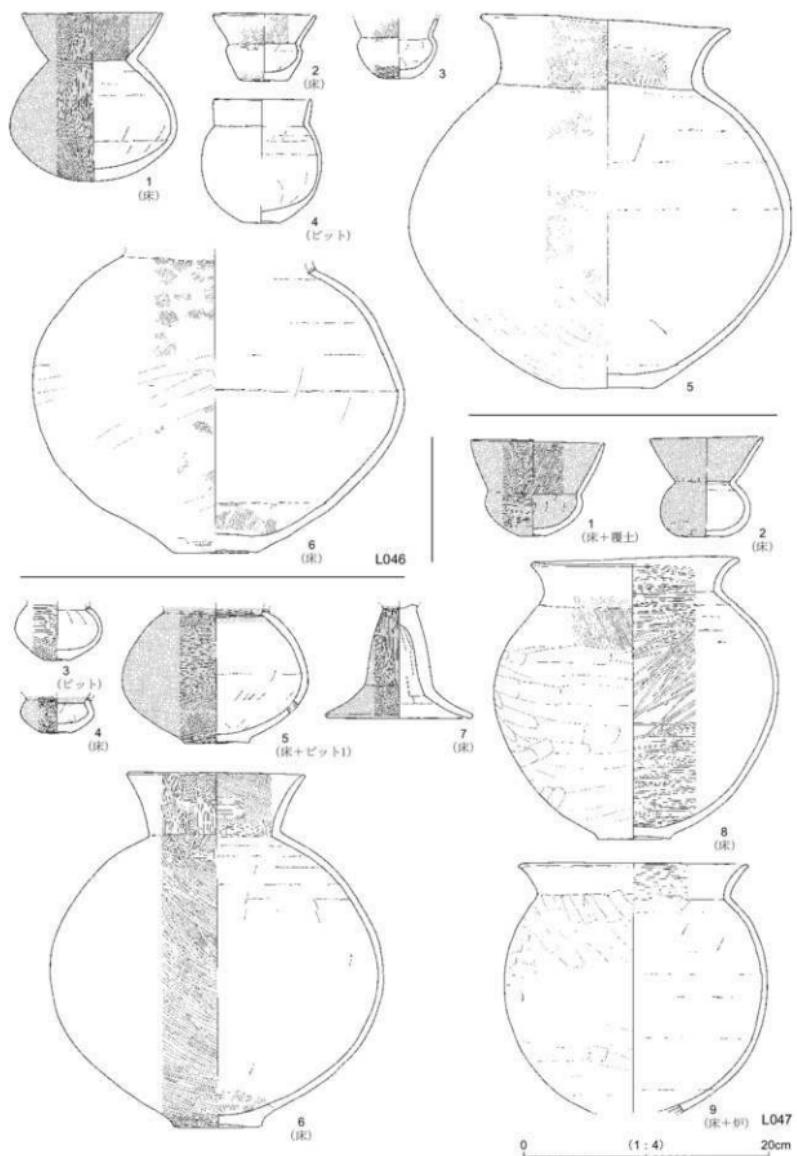
第135図 遺構出土土器 (7)



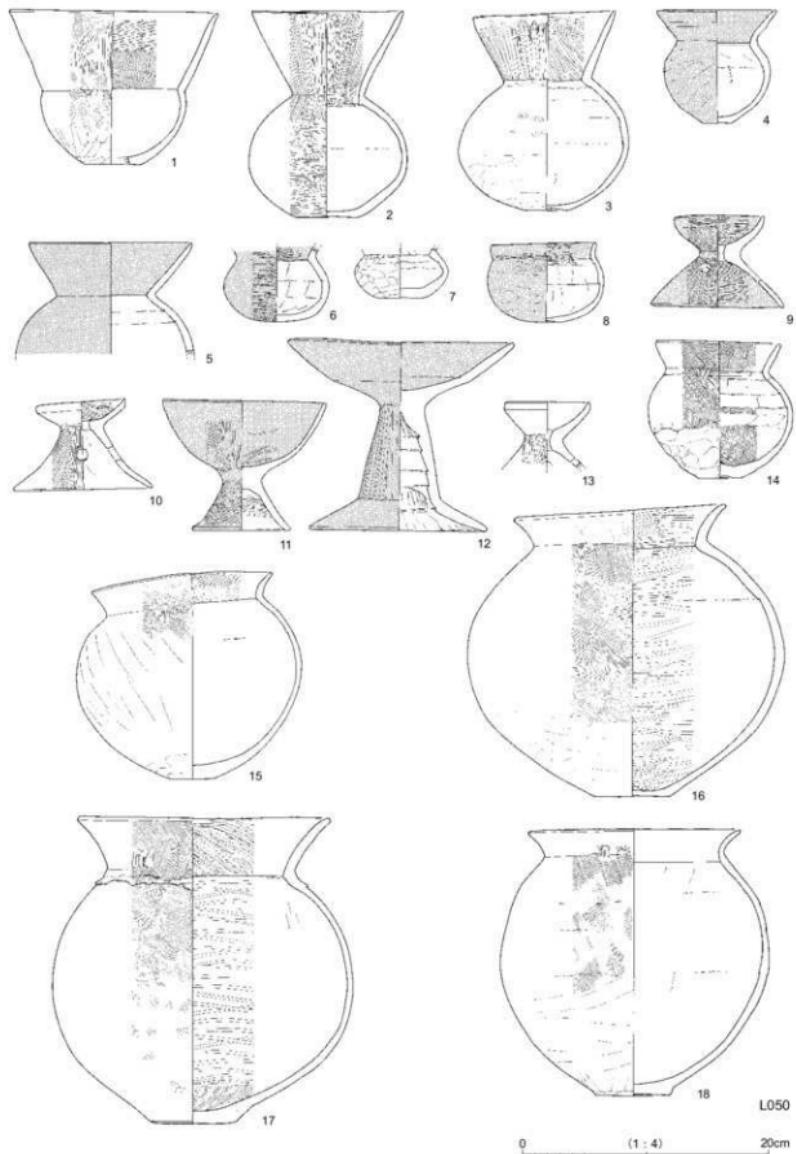
第136図 遺構出土土器 (8)



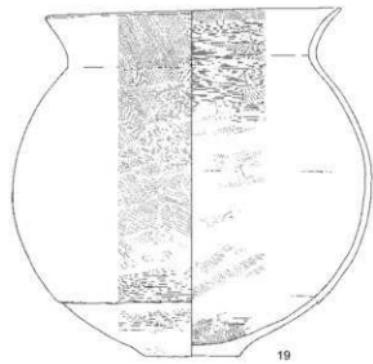
第137図 遺構出土土器 (9)



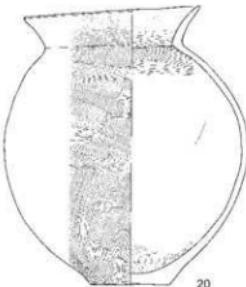
第138図 遺構出土土器 (10)



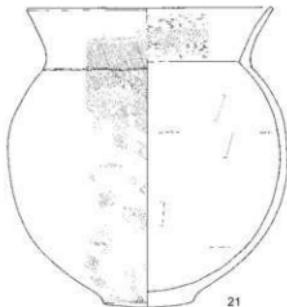
第139図 遺構出土土器 (11)



19



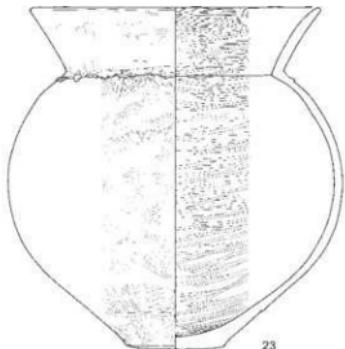
20



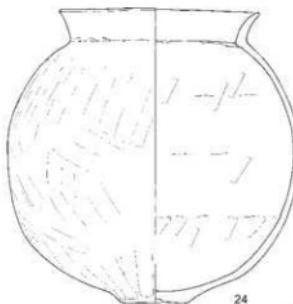
21



22



23

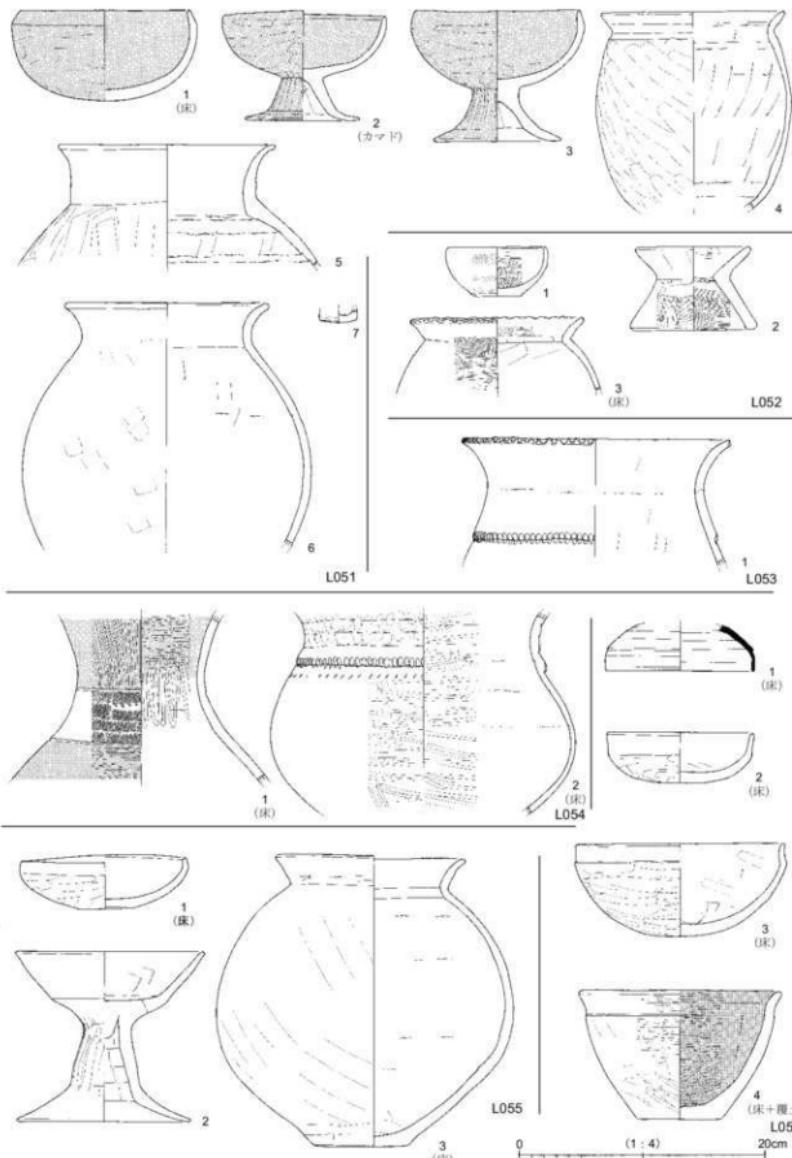


24

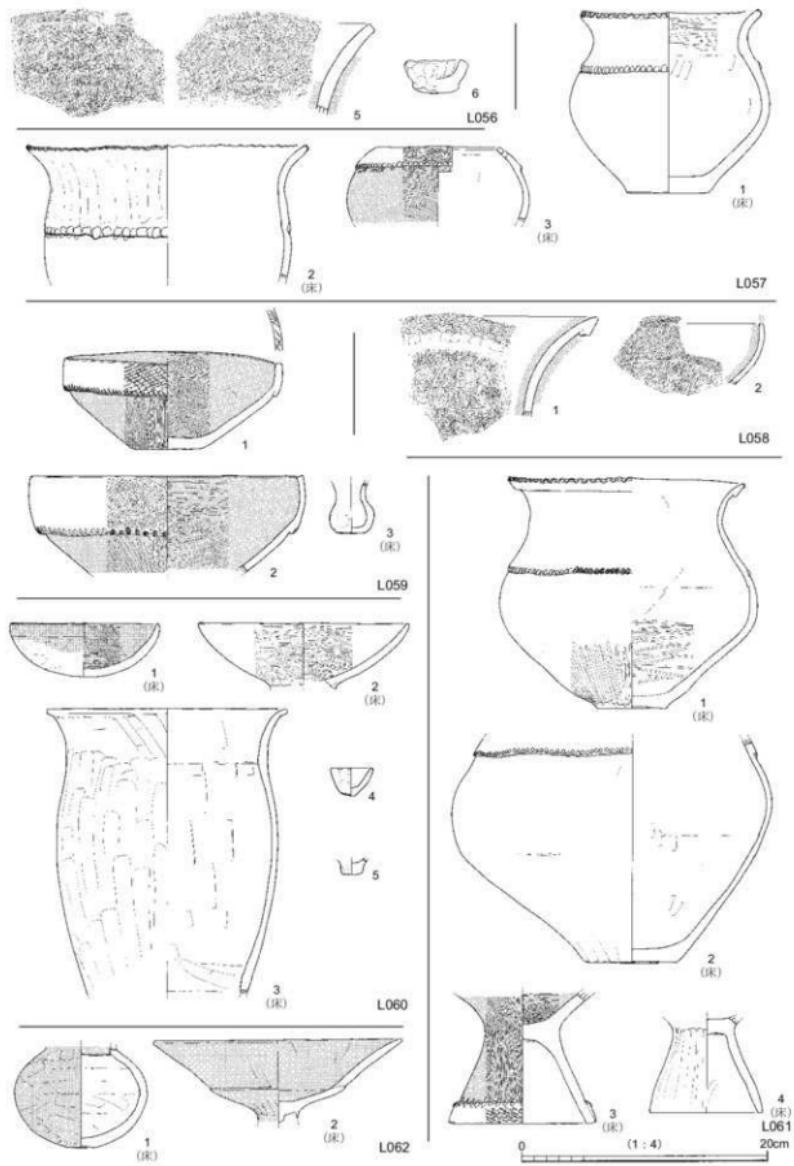
L050

0 (1 : 4) 20cm

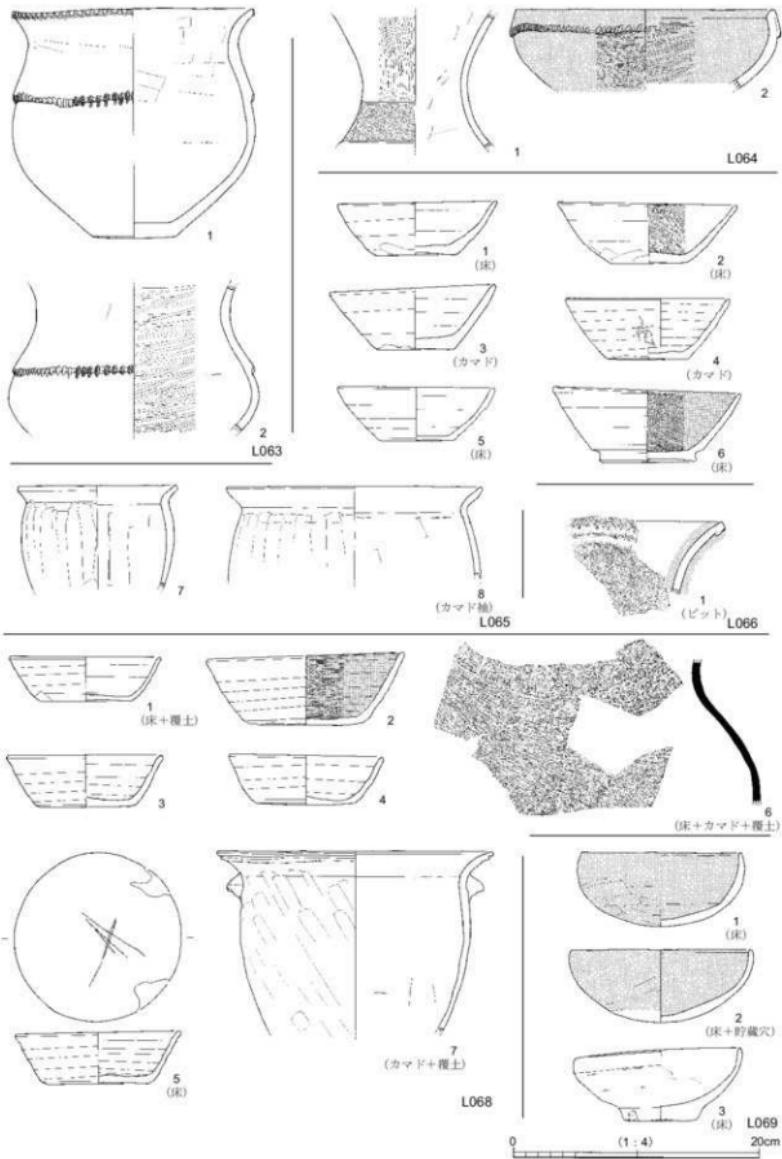
第140図 遺構出土土器 (12)



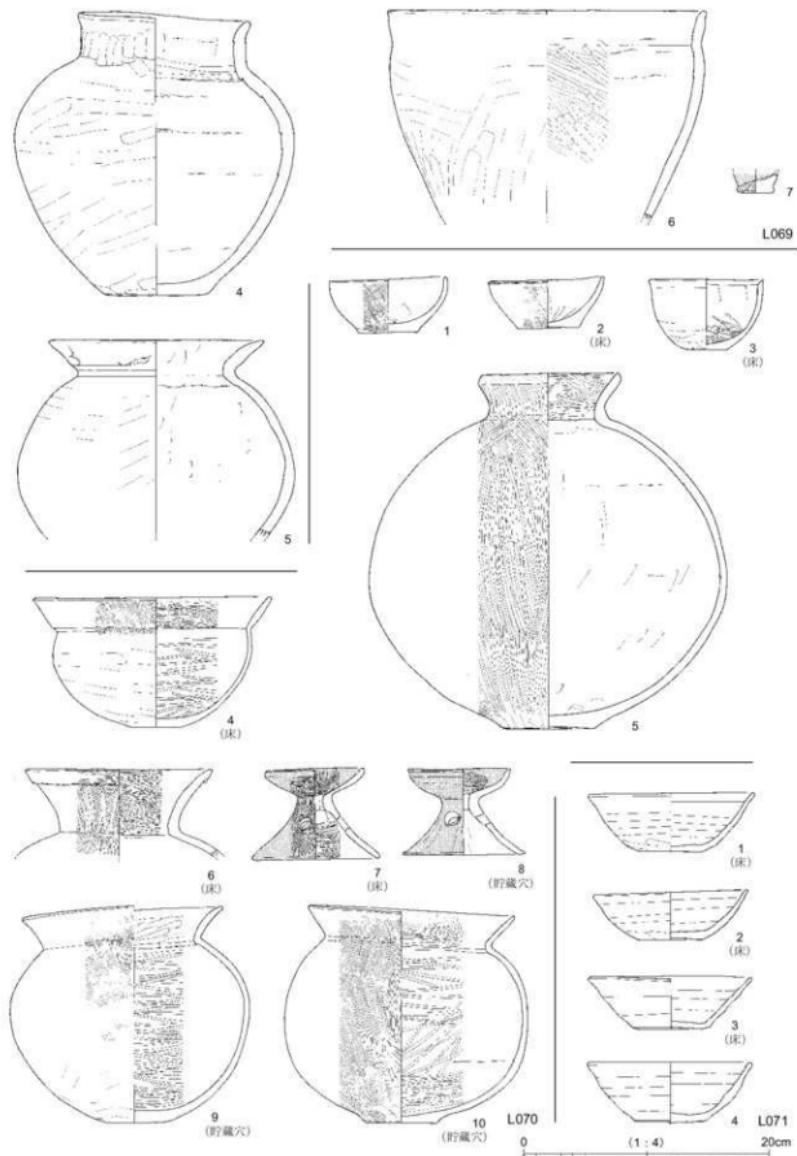
第141図 遺構出土土器 (13)



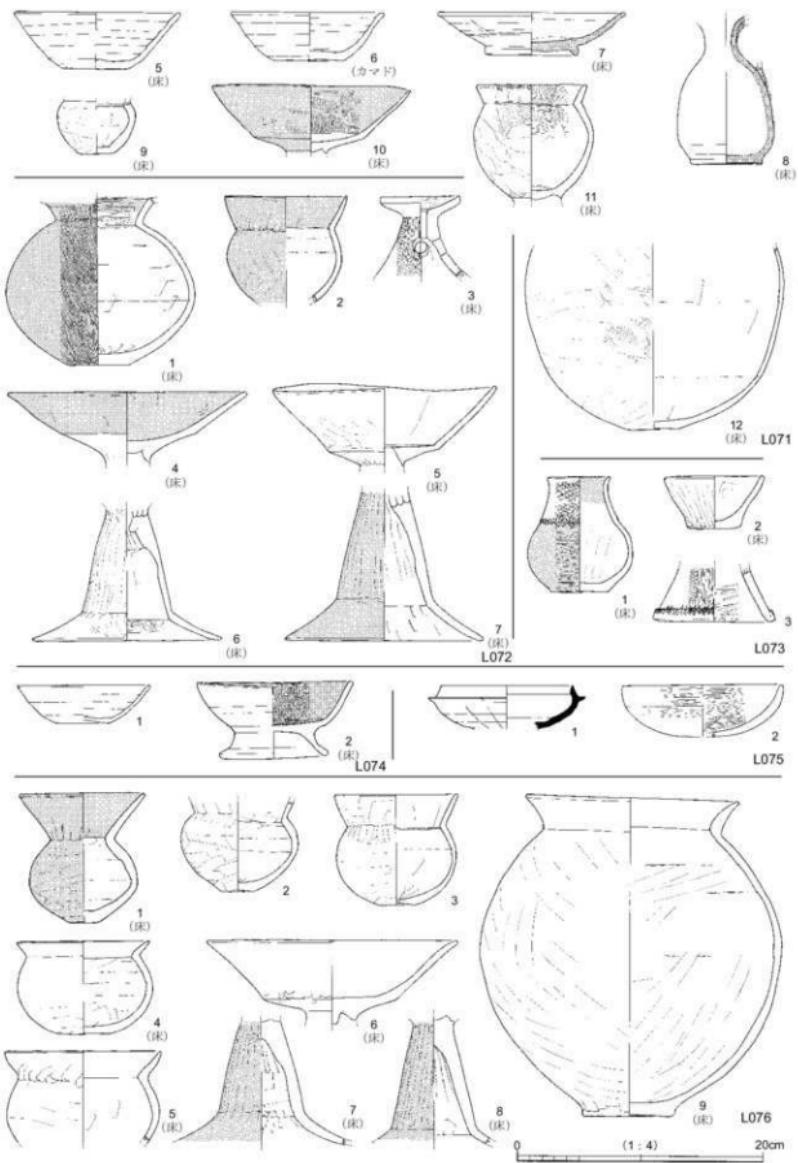
第142図 遺構出土土器 (14)



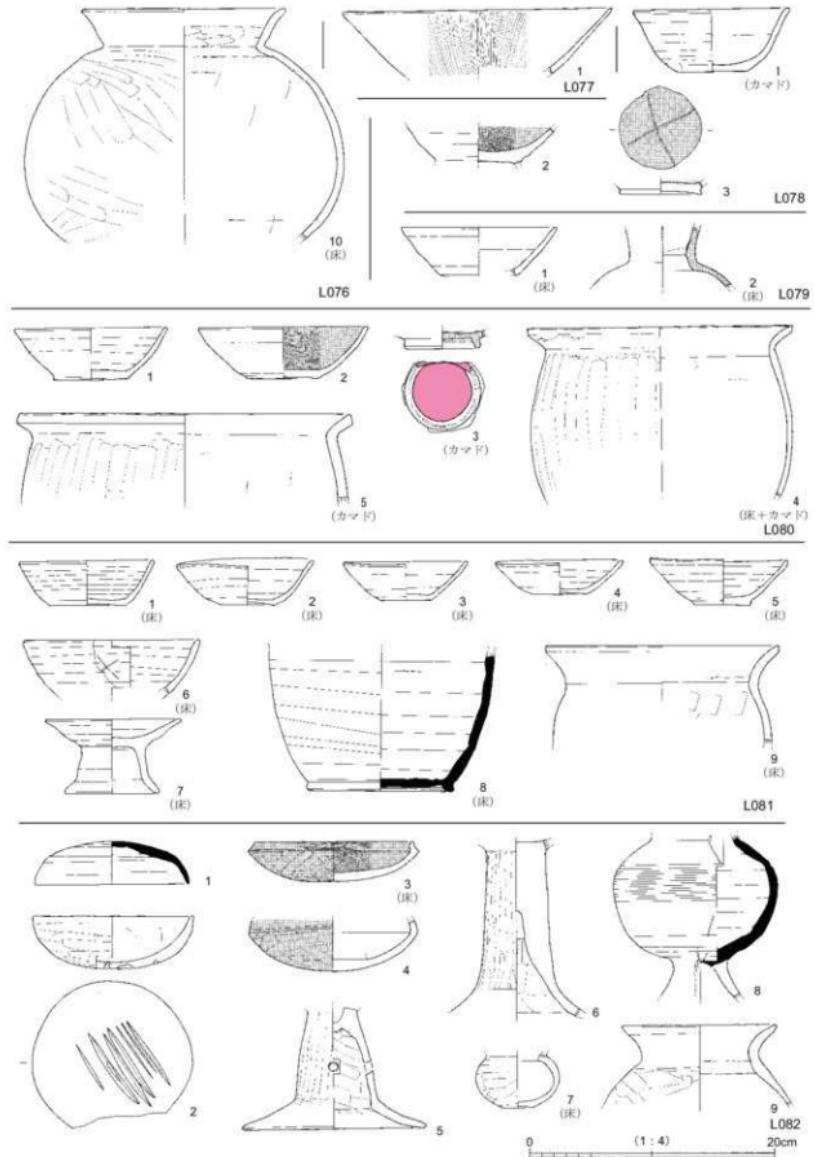
第143図 遺構出土土器 (15)



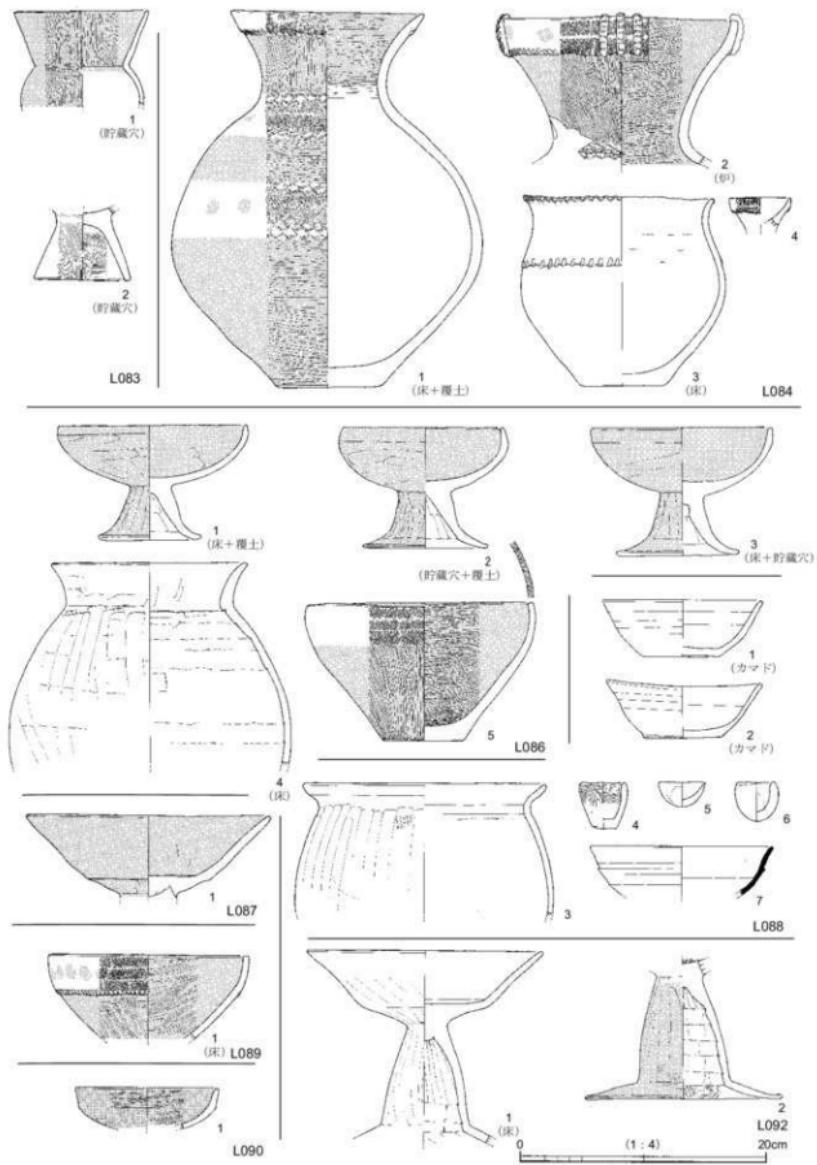
第144図 遺構出土土器 (16)



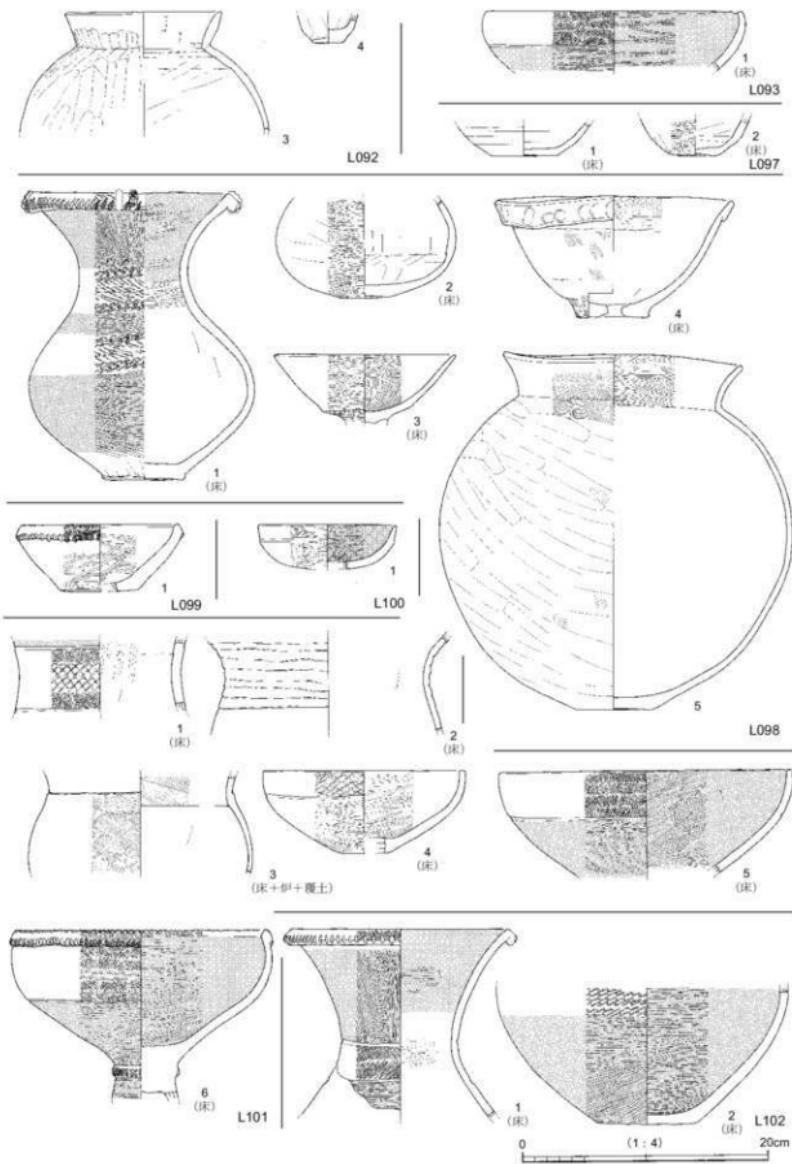
第145図 遺構出土土器 (17)



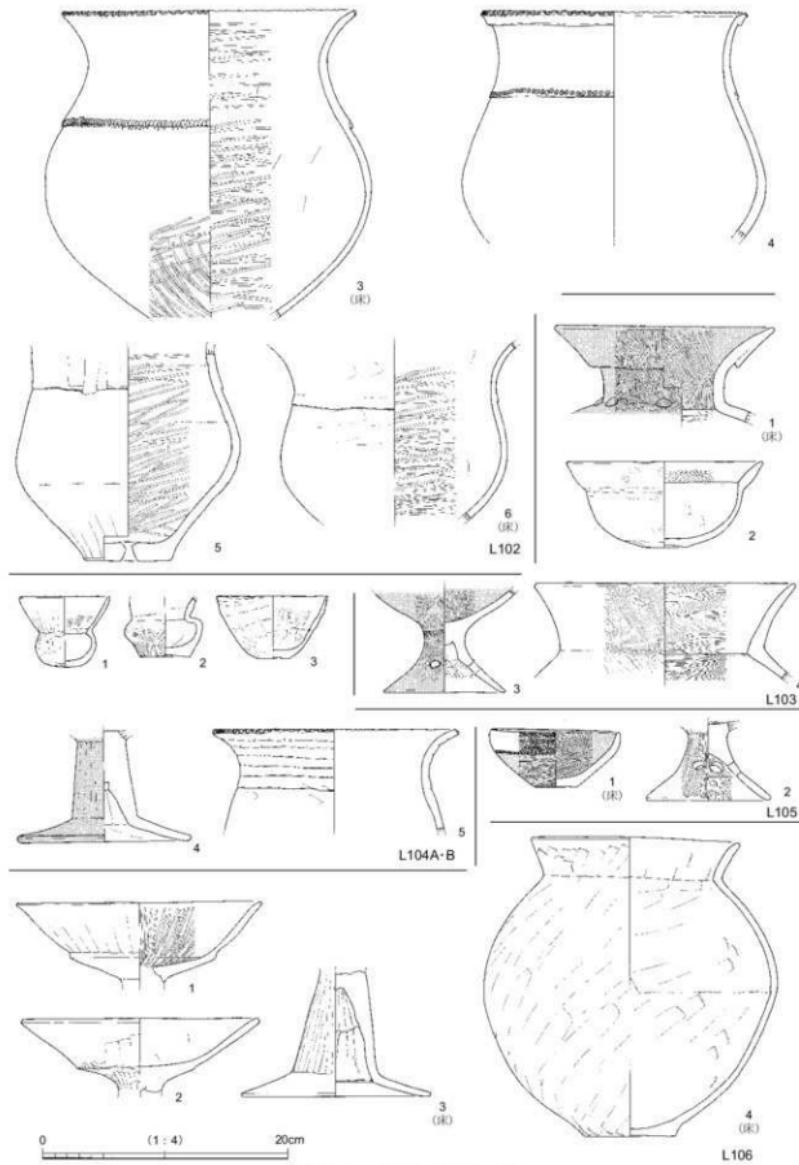
第146図 遺構出土土器 (18)



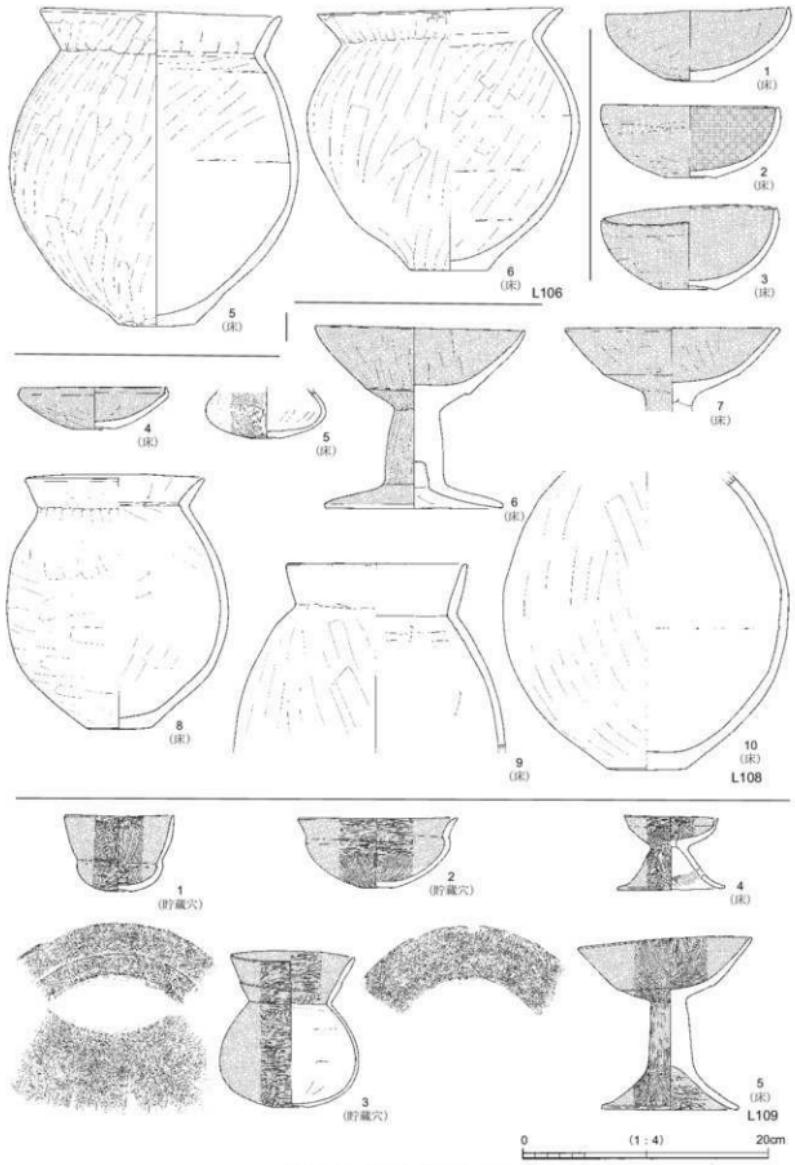
第147図 遺構出土土器 (19)



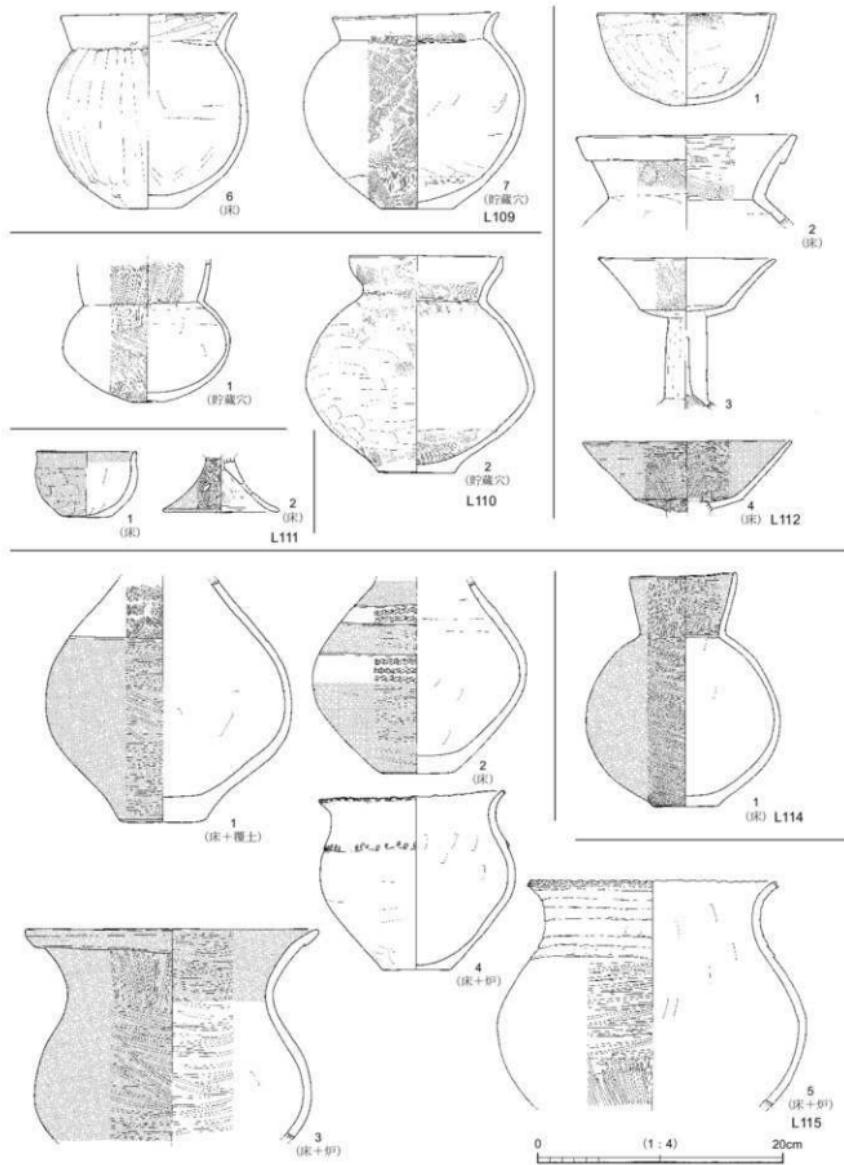
第148図 遺構出土土器 (20)



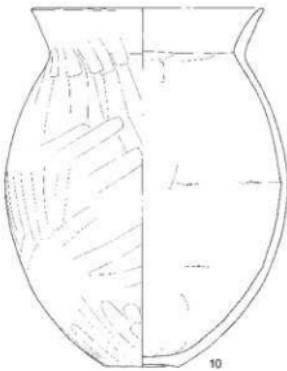
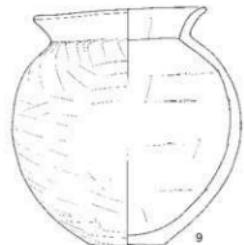
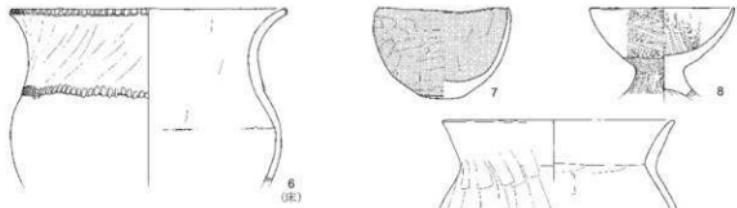
第149図 遺構出土土器 (21)



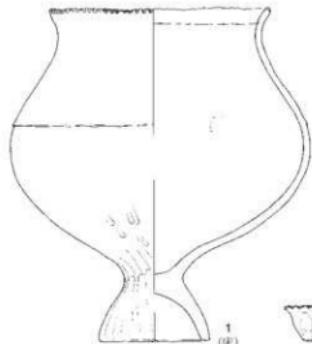
第150図 遺構出土土器 (22)



第151図 遺構出土土器 (23)



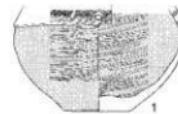
L115



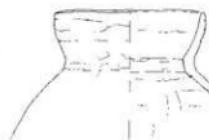
L116



L117



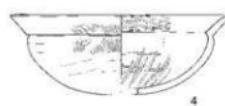
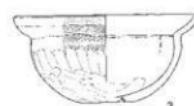
L118



1

2

5



3

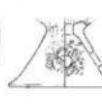
4



0

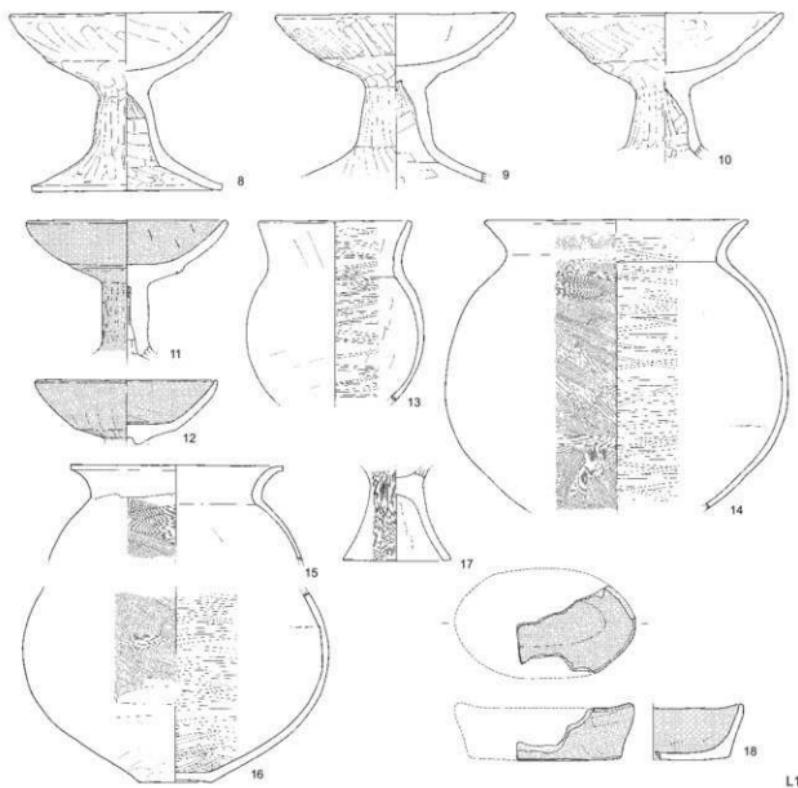
(1 : 4)

20cm

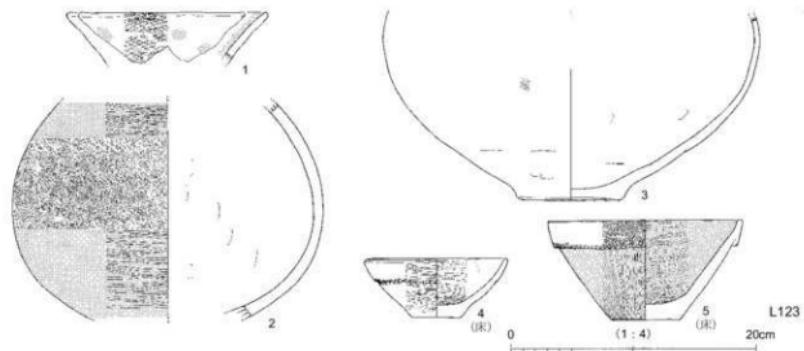


7

第152図 遺構出土土器 (24)

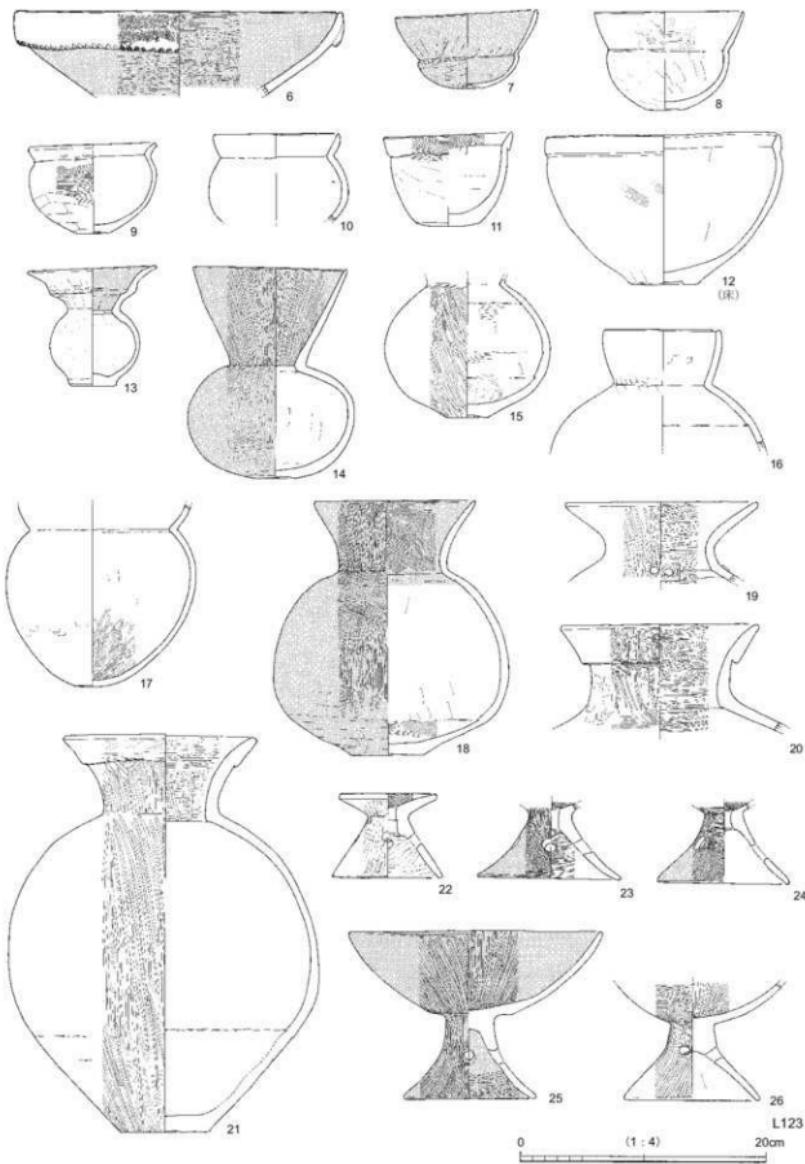


L121

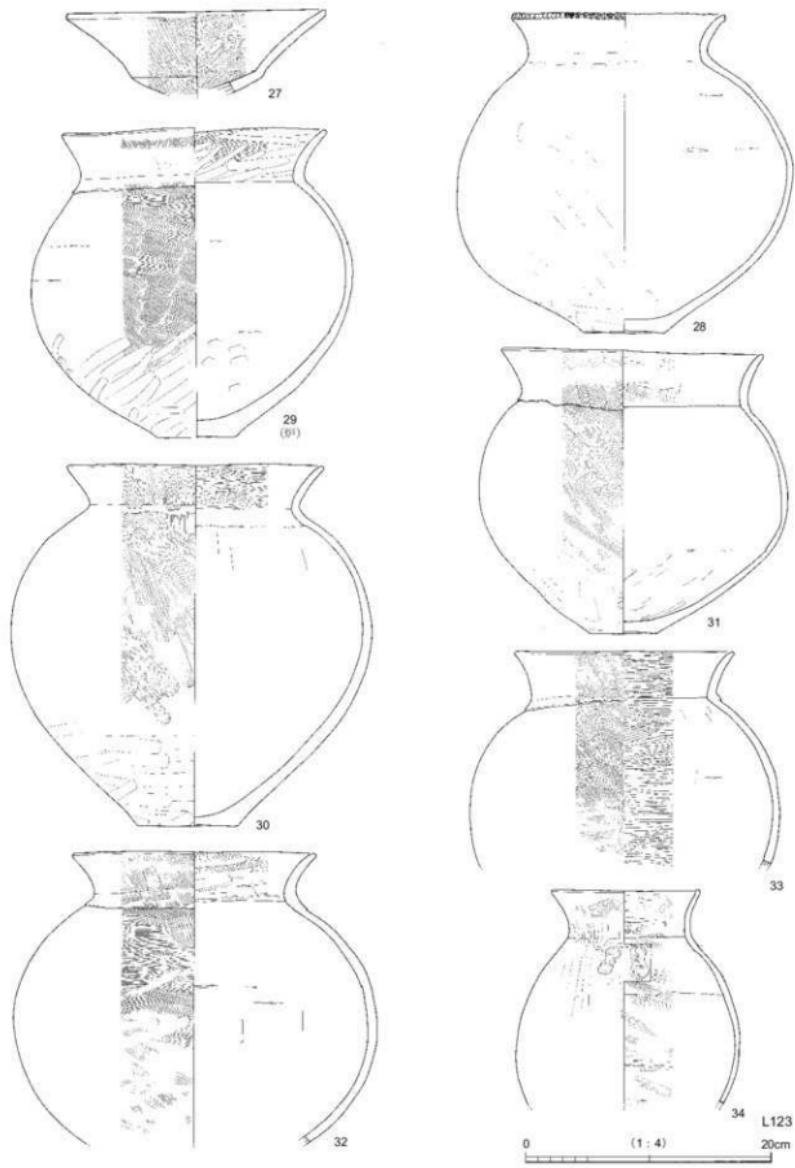


L123

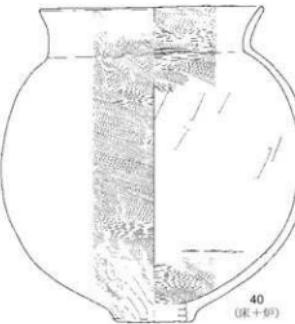
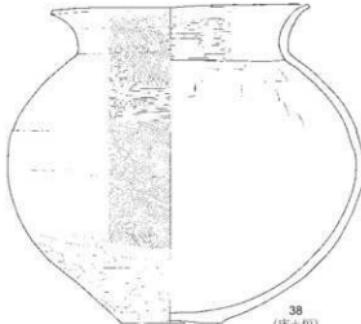
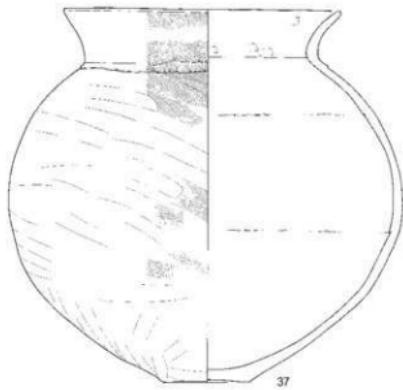
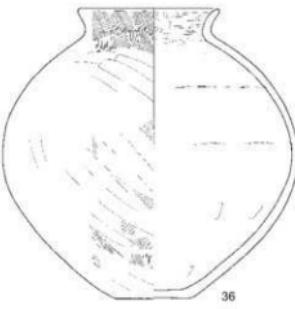
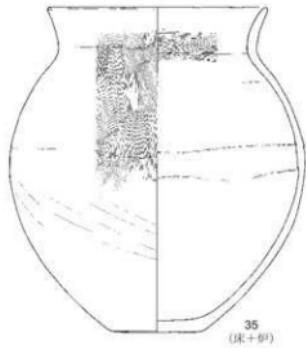
第153図 遺構出土土器 (25)



第154図 遺構出土土器 (26)



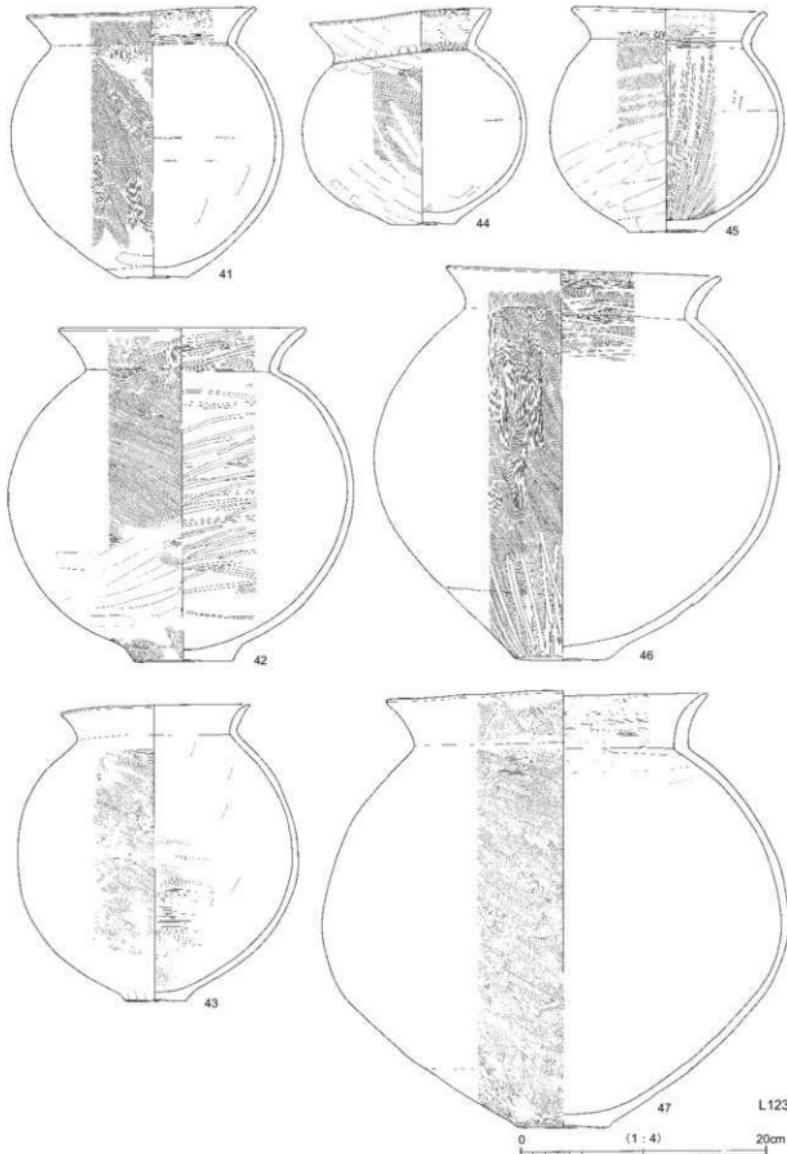
第155図 遺構出土土器 (27)



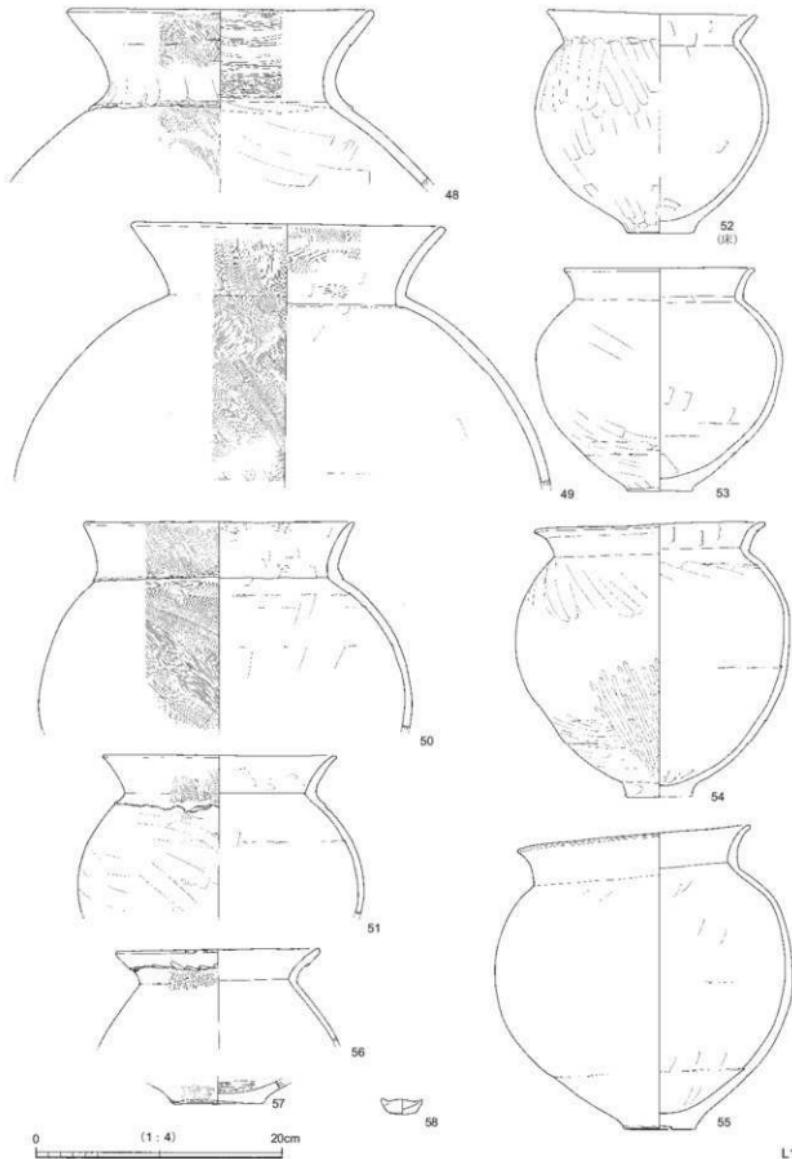
L123

0 (1 : 4) 20cm

第156図 遺構出土土器 (28)

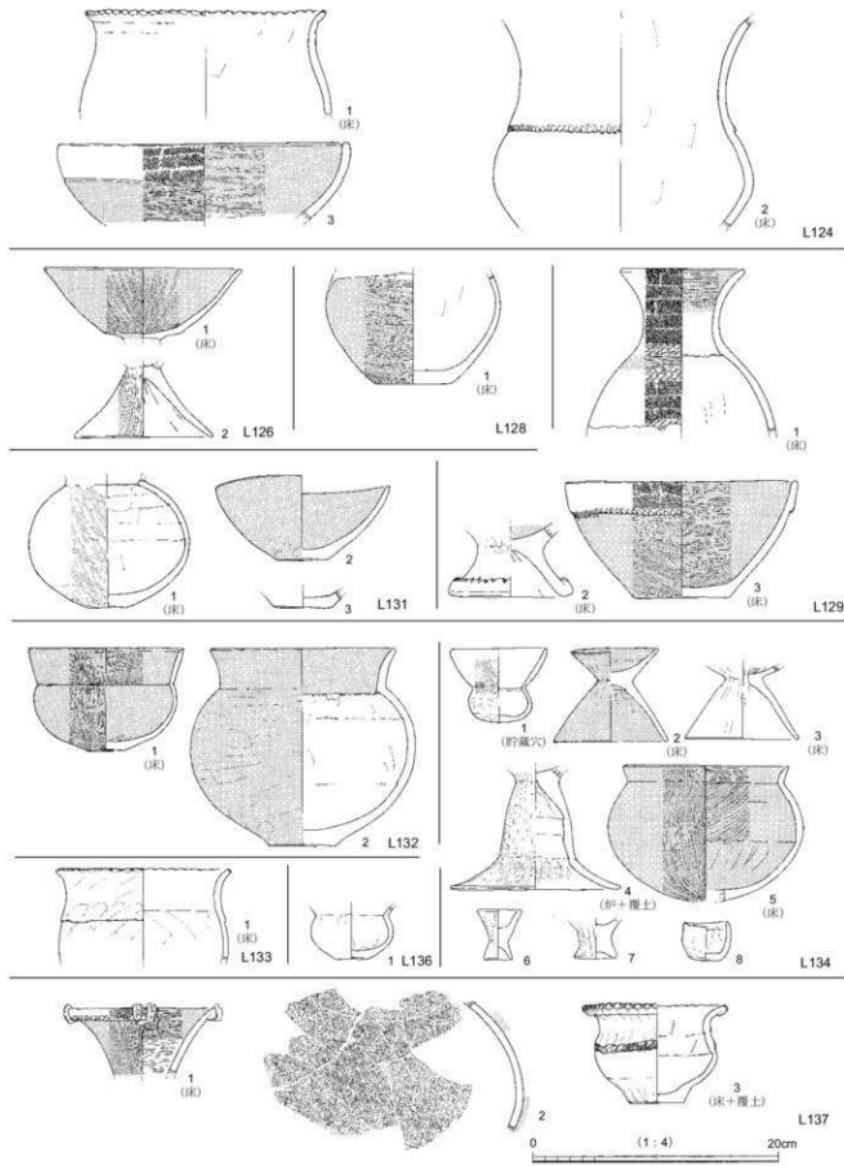


第157図 遺構出土土器 (29)

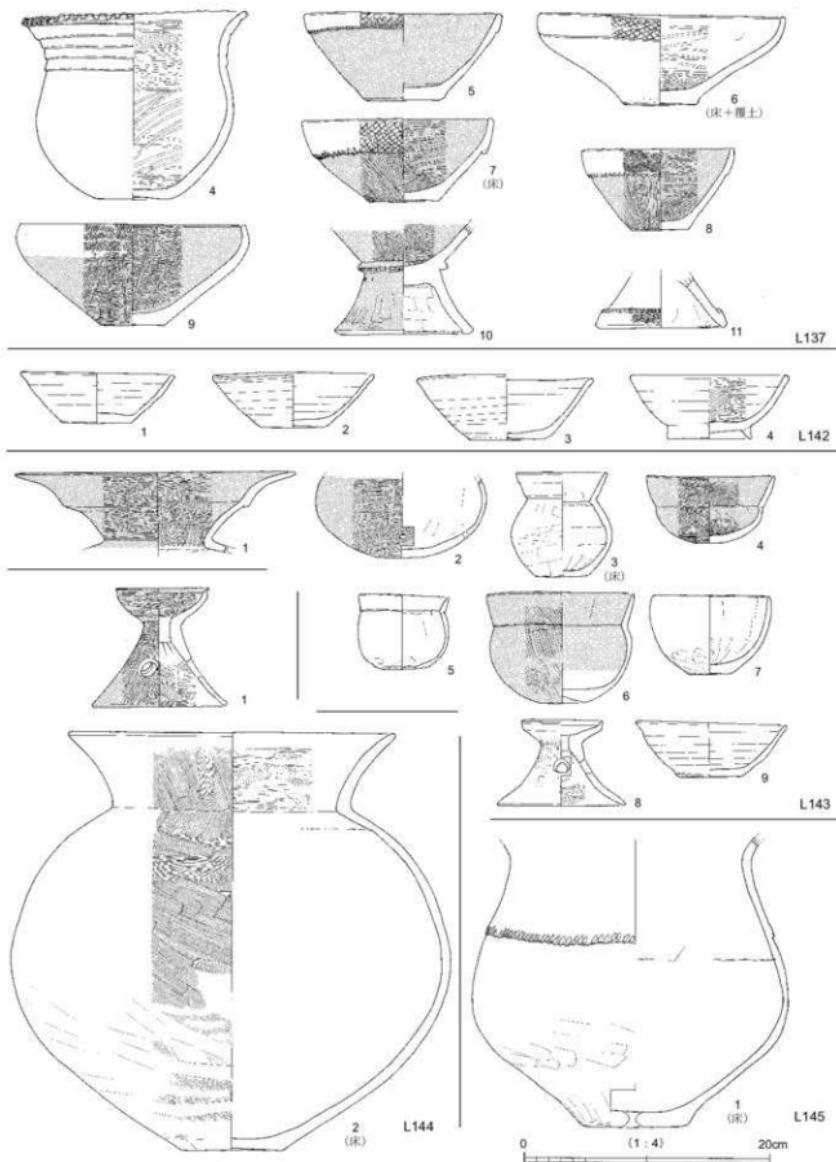


第158図 遺構出土土器 (30)

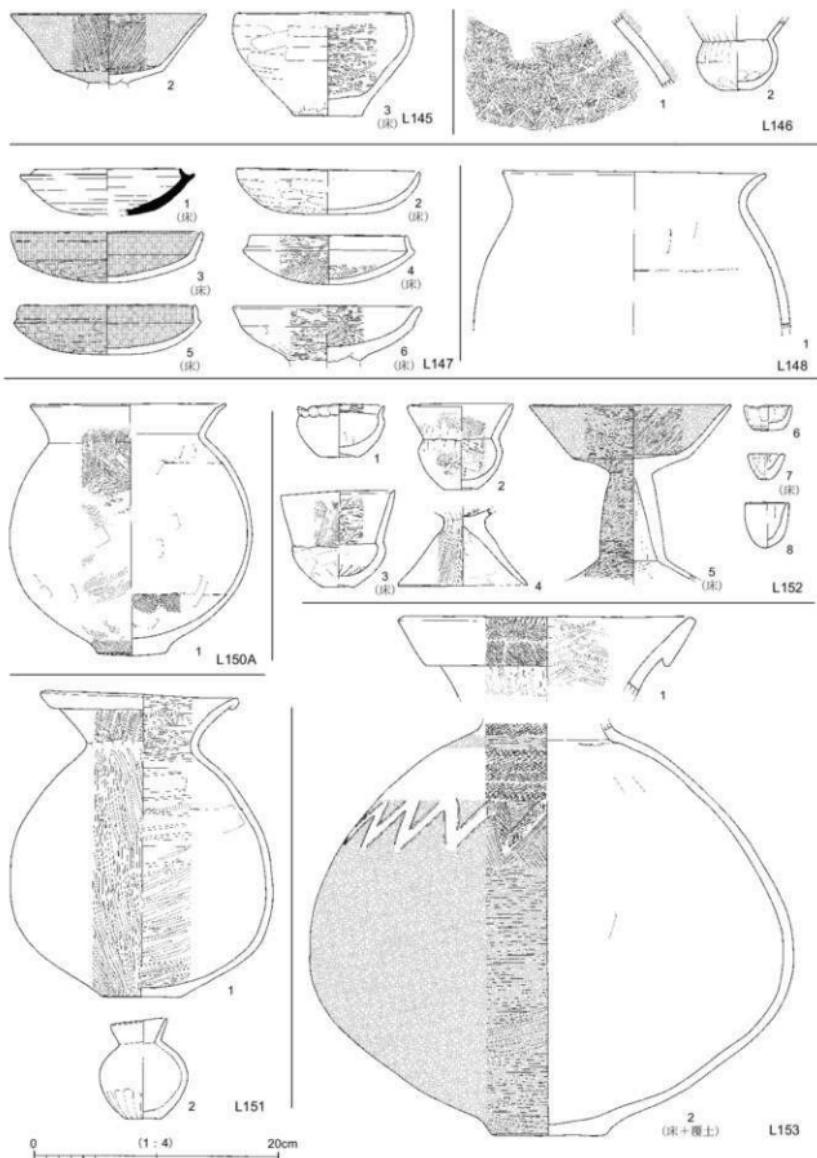
L123



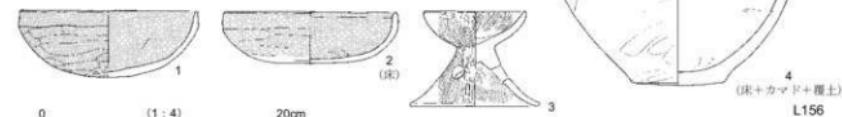
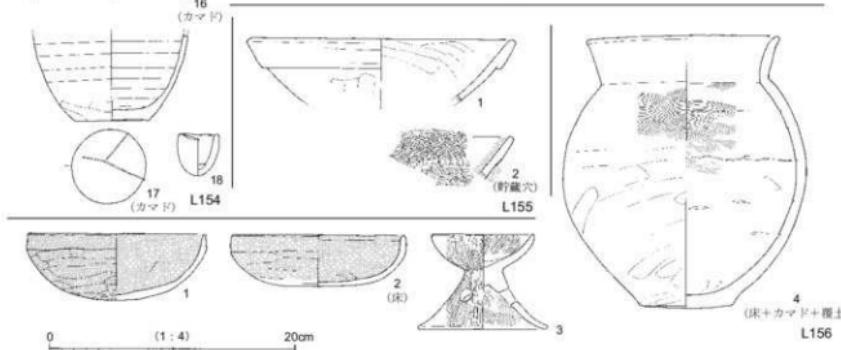
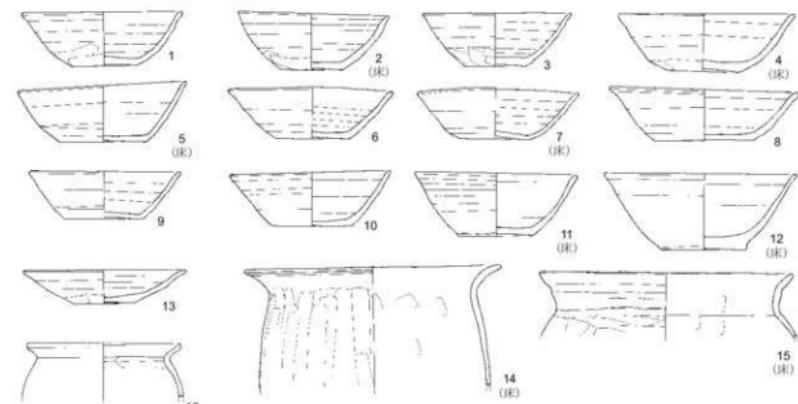
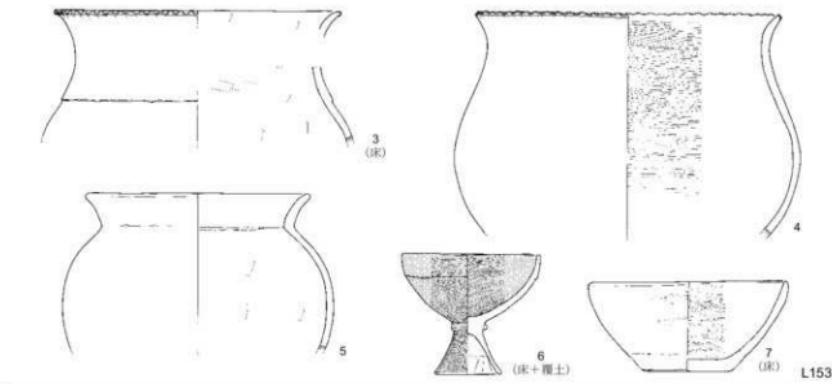
第159図 遺構出土土器 (31)



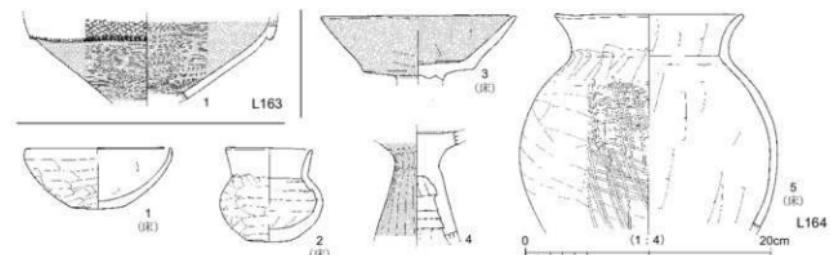
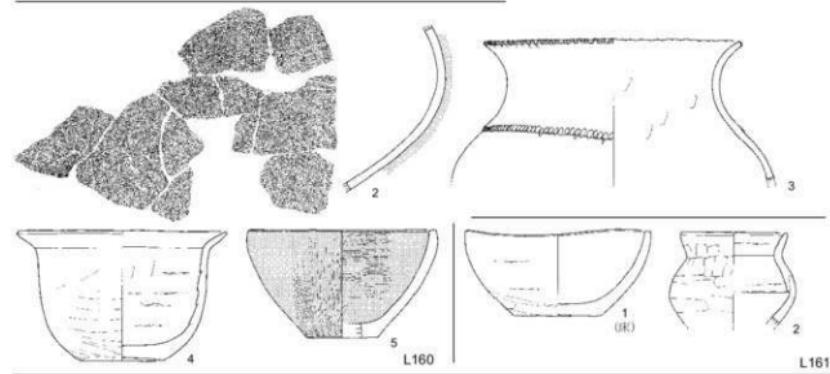
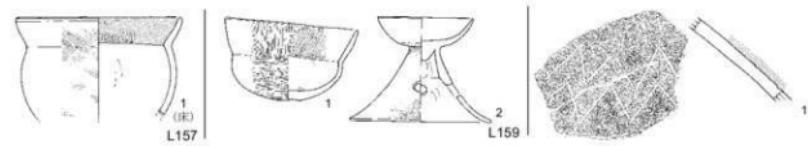
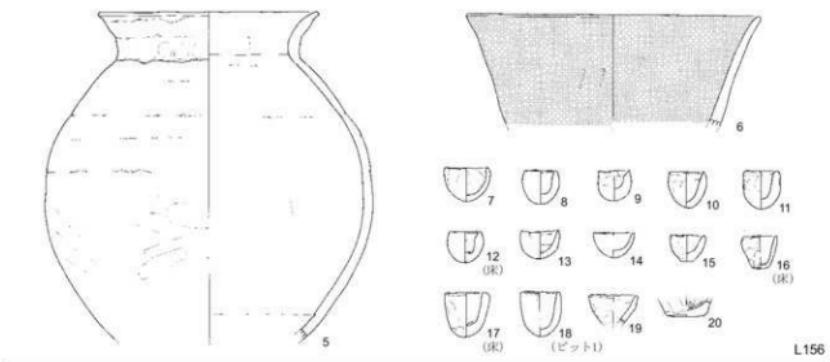
第160図 遺構出土土器 (32)



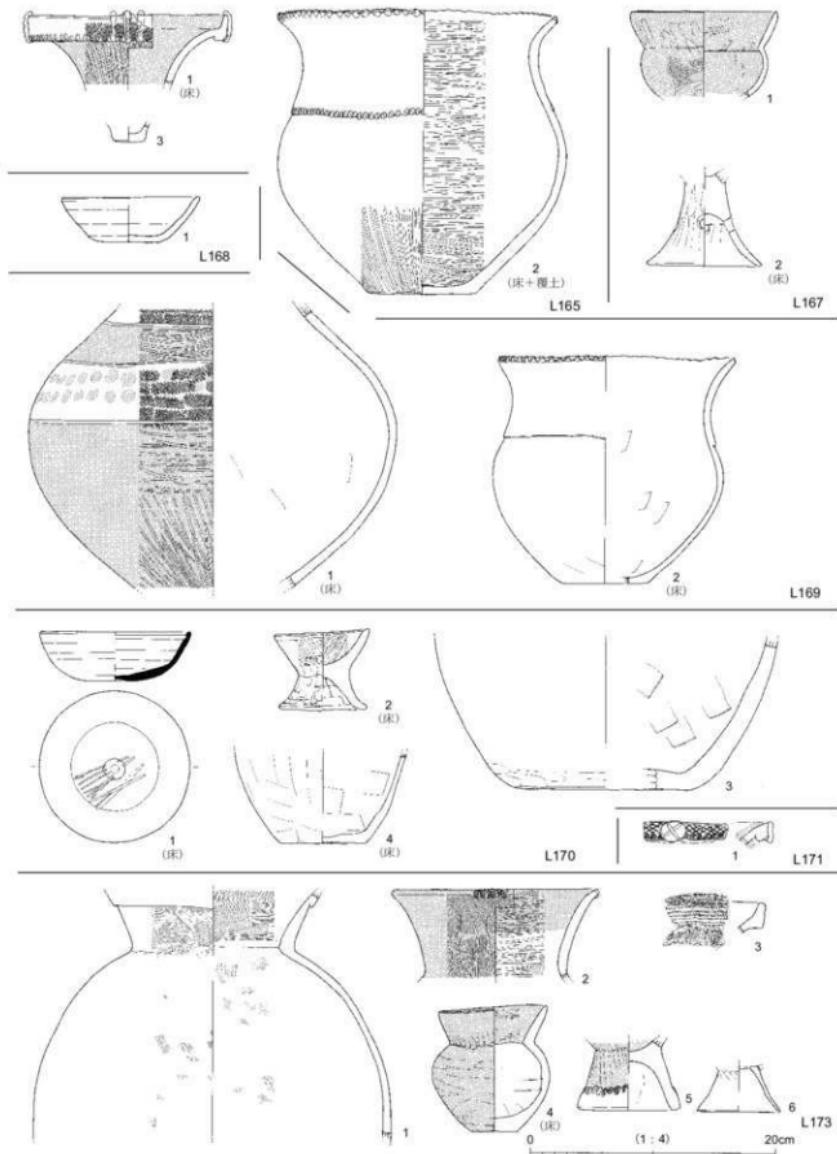
第161図 遺構出土土器 (33)



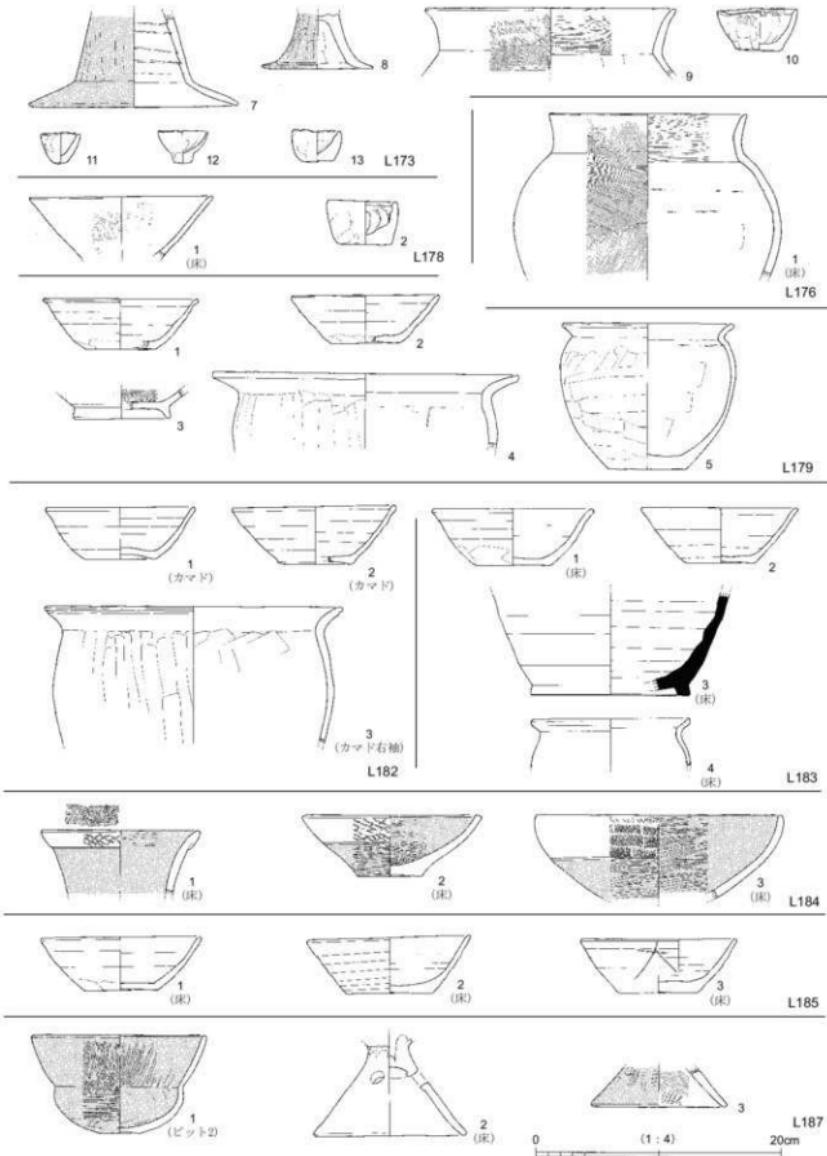
第162図 遺構出土土器 (34)



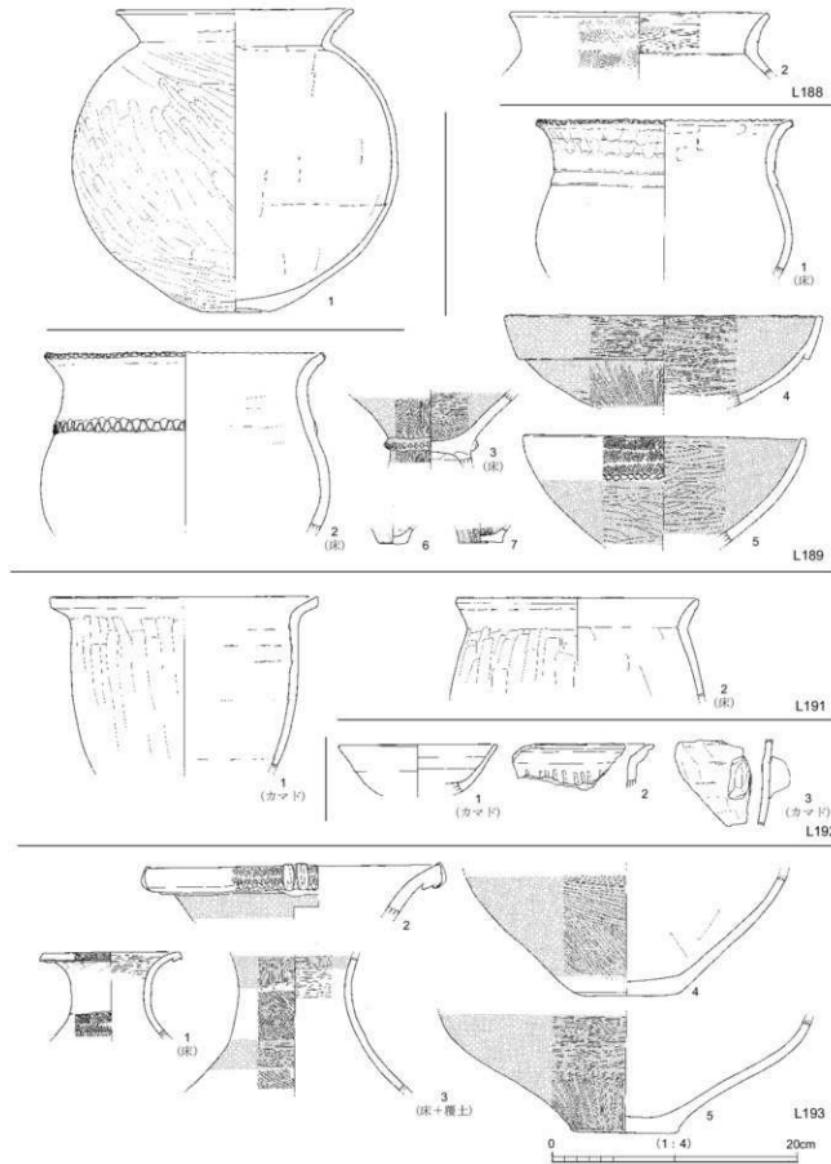
第163図 遺構出土土器 (35)



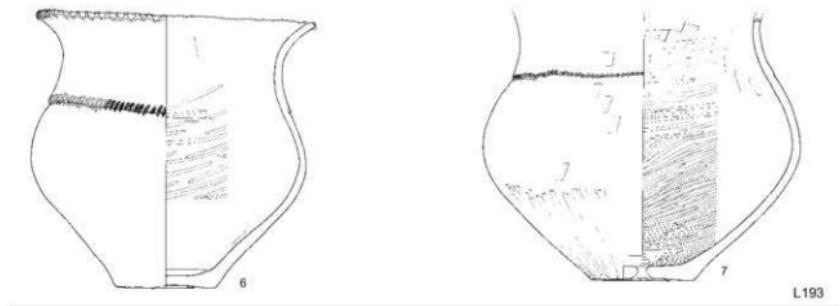
第164図 遺構出土土器 (36)



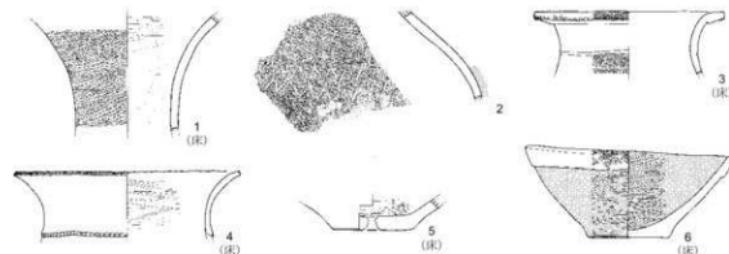
第165図 遺構出土土器 (37)



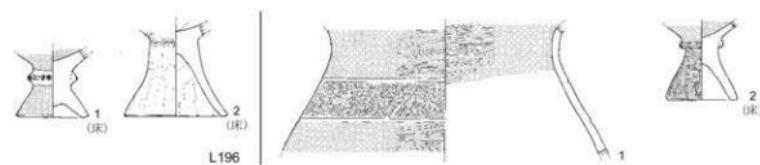
第166図 遺構出土土器 (38)



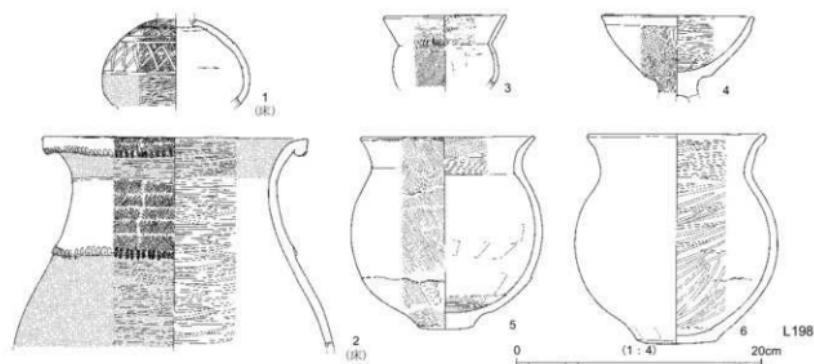
L193



L195

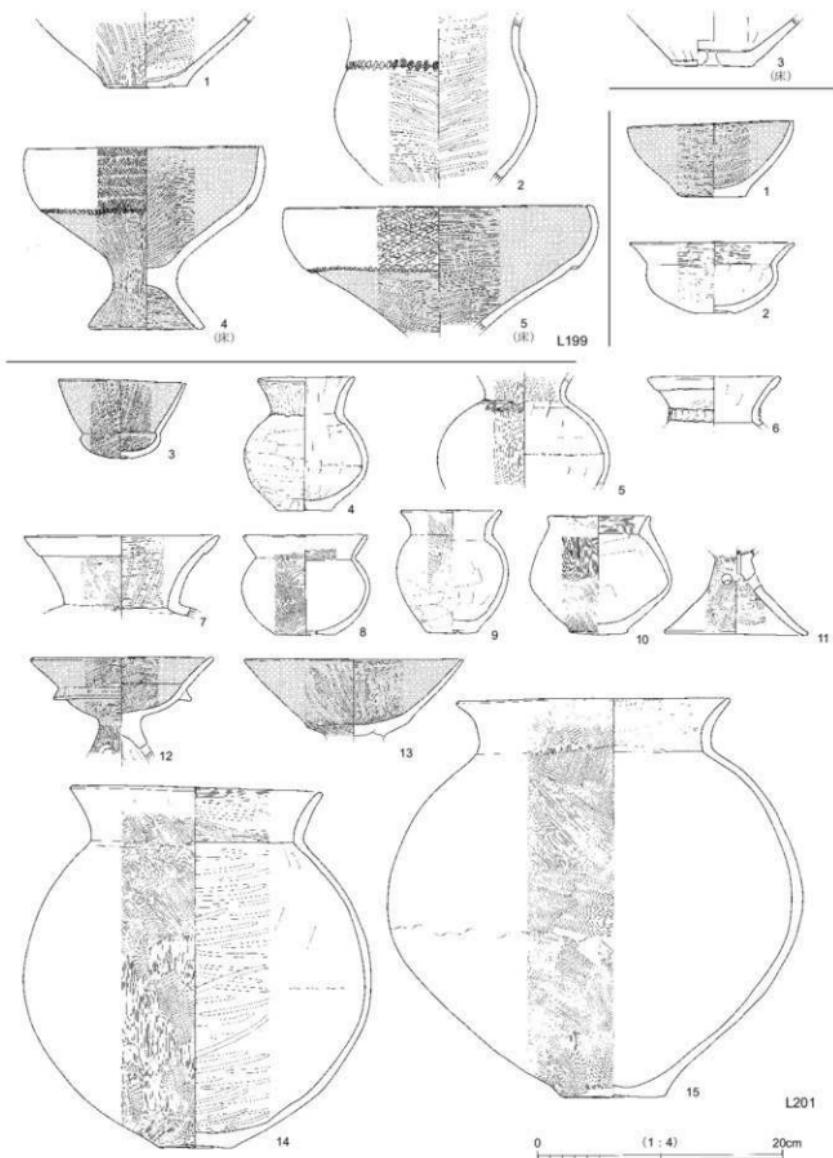


L196

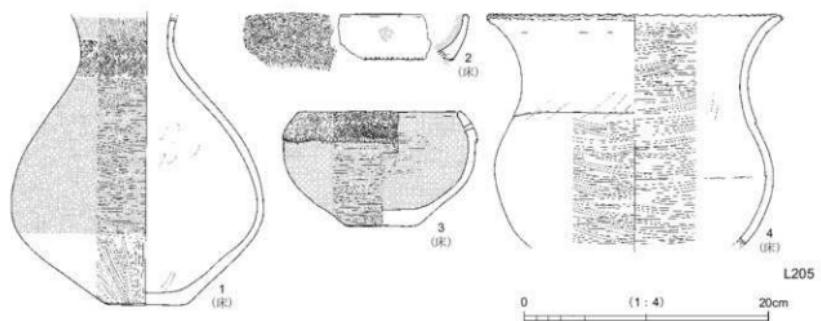
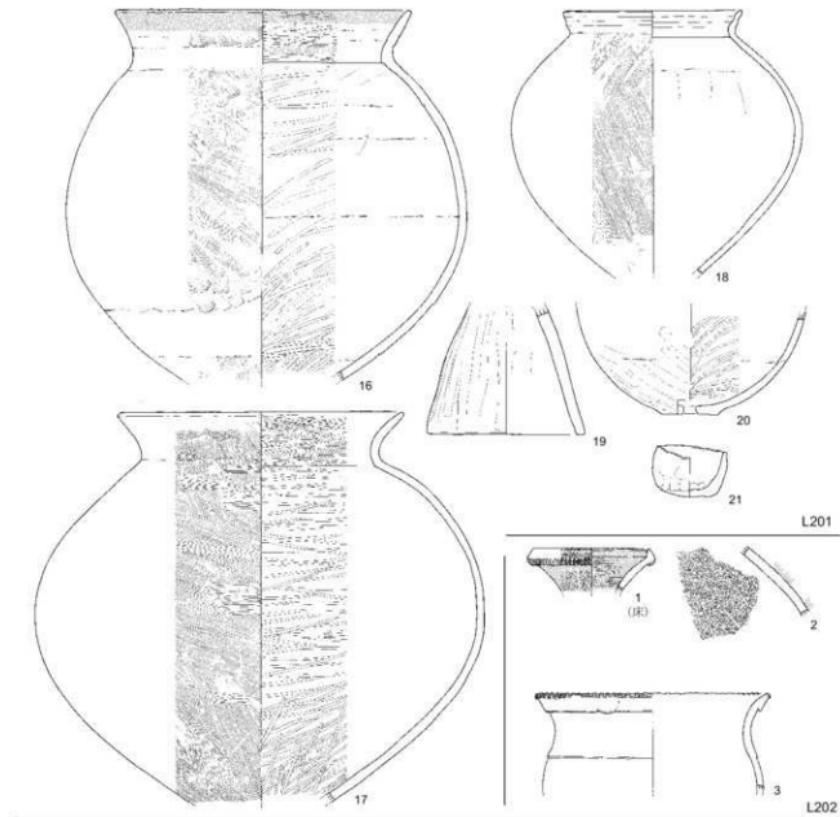


L198

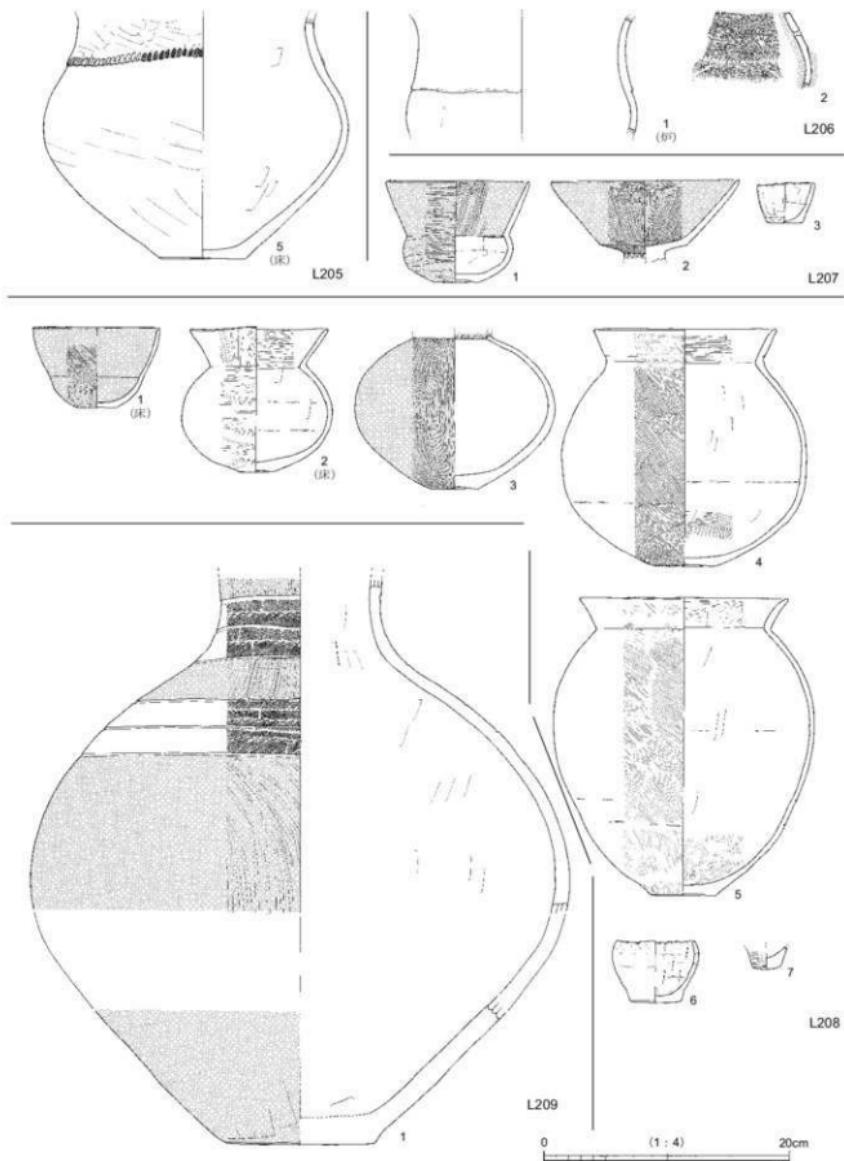
第167図 遺構出土土器 (39)



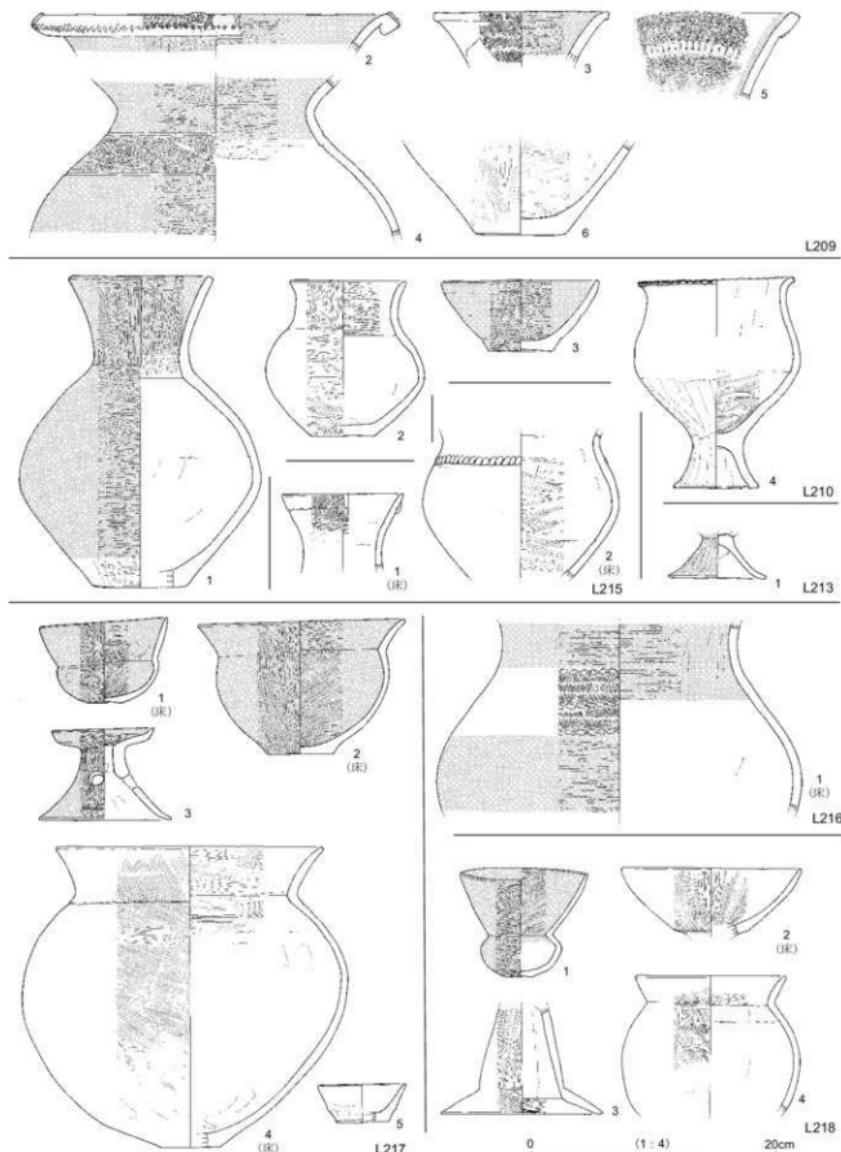
第168図 遺構出土土器 (40)



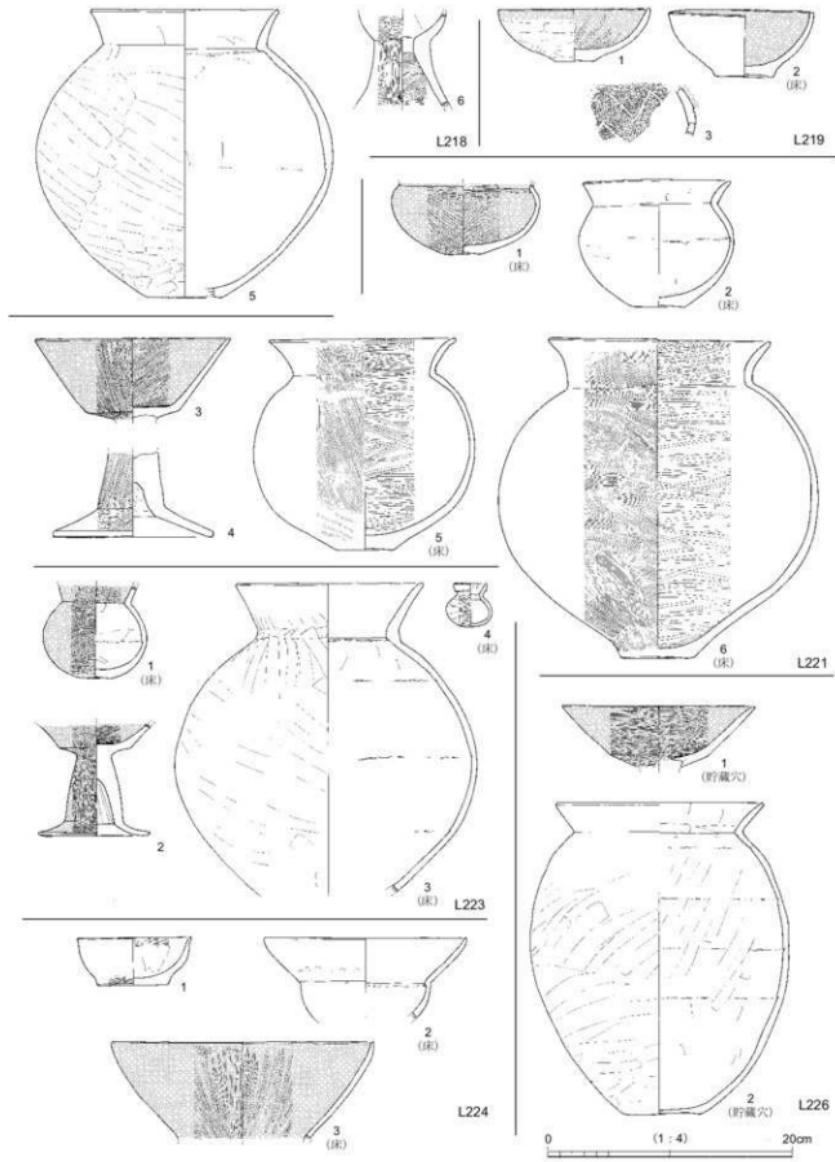
第169図 遺構出土土器 (41)



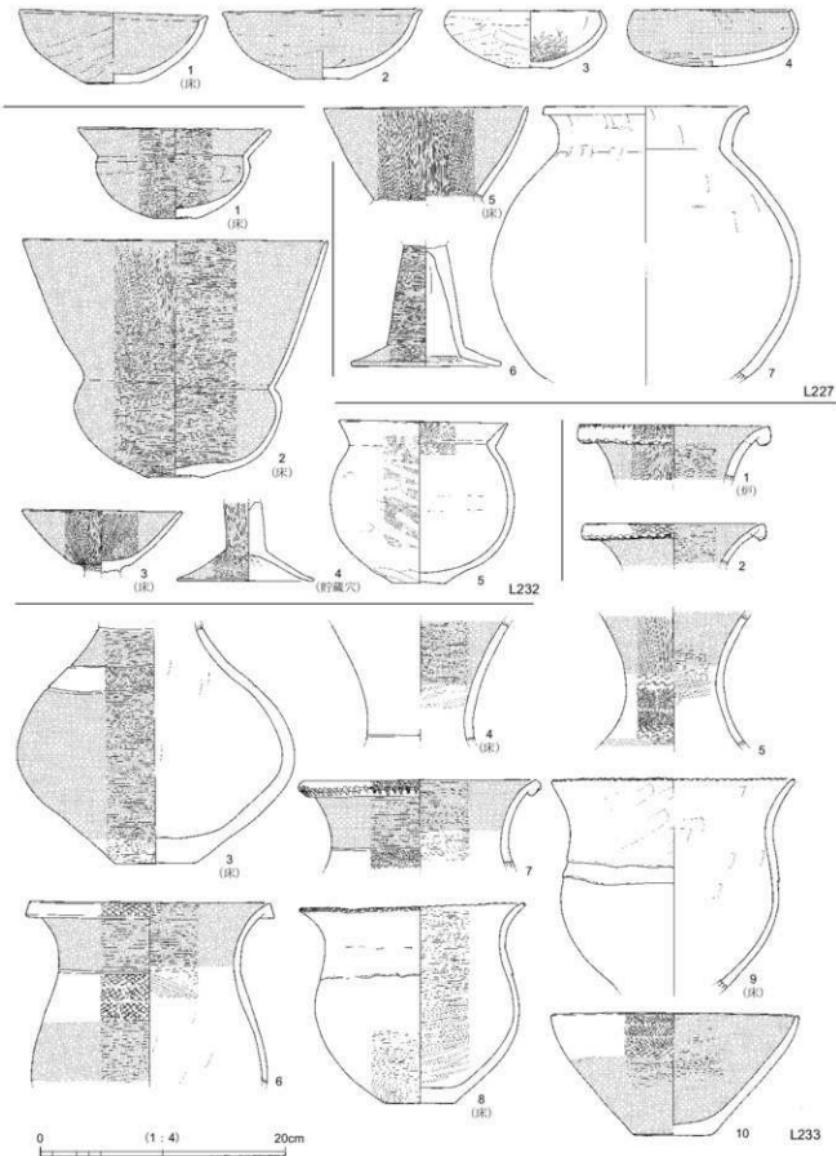
第170図 遺構出土土器 (42)



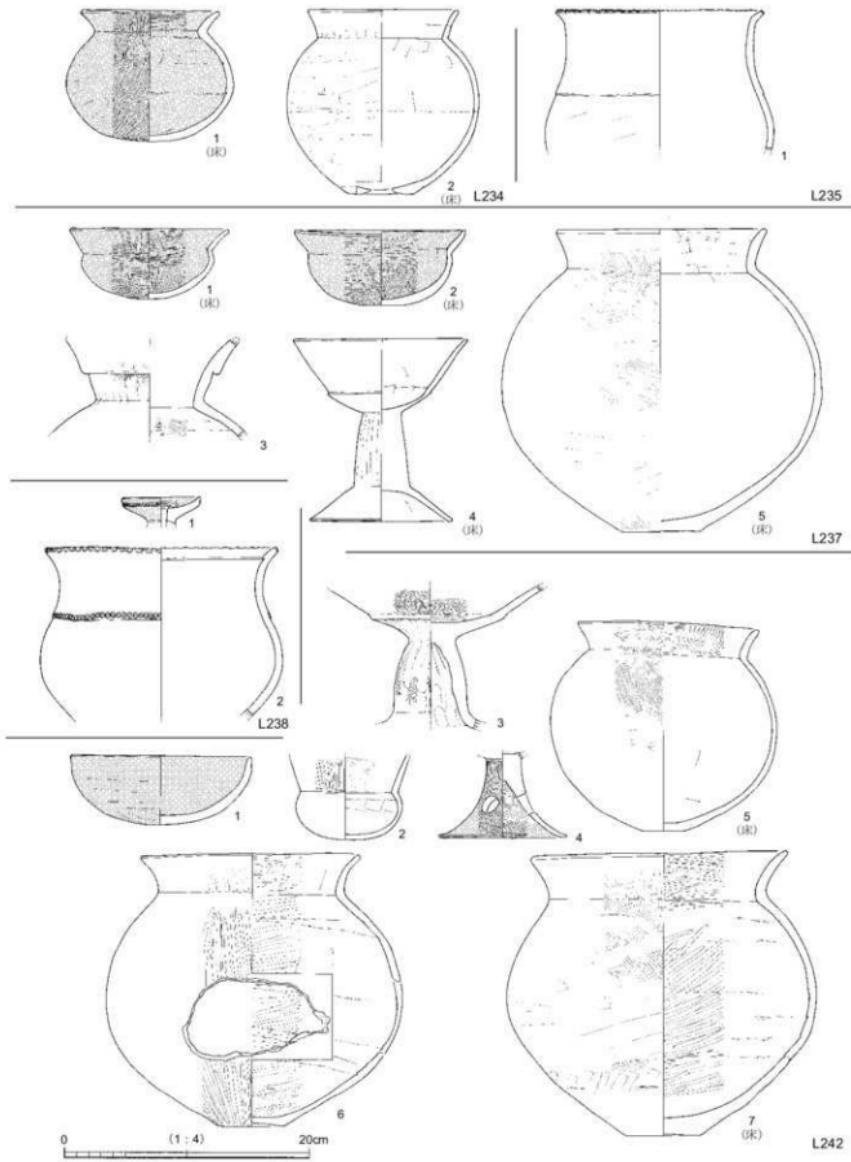
第171図 遺構出土土器 (43)



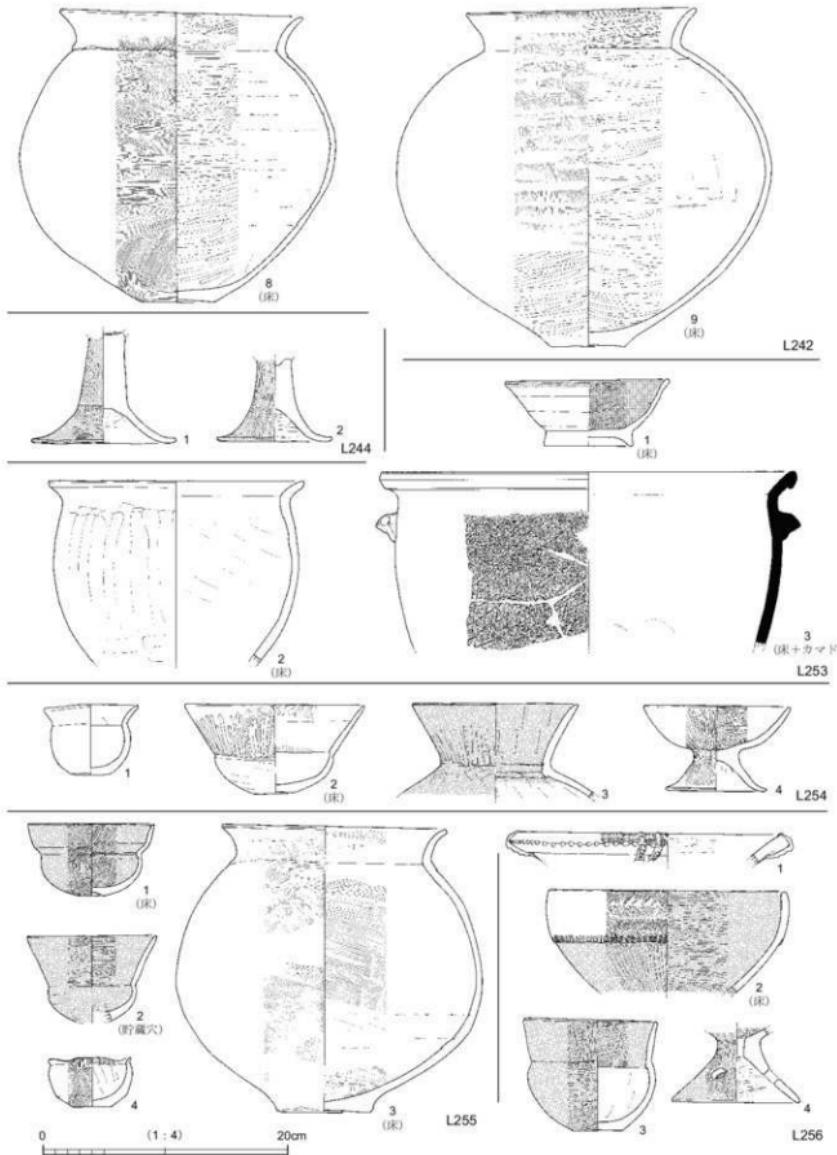
第172図 遺構出土土器 (44)



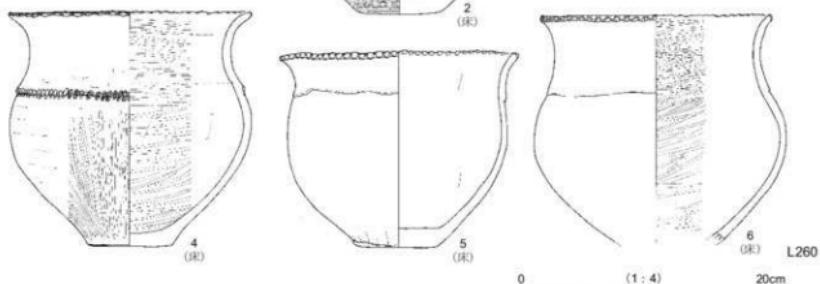
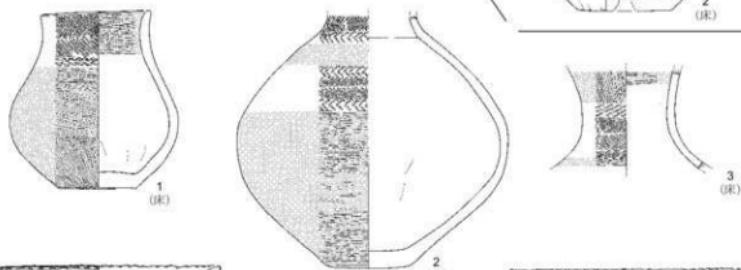
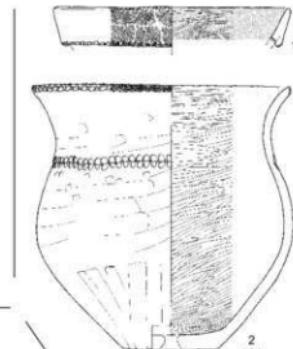
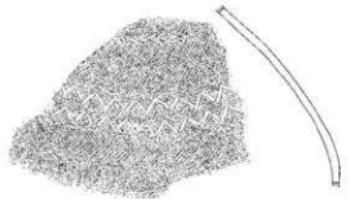
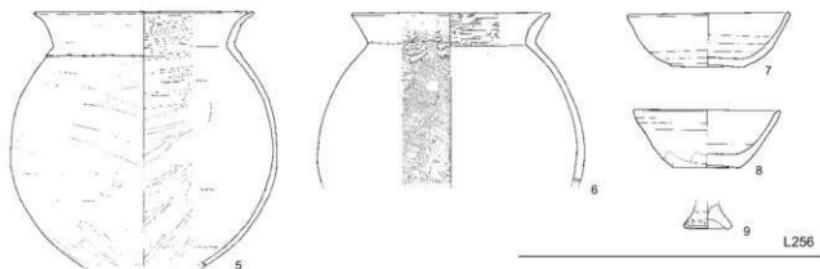
第173図 遺構出土土器 (45)



第174図 遺構出土土器 (46)

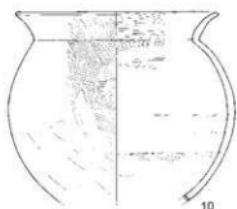
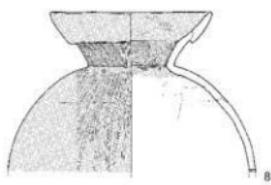


第175図 遺構出土土器 (47)

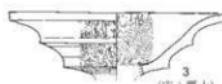
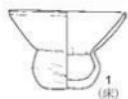


0 (1 : 4) 20cm

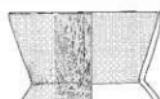
第176図 遺構出土土器 (48)



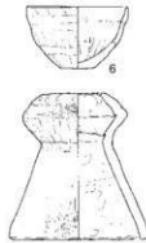
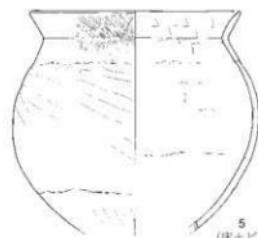
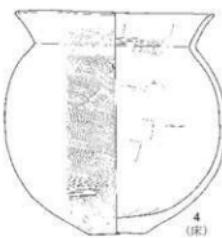
L260



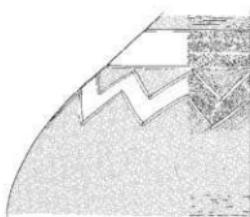
L262



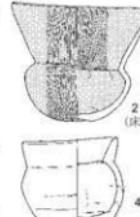
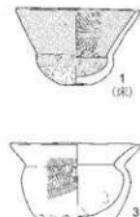
(ピット2)



L264



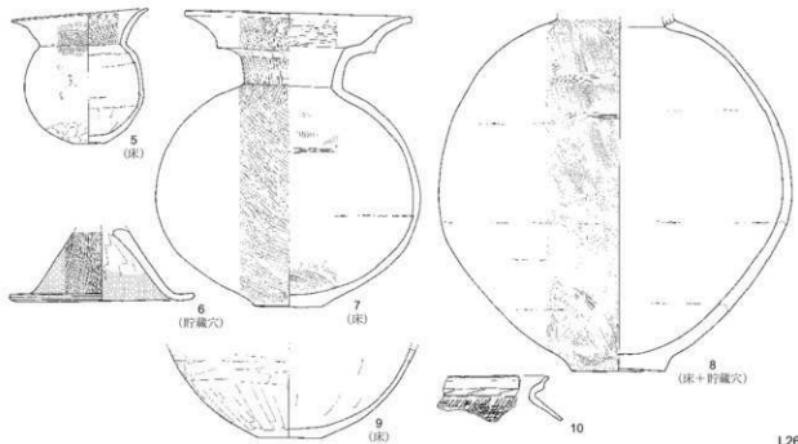
1  
(R)



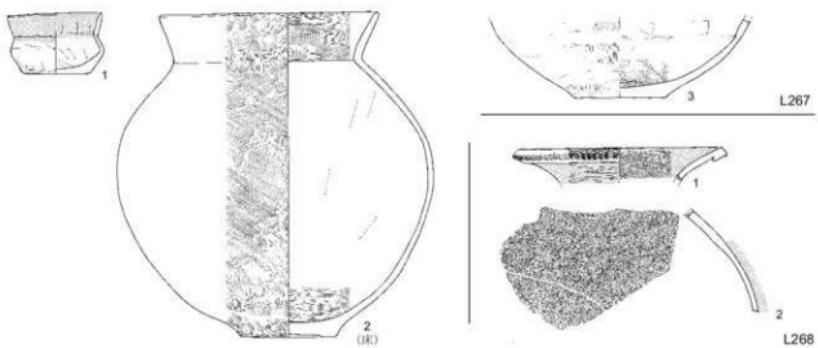
4  
L266

0 (1 : 4) 20cm

第177図 遺構出土土器 (49)

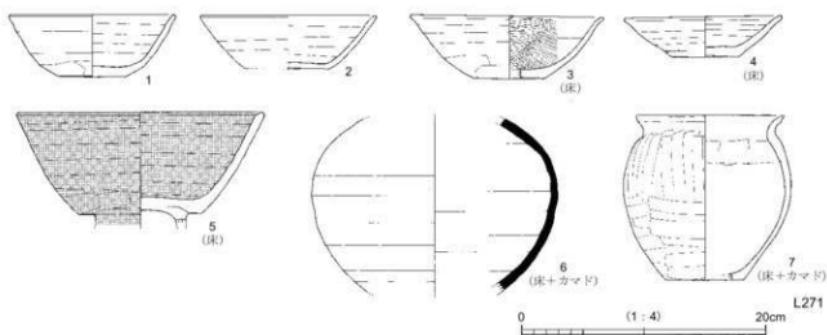


L266



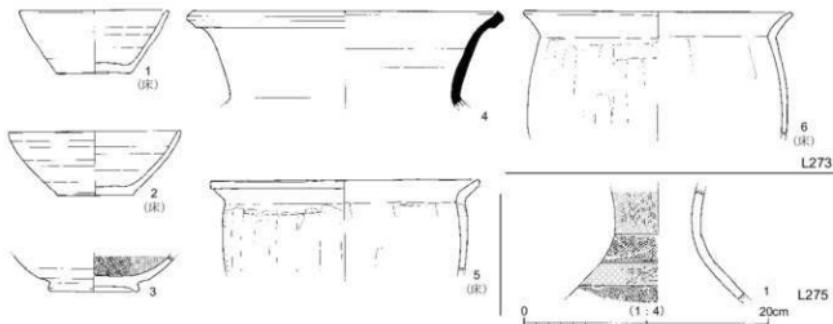
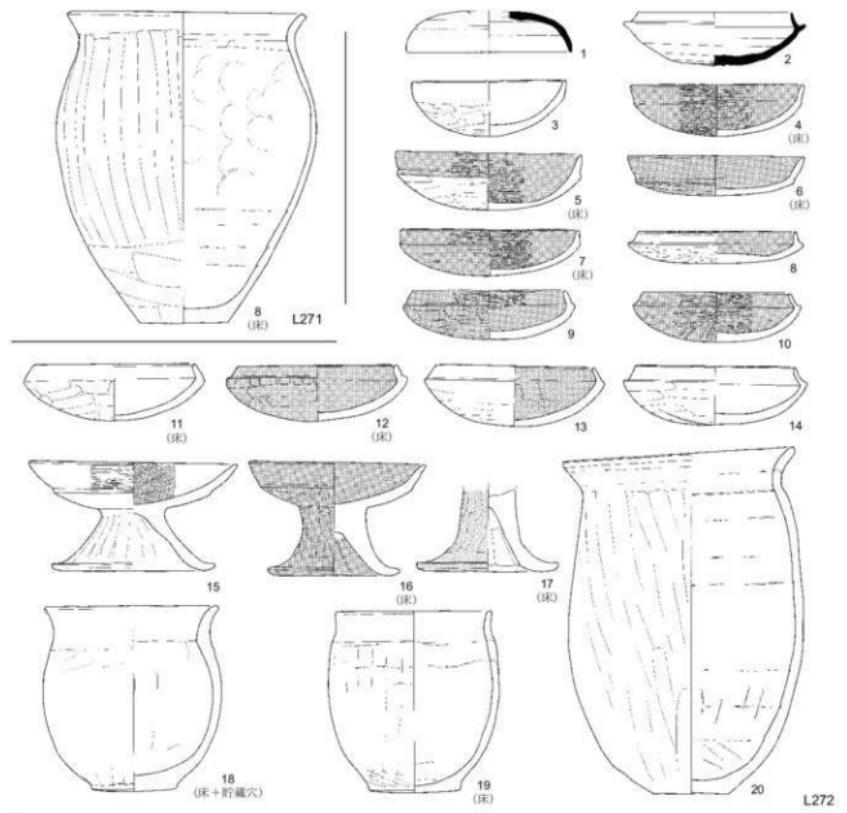
L267

L268

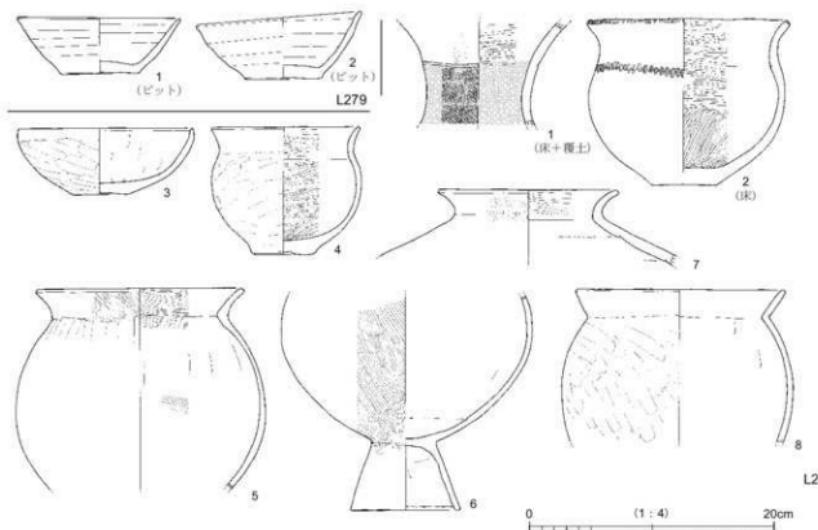
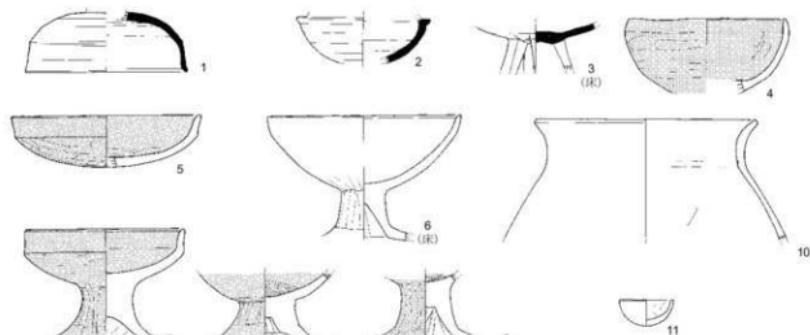
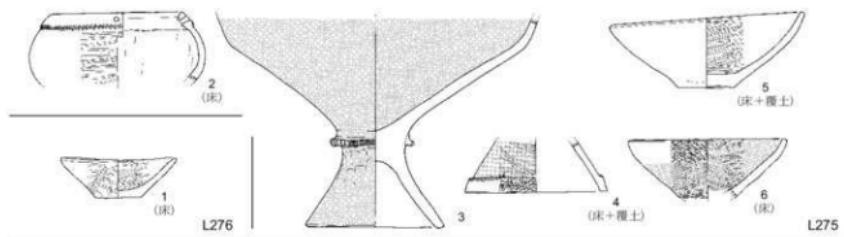


0 (1 : 4) 20cm

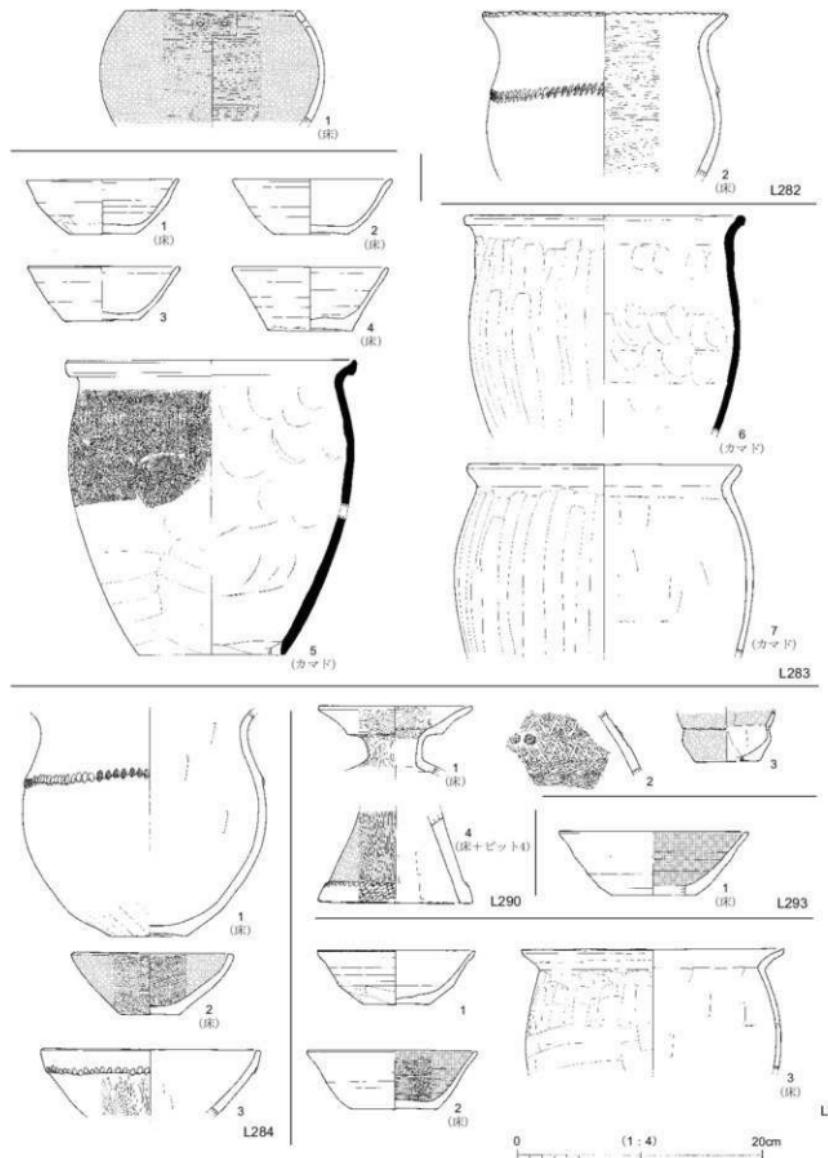
第178図 遺構出土土器 (50)



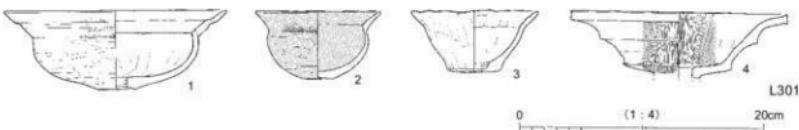
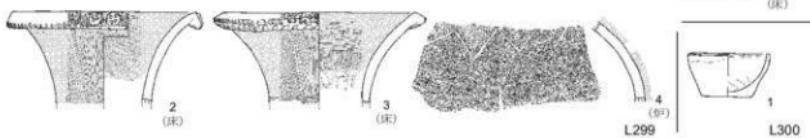
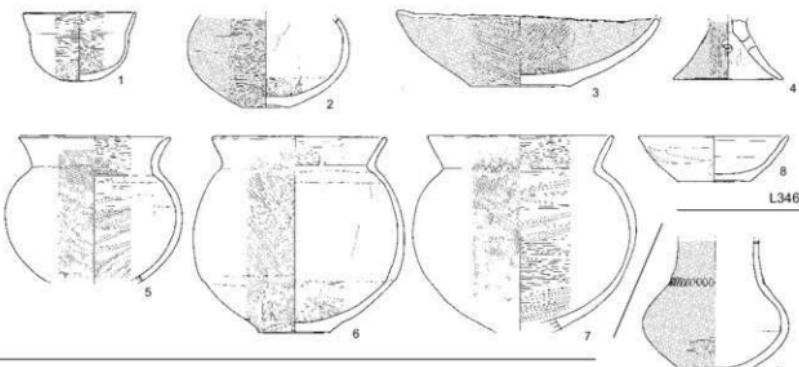
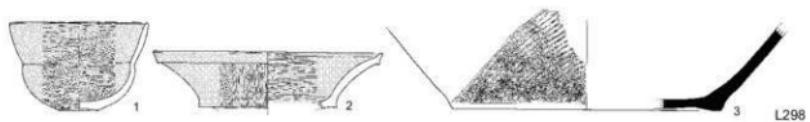
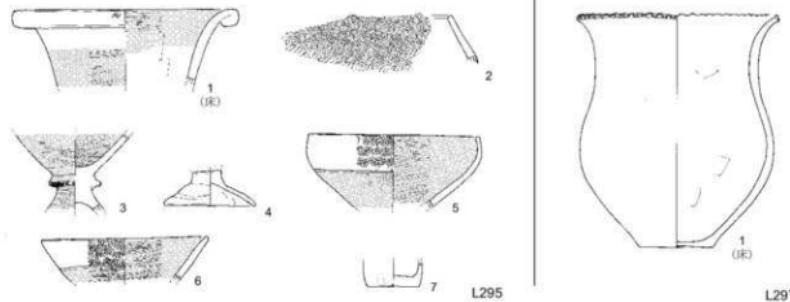
第179図 遺構出土土器 (51)



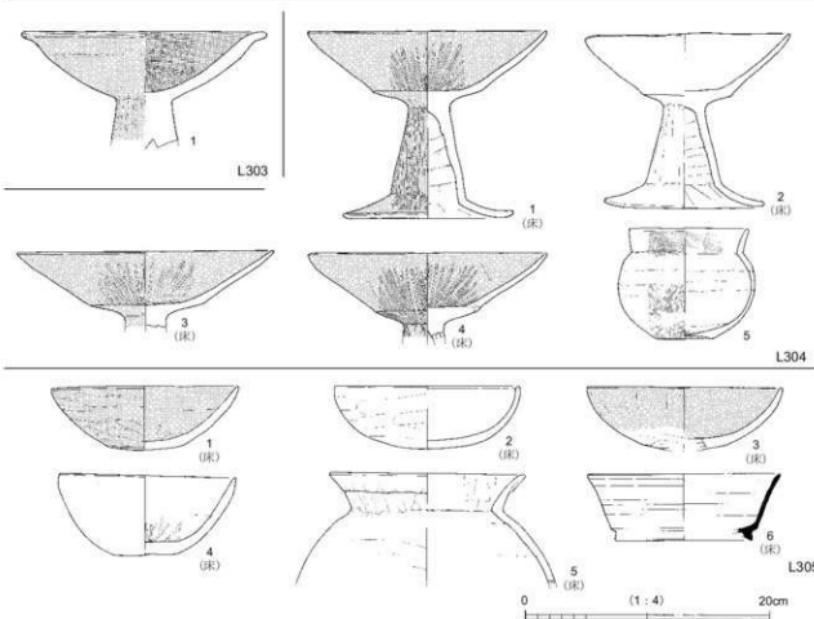
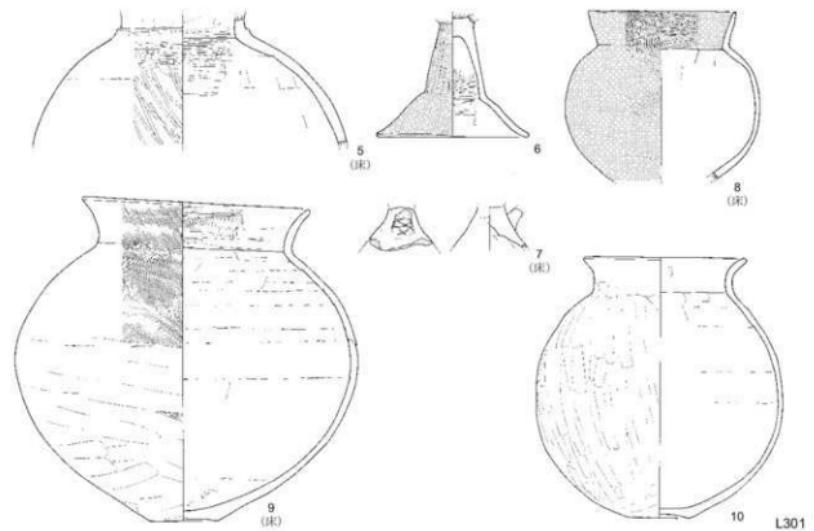
第180図 遺構出土土器 (52)



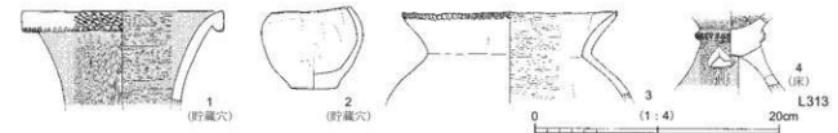
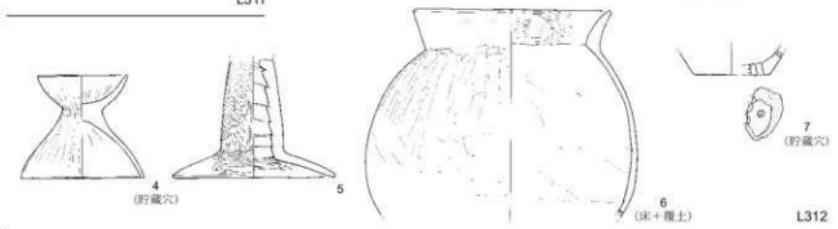
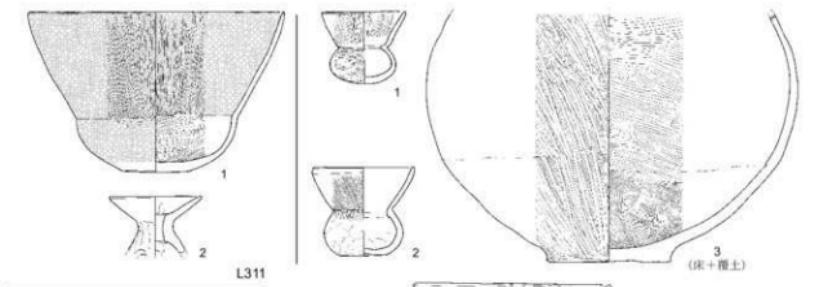
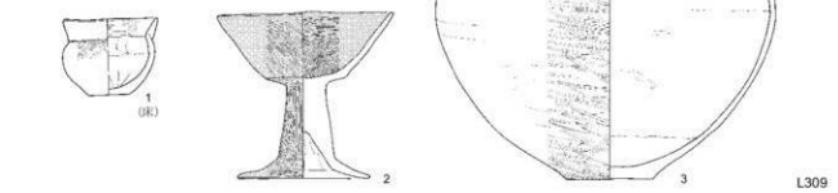
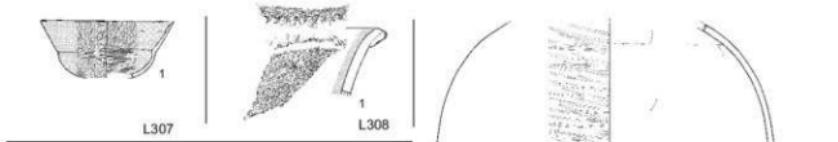
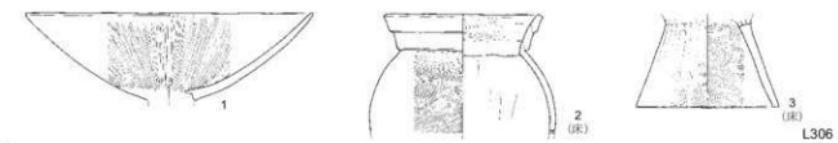
第181図 遺構出土土器 (53)



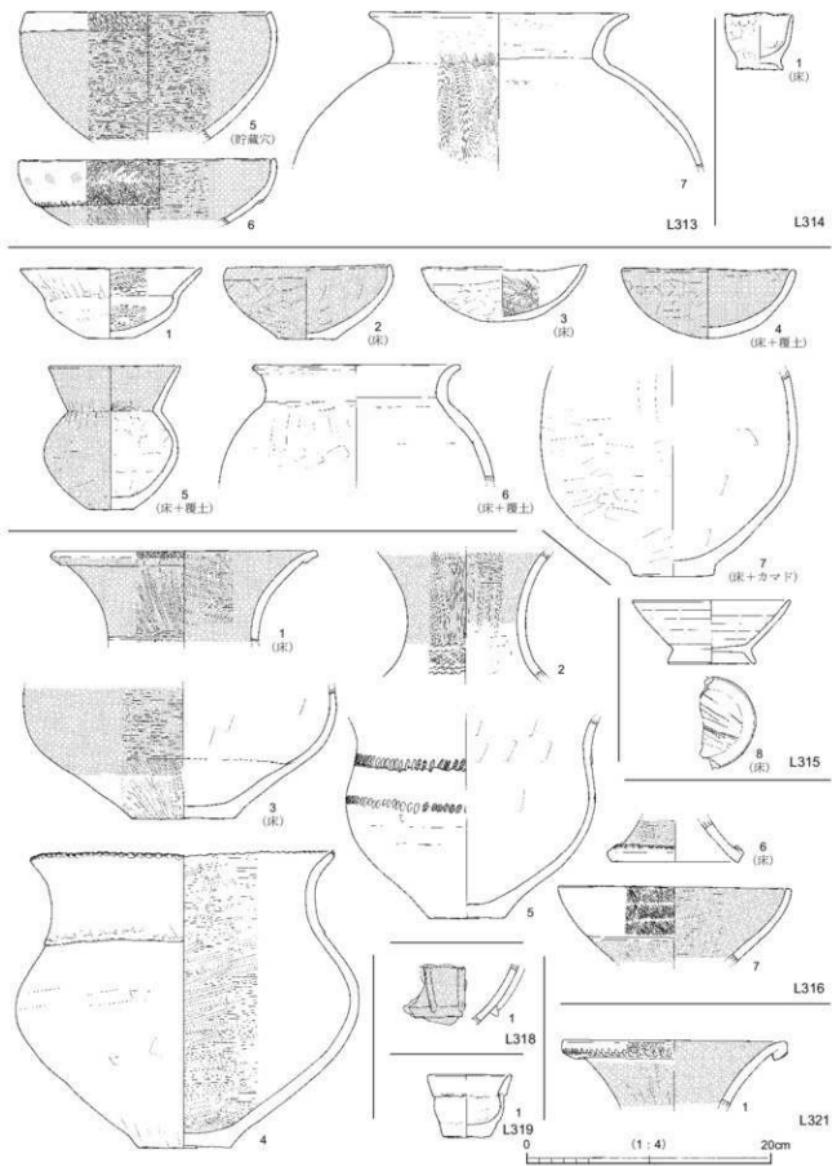
第182図 遺構出土土器 (54)



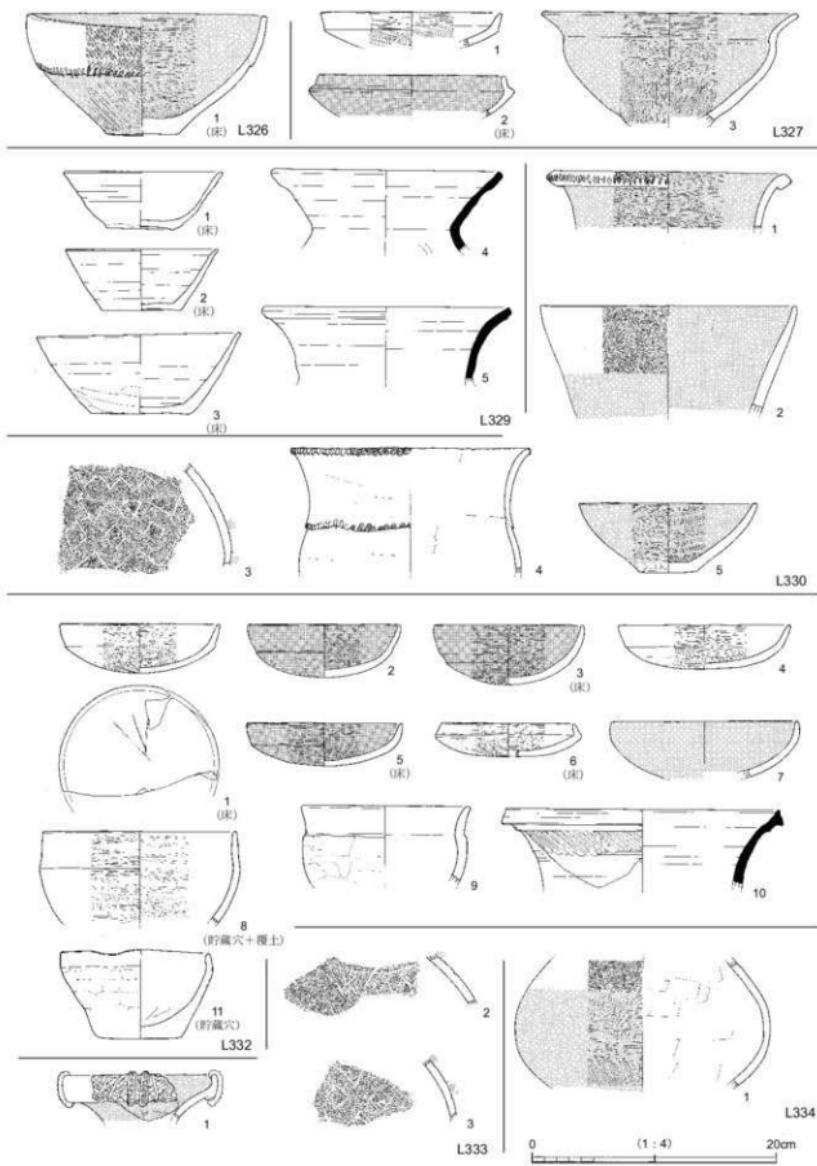
第183図 遺構出土土器 (55)



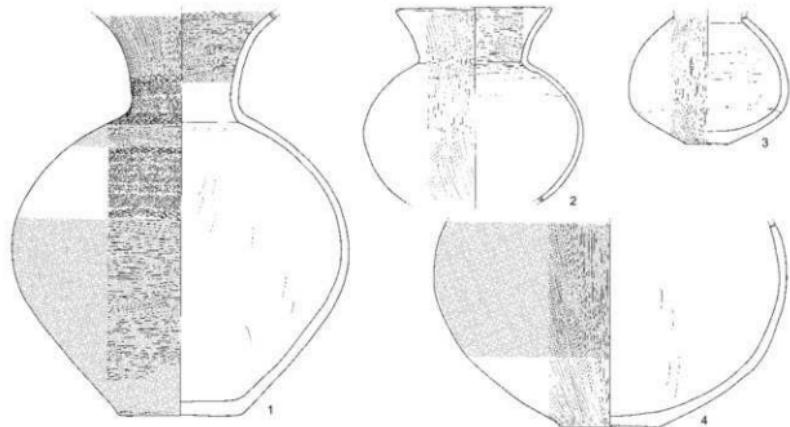
第184図 遺構出土土器 (56)



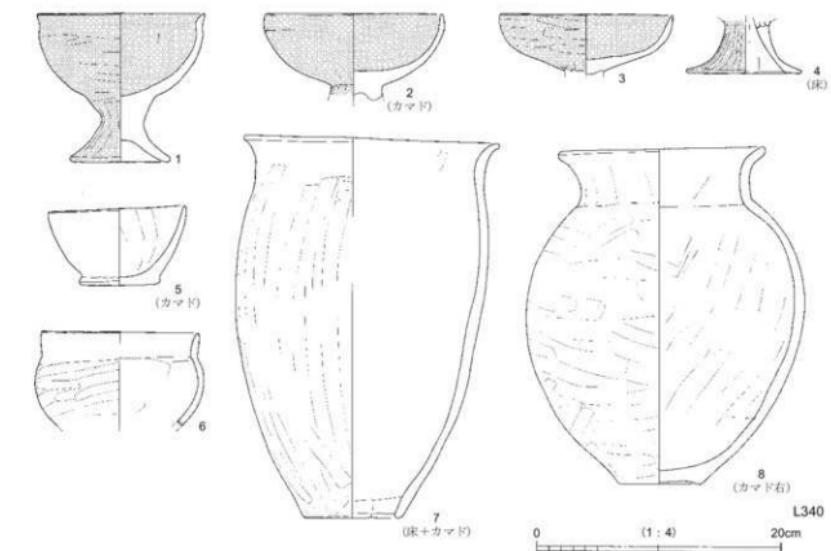
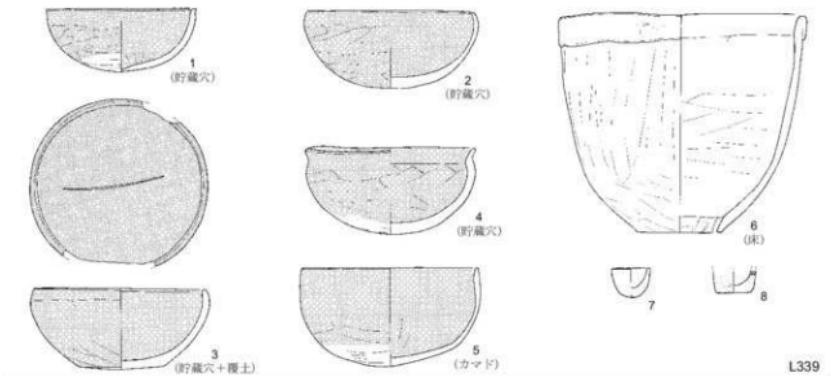
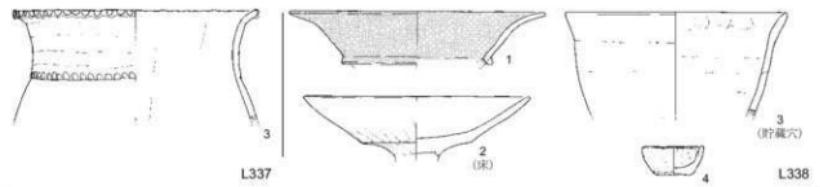
第185図 遺構出土土器 (57)



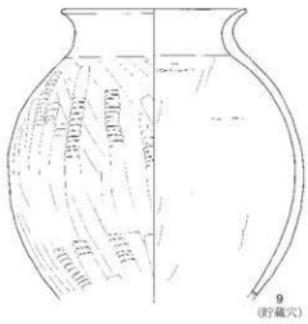
第186図 遺構出土土器 (58)



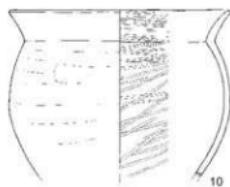
第187図 遺構出土土器 (59)



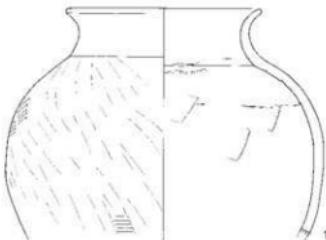
第188図 遺構出土土器 (60)



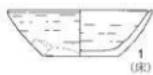
9  
(貯藏穴)



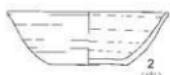
10



L340



1  
(床)



2  
(床)



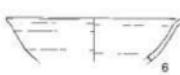
3



4



5  
(床)



6



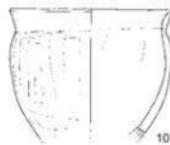
7



8



9

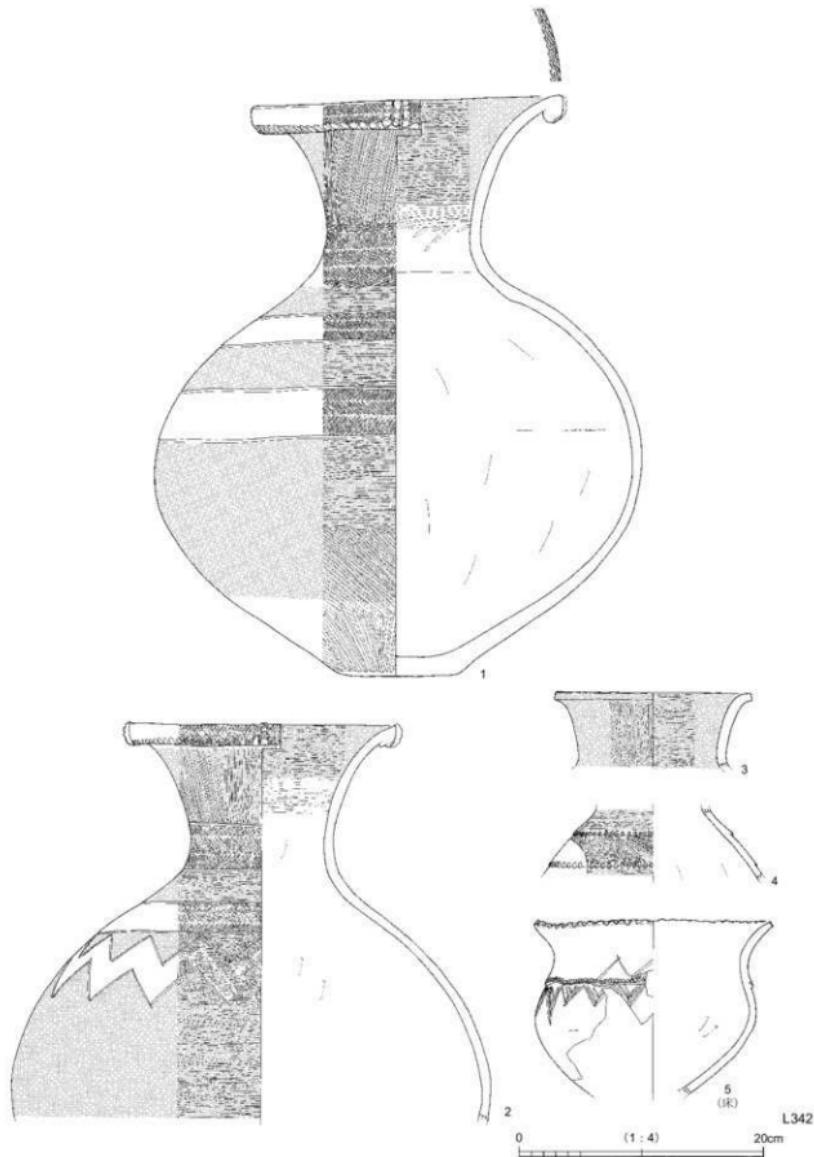


10

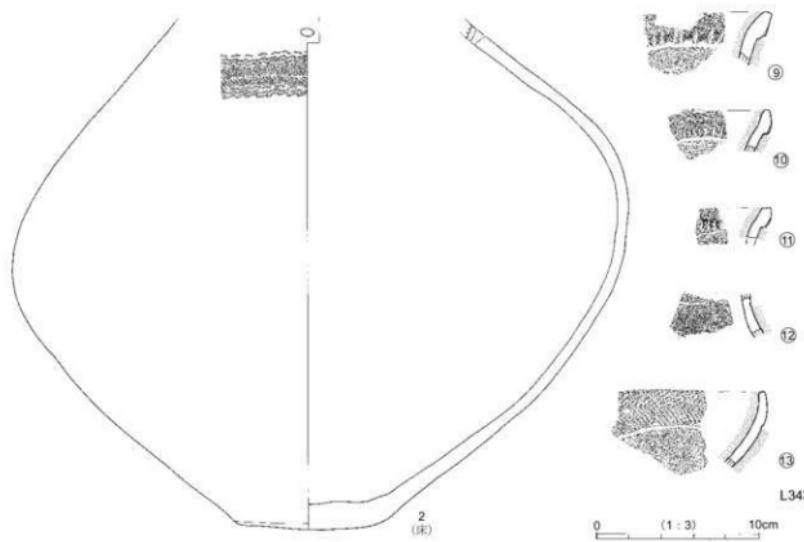
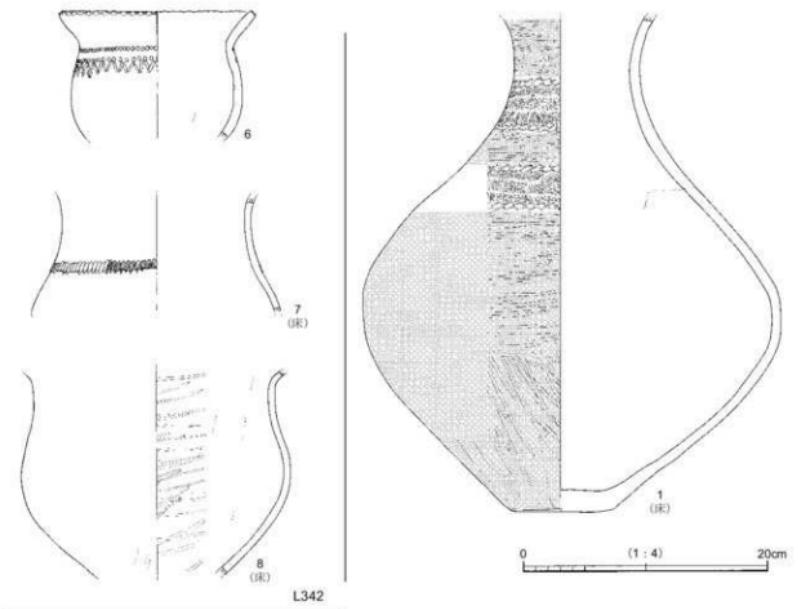
L341

0 (1 : 4) 20cm

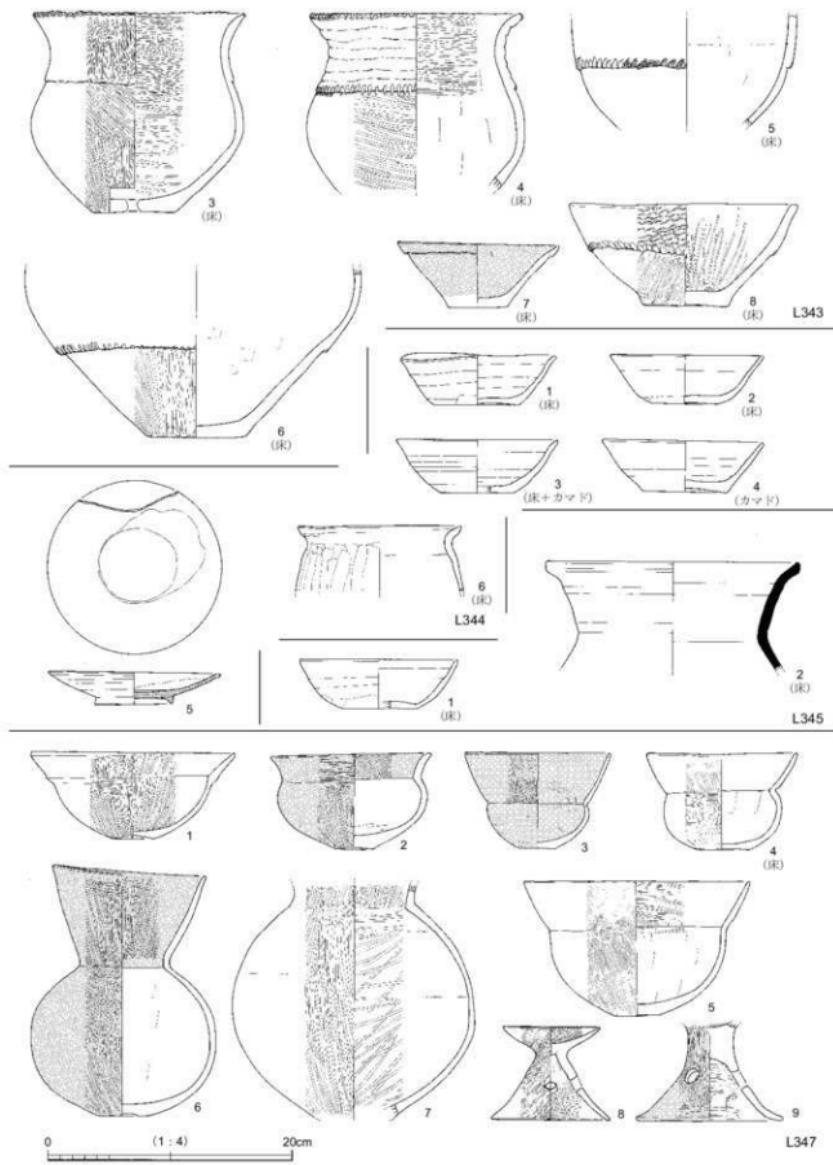
第189図 遺構出土土器 (61)



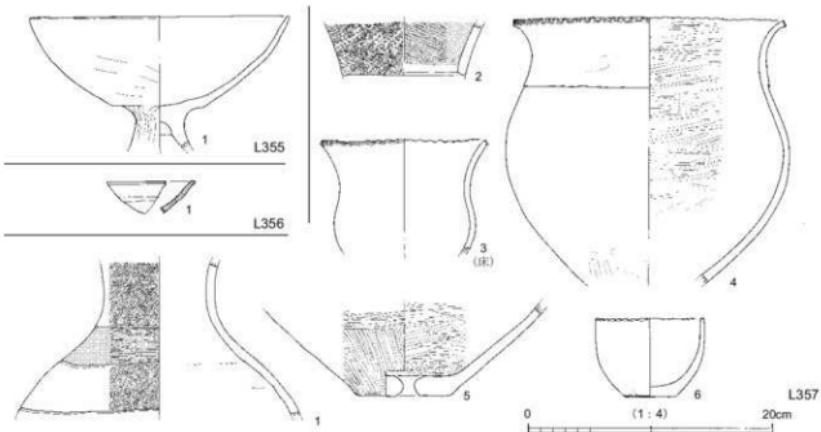
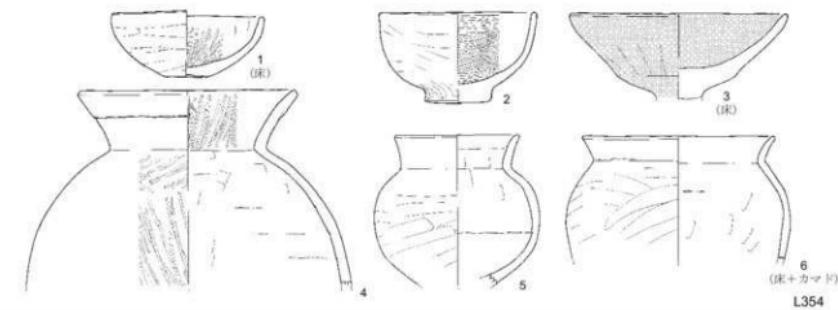
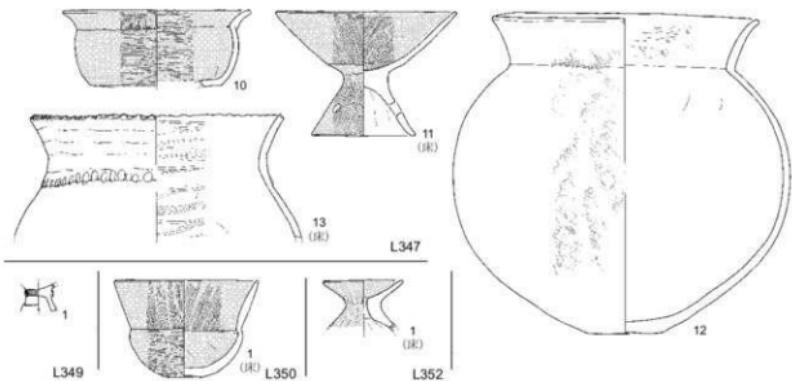
第190図 遺構出土土器 (62)



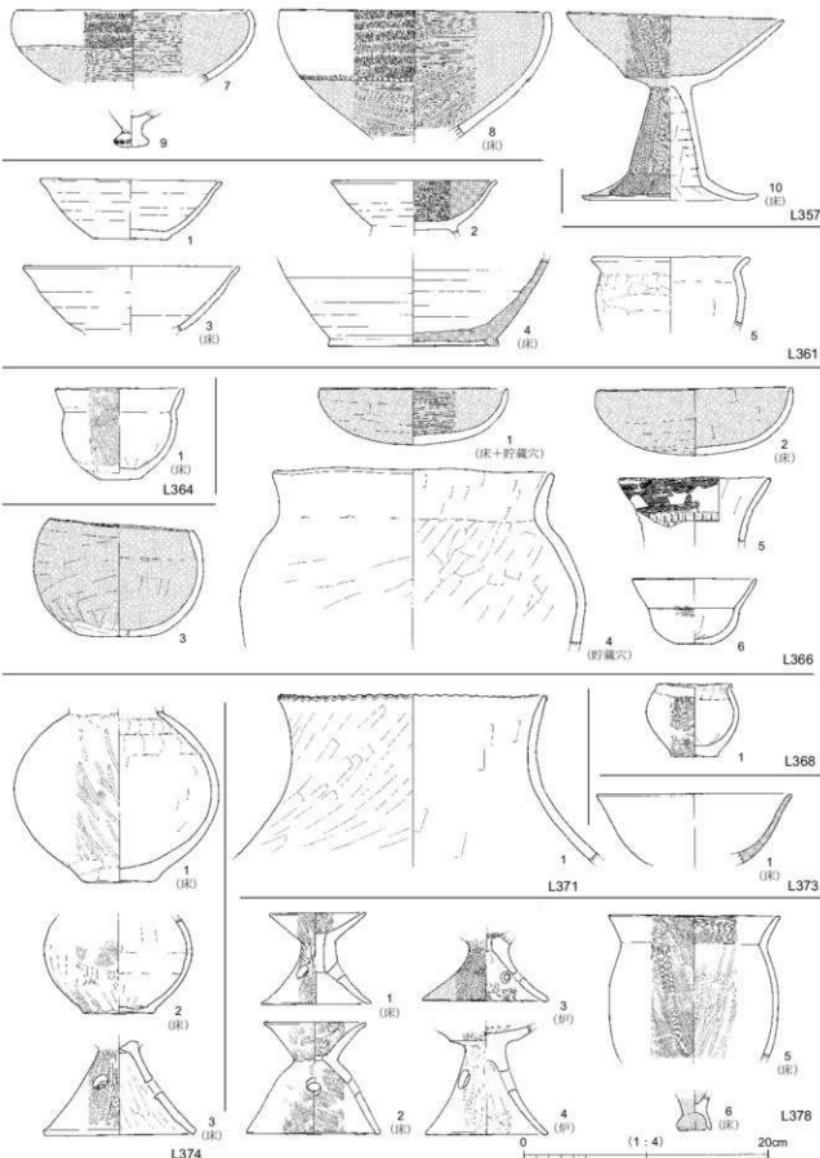
第191図 遺構出土土器 (63)



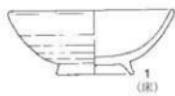
第192図 遺構出土土器 (64)



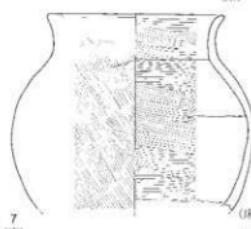
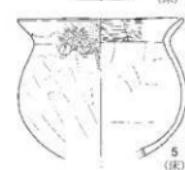
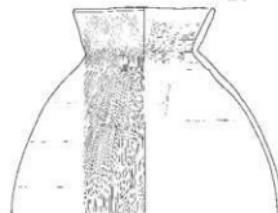
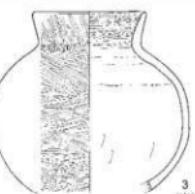
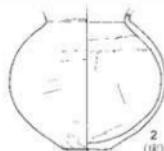
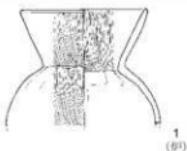
第193図 遺構出土土器 (65)



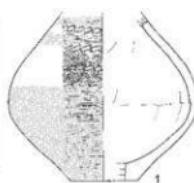
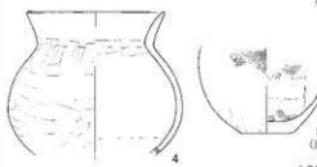
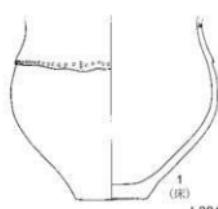
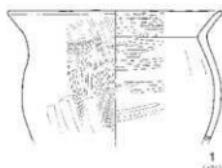
第194図 遺構出土土器 (66)



L379



L382

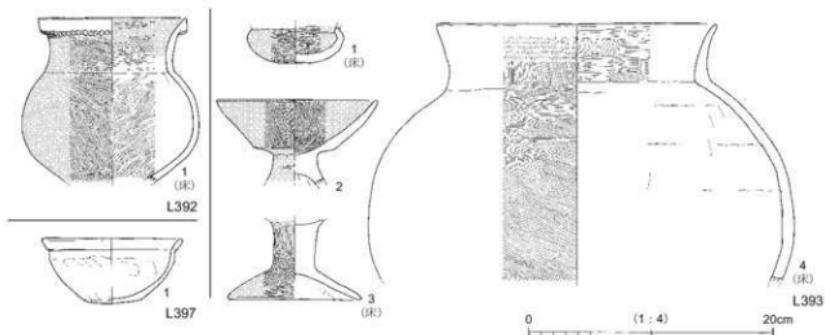
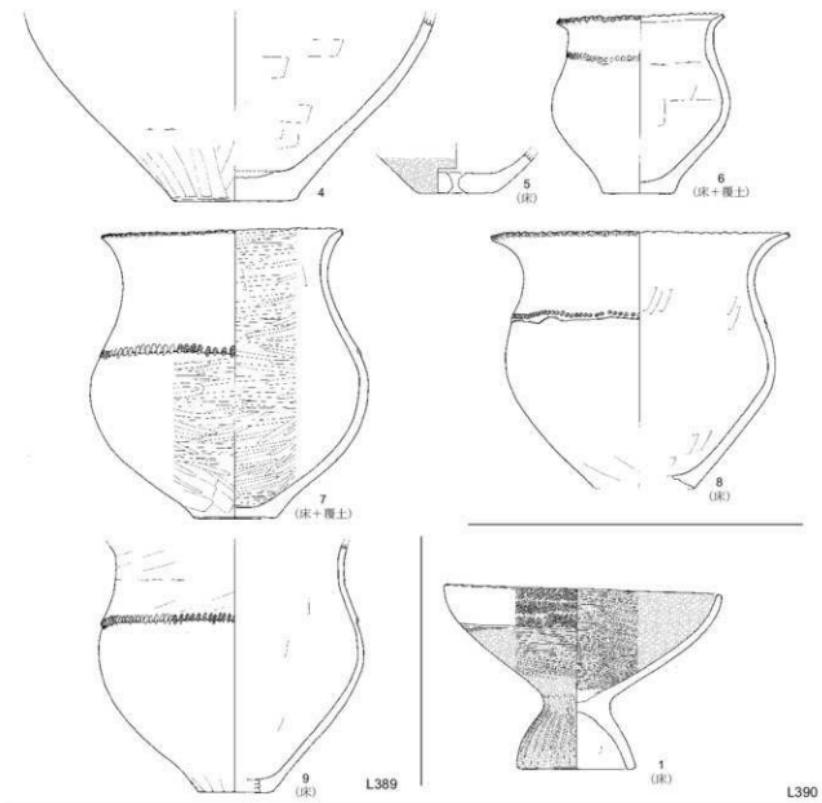


L387

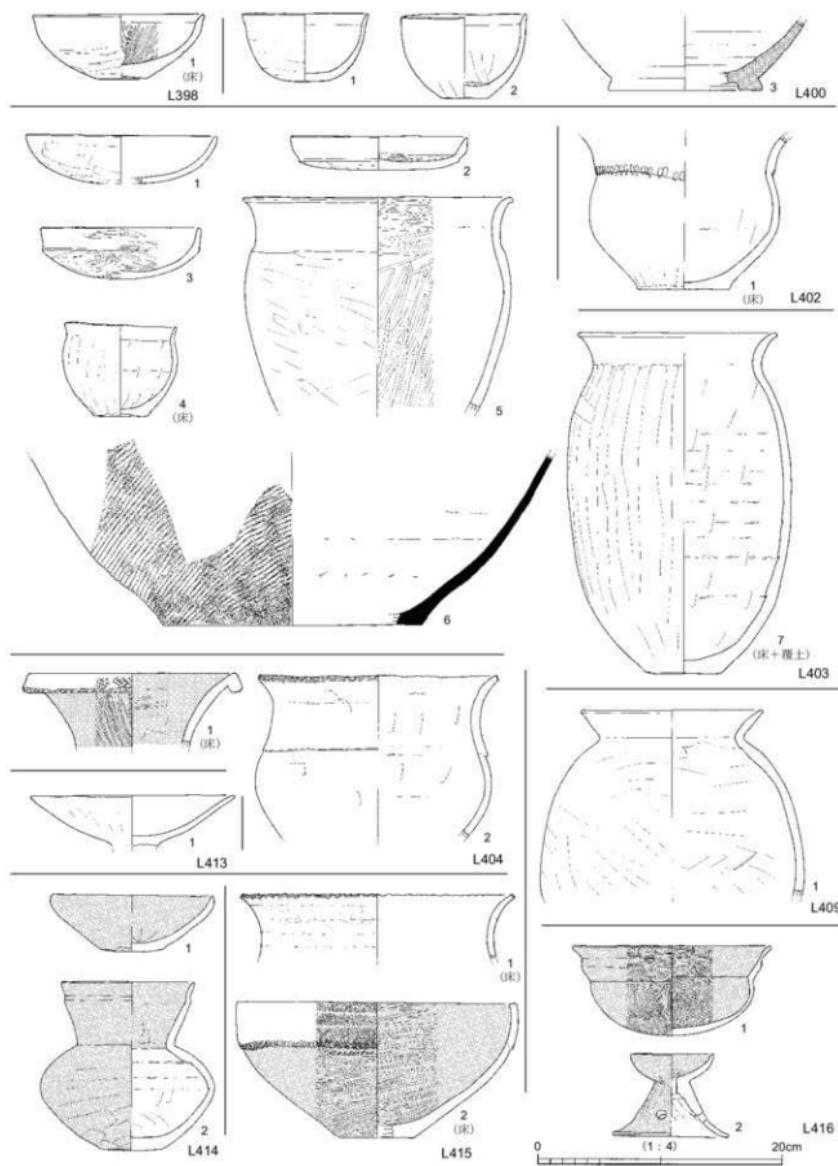


0 (1 : 4) 20cm

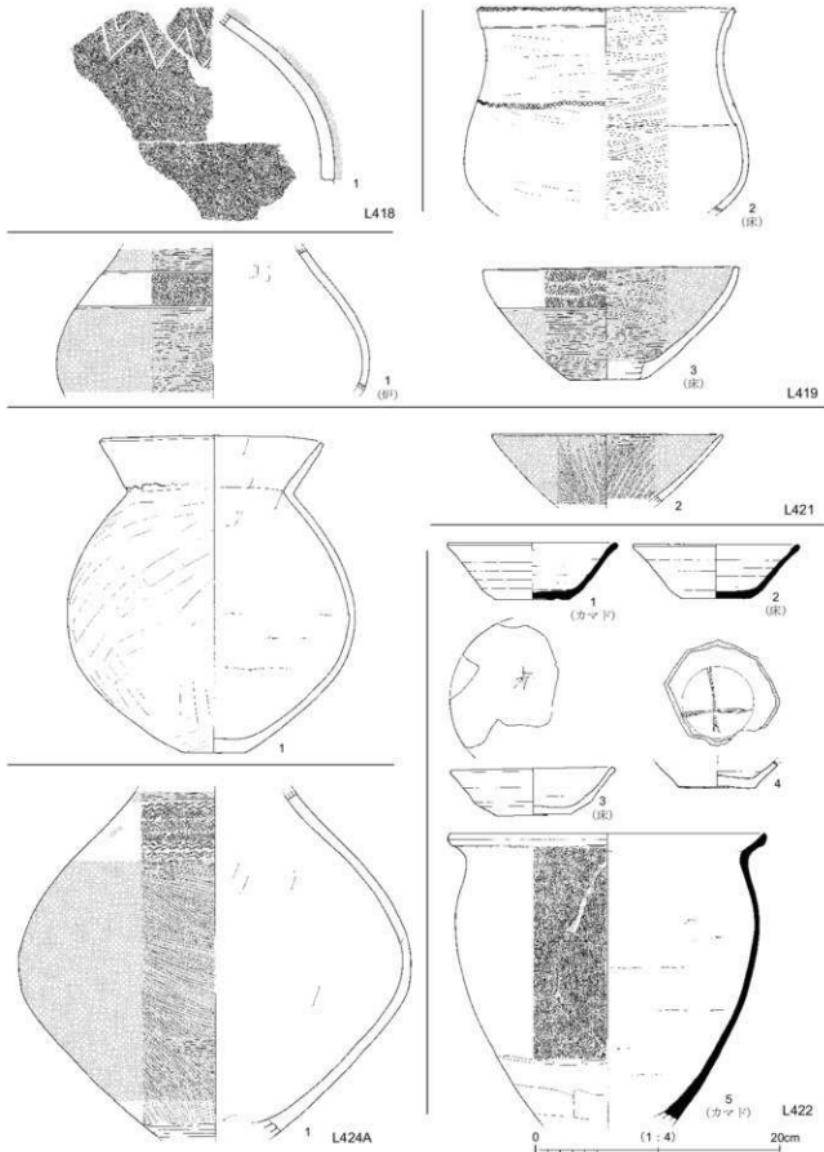
第195図 遺構出土土器 (67)



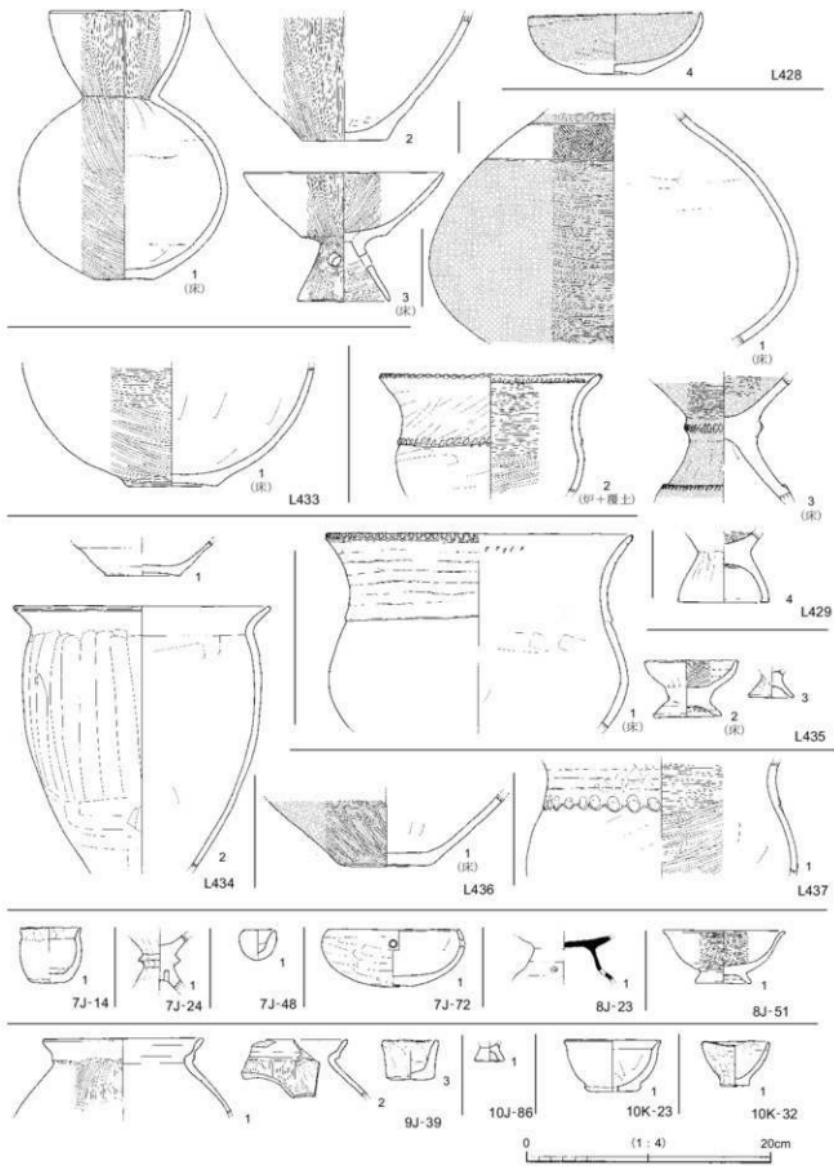
第196図 遺構出土土器 (68)



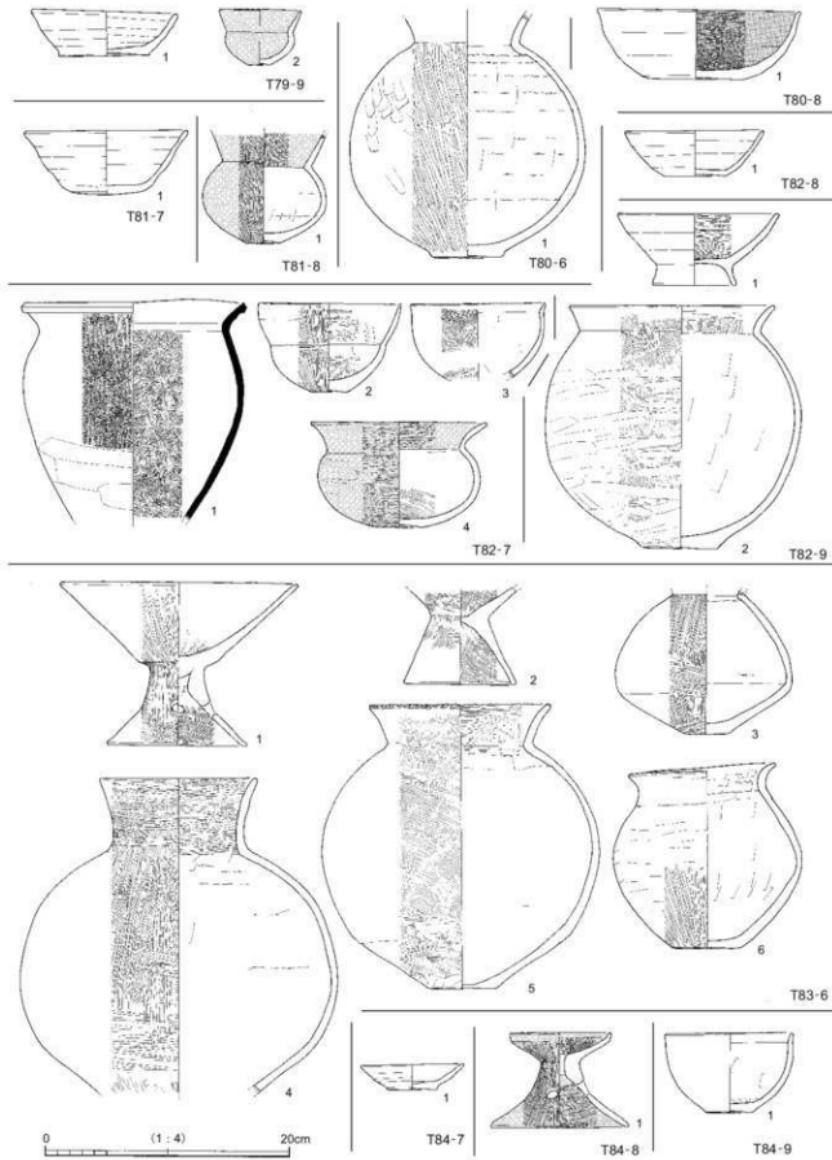
第197図 遺構出土土器 (69)



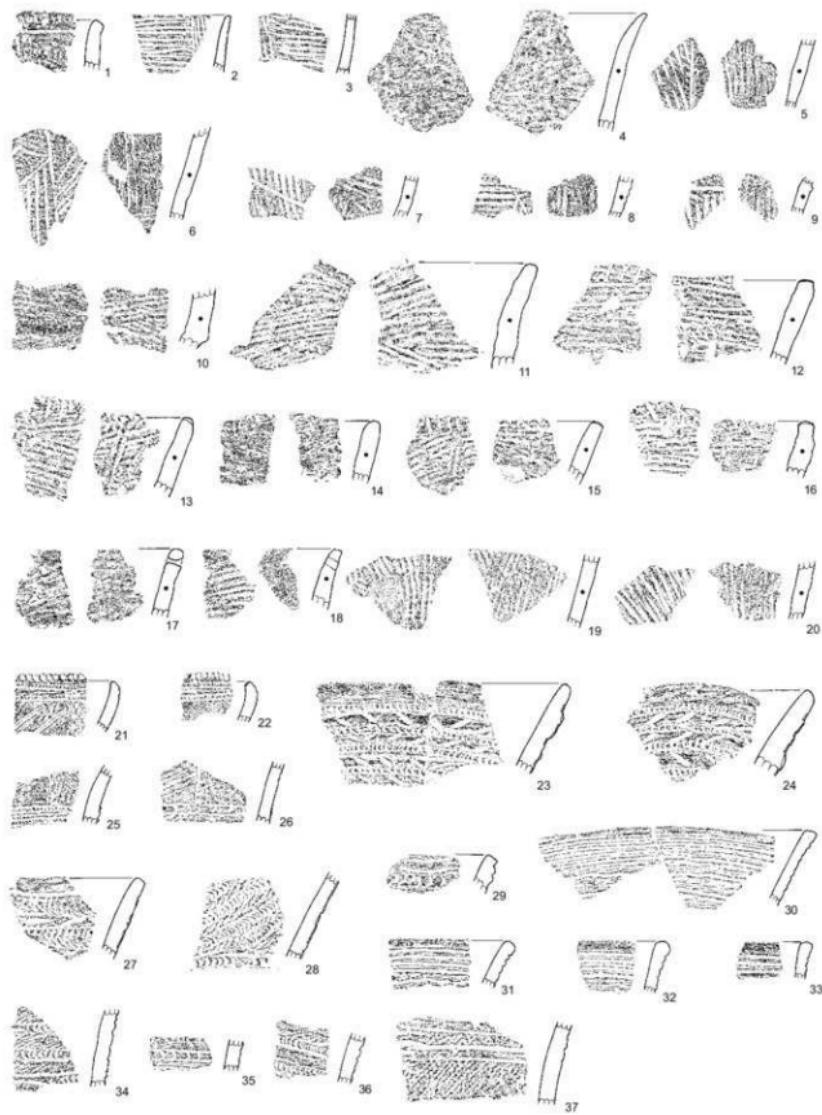
第198図 遺構出土土器 (70)



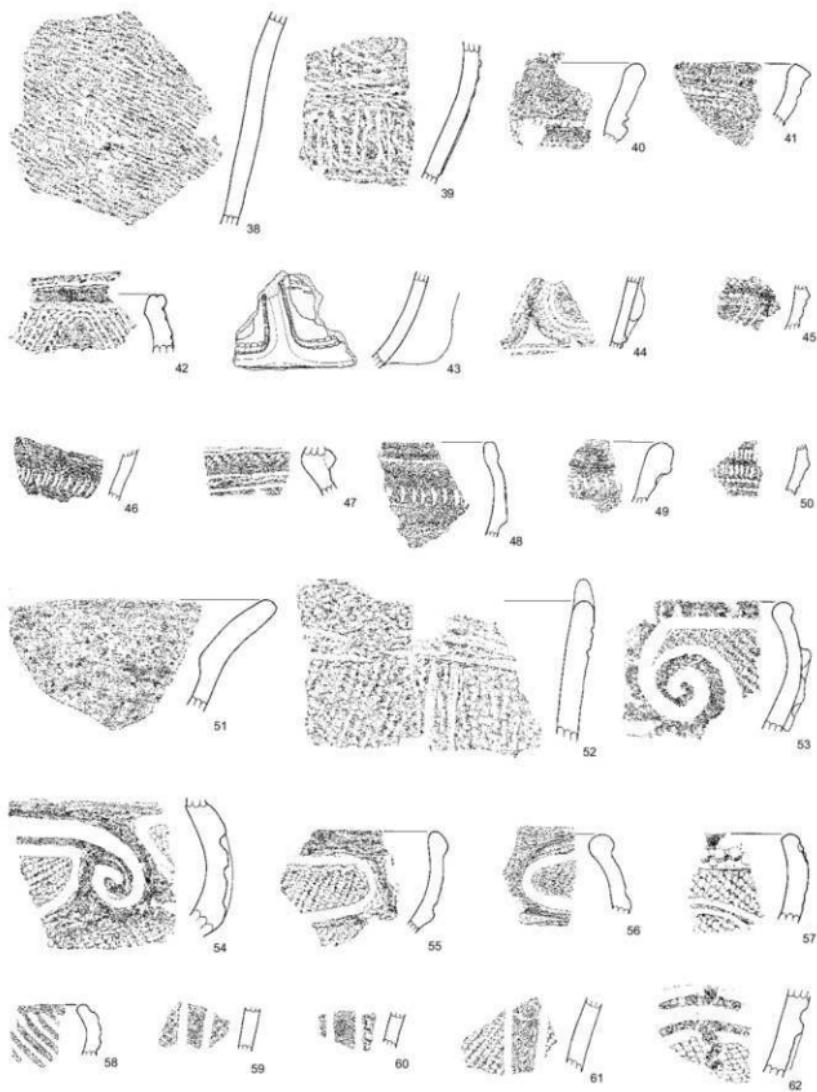
第199図 遺構出土土器 (71)・遺構外出土土器 (1)



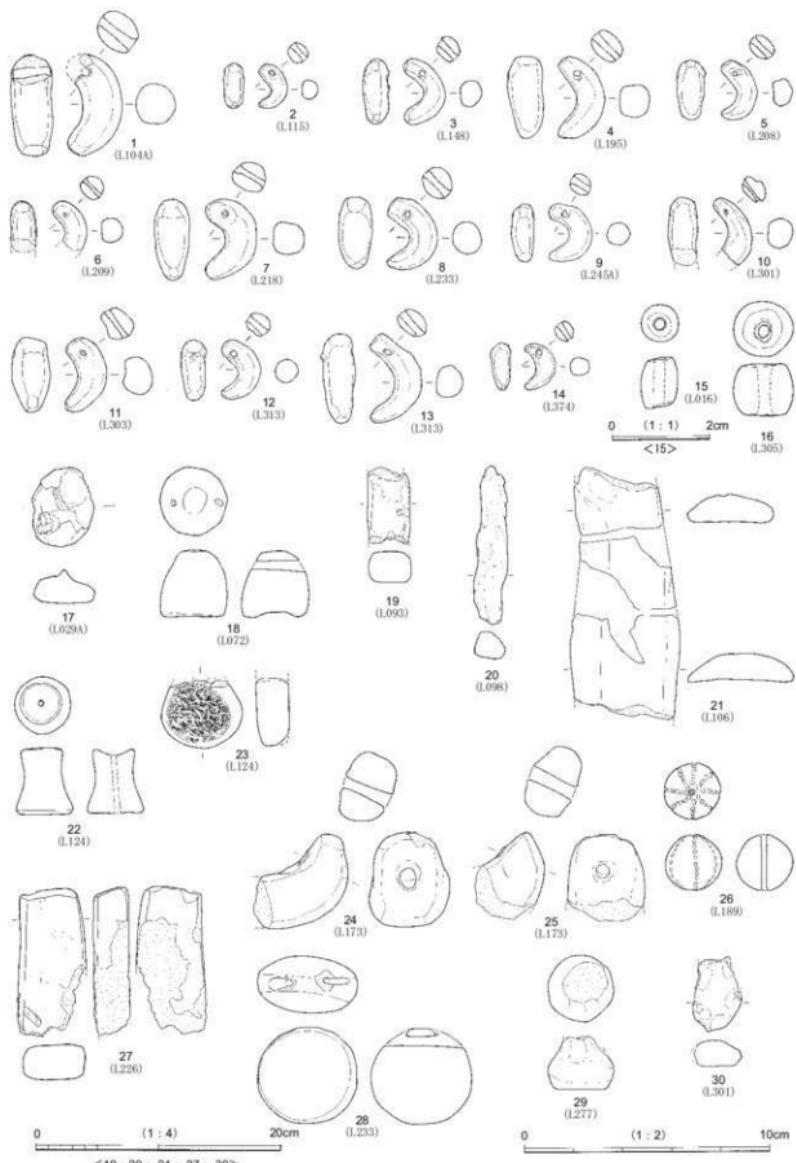
第200図 遺構外出土土器（2）



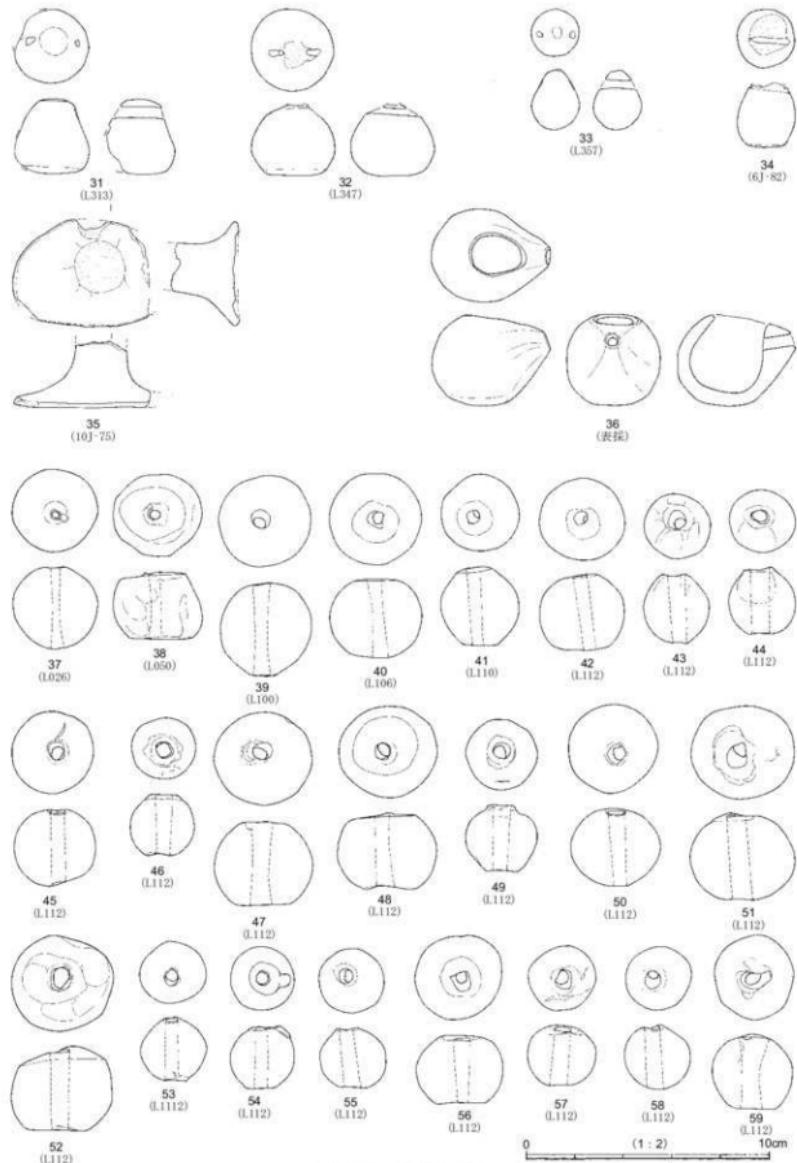
第201図 遺構外出土縄文土器（1）



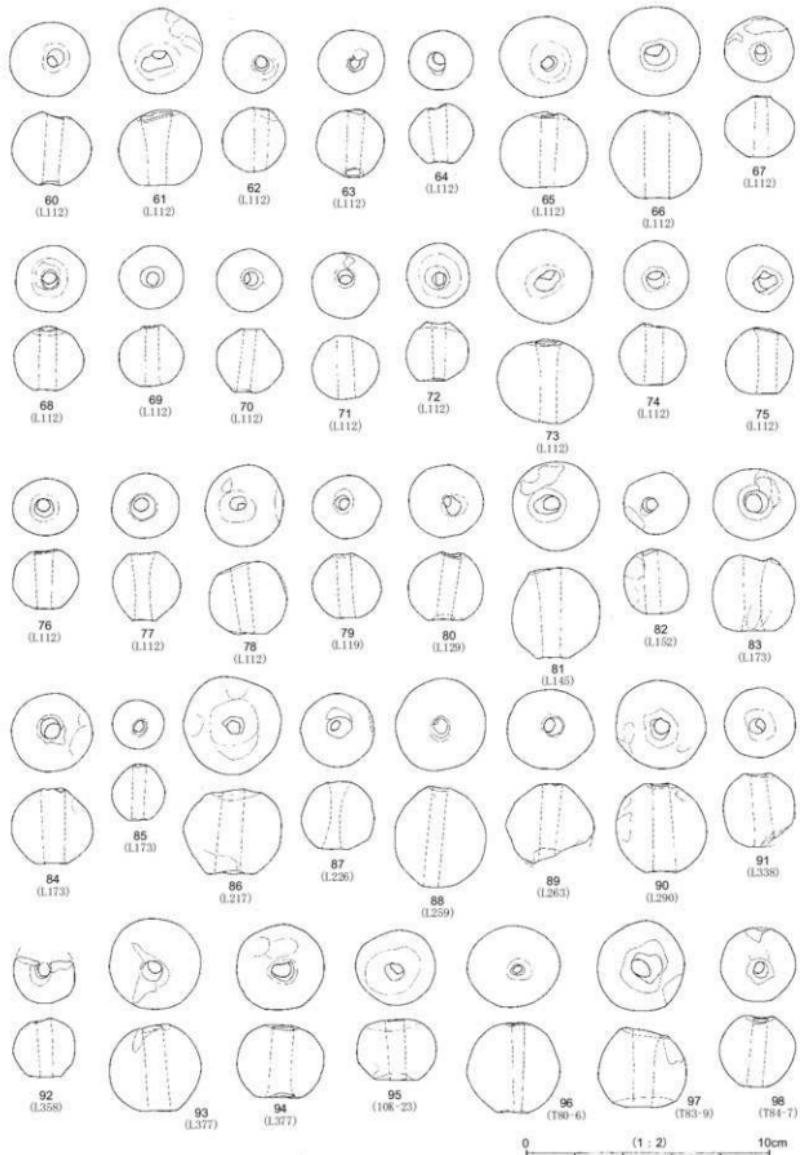
第202図 遺構外出土繩文土器（2）



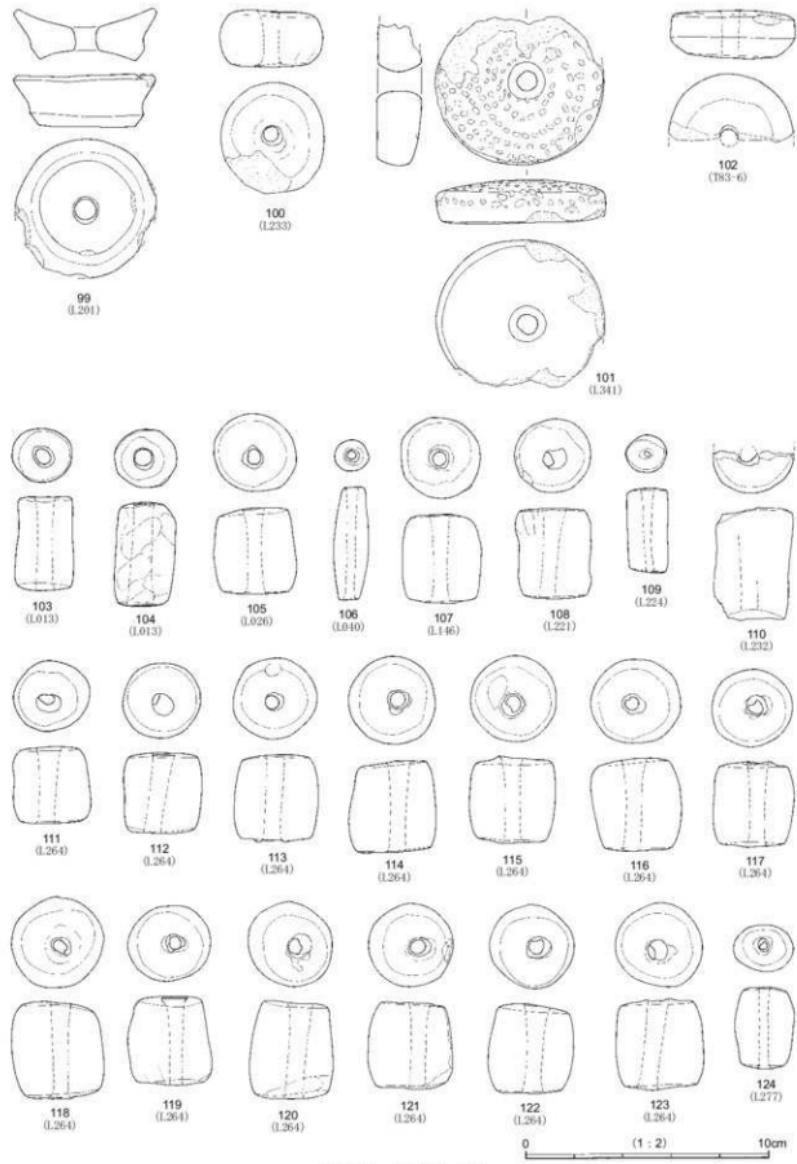
第203図 土製品（1）



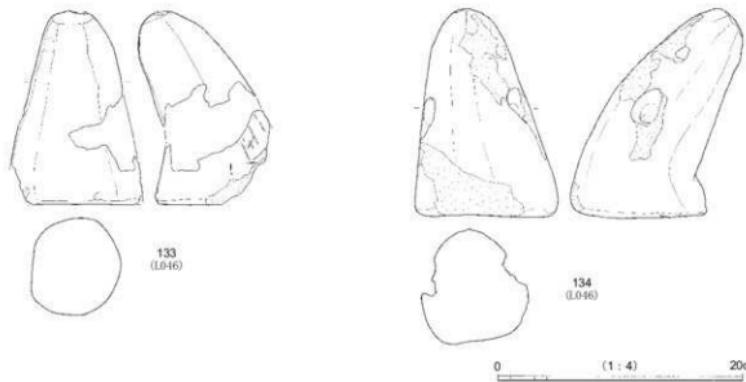
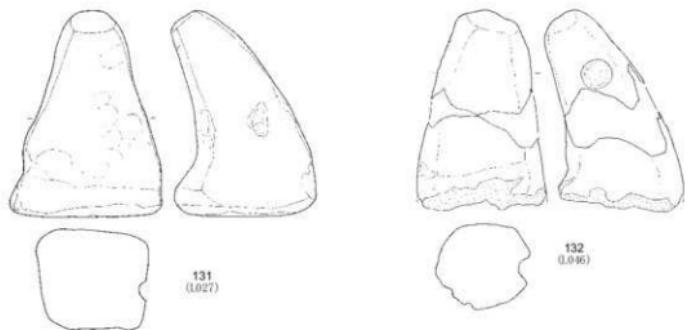
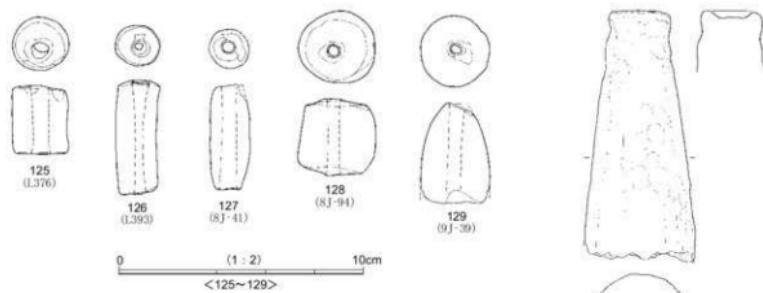
第204図 土製品（2）



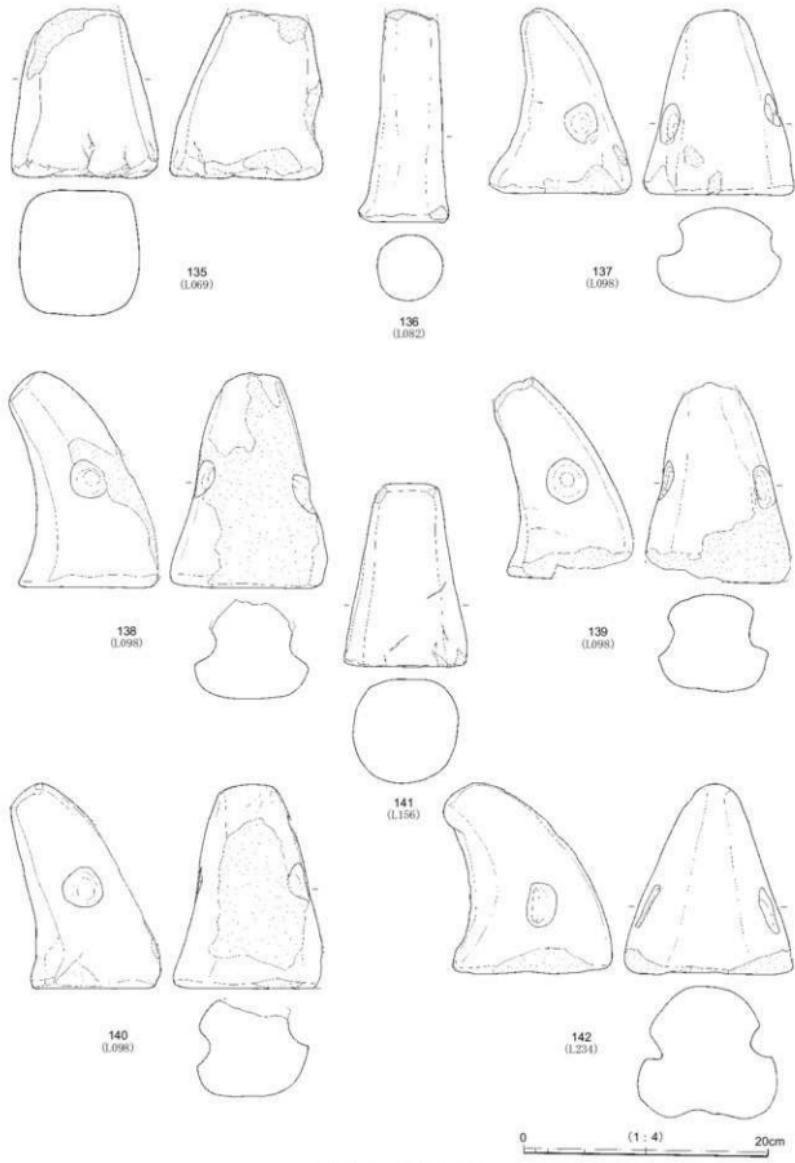
第205図 土製品 (3)



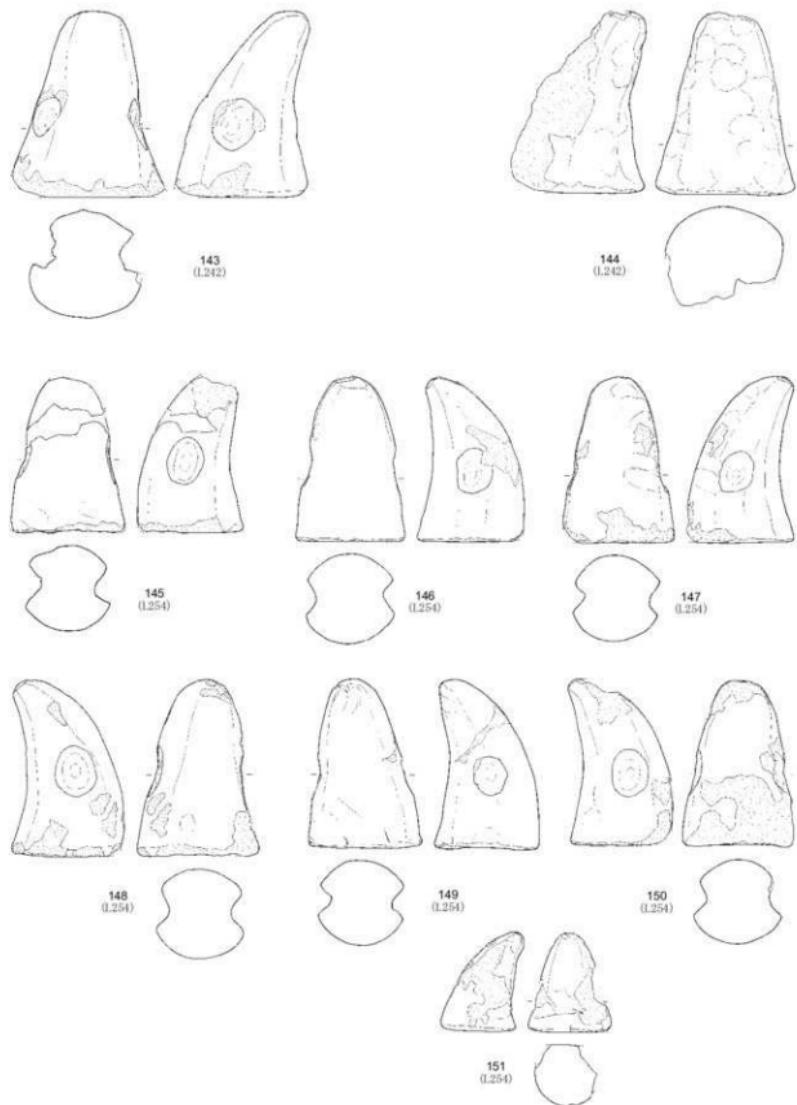
第206図 土製品 (4)



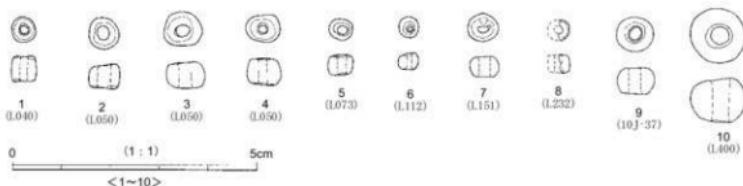
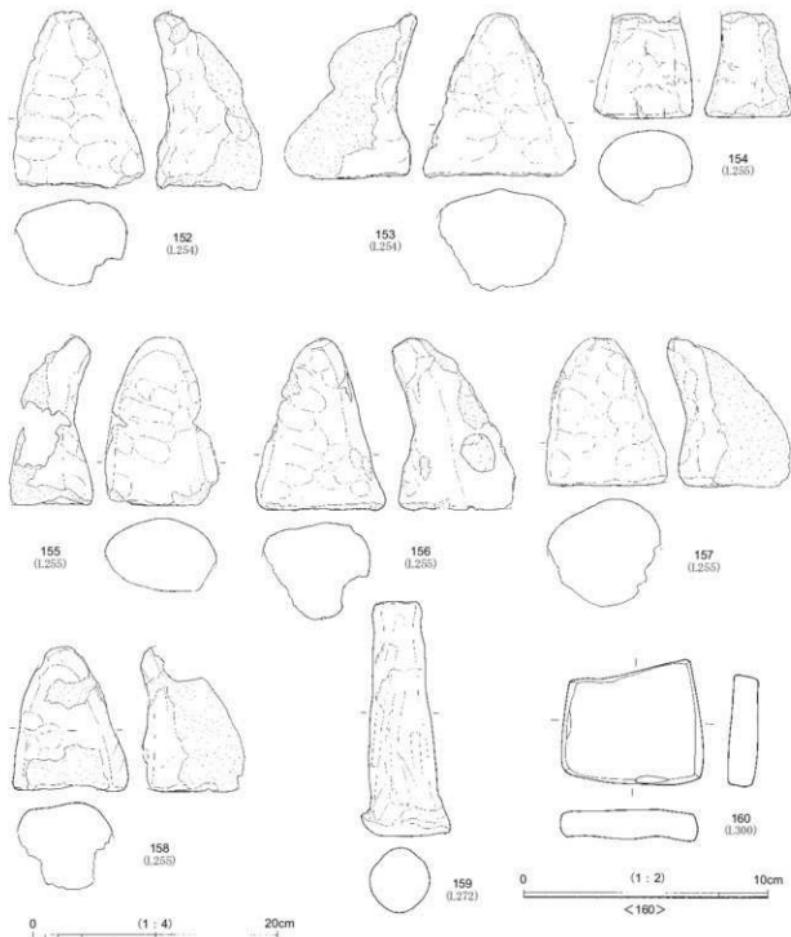
第207図 土製品 (5)



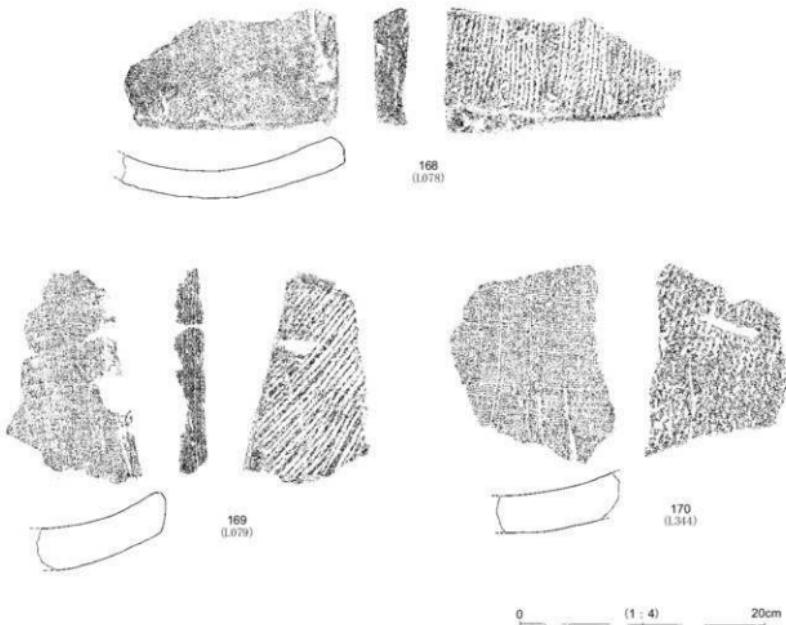
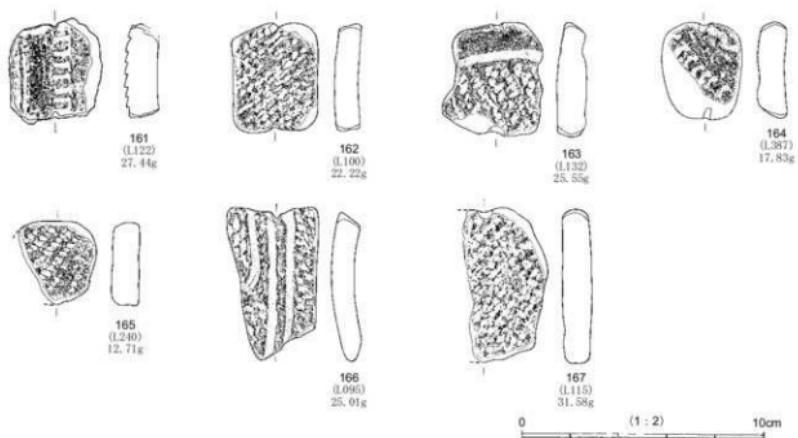
第208図 土製品 (6)



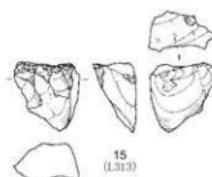
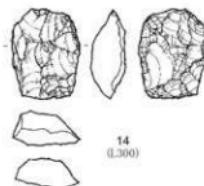
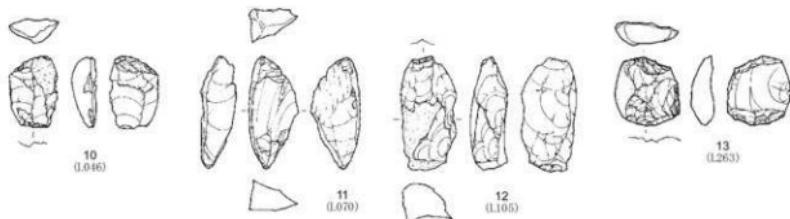
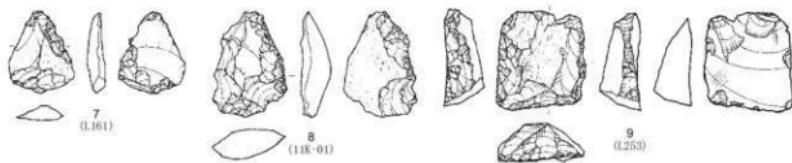
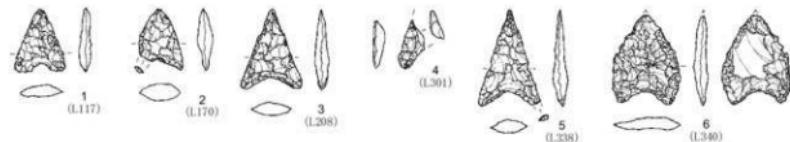
第209図 土製品 (7)



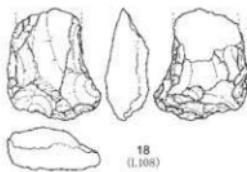
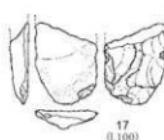
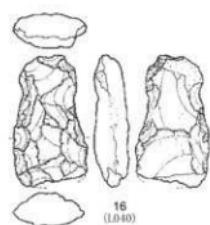
第210図 土製品（8）・ガラス玉



第211図 土製品 (9)

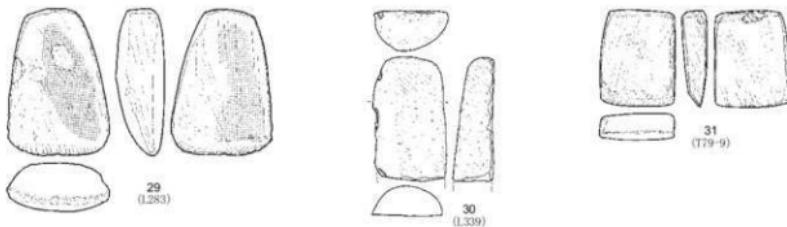
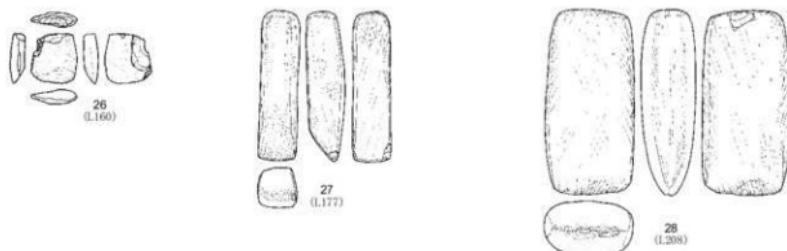
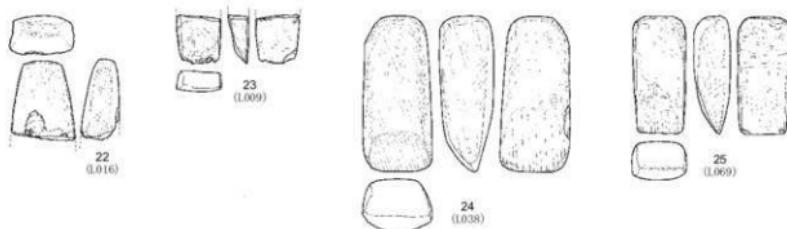
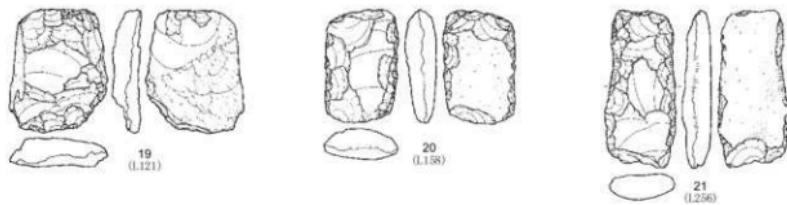


0 (2 : 3) 5cm



0 (1 : 3) 10cm

第212図 石器・石製品(1)

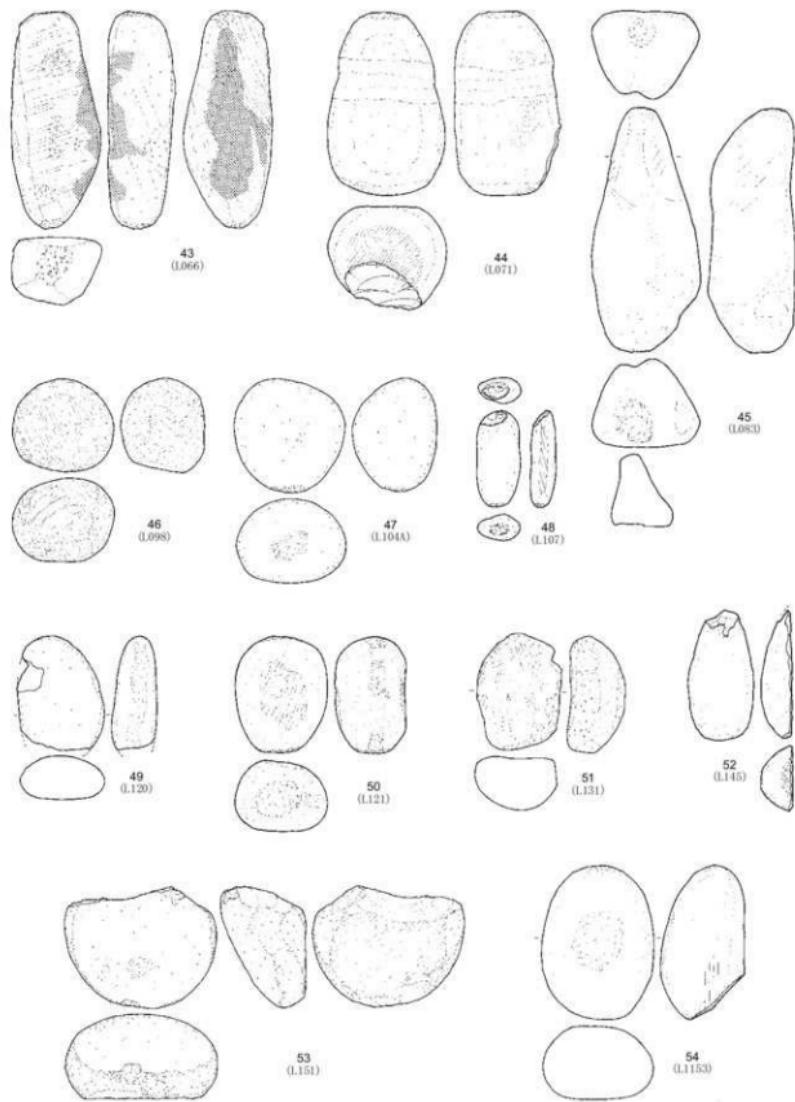


0 (1 : 3) 10cm

第213図 石器・石製品（2）

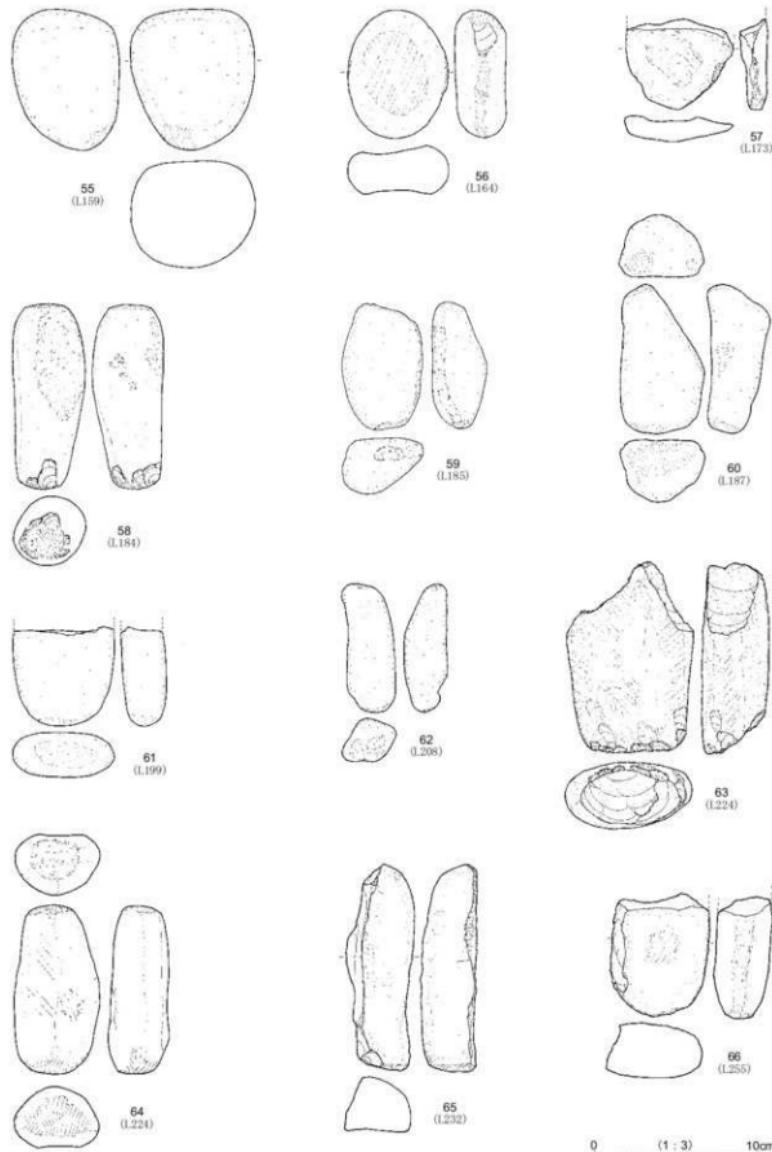


第214図 石器・石製品（3）

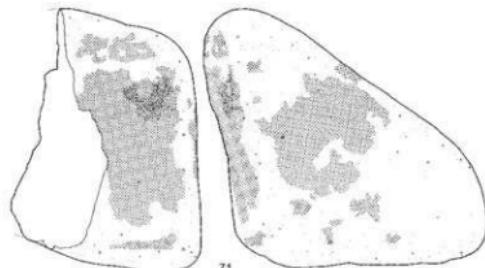
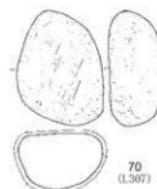
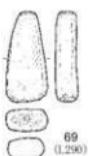
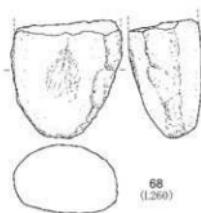
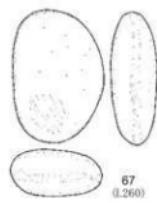


0 (1 : 3) 10cm

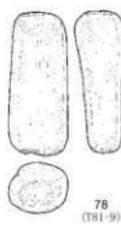
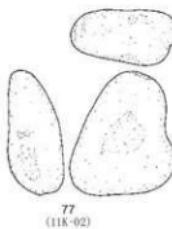
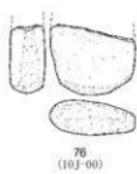
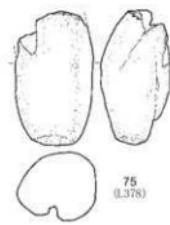
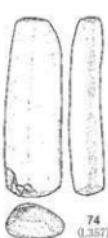
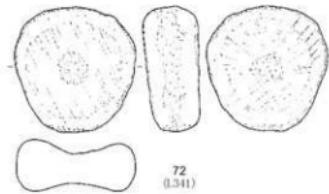
第215図 石器・石製品 (4)



第216図 石器・石製品（5）

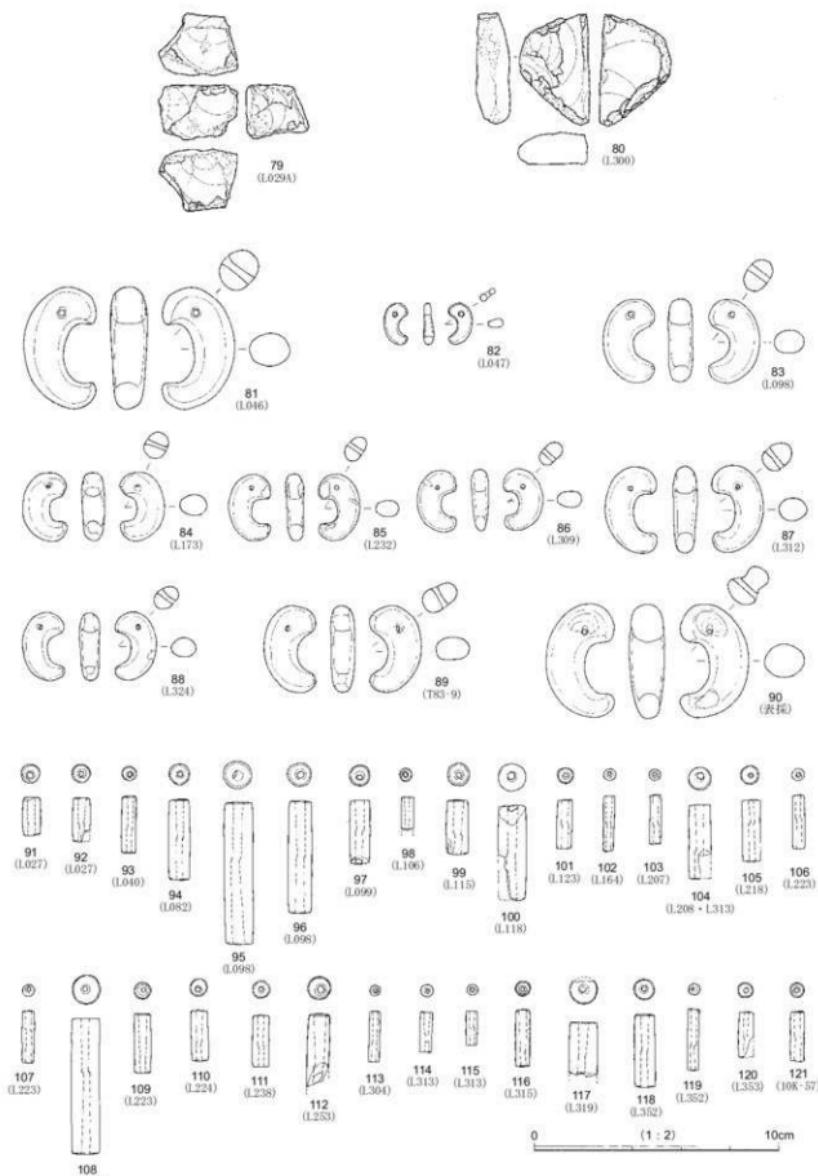


0 (1 : 4) 20cm  
<71>

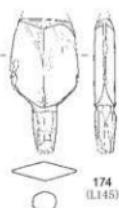
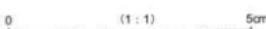
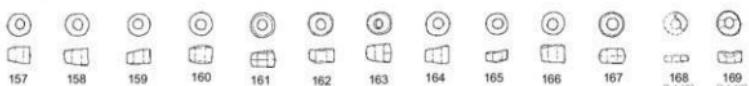
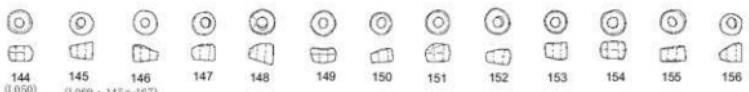
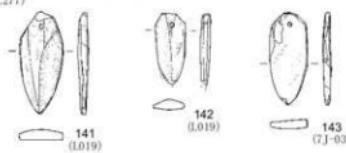
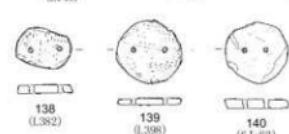
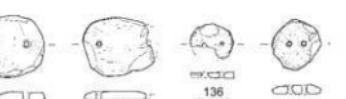
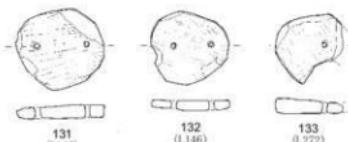
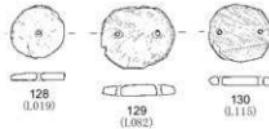
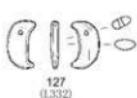
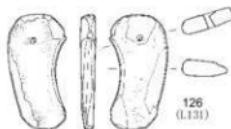
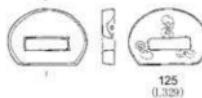
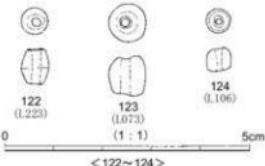


0 (1 : 3) 10cm

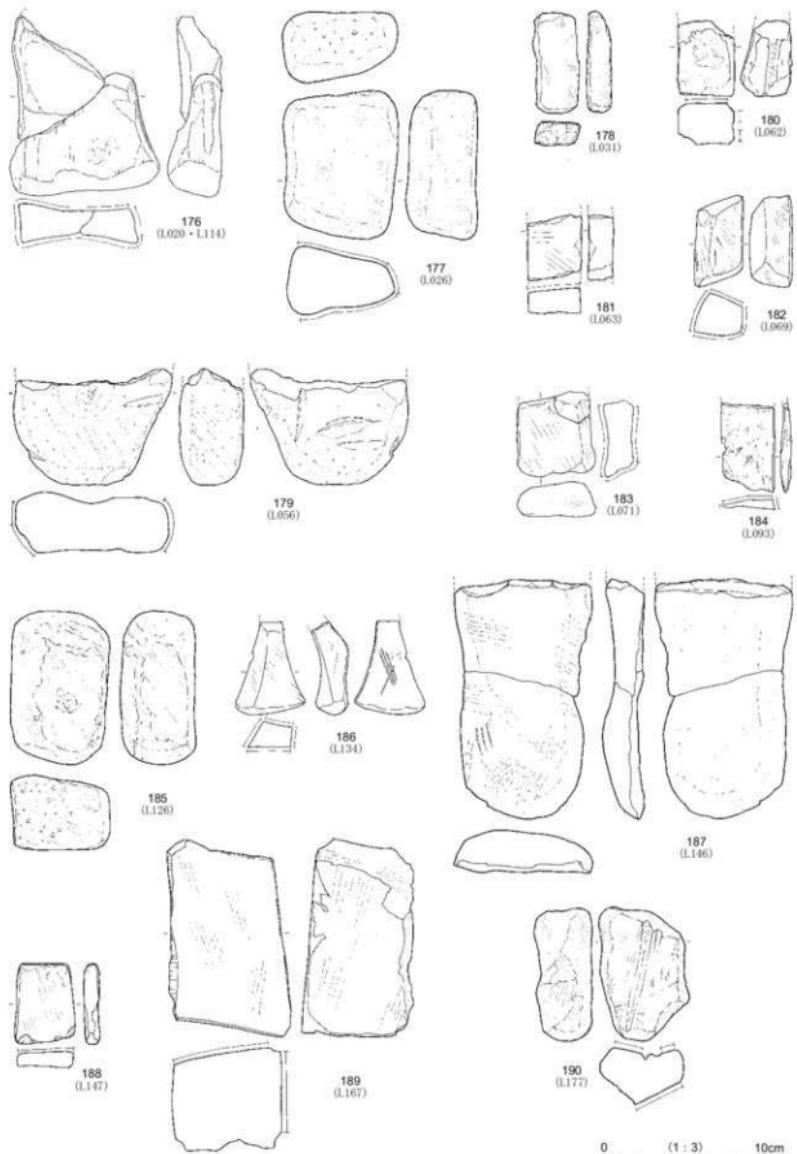
第217図 石器・石製品（6）



第218図 石器・石製品 (7)



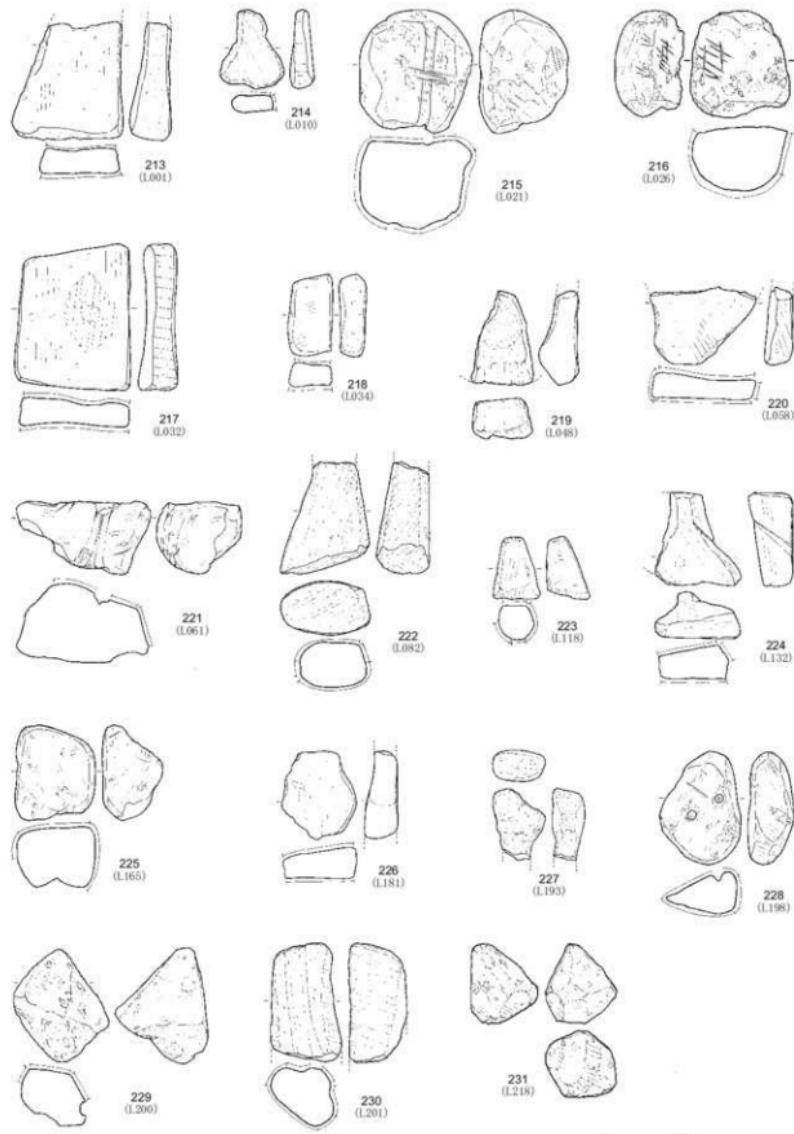
第219図 石器・石製品 (8)



第220図 石器・石製品（9）

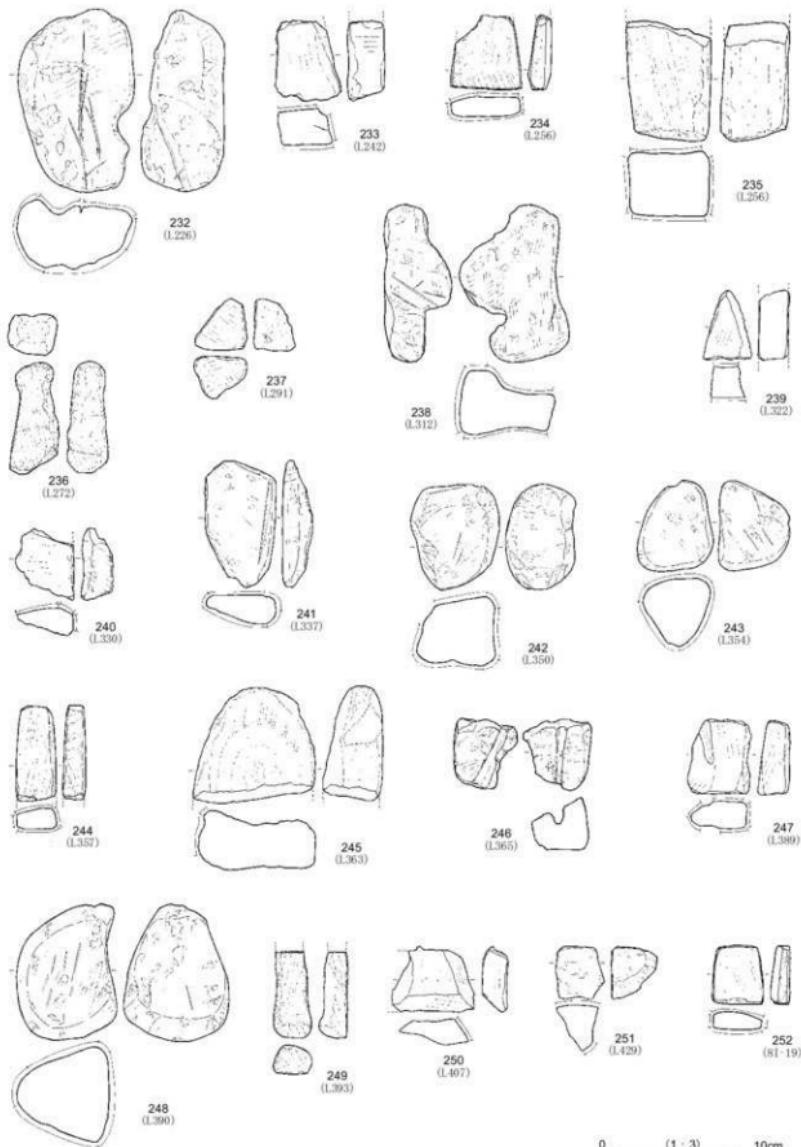


第221図 石器・石製品 (10)



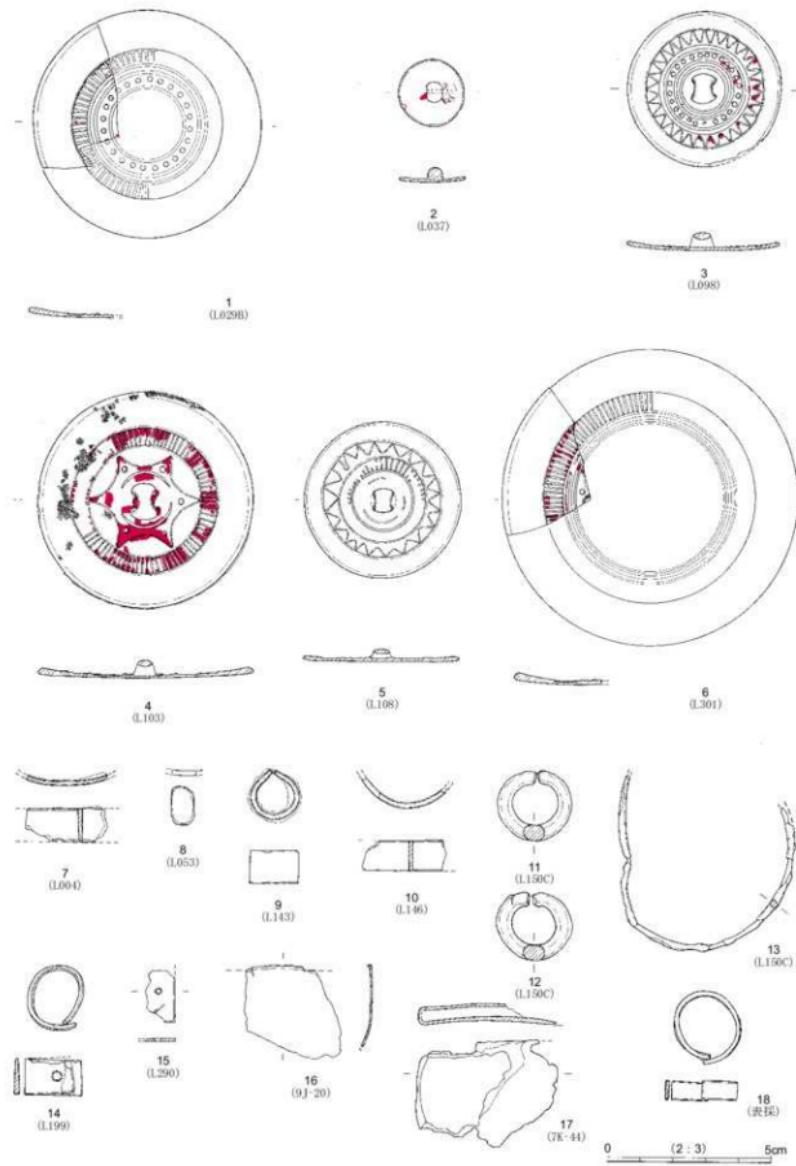
0 (1 : 3) 10cm

第222図 石器・石製品 (11)

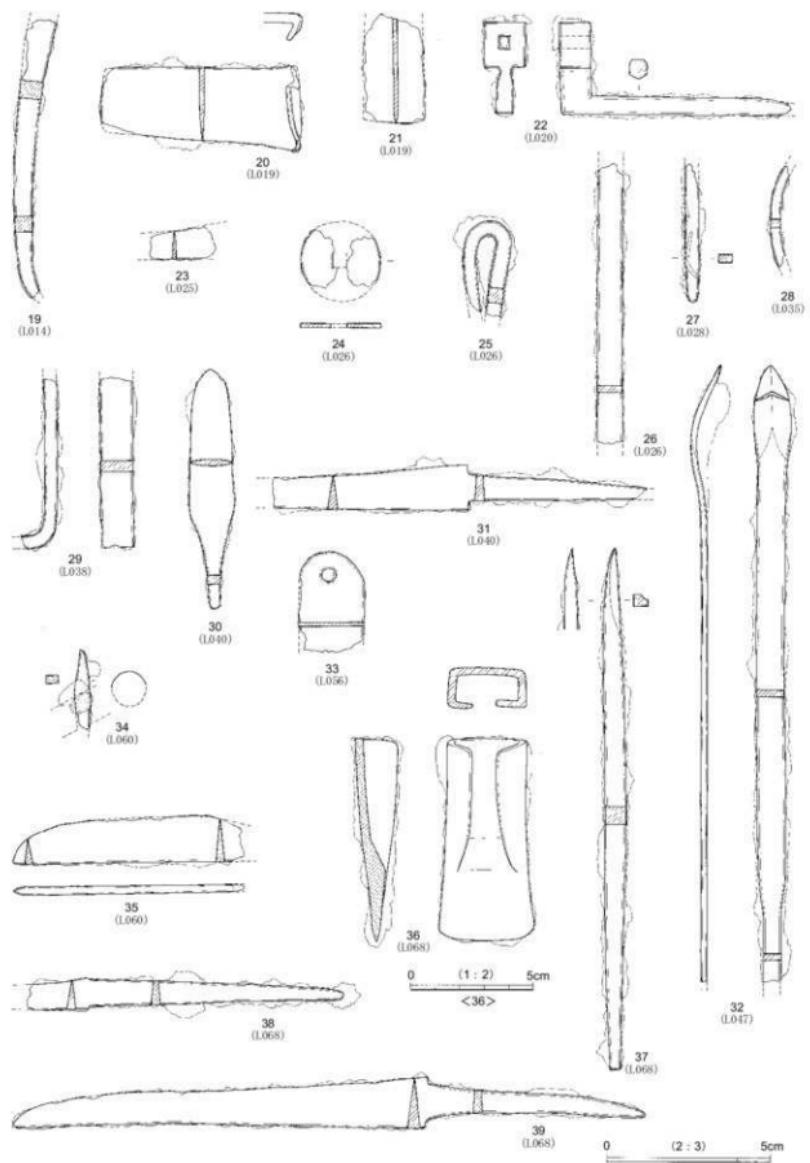


第223図 石器・石製品 (12)

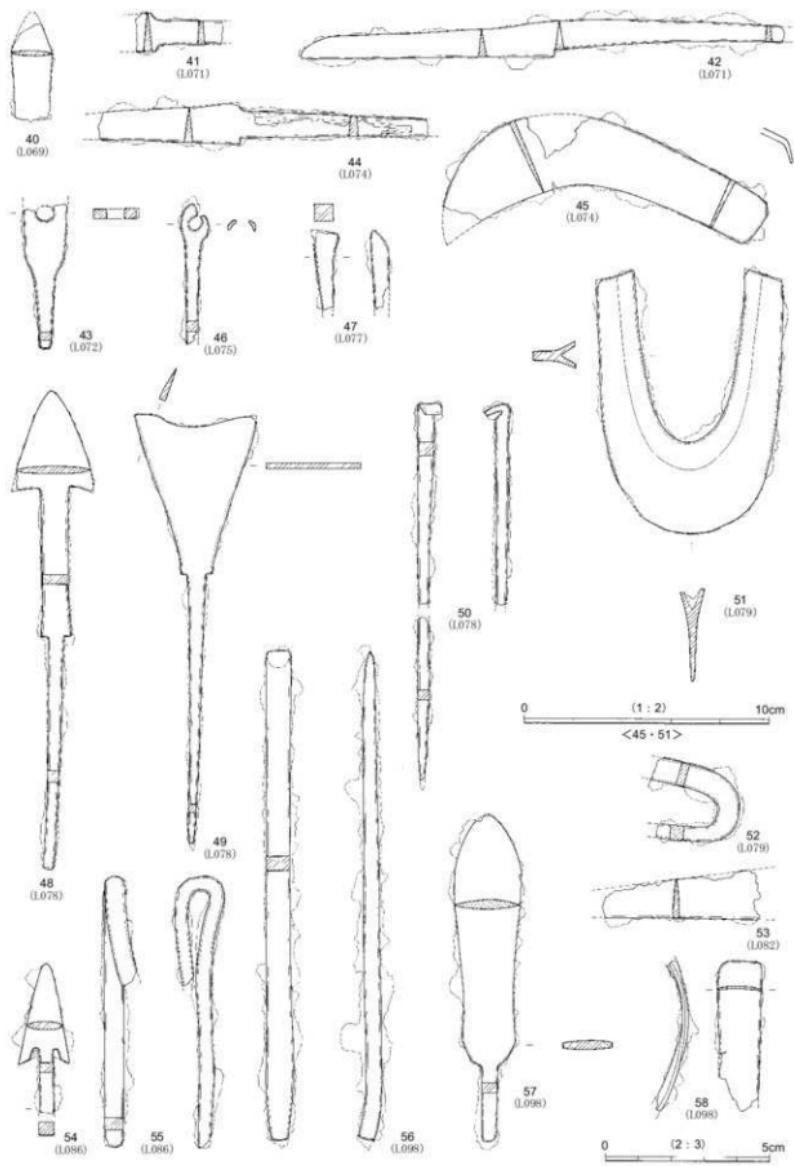
0 (1 : 3) 10cm



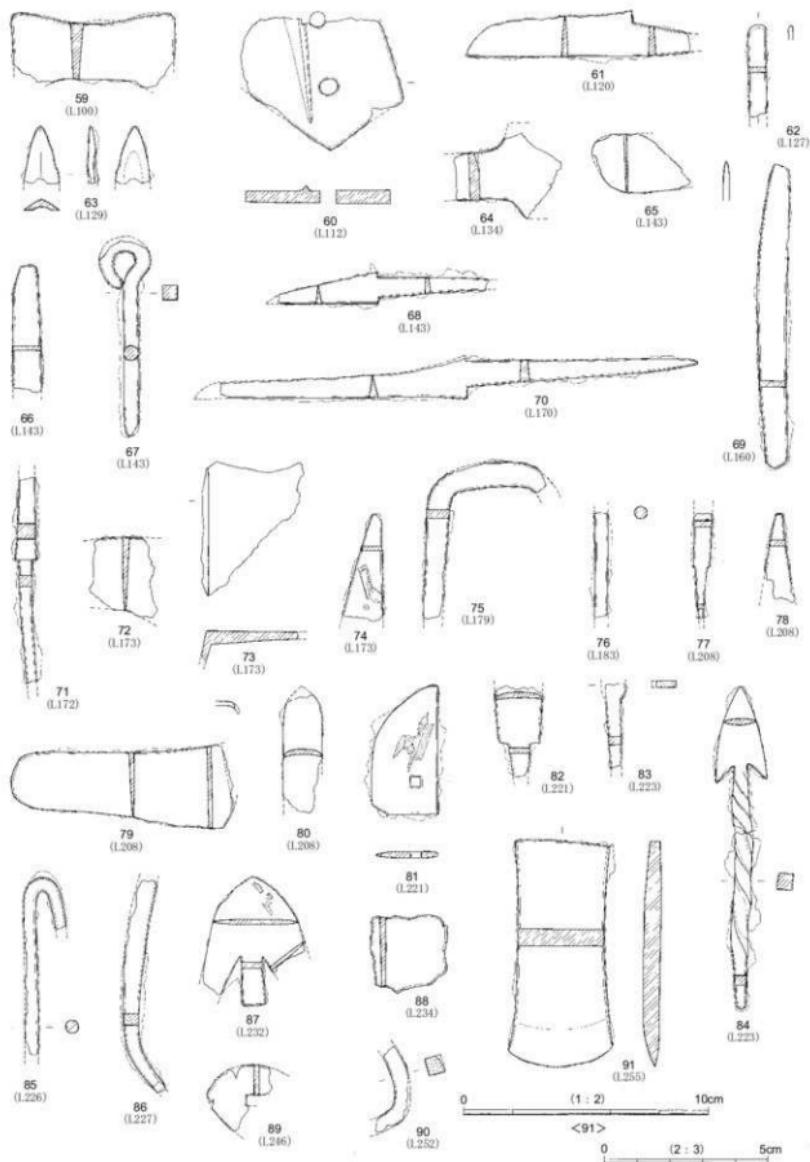
第224図 金属製品 (1)



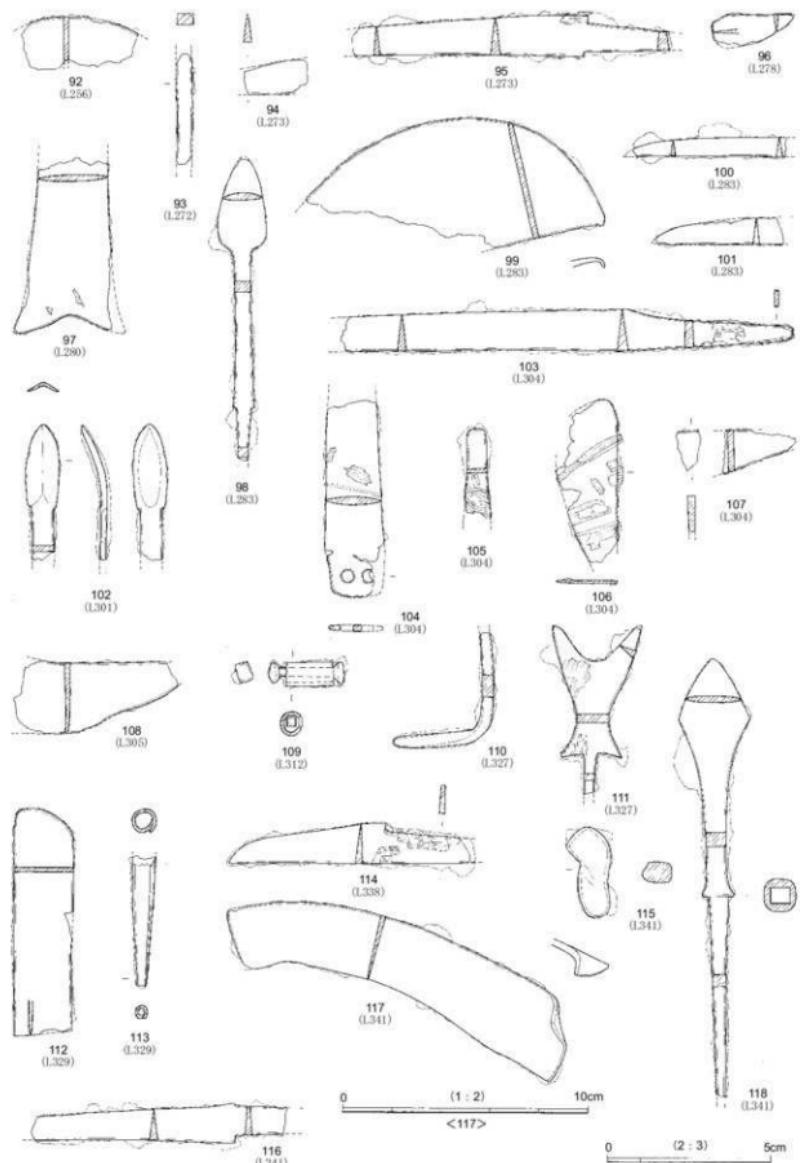
第225図 金属製品 (2)



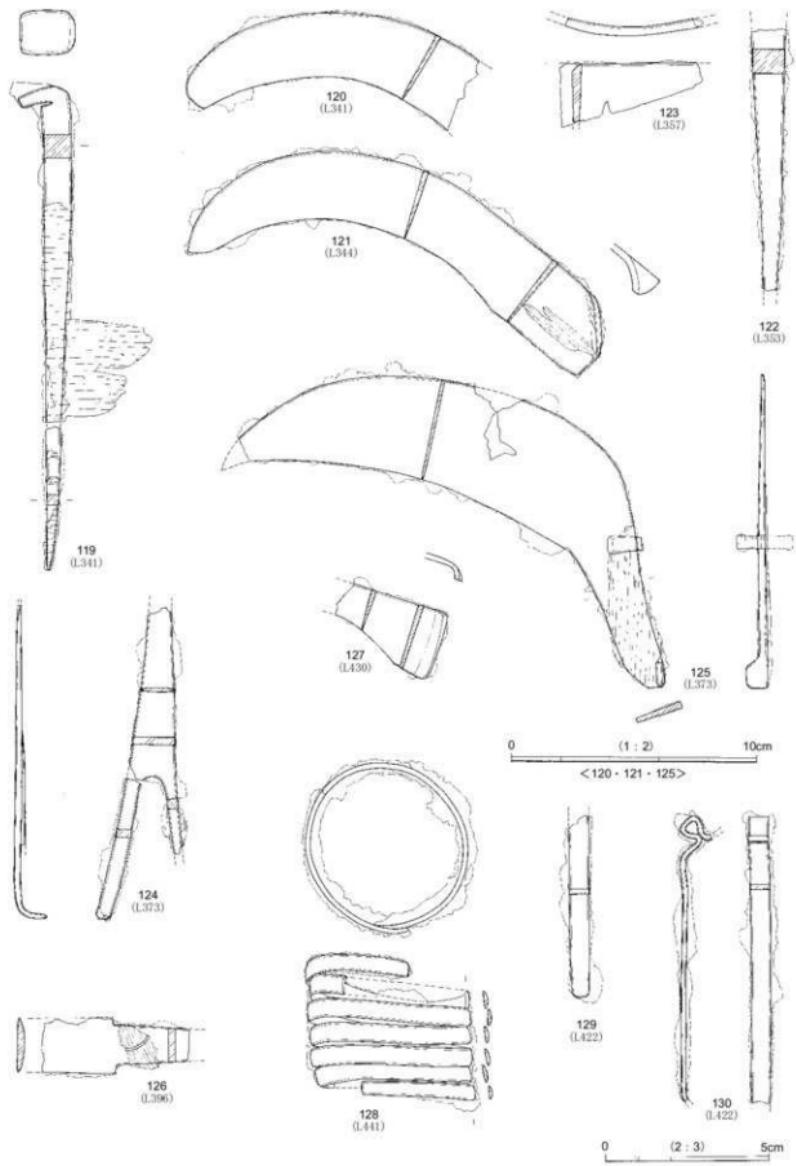
第226図 金属製品 (3)



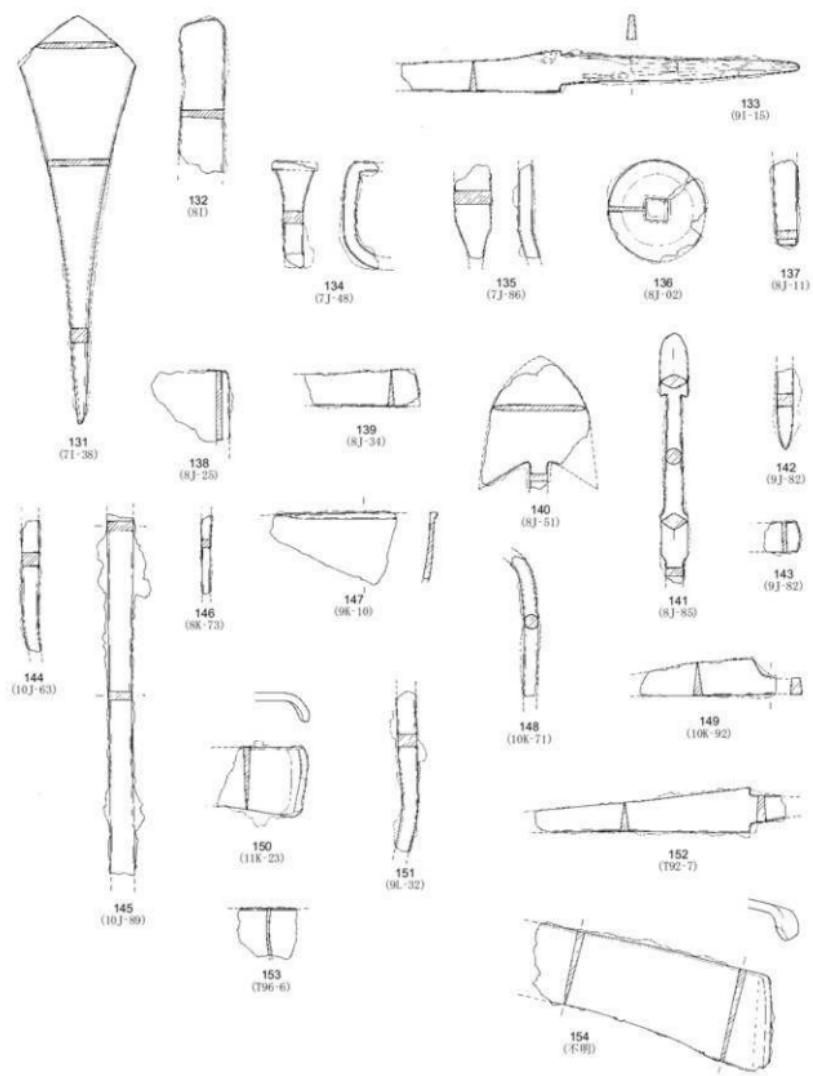
第227図 金属製品 (4)



第228図 金属製品 (5)



第229図 金属製品 (6)



0 (2 : 3) 5cm

第230図 金属製品 (7)

第9表 縦分性状一覧

通称番号	品種名	学名	原産地	栽培地	栽培方法	品種名	原産地	栽培地	H/G(株式会社)			A/H(株式会社)		育成地(会社)		販路		
									P1	P2	P3	P4	P5	P6	(株)	(株)		
1003	16-53-63	新豊田丸の内	6.3×3.8	13.81	K-357	1-19	新豊田丸の内	6	75.0	76.2	96.6	75.2	—	—	—	—	新潟・富山	
1002	16-52-53	新豊田丸の内	6.0×3.9	13.81	K-254	1-19	新豊田丸の内	0	—	—	—	—	—	—	—	—	新潟・富山	
1003	16-43-73	新豊田	7.0×3.8	13.81	K-67	4	28.0	45.0	54.0	—	—	—	—	—	—	—	新潟・富山	
1004	16-41-91	新豊田	5.3×3.8	13.81	K-25	4	8-23	新豊田丸の内	4	32.9	69.2	86.0	59.4	—	—	—	—	新潟・富山
1005	16-43-73	新豊田	7.0×3.8	13.81	K-67	4	25-32	新豊田丸の内	0	—	—	—	—	—	—	—	新潟・富山	
1006	16-35-4	新豊田	7.0×3.8	13.81	K-67	4	3-21	新豊田丸の内	0	—	—	—	—	—	—	—	新潟・富山	
1007	16-42-43	新豊田	7.3×3.3	13.81	K-314	4	8-13	新豊田丸の内	0	—	—	—	—	—	—	—	新潟・富山	
1008	16-35-35	新豊田丸の内	6.1×3.6	13.81	K-67	4	8-25	新豊田丸の内	6	32.2	32.8	57.6	73.6	18.6	—	—	新潟・富山	
1009	16-26-27	新豊田	5.6×3.4	13.81	K-65	6	8-21	新豊田丸の内	0	—	—	—	—	—	—	—	新潟・富山	
1010	16-27-29	新豊	6.0×3.8	13.81	K-30	5-19	新豊	4	80.3	95.3	100.0	102.2	—	—	—	—	新潟・富山	
1011	16-37-30	新豊	5.3×3.5	13.81	K-35	8-18	新豊	0	—	—	—	—	—	—	—	—	新潟・富山	
1012	16-36-27	新豊	5.1×3.2	13.81	K-15	8-18	新豊	0	—	—	—	—	—	—	—	—	新潟・富山	
1013	16-37-30	新豊	4.8×3.9	13.81	K-10	8-18	新豊	0	—	—	—	—	—	—	—	—	新潟・富山	
1014	16-26-16, 30	新矢の里	7.2×3.0	13.81	K-31	8-18	新矢の里	4	70.1	93.0	93.5	93.0	—	—	—	—	新潟・富山	
1015	16-40-45	門前	5.1×3.9	13.81	K-18	8-18	門前	6	80.0	76.2	92.5	93.0	22.0	—	—	—	新潟・富山	
1016	16-42-57	新門前	5.4×3.9	13.81	K-4	8-18	新門前	0	—	—	—	—	—	—	—	—	新潟・富山	
1017	16-27-73	(新)門前	4.8×3.8	13.81	K-3	8-18	(新)門前	—	—	—	—	—	—	—	—	—	新潟・富山	
1018	16-46-67	新門前	4.8×3.6	13.81	K-10	8-18	新門前	0	—	—	—	—	—	—	—	—	新潟・富山	
1019	16-31-73	新門前	5.1×3.6	13.81	K-15	8-18	新門前	4	70.1	93.0	93.5	93.0	—	—	—	—	新潟・富山	
1020	16-30-46	新門前	5.1×3.6	13.81	K-15	8-18	新門前	0	—	—	—	—	—	—	—	—	新潟・富山	
1022	16-30-46	新門前	5.1×3.6	13.81	K-15	8-18	新門前	0	—	—	—	—	—	—	—	—	新潟・富山	
1023	16-40-50	新門前	5.1×3.6	13.81	K-15	8-18	新門前	0	—	—	—	—	—	—	—	—	新潟・富山	
1024	16-39-49	新門前	5.0×3.8	13.81	K-15	8-18	新門前	0	—	—	—	—	—	—	—	—	新潟・富山	
1025	16-40-59	新門前	6.0×3.9	13.81	K-15	8-18	新門前	4	80.0	95.5	96.0	96.0	—	—	—	—	新潟・富山	
1026	16-39-59	新門前	6.1×3.8	13.81	K-15	8-18	新門前	4	97.4	99.2	99.4	100.0	—	—	—	—	新潟・富山	
1027	16-70-16, 20	新門前	5.6×3.6	13.81	K-15	8-18	新門前	1	90.1	96.3	100.0	95.9	—	—	—	—	新潟・富山	
1028	16-36-57	新豊田丸の内	3.8×2.3	13.81	K-18	8-18	新豊田丸の内	0	—	—	—	—	—	—	—	—	新潟・富山	
1029	16-70-84	新豊	5.0×3.6	13.81	K-32	8	8-37	新豊	—	—	—	—	—	—	—	—	新潟・富山	
1030	16-70-84	新豊	5.2×3.6	13.81	K-31	8	8-37	新豊	4	52.1	64.4	66.0	62.3	—	—	—	新潟・富山	
1031	16-49-14	新豊	4.9×4.0	13.81	K-41	8	8-20	新豊	6	86.2	95.2	98.0	82.2	25.8	—	—	新潟・富山	
1032	16-15-22	新豊	3.6×3.6	13.81	K-29	8	8-13	新豊	0	—	—	—	—	—	—	—	新潟・富山	
1033	16-21-22	方舟	2.5×2.7	13.81	K-29	8	8-20	方舟	0	—	—	—	—	—	—	—	新潟・富山	
1034	16-31-31	方舟	4.0×2.7	13.81	K-29	8	8-20	方舟	1	30.4	88.0	71.2	96.5	—	—	—	新潟・富山	
1035	16-31-41	新豊	4.8×4.0	13.81	K-47	8	8-10	新豊	0	—	—	—	—	—	—	—	新潟・富山	
1036	16-32-20	方舟	4.2×3.9	13.81	K-47	8	8-20	方舟	0	—	—	—	—	—	—	—	新潟・富山	
1037	16-60-73	方舟	5.0×3.6	13.81	K-31	8	8-25	方舟	4	86.2	73.0	82.1	80.3	—	—	—	新潟・富山	
1038	16-41-74	新方舟	4.7×4.3	13.81	K-37	8	8-25	新方舟	4	86.6	65.8	80.7	72.6	—	—	—	新潟・富山	



通称番号	文種	年次	原種名		原種地	原種地の面積	原種地の総面積	原種地の総面積	生息地		生息地の面積		生息地の総面積	人・自然資源の状態	保護の状況	特徴	備考	
			年	月					年	月	年	月						
1080	94-41-12	新規	新規	3.4-2.0	7.42	3.1-3.4	25-22	25-22	新規	-	18.9	-	25-22.7	-	-	新規	新規	
1081	94-38-02	新規	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	新規	新規	
1082	94-38-02	新規	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	新規	新規	
1083	74-20-40	新規	-	-	7.1-3.2	27	4.2-2.0	31-21.4	31-19	新規	2-	-	31.2	61.1	-	-	新規	
1084	74-41-42	新規	新規	3.1-3.0	6.90	3.1-3.0	24-20	24-20	新規	0	-	-	-	-	-	新規	新規	
1085	74-51-61	新規	新規	3.1-3.5	5.99	3-2.5	22	22	新規	0	-	-	-	-	-	新規	新規	
1086	74-51-61	新規	新規	6.9-6.6	11.12	3-2.5	22	22	新規	1	60.1	90.0	61.1	-	-	新規	新規	
1088	74-57-58	新規	新規	6.1-2.0	6.47	3-2.0	21	21	新規	0	-	-	-	-	-	新規	新規	
1089	84-20-36	新規	-	-	5.2-4.3	17.36	3.2-2.7	24	21-13	新規	1	28.6	85.5	91.5	31.9	-	新規	新規
1090	84-20-39	新規	新規	4.6-4.4	17.0	3-2.7	24	21-12	新規	1	28.6	85.4	50.1	31.9	-	新規	新規	
1091	84-20-21	新規	-	-	5.1-5.0	8	4-2.7	24	21-12	新規	0	-	-	-	-	新規	新規	
1092	84-20-49	新規	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	新規	新規	
1093	84-72-82	新規	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	新規	新規	
1095	84-46-36	新規	新規	3.1-2.1	8.6	3-1.1	4	2-17	新規	0	-	-	-	-	-	新規	新規	
1096	93-46-57	新規	新規	7.5-2.4	63.40	3-21.3	3	2-19	新規	4	27.2	81.6	65.3	78.1	30	新規	新規	
1099	101-80-10	新規	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	新規	新規	
1100	108-22-24	新規	新規	5.1-5.5	10.90	3-20.8	3-19	3-19	新規	1	65.5	55.7	31.1	44.8	31.9	新規	新規	
1102	104-26-58	新規	新規	4.0-3.7	9.13	3-26.7	4	25-47	新規	0	-	-	-	-	-	新規	新規	
1103	108-34-41	新規	新規	5.1-5.5	10.20	3-20.8	4	16-20	新規	0	-	-	-	-	-	新規	新規	
1104	108-36-03	新規	新規	5.1-1.0	10.00	3-21.3	4	2-19	2-19	1	65.5	36.6	36.5	37.0	31.9	新規	新規	
1106	101-00-10	新規	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	新規	新規	
1107	105-31-26	新規	新規	4.8-2.9	13.26	3-27.3	3-28	3-28	新規	1	65.5	72.5	82.5	76.5	31.9	新規	新規	
1108	114-00-05	新規	新規	5.1-5.5	12.52	3-14.4	3-11	3-11	新規	4	66.1	43.5	45.1	51.3	31.9	新規	新規	
1109	106-20-71	新規	新規	4.1-3.6	11.55	3-20.9	4	22-47	新規	0	-	-	-	-	-	新規	新規	
1110	101-80-59	新規	新規	5.1-3.2	12.02	3-27.8	4	9-49	1-46	1	30.3	71.0	68.5	62.5	31.9	新規	新規	
1111	105-39-90	新規	新規	5.1-3.2	12.52	3-27.8	4	2-49	1-46	1	30.3	71.0	68.5	62.5	31.9	新規	新規	
1112	108-00-10	新規	新規	3.9-3.8	10.70	3-14.3	3-9	3-9	新規	0	-	-	-	-	-	新規	新規	
1113	108-20-21	新規	新規	5.8-5.5	10.00	3-14.4	3-11	3-11	新規	0	-	-	-	-	-	新規	新規	
1114	108-00-09	新規	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	新規	新規	
1115	111-00-01	新規	新規	5.1-2.2	22.45	3-21.8	3-26	3-26	新規	1	74.1	93.8	92.9	76.7	31.9	新規	新規	
1116	108-01-51	新規	新規	4.1-2.5	4.6	3-11.00	3-21.8	3-22	新規	0	-	-	-	-	-	新規	新規	
1117	111-25-25	新規	新規	5.1-5.2	12.93	3-17.1	3-18	3-18	新規	4	66.2	93.3	71.9	80.0	31.9	新規	新規	
1118	108-00-08	新規	新規	4.4-3.4	13.12	3-13.7	4	23-47	新規	0	-	-	-	-	-	新規	新規	
1119	108-00-02	新規	新規	3.9-2.6	11.22	3-27.4	3-28	3-28	新規	0	-	-	-	-	-	新規	新規	
1120	105-39-70	新規	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	新規	新規	
1122	108-00-70	新規	新規	4.5-4.2	11.20	3-17.4	3-24	3-24	新規	0	-	-	-	-	-	新規	新規	

地名番号	位置	平面图	地籍图	宗地面积(公顷)		宗地号		宗地名称		地类		地类面积(公顷)		地类号		地类名称		地类面积(公顷)		地类号		地类名称	
				宗地面积(公顷)	宗地号	宗地号	宗地面积(公顷)	宗地号	宗地名称	地类	地类号	地类面积(公顷)	地类号	地类号	地类	地类面积(公顷)	地类号	地类名称	地类	地类号	地类面积(公顷)	地类号	地类名称
1.122	106.00.8.40	新嘉坡(106.00)	4.7±4.5	16.29	13-17-4	3-16-10	新嘉坡(106.00)	4	26.0	B1.5	50	44.0	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	新嘉坡(106.00)
1.123	106.00.8.40	新嘉坡(106.00)	6.1±5.3	23.35	13-17-4	3-16-10	新嘉坡(106.00)	4	73.0	B1.5	50	35.0	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	新嘉坡(106.00)
1.125	106.00.8.40	新嘉坡(106.00)	2.5±2.4	6.12	13-17-4	3-16-10	新嘉坡(106.00)	0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	新嘉坡(106.00)	
1.126	106.00.8.40	新嘉坡(106.00)	—	—	(0.17)4	—	—	(0.17)4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	新嘉坡(106.00)
1.127	106.00.91	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	新嘉坡(106.00)
1.128	106.00.98	新嘉坡(106.00)	5.8±—	—	5-82-4	4-16	新嘉坡(106.00)	0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	新嘉坡(106.00)
1.129	106.00.99	新嘉坡(106.00)	5.3±4.6	25.62	5-82-4	4-16	新嘉坡(106.00)	0	65.5	B1.5	50	55.1	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	新嘉坡(106.00)
1.130	106.00.99	新嘉坡(106.00)	5.6±5.7	65.96	5-82-4	4-16	新嘉坡(106.00)	0	74.2	B1.5	50	65.4	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	新嘉坡(106.00)
1.131	106.00.99	新嘉坡(106.00)	5.3±5.2	27.16	5-82-4	4-16	新嘉坡(106.00)	0	87.3	B1.5	50	35.2	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	新嘉坡(106.00)
1.132	106.00.99	新嘉坡(106.00)	5.7±5.2	27.16	5-82-4	4-16	新嘉坡(106.00)	0	87.3	B1.5	50	35.2	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	新嘉坡(106.00)
1.133	106.00.99	新嘉坡(106.00)	5.7±5.7	25.99	5-82-4	4-16	新嘉坡(106.00)	0	81.3	B1.5	50	60.2	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	新嘉坡(106.00)
1.134	106.00.99	新嘉坡(106.00)	—	—	(0.17)4	—	—	(0.17)4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	新嘉坡(106.00)
1.135	106.00.99	新嘉坡(106.00)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	新嘉坡(106.00)
1.137	106.00.99	新嘉坡(106.00)	5.1±4.6	16.41	5-82-4	4-16	新嘉坡(106.00)	0	33.2	B1.5	50	20.2	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	新嘉坡(106.00)
1.138	106.00.99	新嘉坡(106.00)	2.9±2.8	13.86	5-82-4	4-16	新嘉坡(106.00)	0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	新嘉坡(106.00)
1.139	106.00.99	新嘉坡(106.00)	—	—	(0.17)4	—	—	(0.17)4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	新嘉坡(106.00)
1.140	106.00.99	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	新嘉坡(106.00)
1.141	106.00.99	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	新嘉坡(106.00)
1.142	106.00.99	新嘉坡(106.00)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	新嘉坡(106.00)
1.143	106.00.99	新嘉坡(106.00)	6.7±8.4	77.99	5-82-4	4-16	新嘉坡(106.00)	0	128.1	B1.5	50	115.4	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	新嘉坡(106.00)
1.144	106.00.11	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	新嘉坡(106.00)
1.145	106.00.29	新嘉坡(106.00)	8.1±7.2	51.22	5-82-5	4-20	新嘉坡(106.00)	0	45.0	B1.5	50	30.5	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	新嘉坡(106.00)
1.146	106.00.29	新嘉坡(106.00)	4.9±5.1	31.37	5-82-5	4-20	新嘉坡(106.00)	0	65.3	B1.5	50	67.2	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	新嘉坡(106.00)
1.147	106.00.99	新嘉坡(106.00)	—	—	5-82-4	4-16	新嘉坡(106.00)	0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	新嘉坡(106.00)
1.148	106.00.99	新嘉坡(106.00)	5.1±5.8	25.47	5-82-4	4-16	新嘉坡(106.00)	0	31.0	B1.5	50	73.7	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	新嘉坡(106.00)
1.149	106.00.99	新嘉坡(106.00)	4.8±4.3	31.07	5-82-4	4-16	新嘉坡(106.00)	0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	新嘉坡(106.00)
1.150	106.00.99	新嘉坡(106.00)	4.3±4.5	19.80	5-82-4	4-16	新嘉坡(106.00)	0	36.0	B1.5	50	62.0	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	新嘉坡(106.00)
1.151	106.00.99	新嘉坡(106.00)	6.7±6.2	52.77	5-82-4	4-16	新嘉坡(106.00)	0	54.1	B1.5	50	59.9	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	新嘉坡(106.00)
1.152	106.00.99	新嘉坡(106.00)	3.3±7.0	8.83	5-82-4	4-16	新嘉坡(106.00)	0	65.3	B1.5	50	67.2	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	新嘉坡(106.00)
1.153	106.00.99	新嘉坡(106.00)	5.6±5.5	23.46	5-82-4	4-16	新嘉坡(106.00)	0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	新嘉坡(106.00)
1.154	106.00.99	新嘉坡(106.00)	5.1±5.1	31.87	5-82-4	4-16	新嘉坡(106.00)	0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	新嘉坡(106.00)
1.155	106.00.99	新嘉坡(106.00)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	新嘉坡(106.00)
1.156	106.00.99	新嘉坡(106.00)	5.3±5.2	25.80	5-82-4	4-16	新嘉坡(106.00)	0	61.6	B1.5	50	65.4	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	新嘉坡(106.00)
1.157	106.00.99	新嘉坡(106.00)	7.1±7.8	52.39	5-82-4	4-16	新嘉坡(106.00)	0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	新嘉坡(106.00)
1.158	106.00.99	新嘉坡(106.00)	7.1±7.8	52.39	5-82-4	4-16	新嘉坡(106.00)	0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	新嘉坡(106.00)
1.159	106.00.99	新嘉坡(106.00)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	新嘉坡(106.00)
1.160	106.00.99	新嘉坡(106.00)	9.3±8.0	58.62	5-82-4	4-16	新嘉坡(106.00)	0	78.6	B1.5	50	133.7	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	新嘉坡(106.00)
1.161	106.00.99	新嘉坡(106.00)	5.6±5.2	28.43	5-82-4	4-16	新嘉坡(106.00)	0	80.0	B1.5	50	85.4	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	新嘉坡(106.00)
1.162	106.00.99	新嘉坡(106.00)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	新嘉坡(106.00)
1.163	106.00.99	新嘉坡(106.00)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	新嘉坡(106.00)
1.164	106.00.99	新嘉坡(106.00)	5.0±4.9	62.00	5-82-4	4-16	新嘉坡(106.00)	0	84.5	B1.5	50	31.8	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	新嘉坡(106.00)
1.165	106.00.99	新嘉坡(106.00)	4.4±4.6	12.99	5-82-4	4-16	新嘉坡(106.00)	0	67.4	B1.5	50	30.1	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	新嘉坡(106.00)
1.166	106.00.99	新嘉坡(106.00)	4.7±4.1	11.12	5-82-4	4-16	新嘉坡(106.00)	0	70.3	B1.5	50	34.4	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	新嘉坡(106.00)

測量番号	位置	平面図 上部標高	断面図 (m)	主標高(m) 標高(m)	標高(m)		H点(高さ)(m)		P1 P2 P3 P4 P5 P7		人跡踏跡	防護柵(樹木)の範囲 (m)	防護柵(樹木)の範囲 (m)	斜面	斜面		
					左	右	P1	P2	P3	P4	P5	P7					
L107	71-90.31-20 左引地	71-90.31-20 左引地	6.6, 5.3, 4	25.44	5-29-4	8-53	1-2-6-Q点-2-Q点	4	16.7	16.1	16.1	16.0	-	-	63-34-42 小斜面	地上	
L108	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	水平面	
L109	43-20-49 (P1/P2)	43-20-49 (P1/P2)	4.1, 3-~	-	5-41-4	0-38	-	2-	25.5	13.5	-	-	28-21-9 小斜面	2-~7-左引地	地表		
L110	43-20-42 右引	43-20-42 右引	6.6, 6.5, 5	13.720	5-47-8	8-40	Q点-Q点	8	16.0	16.1	16.0	16.1	-	-	63-34-42 小斜面	2-~7-左引地	地表
L111	38-20-45	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	63-34-42 小斜面	2-~7-左引地	地表
L112	38-11-21 左引	38-11-21 左引	6.6, 6.6, 6-~	14.5, 0.0	5-35	0-32	Q点-Q点-△点	4	17.0	16.7	16.7	16.8	-	-	63-36-45 小斜面	2-~7-左引地	地表
L113	71-09-01 斜面丸山左引	71-09-01 斜面丸山左引	4.6, 4.0	14.14	5-~6	3-40	Q点-Q点-△点	4	16.3	16.8	16.0	16.0	-	-	111-100-61 小斜面	地表	地表
L114	71-09-26 左引	71-09-26 左引	7.6, 7.4	17.45	5-37-3	0-40	1-2-Q点-Q点-△点	4	16.3	16.8	16.0	16.0	-	-	111-100-61 小斜面	地表	地表
L115	18-41-31	-	-	-	-	-	10-~9	0	-	-	-	-	-	-	63-34-42 小斜面	2-~7-左引地	地表
L116	31-79	-	-	-	-	-	-	0	-	-	-	-	-	-	63-34-42 小斜面	2-~7-左引地	地表
L117	31-79-14 (Q点-Q点)	31-79-14 (Q点-Q点)	6.6, 6.5, 5	13.60	5-27-8	0-35	Q点-Q点-△点	4	12.7	14.1	14.1	16.0	-	-	63-34-42 小斜面	2-~7-左引地	地表
L118	61-09-14 (Q点-Q点)	61-09-14 (Q点-Q点)	6.6, 6.5, 5	13.60	5-27-8	0-35	Q点-Q点-△点	4	13.5	16.2	17.0	16.8	-	-	63-34-42 小斜面	2-~7-左引地	地表
L119	71-08-01 斜面丸山左引	71-08-01 斜面丸山左引	4.6, 4.0	14.14	5-~6	3-40	Q点-Q点-△点	4	16.3	16.8	16.0	16.0	-	-	63-34-42 小斜面	2-~7-左引地	地表
L120	71-08-20 左引	71-08-20 左引	7.6, 7.4	17.45	5-37-3	0-40	1-2-Q点-Q点-△点	4	16.3	16.8	16.0	16.0	-	-	63-34-42 小斜面	2-~7-左引地	地表
L121	18-20-20 左引	18-20-20 左引	7.6, 7.4	17.45	5-37-3	0-40	1-2-Q点-Q点-△点	4	16.3	16.8	16.0	16.0	-	-	63-34-42 小斜面	2-~7-左引地	地表
L122	18-20-20 左引	18-20-20 左引	7.6, 7.4	17.45	5-37-3	0-40	1-2-Q点-Q点-△点	4	16.3	16.8	16.0	16.0	-	-	63-34-42 小斜面	2-~7-左引地	地表
L123	18-20-20 左引	18-20-20 左引	7.6, 7.4	17.45	5-37-3	0-40	1-2-Q点-Q点-△点	4	16.3	16.8	16.0	16.0	-	-	63-34-42 小斜面	2-~7-左引地	地表
L124	18-20-20 左引	18-20-20 左引	7.6, 7.4	17.45	5-37-3	0-40	1-2-Q点-Q点-△点	4	16.3	16.8	16.0	16.0	-	-	63-34-42 小斜面	2-~7-左引地	地表
L125	18-20-20 左引	18-20-20 左引	7.6, 7.4	17.45	5-37-3	0-40	1-2-Q点-Q点-△点	4	16.3	16.8	16.0	16.0	-	-	63-34-42 小斜面	2-~7-左引地	地表
L126	18-20-20 左引	18-20-20 左引	7.6, 7.4	17.45	5-37-3	0-40	1-2-Q点-Q点-△点	4	16.3	16.8	16.0	16.0	-	-	63-34-42 小斜面	2-~7-左引地	地表
L127	18-20-20 (P1/P2)	18-20-20 (P1/P2)	-	-	-	-	-	0	-	-	-	-	-	-	63-34-42 小斜面	2-~7-左引地	地表
L128	18-20-20 左引	18-20-20 左引	6.6, 5.7	26.89	5-37-3	11-29	1-2-Q点-Q点-△点	4	16.6	16.5	16.0	16.1	17.0	12.0-12.5 水平面	2-~7-左引地	地表	
L129	18-20-20 左引	18-20-20 左引	6.6, 5.7	26.89	5-37-3	11-29	1-2-Q点-Q点-△点	4	16.6	16.5	16.0	16.1	17.0	12.0-12.5 水平面	2-~7-左引地	地表	









編號	◎ 著	平均(H)	範圍(H)	地圖(1)	地圖(2)	地圖(3)	P1~P2~P3~P4~P5~P7	人體測量	野戰之危險		備註
								P6~P8~P9	(cm)	(cm)	
1.018	71~95~8.5~07	—	4.0~5~—	—	—	—	0~42	—	—	—	比→6.0% 合計無
1.019	63.1~112	[71]	4.3~5~6	16.77	—	—	0~30	0~3~4	0~3~4	—	比→1.0% 比→5.0% 比→1.0%
1.022	63~80~94	[71]	2.1~2.9	6.80	1~2~5	10~25	尾部數字	0	—	—	比→5.0% 比→1.0%
1.023	61~25~22	[71]	—	—	—	—	—	—	—	—	比→5.0% 比→1.0%
1.026	71~8~65	—	—	—	—	—	0~30	—	—	—	—
1.029	63~32~42	[81]	2.7~4~5.5	[28.46]	3~7~4	0~3~5	P4~5~6~7~8	4	32.9	35.9	Q.4 合計無
1.031	61~85~94	[71]	—	—	—	—	0~32	—	—	—	比→2.0%
1.033	51~92~50	[71]	4.1~5~8	[11.20]	3~20~9	0~20	P4~5~6~7~8	0	—	—	比→5.0% 比→1.0%
1.036	51~95~101~94	[71]	4.8~4~12	15.71	3~20~4	0~35~5	P4~5~6~7~8	0	—	—	比→5.0% 比→1.0%
1.037	50~9~9	[71]	—	—	—	—	0~9	—	—	—	—
1.040	63~42	—	—	—	—	—	—	—	—	—	比→5.0% 比→1.0%

第10表 土坑・土坑墓等一覧

遺構番号	位 置	遺構種類	平面形	規模(cm) 長軸×短軸	深 (cm)	時 期	備 考
L050	9K-23・24	埋葬施設	長椭円形	496×170	44	古墳前期	L050 古墳第1理葬施設
L087	8K-40・50	土坑	長椭円形	134×31	26	古墳前期	土器1点
L094	11L-14・24	土坑	不整円形	373×312	84	古墳後期	
L128	11K-07・08	土坑	椭円形	158×82	36	弥生後期	土器1点
L136	10K-96, 11K-06	土坑	円形	163×145	30	古墳中期	ピット長径 29 cm×深 96 cm, 燥土, 土器1点
L139	10J-19	土坑	円形	135×126	36	不明	
L149	8K-90・91	土坑	不整形	396×152	49	不明	
L150B	11K-33・43	土坑	長椭円形	236×84	49	不明	M808 と同一
L150C	10K-31・32	埋葬施設	椭円形	315×160	23	古墳後期	L150 古墳理葬施設, M810 と同一
L180	10I-59	土坑	円形	126×106	93	不明	
L210	9K-42	埋葬施設	隅丸長方形	195×115	55	古墳前期	L050 古墳第2理葬施設, 土器4点
L211	10K-20	土坑	円形	120×106+	33	弥生後期	上面に炭化物
L212	10K-21	土坑	円形	143×134	12	弥生後期	上面に焼土
L213	11K-06・07	土坑	不整椭円形	150×76	21	古墳後期	土器1点
L225	10L-72・73	埋葬施設	円形	330×305	95	古墳後期	L100-L240 古墳理葬施設
L236	10J-98, 11J-08	土坑	隅丸長方形	175×115	26	弥生後期	
L245A	10J-96・97	土坑墓	隅丸長方形	253×185	89	古墳後期	土製勾玉, 白玉
L245B	10J-97, 11J-07	土坑	隅丸長方形	130×86	92	不明	
L248	10L-92	土坑墓	不整形	177×110	103	不明	
L249	10L-83	土坑	長方形	144×72	54	不明	
L292	9J-19	土坑	円形	164×140+	31	不明	
L310	10K-94	土坑	円形	203×186+	113	古墳前期	粘土
L317	11K-08	土坑	椭円形	166×73	26	古墳前期	燒土
L325	8J-26	土坑	椭円形	140×70	41	不明	
L373	10J-32・42	土坑墓	隅丸長方形	228×95	28	平安	土器1点, 鉄, 鐵鍊
L375	10J-87・88	土坑	長方形	290×160	49	不明	
L376	10J-43	土坑	円形	60×58	37	古墳前期	管状土錐
L377	10J-43	土坑	円形	88×69	48	不明	土玉2点
L380	10J-44・45	土坑	椭円形	150×84	41	不明	
L381	10J-45・55	土坑	長椭円形	276×84	14	不明	
L385	10J-34・35	土坑	隅丸長方形	130×96	58	不明	
L388	7J-02・12	土坑	隅丸長方形	254×98	32	弥生後期	
L396	10J-08・09	土坑	隅丸長方形	304×163	21	不明	鐵製刀子
L425	7J-10・20	土坑	椭円形	242×120	19	不明	
L426	7J-11	土坑	胸張隅丸長方形	266×160	26	不明	
L427	7J-02・12	土坑	不整形	380×-	10+	不明	
L430	10L-30・31	土坑	隅丸長方形	170×114	113	不明	鐵鍊
L431	9J-21・22	土坑	円形	120×114	39	不明	
L434	9J-44・54	土坑	長方形	268×164	58	平安	土器2点
L439	10J-60・61	土坑	(長方形)	310×178	24	不明	
L441	7J-61・62	埋葬施設	不整形	265×213	31	弥生後期	L408-L424A-B 方形周溝墓埋葬施設, 鉄鍊

第II表 陥穴一覧

遺構番号	位 置	平面形	規模(cm)		深(cm)	ピット(長径×深) (cm)		時 期
			長軸×短軸			1	2	
L113	11K-17・27	楕丸長方形	173×51	73				讃文
L220	10K-45・55	椭円形	208×124	177				讃文
L258	8J-93・94	椭円形	96×75	196				讃文
L288	8J-41	長椭円形	290+×34	75				讃文
L369	7J-73・83	椭円形	169×158	212				讃文
L406	9J-07	椭円形	199×94	170	96×10	76×3		讃文早期
L432	8J-83・93	椭円形	156×100	152				讃文

# 写 真 図 版

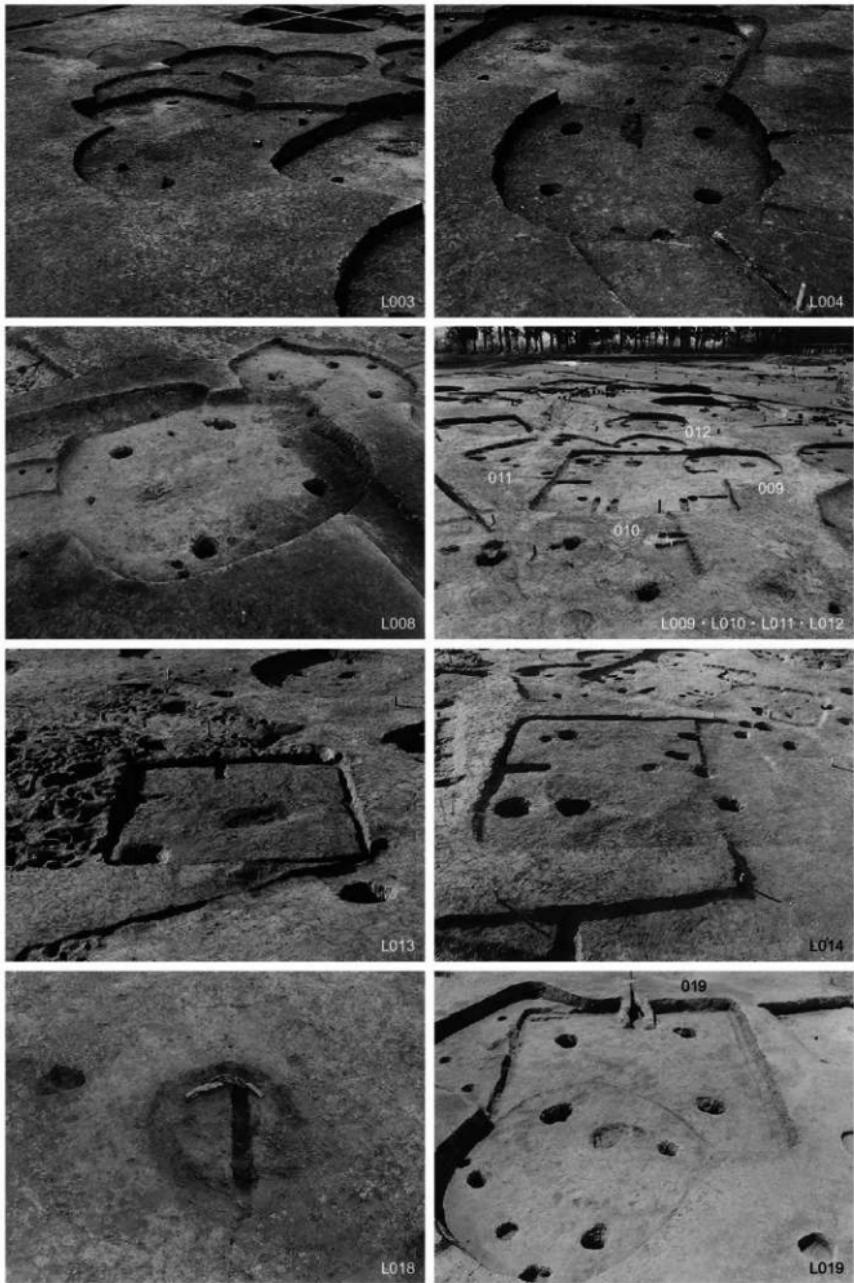




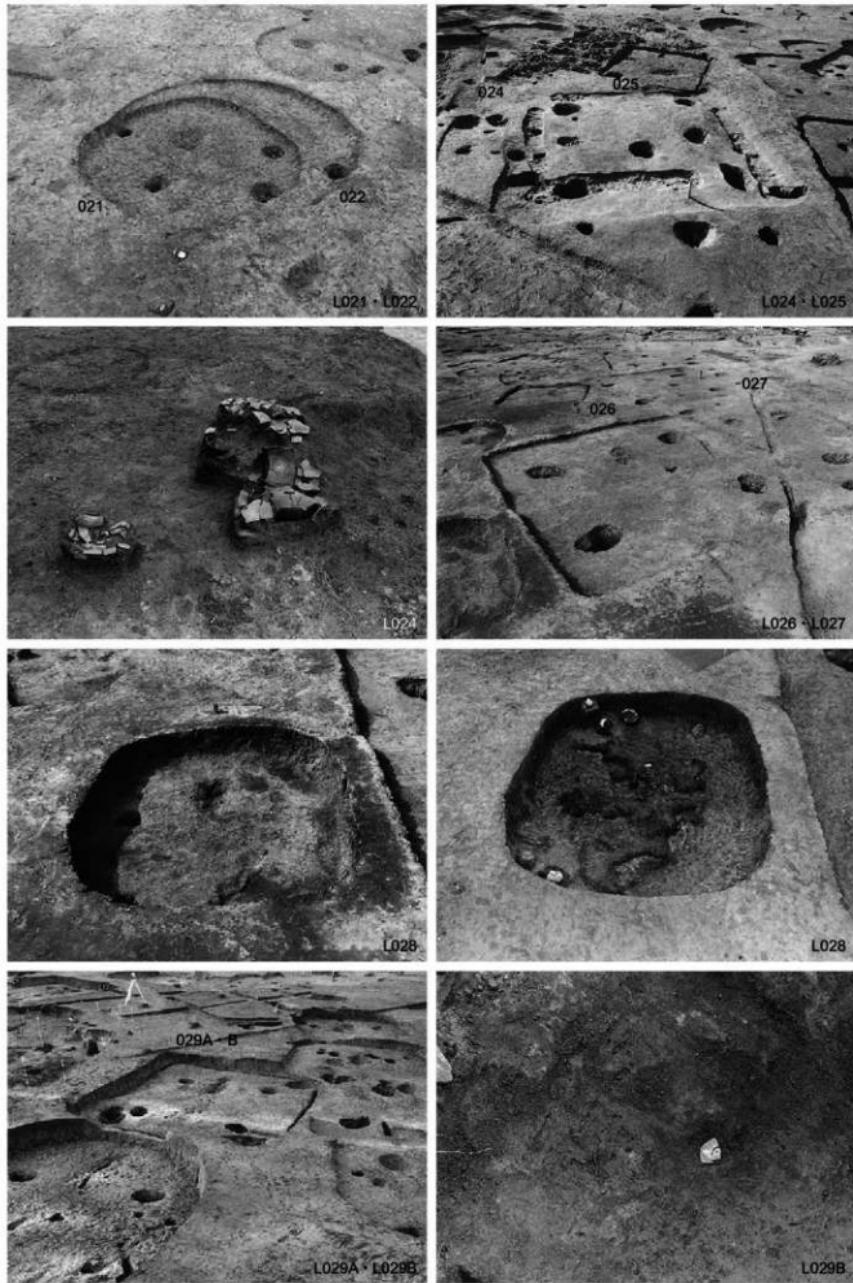
某地踏跡充填状況（空中写真合成）

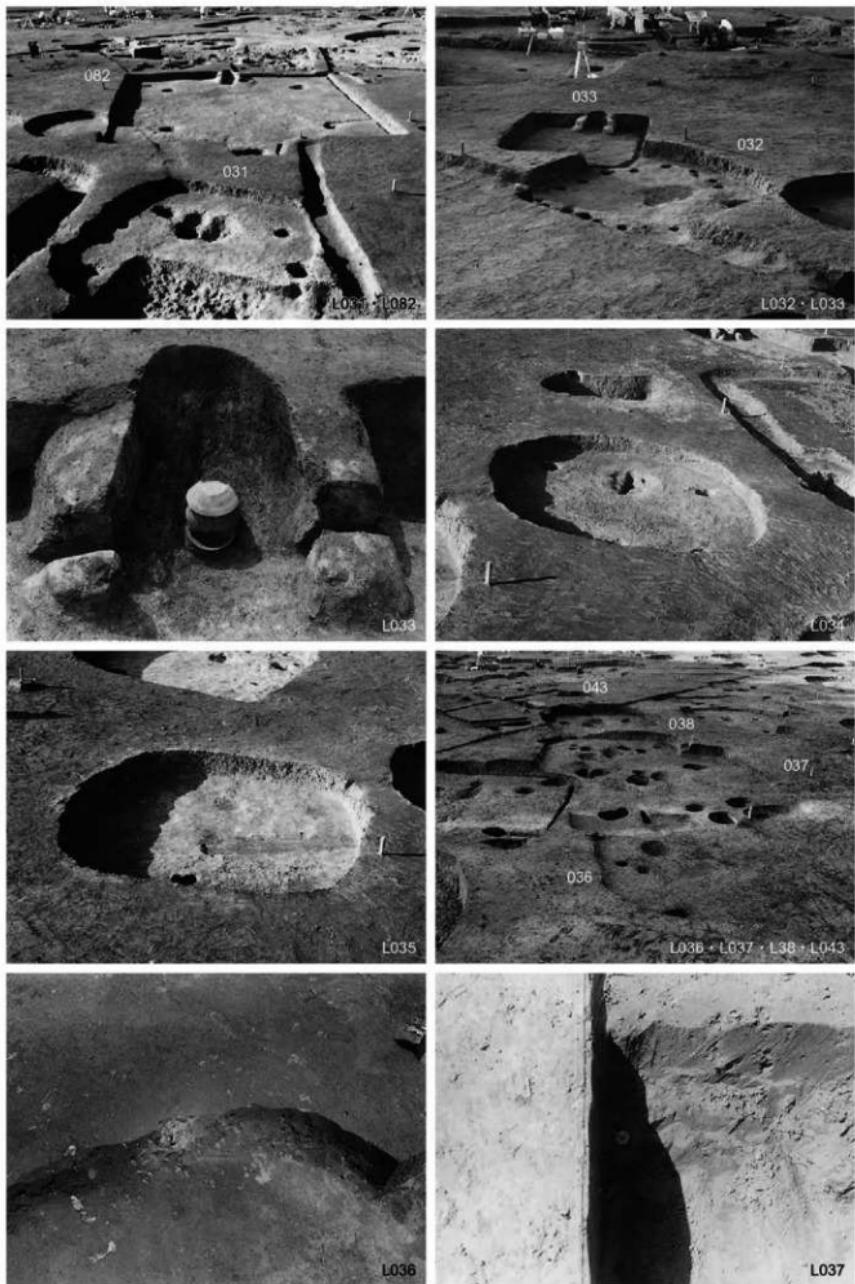


草刘遗址L区全景

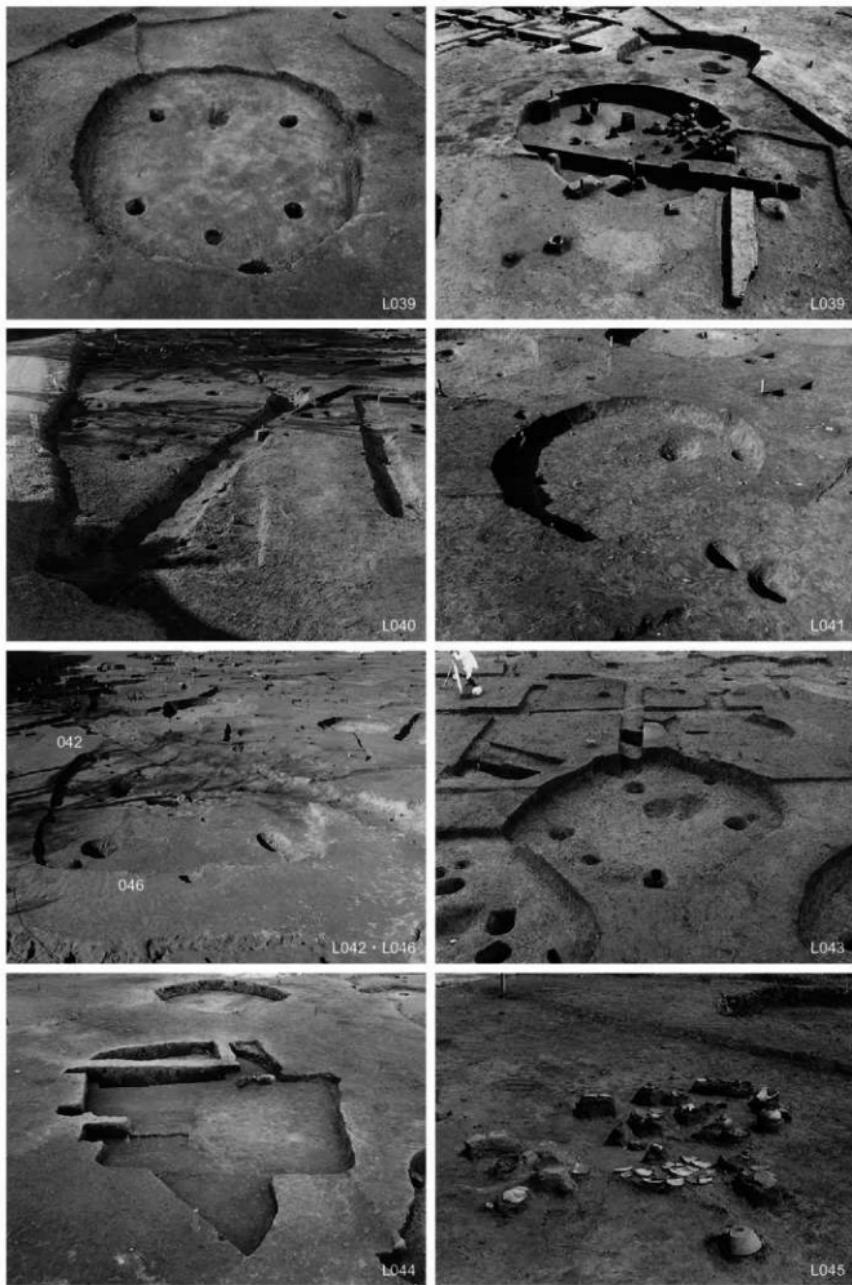


図版4



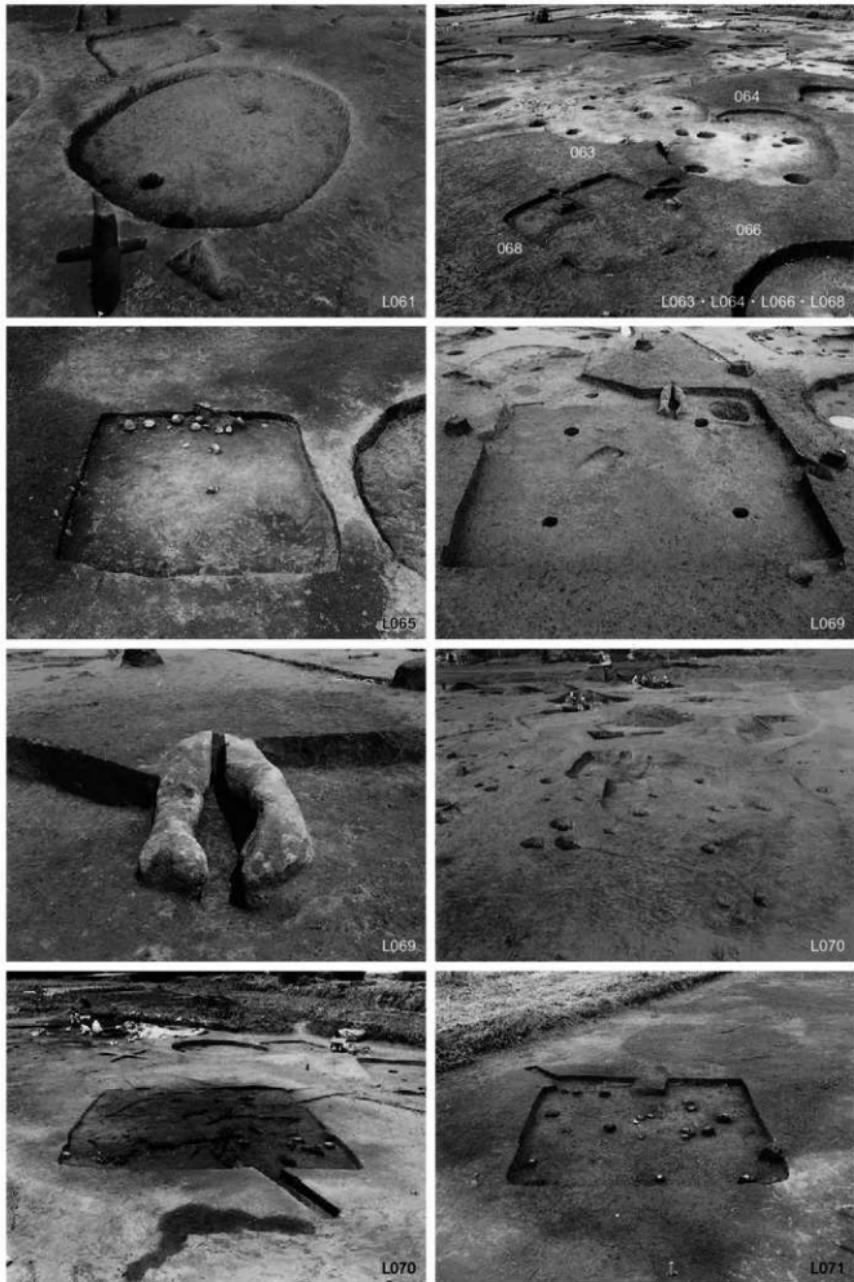


図版6





図版8





L072



L073



L074



L075



L078



L078



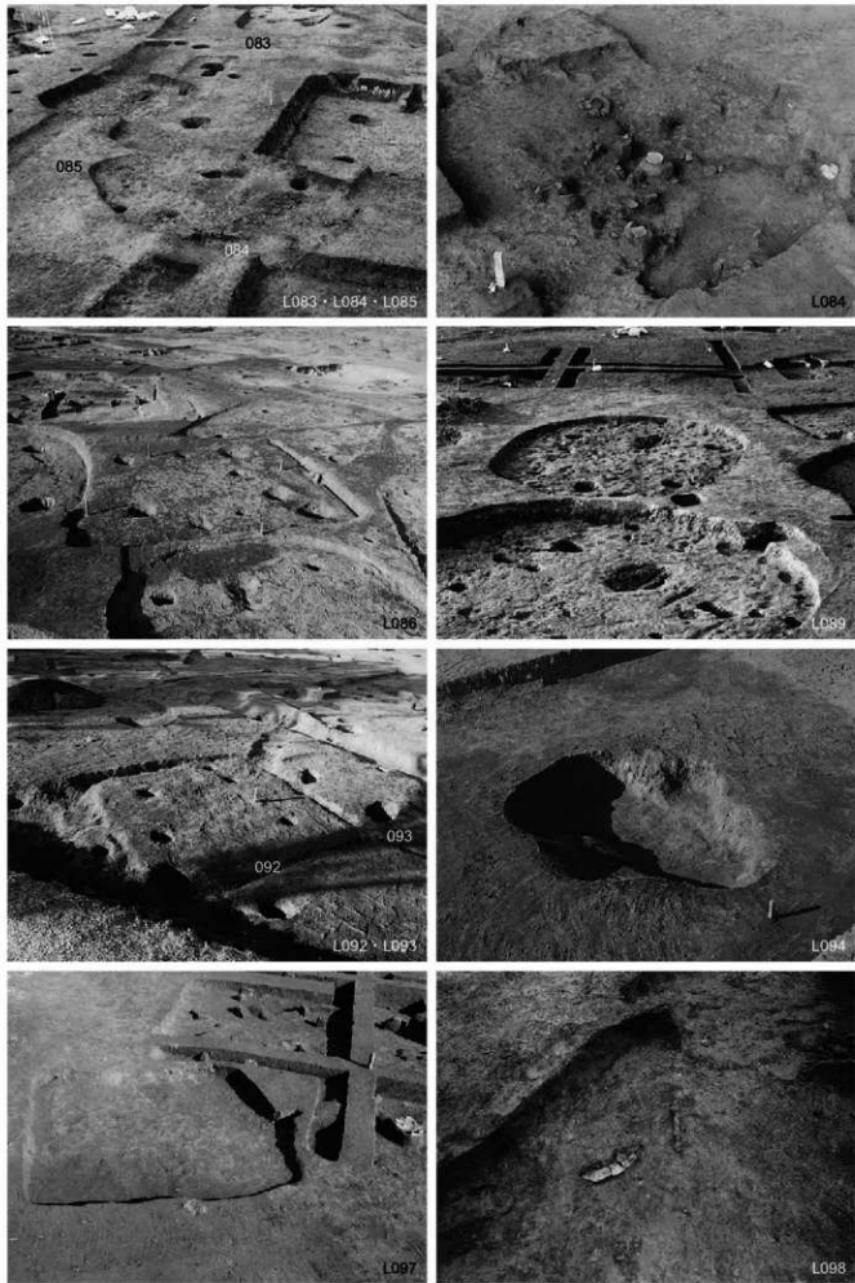
L079

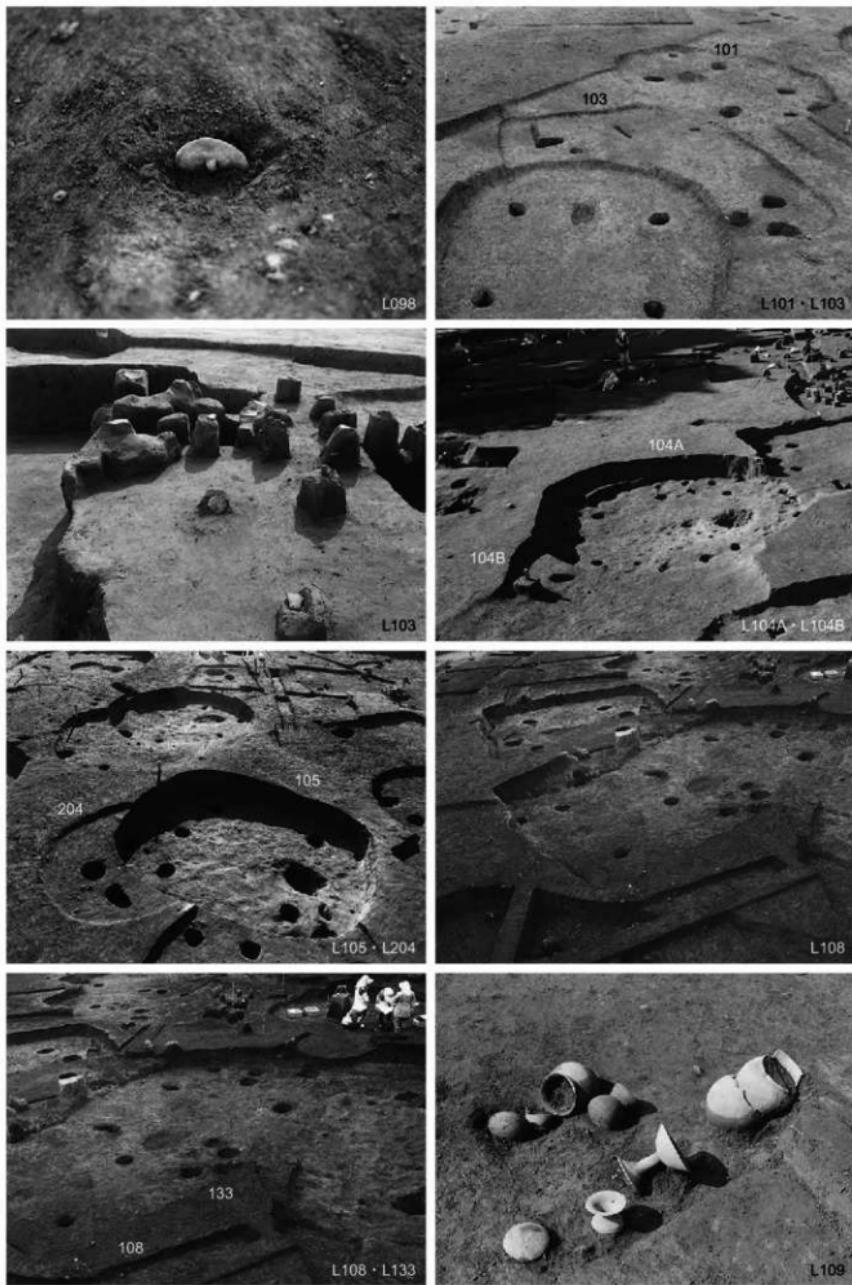


080

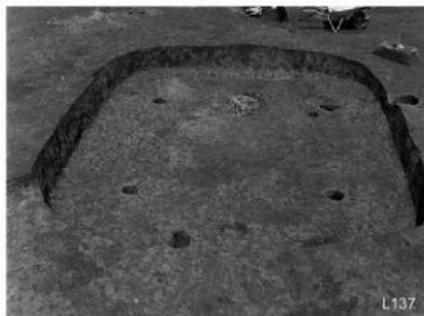
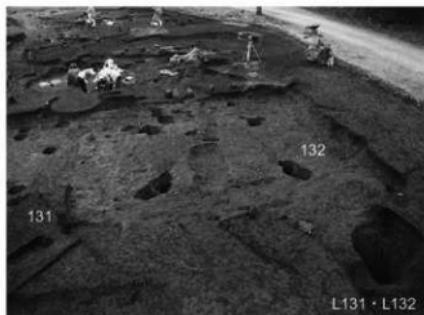
L080

図版10

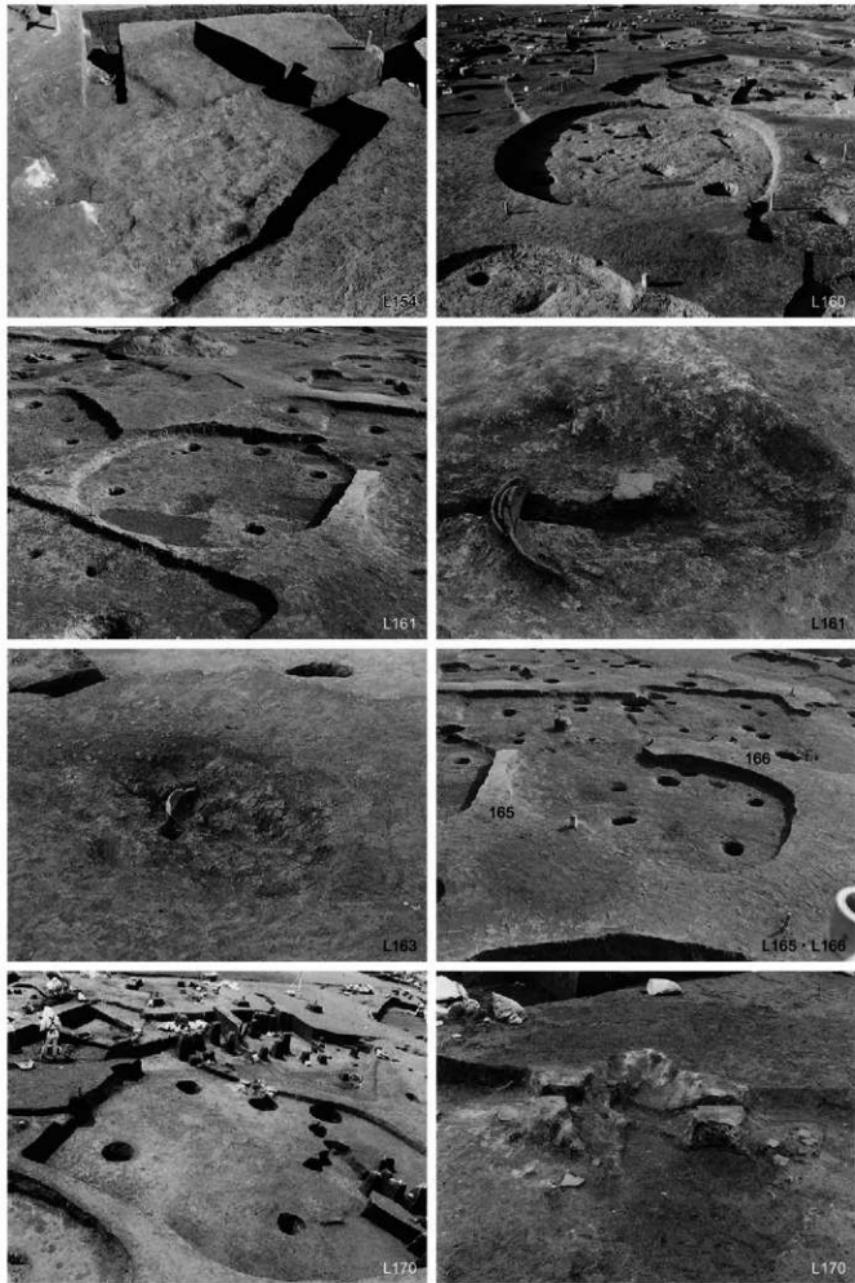


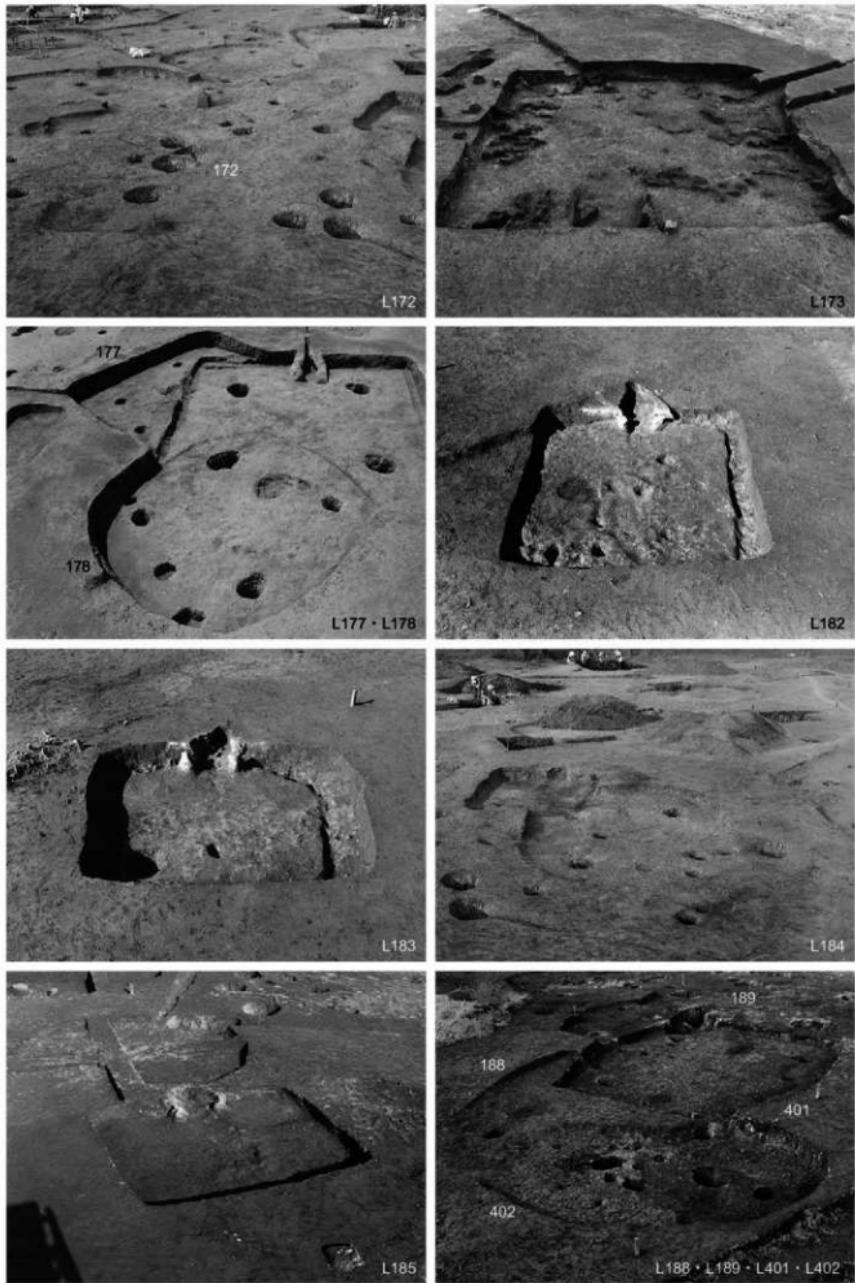




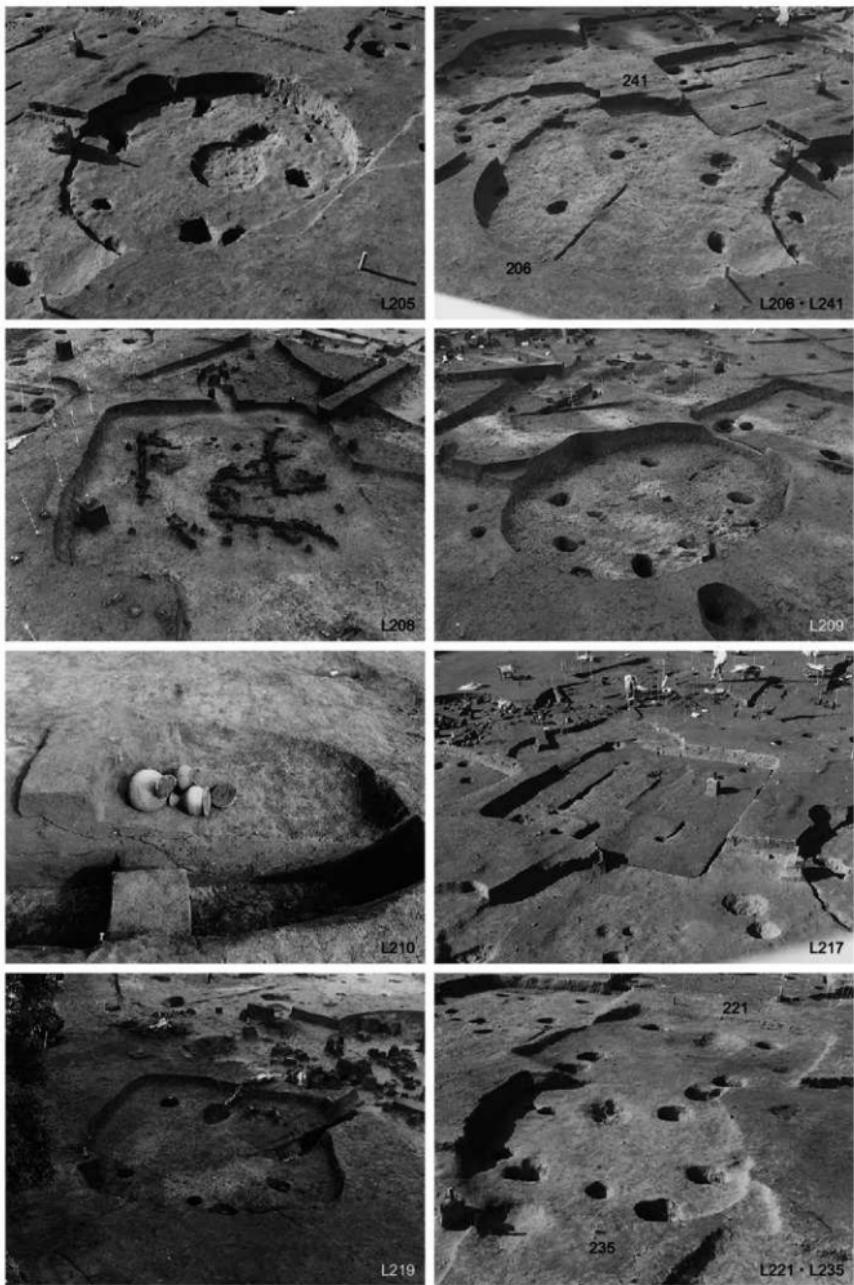


図版14

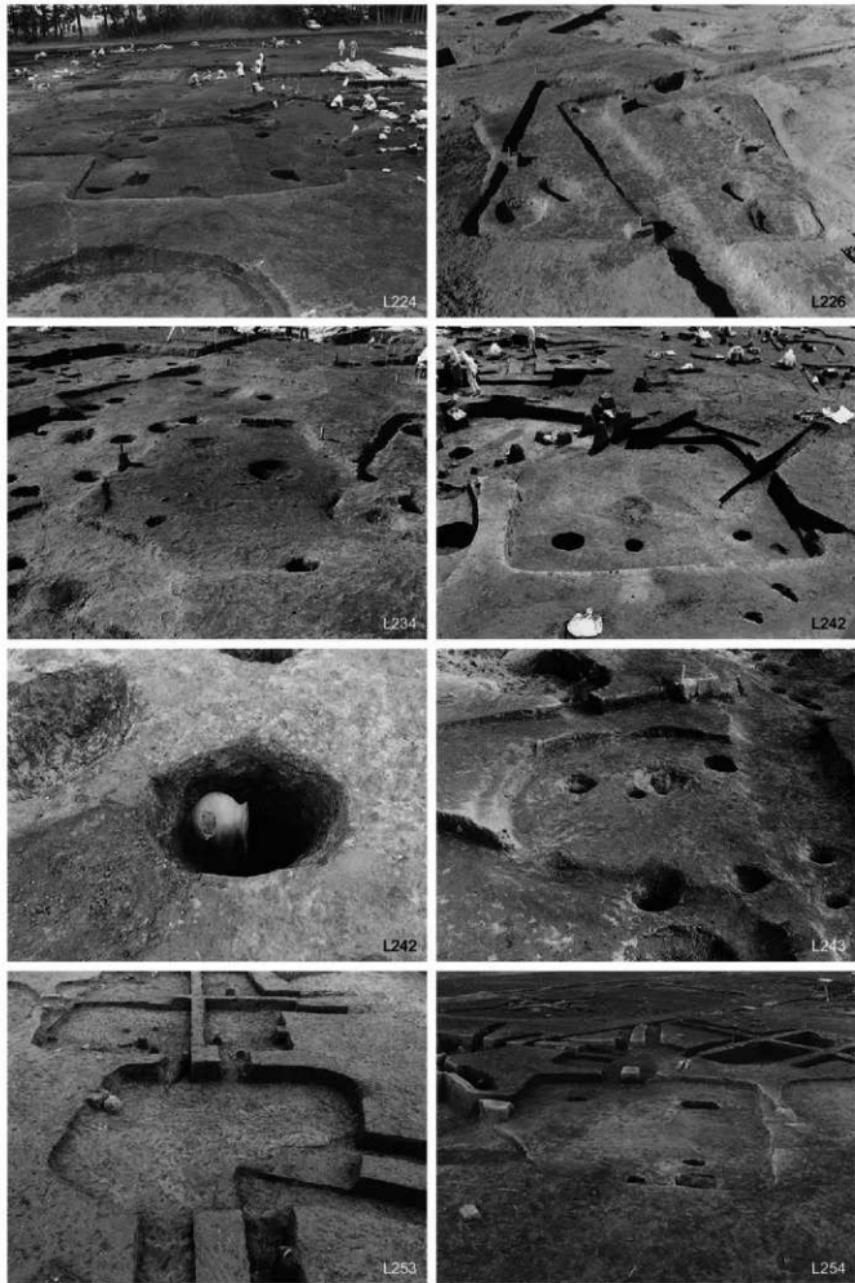


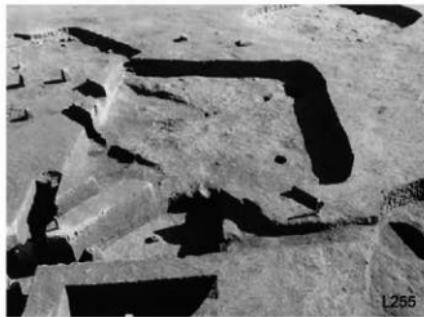


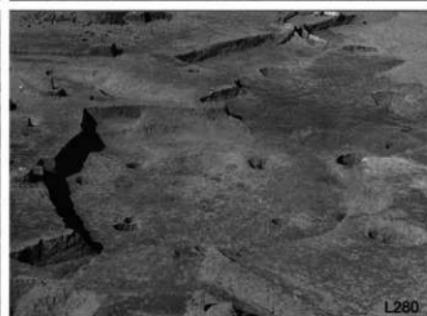
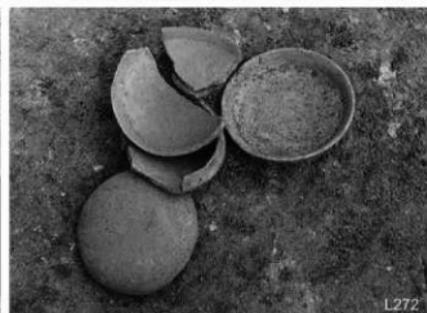
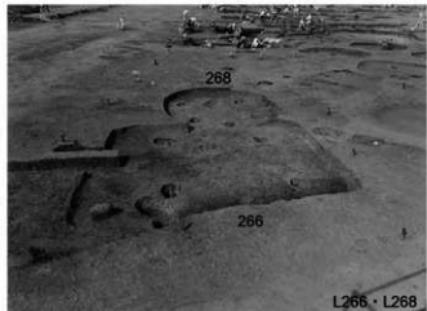


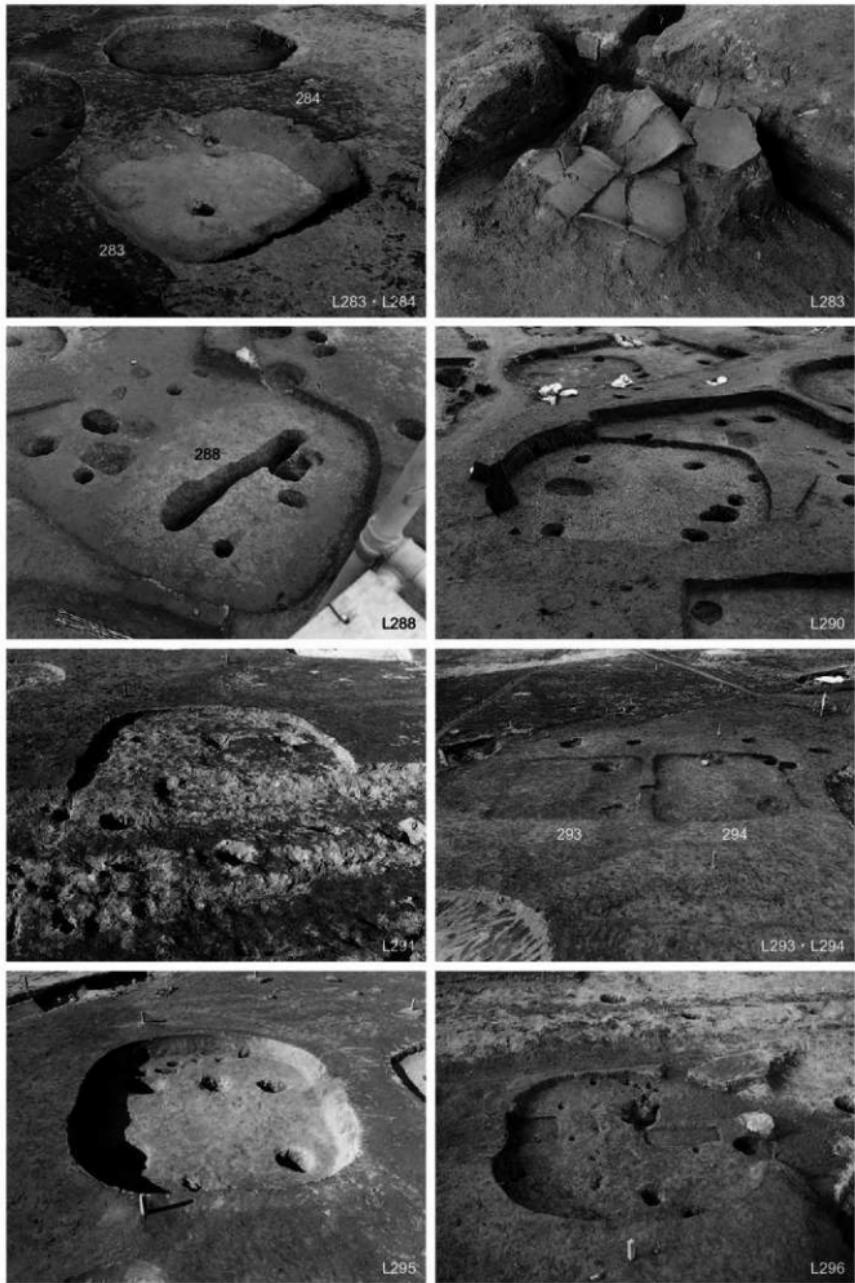


図版18

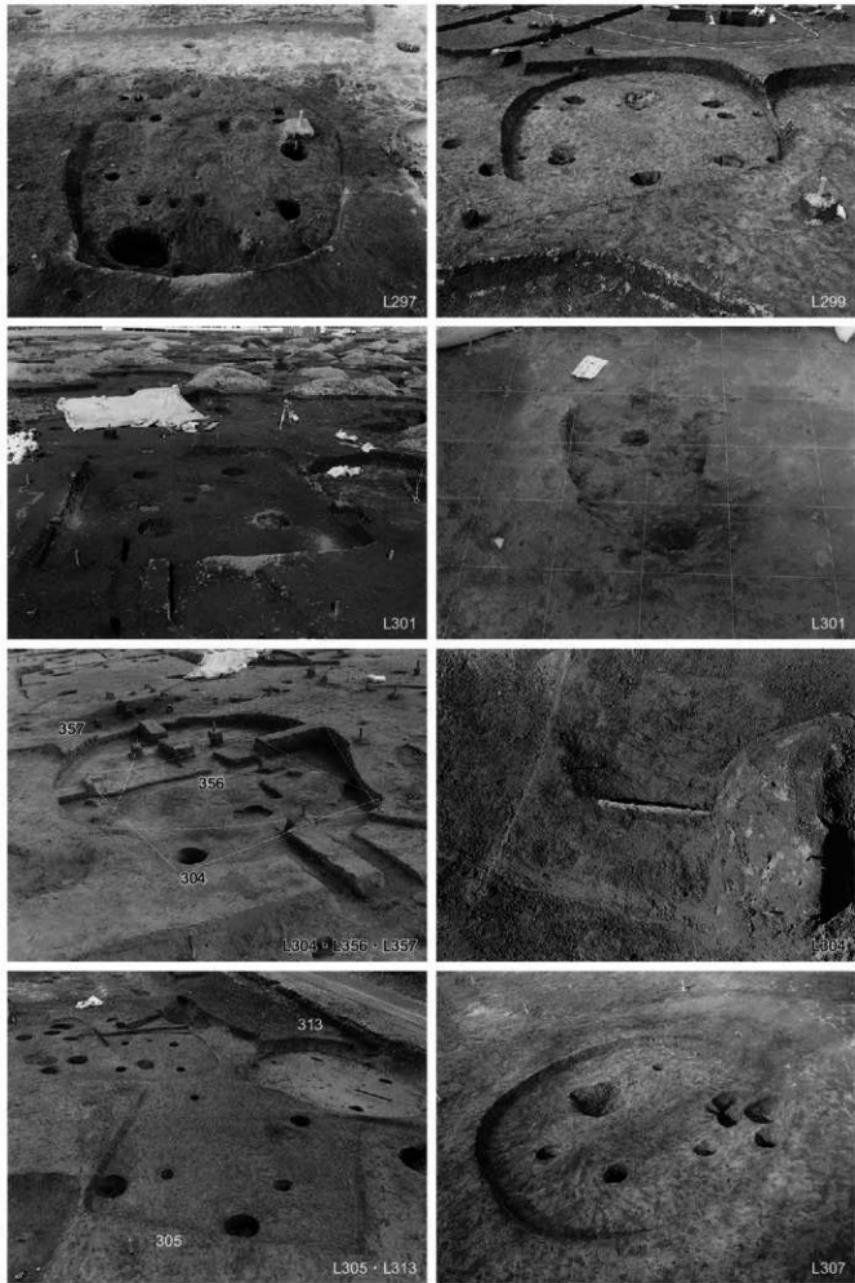


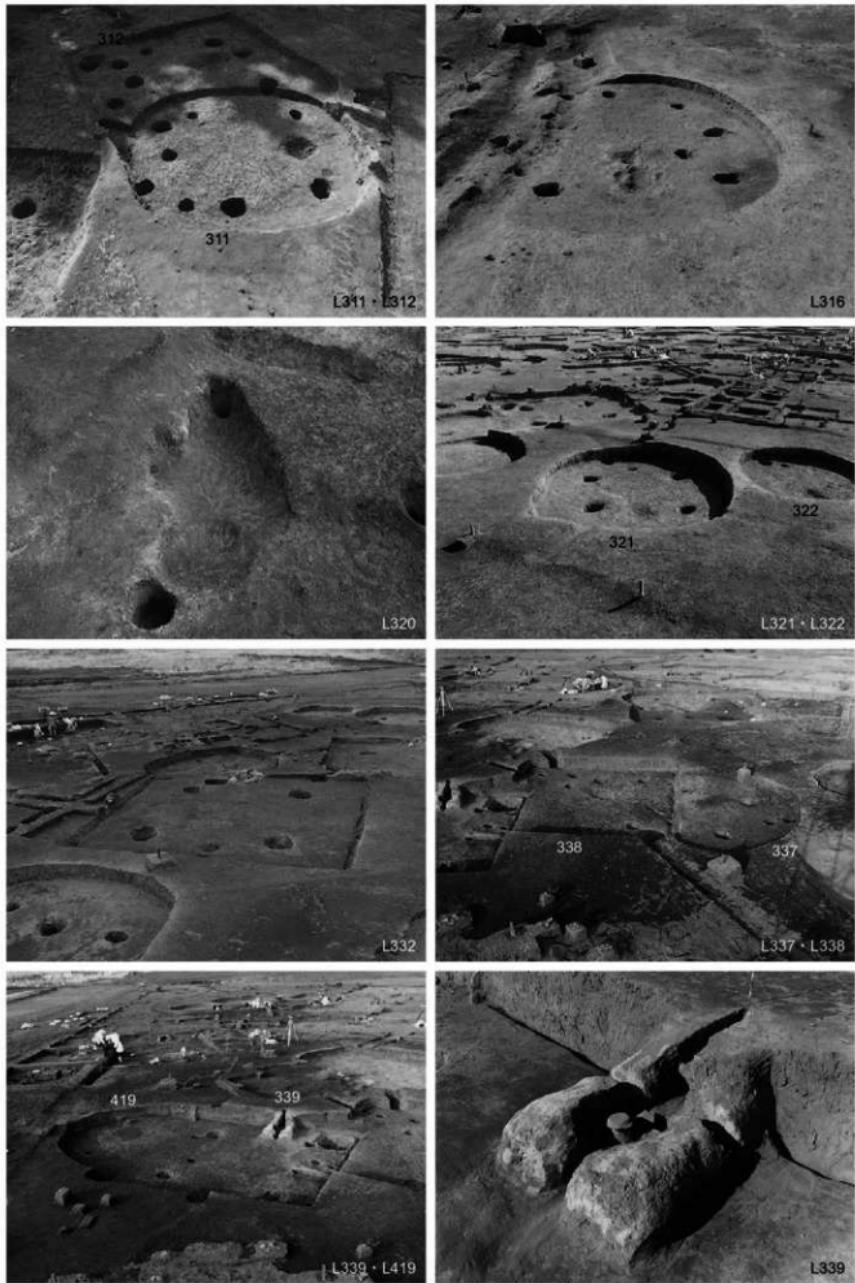


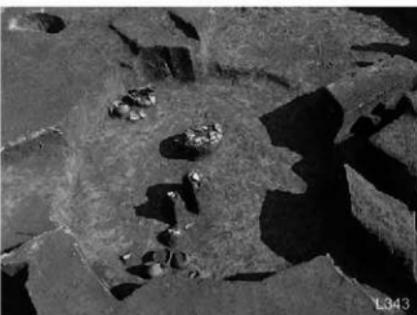


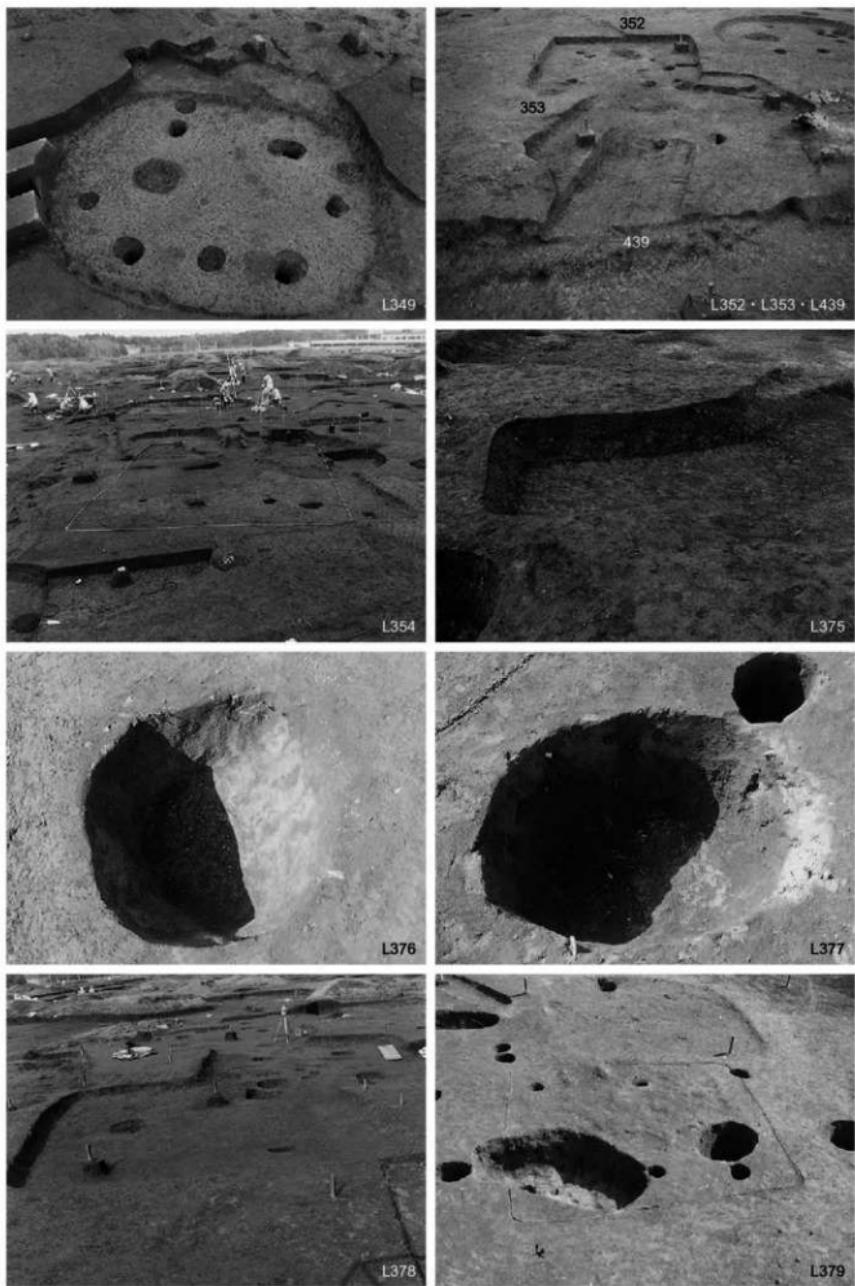


図版22

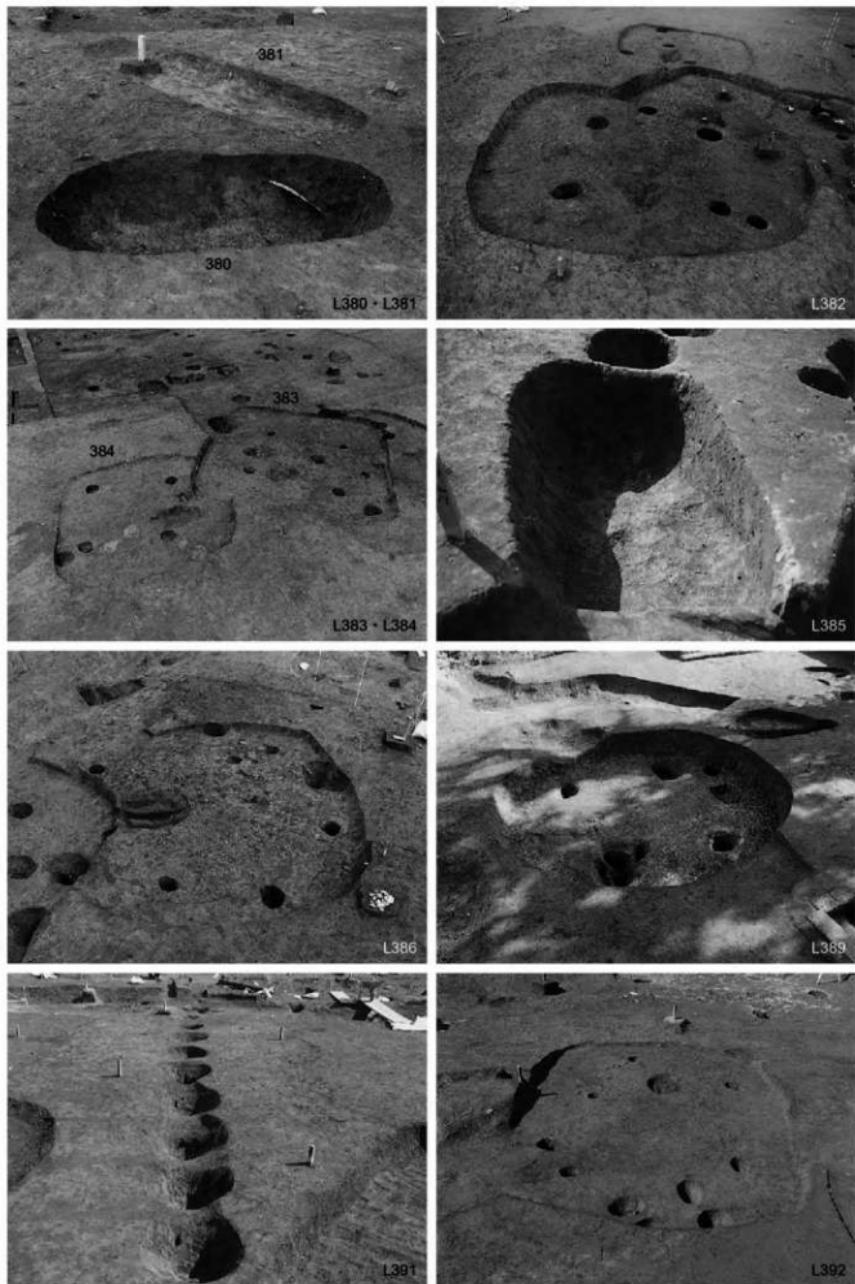


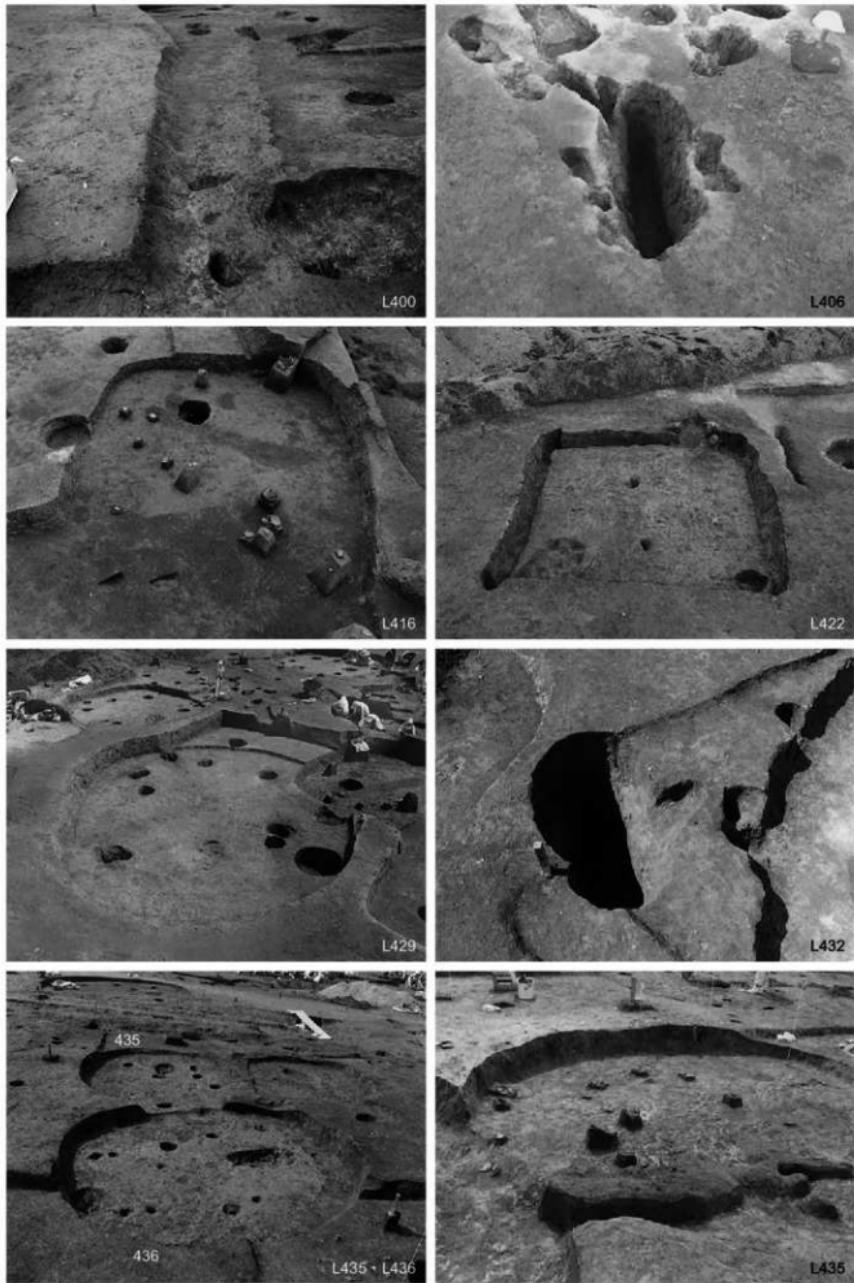






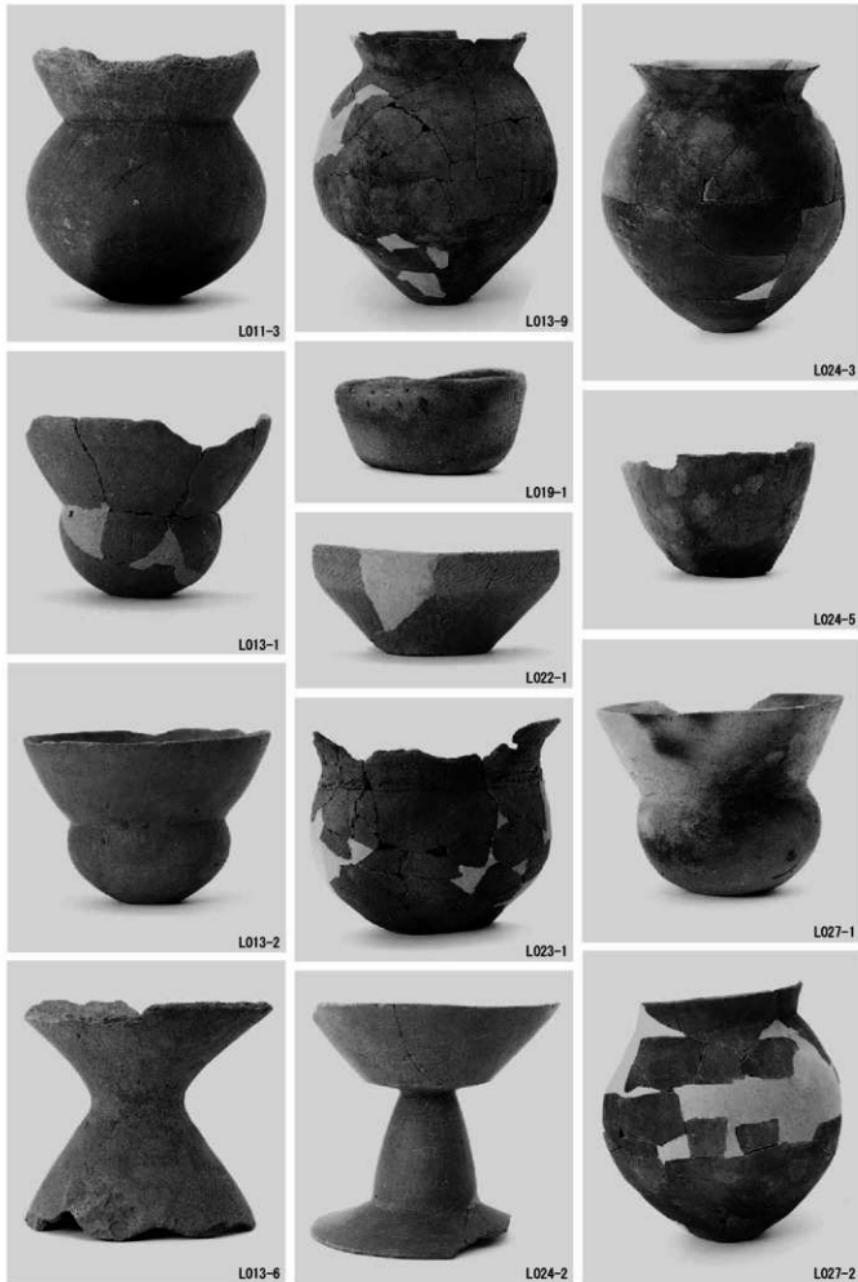
図版26



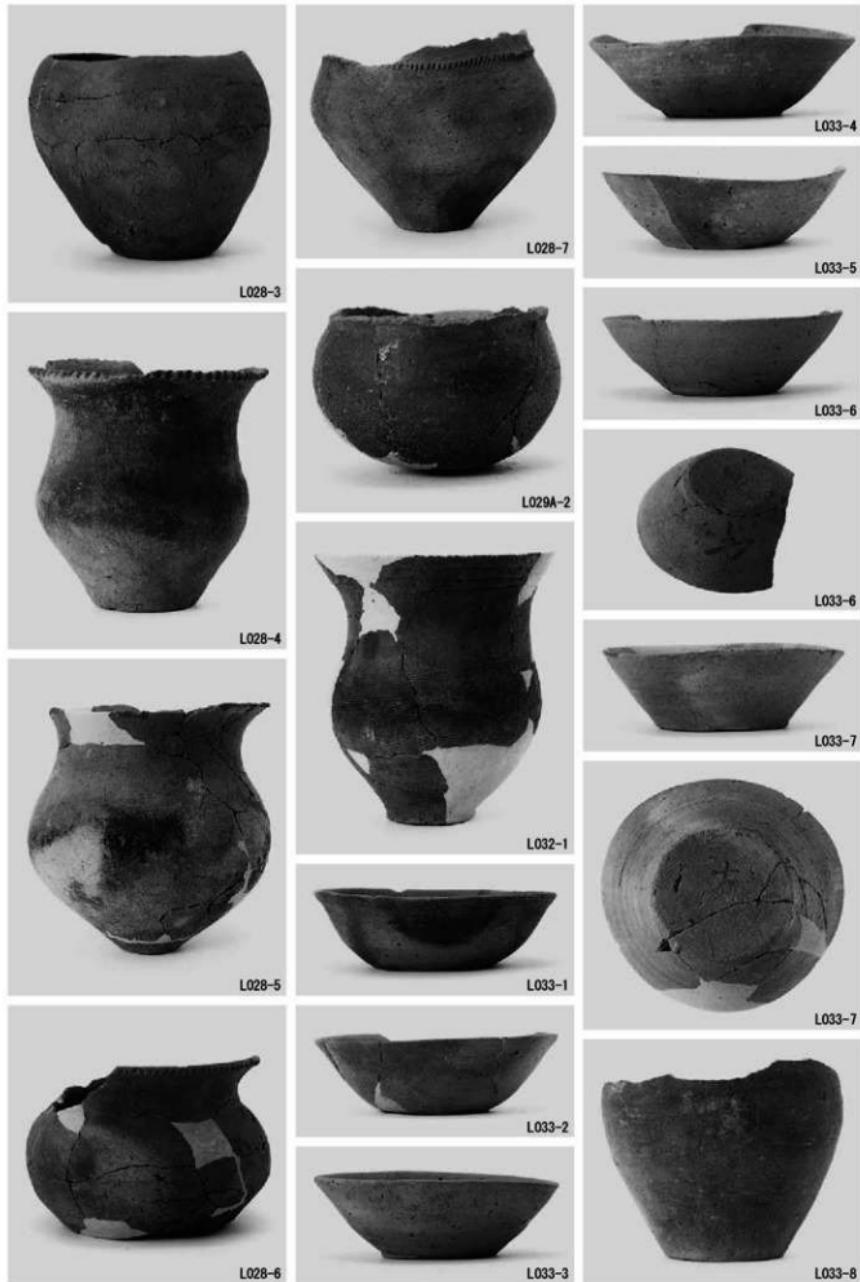




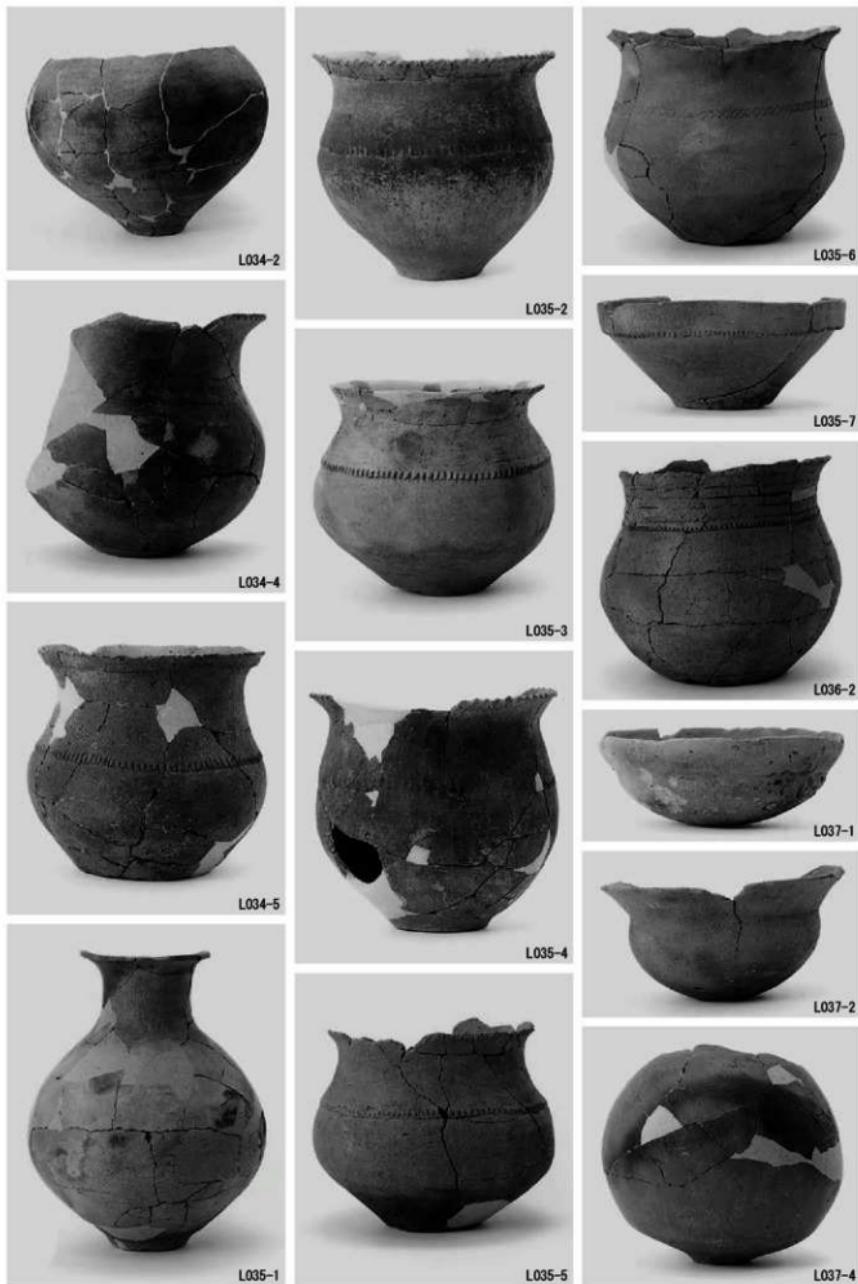
出土土器



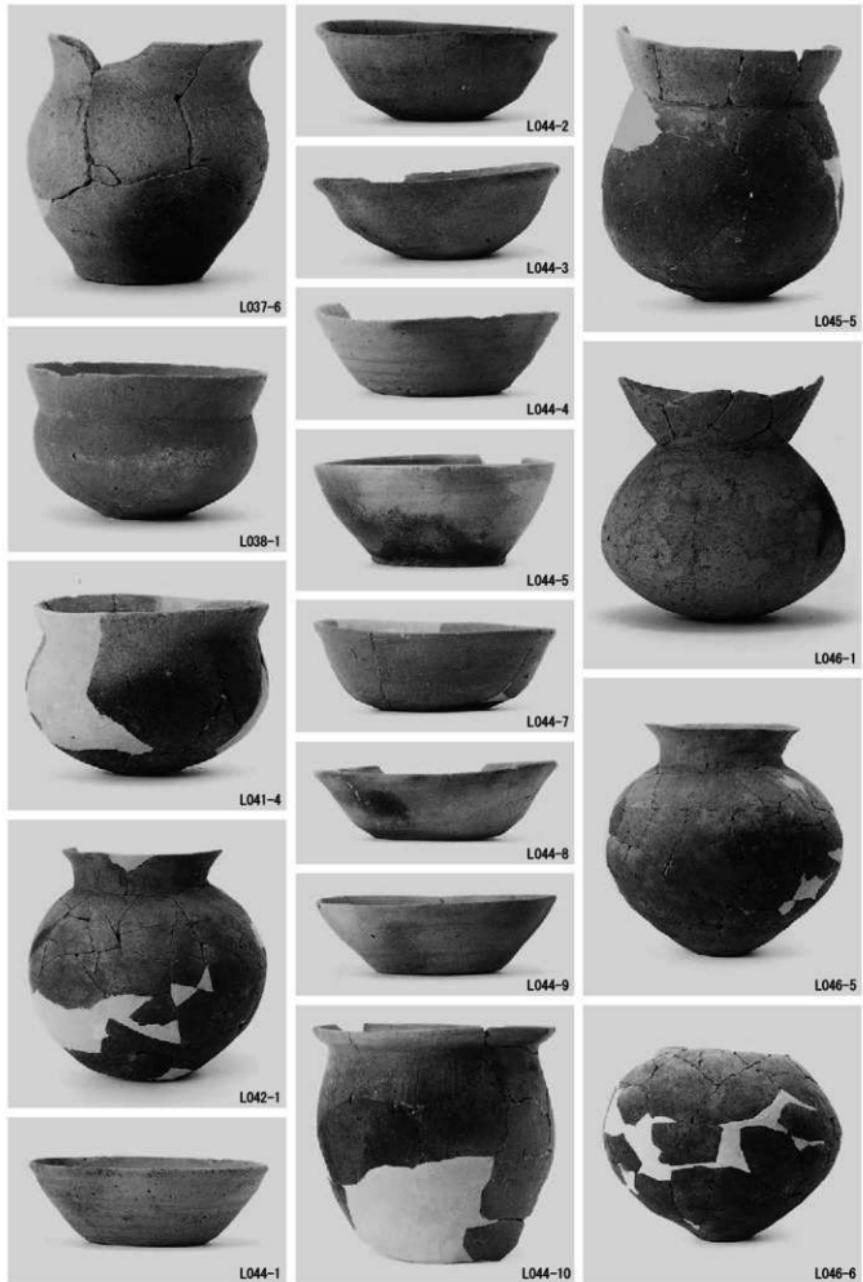
出土土器



出土土器



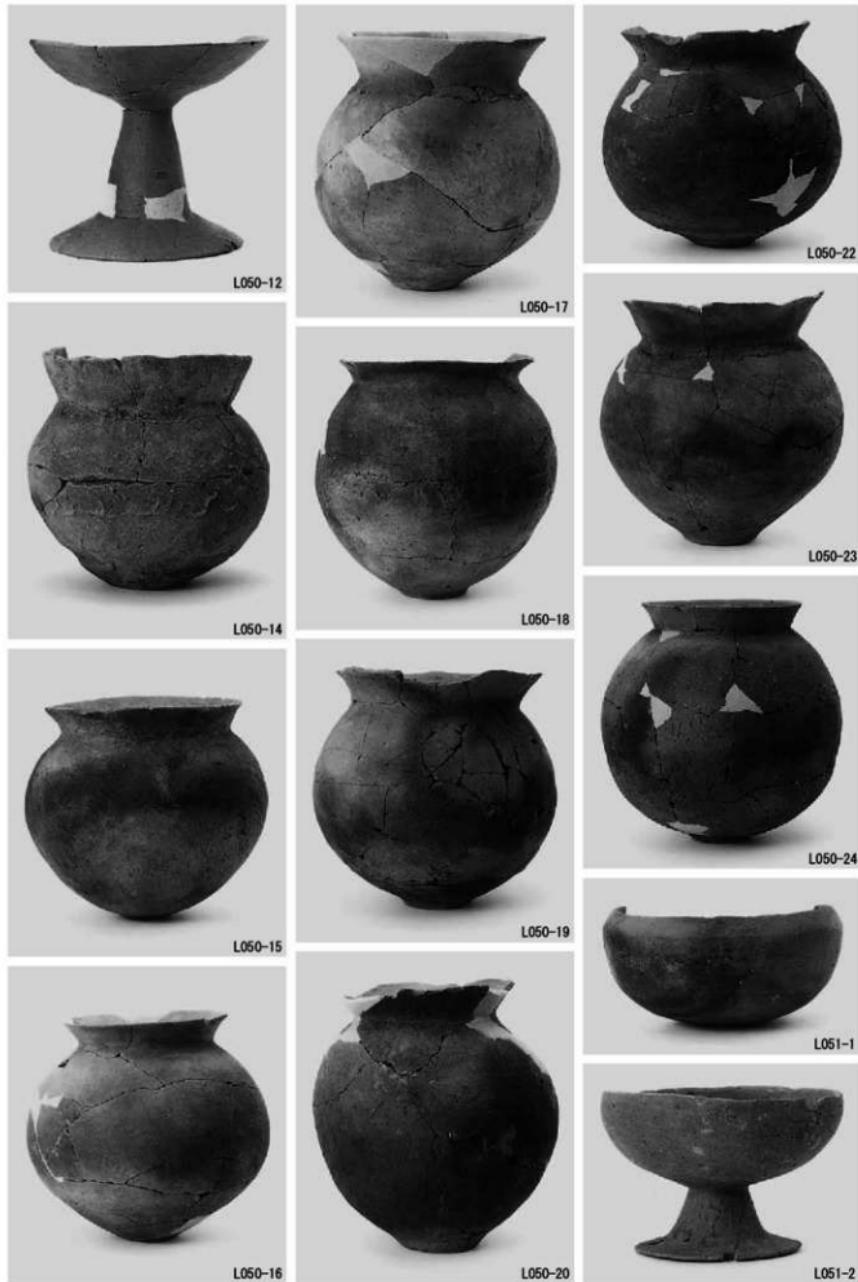
出土土器



出土土器



出土土器



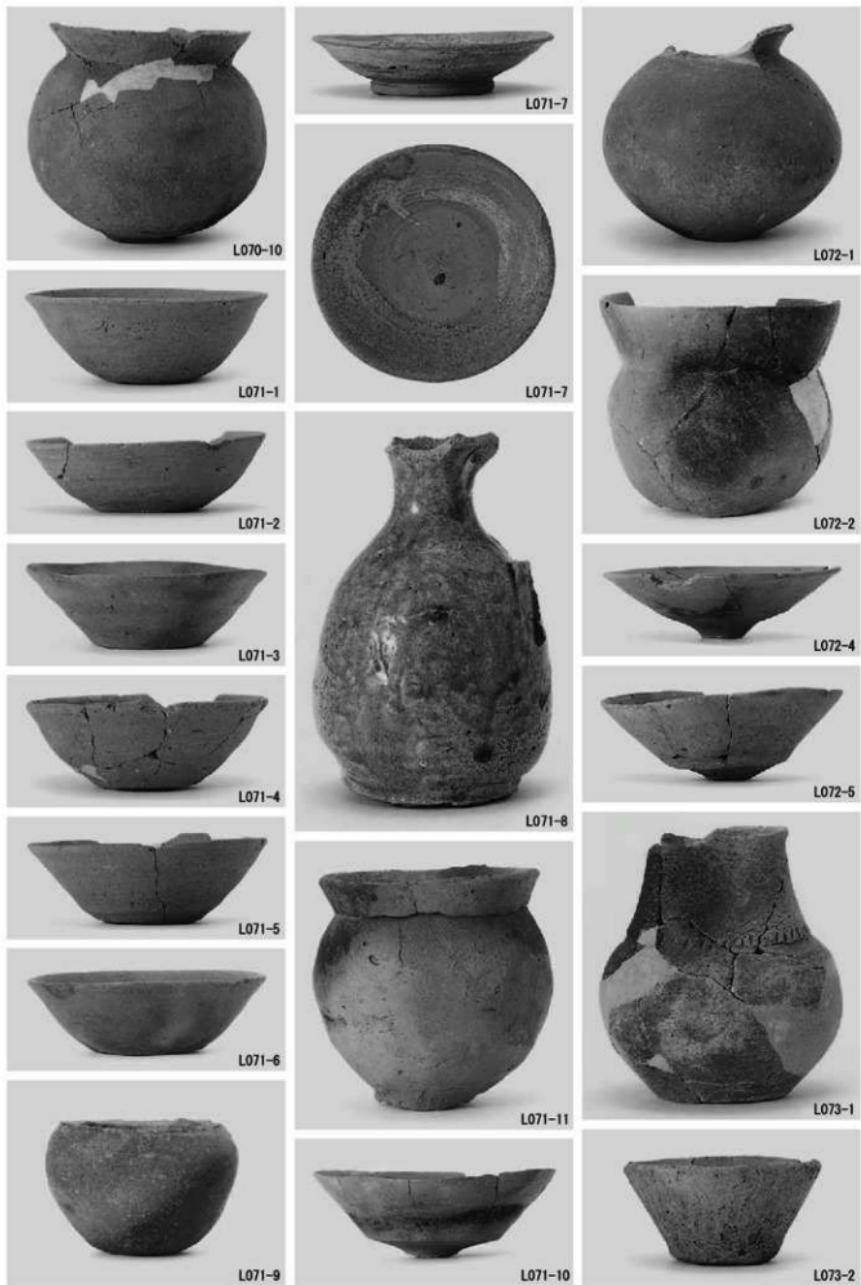
出土土器



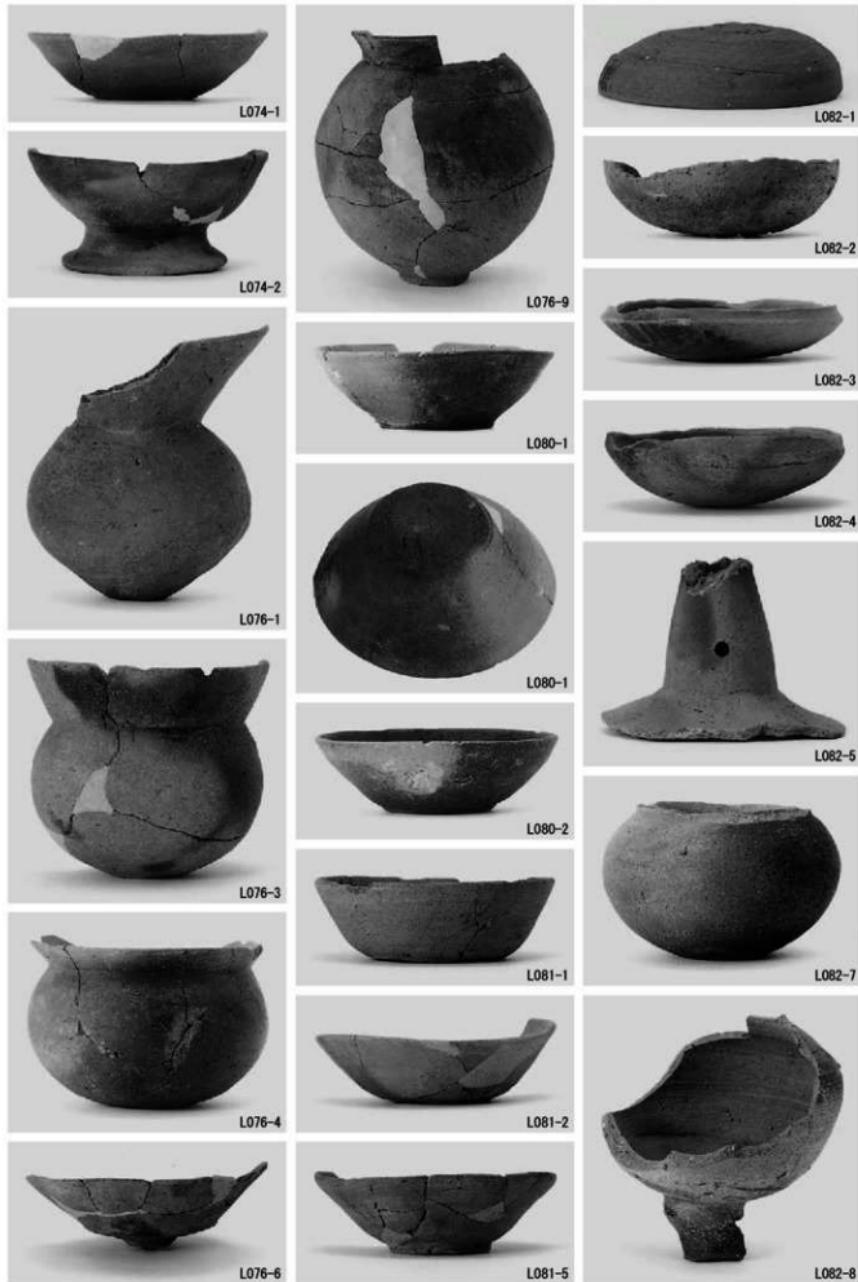
出土土器



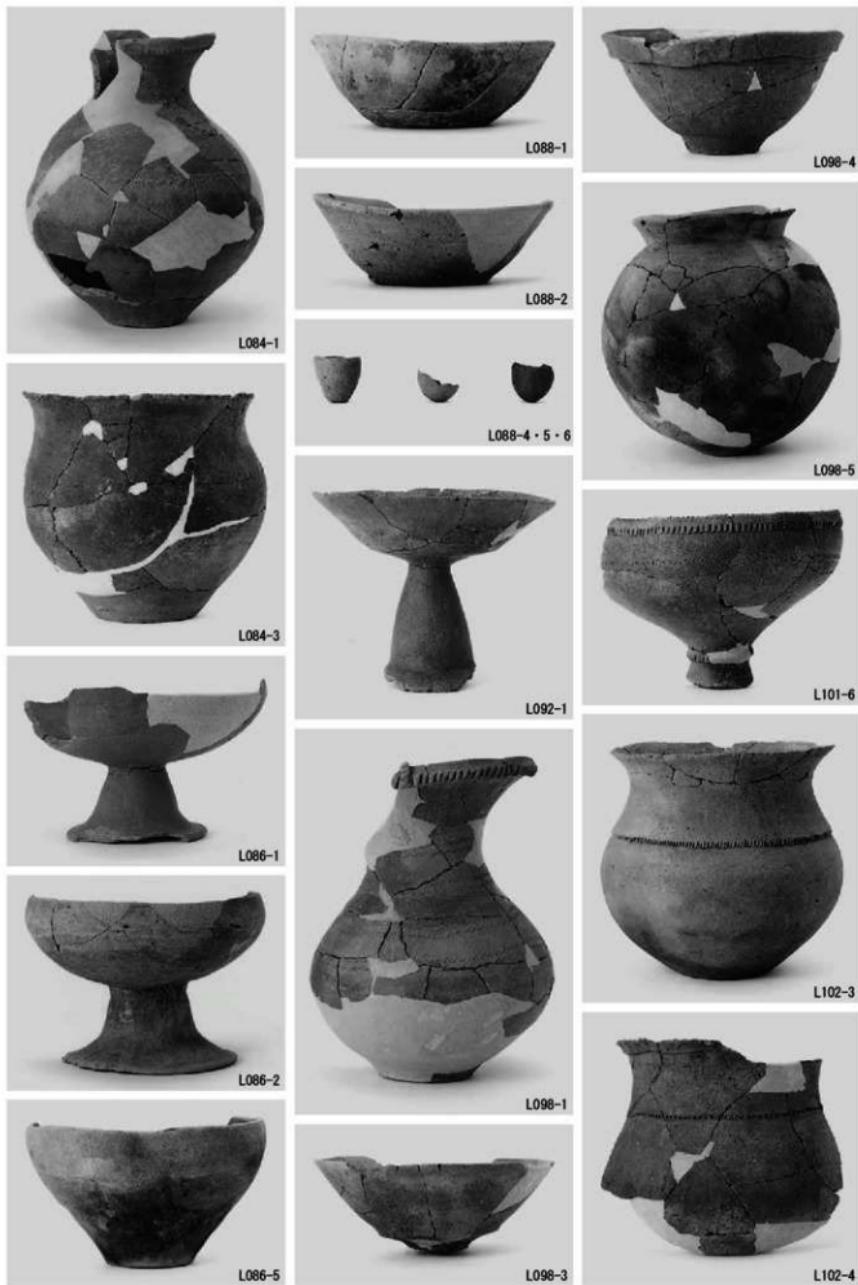
出土土器



出土土器



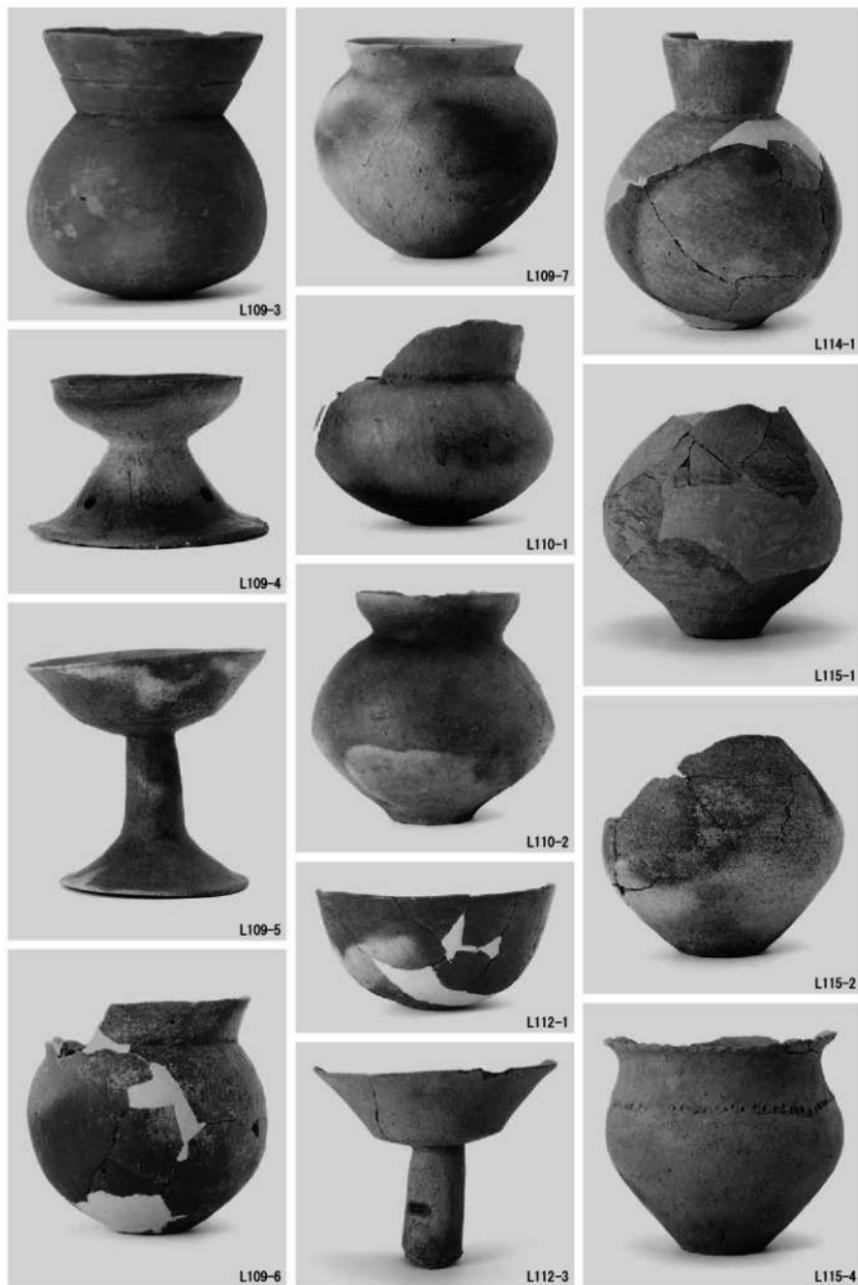
出土土器



出土土器



出土土器



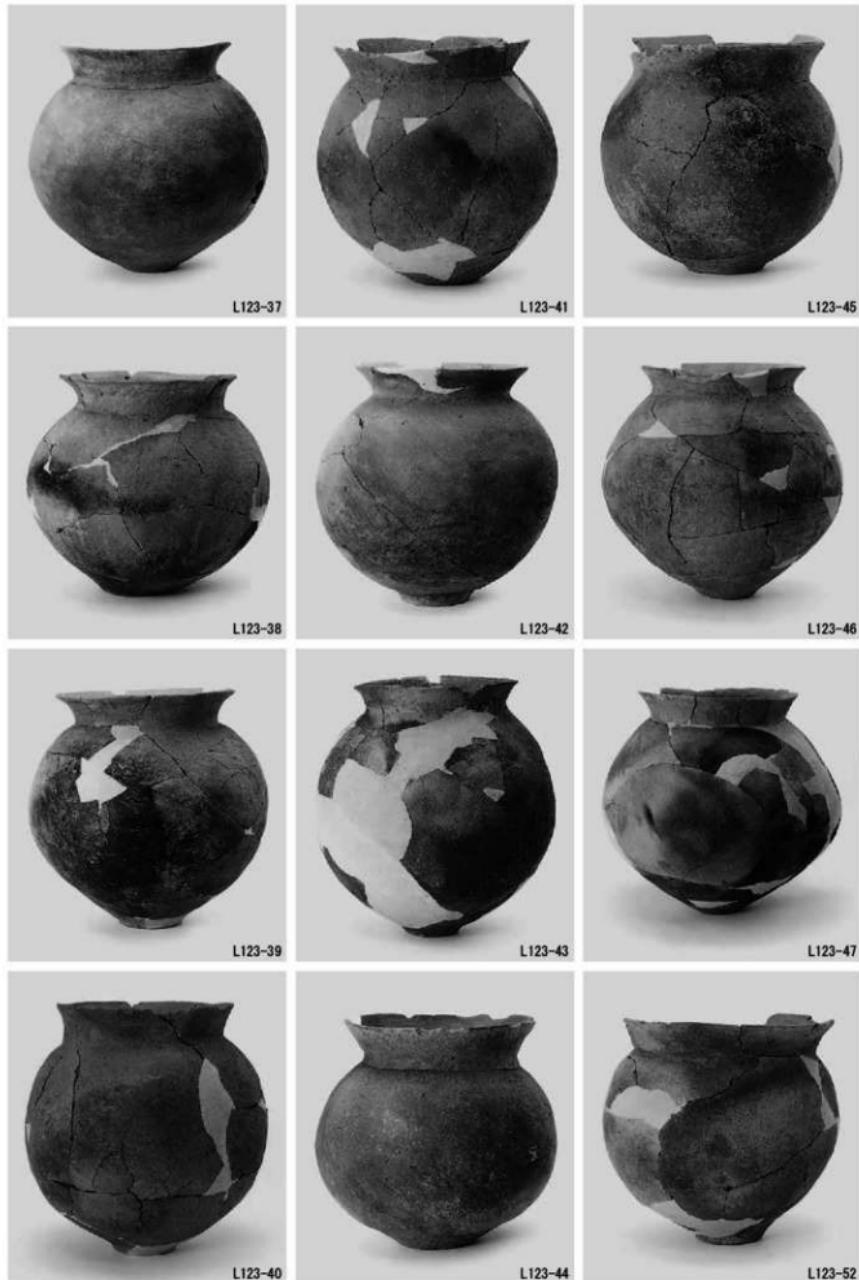
出土土器



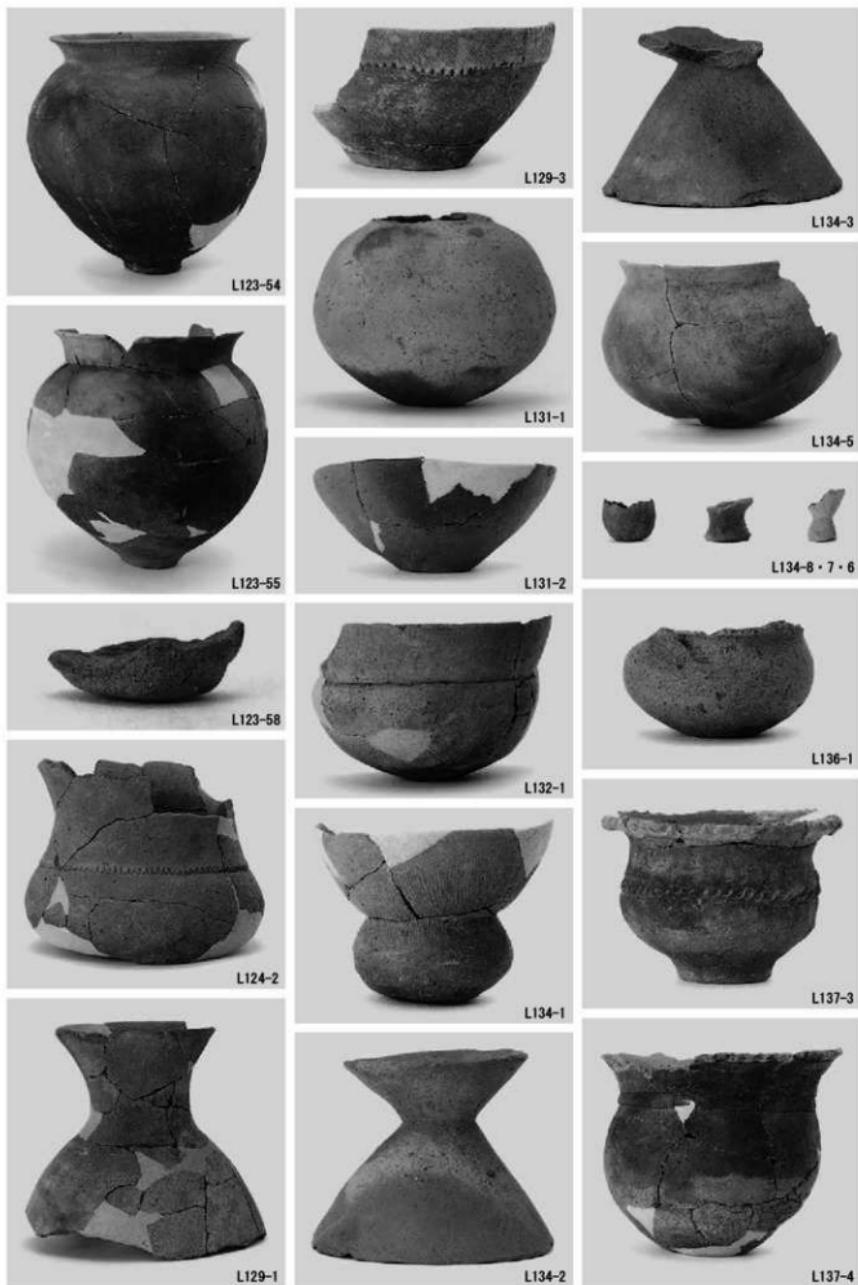
出土土器



出土土器



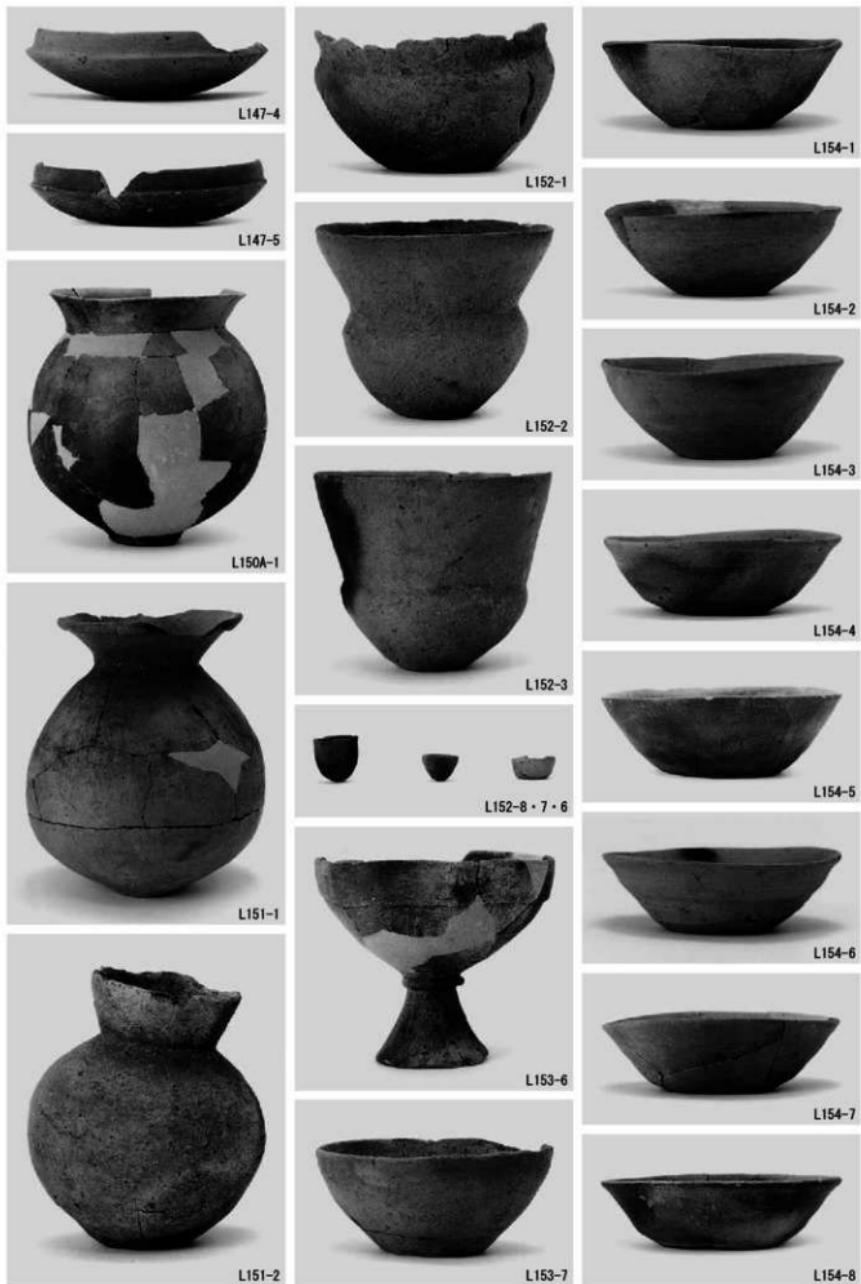
出土土器



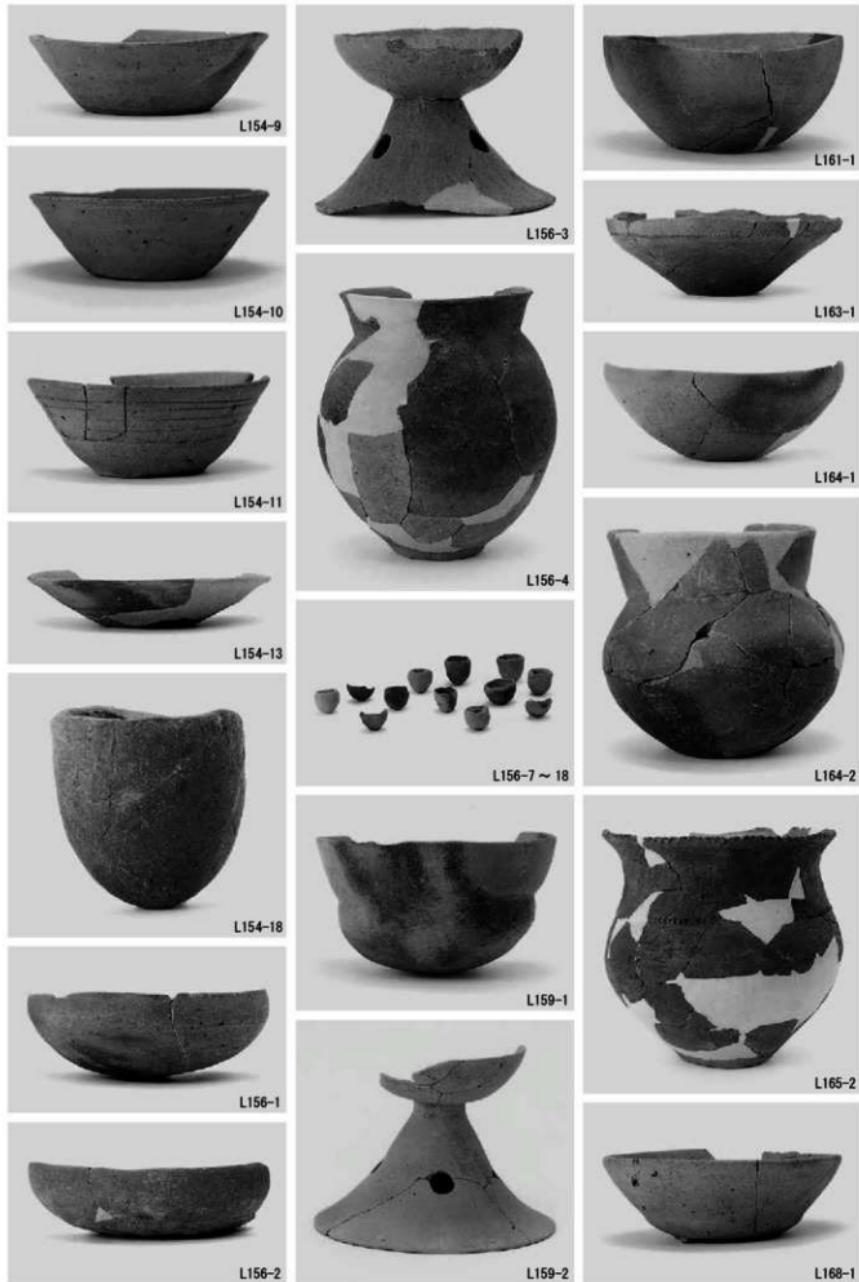
出土土器



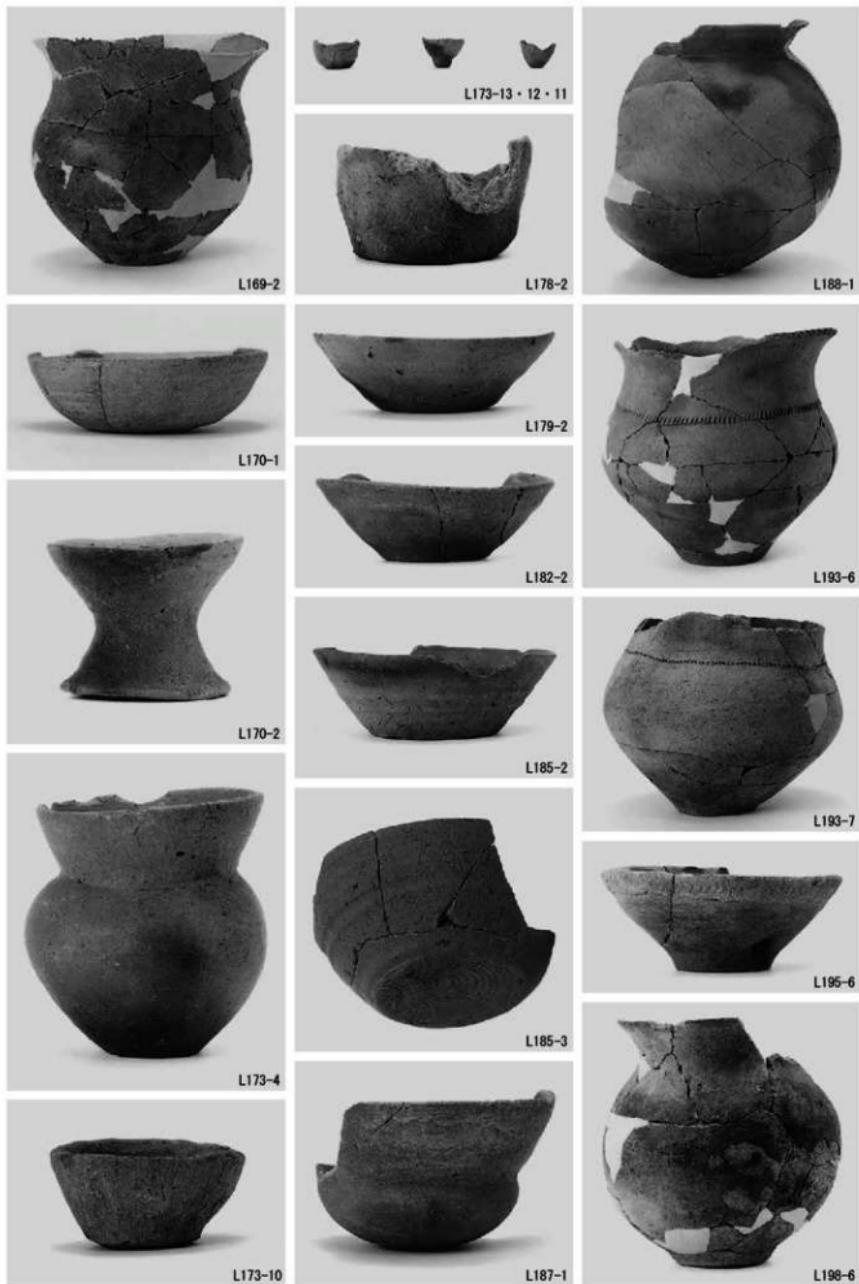
出土土器



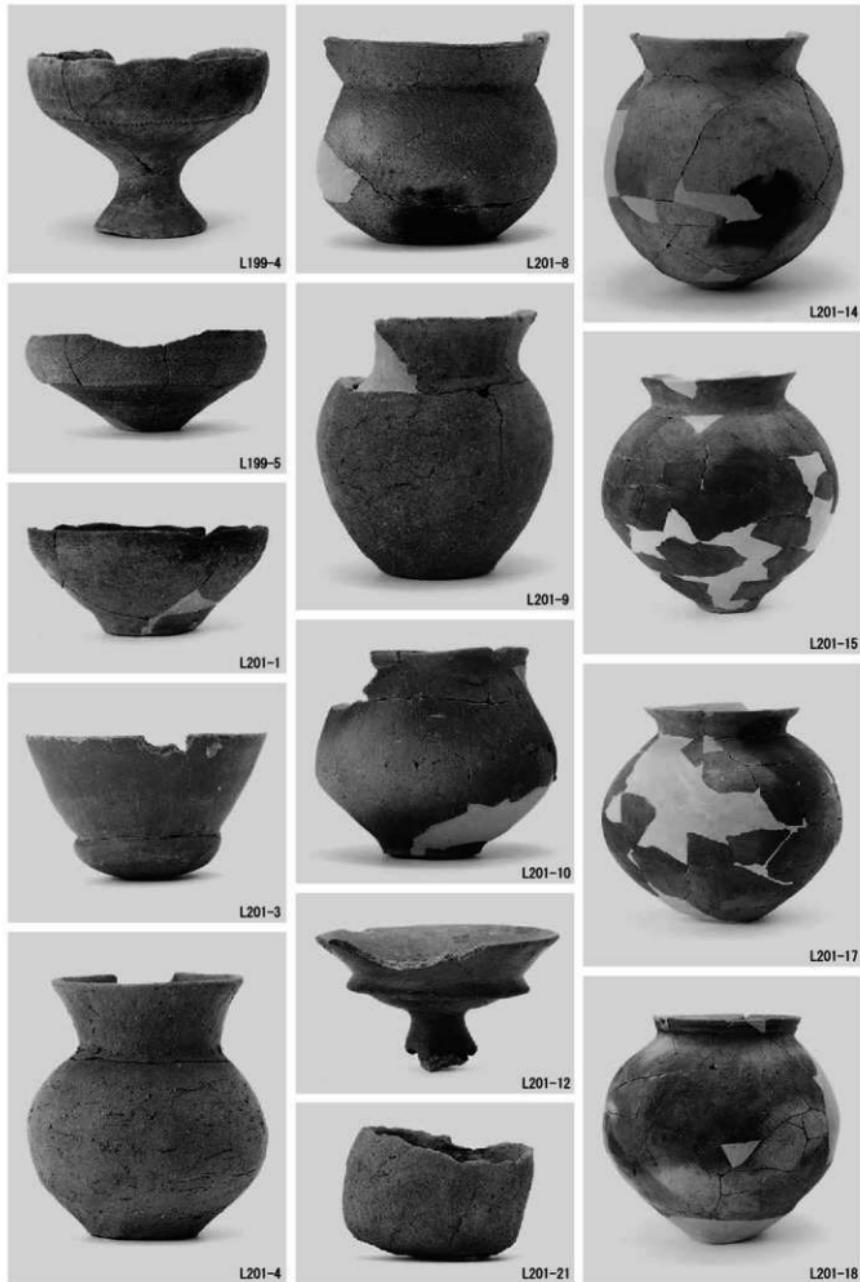
出土土器



出土土器



出土土器



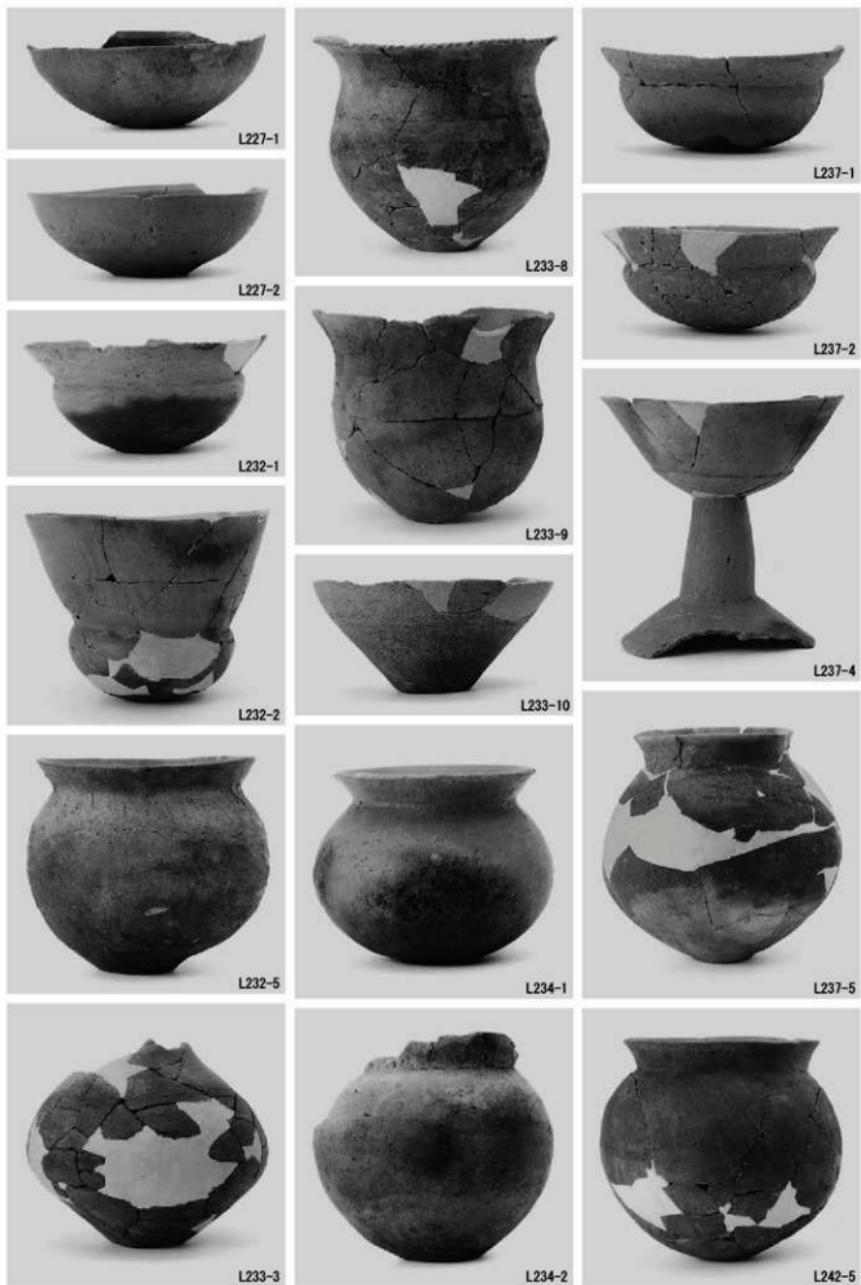
出土土器



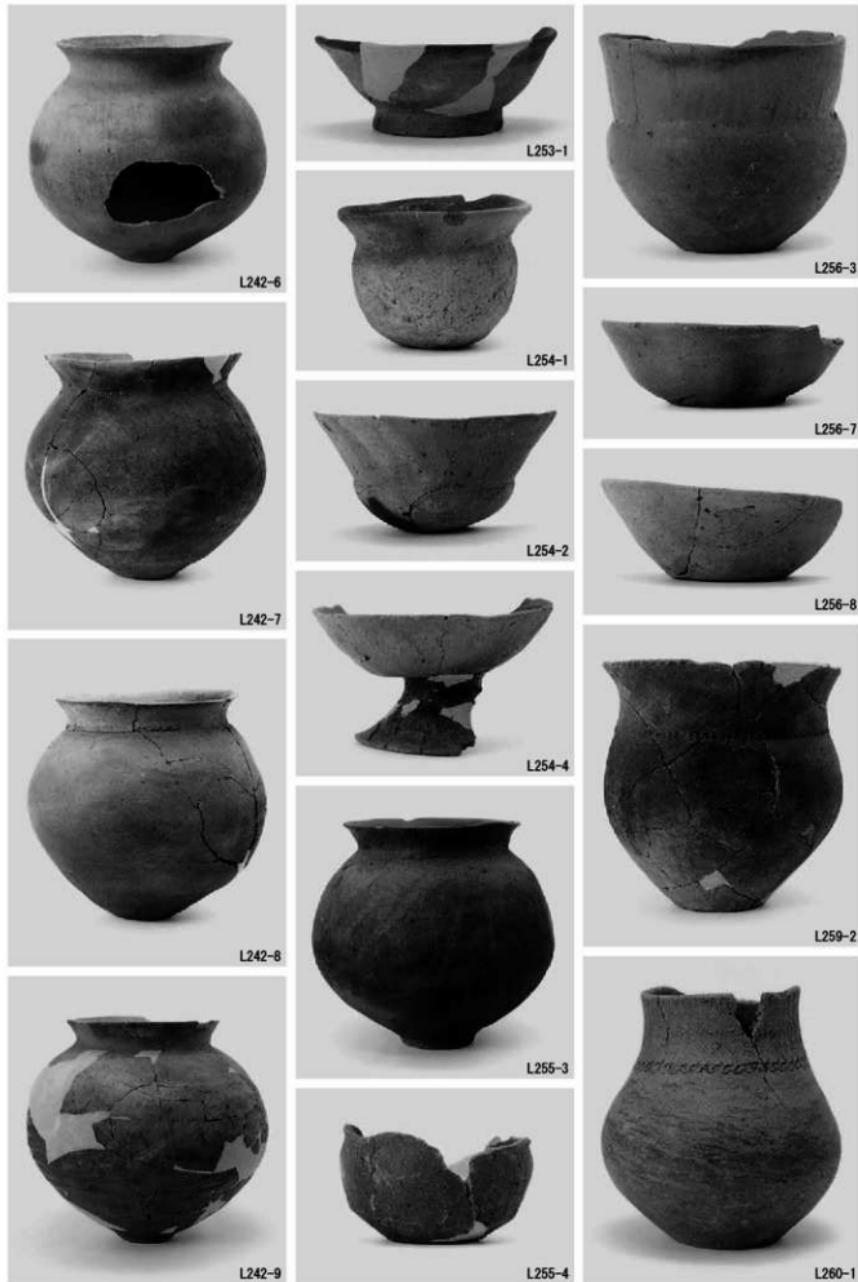
出土土器



出土土器



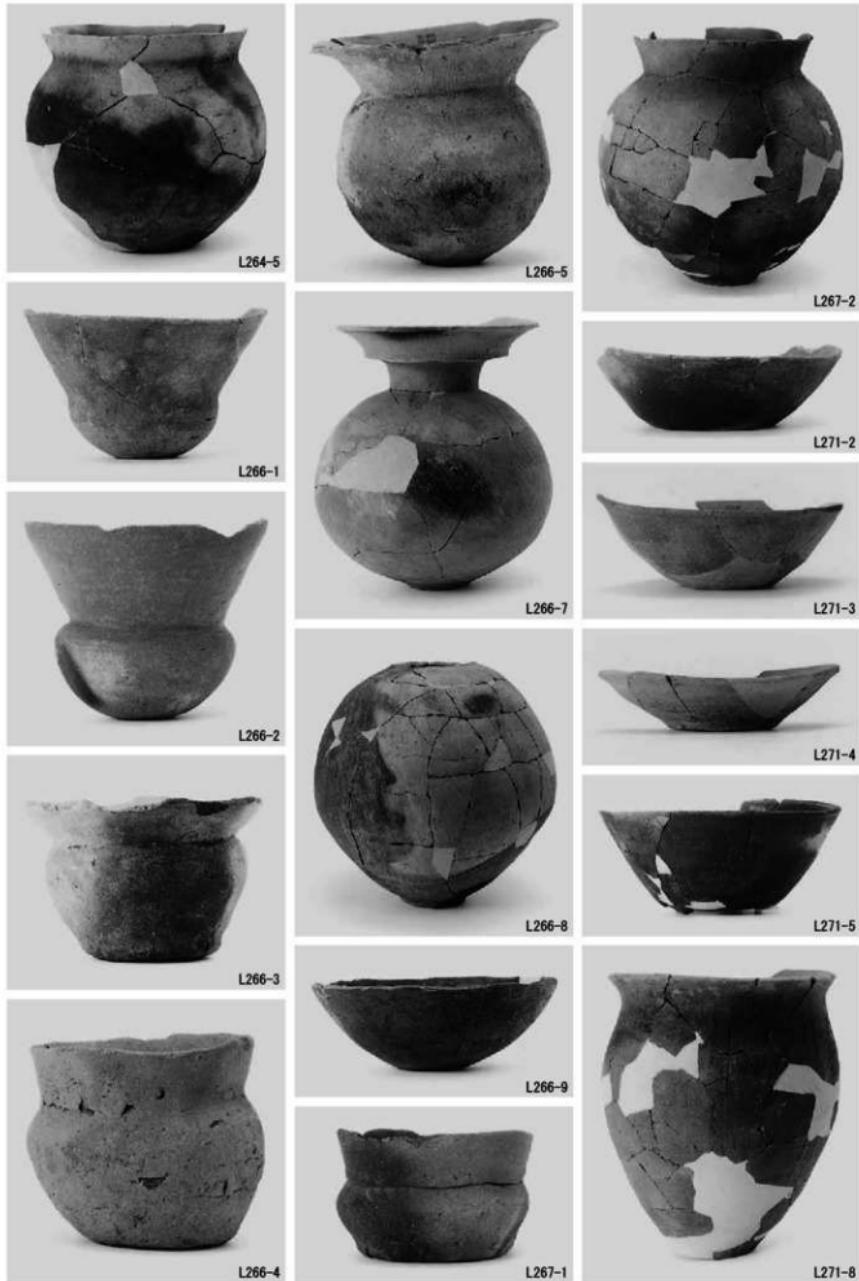
出土土器



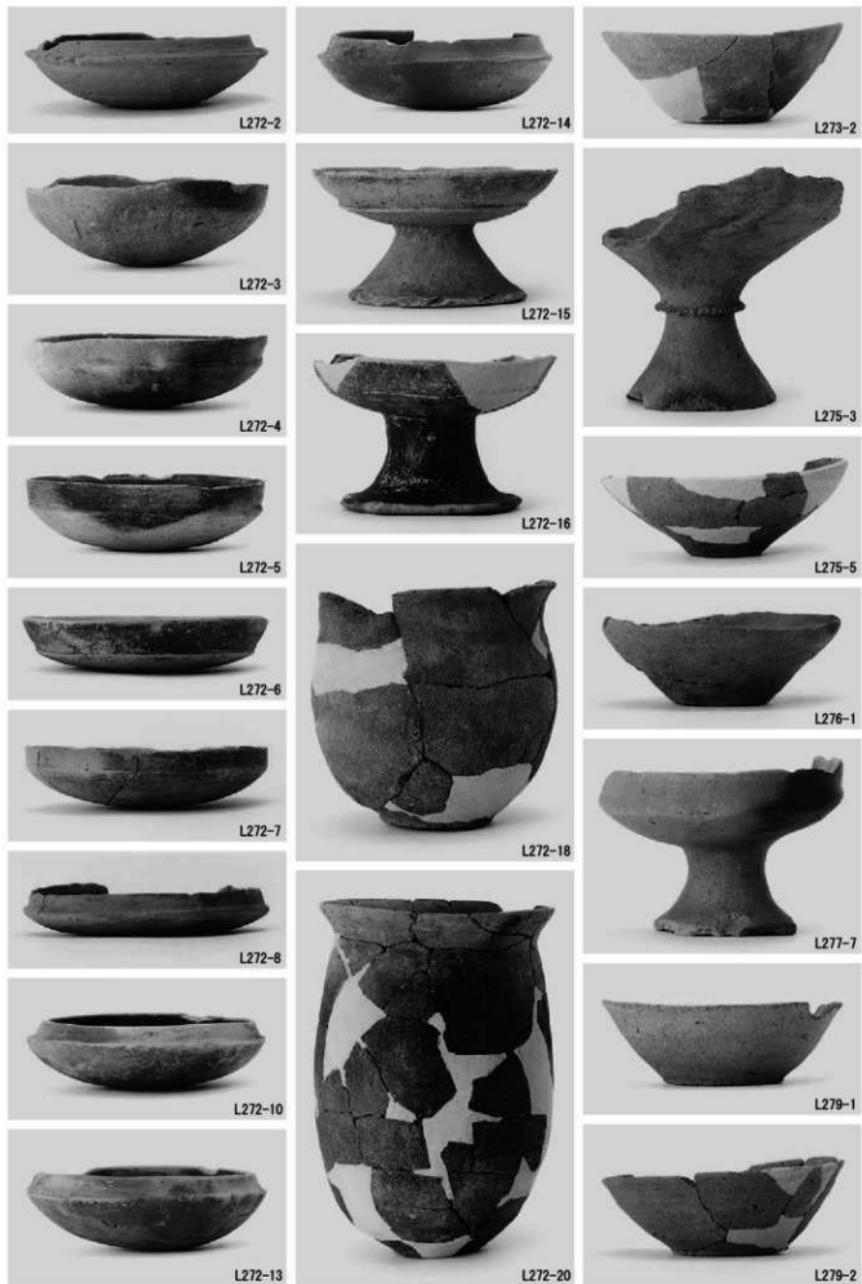
出土土器



出土土器



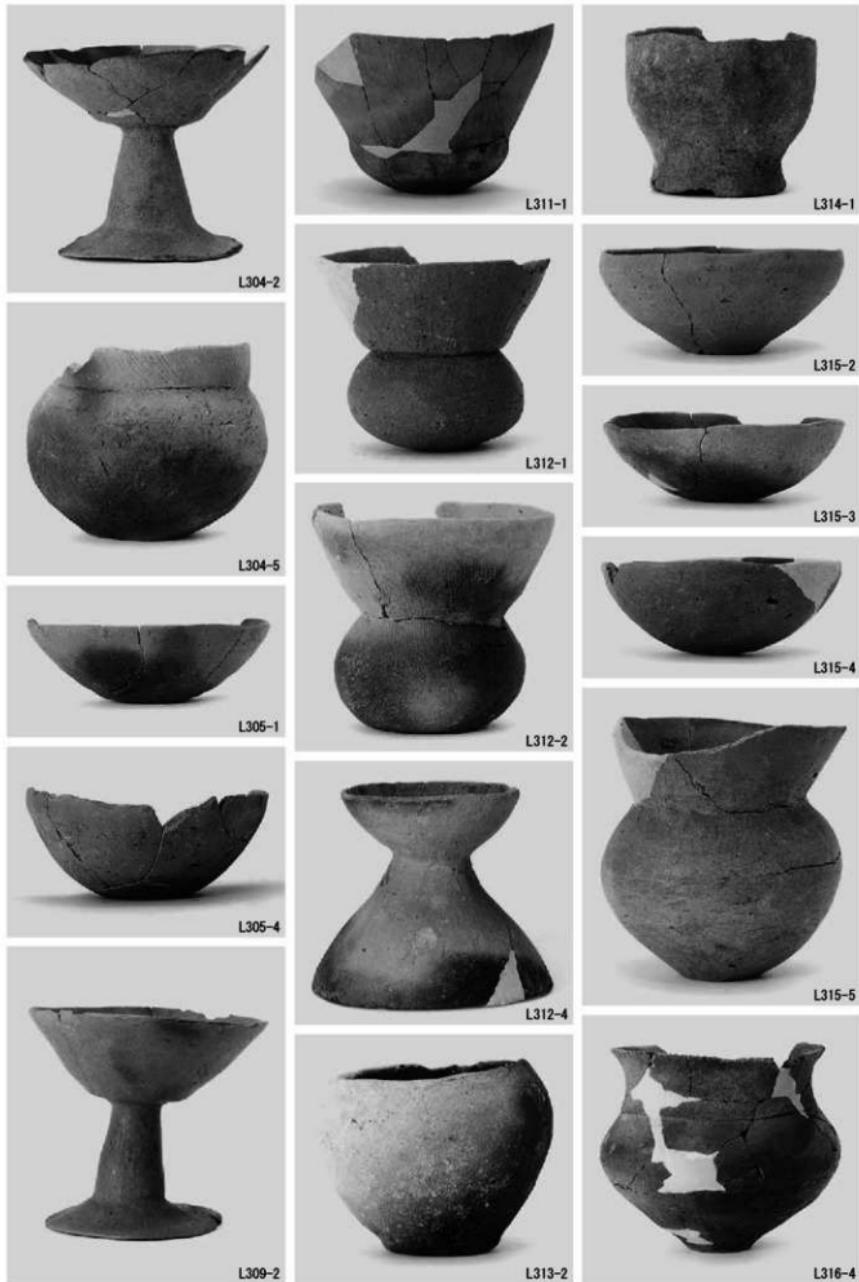
出土土器



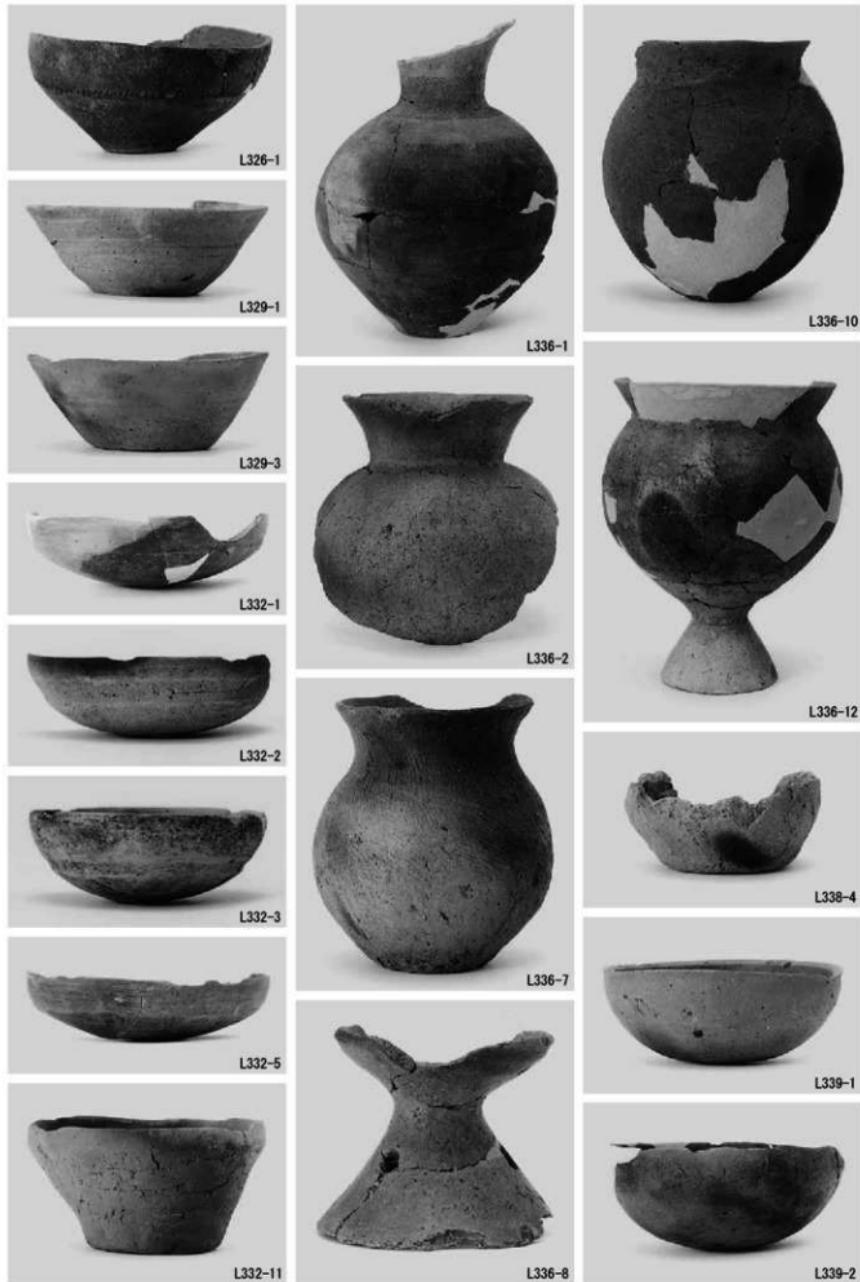
出土土器



出土土器



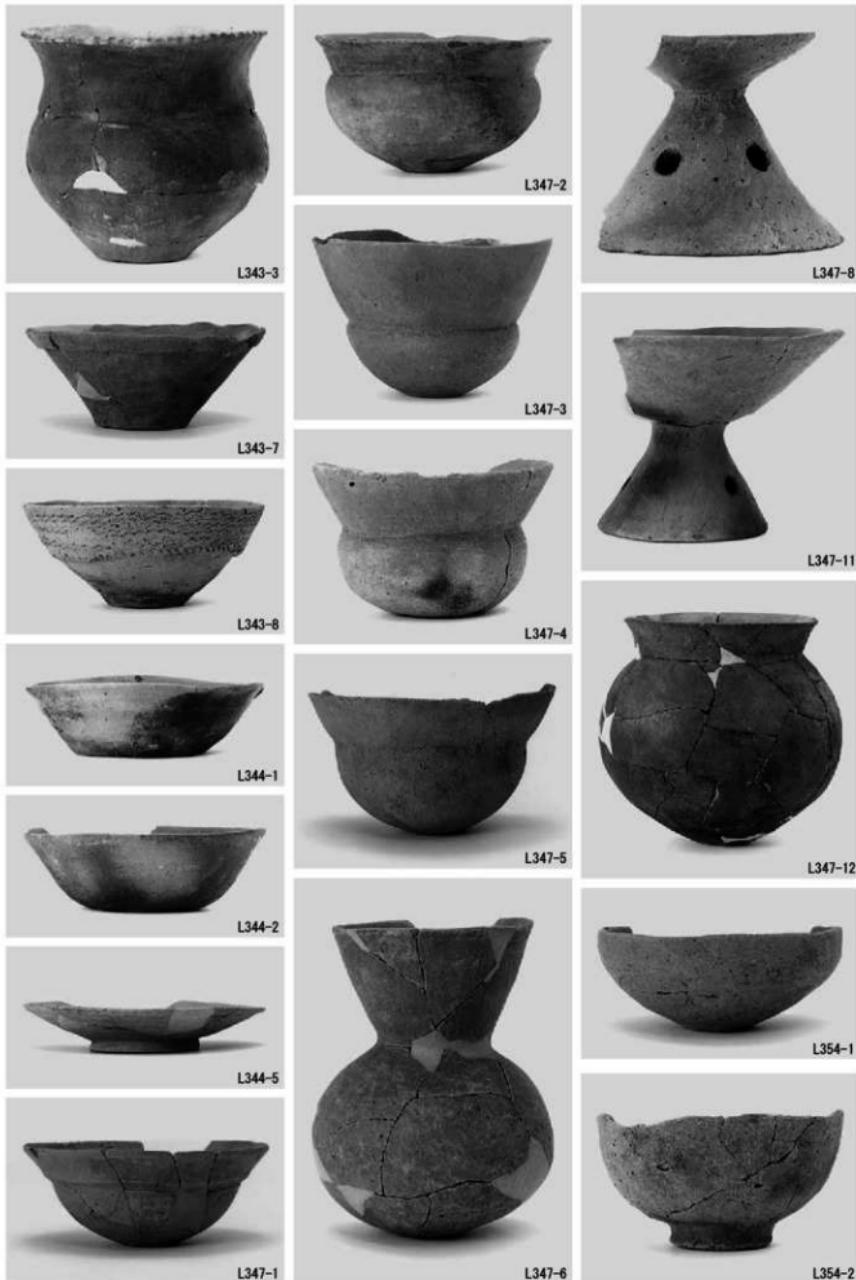
出土土器



出土土器



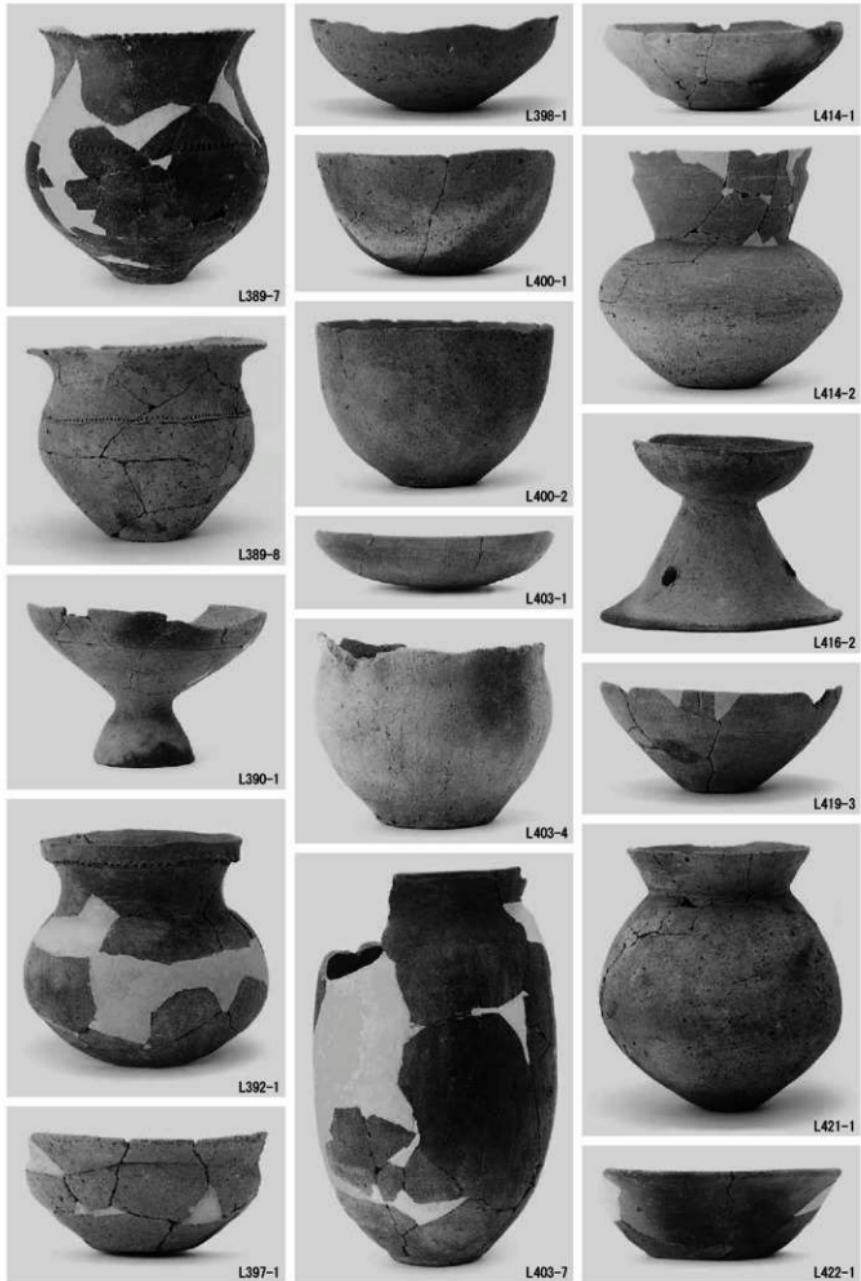
出土土器



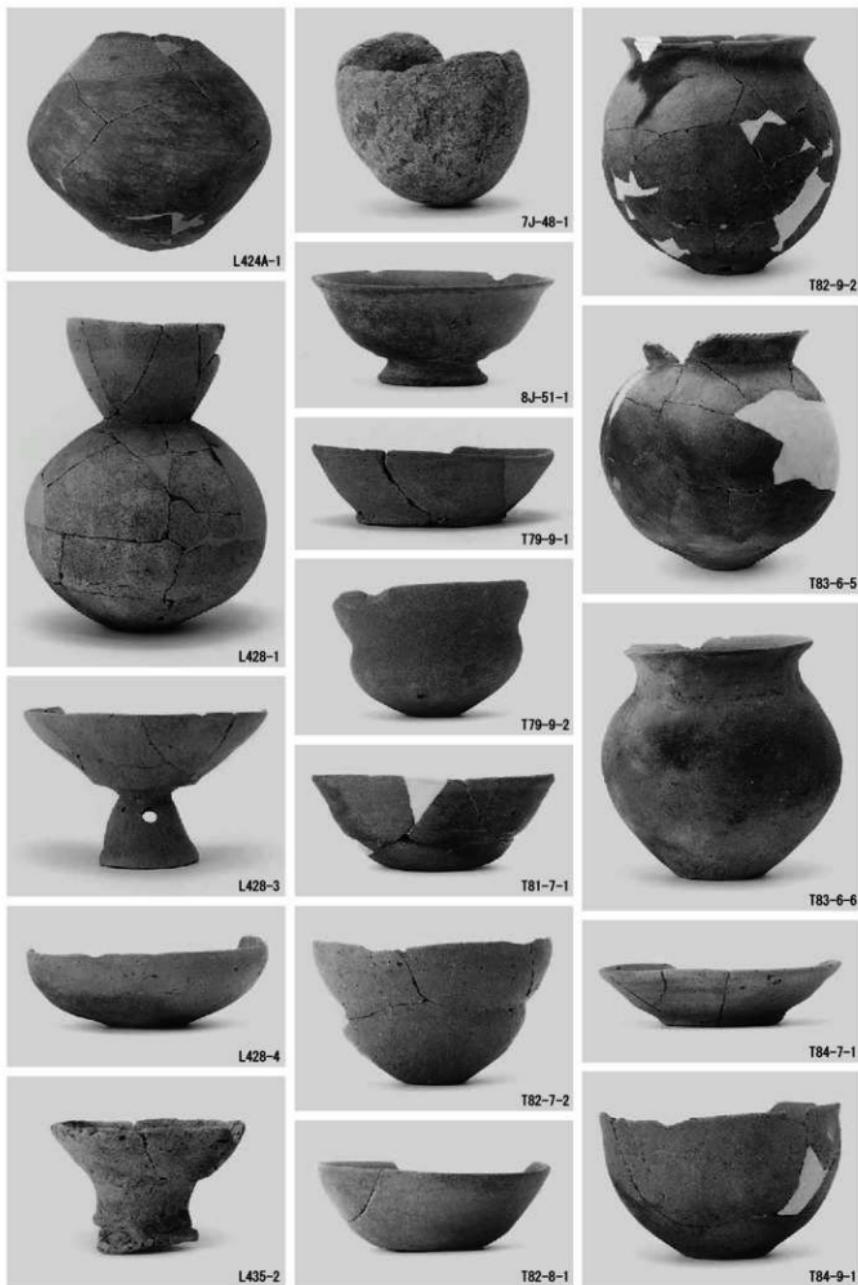
出土土器



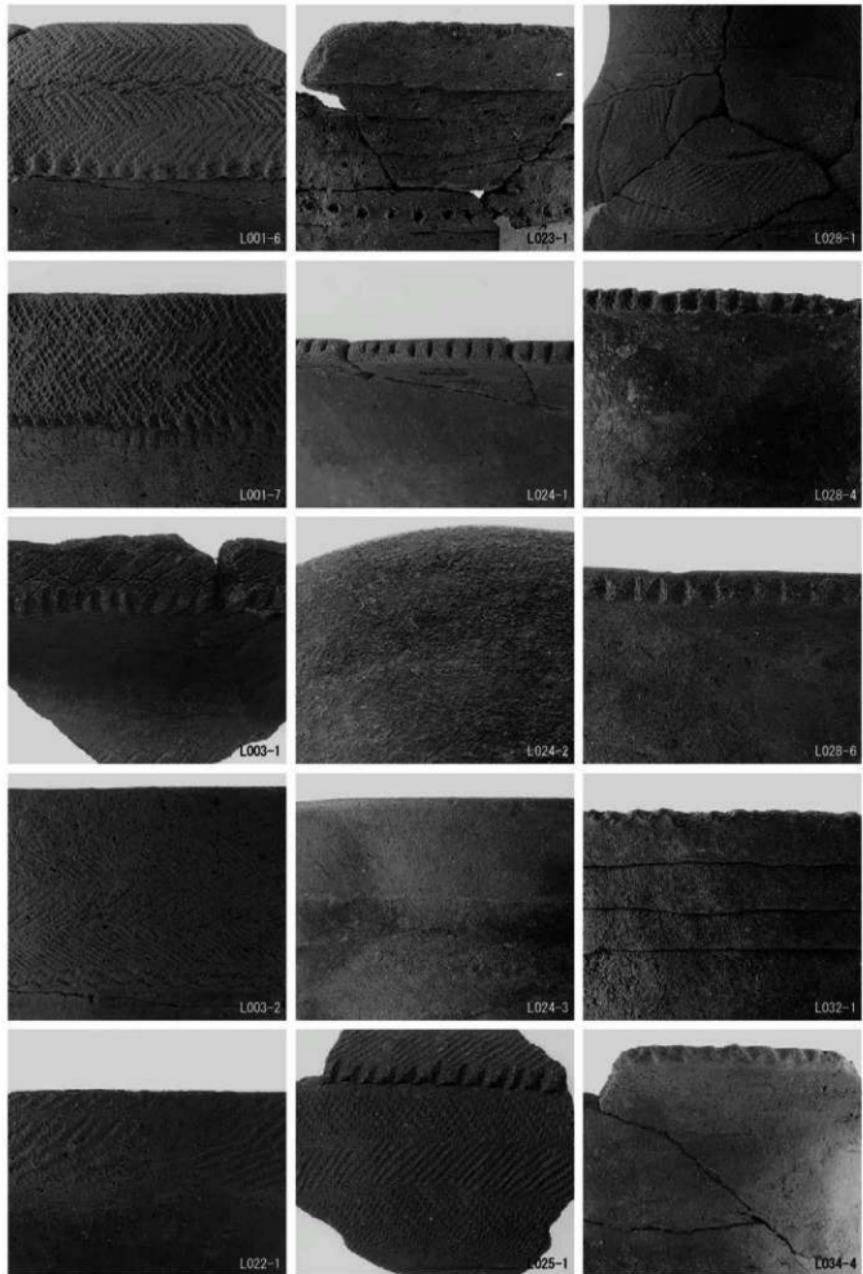
出土土器



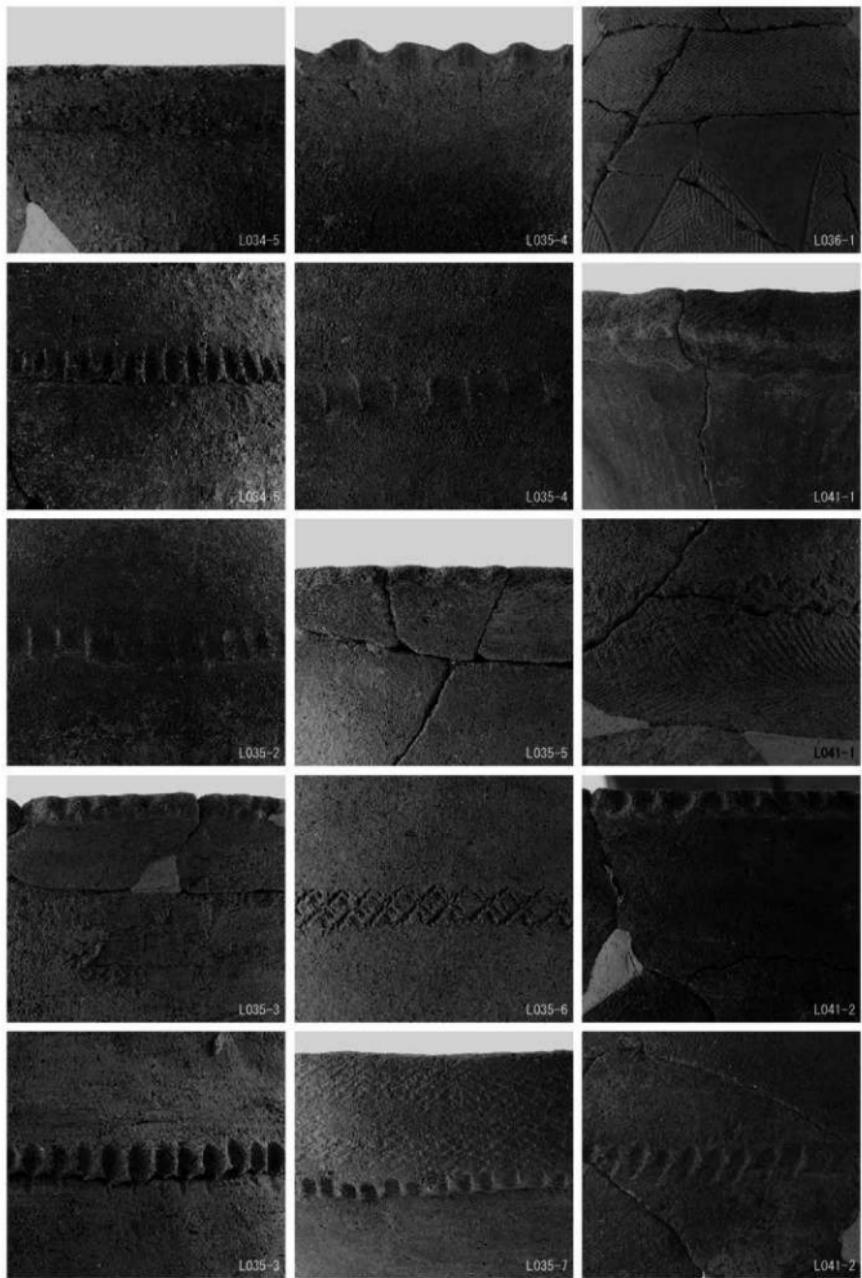
出土土器



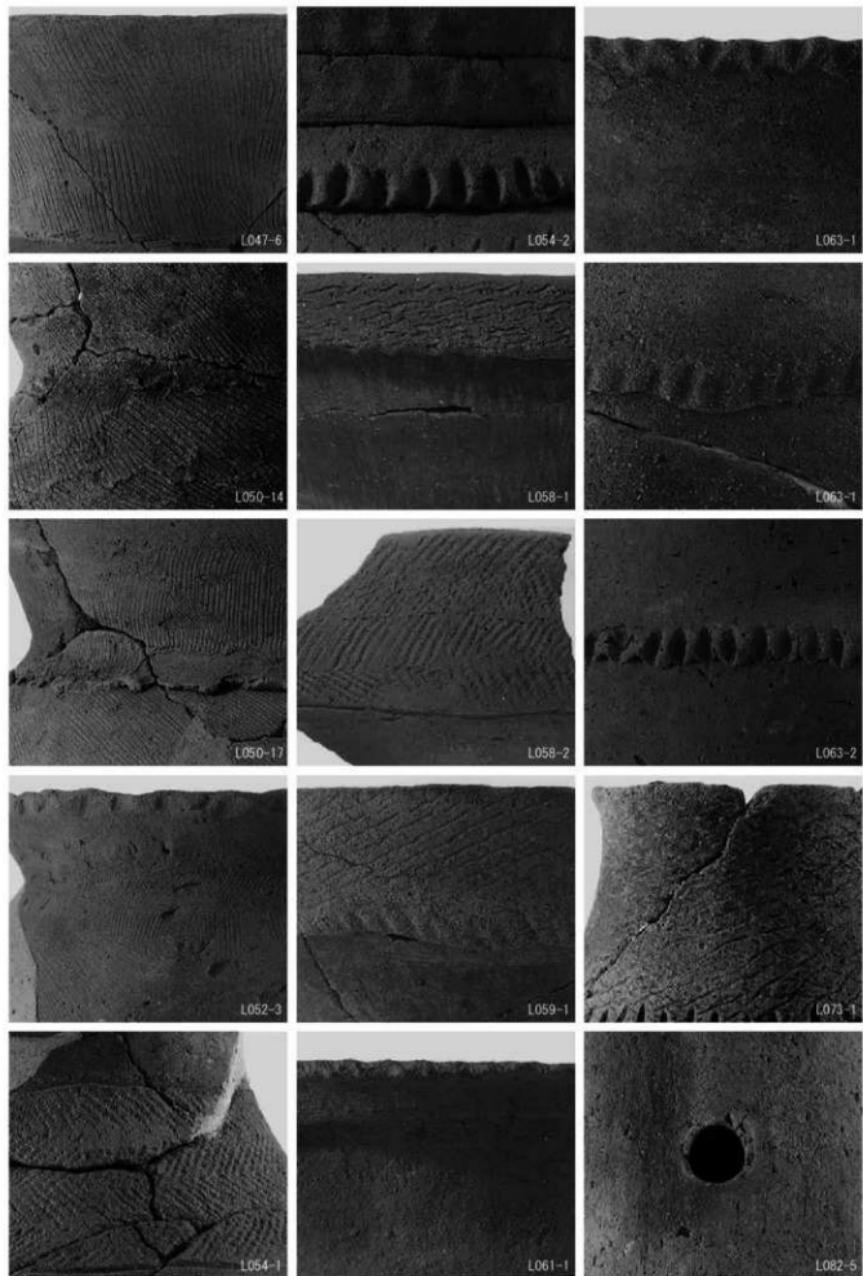
出土土器



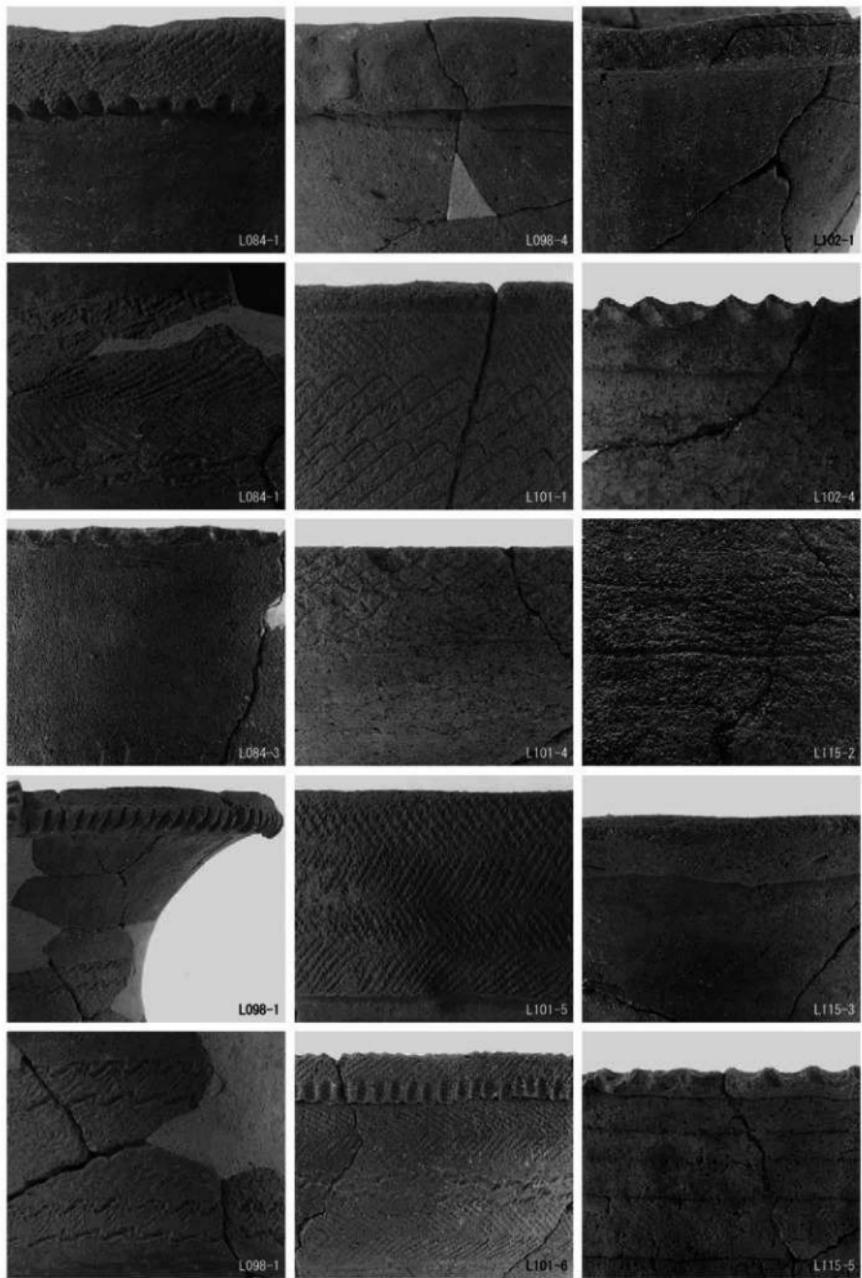
出土土器



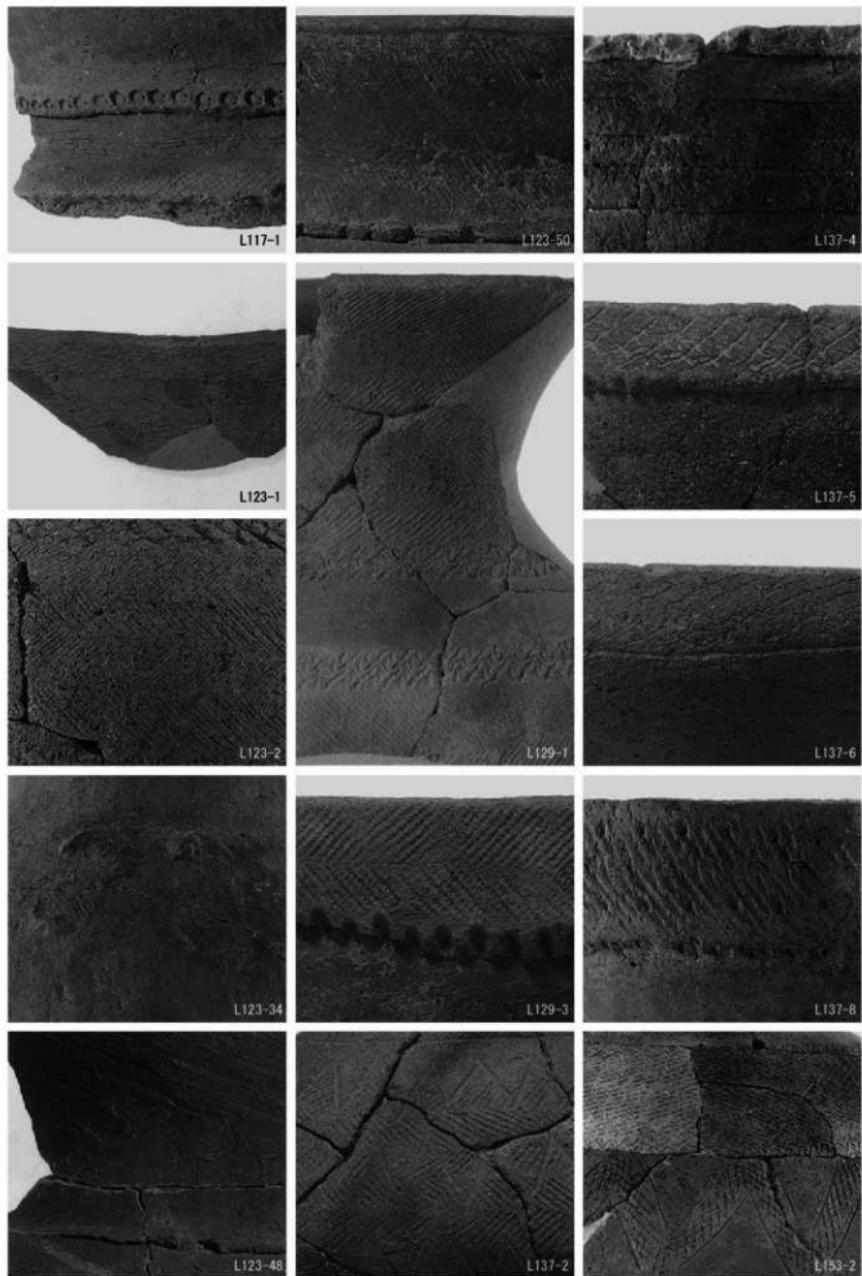
出土土器



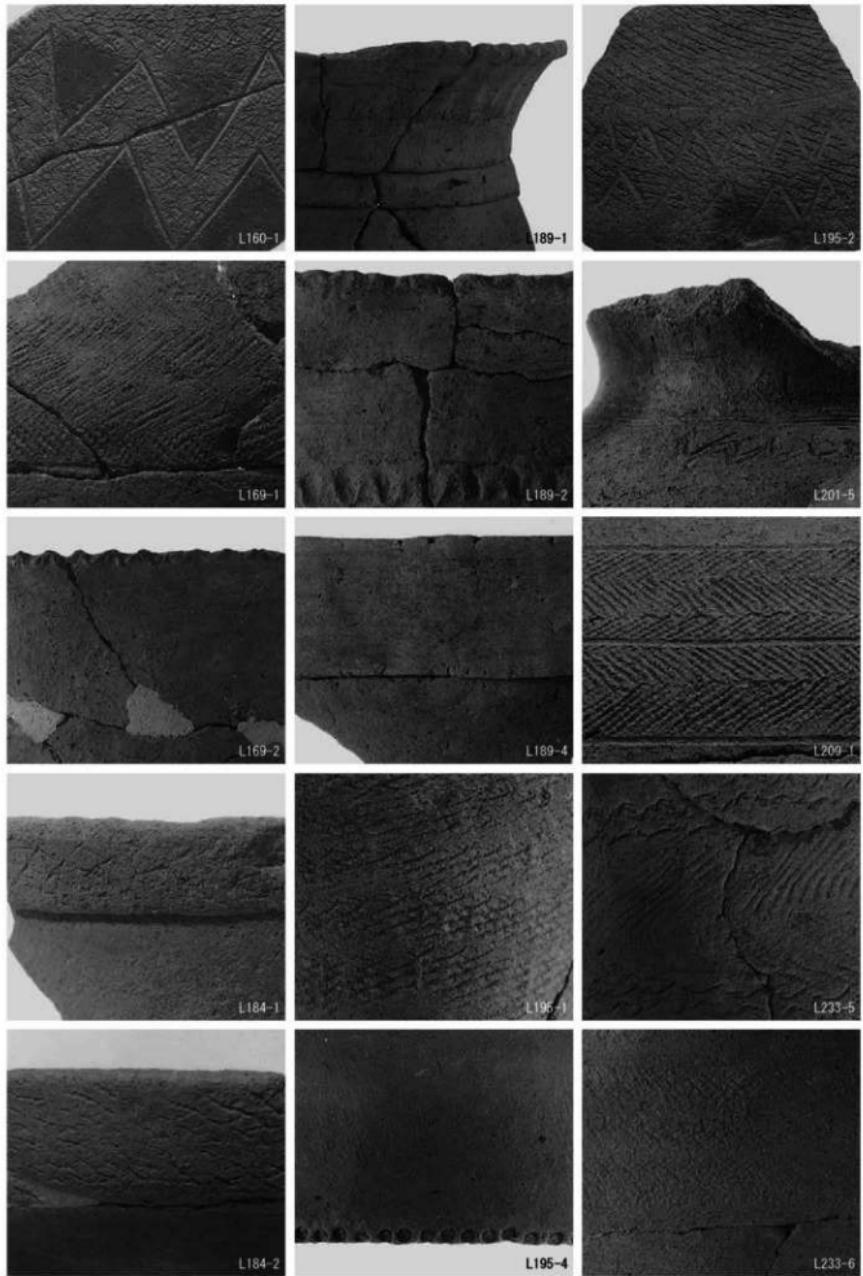
出土土器



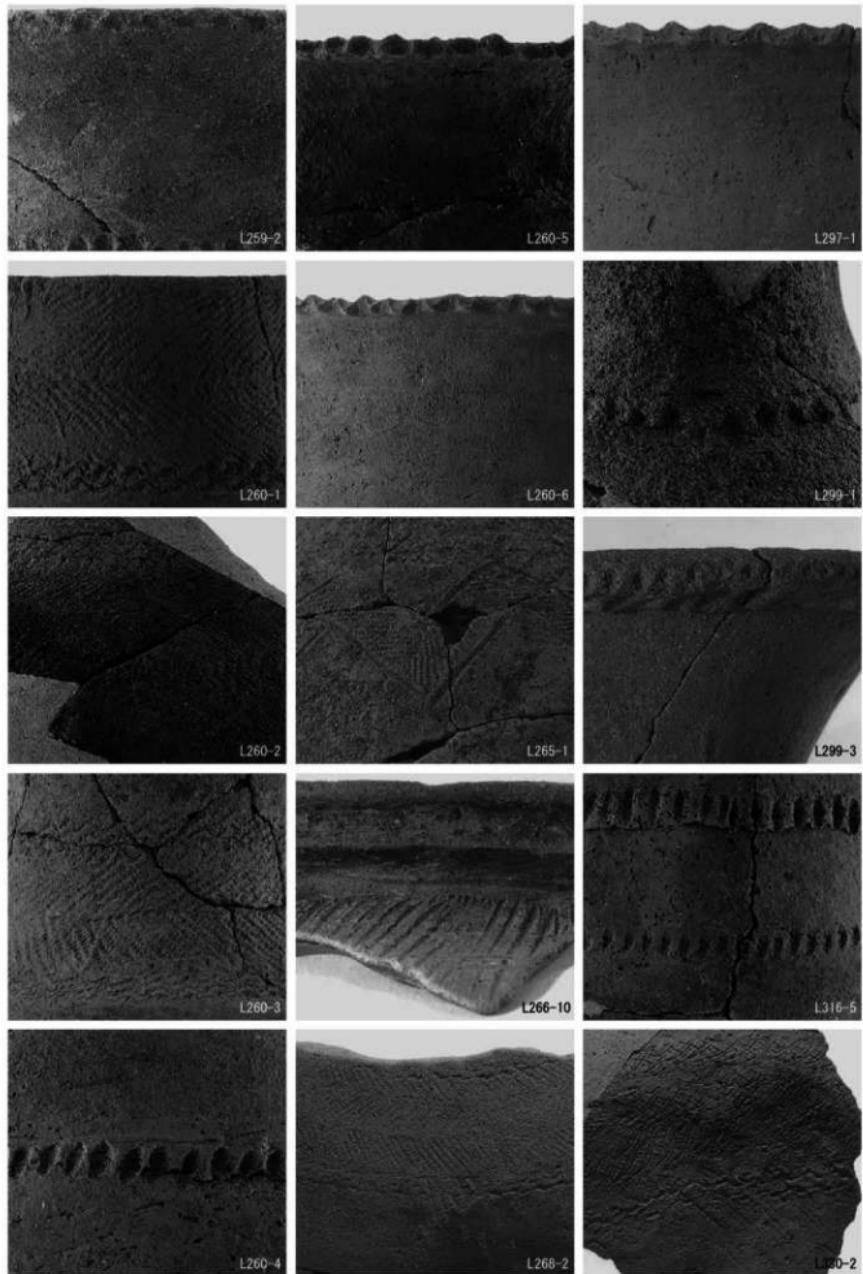
出土土器



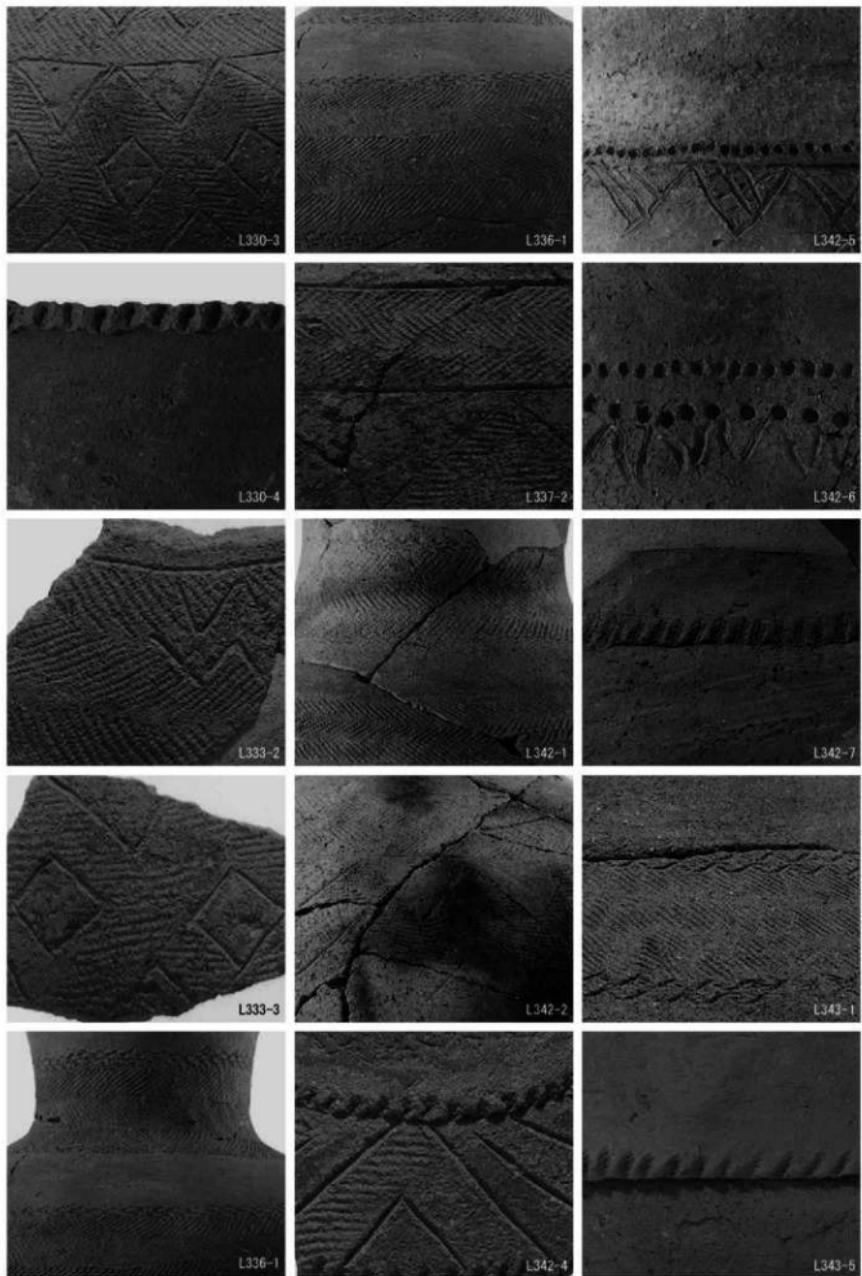
出土器



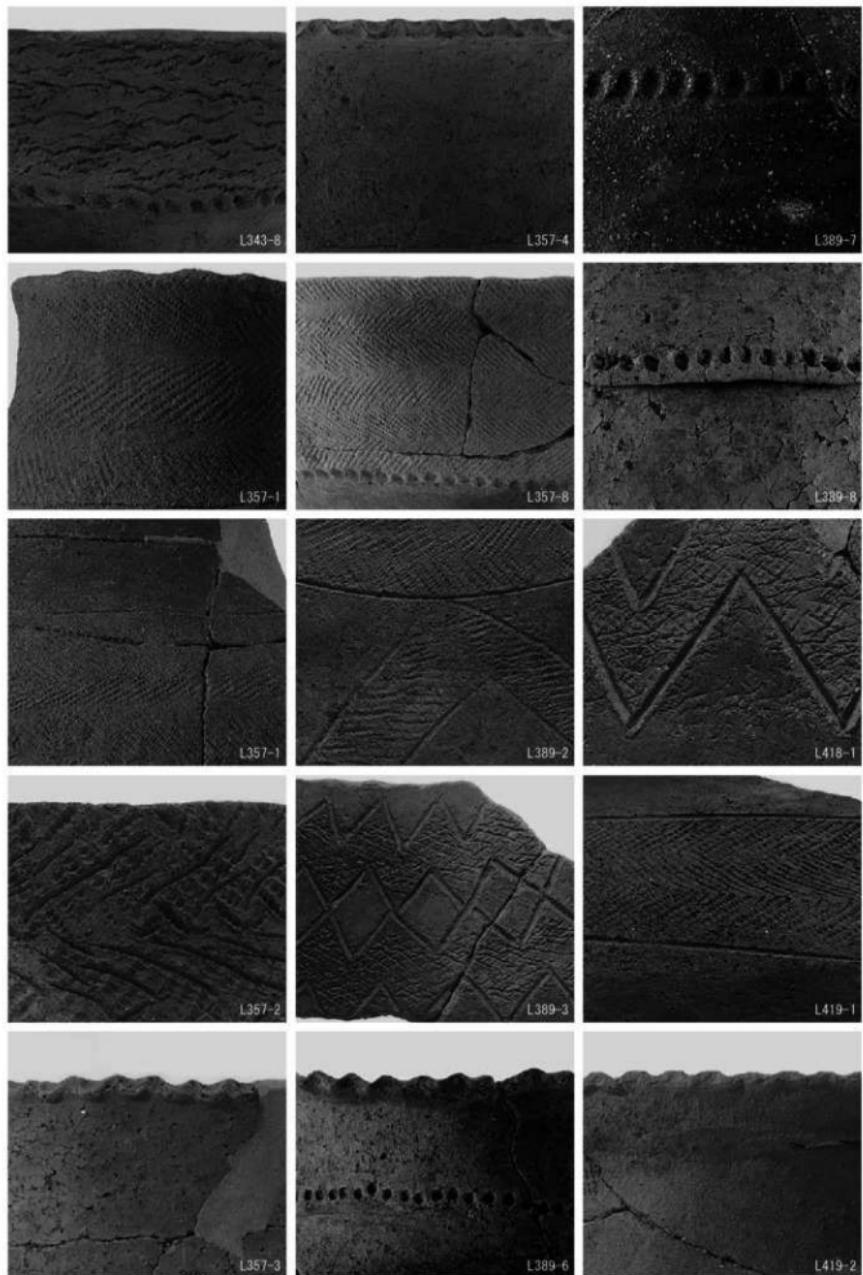
出土土器



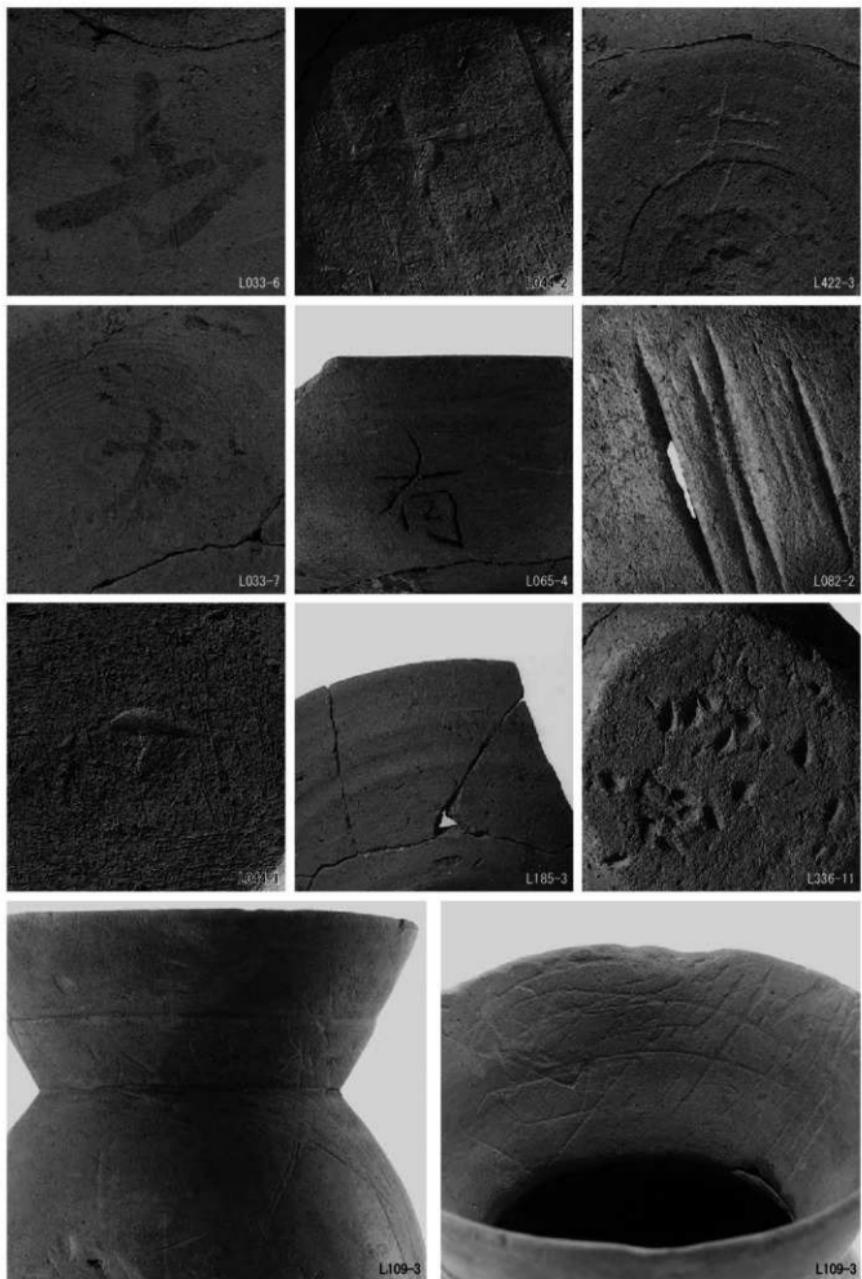
出土器



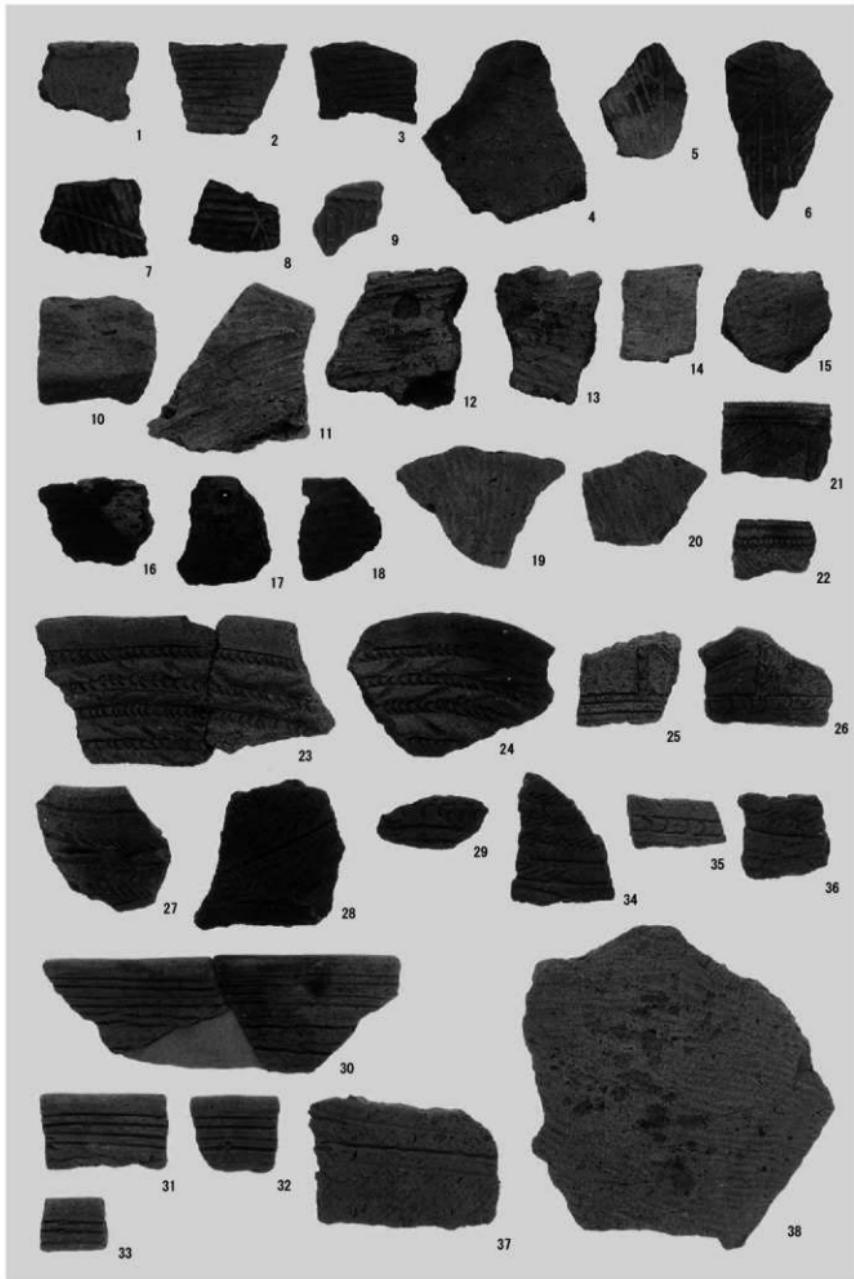
出土土器



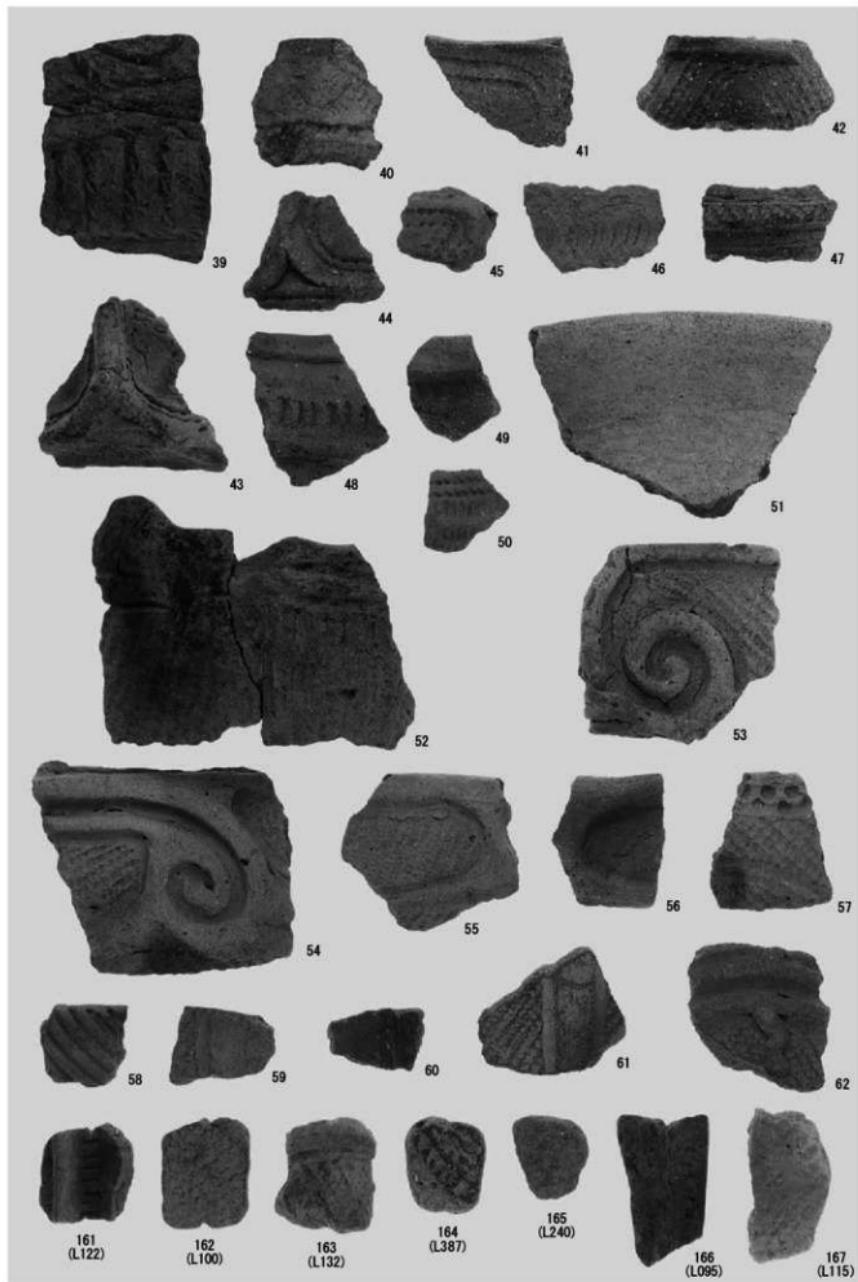
出土土器



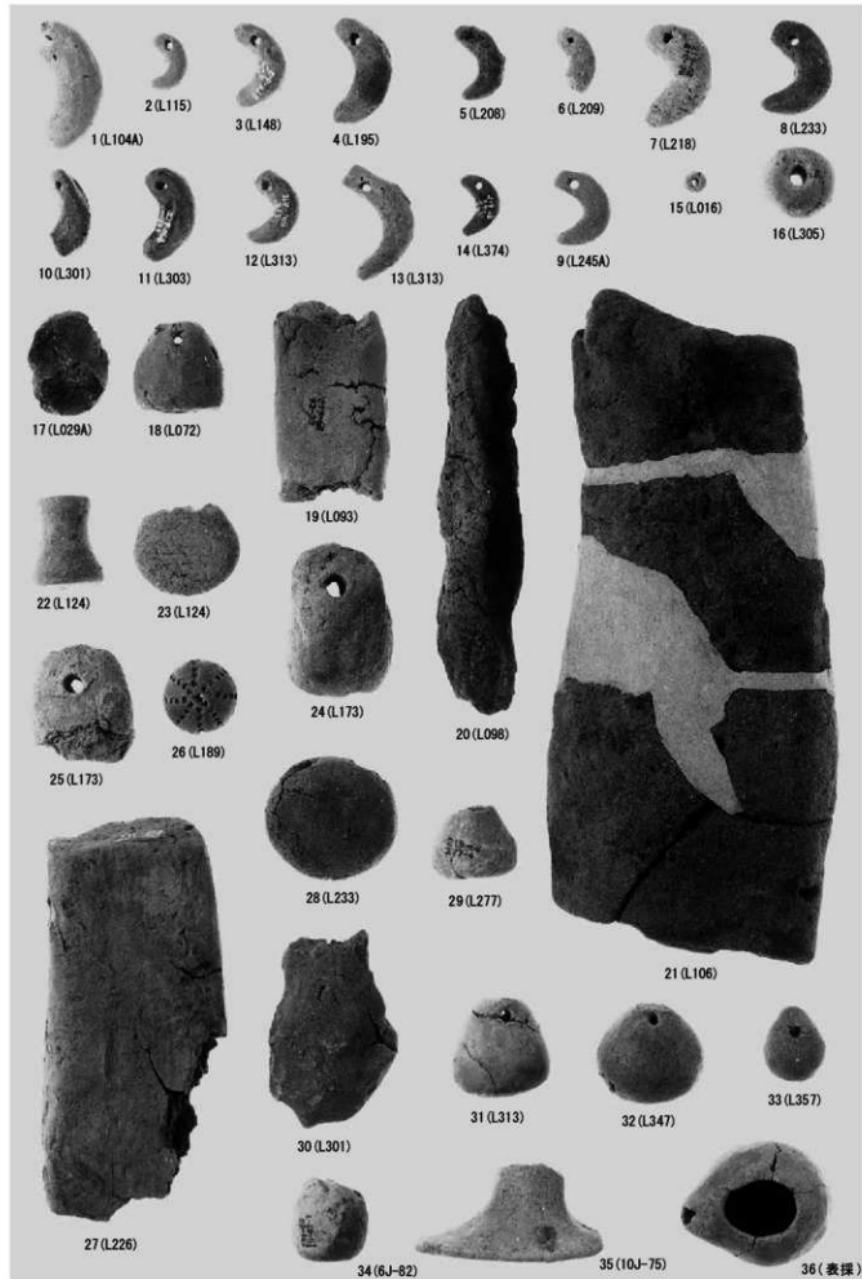
出土土器



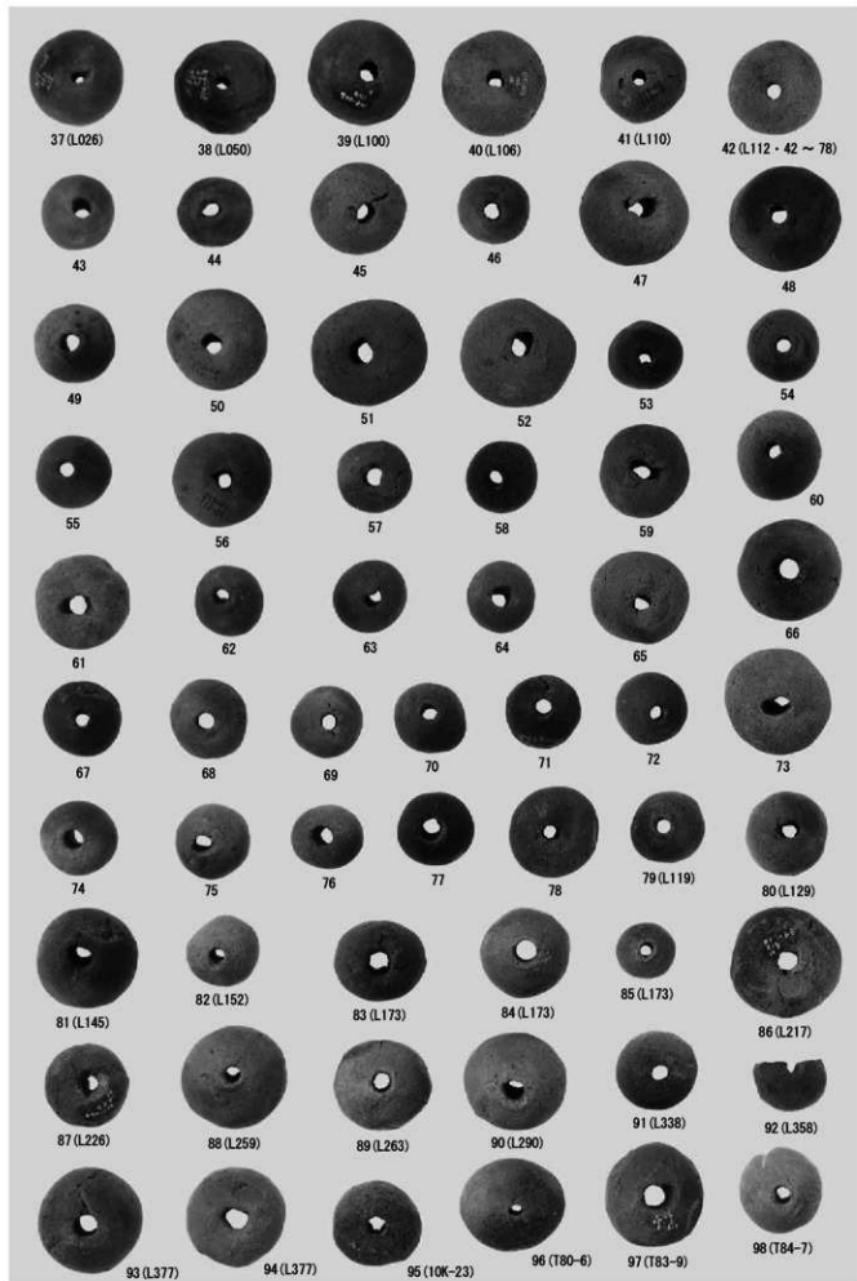
遺構外出土繩文土器（1）



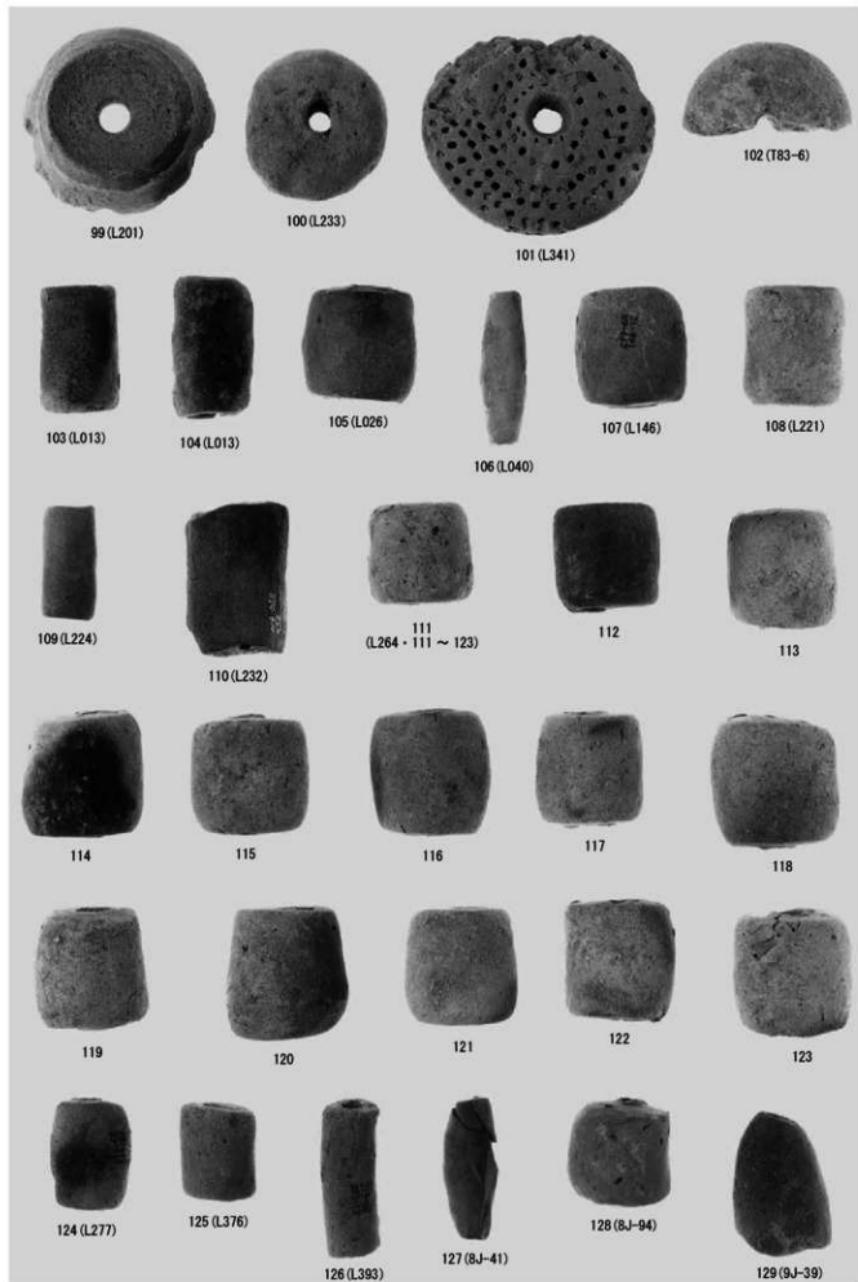
遗构外出土绳文土器（2）・土器片錘



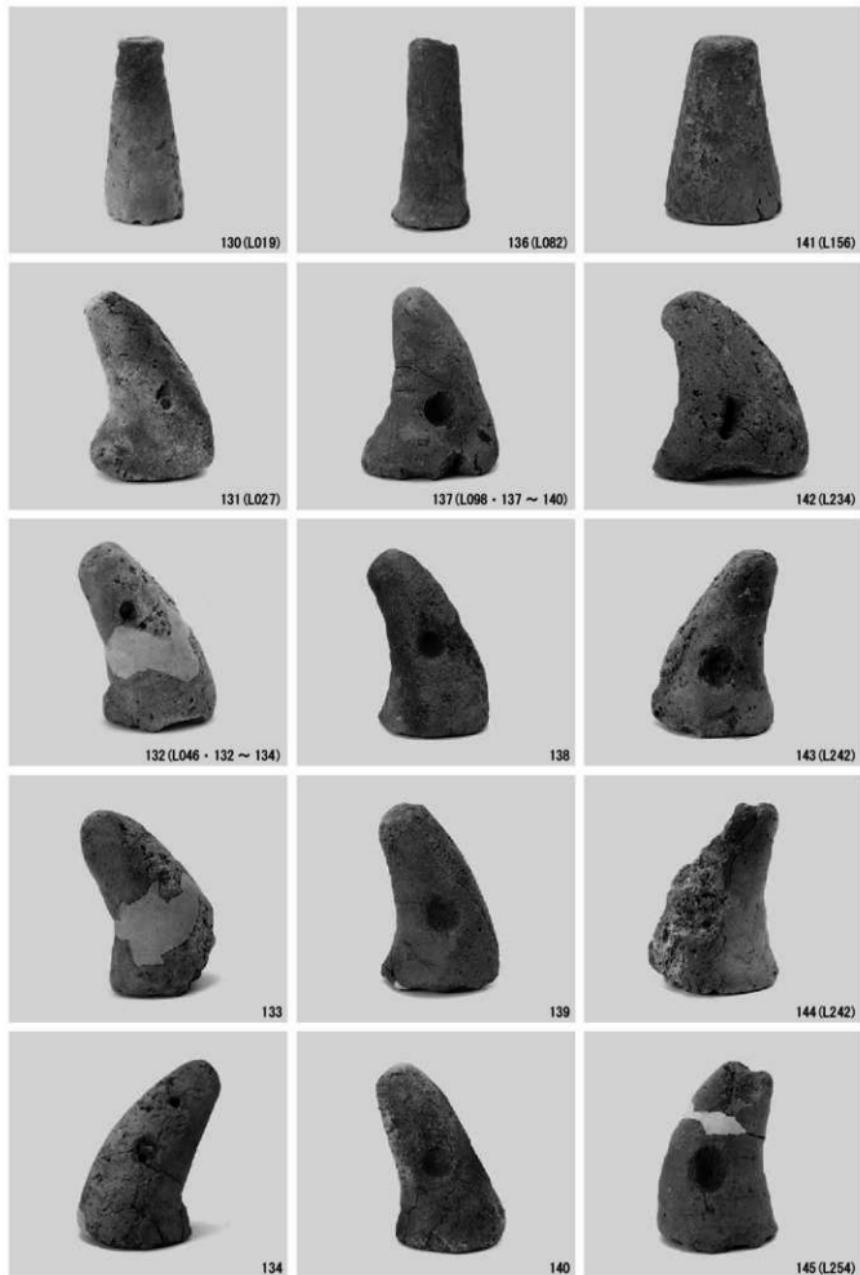
土製品（1）



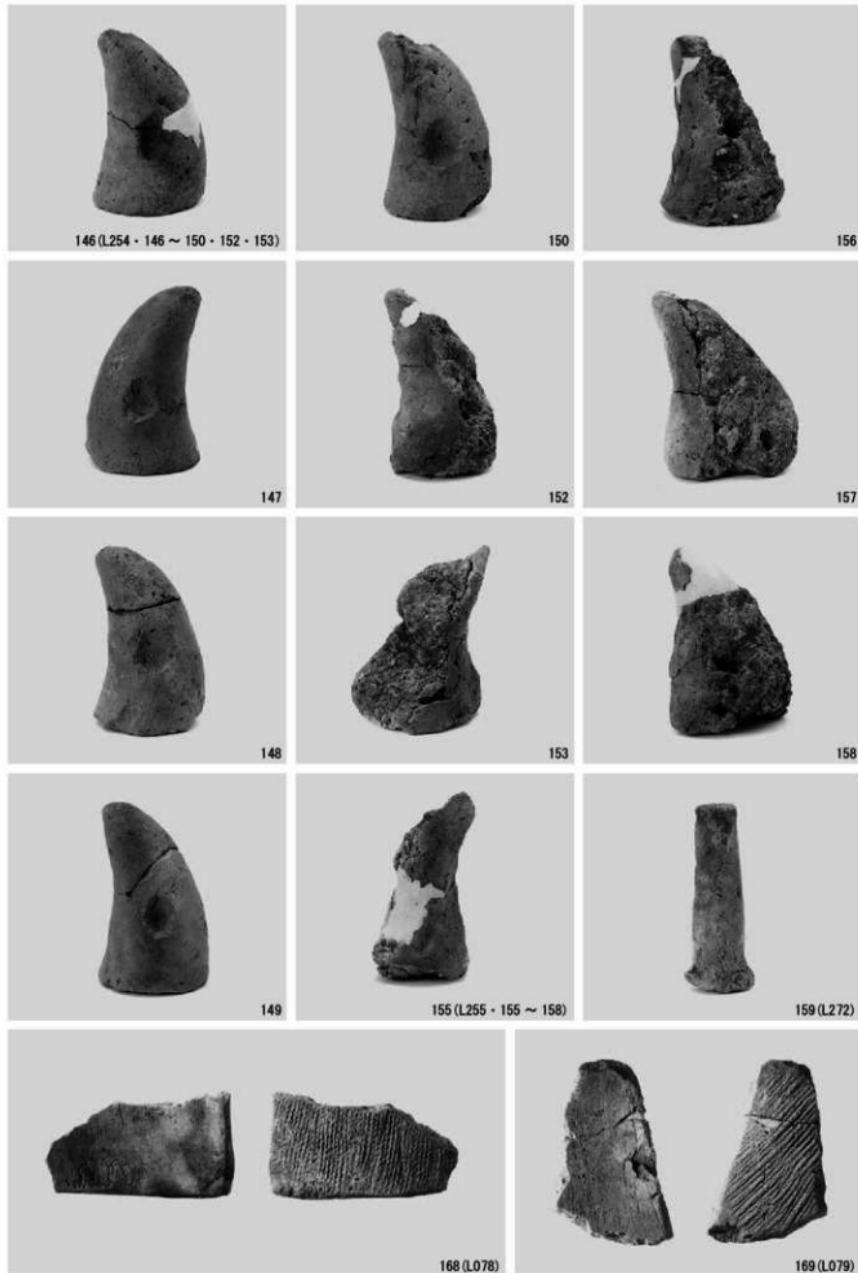
土製品（2）



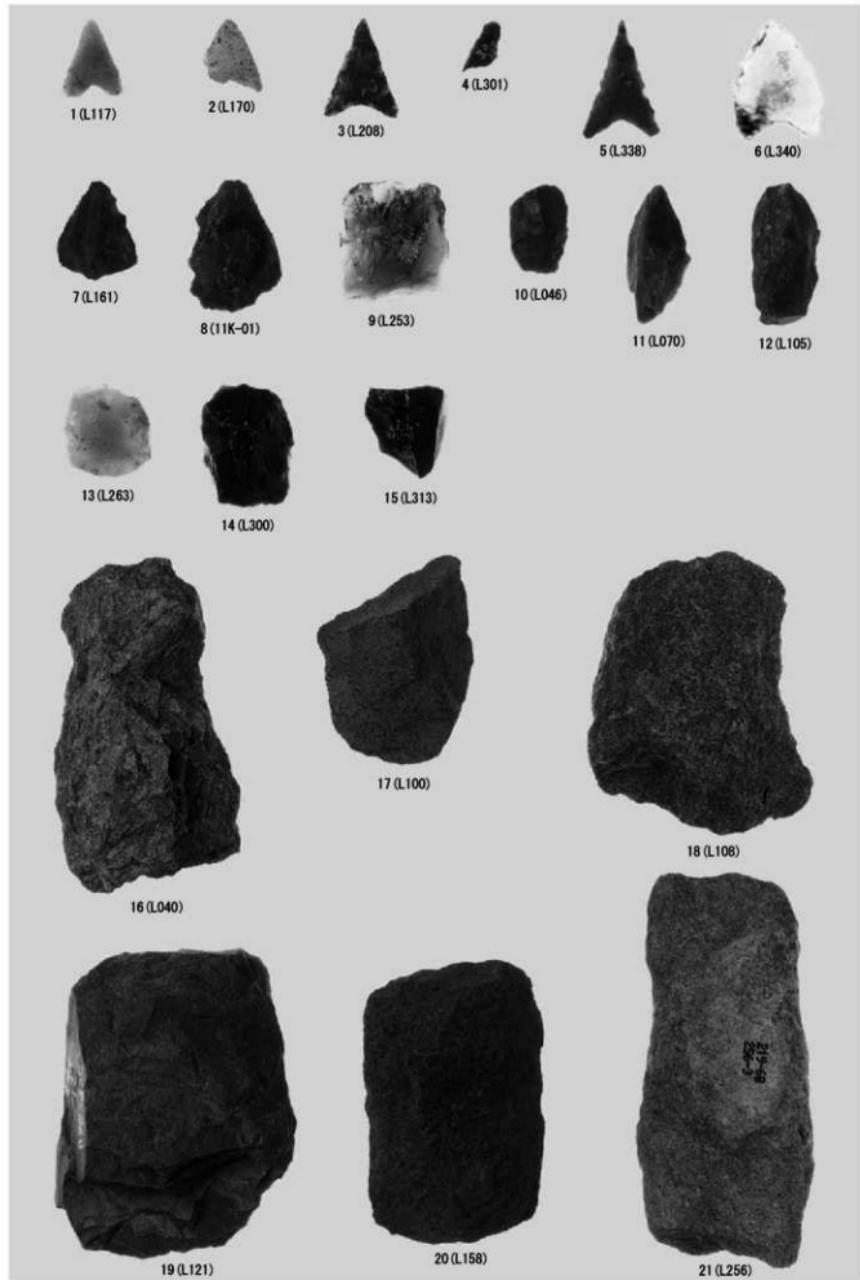
土製品（3）



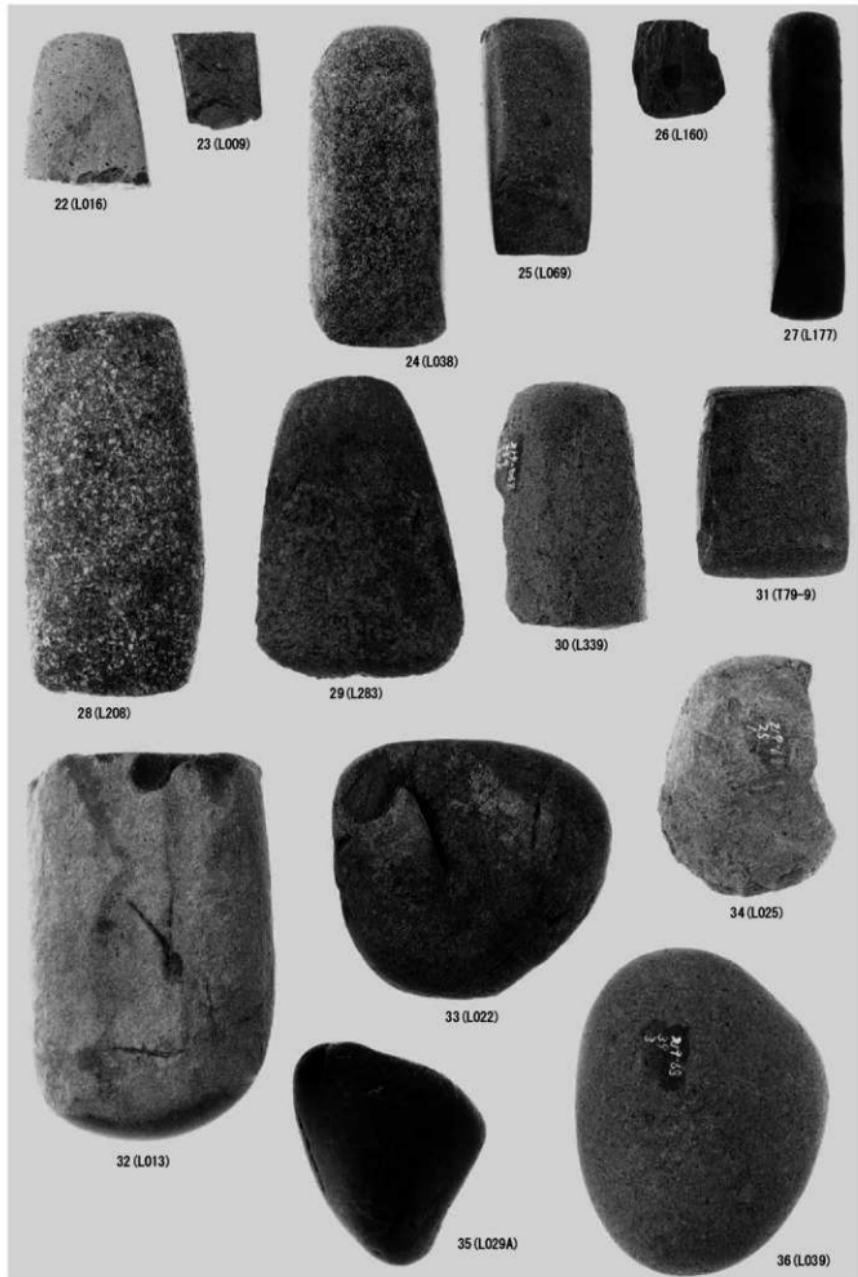
土製支脚（1）



土製支脚（2）・瓦



石器·石制品(1)



石器・石製品（2）



37 (L050)



38 (L040)



39 (L051)



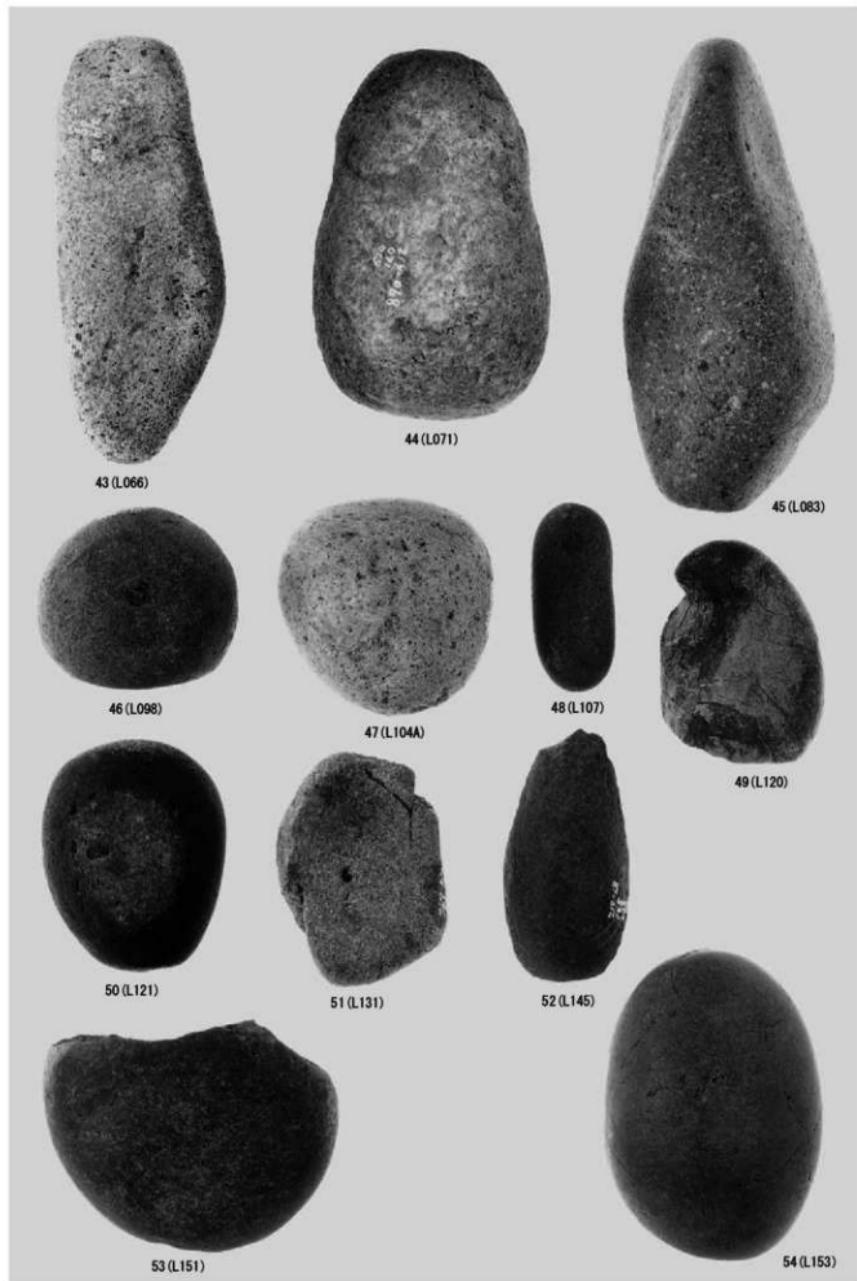
40 (L052)



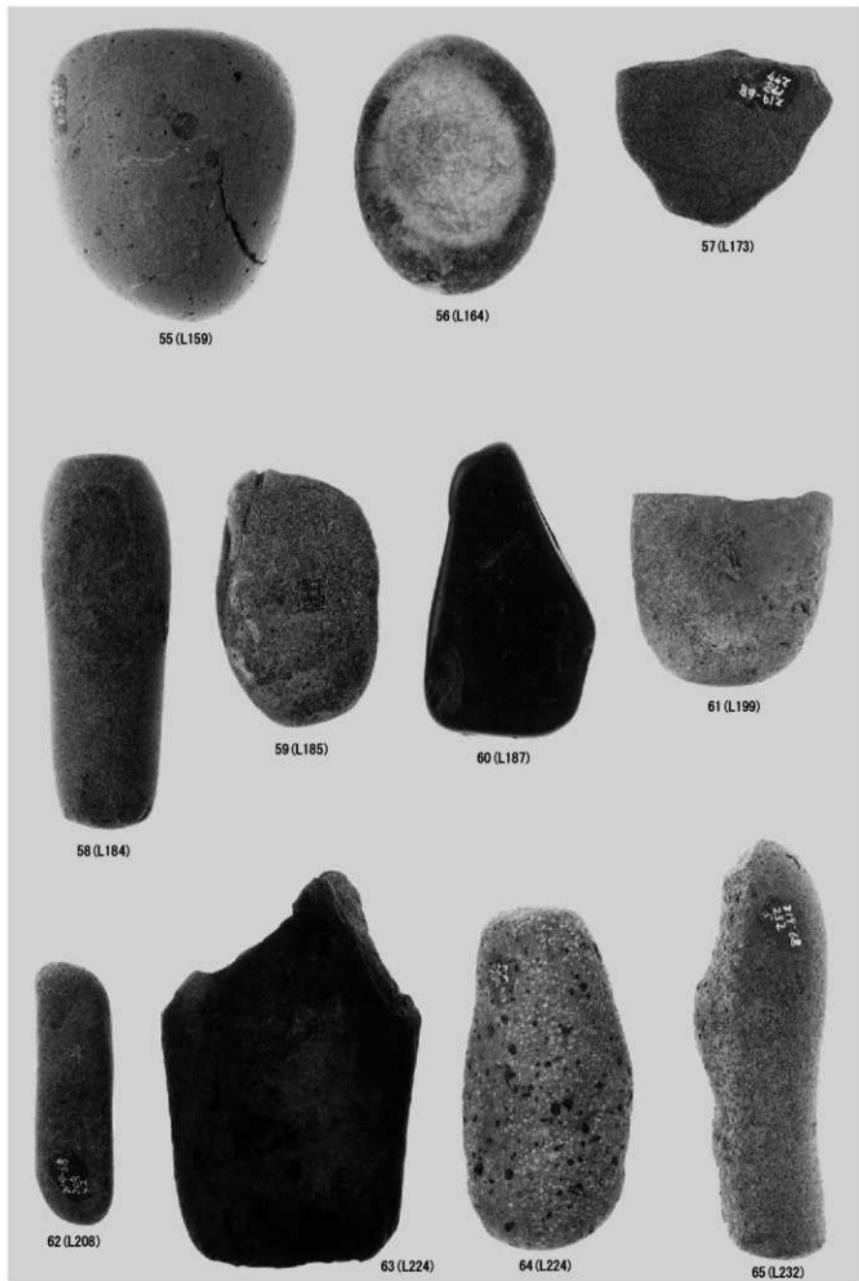
41 (L057)



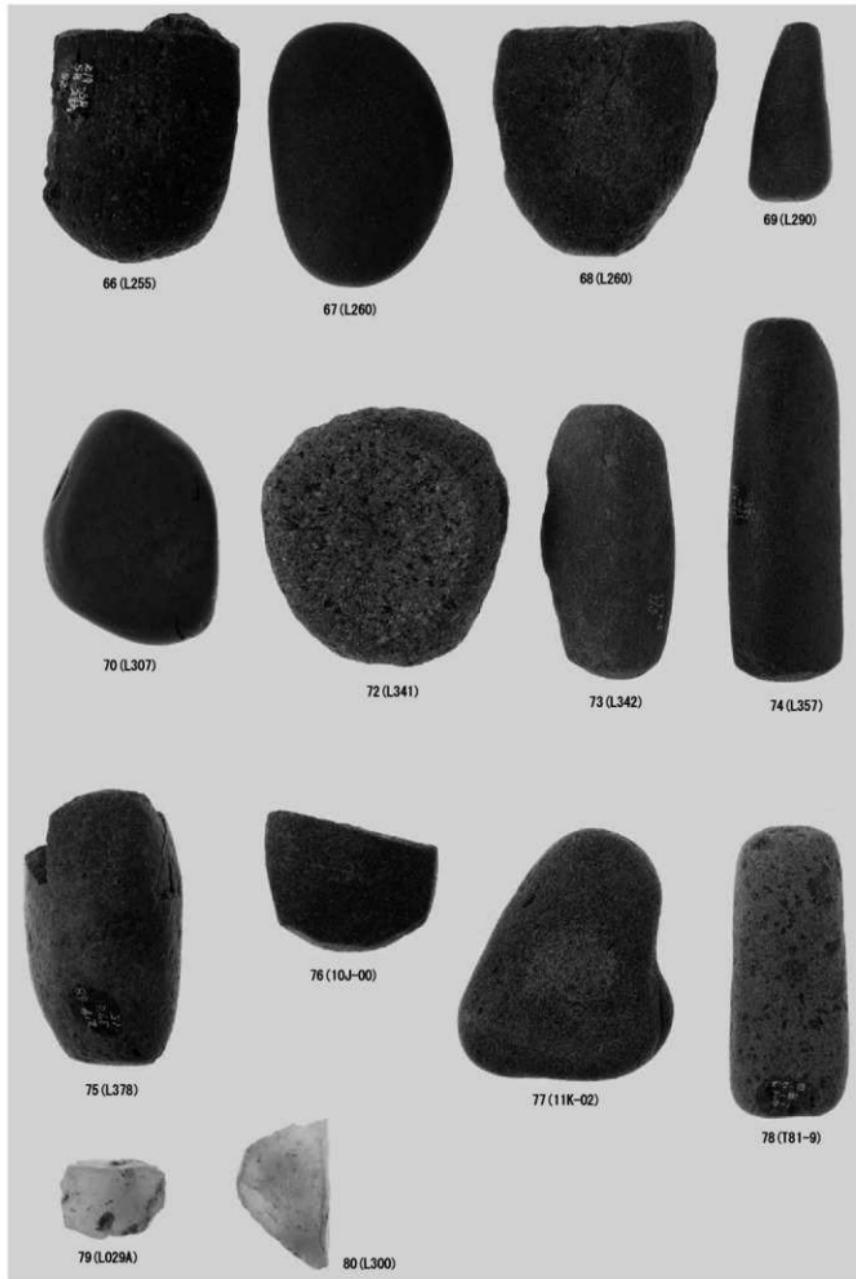
42 (L060)



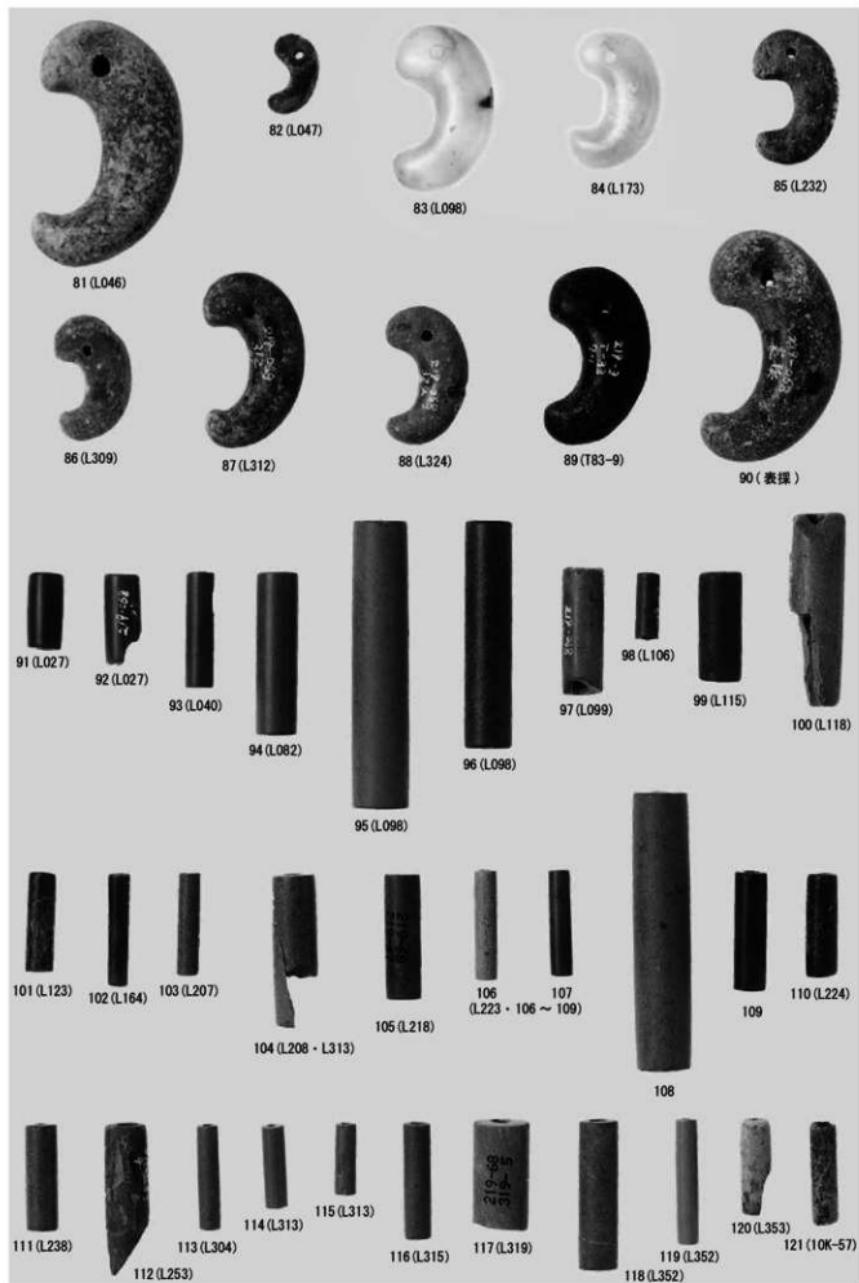
石器・石製品 (4)

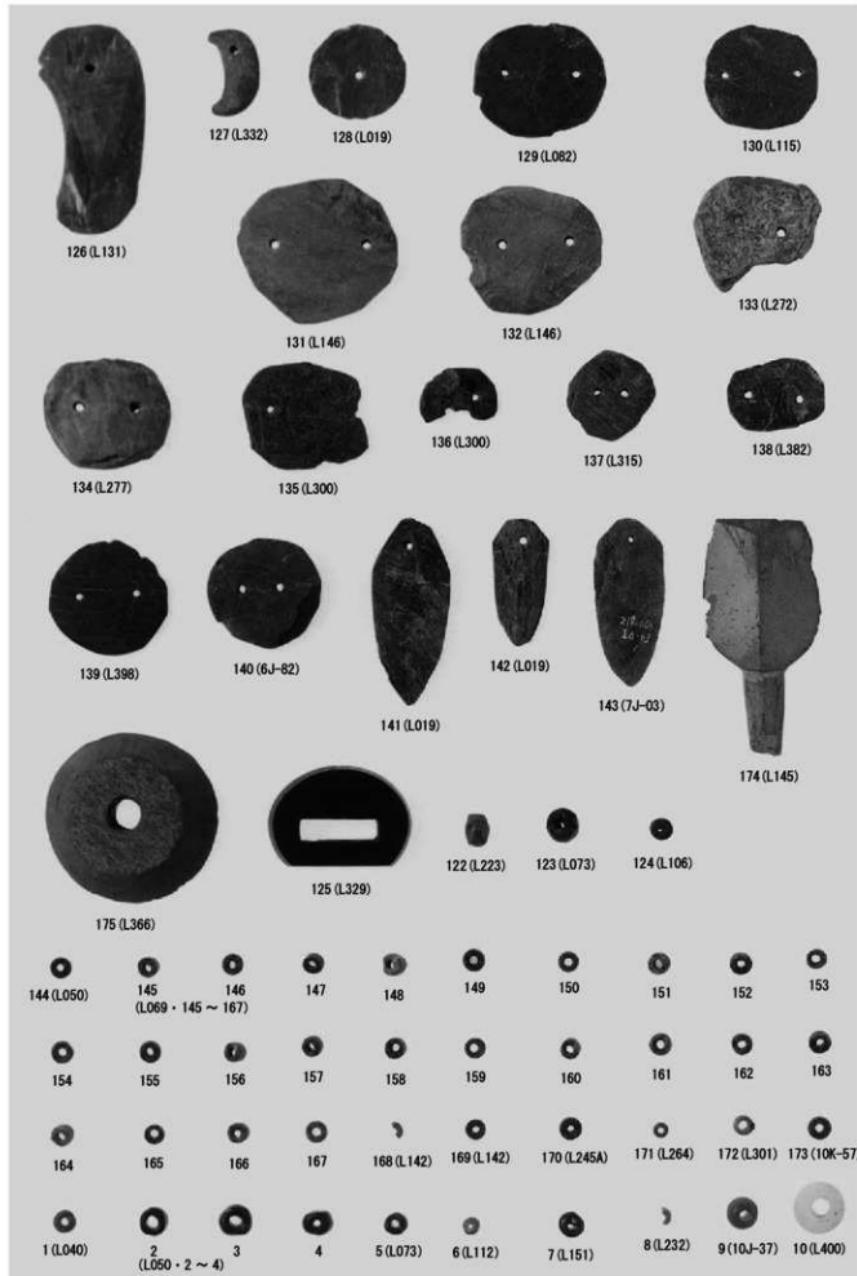


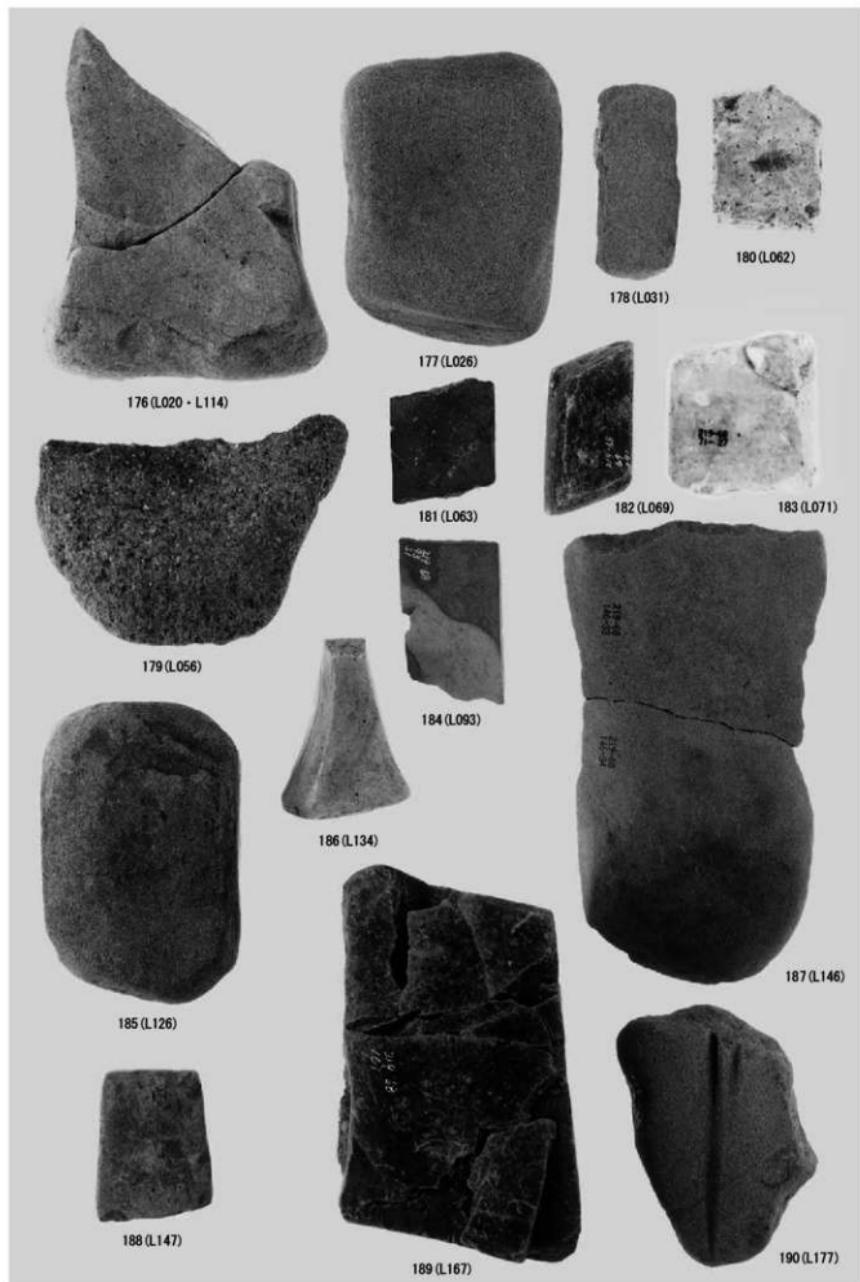
石器・石製品（5）



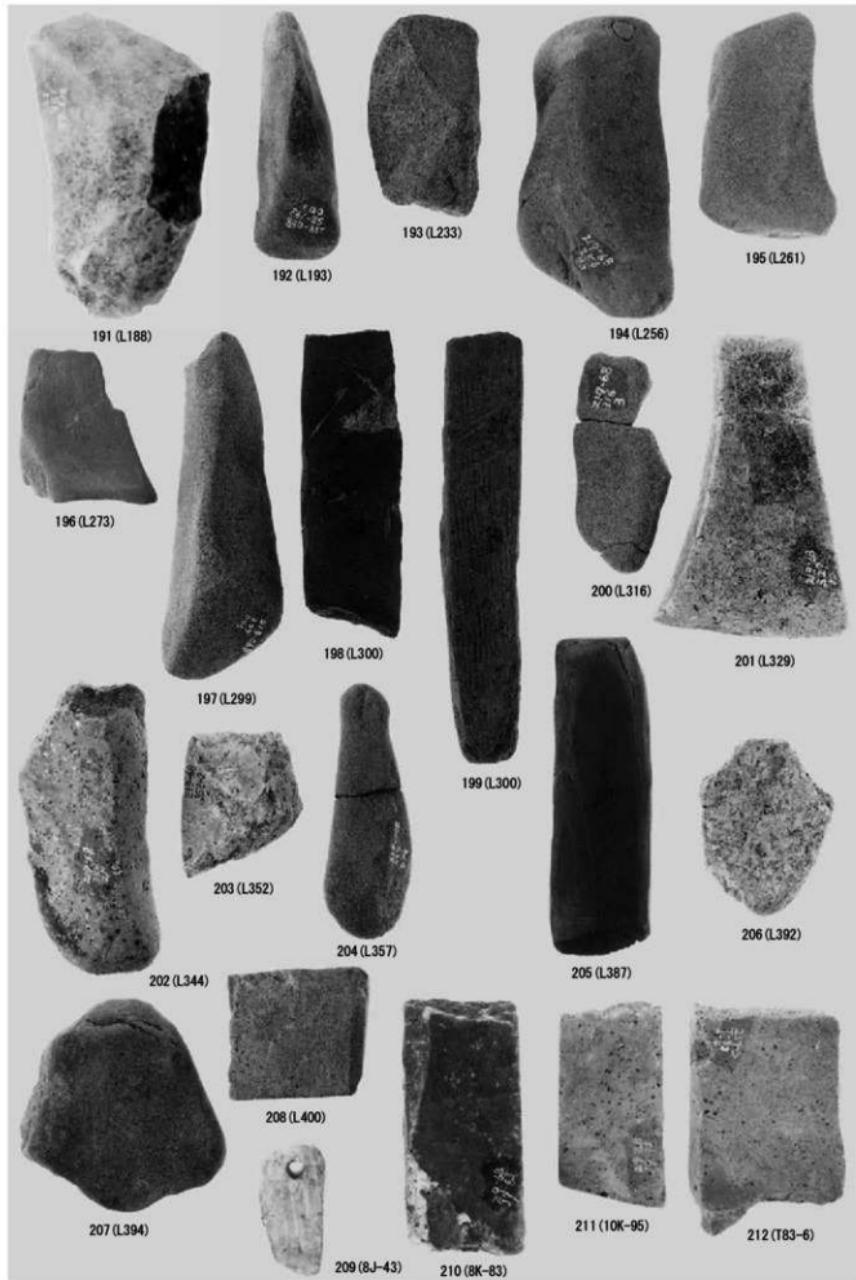
石器・石製品 (6)

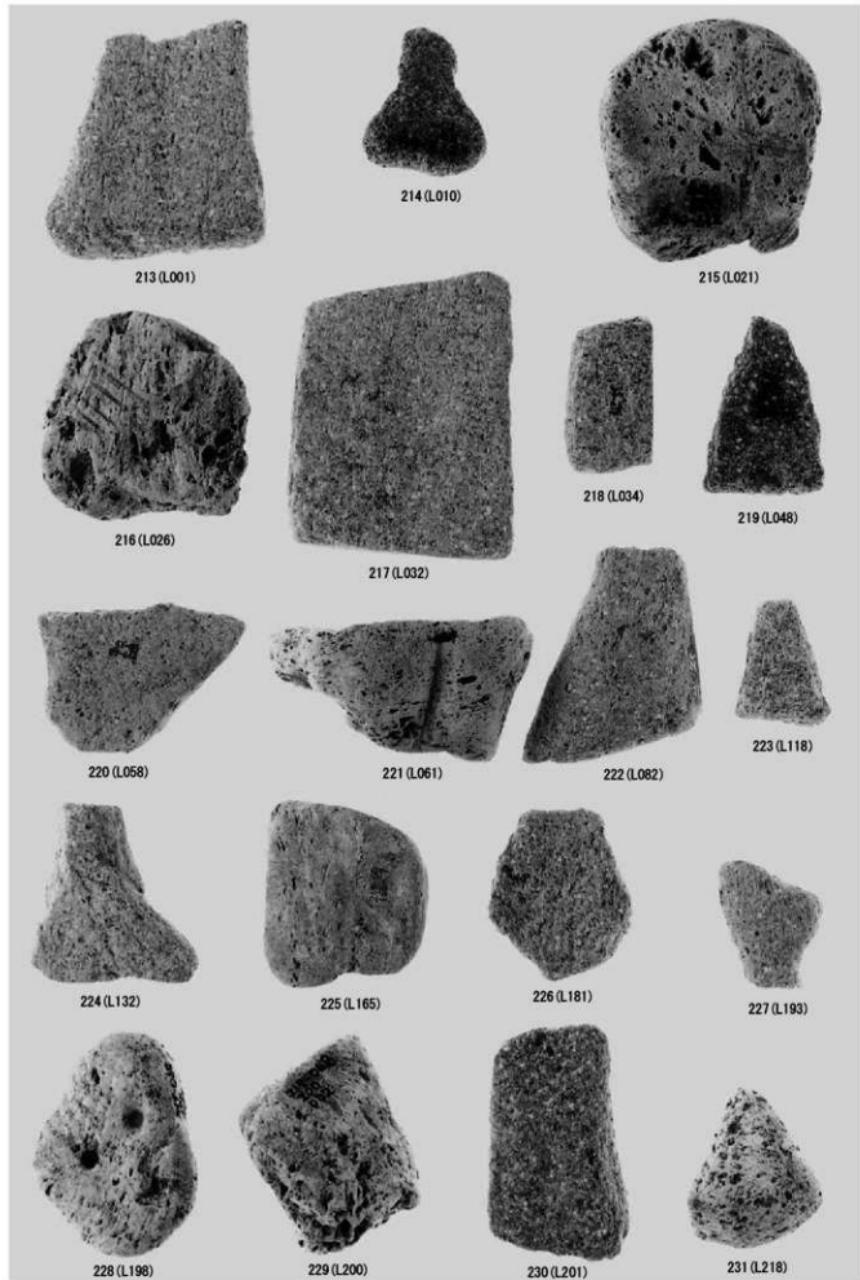




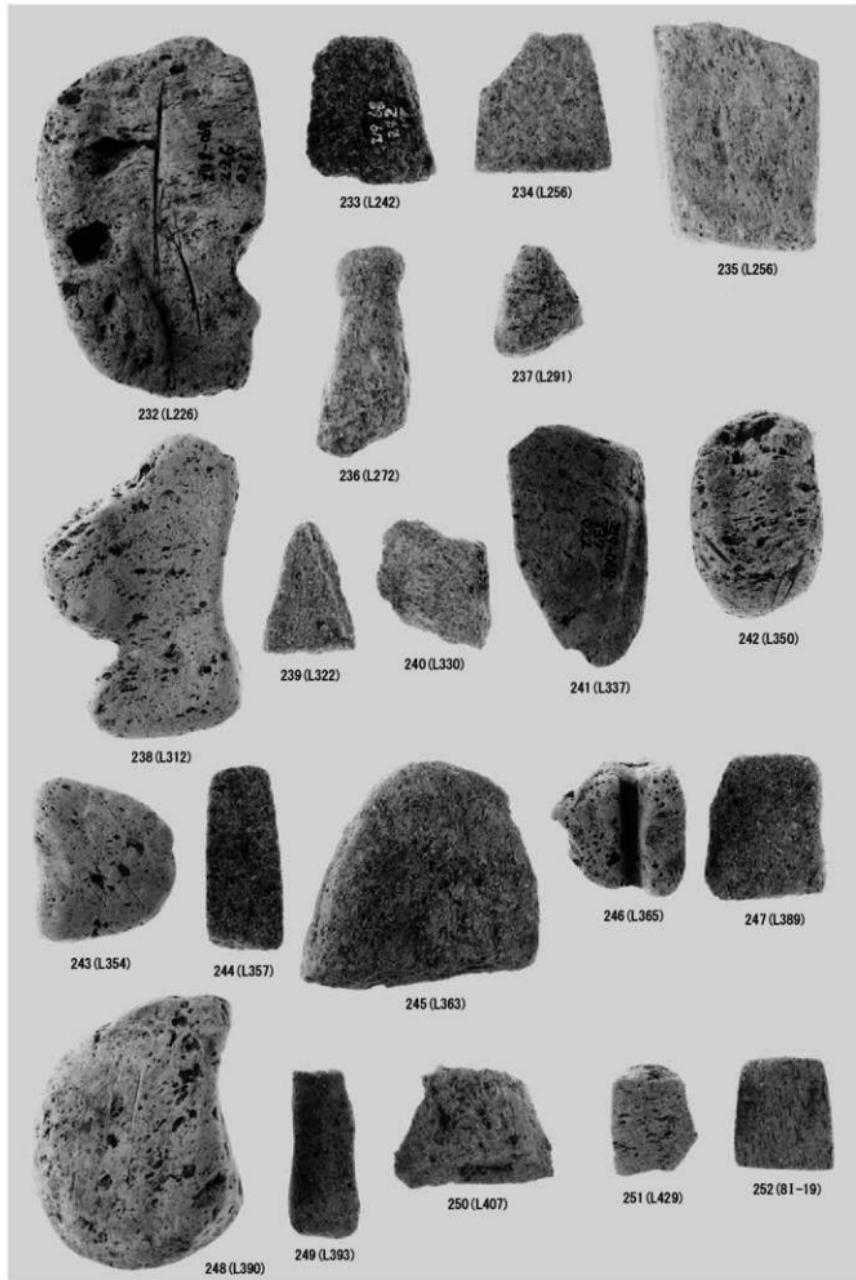


石器・石製品（9）





石器・石製品 (11)



石器・石製品 (12)



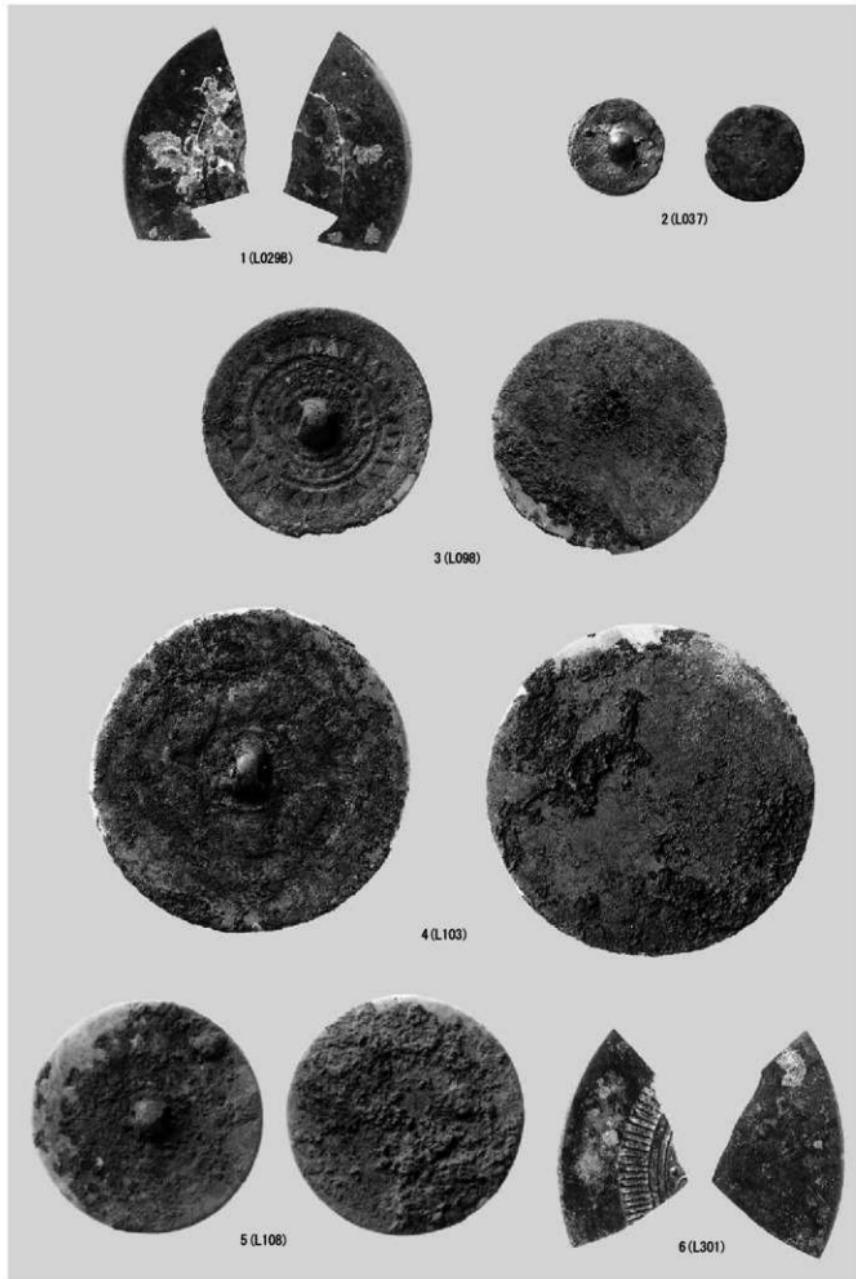
71 (L340)



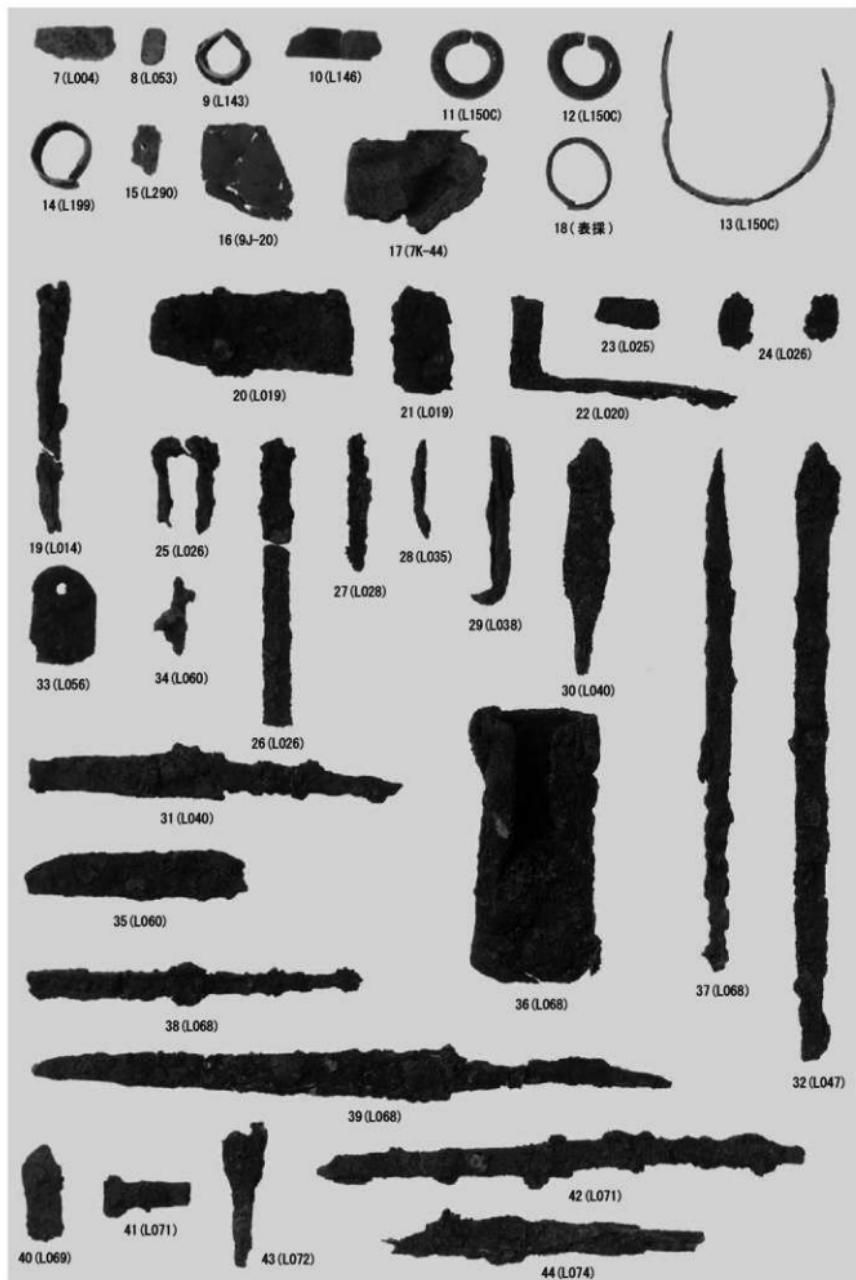
128 (L441)



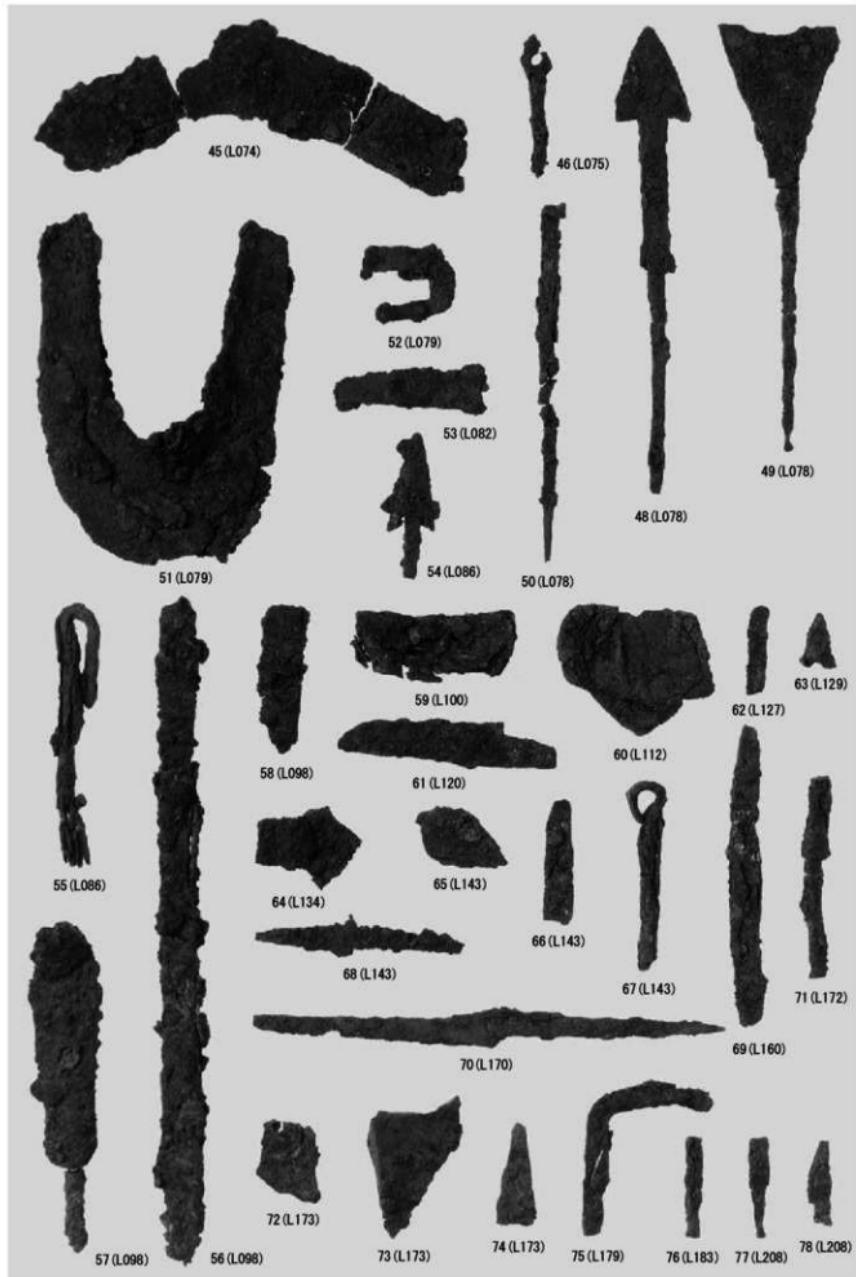
石器・石製品（13）・金属製品（1）



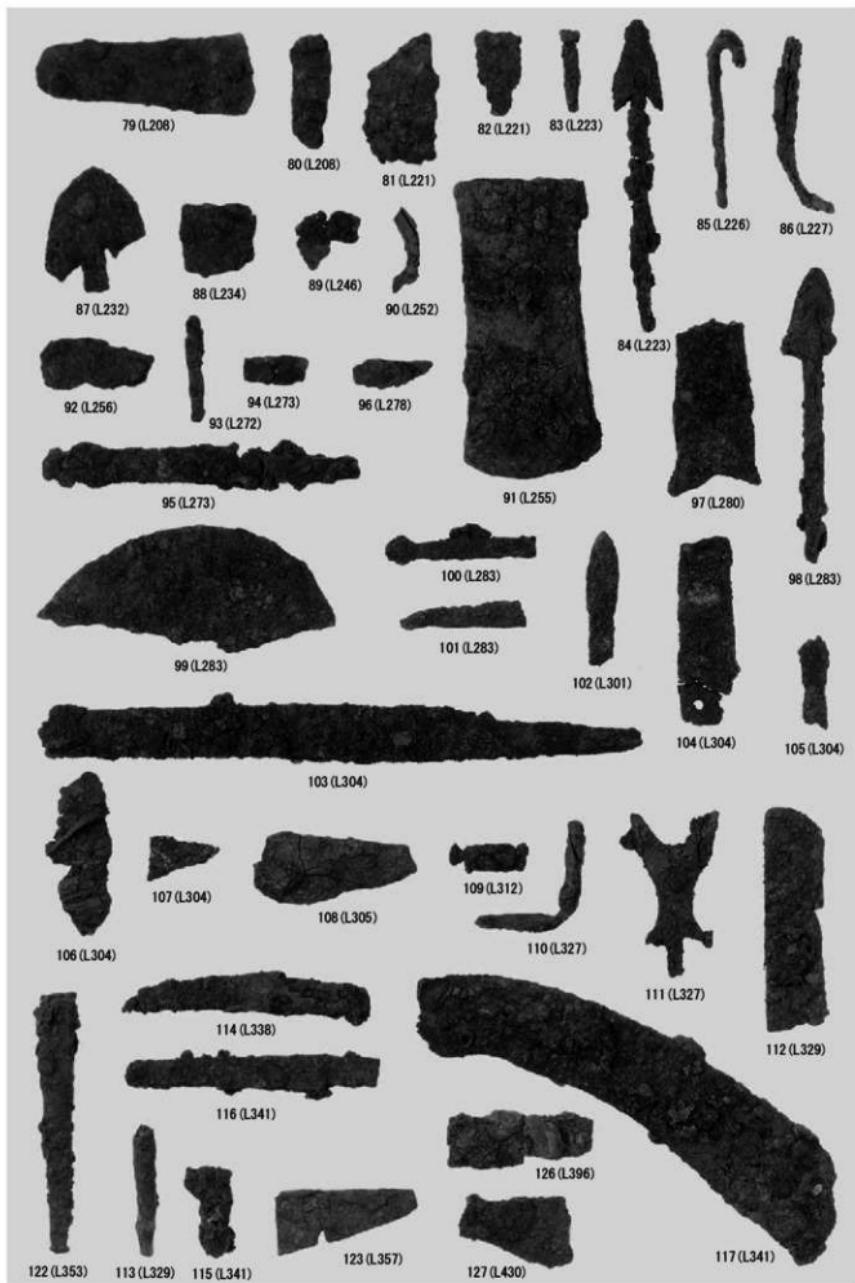
金属製品（2）



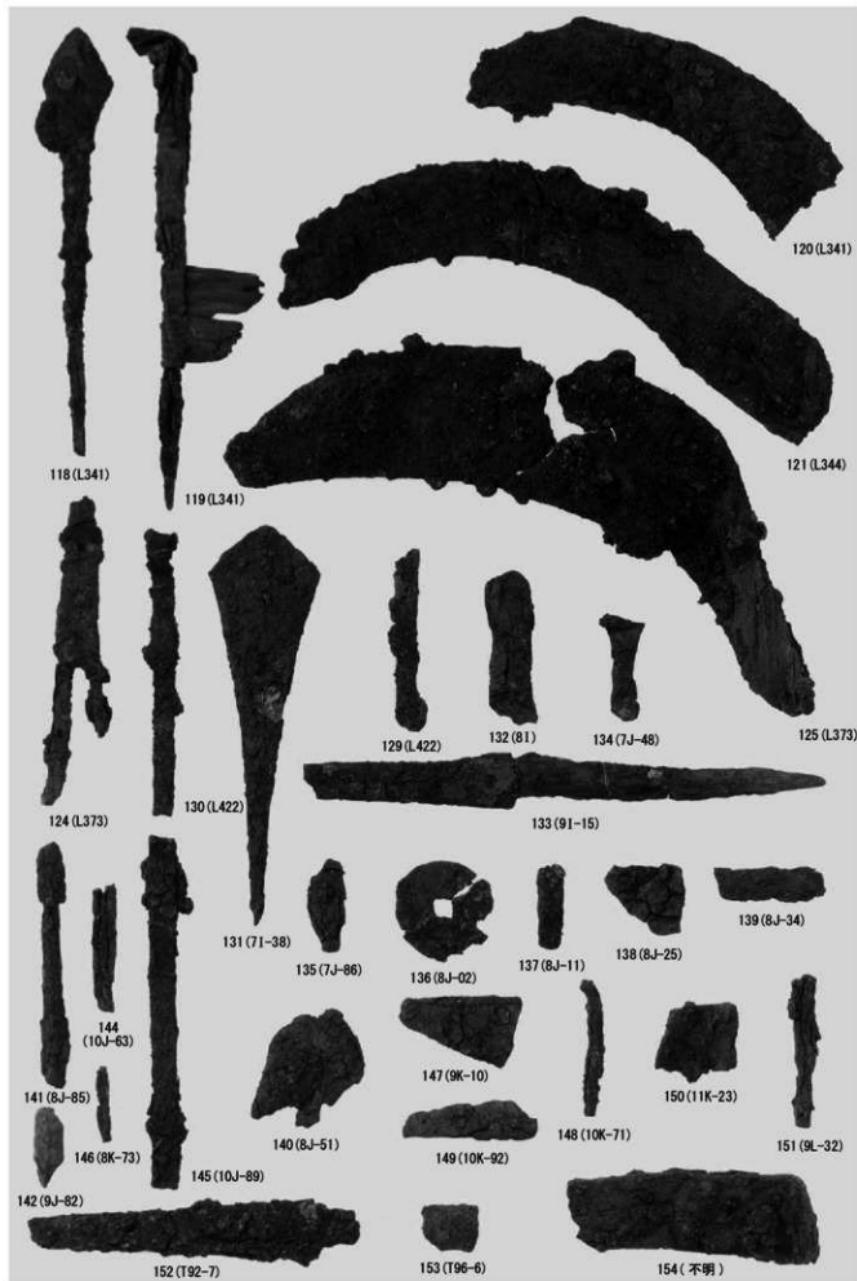
金属製品（3）



金属製品 (4)



金属製品（5）



## 報 告 書 抄 錄



千葉県教育振興財団調査報告 第646集

**千原台ニュータウンXXV**  
—市原市草刈遺跡（L区）—

---

平成22年12月22日発行

編 集 財団法人 千葉県教育振興財団  
文化財センター

発 行 独立行政法人都市再生機構千葉地域支社  
千葉市美浜区中瀬1-3

財団法人 千葉県教育振興財団  
四街道市更渡809番地の2

印 刷 株式会社 東 ブ リ  
船橋市咲が丘1-11-9

---